THE CENTRAL REVIEW

中央公論

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
大正十二年十月三十日印刷納本
大正十二年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

十一月號

第三十八年 第十二號 第四百二十八號



今や社會はあらゆる方面に健腦の人を要求す

故にあらゆる腦神經病者は

腦病良藥 健腦丸 を要求す



主効

腦充血 神經痛 頭痛 眩暈 腦膜炎 腦貧血 耳鳴 健忘 逆上症 卒中 中風 便秘

特長

逆上を引下げ、便通をよくし怖るべき中風卒中を未發に防ぎ腦充血を快治し記憶力を增進す。

改正價藥

五回分	參拾錢
四日分	六拾錢
一週分	壹圓
二週分	壹圓九拾錢
三週分	貳圓六拾錢
五週分	四圓
十週分	七圓

全國各藥店に取次す

本舖 大阪市順慶町 東京市[illegible]屋町 丹平商會藥房

卑猥なる廣告の申込は謝絶す　中央公論社



晩秋　　　森田恒友筆

大正十二年

中央公論

十一月一日發行

十一月號

第卅八年　第十二號

第四百二十八號

自警團暴行の心理

震火災に伴ふ非常の大混亂に際し、民衆が夫れ〴〵其の居る處に據つて自發的に自ら護り又他に奉仕するに努めたのは、何と云つても今回の慘事に於ける一大美事に相違ない。而して之を一大美事と認むるに躊躇せざるだけ、夫れだけ吾人は其後諸方に頻發せる自警團の暴行なるものを耳にして甚だ之を遺憾とせざるを得ない。

無用の誰何、交通の妨碍、良民に對する過度の凌辱、果ては強竊盜、殺害等の甚しきに至る。聞くだに身の毛のよだつ様な暴行を數多き自警團が犯したと云ふは、假令全體より見て其數甚だ少なかつたとはいへ、國民的面目の上よりしても到底許す可からざる事態ではないか。

主たる原因は何處に在るか。日が沒して蝙蝠の跋扈するが如く混亂に乘じて兇暴なる煽動者の傍若無人に跳梁したことや、一般民衆の輕佻にして極めて乘ぜられ易きことなどは、先づ第一着に數へ擧げられねばならぬものであらう。之も吾人の省察を要すべき重大な問題であるが、其外茲に一つ大に讀者諸君と共に考へねばならぬ事がある。そは我が國民一般の通癖たる『力の玩弄』といふことである。詳しく云へば、我國の民衆には法律的に若くは社會的に何等かの權力を與へられると其の本旨に遵つて運用する代りに動もすれば無暗に之を振り廻し他の迷惑がるを寧ろ痛快がると云ふ惡癖のあることである。

ある夏の眞盛り大道で撒水夫が二人で話をして居るのを聞いた。向ふを派手に着飾つた若い婦人が通る。この車を默つてその側へひき寄せいきなり水を出して泥しぶきを浴せてやらうぢやないかと一人が云ふ。可愛さうだ、そんな罪作りは止せ、人も見てるに！、と他が詰れば、なアに構ふもんか、東京市の御威光でやるんだもの、と彼は頑張る。公立病院の小使が患者を叱り飛ばしたり、三等郵便局の窓口で人民どもが散々こづき廻されたり、田舍者が議員になつて俄に肩で風を切つたりするのは、皆同類の現象と謂ていゝ。詰り彼等は俺れには之れ丈の權があるんだぞと見せびらかしたいのである。俺の意に反しては何事も出來ないぞと威勢を見せたいのである。一言にしていへば自分の背後にある公力を恃んで自らよろこぶに急なのである。從つて他人の迷惑の如

きは更に之を顧みるに遑がないのである。自警團の暴行の如き、畢竟斯う云ふ通弊のたま〳〵機に乘じて一部民衆の野性を驅り動せる類型的現象に過ぎない。從て之を一部民衆の過失なりとして我々と全然無關係の出來事と嘯くものあらば、そは餘りに短見であると思ふ。

然らばさうした通弊の基く所は更に何處に在るか。詳しい論明は別の機會に讓るとして、玆に吾人は一言我國在來の教育が服從道德の涵養に偏執して創意的奉仕精神の訓練を缺如せるの一事を絕叫して置きたい。上の指示する所に從へとは教へる。自己の創意に基いて人の爲にし世に仕うる眞の機會は全く與へられない。政事に干ることが罪惡なるかの如く教へられた青年が、如何にして校門を出でゝ公民としての與へられた權利を正しく使ひ得やう。服從道德の動もすれば陷り易き著しい弊害は、上の專橫と下の不滿とである。不滿は時として羨望に代る。是れ嫁として苦しみ拔いた者が姑として後にわが嫁を窘めるに躊躇せざる所以。軍隊などでも新兵を虐使する下士は、とかく自分の新兵時代にひどく窘められた者に多いとやら。自己の深刻な經驗が思ひ遣りの人情となりて將來の人格美を作る要素たるべき筈だのに、それが却てつねに反對の結果となるのは、畢竟初めに於て創意的奉仕精神の涵養を怠つたからではないか。

肴屋の小僧ふだんは主人番頭にこき使はれる。一旦自警團に加つて竹槍棍棒を與へられて町内の警備に當ると、少し位人を擲つても誰からも咎められない所から、自ら平素の抂屈を伸ばすは此時だと云ふ氣になる。斯くして面白半分に人の迷惑がる事を敢てする。之が嵩じて暴行となるのも亦怪むに足らない。而して斯うした心理――大小輕重の差こそあれ――を我國青年の頭に深く植ゑつけたのが、在來の誤つた教育方針ではないか。

我國の今日程青年の創意を抑へる處はない。又我國の今日程青年の創意的活動を危險視する處もない。夫れでも時勢の進運は爭はれぬもの、青年の頭は遠慮なく伸びて行く。さればこそ今度の災害に際しても、彼等の奉仕的活躍は所在に現はれて廣く社會の感謝を博して居る。にも拘ず他の一面に於て悲しむべき幾多の罪惡を作つた事に付ては、昨今遲ばせに報ぜらるゝ司直官憲の檢擧處罰等に滿足することなく、吾人はもつともつと深く考ふる所がなければならぬと思ふ。

中央公論



第卅八年第十二號
十一月號
第四百二十八號

日本文化に及ぼしたる環太平洋地震圏の影響

内ケ崎作三郎

『第六の封印を解き給ひし時、われ見しに、大なる地震ありて、日は荒き毛布のごとく黒く、月は全面、血の如くなり、天の星は無花果の樹の大風に搖られて、生り後れの果の落つるごとく地に落ち、天は卷物を捲くごとく去りゆき、山と島とは悉くその處を移されたり』

ヨハネ默示錄

一　地球の運命としての地震

我等の棲息する世界は大宇宙に懸りて太陽の周圍を運行する一天球である。その自轉と公轉に於て、ピタゴラスがいひたる如く、崇厳幽妙なる音律を發するや否やを知らないが、地球自體が一種の震動を爲しつゝあるは疑ひを容るることが出來ぬ。それに加ふるに月と太陽と地球との三角關係より潮汐の干滿があるので、若し微妙なる機械の助けを借りたらんには、何等かの動搖を感知し得るかとも思はれる。地球の表面に加へらるゝ氣壓の影響によりてさへも何等かの顫動が生起すべきであらふ。されば一瞬時も休息の餘裕なく、動の一路を辿りつゝある地球の一つの運命は搖ぶることである。しかし我等はこのかすかなる大地のゆすぶりを地震とは呼ばない。

今更くだ〳〵しく太陽系成立の過程を記述する要はない。兎に角地球は遠い遠い過去に於て、星雲の狀態を經由したので、その後幾億年の時をへても、地心に驚くべき熱量を貯へてゐる。地心は液體なるべきか、固體なるべきか、兩様の見方があるが、非常なる壓力が與へられてゐるから固體も固體たる能はず、液體も液體たる能はざるやうな物であらふ。さて地心と地殼との間に存する物質は幾分かづゝ熱を失ひつゝある。これも極めて遲々たる進行で、假かに地上の生活に影響を及ぼすやうなものではないが、理論上、地球の熱は時と共に失はれつゝあるは當然である。熱が失はるゝとすれば、その容積が遞減するはやむをえない事である。地殼内部の容積が幾分かづゝ縮小するとなれば、地殼の表面に皺襞が生ずるか、裂目が現れなければならぬ道理である。皺襞作用は山岳を造成し、裂目は地殼内に比較的に鞏固ならざる地盤を生ずるに至つた。

地盤の弱い所に於て何等かの變動が生ずれば大なる動搖が生ずる。十哩の地底に存する一平方インチに對する壓力は三十五噸だといふことであるから、地球内部に於ける小動搖はその表面には大動搖をなすのである。これが即ち地震である。從つて地震は地球の生活に隨伴する不可抗的要素である。既に熱量を放散しつゝある原因があれば、地震が結果

するは當然のことである。

我が國の民間信仰に地震は大なる鯰の地下に寢返へりするのであると考へられたが、阿米利加印度人は地中の龍蛇の運動の結果であると信じた。支那にては陰陽説を以てこの謎を解釋した『陽伏而不能出、陰迫而不能入』(宋志) 即ち地震ふと思惟した。印度人は四元素の活動を以てその原因となした「地在水上、水止於風、風止空、空中風大有時、自起則大水擾、大水擾則普地動」(阿含經) バビロニア人は地震は星辰と太陽との影響であると判じた。希臘人は思へらく、雷は地上に於ける空氣の動亂、地震は地中に於ける空氣の動亂と觀じた。

斯る諸説はいづれも謬説にして、科學思想の幼稚なる時代の所產とし、揣摩臆測を逞うせしは無理ならぬ事である。

二　環太平洋地震圏

日本は世界の地震國として名高い。しかしそれは後段に記すべき理由によつて多いのである。世界のいづれの國土に於ても過去に於て地震の皆無であつた所はあるまい。地盤が比較的に堅牢なるがために少ないとか、さもなくば、これ迄に幾度となく地震ありて地盤が安定期に入つたといふやうな處が多い。支那は我が國のやうに地震がしないやうであるが、ビー・ビアル・ホアヌの示したる統計によれば、紀元前一七六七年から紀元一八九五年までに五千七百九十五回の地震記錄がある。英國は殆んど地震のない國のやうに考へられてゐるが、オーレリー教授の英國地震圖は過去に於て矢張相應の地震のあつたことを有力に證明してゐる。故に地震のために惱まされてゐるは我が國のみでない、つまり世界共通の現象であるから、或度までは同病相憐まさるをえない。

それにしても我が國の地震は何故に頻繁であるのか。それは地震學者が既に明答を與へてゐる。今日地球上に起る諸

名なる二個の地震帶がある。一は環太平洋圈、他は地中海圈である。地質時代に於て太平洋は陷沒した。世界最大最深の海洋が發生した。そのため周圍の土地に斷層が生じ、隨つて大龜裂を生じ、熔岩や水蒸氣の噴出口が現れた。これが太平洋の周圍に火山系の生起した理由で、同時に太平洋底の深い海溝に向つて急傾斜をする陸地の斷層や地辷りが生じ易く、地震の源動力となる傾向があることが、この地震圈存在の理由である。火山帶と地震帶とが一致するは說明の必要はない。

環太平洋圈に屬する者は、東印度諸島、日本群島、アリウシアン群島、カムチヤツカ、米國の西海岸、メキシコ、智利、ペル、ボリビア、エクアドル等である。

地中海も亦陷沒の結果なれば、その周邊に地盤の弱い處が生じた。ポルトガル、伊太利、希臘、小亞細亞を經てヒマラヤ山脈の南側を東走し、東南に折れてビルマより東印度諸島に入り、更に東走して布哇となり、メキシコを橫斷して西印度諸島を過ぐるものを地中海圈と稱する。而して環太平洋圈と地中海圈とは南洋諸島に於て約六十度の角度をなして交叉してゐる。日本群島はこの地點より遠からざる處に存在するから最も活動する地震區域に屬するはいふ迄もない。

モンテッシウの研究に從へば、世界の記錄地震十七萬回の五割三分は地中海圈に生じ、四割一分は環太平洋圈に生じ、殘りの六分のみが、他の地震帶に生じたのである。但しこれは記錄せられたる地震のみをいふもので、記錄せられざりし回數は之は知るに術がない。

太平洋は大西洋より遙かに深い。太平洋の西側に於て日本海溝、一名タスカロラ海溝、最深八千五百十三米、南太平

洋の東にてはマリアナ海溝、最深九千六百三十六米、ヤツプ海溝、最深七千五百八十三米、等があり、又その西部には琉球海溝、最深七千四百八十一米、非律賓海溝、最深九千七百八十米、等がある。その他多くの海溝がある。

是等の海淵に就いて、日本と極めて緊密なる關係を有するタスカロラ海溝 Tascarora Deep は特別の記述を必要とする。この海溝は一八七四年米國の測量船タスカロラ號によりて測量せられたので、本名を帶びてゐる。この海溝は北回歸線より北緯五十二度に於てアリウシアン群島に接し、日本群島及び千島列島に接近する海淵にして、その面積九十萬八千平方哩、その大部分は四千尋以上の深さを有する。この注目すべき海溝の名は當然日本海溝 Japan Deep と稱すべきである。我が國の地理學者や地質學者にして先鞭を着けし人々のあるは意を强うする。

太平洋は東西共に岸に近く深淵を有するが、その西側即ち日本側に於て殊に然りである。加ふるに火山島、珊瑚島の多いことも一特色である。

我が國の火山系統を擧ぐれば、曰く千島火山帶、膽振火山帶、中央火山帶、鳥海火山帶、乘鞍火山帶、阿蘇火山帶、霧島火山帶。是等は悉く西南より東北に縱走するものにして日本群島の地質構造線と並行するものである。而して南洋方面より來りて小笠原十七島、八丈島、伊豆七島等となつて海上に出現し、伊豆を貫き富士山となりて北に向ふものを富士火山帶とする。中央火山帶、乘鞍火山帶、富士火山帶の交錯する所、峻嶺秀峰天空を摩して、玆に飛彈信濃の高原となり、日本アルプスの雄姿壯觀を呈するに至つた。

而して『日本海は地裂多き亞細亞大陸の東端に於て生じたる一大陷沒地』にして『本邦は全く裂隙に富める亞細亞東部高地の一破片として猶海上に現れたる者の如し』(日本地質學)としたる小藤博士の断案は動すべからざるものであら

ふ。從つて日本海沿岸にも古來激震が少くなかつたのである。加ふるに幾十の活火山の折々暗中飛躍を試みるありて、我が國の地盤は容易に安定する能はず、世界一の地震國の名を戴いて今日に至つた。

三　破壞的大地震の記錄

震災豫防調査會の發行に係る大日本地震史料二卷は貴重なる史料にして、記錄せられたる地震數約二千を舉げてゐる。小鹿島果氏の日本災異志は紀元一〇六七年より一八八四年（明治十七年）までの、千三百六十八回の地震を記してゐる。大森博士の本邦大地震概說（震災豫防調査會報告第六十八號（乙））に從へば、日本本土に於ける破壞的地震は推古天皇七年（五九九年）明治八年（一八七五年）に至るまで千二百七十六年間に九十四回あつた。之を小別すれば、（一）外側地震帶即ち太平洋方面、其一、東海道、南海道、西海道に十四回、（二）其二、三陸及び北海道東方の海底に十回、（三）內側地震地帶即ち日本海方面に十七回、（四）畿內及び附近地方に十二回、（五）信濃川流域及び其附近に六回、（六）會津及び附近の地方に五回、（七）武藏、相模、伊豆、駿河地方に十二回、（八）遠江三河地方に二回、（九）飛彈越中、越前等の地方に四回、（十）中國地方に三回、（十一）瀨戶內海の西部に三回、（十二）九州地方に六回となる。しかし（七）及び（八）は當然太平洋方面に屬すべきものなれば之を（一）及び（二）と共に計上するを正常と考ふる。さすれば、外側地震地帶に起りし破壞的地震の總數は三十八回となり、全數の四割を占むることゝなる。之に由りて太平洋底の海溝が本邦地震の一大原因であることを知るべきである。勿論富士火山帶の活動は重要視せざるをえないが、火山爆發の被害はその動亂の大なるに比して人畜に及ぼすこと比較的に少ない。之に反して太平洋沿岸に於ける大地震及び大海嘯の慘害は非常なるものである。而して前記三十八回の激震中、東海道に屬するものを舉ぐれば左の如きものとなる。

1 靈龜元年（七一五年）遠江、三河の地震
2 承和八年（八四一年）伊豆地震
3 明應七年（一四九八年）の東海道大地震
4 永享五年（一四三三年）相模 武藏の地震
5 慶長九年（一六〇五年）相、武、房、總の大地震
6 寛永十年（一六三三年）小田原地震
7 慶安二年（一六四九年）江戸地震
8 寛文十年（一六七〇年）相模國大住の地震
9 貞享三年（一六八六年）遠江三河の地震
10 元祿十六年（一七〇三年）關東地震
11 寶永四年（一七〇七年）西海、南海、東海諸道の大地震
12 享保三年（一七一八年）信、參、遠の地震
13 天明二年（一七八二年）小田原地震
14 天保十二年（一八四一年）駿河國久能山の地震
15 嘉永六年（一八五三年）小田原地震
16 安政元年（一八五四年）十一月四日の東海道大地震
17 安政二年（一八五五年）小田原地震

18　安政四年（一八五七年）駿河相模の地震

19　安政六年（一八五九年）武藏國岩槻の地震

若し之に弘仁元年（八一八年）の關東諸國の地震を加ふれば二十回となる。更に明治二十四年（一八九一年）の濃尾大地震、明治二十七年（一八九四年）の東京大地震、及び此度の大正大地震を加ふれば二十三回となる。

繰りかへしていふ、これは破壞的地震のみを列擧したのである。地震計に感ずる程度の地震の數は殆んど之を數ふるに堪えないのであらふ。或る西洋の地質學に一八八五年より一八九二年まで七年間に八千三百三十一回の記錄せられた地震があつたと述べ、美濃大地震後の二年間に三千三百六十四回の餘震があつたと記してゐる。

四　自然美と地震との交渉

地震に伴ふ慘害は甚しいものあるは言ふも愚かなことにして、方丈記の作者は、その簡潔直截の文字にその驚異を托した。

『また元暦二年の頃、大地震ふること侍りき。その樣世の常ならず。山崩れて川を埋み。海傾きて陸を浸せり。土裂けて水湧き上り、巖破れて谷に轉び入り、渚漕ぐ船は浪に漂ひ、道行く駒は足の立所を惑はせり。況んや、都の邊には、在々所々、堂舍、塔廟、一として全からず。或は崩れ、或は倒れぬる間、塵灰立ち上りて、盛んなる煙の如し。地のふるひ、家の破ぶるゝ音、雷に異ならず。家の中にゐれば、忽ちに打ち拉げなんとす。走り出づれば、又地割れ裂く。羽なければ空へも上るべからず。龍ならねば、雲に上らむこと難し。恐れの中の恐るべかりけるは只地震なりけりとぞ覺え侍りし。』

元祿、安政、大正の大地震は大火災を惹起し、ことに大正震災はその慘、その凄、史上空前の大悲劇であつた。しかし若し全く地震なかりしとて、日本の地形は如何なる狀態にありしならんかを思へば、地震の咀ふべき一方面のみを觀察することは不公平である。若し斗南海、松島灣、東京灣、伊勢海、瀨戶內海、鹿兒島灣等の陷沒なかりせば海岸線の短小、風景の單調、交通の不便の如き損失莫大なりしならんかとも察せられる。地質時代の變化は人類に影響なくして行はれ、歷史時代に入りてはじめて被害の大なるを致したれども、それは人類の無智と不注意との責任もあることとて、その禍福の一面を直視することを怠つてはならない。

日本は自然美に於て世界の公園の美稱を擅にしてゐる。その原因の一つは火山系、地震帶と關聯するものである。志賀重昂氏は日本風景論に於て、自然美の趺宕を讚美したる項目の中に次の如き無韻の詩がある。

『萬頃の太平洋面筍岩崢起し、雪浪之れに怒擊し、一隻の信天翁雙翼を張りて岩頂に佇立す。』

『秋高く氣清く、天長へに纖雲なく、富士の高峰、武藏野の地平線上に突兀す。芙蓉高似月中に高き處。嶽影太平洋に倒映する處』

『樽前の嶽腹、大塊なる赭褐色の溶岩相錯列し、噴火後、高樹は乾皮龜裂し、枝葉悉く去りて、骨立竦峙する處、一片の缺月慘澹に照し來る。』

『日本海上、雲霧冥合、其上より鳥海山の三角形なる峰尖忽焉と露る。』

かゝる趺宕豪放の自然美は火山岩の千狀萬態の表現である。——火山岩なかりせば文山の『雪如紈素煙如柄、白扇倒懸東海天』や、鵬齋の『白蓮獨聳天外、擎出玉皇香案前』や艮齋の『萬古天風吹不折、靑空一朶玉芙蓉』の崇高莊嚴の

大觀を我等は誇ることが出來なかつたであらふ。歌聖赤人も『渡る日の影も隱ろひ、照る月の光も見えず、白雲もい行き憚り、時じくぞ雪ぞ降りける』と歌ふ靈感を與へられなかつたであらふ。

火山の外に、火山湖の幽邃玄武岩の奇怪、いづれか日本風景を豐富ならしめざる。火山靈感以外に、將來、火山を工業に利用する時代の來るべきを疑はない。私は大正三年櫻島噴火の際に、之に言及し置きしが、一兩年前から伊太利にてはフロレンス附近の峽谷の噴火口の蒸氣を動力に變更して工業の資に供してゐるといふことである。

五　震災と民政の暢達

古代人にとりて天變地異は自然の現象に止らずして、政治的、道德的、あるひは社會的意義を有するものであつた。君主專制の時代に於ては一人の德を以て天下に臨むので、民意は暢達せず、多數の幸福安寧は等閑に附せられた。天子は天意を代表するを理想とすれども、理想は往々にして空想であつた。時に諫爭する臣僚あるも、民政の進步は遲々として捗らなかつた。かかる場合には何等の警告なく、何等の豫報なく、突如として發生する天變地異は爲政者に對する天の警告であつた。正義の聲であつた。

古代支那に於ては地震を以て亡國の前兆として君主を慴伏せしめた。

『幽王の二年、西周の三川皆震せり。伯陽父曰く、「周は將に亡びんとす。夫れ天地の氣は其の序を失はず。若し其の序を過たは民之を亂せるなり。(註、民とは暗に天を指す也)陽伏して出づること能はず、陰迫りて蒸ること能はざらしむ。是に於てか地震する有るなり、今三川實に震するは、是れ陽其所を失ひて、陰に鎭されしなり。陽失ひて

陰に在るときは、川源必ず塞る。源塞れば國必ず亡ぶ。夫れ水土演ひて民用ふるなり。水土演ふることなければ民財用に乏し。亡びずして何をか待たん。昔、伊洛竭きて夏亡び、河渇きて商亡びき。今周の德も二代の季の若し。其川源又塞がれり。塞れば必ず竭く。夫れ國は必ず山川に依る。山崩れ川竭くるは亡ぶるの徴あり。川竭くるときは山必ず崩る。若しくは國の亡びんとすること十年を過ぎざらん。數の紀なればなり。夫れ天の棄つる所は其紀を過ぎざらん。」と。是歲や三川竭き、岐山崩れたり。十一年に幽王乃ち亡びて、周乃ち東に遷れり。」（國語）

この種の古典の思想は我が國上代の爲政者の思想と行爲とを支配したほどでなくとも、常に何等かの暗示を提供してゐたに違ひない。詔敕集を通覽すれば、災異殊に地震が政治の改善に多少の貢獻をなしたことが解る。

聖武天皇の天平年間は地屢々震うた。日本災異志は天平二十年間に三十六回の地震を記し、そのうち大震は四五回あつた如く思はれる。朝廷之を憂懼せられたるの狀は天平六年（七三六年）四月の詔敕によりて明かである。

「地震之災。恐由政事有闕。凡厥庶寮。勉理職事。自今以後若不改勵。隨其狀迹。必將貶黜焉。」

この詔敕は地震を以て政事上に闕典ありとして有司百官を戒飭せられたものである。いはゞ地震を機會に綱紀肅正を叫れたのである。

嵯峨天皇の弘仁九年（八一八年）七月、相模、武藏、下總、常陸、上野、下野等の諸國地震し、山崩ること數里に及び壓死したる百姓は無數であつた。朝廷使を遣して、損害甚しき者に賑恤を加へしめた。その詔に曰く。

『朕以二虛昧一。欽若二寶圖一。撫育之誠。無レ忘二武歩一。王風猶鬱。帝載未レ熙。咎徵之臻。此焉特甚。如レ聞。上野國等境。地震爲レ災。水源相仍。人物凋損。雖レ云二天道高遠一。不レ可レ得レ言。固應二政術有一レ虧。致二茲禍譴一。自貽二民瘼一。職朕之由。薄德厚顏。愧二于天下一。靜言厥咎。實所二興歎一。豈有レ因二震潦一。居業蕩然者。使等與二所在官司一同斟量。免二今年租調一。竝不レ論二民夷一。以二正稅一賑恤。助二修屋宇一。使レ免二飢露一。壓沒之徒。速爲二斂葬一。務盡二寬惠之旨一。副二朕迺睠之心一。』

『天道高遠にして言を得べからずと云ふと雖、固より應に政術缺くる所ありて、茲に禍譴を致したるなるべし。自ら民瘼を胎す、職は朕の由する所。薄德厚顏、天下に愧づ』との詔敕、君主自らを責めて甘じて天譴を受くるの態度、欽仰に堪えざるものがある。また『今年の租調を免じ、ならびに民夷を論ぜず、正稅を以て賑恤せよ。屋宇を助修して飢露を免かれしめよ』と何處までも行き屆きたる救濟方法にまで及んでゐる。ことに大和民族とアイヌ族との差別なく、一視同仁の態度を力說せられたる點大に注目を値する。

淳和天皇の天長十年間に約七十回の地震があつた。されば天長五年（八二八年）に地震賜物詔が出た。

『（上略）頃者坤德愆レ叙。山崩地震。妖不二自作一。咎定由レ人。疑是八政或乖。一物失レ所歟。靜言二厥過一。責在二朕躬一。寅畏二天威一无レ忘二寤寐一（下略）』

天皇躬ら責に任じ、天威を畏れて寤寐の間も忘れまいと宣言せられたのである。老丁を免じ、八十歲以上の老人及び

鰥寡孤獨自立すべからざる者に物を賜ふた。
地震頻りに到るが故に翌々年再び地震賑恤詔を賜つた。冒頭から謙虚の態度を發明せらた。

『朕以二菲昧一。祗膺二瑞圖一。寅二畏三靈一。憂二勤四海一。若化未レ孚。皇猷尙欝。咎徵之貺。不招而臻。(下略)』

此度は民夷を論せず、倉廩を開いて救賑し、屋宇を助修して職を失はしむるなかれ、屍亡の倫をして早く殯埋せしめよと督勵せられた。失業者問題まで救濟の手が及んだかとも想像せられる。
淸和天皇の貞觀年間も亦地震が多かつた。その十一年（八六九年）十月、陸奥地震遣レ使臨撫詔を賜つた。

『(上略)如レ聞。陸奥國境。地震尤甚。或海水暴溢而爲レ患。或城宇頻壓而致殃。百姓何辜。罹二斯禍毒一。憮然媿懼。責深在レ予。(下略)』

「憮然として媿懼し責深く予に在り」と述べられてあるに徴して、頻に來る震災に對する朝廷の實誠なる態度を想見すべきである。之れより先き仁明天皇の承和年間地震多かつた故にその八年（八四一年）七月、伊豆國地震優恤詔を賜つたが、そのうちに

『靈譴不レ虛。必應二粃政一。慮二昔往圖一。內媿二于懷一。傳不レ云乎』

といふ字句がある。君主が眞理の前に柔和に、謙遜にして及ばざらんことを恐れたことが理解せられる。所謂帝王學の眞髓をえたものである。

政權武門の手に歸してより、詔勅の見るべきもの少くなつたことはいふ迄もない。

徳川時代に於ては民政が相應に發達したが、大地震後の政策には見るべきものが多かつたやうである。安政二年の江戸大地震に對する救濟政策の一端は「時風錄」の一節に徴することが出來る。

『明君の御仁惠に、町々へ食を賜り、所々に御小屋を建て、貧民を救はせ給ふ。幸橋門外、草淺廣小路、上野山下、深川海邊新田、同永代寺境內、都合五ケ所、東叡法主にも、その山下に建てさせらる。富める町人、夫々施しを出す。そが御褒美として、銀子被下など、のこるくまなく有がたし。また類燒、潰家の大小名をはじめ、御家人の面々へは夫々御金を貸し、或は賜り、又彼變災に横死する者少からざるを歎かせ給ひ、上野凌雲院をはじめ十二ケ寺へ命ぜられ、二夜三日の大法會修行させ給ふ。凌雲院は淺草寺へ出張、增上寺方丈は回向院へ出張、諸寺諸山の僧侶集會して修行あり、人群集する。ここに又五穀その外竹木の價、修理作料、過分に貪らざるやうとの嚴命下りて、人々その惠みを仰ぐ也。たま〳〵その虛に乘じ、利を貪るの姦民あれば、忽ちひと屋につなぎて、その他を懲しめらる。有がたかりし事ともなり』

罹災者假住宅問題、物資配給の方法、暴利取締令等相應に工夫せられ、實施せられたやうに思はれる。

それ代議政體の發達せず、言論機關が設置せられざる時、民衆の意志の伸暢を計ることが困難であつた。災異は人類の敵なれども、時々爲政家を鞭撻せしめ、反省せしめて、次第に善政を行はしめたのである。されば日本災異史の一面には單に民心の疾苦のみならず、民政の發達が並行したことも考察せなければならない。

七　震災と宗教的信念の復興

地震の慘害は急激なるだけそれだけ人類のために畏怖せられた。「恐るべきもののうちにて實に恐しきは地震なりけり」と古人の言へるは無理もない。さればやゝもすれば現實の快樂に眩惑して永遠の眞理を無視せんとする衆生もこの大なる自然界の驚くべき現象に對しては慄然として反省させられたのは當然である。故に東西古今の典籍は地震を宗教的に解釋したる例に富んでゐる。古代希臘人は一面を地震と前條に述べたる如く物理的に解釋したるもあれども、之を宗教的に考察して神の怒りであるとも斷定した。

諸宗教の信條の中に最後の審判といふものがある。一切人類が神の審判をうけて善人は永遠の祝福に與り、惡人は無間地獄に陷ゐるといふやうな共通の思想がある。さて最後の審判は世の終りに續くもので、その時には天變地異兵燹疾病等一切の災禍が生ずる。しかも最後の審判の後には新天新地が出現して、救はれた選ばれた人類は永久の福祉を蒙るといふのである。この思想は猶太教、基督教、回教に共通してゐる。

『オリブ山に坐し給ひし時、弟子たち窃に御許に來りて言ふ「われらに告げ給へ、これらの事は何時あるか、又なんぢの來り給ふと世の終りとには何の兆あるか」イエス答へて言ひ給ふ「なんぢら人に惑されぬやうに心せよ。多くの者わが名を冒し來り、「我はキリストなり」と言ひて多くの人を惑はさん。又なんぢら戰爭と戰爭の噂とを聞かん、愼みて懼るゝな。斯る事はあるべきなり、然れど未だ終にはあらず。即ち「民は民に、國は國に逆ひて起たん、」また處々に饑饉と地震とあらん。此等は皆産の苦難の始なり。(下略)』 マタイ福音書二十四章

コーランの最後の審判の光景は一層慘憺たるものである。この世の終りになると、鋭い喇叭の聲が天の一方に起りてその響によりて大地は震動し、その上の一切の家屋は倒れ、山岳は壞れて平野となり、海は底を露し、天は暗く日の光は鈍色にみゆ。無數の星は之を支持する諸天使の死滅したがために地に墮ち、天上天下、ありとしあらゆる者は戰ひ慄えつゝ審判を待つといふのである。とにかくアラビ人は地震はアラー神の意志によりて發動するものと信じた。

紀元二世紀の頃、羅馬帝國は地震屢々襲うたので、ストア學派の學者達は何等かの原因があらねばならぬとして、之を神の震怒に歸した。基督教會は大にこの説に贊成して布教の方便に使用したらしい。その頃ネープルスを中心とする大地震があつた時、基督教徒は風紀紊亂に對する神の怒りであると宣じたが、ローマ人自らも超自然的意義のあることゝ觀じたらしかつた。之に反してローマ人中第一世紀頃の地震は基督教徒に對する神々の不興であると信じたものもあつた。

羅馬皇帝クラウデアスは特に休日を制定して地震鎭壓のための宗教的儀式を行はしめた。紀元前一九三年に大地震があつた時、ローマ人は翌年を通じて三十八日の特別休業をなして商賣の取引を禁じた。恐くは宗教的儀式を行ふためで

あつたらふ。

八世紀の頃英國の碩學ベードは地震は囚はれの怪獸レヴイアサンの騷動に基くと說いた。エリザベス時代に地震は神の怒りであるといふ信仰が復興した。この思想は十八世紀半頃まで米國の新英蘭のピリグム・フアザースの子孫によつて信ぜられた。一時衰へかけたが、一九〇六年に桑港の大地震があつたので、太平洋沿岸にかゝる說を宣傳する宗教家が一時少くなかつた。

葡萄牙のリスボンで大地震大海嘯があつた時、英國々教會の牧師の中では、これは葡萄牙人が羅馬同教を信ずるための天罰であると說いたものもあつた、しかるに之に反して葡萄牙人のうちには羅馬教會が餘りに新教徒に對して寛大なるため神の震怒を招いだと信じた者もあつた。偏狹な宗派心の判斷ほど愚劣なものがない。しかし地震を以て一種の天譴と考へたことは有意義の史實である。

佛教について言へば、地震に關する思想は日蓮上人が最も豐富であるやうに思はれる。

立正安國論に日蓮は金光明經を引いて法華經を信ぜる國土の災難を詳述した。

『(上略)世尊我等四王並に諸の眷屬及び藥叉等、斯の如き事を見て、其國土を捨てゝ、護擁の心なけん。但我等のみ是王を捨棄するに非ず。必ず國土を守護する無量の諸大善神有らんも、皆悉く捨去せん。既に捨離し已りなば、其國當に種種の災禍ありて國位を喪失すべし。一切の人衆皆善心なく、唯繫縛、殺害、瞋諍のみ有り、互に相讒諂し枉げて辜無きに及ばん。疫病流行し、彗星數々出で、兩日並現し、薄蝕恆無く、黑白の二虹不祥の相を表し、星流れ、地

動き、井の内に聲を發し、暴雨惡風時節に依らず、常に飢饉に遭ひて、苗實成らず、多く佗方の怨賊ありて國内に侵掠し、人民諸の苦惱を受け、土地樂しむ可きの處なけん。』

日蓮はまた大集經を引用した。

『佛法實に隱沒せば、鬚髮爪皆長く、諸法も亦忘失せん。當時虛空の中大なる聲ありて、地に震ひ、一切皆遍く動ぜん、猶水上輪のごとし。城壁破れ落ち下り、屋宇悉く圮れ拆け、樹林、根枝、葉華菓藥盡きん。（中略）諸有の井泉池一切盡く枯渇し、土地悉く鹹鹵し敵裂して丘澗と成り、諸山皆燋然して、天龍雨を降らさず、苗稼皆枯死し、生者皆死盡して、餘草更に生せず、土を雨し皆昏闇にして日月明を現せず、四方皆亢旱し、數々諸の惡瑞を現し、十不善業道貪瞋癡增して、衆生の父母に於ける、之を觀ること、獐鹿の如くならん。衆生及び壽命、色力、威樂減じ、人天の樂を遠離し、皆悉く惡道に墮せん。（下略）』

是等の思想が猶太教基督教の「世の終り」のそれと共通の分子の多いことは注目すべき事に屬す。

法華法に基く佛法を信ぜされば日本は天變地異の災難、外敵の難のために亡びんと日蓮は獅子吼した。

『かゝる世にいかなればにや候らん、天變と申して、彗星長く東西に渡り、地文と申して大地をくつがへすこと、大海の船を大風の時、大波をくつがへすに似たり。大風吹きて艸木を枯らし、飢饉も年々に行き、疫病日々に起り、大旱魃行はれて、河池田圃皆かはきぬ。此の如く三災七難數十年起つて民半分に減じ、殘は或は父母、或は兄弟、或は

妻子に別を歎く聲、秋の蟲に異らず、家々の散り失せること、冬の艸木の雪に責られたるに似たり。是はいかなる事ぞと經論を見候へば、佛の言く、法華經と申す經を謗し、我を用ゐざる國有らば、かゝる事あるべしと、佛記し置せ給ひて候御言に少しもたがひ候はず。』（妙法尼御前御返事）

『蛇は七日が内の大雨をしり、烏は年中の吉凶をしる。此則ち大龍の所從又久學のゆゑか。日蓮は凡夫なり。此の事をしるべからずといへども、汝等にほゞ之を曉さん。彼の周の平王の時禿にして裸なる者出現せしを、辛有といいし者占つて曰く。百年が内に世滅びん、同じき幽王の時、山川崩れ、大地震ひき。白陽と云ふ者勘へていはく、十年の内に大王事に値せ給ふべし、今の大地震、大長星等は國主日蓮をにくみて亡國の法たる禪宗と、念佛者と、眞言師を方人せらるれば天怒らせ給ひていださせ給ふところの災難なり。』（撰時抄）

法華經一卷に藏する眞理がいかに大なればとて、この經文一卷のために天災頻りに臻ると說くは我等の服する能はさる處なれども、災異に宗教的精神的意義を發見したる點、流石に大宗教の面目躍如たるものがある。

多神教を信じたる古代日本人は地震に對しても祭祀を行つたこともあるやうである。日本書記に從へば、推古天皇二年（五九九年）四月、大和國地震ひ、屋舍を壞る、敕して地震の神を祭らしめ給ふとある。地震の神といふ特別の神がある筈はないが、多神教的氣分で臨時にかゝる宗教的對象物を考察したのであらふ。

地震はまたその地の災禍と相俟ちて厭世思想を刺戟したことはいふ迄もない。方丈記卷頭の思想は之を道破して餘す

所はない。

『行く川の流は絶えずして、而も本の水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しく止まることなし。世の中にある人と住家と、亦此の如し。玉敷の都の中に棟を並べ、甍を爭へる高き卑しき人のすまひは、代々を經て、盡きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。或は去年破れて、今年は造り、或は大家滅びて、小家となる。住む人もこれに同じ。所も變らず、人も多かれど、古へ見し人は二三十人が中に、僅かに一人二人なり。朝に死し、夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて、何方へか去る。又知らず、假の宿り、誰がために心を惱まし、何によりてか目を喜ばしむる。その主と住家と無常を爭ひ去る樣、いはゞ朝顔の露に異ならず。或は露落ちて花殘れり。殘ると雖も、朝日に枯れぬ。或は花萎みて露なほ消えず。消えずと雖も、夕を待つことなし』

若し方丈記の作者が鴨長明なりとすれば、彼は二十四歳にして、安元三年の大火に遭ひ、二十七歳にして治承四年の旋風及び遷都を目撃し、二十八九歳にして、養和の飢饉を味ひ、三十二歳にして元暦二年の大地震に驚かされた。多情多感の著者が青年期に於て數々の災異を眺めて、此世をあぢきなく思ふもやむをえなかつた。而して厭世思想が消極的に宗教的信念の特に寄與する所のあつたことは之を承認せざるをえない。

八 震災と道徳的精神の振作

猶太民族の宗教的貢献は一神教の確立にあれども、更に大なる貢献は宇宙の根本を道徳化したことである。大小の豫

言者はこの聖なる目的のために國民に警告の聲を絕やさなかつた。紀元前八世紀の頃に北朝イスライルに於て豫言したるアモスは牧畜者であつた。當時のイスライル民族は國際關係に小康をえ、且つ經濟的繁榮を來たしたる結果として、上流階級は豪奢を極め、民人の疾苦を念はない。アモスは是等の徒に警告した。

『汝等公道を茵蔯に變じ、正義を地に擲つ者よ、昴宿をよび參宿を造り、死の蔭を變じて朝となし、晝を暗くして夜となし、海の水を呼びて、地の面に溢れさする者を求めよ。其名はエホバといふ。彼は滅亡を忽然强者に臨ましむ、滅び遂に城に臨む。彼等は門にありて勸戒する者を惡み、正直を言ふ者を忌み嫌ふ。汝等は貧しき者を踐みつけ、麥の賂物を之れより取る。是故に汝等は鑿石の家を建しと雖、その中に住むことあらじ。美はしき葡萄園を作りしと雖も、その酒を飮むことあらじ。我知る、汝等の愆は多く、汝等の罪は大なり。汝等は義しき者を虐げ、賄賂をとり、門に於て貧しき者を推し枉ぐ。是故に今の時は賢き者默す。是れ惡き時なればなり。汝等善を求めよ、惡を求めされ。然らば汝等生くべし。また汝等言ふごとく、萬軍の神エホバ汝等と偕に在さん。汝等惡を惡み、善を愛し、門にて公義を立てよ、萬軍のエホバ或はヨセフの殘れる者を憐み給はん(下略)』

アモスはイスライル國民に社會的公正を要求した。ホゼアも、イザアヤも、エレミヤも各々豫言者として道德的獅子吼をなした。これ當に舊約全書に千鈞の重みを與ふるものであつて、今日猶大文學としての價値を保留する所以である。然るに我が國の宗教には豫言者的分子が極めて少ない。宗教家の多くは大抵爲政家の意志に苟合して、寧ろその走狗となつて宗門の繁榮を企てた。日蓮上人は除外例であるが、前に述べたる如く、法華經一卷を國民に强いんとしての豫言であつて、一般的なる廣義の社會的公正には餘り觸れてない。されば我が國の宗教文學は此點に於て頗る貧弱であ

る。

而して氣候の溫暖に失する傾向があるので、國民性は著しく感情的一面を有する。感情的なるが故に、本能生活に捉はれ易く、奢侈贅澤にも墮し易い。故に國民性の弱點があるが、宗教家も、道德家も、この點に深くさし込んで、荒療治を加へたものは少ない。されば平和の時代が稍々永引けば、必ず享樂的時代が生起した。平安朝時代然り、江戸時代然りである。その他の時代にありては、重に戰國の兵馬倥偬の時代であつたから、勢ひこの惡傾向を免れえたのである。

故に日本民族は過去に於て外敵の難は免れえ、或は勝ちえて餘りあつたが、内部的腐敗に對しては手の下すやうのない場合が少くなかつた。斯る時に國民に道德的反省を與へたものは天變地異であつた。

我が日本群島は東洋の花彩島として、風物の秀麗なることに於て世界一の評あれども、太平洋に暴露するが故に、颱風の襲來頻りであり、また東北地方は北極方面より流れ來る親潮といふ寒流の影響を蒙るが故に折々飢饉を免れない。交通運輸の便の開けざる古代及び中世時代に於て、蒼生の艱難實に言ふべからざるものがあつた。之に加ふるに火災、旱魃、霖雨、洪水、疫癘、蟲害等ある、特に屢々噴火、地震、海嘯等の災禍があつたから國民はその都度、浮薄なる現實の生活より目覺めて、翻然として眞面目の生活に歸つたのである。一方には方丈記の著者のやうに離群索居して高踏的生活を試みるに至つたものもあれども、奮闘の精神の旺盛なる者は一段の元氣を振作して、復興の事業に鞅掌した。

弘化四年（一八四七年）信越の大地震に際して、信濃埴科郡の宮坂喜昌といふの記錄の冒頭に左の如き文字がある。

『我國は神國にして萬國に勝れて、人物聰明、五穀熟し、神明幸福を降し給ふといへども、自然と天災地殃なきこと能はず、このゆゑいかなれば、諸人久しく泰平の恩澤に浴し、安靜にならふ時は、おのづから奢侈にうつり、止ることをしらざれば、天是を惡んで、災を降し給ふ。』

安政二年（一八五五年）江戸大地震の記錄なる時風錄には左の如く記事がある。

『こたび火災に逢へる人々は賴みとせし土藏を失ひ、實にも火急のことゆゑ、日々に缺くべからざるの品といへども、持ち退くに至らねば、金錢ありても米はなく、米ありても炊器なく、不自由なることいふばかりなし。日にそひ屋敷〳〵の圍ひも成り、何れもあらたに假家をしつらひ、又は傾むきし家々には向梁、かすがひなど打ちてわづかに風雨をしのぐのみ。こゝに於て、日頃遊惰驕逸の輩もはじめて夢の覺めたる如く、太平の有難かりしをしりて、自ら大工左官の手傳、あるはちもちなどして、衣は寒を凌ぎ、食は飢を凌ぎ、家は風雨を凌ぐにさへ足ればなど言ひあへるも心のまことにかへるにや、殊勝にも又哀れ也』

この記事は六十八年前の事實に基くものなれども、その儘移して、この度の大震災、大火災の實驗を記述したものと見做して差支へないやうに思はれる。

齋藤拙堂の地震行は著しく道德的精神に溢れたものであるから引用する。

『天柱折。地維裂。城復レ隍。陵變レ谷。禍發關西及關東。彼蒼者天何太酷。余寓二江門一親觀二此凶一。歲維乙卯月孟冬。

百萬人家盡傾欹。祝融佐レ虐能上衝。死者縱橫都下偏。載ニ鬼百車一三界幽冥。生無ニ室廬一死無レ棺。一死一生誰已言。貴賤糧食如レ臨レ軍。上下束裝如レ赴レ戰、帷屋布障庇ニ風雨一。陋如ニ陣營一孰擇レ便。不レ似平生競ニ豪奢一彫刻粉丹飾ニ宮家一。衣必綾羅。食甘脆。珠璣金塊俗相誇。本是忘レ亂犯ニ天治一。滔々天下如レ醉。一朝驚覺繁華夢。不ニ但地裂恐ニ天譴一。杞人之言或省悟。何知地妖非ニ天意一。君不レ見堯水湯旱亦大殃。挽ニ回天心一致休祥。即今只要補ニ天手一。轉レ禍爲レ福豈無レ方。嗚呼轉レ禍爲福豈無レ方。』

この詩も亦此度の震災火災を歌へるごとくも讀まれる。ことに最後の數句の希望に輝く日本詩の價値を一層大ならしむる。「君見ずや堯水湯旱亦大殃なり。天心を挽回して休祥を致さん。即今只天手を補ふを要す。禍を轉じて福と爲す、豈方無らんや」の思想は雄大にして道義の精神に燃えてゐる。内閣諸公、復興審議會及び同復興院幹部諸君のために拙堂が遺したる忠言とも觀ぜられるではないか。

桃井可堂にも地震の長詩がある。

『聞ニ之天之降ニ禍徒非一レ禍。其是恤レ民令ニ懲毖一。凡予子弟及門人、明智大之不ニ假易一。一變ニ華麗一復ニ樸素一。主ニ張實用一省ニ浮費一。能ニ修其身一以及レ時。夙夜是謹一終始。爲レ臣忠。爲レ子孝。緩急共待君父試。唯願廟堂大ニ其謨一。古訓是訓應ニ天意一。已修文徳大奮レ武。外攘ニ夷狄一無ニ内患一。災害不レ生。國安富。優遊詩書得ニ講肆一。』

「天の禍を降すは徒らに禍に非ず」といふは至言であるが、廟堂諸公に托して攘夷を斷行したいといふのは時代思想である。若し可堂をして今日にあらしめば、この震災を好機として新思想家を脅迫したいと歌ふたかも知れない。但し此

詩の大體の精神は可とすべきである。

大沼枕山の地震行には起句に、『不レ遇二大災異一。不レ知二眞敬戒一』と歌つてゐる。

之より先き文政十一年（一八二八年）越後三條地方に大地震があつた時に良寛和尚の地震の詩があつた。

『（上略）世移輕信如馳。況怙太平人心弛。邪魔結黨競乘之。恩義即爲讎。忠貞更無知。論利爭毫末。悟道徹底擬。設己欺人稱好手。以紫爲朱凡幾何。呼鹿爲馬會無知。大地茫々皆如斯。吾獨惆悵訴阿誰。凡物自微至顯亦尋常。這回災禍猶似遲。大丈夫之子須有志氣。何必怨人咎天做兒女。』

「這回の災禍猶遲きに似たり」といふ處、社會僞善虚僞を摘發する處、豫言者の風格を偲ばしむるものがある。流石に近世の一名僧に恥ぢない。

されば震災は他の多くの天變地異と相類りて、日本民族に對する天の聲となり、神の意志となり、佛の智慧となり、豫言者の警告となつて、この民族の道徳的性格を維持し來つたことを思ふ時は震災にも深く隱れたる精神と意義のあることを悟るべきである。

その他震災は人類愛を喚起して、階級鬪爭を緩和し、國際的友情を刺戟して排外的精神を除き、罹災者の懺悔、之に對する第三者の同情、また罹災者同志の同情によりて、人道的精神が著しく擡頭し來るのである。

九　震災犠牲の有意義

その他震災が過去の日本文化に及ぼしたる影響を考察するに、その都度勞働者階級の向上の如き社會的方面を攻究する必要がある。安政二年の大震災の後にも大工、左官、瓦屋その他の職人が俄かに好景氣に際會したさうである。現今の東京に於ても同一現象を目撃するではないか。驕れる者低くせられ、低き者高くせらるゝ社會現象は日々の新聞を賑やかにしてゐるではないか。

その他過去の日本の工藝は殊に建築に及ぼしたる震災の影響は甚大なるものがあらうが、今日は之を研究し、且つ記述する時なきを遺憾とする。日本建築が木造を主としたるは樹木の豐富なることゝ、震害を豫防するためであらふ。地震火山帶に國土を有する日本民族は將來の建築に就いても多大なる不安を有すれども、幸にして玉砂利と砂とが無盡藏に存し、且つセメントも相應に産出するが故にコンクリート建築の發達に對する材料は容易に拂底するとはあるまい。その他衣服食物等に至るまで、何等かの改造が行はるゝに至るであらふ。

それ地震は自然の現象にして、地球内部の變化の一表現である。地震は地球の運命であり、特に日本の運命なれば、之を豫防することも、回避することも不可能である。但し震災は之を豫防しなければならぬ。また相當の設備と注意とを怠らざれば、之を豫防し得ることは疑ひない。

あゝ、十數萬の尊き生命の犠牲、數十萬戸の燒失、百億圓以上の損害。このために泣き、苦み、嘆く同胞は數ふるに遑がない。しかしこの大なる犠牲は無意味でない。安政以來、久しく震災なく、上下恬として、油斷に流れ、大戰爭以

後の犧牲なくして獲得したる富を擁して、奢侈荒怠の生活に耽溺したる多くの市民を警醒したのはこの度の震災である。豫言者なき國土に天譴の思想を想起せしめたるのは此度の大震災である。願くば逝ける十數萬の靈、この尊き意義を知りて冥せられんことを。富を失へる者、職を失へる者、家族に永別したる人々も、この隱れたる意義を知りて幾分か安んぜられんことを希望する。而してこの大震災を免れえたるものは懼然として深く反省して、この大自然の教訓と暗示とを考察すべきである。

我等が有する日本文化は過去に於ける此種の幾多の犧牲と事變との刺戟によりて、指導によりて、進歩し來たのである。この大なる民族の文化の背景には悲しむべき慘事や、血腥しい出來事が隱れてゐる。この暗黑なる基礎の上に光明に輝く現代文化の諸相が光つてゐるのである。

繰りかへしてこの度の變災の犧牲者が徒らに失望落膽することなく、希望と光明とを認めて、新なる生活に勇み立たれんことを悃願する。（十月廿日）

帝都復興に伴ふ諸種の社會問題

――勞働者賃銀問題及び知識階級職業婦人救濟案其他――

法學博士　堀江歸一

勞働者の賃銀問題

九月一日の震災之に次いで同日から二日に亘つて起つた火難の爲めに、東京市の大部分は茫々たる燒野原と爲り、爾來容易に其趣きを更めるを得ない。斯くて今や幾多の社會問題は吾人の眼前に殺到し來つて、其解決を要することゝ爲つた。

當面の社會問題として、第一に注目を要するものは勞働者の生活並に賃銀に關する一事である。我國の勞働者が歐洲戰爭中に起つた商工業の好景氣に依つて、有利なる地位に立つを得たのも、今日から見れば、誠に南柯の夢に類するものであつて、其後の不景氣に依つて、或は賃銀の引下に脅かされ、或は職業の喪失に苦しめられ、社會上危險なる地位に居ることを免かれなかつた。時に彼等が傭者の無理解なる行動に對抗して、企議を試みるようなことがあつても、多くは其れが解傭を促す機會となり、勞働者をして空しく失敗を喫ぜざるを得ざるに至らしめた事實に徵したならば、彼等が如何に不利なる勞働條件を强いられて居つたかの一斑を知るに難しとしない。

斯る際に今回の如き震災火難が突發して、殆ど經濟組織の全體に亘る破壞を來した場合に、勞働者の利害は如何なるものであつたらうか。或る人は今度の災厄は社會に於ける階級の差別を一掃した。富めることとの多い者は其多いだけ損失したが、何等失う可きものを持たない貧民は少しも變災を意としないと云ふ。又或る人は今度の如き變災に當つては、生ま中、知識や技倆を備へて居る者に取つて、其知識や技倆は生活上に少しも用を爲さない、美術家、藝術家、商人、官公吏、學校教師の如き一旦燒出されたが最期、如何にして其損失を償う可き道を知ら

ないが、獨り勞働者に至つては、如何なる場合に於ても、其筋骨を勞することに依つて、報酬を收め、生活を營むに窮する虞れがない。勞働者こそ今日正に天下を横行する者であると云ひ、賃銀の變災後著しく高騰したことを以て、此説を論證しようとして居る。

如何にも震災直後に於ては、一時社會階級の差別は消滅したように見へた。如何に多くの富を擁して居る者に取つても、其富は大なる效用を爲さず、寧ろ一握の玄米を所有することを可なりとした。現に私の如き九月某日上野公園内の野天に精養軒の設けた臨時食堂で、印半纒姿の土方と相對して、粥食を認めた時には、世の中も餘程面白くなつて來たと云ふ感じを持たざるを得なかつた。然し斯の如きは震災直後の混亂時代に偶發した一の出來事であり、如何に震災火難の東京市に祟ることが劇烈であつたとした所で、社會に階級の差別の消滅すると云ふが如きは、私有財産制度の存在し、資本主義の繼續する限り、想像するを得ない所である。勞働者は依然たる勞働者であつて、唯震災や火難の爲めに破毀される何ものをも持たない爲めに、損害を蒙らなかつたゞけの話であつて、彼等の感情から云へば、地震で潰されても、家屋を持ちたかつたらうし、火事で燒かれても家屋内に道具や、衣服を備へたかつたに相違ない。震災火難の爲めに、勞働力を持つ勞働者が社會に於て萬能の有力者と爲つたと考へるが如きは、大なる間違いであつて、彼等の地位の薄弱なることは、資本主義の行はれる限り、今も昔も異なる所はないのである。昨今勞働者の賃銀なり、職人の賃錢なりは著しく上進したようである。或は家族はバラック内で配給米に依つて生活し、主人は外に出て、法外に高い賃銀を受取つて、勞働する結果、勞働者の生活は案外に樂であつて、彼等の金遣ひの荒いこと、驚く可きものがある、罹災民の慘狀と對照して、彼等の安樂であることを高唱する人があり、斯る考へから賃銀公定とか最高賃銀制限とか云ふような説を唱へ出したものと想像されるが、私は右の考へ方には大なる誤謬が含まれて居ることを指摘するに苦しまない。

第一、今日高い賃銀を得て居る勞働者のあることは、事實に相違ないが、全體の勞働者に比較すれば、高率の賃銀を得て居る者は其一部分に當るのであり、又職業の種類から云へば、多く力役に從事したり、又は土木、建築等に關係したりするものであつて、工業勞働者の主體と云ふ可き職工殊に熟練職工に至つては、賃銀の騰貴は愚か、何れも失業に依る所得の喪失に苦んで居るのである。然らば當面の問題としては、賃銀の最高額を公定するよりも、寧ろ多數の失業者に向つて、職業を授けるこ

とを以つて、急務とする道理である。

第二、今日一部勞働者の賃銀は高いに相違ないが、一方に物價の現に騰貴したこと、又近き將來に騰貴することを考へたならば、其間の調節は如何なるものであらうか。賃銀の公定に依つて、賃銀の最高限を測定するならば、同時に物價の最高限を公定し、兩者の間に均衡を保たしめることを要する。此覺悟なく、又此成算なくして、賃銀の公定を策するが如きは、大なる誤りとしなければならない。

各方面の失業者

故に今日の問題として急速の解決を要するものは、賃銀の件ではなくして、寧ろ失業者に授職する事に外ならない。失業者の東京市內に散在するものは、幾何の數に上るであらうか、此邊の調査は少しも行はれて居らない、隨つて吾人は纔に其概數を推測するのみに止まる。而して東京市內に於て燒失工場に從業した男女勞働者は七萬八千二百十人に上ると云ふ數字が或る筋に依つて發表されたが燒失を免かれた工場であつても、事業不振の爲めに、續々職工を解傭した次第であるから、是等解傭に會つた職工も亦當然失業者の班に入る可きものであつて、隨つて失業者の數は遙に上記の數字を凌駕することゝ思はれる。一方に是等失業者の一部分は人足土方其他燒跡片付けの仕事に從ふに至つた結果、或る程度まで失業者の數を減じ得たかも知れないが、工場勞働と土方人足荒い力役とは自ら其性質を異にし、前者に從事した者は必ずしも後者に移ることを好まず、又強いて前者から後者に移らしめた所で、其能率の擧がることを期し得られないのみならず、彼等の本來備へた勞働上の熟練を減損し、消耗せしめる虞れなきを得ない。

勞働者以外の失業者としては、知識階級に屬する俸給衣食者があり、其內には職業婦人も亦含まれて居ると見ることが出來る。市內に於て燒失した銀行會社工場店舖は殆ど其數を知るを得ない程の多くに上つて居る。是等燒失銀行會社の內には兎に角業務を開始したものが相當にあるようであるが、營業の規模は其れ〴〵縮小され、震災の略ぼ終るや否や、直に一部の從業員を解傭し、營業費を節約して、他日に備へんとしたものもある。世間から豐富なる資金を有すると見られ、震災後開業の運びに至つた當業者にして、尙ほ斯る有樣であるとすれば、資金の微弱なるものゝ如き、到底、從業員を雇繫ぎ得る餘地を存しないし、燒失後の今日に至つて、依然復業の機運に際會しないものゝ如きは、從業者全部の解傭を行うの已むを得ざる處置に出た次第である。否從業員ばかりが失業者と爲つたのではない、

從來彼等を使役して居つた主人も亦實に失業者の一人である。近來罹災地に復興の氣分が漲ると云ふような新聞記事は私の屢々散見する所であるが、バラツク建の飲食店が出來たとか、燒殘り品を投げ賣する店舗が開かれたかと云ような瑣末なる事件を捉へて、復興の機運到來したりとするが如きは、大なる誤謬であつて、復興と云ふからには、震災前と同一規模の店舗事務所が再建され、以前と同人數の從業者を使傭するように爲り、又斯る程度の店舗事務所を存立せしめるだけの商業上の繁昌があつて、始めて之を見るを得るのであつて、斯の如くであれば失業者の處置も亦自ら其全きを得るのである。

右の外東京市の內外に散在する男女學校、各種の團體、病院劇場娛樂機關等の諸事業に從事する者、例へば教師、醫師、俳優、藝人、花柳界の人々の如き盡く失業者であり、文筆に依つて衣食する者の如きも亦世間に文字を弄ぶ餘裕の生ずるに至らない限り、失業の苦痛を味はざるを得ない。諸官廳の仕事に從う者の如き、其仕事の性質に於て、最も確實であつて、如何なる場合に於ても經費に過大なる縮小の行はれない限り、失業の苦境に陷ることなかる可きものと想像されたのであるが、今回の如き大災害に會しては、斯の如く爲るを得ない。經費の節約は今後の財政を處理する上に於て、缺く可からざる要件であり而して其節約の行はれると共に、一方には官吏の罷免者續出して失業者の増加を促すことは勢の免かれ難き所に屬するのである。

斯の如く世間到る所に男女失業者が群つて居り、如何なる努力を費しても、就業の道を求め得ない、殊に交通機關の不便は東京市內に居る勞働者であつても、市の一隅に住居して居る場合に、他の一隅に赴いて、勞働することを困難ならしめる。バラツク小屋の內で、配給米を受けながら惰眠を貪る罹災民の居ることは、不都合と云へば不都合に相違ないが、然らば彼等をして如何なる職業に就かしめる見込みがあるかと云へば、何人も其望みなきを嘆ずるであらう。玆に於てか世間に種々の失業對策が講ぜられるやうであるが、其れを考へる前に、私は政府に向つて、苦情を申込みたいと思ふことが二つある。何れも今日に於ては證文の出し遲れであるが、將來の爲めに、一言を發したい。

政府の不用意、失業問題を紛更せしむ

第一、震災火難後に於て、事業主が目前の困難に惶惑し、又は將來の損失を豫想し、多數從業員の解傭を行うことは、當然の事相であると思はれた。然らば斯る解傭を行う事業主は果し

て如何なる地位に居るものであらうか、彼等の事業經營上に於て、困難を告げることは、論を俟たないが、日常の生活にまでは困難を生じない。彼等の多數は自家營業の外に、相當の財産を擁し、其利子收益に依つて、一時衣食の計を爲すを得るに相違ない。例へば三越吳服店の如き罹災と略ぼ同時に多數の從業員を解傭し、彼等をして路頭に迷うに至らしめたと云ふことである。即ち其本店が燒失し、高價なる商品亦烏有に歸したからには、營業の縮小亦已むを得ないであらうが、一方に三越の重役なり、株主なりは震火災の影響を蒙つて、其日の生活にも窮するような慘狀に陷つたかと云へば、決してさうではなく、略ぼ從來と異ならざる生活を送る。而して其之を送るを得る一原因は罹災前三越が法外なる利益を占めて居つた時代に、其過大なる分配に與つたことに存する。果して然らば今回の如き事變に際會して、成るべく損失を輕くする爲めに、平生から濫遇して居つた從業員を解傭する、斯くて損失塡補の爲めに、資本金の減少を行ふ場合に、其切下げの程度を少なくすると云ふが如きは、要するに震災に伴う損失を罷免、之に次ぐ失業と云ふ形に於て多く從業員に負擔せしめんとするものであつて、如何に資本主義の跋扈することの許された經濟組織でありと云ひながら弱者を虐げるの甚だしきものとしなければならぬ。私は一例として三越を擧げたが、斯る事は三越ばかりでなく、到る所の會社商店に於て行はれたのであつて、爲めに失業者の生ずることとを大ならしめたものゝ幾何であるか、測り知るを得ない。

故に當局者にして震災當時少しでも勞働問題に留意し、失業の盛に起ることを防止する考へがあつたならば、先づ緊急勅令を以つて、例へば幾十名以上の從業者を雇傭する事業主に向つて自由に從業者を解傭することを禁止し、之を解傭する場合には、政府の許可を要することゝするのが當然である。而して政府にして事業主の資力なり、近き將來に於ける事業の恢復力なりから推して、相當の數の勞働者を抱へて置く餘裕があると認めたならば、解傭の請求に對して、許可を與へたい、或は解傭を許可するとしても、或る期間内の賃銀に相當する手當金を交付することゝする。斯くて或る程度まで、失業の起ることを阻避し、又失業した場合に於ても、其生活に及ぼす困難を緩和するを得る譯である。金融其他の事件に對しては、緊急勅令を雨下した政府が失業問題の解決に就て、同樣の處置に出でなかつたのは、吾人の遺憾とする所であつて、畢竟當局者の勞働問題に對する理解が足らず、資本家擁護策や、金權政治を行つて、他に何ものゝ存することをも辨へざる結果である。我國政治家の眼孔斯の如く狹小なることに對して、私は之を遺憾とするの

念に堪へない。

第二に私の遺憾とする所は今回の如き大規模の失業の起つた際に、勞働組合の發達して居らず、隨つて組合の働きを通じて組合員の失業に依つて蒙る苦痛を緩和することを得ない一事であつて、其結果として今日に至るまで、多年に亘つて、勞働組合の發達を妨害した政府の勞働政策に非難を加へざるを得ない。若しも斯る場合に勞働組合が存在して居つたならば、其平生蓄積した其金の内から失業組合員に向つて、或る期間失業惠與金を支辨して、彼等の生活を安定させる、而して失業者の數が餘りに多くして、勞働組合の基金を蠶食すること甚だしく組合の存亡、測り知る可からざるが如き場合に、立ち至つたならば、國家は宜しく組合に補助金を與へて、失業惠與金の支拂に供される基金を充實する、斯くて國家と組合との協力、國家の助力に依る組合の活動に依つて、失業問題の解決に資するを得る道理であるのに、今日の我國に於ける如く、勞働組合として有力なるものがない、時に組合はあつても、其下に糾合されて居る勞働者の數の限られて居る場合には、組合を利用して、失業者を救濟しようとしても、到底其道を求めるを得ないのである。

諸種の失業者救濟策

然らば今日失業者救濟策として、如何なるものがあるか。策のない譯ではないが策其ものに一長一短あり、又相當の效果は期待されても、實行に困難であつたり、他に大に支障の伴つたりすることを遺憾とする。左に種々の策を列記して、觀察を試みよう。

第一、職業紹介所の擴張。

失業者の簇生した場合に、職業紹介所の活動することは當然であるが、今日の如く東京の大部分が焦土と爲り、如何なる方面を見渡しても、商工業の經營に一大頓挫を惹起した以上は、如何に職業紹介所が活動した所で、職業其ものを創造する力を持たない限り、失業者の目的を達するとは、不可能である。今日に於て職業紹介所の爲す可き所は各方面の情報を集めて、失業勞働者の或る者を個々需要ある方面に向けしめるに止まるが、斯くして救濟される失業者に至つては、固より其多きを期するを得ないのである。

第二、勞働者の地方移送。

東京市内に餘れる勞働者の一部を地方に送致して、失業問題を解決するといふことは、最も行はれ易き所であつて、職業紹介

樣の如き此點に就て、各地方の情報を蒐集し、幸に好景氣の地方があつたならば、其方面に向つて、勞働者を送遣する旅賃の如きは、職業紹介所に於て補助するも宜しいし、或は國有鐵道の汽車賃の如きは全然之を免除し、保護汽船會社の運賃の如きも、亦之を輕減せしめることを得るであらう。

然しながら實際問題として、今日我國の地方の如何なる方面に於て、新に勞働者を需要する程、好景氣を告げて居るであらうか。從來不景氣に惱まされた諸地方は今回の東京震災に依つて、或は東京から發される註文を失つたとか、或は東京に持つ商品の賣掛代金が徵收されないとか云ふ事情の下に不景氣の上塗りをして居る有樣であつては、失業者の內地移住の如きは云ふ可くして、行はれ難き所に屬する。或は今後復興計畫が實行の緒に就き、多量の鐵材なり、木材なりを需要する日に到達したならば、斯る物資の產出される地方に於て、勞働者の就業を必要とし、失業勞働者の移送を見るに至るかも知れないが、其時期が何時に到來するかは豫想の限りでなく、斯る漠然たる事を失業者救濟策として、數ふるに堪へない。

第三、海外移住を獎勵すること。

海外移住を國家保護の下に行ふことも亦失業者救濟策として相當の價値があり、現に英國の如き先年不景氣の爲めに失業者の國內に劇增した際、其或るものを加奈陀に送遣した例がある。然し日本の現在に於て、此方策を行實する餘地が何處にあるであらうか。北米合衆國が今回の震災に對して、意想外の同情を我國に寄せて居ることに乘じて、我國失業者の一部分を合衆國に收容することの諒解を求めようとする說もあるが、震災に對する同情と移民政策に於ける讓歩とは全然別物であつて、兩者を混淆するが如きは、許す可からざる所に屬する。伯剌爾ならば、或は移住民を容れる餘地があるかとも思はれるが、多年都會生活に慣れた東京市民が果して伯剌爾の山奥に赴いて、農耕に從事し、之に堪へ、又相當の成效を收め得るかは、大なる疑問に屬する。

第四、失業者に對する手當の給與。

愈々失業問題の解決が容易でなく、之を未解決の儘に放置したならば、社會の治安を害すると云ふ狀態まで、推し詰めて來た場合には勞働權承認と同じ所に行つて、失業者には其生活を維持するに必要なる所得を國家に於て給與すると云ふことも、亦已むを得ざる施設と爲るかも知れない。然しながら此制度を實行する場合に、何人が眞實就業を欲しながら、其機會を與へられない所謂善意の失業者であり、又何人が其懶惰性の爲めに、仕事に就かうとしない惡意の失業者であるか、之を區別するこ

とに大なる困難を生ずるのみならず、一歩を誤まれば、國財を濫費して、天下に遊民を助成する譏を免かれない。

若しも右の如き失業者に對する給與制度が我國に於て採用されるとして、職業紹介制度が完備して居り、又其運用に一點の申分もないものであれば、給與制度は餘程確實に實行される望みがある。即ち失業者をして總て紹介所に就職方を申込ませる、紹介所の周旋した職業に就くことを拒絶した者は之を惡意の失業者と認めるが、紹介所の方で就業を周旋する力及ばずして、申込の後に於て、依然失業の儘に居る者は之を善意の失業者として、給與を與へることゝするのであるが、東京市の紹介所が果して斯る任を果す地位に居るかと云ふ問題に爲ると、私は其然ることを信じない。

第五、國立勞働場の制度。

玆に於てか國立勞働場を設け、失業者を總て此所に收容して其以前從事した職業の種類に依つて、其れ〳〵の仕事に就かせ仕事の見出されない者には國家に於て生活費を給與すると云ふ說もあるが、十萬に近き失業者の職業は種々雜多であり、彼等をして其固有の生業に從事せしめるには、國家自ら資本を投じて、設備を行はなければならず、其内には機械の設置を要するものもあり、又産出された物資の處分に就にても、幾多の困難の伴ふ道理であつて、隨つて此制度の如き遂に火事場騷ぎに終じて行はれ可きものでない。

第六、共同販賣店の設置。

失業者は勞働者ばかりではない、小賣商店の主人、其從業者の如きも、失業者の班に居る者である。彼等は店舗を燒かれ、住所を失ひ、纔に燒け殘りの商品を大道に並べて、緣日商人にも劣つた商賣を營んで居る。若しも彼等にして斯る燒け殘り品を賣却し盡した場合に、此以外に賣る可き何ものをも持たないかと云へば 必ずしもさうでなく、地方に於ける荷主との間に多年を通じて結ばれた關係に依り、荷物は送り出されるかも知れない、此場合に商人が何時までも大道で商ひをして居つたのでは、到底地方荷主の安心を得る譯に行かないから、公共團體に於て、此際共同販賣店の如きものを設立して、彼等の使用する所に任せたならば、如何なるものであらうか。小賣商人の復活に資するは勿論、進んで地方の生産業に刺戟を與へることゝ爲るであらう。

第七、勞働時間の短縮。

最後に私が失業者救濟策として、提唱したいと思ふのは、勞働時間の短縮である。東京市の勞働者が失業に依つて、苦しむと云ふのは、天災の然らしめる故であつて、同情す可き所であ

る。而して誰れが彼等に同情を表するのが當然であるかと云へば、同一職業に從事する勞働者でなければならない。然らば今全國なり、又は重なる工業地なりの工場に於ける勞働時間を八時間に短縮し、一方に以前と同一の生産を行はしめる爲めに、多數の勞働者を需要せしめる、勞働者は時間短縮の爲めに所得を減ずるが、一方に從來の仕事を多數の勞働者に頒つ結果、世間に失業者なからしめるを得る道理である。果して我國の勞働者が協同の精神を此處まで發揮するか、政府が八時間勞働制採用の勇斷に出づるを得るかは共に疑問であるが、失業者救濟策として、一考の價値あるものと考へる。唯生産の增殖、異常の勤勉の必要とされて居る今日、勞働時間を短縮して、失業者を救濟することは、餘りに失業救濟の一事に偏倚して、他を顧みざる嫌なきを得ないのである。

事業主に對する國家の干渉

以上述べ來つた所と全然異なつた方面に於て、失業救濟策が求められる。私は嚢に震災直後政府が事業主に向つて、使用人の解雇を禁止すれば宜しかつたと云ふことを述べた。此趣意を今日に紹述して、例へば

九月一日雇傭せられて居つた使用人であつて、其後自己の過失に基かずして、解雇された者は事業主に向つて、六個月分の給料賃銀を請求するを得、政府は特別の事情に依り、事業主に右支拂の義務を免除するを得

と云ふ規定を設けたならば、失業者は職業を失つた後に於ても或る期間所得を收めて、生活に窮せざるを得る一方に、事業主は解雇した後、尚ほ賃銀給料を支拂はなければならないと爲れば、解雇を敢てせず、依然之を雇傭して、一日も早く事業を復興することに努力するに至るであらう。

此外失業者をして燒跡地の整理に從はしめようとか、罹災した官公署の帳簿書類の整理に當らしめようとか云ふ說もある。固より其失業者救濟策たるを失はないことは、私の申すまでもない所であるが、失業者中機械職工の如き、多年の修練に依つて、熟練を收め得た者を粗雜なる力役に從事せしめ、熟練職工としての特長を失はしめるが如きは、將來に於ける工業の爲めに、吾人の忍び能はざる所である。又此點に就て忍ぶとしても失業救濟策としては、一時的効果を有するに過ぎない。官公署の臨時事務に從はしめることも亦一部の失業者を救濟するだけであつて、之に依つて大なる効果は見られない。

婦人の失業者に對しても、今の處適切なる救濟策を見出すを得ない、婦人失業者を救濟しようとして、却つて男子失業者を

苦しめるようなことに爲つては、俗に云ふ虻蜂取らずの恐れを生ずる。今後官公私の事業の復舊するに隨ひ、第一に必要を以つて目されるのは、費用の節約に外ならないから、報酬の低廉と云ふことが一ツの資格と爲つて、存外婦人職業の開拓される時代が來るかも知れないが、斯の如きは決して今日の急場に間に合うものではない。今日の婦人としては裁縫其他の内職に依つて、生計を繋ぐの外に道はないのであつて、其極或は社會の風教を紊す事實のなきことを期し難い。資力ある風教團體の活動を要する時であらう。

失業救濟の根本問題

右の如き考を推し進めて行くと、當面の失業問題を解決するに就て、適當の對策とす可きものは、殆ど見當らないことゝ爲る。是れは今度の失業が周期的に起つたものでなく、又一局一部の事業だけに襲ひ來つたものでなく、殆ど東京全體の經濟組織の破壞された結果として生じたものである一事に歸着する。强いて失業者救濟策を求めれば、破壞された東京市の復興を急速に實行し、復興事業に關聯して、市民に職業を與へると共に、復興された後の東京市に於ける職業を豐富ならしめる處置こそ、最も適切なる對策と云はれるであらう。東京市を復興するに當つて、一ツ重大なる問題が吾人の眼前に横はる、今日の東京は九月一日以前の東京と比較すれば、富の高に於て、資本の金額に於て、資本運用の効果に於て、市民の獲得する所得に於て、著しき減損を生じたことは、爭ふ可からざる事實である。一方に東京市の人口も震災當時の横死に依り、又市民の一部の地方に赴いたことに依り、震災以前に比較して、相當の減少を來して居るに相違あるまいが、尙ほ富や所得の減少こそ人口の減少に比較して、遙に大であると考へられる。既に人口の減少した割合以上に、富や所得に減少を來たしたとしたならば、從來と同數の市民を從來と同樣の生活程度に於て、維持することは今日の東京市の實力に於て、困難と爲るのであつて、此點から云へば、東京市の人口は富力の減損と均衡を保つ所まで減少せしめなければならない。一旦他鄕に脫出した市民の歸還を禁止し、又新に他國から東京市に入り來ることを禁止し、更に一步を進めては九月一日以來東京に來つて、今日まで滯京して居る者に退去を命ずるが如き、人口減少の方策であるに相違ない、又今日の儘失業者が如何に增加しても、國家や、公共團體に於て之を放任して置いたならば、結局富力と調和を保つまでに市民の減少を見るかも知れない。然しながら斯る方針は今回の復興を機會として、大東京を建設しようとする趣意に反す

る。蓋し大なる都會として東京市の再建を見ようとするには、市民の饒多を要することは勿論であつて、饒多なる市民の內から、種々の特長を有する人物が輩出したり、指導能力ある者の指揮に依つて、機械や、道具の代りに、簡單なる力役に就く勞働者の如きが多數住居して、始めて大都會の外形を形ち造るものと考へられる。然るに今日に於ける東京市の富力を以てしては、多數の人口が給養されない、一部の市民も永く失業の苦惱に虐げられることに堪へずして、他の地方に逸出する、斯くて大都會の成立條件に遠ざかるに至るとしたならば、宜しく積極的手段に依つて、東京市の富力を增加し、斯く增殖された富力を基礎として、復興事業の速成を謀ることを急務とする。此事さへ成就したならば、失業問題の如き卽座に解決されるのであつて、此以外に有效なる解決法は之を求めるを得ないであらう。

東京市繁榮策

然らば東京市の富力を增進するには、如何なる方法を以つてす可きであらうか。其方法として吾人の考へに上るものは三ツある。第一は市民の貯蓄を增進する一事であつて、彼等が浪費を節する一方に、生産に勉めたならば、必ず勞働に對する需要の增加を見るのは勿論であるが、此事たる今日の如き大なる破壞を蒙つた東京市民に向つて、其盛に行はれるを望み得られないことを遺憾とする。

然らば第二に東京市復興事業に要する財源として、公債を募集する場合に、專ら東京市以外の地方に應募を求め、斯くて吸收した資金を專ら東京市に於て撒布すると云ふことが考へられる。然しながら從來公債の發行される場合に、其發行高の六割內外に相當する金額が常に東京に於て應募された事實を考へ、又目下東京市に於ける災厄の打擊が遠く全國に及んで、大阪其他の大都會が甚しく不景氣の勢を深くするに至つたことを念頭に置いたならば、內國債の應募を東京以外の地方に求めて、以つて東京市を富まさうとする計畫の甚だ困難であることを知るを得るであらう。唯其行ひ得られるまで、之を行つて滿足す可きである。

玆に於てか第三の方策として、外國債の募集が主張される。固より發行の初年から利子を支拂ひ、据置年限の經過後、元金を支拂ふことを考へたならば、外國債の發行に關聯して、負擔の伴つて生ずることは免かれ難き所であるが、其負擔は租稅の形で、國民の全體に歸する一方に、外國債の收入は全部東京市の復興事業に使用されるとすれば、是れ位東京市の富力を增進するに資するものはない。唯之に對して地方民の間に、不平反

對の生ずることなきや否やの問題に接するのみであるが、斷る方法にして用ひられたならば失業問題の如き、立ち所に解決されるのである。

唯此問題に關聯して、一考を要することは、外國債の募集と共に、其條件として、應募國から種々の原料品其他の物資を購入することを强要されたり、或は斯る條件を付せられないまでも、自然外國に決濟資金の出來た結果として、外國物資の輸入され易く爲つた場合に、其內國の失業問題に如何なる影響を及ぼすやの一事である。失業問題の解決に向つて、出來るだけの方策を立ようとするからには、我國は國產獎勵主義を以つてし、如何なる事業であつても、其內地に起し得られる見込みのあるものは、總て之を起し、成る可く多數の勞働者に向つて、職業を付與する道を取らなければならない。随つて外國から優良廉價なる物資が輸入され來つて、內國工業殊に震災火難の打擊から漸く免かれて、新に興らうとする工業に競爭を加へることは、大なる禁物である。然も外國債の募集に次いで、其收入の外國物資購入代金に振替へられることに依つて、外國の物資が自由に輸入されるに至つたならば、以上の要求は徹底するを得ず、失業問題に不利なる影響を及ぼさゞるを得ない。外國債は募集するが、其收入に依つて外國物資の輸入の盛に行はれることは之を防ぎたいと云ふ此矛盾を解決しなければならないである。

之を要するに今日の失業問題は平生のものと比較して、全然其趣きを異にする。其解決の困難なる所以も亦平生の問題に比較して、趣きの異なる所に存するものと認められるが、然も其特に困難なる原因は本來我國勞働者社會の無組織であり、今日の如き場合に際會して、勞働者間の組織を通じて、之を如何ともするを得ない一事の與つて力あることは、私の何處までも明にしようとする所である。此點にして明なる以上は、現在並に近き將來に亘つて、我國勞働界の混亂し、疲憊するに當つて、其責任を負ふ可き者の何人であるかも自ら理解されるであらう。我國勞働者社會の敵は私の指名するまでもなく、讀者の判斷するに苦まない所であると思はれる。

生産主義の公價及び私價

杉森孝次郎

一、生産主義の公價

公價の別呼は社會價だ。價とは、有用、必要、欲望または意思の滿足、目的や理想の達成等を意味する性質だ。もしも、一人または一團體の行動が、その行動者としてのその一人またはその一團體自身にとつてのみ、いま定義したかたちに於いての價を有するものである場合には、その行動をば、殘餘の人または團體の對外批評的見地からして、私價をば有するが、公價をば有しない行動だと判斷する。勿論、その行動者と、他者との間に、すくなくともその行動以外の關係に屬する範圍に於いて、ある一方的または双方的協力關係、すなはち社會が形成されてゐることが、この判斷を妥當にするための一要件だ。

例へば竊盜には公價はない。なぜかといふに、竊盜といふ行動は、もしくは一層精確には行爲は、その竊盜者自身にとつては、かれが、アゝ、竊盜するんではなかつたと、眞實に後悔しないあひだ、すなはち、竊盜することがおもしろい、有用だ、必要だと意識し、あるひは、あとから廻顧して考へなほして見てもたしかにさうだつた、實に、あの時の事情としては、ああするほかなかつた、ああすることが、あの際に於ける自己の最善行爲であつたのだ、後悔する餘地などはない、と意識しうる限りに於いては、無論無價ではないが、その有價は、私價としての有價だ。かれの社會に於ける多く乃至すべての人々の立ち場から、かれらの身の上に立脚して考察すれば、その行爲は、消極的に有價であつただけだ。すなはち、それは、竊盜された當人に代表される殘餘の全社會から考へれば、迷惑、損害、意思や目的の破壞や邪魔を意味するだけの行爲であつたのだ。それは、私價のみあつて公價なき行爲であつたのだ。

公價なくして私價のみある行爲の本質と原則はなにか。それは、消費主義と所有主義だ。所有自身が一種の、またある程度の消費にほかならないがゆゑに、それは、單純に消費主義だと

約敍され、最も精確にいひあらはされる。消費主義、すなはち主義としての消費、これこそが、またこれのみが、世に私價のみあつて、公價なきすべての行爲の總原則であるのだ。主義とは、勿論、行爲または意識に於ける、そして、それ自身が能動的、肯定的に採用し、使用するかたちに於いて所有する支配、目的、または統導觀念のことだ。

莊子が「小人は身をもつて利に殉ず、士は身をもつて名に殉ず、大夫は身をもつて家に殉ず、聖人は身をもつて天下に殉ず」といつたのは、公價すなはち社會價に、いはば一隻眼を持つた人の言であつた。なぜかといふに、いふところの天下は、今日のことばに、適切にいひかへるならば、社會だ。大衆だ。全人類だ。それほどにも、公價に對する人類の認識と評價の歴史は古るい。けれども、宇宙それ自身が、全體として、最も古るい、同時に最も新らしいものであるが如くに、公價に對する認識と評價も、古るいが未完成だ。その未完成を、多少たりとも完成に近づける責任を、現代人は、現代人相當に自認せねばならん。

プロリテリア主義の擡頭といふ事實が現にある。あるひは、社會主義は最近代の傾向だといはれもし、また、そのことばの意味次第では、たしかにさう見られる。これらと關聯して、あるひは、異稱同體に近い表現として、勞働運動の進汐がみとめられる。けれども、これらの現實と勢運とは、それが、一種の基礎的、したがつて不可抗的自然力にも比すべき現勢と將來とを知覺させ、豫期させる限りに於いて、それの顯在的または潜在的意識のかたちに於いて、そして、多くの、むしろ代表的な場合としては、個々人の意識であるよりも深く、強く、全社會の共通意識として、私價に對する公價の主張をそれのいのちとし、發展因として持つてゐる。社會主義はほろびやうとも、プロリテリア主義や勞働運動はいつか止熄しやうとも、公價主義の敗滅と滿期は、あるべきでないがゆゑに、人間が理想主義を廢用にしえないあひだは、根本的にはありえない。もしまた、社會主義やプロリテリア主義や勞働運動のすべてもしくはあるものが、公價主義の一時的、一部的適用にすぎないものではなくて、公價主義そのものの全備であるといふ事實があるならば、その社會主義やプロリテリア主義や勞働運動は、公價主義と共に永生であるべきにきまつてゐる。

人として、なに人も、一日も缺くわけに行かぬものがあるか、あるならばそれはなにかと考へて見れば、それは、先づ、身體の消費だ。身體の消費的必要を滿足させる方法だ。その機會だ。その機會を可能にする物だ。物質または物體だ。くわし

くは物品だ。富みだ。食物が、それの代表的一位置にある。食はずには働らけないが、そも〳〵、生きずには働らけない。しかるに、食はずには生きられないといふ簡明なる法則がそこには支配する。働らくことを欲せず、なまけて遊樂し、興逸することのみを欲する人にしても、食ふだけの勞をば省くわけに行かん。實に、どんななまけものでも、生きるだけの勞をば絕對的には忌避しえない關係に、かれが死を選ばない限りは、しばられてゐる。

生きるといふことは、人の場合に於いては、かくして、先づ多少必らず消費するといふことだ。すくなくとも物資及び物品を消費するといふことだ。

人の消費的必要を滿たす物資や物品が、人間の勞力を方法とせずにえられた時代と社會とは、絕對的意義に於いては一度も存在しなかつたが、常識的な、切實な意義に於いても、それはすでに遠いむかしの史實となつた。消費物といふ消費物は、現代に於いては、殆んど全部、人間の多少の勞力をまつて始めて消費者の手に入る。すなはち、現代人にとつての消費物は、殆んどことごとく富みだ。われらは、いまや、天水を飲用せず、すくなくとも井戸水を、あるひは水道設備による給水を飲用するといふ一事實が、その一例證だ。學者や創作者にしても、螢の光りや雪のあかりを消費する場合は絕無となつた。

然るに、一見して不思議にも、再察して尤も至極にも、さらに三考して不義理、不人情、すなはち不道德、不合理、自分勝手至極にも、世のなかの制度と慣習と常識道德とは、そして專門學說や哲學、宗教までもが、一般人の消費物を生產し、分配する勞力をいやしみ、したがつてその勞力を職業とする人々を古來いやしんだ。その生產者としての百姓や職人が、またその分配者としての商人や町人が、武士や大名や公卿や學者や僧侶との對比に於いて、社會的に、低劣な、從屬的むしろ隷役的位置を與へられたことは、たま〳〵それの一現象だ。あたまのいい、心立ての素直ほなプレトーやアリストートルあたりでも、環境と歷史の權威には氣おされたと見えて、この點に於いては多大の如才を示した。西洋のいはゆる紳士淑女が、有閑階級の別稱であり、貴族が、有閑にして且つ贅澤な階級の異名であることは、生產主義が、社會的に、價値に於いて消費主義の下位に立ちすくんだことを意味する。

產業革命と共に、生產の量が激增し、生產者の數がむしろ社會の大多數者となるに及んで、しかも、その大多數者の間に、相識、協力、團結の機會が、工場、鑛山、鐵道、河海、及び近時は田野の開設によつて、殆んど無限大に提供され、從來は雌

力なき正義であつたものが、俄然として、權力ある正義に移つて來た。生産主義を本質價とする多少不純にして偏狭なる意識と標幟とのもとに、いはゆるプロリテリア運動は、曠古の社會革命をいまにも成し遂げんずる勢ひとまで延び擴がつて來た。現代が、その延び擴がりの午前の二時頃か。

早い話が、勞働者の方では、組合を發達させることによつて、いままでは反對階級が獨占的に代表してゐる資本をも、經營をも、また科學や技術をばいふまでもなく、自分たちの手一とつに引き受けて見せる意思と確信を持つてゐる。すなはち、社會的消費物の一切を、それのすべての方法を含めて、一と手に生産して見せる成算と欲望を持つてゐる。しかるに、いはゆる資本家の方では、いま述べた諸方法をば、勞働者をまたずに盡して見せる意思をば持つてゐるが、いはゆる勞働といふ一方法だけには、とても氣が進まない。依然として古來の心理によつてこれを忌避する。すなはち、この點に於いて、現代のいはゆる資本家には、生産自治の資格が絶望的に缺けてゐる。なぜかといふに、いはゆる勞働といふ一方法を缺いては、どんなに、他の諸方法が完備しても、道路一とすぢ、汽車一臺たりともが、出來やうもなければ、出來た道路や汽車が用をなしやうもない。現代に於ける眞正プロリテリア主義と眞正ブルジワ主義との對戰は、生産自治主義者と生産無自治主義者との對戰にほかならないがゆゑに、いはゆるブルジワ階級の經驗が進むにしたがひ、またいはゆるプロリテリアの自覺と知識が發達するにしたがつて、その對戰は、生産自治主義者の勝ちに決し行くにきまつてゐる。

社會價を有ない行爲が、社會に於ける生存上、存榮上の適者でないわけは、ひまをかけて考へて見るまでもない簡明な論理だ。しかるに、善意義のプロリテリア主義は社會價本位主義であり、惡意義のブルジワは私已價本位主義だ。多少久しい將來に於ける、その勝敗のほどは知れてゐる。すくなくとも、氣力と聰明が進歩をゆるす程度に持たれてゐる社會に於いてはだ。

生産第一か、消費第一か、社會價すなはち公益といふ見地から考へれば、あたまをひねる餘地は毫頭ない。ひるがへつて、生産主義及び消費主義のそれぞれが有する私價、私已價、個人的價値はどんなものであるか。

二、生産主義の私價

一人が、最も十分に、完全にその一人でありうるために必要な方法はなにか。したがつて、すべての人々が、最も十分に、

完全にそのすべての人々でありうるために必要な方法はなにか。それは生産だ。生産態に於いて、生産者としてのありかたに於いて、人は、だれでも、かれの力の及ぶ範圍に於いて最も滿足が出來る程度にかれ自身でありうるやうに生み落され、環境づけられてゐる。その證據はありあまる。

　試みに筆を取つて一字を書き、あるひは唇を開いて一語を放つても、そこに、爭はれないその人自身の本質と個性とが、かなりあざやかにあらはれる。一文を草し、一演説をなし、一議論をたたかはし、一事業を畫策し、遂行するにあたつては、さらに顯著に、濃厚に、その人自身がにじみでる。生産はおよそかくの如し。柿を食ひ、芝居を見、音樂を聽く一人と他人とを見て、その人たちのそれぞれの個性的本質がわかるかといふに、それは、決してわからないといつていい程度にも微薄な程度に於いてわかるだけだ。さればこそ、一寄宿舍、一下宿屋に同樣に起臥し、飲食する人々を見ても、揃ひの服を着けた兵營内の兵卒や志願兵などを見ても、それで、それだけで、かれらのおのおのの人生觀がどう、社會組織觀がどう、乃至、氣質がどう、現在の氣分がどう、品性と智能と才藝と趣味と各種問題に對する見解や意見や主張がどうのといふことは、先づすこしもわからないといつて適當だ。人の消費生活だけを見て、かれのなにたるかを知りえない例はこれらにさへもある。

　はたから見てわからないそれらの個性や本質は、それらの個性や本質の持ちぬしたる人々自身によつても、實は、かれらが消費態を主として取つてゐる限りは、決してよく理解されない。人が、消費生活を代表的に營んでゐるあひだは、その人の内容と實質は、その人自身にも餘にわからない。太閤記十段目の演技に恍惚としてうつつを拔かし、專らそれに見とれ、聽きとれてゐる瞬間に於ける場合の千萬人は、意義に於いては、その演技といふ一實在に附きそふ影よりもなほあはい存在を辛うじて自身に保留するにすぎない。その千萬人の觀聽者は、その一人なり數人なりの演技に、また、その演技に代表されるその一人者、その數人者自身に、ただその瞬間内に於いてではあるけれども、そして潜在人格のかたちに於いてはその千萬人は依然たる千萬別人として大體に存在してゐるけれども、作用的、顯在的には、そして意識的、觀念的、感情的、想像的には、その演技自身、演技者自身に完全に同化してしまふ。庭前の柏樹子の公案に熱中したなにがしが、ゐた筈の座敷にただ一本の柏樹として見つかつたといふ話に似たかたちに、それは、性質に於いて成り切る。

　名人の傑作や、技神に入つたといふやうな藝は、口さきや指

さきの仕事ではなく、かれらの全人格のさながらの流露だとよくいはれる。生産者の方からいへば、まさしくその通ほりである。べきだ。それが定だ。公則だ。原理だ。藝術觀照のこころのありかたは沒我だととなへられる。大詩人、大哲學者は、先づ大客觀の人であり、それに加へて大主觀の人だとも說かれる。その沒我といひ、大容觀ととなへられる部分だけは、消費態だ。對象と材料と內容とを先づ持たないでは、批判も創造も反省もできないにきまつてゐるから、消費態が生產態にさきだつことはあたりまへだ。ただ、その消費態だけでは、われをまたずしてすでに存在する對象的、材料的、內容的存在が、キャメラにうつし取られた寫同樣に、觀念的に再生し、複製され、模作され、重現したといふだけの出來事であつて、その存在は、いささかの增減をも、變化をもうけない。その存在に、人のおのづからなる批判、創造、反省が加はつて、ここに始めて、人間世界、すなはち文化の世界に於ける詩なり、文なり、學說なり、繪畫なり、建築なり、また立法なり、行政なり、工藝なり、技術なり、商賣なりが新たに、未曾有のかたちに於いてそれの存在を生んでくる。

郭公のめすは、他の種類の鳥の巢に自分の卵を產み落とし、それとは知らずに他の鳥がこれを孵化するといふ。孵化されることは、その卵からいへば消費だ。溫熱の消費だ。その消費現象を見ただけでは、その卵がいかなる種類の鳥の卵であるか、人にさへも必らずしも見わけはつくまい。けれども、その卵が羽翼を生產し、頭尾を生產し來たるを見ては、なに人か、その卵が最初から持つてゐた筈の個性なり本質なりを知るに苦しまうや。

しかるに、およそ、成長力あるものにとつては、それが、十分にそのもの自身であることは、それが、十分に成長することだ。茶や大根の種にとつては、かれらが十分にかれら自身であることは、かれらが根、莖、葉を、十分に生產することだ。生產することによつて、成長力ある、すなはち生產力ある萬物は、それが有心物なれば自己を發見し、それが無心物であつても、有心物に逢へば、自己を認識される。生產しないでは、成長力あるものの本質も個性もわかりやうがない。この論理は、ある條件を假定すれば無生物にさへもあてはまる。かたなの切れあぢ、矢の飛びかた、すりこぎのすり具合、銳錐やペンの墨つき、紙あたり加減、いづれも、有用物は、その物の作用、はたらきを現實に驗察して始めてその物の眞質と眞價とが定まる。評決され、判斷される。人としては、成長力殊に多分に生みつけられた人類としては、人格的個性または個體としては、されば、

あらゆる意味に於いて不精にてはあるべからず。不精では、自分が自分に成れず、自分が自他にわからないといふ本質的損失もそこにはあるのだ。單なる消費主義、また單なる所有主義の別名としてのブルジヮは、あるひは、その意味に於いての資本主義は、人の道にそむいてゐるといふ道理は、これによつても論證される。

藝術は表現だと近古のある藝術家もいふた。藝術は創造だとはすでにいふりたる、しかしながらいまなほ眞なるがゆゑに新なる一定說だ。眞の意味の藝術は、勿論、詩歌管絃、舞踊、彫塑、建築の類には限られない。產業も、政治も、科學も、教育も、それが藝術でないならば、それはまだ產業でも、政治でも、科學でも、教育でもない。けれども、この眞の意味の藝術は、表現もしくは創造を、それの一本質的要件とする。表現は、內に存する生命がそとに自然に伸びいづるかたちであり、創造は、そとに存しない實在が、內の生命の伸暢、開發、成果、結實として始めてそれの存在をえるかたちだ。藝術の他の一要件は、無論、自己目的にある。この自己目的質も、生產態に於いて、生產時の人の經驗として、內的または全的經驗として、人としては、すべての物としてさうであるが如くに、最も完全にこれを現實にしうるのだ。自己實現の悅びは、正しき意味に於いての法悅、眞歡、大喜、聖樂の內容そのものだ。

百人が數ケ月間勤勞すれば、そして、その勤勞が平野に於ける文明人のかたちに於いてなされれば、一萬人が一ケ年間食ひ足りるだけの小麥が收獲されるといふ事實譚はすでに耳新らしくない。生產の結果はおよそかくの如し。生產主義は、人の場合に於いては、必然的に社會價を持つ。そこに分勞の原則さへ聰明に保存されれば、そして、また、そこに、發明の可能さへ充適に使用されれば、人は、總決算して、自分が消費しうる額をはるかに超越した生產に必らず機會を與へる。建てる人は農、商、學の人々の家をも建て、耕やす人、商なふ人、學び考へる人は、それぞれに、他の人のためにも耕やし、商なひ、學び考へる。生業といふことばを、この關係から考へれば、それは、みづから生きるわざであると同時に多少必らず他を生かすわざだ。また正業といふことばの正に十分の意味を與へる日になれば、社會價ある仕事が正業の唯一の釋義でなくてはならん。けれども、今後の用語としては、正業といひ、生業といふばかりでなしに、むしろ主として善業といふやうでなくては、進步的でない。單に自分が生きるだけの生や、また單に他人に迷惑をかけないだけの正は、現代に於いては事實不可能だ。善といへば、それは同じ方向にむかつてどれほどか遠進的だ。善業は、

他人の死を生に、他人の不滿足を滿足に客觀的に移す意義を、自己のそれらをさうすると同時に、一層無理すくなく、自然的に帶びる。

所有主義は一種の消費主義だ。所有自身をよろこぶ心理がすでにそれであるが、單に所有されてゐるあひだに、その所有物が朽ち行くかたちに於いても、それはそれであるのだ。

野を見れば、葡萄も林檎もなりすぎて、取る手なければ幹枝ともにたふれんとしてゐる。田を見れば、稻は穗の重もたさになやんでゐる。海を想へば、そこでも、鹹水も腐魚を防ぎきれない。去つて人の世をうかがへば、みな人ともに、なけなしの智嚢や學養をしぼり傾むけて、逃げる他人をまで追ひかけて說教するに忙がしい。なにゆゑぞ、その人のみは、生產せずに分配し、供給せんとあせり、また、生產を目的としての消費をも怠たつてゐる。人が自己を發見する唯だ一とつの方法は生產であり、人が社會を認識する唯だ一とつの方法は消費の來歷しらべであるのに、今人なほ、消費に自己を見いだし、生產をば專ら社會に見いださうと思ひ、もがき、鬪かふ。

そもそも、消費生活に於いては、消費されるものの本質と個性が理解され、實現され、生產生活に於いてのみ、われ人の個性なり、本質なりは、始めて日なたへでるのであるのに、今人の科學的、哲學的努力をもつてして、これほどの平明理に對してさへ、なんといふ無能を示しつつあるぞや。

地盤研究が第一の急務

法學博士　渡　邊　鐵　藏

學理と實際とが最も適切に合致する例は地震と地盤との關係程著るしいものはない。地盤の好い處は震動が少く、從つて地震に依る損害が少く、地盤の弱い處は地震の損害の甚しいことは啻に學者が之れを唱へるばかりでなく、世人一般に信じて居た所である。併し地震がどれ程恐ろしいものであるかといふことは、元祿や、安政の江戸の大地震や、サンフランシスコやメ

ツシナの大地震の話を聞いた丈けでは他人の怪俄のやうで、さぞ痛いだらうと同情する丈けで自分の身には應へない。どんな恐ろしい事でも夫れに出逢つて初めて眞の恐ろしさが分る。地震の恐ろしさも今回の大地震に會つた人にして切めて分るのである。如何に新聞紙上に盛に書き立てられ、又遭難者から直接に實話を聞いても、罹災地以外の人々は、地震の恐ろしさや、之れに伴ふ大火災の恐ろしさを眞に悟つては居ない。先日私は地震學の今村博士と共に、地震に關する講演のため大阪に行つたが、矢張此感を深くした。地震の恐ろしさが身に泌まぬ程では地震と地盤の關係などは勿論痛切に之れを感ずる者は少からう。目前に未曾有の大地震に會つた者としては、此機會に全國民に對して、又我々の子孫のために參考となるべき種々の感想や對策を傳へて置くことは、大きな義務であらうと考へる。今回の地震の一般的損害の大きさや、其善後策、殊に破壊された都市の復興の方針、及び國民の心がけ等に就いては、本誌前號に一通り述べた積りであるから、今回は地震の威力に對して最も直接的な、永久的な關係に在る地盤に就いて、特に少し述べて見たいと思ふ。

　地震の震度の强弱は、其場所の地質、周圍の地形等に依つて定まり、殊に前者が最も重大な關係を有するのであるが、譬へば東京に於ては洪積層の地質からなる山ノ手方面は震度が最も弱く、之れに反して冲積層よりなる下町方面に於ては、震度が二倍乃至三倍になるのである。且つ冲積層と云つても、流水が天然に沈積せしめた土地と、人工を以て埋め立てた土地とで其間に大に震度の差があり、後者は最も甚しい震動を感ずるのである。今回の東京市の災害の現狀に見ても、山手方面の地盤の好い處は損害甚だ少く、多くは僅かに屋根瓦が破損し、壁に龜裂を生じ、石塀、煉瓦塀、石燈籠か倒れた位のものであつて、下町、殊に本所、深川、淺草方面の損害と比較すれば全く別天地の觀がある。外部から東京市に入り來つた者が、燒け跡を巡視すれば、大火災の災害の大きかつたことを知り得るであらうが、地震の强さは之れを知る材料が少く、丸の内に殘存した耐震、耐火の最新式建物の被害の狀況を見て、地震のかなり大きかつた事を知るくらいで、更に山手方面を巡廻すれば、何處に大きな地震があつたのであるかと疑ふ樣であらう。山手方面は神に救はれたのでなく、地盤に救はれたのである。

　地震の際私は相州葉山に居たが、突然の激動に何を考へる暇もなく、只何者かに命令された如く、隣室に飛び込んで、二人の小供を引摑み、同時に共庭へ出ろと叫びながら飛び出した。庭で家の震動する樣を見て居ると今にも家が倒れさうであつた

が、幸にして倒潰もせず、大破に止まつたが、餘震甚しく到底家内に立ち入る勇氣もなく、下の庭に二日間野宿した。家の者が海の水がなくなつたといふので、驚いて後の小高い岡に驅け上つて見ると、其時は餘程舊に復したのであるが、それでも平素は潮の滿ち充ちて居る邊りに岩石が一面露起して居た。そして海面は宛ら湧き立つ如く、颶風のやうな波が寄せては返し、海水は到る處褐色を呈して居た。此物凄い有樣を見て、如何にも此海が震源地であるやうな氣がして、之れが此世界の終りではないかと感じた程の凄愴な有樣であつた。數日間は激烈な餘震に安き心もなかつたが第三日町筋へ出かけて見ると私の住む邊は鐙摺といふ部落であるが、意外にも其邊一帶に被害は甚だ少く、殊に其隣の湊といふ部落の如きは瓦一枚動かず、全然損害がないと云つてよい程であるが、進んで葉山の郵便局の邊に到ると全く一變して、倒潰家屋多く、更に少し進めば森戸橋に到るまで兩側一戸を殘して全部倒潰して居る。又踵を返して逗子の町に入つて見ると、田越橋より停車場に到る間、即ち逗子の重要な町筋は、僅かに十數戸を剩すのみで全部倒潰して居る。此樣に一團の地域は全部安全で、他の一團の地域の建物は全部倒潰するやうなことは到底目撃しなければ信じられないことであつて、固より夫れが地盤の强弱の差異から來たものであることは言ふまでも無く、且つ夫れが唯一の原因であるが、地震に對する地盤の關係が之れ程著るしいとは我々も此經驗をするまでは夢にも想像出來なかつた事である。

地質が一樣であつても、震度は地形に依つて左右せられ、殊に堤防、崖際、河岸等は震度が甚しく增大するのが常である。今回の實例に見ても、地震の烈しかつた湘南、横濱地方では、堤防、河岸等は甚しく崩壞し、河であるか沼であるか判別の付かぬ程に破壞された處もある。要するに地震地帶に建物を建てやうとする場合、殊に永久的の大建築をする場合には、掘鑿に依つて土地の性質を見て、敷地を選定し、基礎工事の設計をなすことが肝要である。

地質を知るために掘鑿の方法を執ることは、實際には非常の大建築をなす場合の外行はれ難いことであるが、東京、大阪兩市の如きは、各方面の地質が相當に明かである上に、埋立地築造の沿革が比較的よく備はつて居り、殊に徳川時代以後の分はかなり明確である故、之等の地質並びに埋立の沿革を併せ考へれば、相當に各場所の震度の大小を知ることが出來るであらう。從來の如く住宅其他の建築をするのに、只地形や、交通、價格を考へるのみでは甚だ危險であるから、豫め十分土地の性質に關する調査をなすと同時に、必要の場合には家屋の構造及

び其基礎工事に十分の注意を拂はねばなるまい。

東京市の地質及び震度については今村博士の詳細な研究がある。東京に於ける震度は概略山手と下町とに區別することが出來るが、山手でも下町同様の埋立地があつて、震動の裂しい處があり、下町にも臺地と同様に堅牢なる處が一二個所ある。山手の臺地は壚埆質の洪積層で、震度が一般に弱いが、江戸城造營のために埋め立てられた四谷見付附近に少し震度の强い處があり、又臺地の中間に沼地を埋めた處もある。また、下町中で震度の最も大なるものは本所、深川一圓であつて、淺草、下谷北部の埋立地、及び舊神田ヶ淵の跡等が震度の大きい處である。其他日本橋區の高砂町は昔の池を埋め立てた處であり、築地、鐵砲洲、芝區柴井町附近は河流に沿ふて埋め立てられた跡であるといふ事で、本所、深川に次いで震度の大きい處である。

現在の東京の下町方面の大部分が海、沼、葭原であつたことは古くから傳へられる處であるが、八百八十年前の長元年間の圖に依れば、不忍の池から上野の臺の下まで入海があつて、現今淺草、下谷邊の地盤の弱い部分は當時海であつた。次いで四百五十年前の長祿年間の圖に依れば、本所、深川、淺草、下谷方面の入海は深く現在の淺草の鳥越、下谷區の坂本、根岸、金杉あたりまで來て居た。且つ不忍池は現在より遙かに大きなものであり、又神田ヶ淵は頗る廣い面積を占めて居た。慶長、寛永、元祿年間に頻りに埋立、開拓が行はれたが、慶長八年に駿河臺の東南に當る神田の山を崩して南の方の入海三十餘町を埋め立て、家屋を立てたが、木挽町邊に當るやうである。慶長十四年高輪の山麓を拓り開いて高輪通りを通じ、彼の鐵砲洲は明暦の火災後に築出したものである。日本橋方面に於ては、本町は慶長の頃に海を埋めて町地としたもので、江戸開設の最初の土地である。高砂町は慶長の頃まで葭沼であつたが、之れを埋め立て、遊廓を作り、之れを葭原と名づけたのを後に今の吉原に改め、明暦三年火災の後に今の新吉原に遊廓を移した、南茅場町は古來鎧島と稱へ、海水に浸つた茅原であつたが、寛永年中に之れを開拓したのである。馬喰町も昔は海に續いた沼地で淋しい草原であつた、赤坂方面では赤坂田町は寛永年中赤坂門外の堀を開通する時に土捨場として出來た土地であつて、赤坂新町の中大澤と稱へる處は元祿以前は澤地であつた。赤坂仲の町は昔水田であつた處を埋めて家屋を立てたのであつて、溜池は昔江戸市中に分布する用水を溜めた大池であつて、今の葵ケ岡と星ケ岡の間に在る低地が其池の跡であらう。今度の大地震で赤坂區内に於て家屋が倒潰し、且つ火災を起したのは此地盤の悪い地方のみのやうである。牛込方面では市ケ谷長延寺谷町

には昔大池があつたと云ふ。新小川町は明暦年中神田川開鑿の時其揚げ土で築いた土地であり、築地町は昔沼地であつたのを後年埋め立て丶町家を開き、牛込水道町は承應年間小日向小石川の築地と同じく沼田を埋め立てた土地である。改代町も亦沼田であつたが、明暦年中埋築したのである。次に下谷區の方面では南稲荷町邊は昔池沼地であつたが、徳川氏入國以來漸次之れを埋築した。淺草元鳥越町は昔鳥越村と云ひ、最も舊くからある部落であるが、昔は此邊から道灌山下まで入海であつて、此町から黒船町の邊りは海濱の村であつた。元和年間以來漸次商家が設けられるやうになつたが、其附近の西鳥越町の邊は葛野の入江といふ海であつた。小島町、七軒町邊は徳川氏入國の頃は總て潮入り沼地であつたが、寛永七年に埋築し、北松山町の邊も昔は全部潮入りの沼地であつたが、慶長の頃に大部分埋築し、元和以降佛寺が建設された。北清島町の中埋堀と云ふ處は池を埋めた後である。森下町も沼地を埋め立てた處である。次に本所方面は昔は茫漠たる草原であつて、江流多く、人家甚だ稀れであつたが、天正以後次第に開墾し、正保年間、本所村と稱へ、萬治三年茅を伐り、沼を埋め、道路、橋梁を通し、寛永十年に土工を終り、幕府諸士の宅地とし、元和、元祿の頃から漸く繁華の町となつた。深川方面は總て海洲、或は草原であつたが、慶長年間攝津の人深川八郎右門なる者此處に來住し、海を埋め、草を伐り、初めて新田を開墾し、深川村の名を生じた。深川清住町は昔海岸の洲であつたが、寛永六年之れを築立て商舗の地とし、總稱して獵師町と云つたのを、寛文年間から此の名に改めた。深川西平野町、東平野町、山本町、吉永町、永久町、島崎町、三好町、元加賀町邊は多く干潟の土地であつたのを、元祿十一年乃至十四年の間に埋立て、佐賀町も干潟であつたが、嘉永六年に埋立て、松賀町は元祿時代に埋立て、小松町も洲であつて材木置場であつたが、元祿十二年に埋め立て深川獵師町八區の中相川町、富吉町、熊井町、諸町、黒江町、大島町、堀川町は海岸の泥砂地であつたが、元祿十二年に埋築し、東西永代町も同じく埋立地で、材木町、永堀町は江戸市中材木問屋の材木置場となつて居た洲であるが、元祿十二年に埋立て、其他大和町、龜久町、入船町、島田町、鶴歩町、木場町、扇町、茂森町、平久町等は總て沼地又は洲であつたのを元祿年間に埋築したものであり、豐住町は六萬坪と稱し、江戸市中の塵埃を埋めた廢地であつたが、寛永の頃から之れを開いて商家を立て、洲崎辨天町は昔干潟であつたが、寛政の海嘯に依り一度泥海となつたが近來更に之れを築立て、根津の遊廓を此處に移した。越中島新田は昔干潟であつたが之れを埋地となし神原

越中守が邸を立てたに因んで越中島と名づけられるやうになつたのである。

今村博士は東京、大阪兩市に於ける震度分布の狀況を研究するに當つて、地質並びに右の如き埋立の沿革を參酌して東京市内の各區域を震度の弱き處より强き方に左の如き順序で區別して居る。(一)震度の最少の區域。壚坶質の臺地、駿河臺の南部西鳥越附近、(二)銀座附近　淺草、下谷の南部、壚坶質の臺地に沿ひたる部分、日本橋、吳服橋外、(三)震度中の區域。下谷淺草の中部以南、根津、湯島の東、御徒士町附近、神田明神下、白山下、江戸川筋、牛込濠端、赤坂溜池筋、芝金杉、丸ノ内大名小路東側より隅田川に至る部分、(二)、(四)に含まれた部分を除く)(四)芝柴井町、宇田川町附近、日本橋高砂町附近、靈岸島鐵砲洲、築地、淺草田原町附近、本所深川東部、(五)震度最大の區域。池の端、神田濠の跡(小石川大下水、江戸川尻より舊小石川町卽ち駿河臺と飯田町、田安臺地の中間一面)丸の内大名小路西側(龍の口、日比谷、櫻田一帶)淺草、下谷の北部(吉原から吾妻橋附近と金杉、三の輪、龍泉寺間一面)本所深川の西部、淺草千東町、越中島、佃島の南部。

以上の如き震度の分布は土地の構造から推定されたのであるが、安政二年大地震の被害の狀況は極めてよく之れに適合し、今回の大地震の損害の程度も亦よく之れと適合してゐるやうである。斯くの如く地質の惡い處は一度ならず二度ならず繰り返して大地震のある毎に甚しい損害を蒙り、地震後の火災も亦自ら之等の地區に於て多く發生するのである。安政の例に見ても又今回の大火災の例に見ても同じ事である。今回の大損害は固より大部分が火災に依つて生じたものであらう、私の概算に依れば震火災の全損害は六十億乃至六十五億に上るやうであるが之れが若し單に地震のみの損害であつたならば五億以下であつたことゝ思ふ。最も恐るべきものは勿論火災であつたが、地震さへなければ又地震に依つて家屋さへ倒潰しなければ火災も起らなかつたのであるから、火災に對する準備、建築改革を行ふと共に、地震に對する根本的の用意、卽ち地盤に關する注意研究を怠つてはならぬ。

大阪市に於ては上町の全部、天滿の東部、船場の東半部、島の中の全部等は地盤の點から第一位に屬し、北區の中部、船場の西半部、難波方面は第二位に屬し、西區の全部は第三位に屬するとのことであるから、大阪市の如き經濟上重要な土地であつて、殊に人口密集し、木造家屋を以て充滿して居る處では、譬え木造家屋が耐震の點から第一位に位するとは云ひ條、第一地震に依りて家屋の倒潰する如き事あつては大火災になる恐れ

もあることであるから地盤の點に關して相當の注意を拂つて建築の安全を保つ事が適當であらう。

勿論前號に述べた如く地盤の弱點は或點までは建物の構造、基礎工事に依つて補ふ事は出來るがそれも或程度に限られ、殆んど經費の如何を顧みないものでない限りは地盤の惡い處に安全た大建築を作る事は出來ない。一般に強ひて地盤の弱點を補つて堅固の建築をせんとすることは經濟上大きな損失であらう。況んや地盤の惡い處に高層の建築をすることは地震國では大禁物ではなからうか。幸にして今回の大地震は東京ではそれ程烈しくはなかつたが、若し横濱市の程度の強さの地震であつたならば、彼の丸の内の新市街に於ける最新式を誇る高層建築丸の内ビルデイング、東京會館は恐らく彼の慘めな内外ビルデイングと同じく一擧にして崩壞したであらうと思はれ、又有樂館、郵船ビルデイングも亦或は之れに近い運命に陷つたのではないかと思はれる。今回の大災害に依る壓死者は僅かに東京市内に於て千六百名であつたと聞くが、若し彼の丸の内ビルデイングにして崩壞すれば二千人乃至五千人の人が一擧にして生命を落したことであらうと思ふだに慄然たらざるを得ない。我國の如き地震國に於て殊に古來及び將來大地震の絶えざる東京市の如き土地に於て如何に經濟上の理由がありとは云へ餘りに高層の建築を爲すことは、假分地盤の好き處であつても大に考慮すべきであり、況んや地盤の弱い處に於ては如何に十分の基礎工事を行ひ、堅固なる構造を用ひるとも嚴に之れを排斥すべきであると考へる。建築家は學理上より基礎工事と構造さへよければ、どんな高層建築をしても如何なる激震にも耐へ得ると云ふかも知れぬが、彼の丸の内ビルデイング、東京會館等は最新の學理に依つて耐火耐震に十分なりとの自信の下に作られたものに相違ないであらうから、之れが失敗して居る以上は世人は必しも建築家の自信のみに依賴することは出來ぬ。之等の失敗が設計の杜撰なためか、工事の不良なためか、或は又如何なる他の原因に依るかは我々の知る限りではないが、有餘る金を投資して費用を惜まず建てられた丸の内に於ける最新の高層建物が多く失敗したとすれば一般に資力に限り有る者が建設した高層建物があつたとしたならば其結果は知るべきのみである。從つて建築學者の云ふ處は理論としては正しいに相當あるまいが一般の建築に對しては安全第一を原則として、東京市の如きは最良の地盤に於いて最強の構造を以つてして三階建位に止めるのが適當ではなからうか、但し特別の用途、特別の安全が證明された場合には或は一二階の追加を許すことも止むを得まいと思ふ。猶現在の市街地建築物法は建築の高さを制限するに當つ

て、單に道路の幅と建物の構造のみを條件として居るやうであるが、將來は今度の地震に鑑みて更に地盤の强弱を建物の高さを定める條件の中に加へることが最も必要であると信ずる。

先日今村博士と同道大阪へ赴いた汽車中博士の手にせられた沿道の地質地圖と引合せて沿道の慘害の大きさを觀察したが、馬入川兩岸より奥深く厚木の北に至つて止まる沖積層の地方と酒匂川の沿岸の沖積層の地方が最も被害が甚しかつたやうに見へた。馬入川の墜落は東海道の連絡を今日に至るまで阻害して居ることに依つて世人は此邊の震度の大きかつた事を想像し得るであらうし、厚木附近の地割の最も大きかつた事も人の知る所である。又全潰した小田原の震害の激烈であつたことも世に傳はる通りであるが、其北方に在る下曾我驛の如きは地震のために顚覆破壞せられて殆ど其形を止めず、新設の停車場ではあつたが其震度の大きさが想像出來ぬ程であつた。

選擧に對する政友會の地盤の力は或は崩れる時があるかも知れぬが、地震に對する地盤の對抗力は元祿、安政の昔より大正の今日、又は將來に向つて變るの日がないのであるから 過去將來に亘つて變らざる地震の脅威を受ける市民は地盤に依賴することを忘れてはならぬ。



時代錯誤的なる軍隊思想の革正

軍人が持つべき常識及び哲學

杉森孝次郎

軍人のための軍人ではなく、軍人のための國家でもない。軍人のための社會ではなほさらない。逆に、社會のための國家であり、國家のための軍人であるべきだ。勿論、これは、現代の實在と事情とに立脚した規範的見地からの考斷だ。

すでに、現代に於いては、國家は社會の一機能であり、軍人はその一機能たる國家の一機能であるべきだとすれば、現代の軍人には、正當なる社會觀及び國家觀が持たれてゐなくてはいかん。これが持たれなくては、軍人の資格、職責が不完全だ。

かへりみて、わが日本の軍人を考察するに、日本が、武力に依る防衛を最前線の急要務として持つた時代の翌日にかれらは現存してゐる。日清役、日露役は、日本として、戰ふべき戰爭を、戰ふべき通りに戰つた當然事であつた。日露戰勝後、日本の國際的位置も先ずそれの第一礎を築きえたかたちになつた。その後の日本の文化燦然も、産業勃興も、日露戰勝に、條件因的に負ふところ殆んど不可測的に大だ。われらは、新日本史に於ける軍人の貢献と功績を、決して見ちがへ、見そこねてはならん。

日露戰後、殊にも世界大戰後、しかるに、世界の思想界と實行界とは、經濟方面、政治方面、教育方面等を主要方面として、急轉直下式に變化し來たつた。勿論、根本的にはそこになんらの大變化もないのだが、現象的範圍に於いては、その變化は著大だ。そして、社會と、文化と、人格と、人間と、デモクラシイと、經濟生活とが、國内的にも、國際的にも、當面の代表的注意事項となつて來た。國防も警察も依然として必要だが、そ

の必要さ加減、その必要の性質及び程度が、從前通りでは當然的になくなつて來た。日清、日露兩役當時と今日とを比較すれば、國家なり、社會なりに於ける軍人の當然占むべき位置の上に、實に大いなる進化が發現して來た。今日に於いては、軍人は、國民全體が、意味に於いては自身直接に取るべき國防及び多少その他のかたちに於ける勞を、分勞に依る協力の理想主義經濟、廣義の人力經濟の觀念にもとづいて、あだかも、立法者、行政者、醫者、教師、辯護士、農人、工人、畫家、音樂家、專門學者、技術家等を國民が國内に掌別的に持つが如くに、間接に取る以外になんらの意味をも有すべきでないことは、いよいよ鮮明に、確實に公認されべき眞實情が熟した。

軍人の常識は、それゆゑに、勞働者の常識、商人の常識、學者及び教育者の常識、政治家や藝術家の常識と、本質に於いて、なんら別種類、別程度のものたるべき餘地を持たない。われらは、軍人に對して希望し、期待し、要請する通りの常識を、國内の他のすべての職業人や專門人に對してさうし、これらすべての人々に對してさうする通りの常識を、軍人に對して當然さうする。この、現代社會、現代國家に於ける各專業人、一職務者の背景としての共通常識が準備され、樹設されないでは、分勞も、協力も、そこには成り立たない。意思と動機に於ての愛國が、結果に於いてはその反對になり、目的としての奉公、正義、眞、善、美が、達成に於いて逆現する悲劇も、その事情下には必然起こる。

軍人は一種の生產者だ。國防及びその他のある種類の治安の生產者だ。およそ、生產者は、社會的には、機能人であつて、全體人ではない。全體人の統導原則は常識のほかにない。正しき意味の哲學は、ただ比較的に完全に純化され、反省され、組織された常識以外のなにものでもあるべきでない。この意味に於いて、また、この理由によつて、われらは、現代の軍人、さしあたりわが日本國の軍人にむかつて、常識と哲學を、他のすべての機能人にむかつてと絕對的に同一性質、同一程度に、深く、切に要望する義務と、權利と、必要とを意識する。

（十、一九）

時代後れの軍人思想

文學博士　三宅雪嶺

現在の軍人の多くが抱く所の思想は、軍人に取つて氣の毒なものと云はねばならない。軍事當局者は内外の必要を察し、之に適應する方法を以つて軍人を養成し來り、相應に目的を達し得たが、内外の趨勢が變し、特に世界戰校で列國の關係が變つた爲め、從來の態度を改めねばならなくなり、急に改めるに難く、種々の困難を伴ふの餘儀なきに至つた。誰を咎めようもなく、好い積りで出來る丈けの事をしたのであるに、周圍の事情が變じ、異樣に見られるのであつて、若し咎むべきでありとすれば、要部の人が一層早く變革に注意すべきであつた。少くとも世界戰役の終り頃から、鋭意新情勢に應ずるに努むべきであつた。若しそれを人に望むを酷とするならば、せめて今後爲し得る丈けの事をして貰はねばならぬ。現在の軍人の多くは、今尙ほ世界の趨勢の變じない前の思想であつて、十分に職分を果すの心得ながら、動もすれば職務に忠實なる程、事が間違つたりする。近い話が甘粕憲兵大尉及び下官若干名である。甘粕自らの專斷に出でたか、上官の意を受けたか、意を受けなくても憲兵間に甘粕の行爲を是認する思想が行き亙つて居つたか、何れにしても軍人は兎角彼の如き思想で養はれて來つた所がある。

現在の軍人は舊幕時代から引繼ぎ來つたのであつて、其の先進者は舊藩士とし、陣羽織を着て槍を持つて闘つたりしたのである。元帥の筆頭故山縣公は四國軍艦に馬關を襲はれた時、槍を提げて闘はうとした。舊幕時代に成長しても、幕府に反抗する丈け普通と變つて居るが、舊幕の空氣を呼吸した相違なく啼く子と地頭に勝たれぬとか、お上の御無理御尤とか云ふのを生れ落ちてから承知せねばならなんだらう。無理が通れば道理引込むと云ひ、如何に道理あつても、強い者に勝たれぬとなつて居つた。君命で死ぬのが當然となつて居つても、自ら信ずる道理の爲めに死を顧みぬと云ふのは、氣狂ひ染みた沙汰となつて居り、止せば可いのに餘計な事をする者と云はれた。

明治に入つて軍事が整備したのも、その傳統的思想を以てし歐米の空氣に觸れてさへ少しも怪まなんだのは、歐米で最も兵を強くするに只上官の命に從はせねばならぬとなつて居つたのに由る。歐米も國によつて違ふものの、陸軍で强いと云へば佛蘭西か獨逸、何れも專制政治の實があると見えた。佛は帝制が倒れ共和となつたが、新に獨が帝國の威力を張り、歐洲の覇權を握る勢がある。世界で新軍制の參考とするのは先づ獨逸であつて、日本で陸軍を佛式より獨逸式に變じ、徹底的に獨逸を學ばうとした。確かにそれで利益を得、支那と戰つて克ち、露國と戰つて勝ち、世界の强國に仲間入りしたが、手本にした獨逸が多くの國々を相手にし、獅子奮迅の勢で戰ひ、日本の陸相をして帝國議會の秘密會に、獨逸は必ず勝つと云ふよりも、既に勝つて居ると明言するに至つたが、實は戰場で戰ふばかりが戰爭でなく、大局の上で勝たねばならぬのを忘れて居つた。忘れないならば、注意する事が薄かつた。何と云ふても獨逸は全敗に終つた形になり、之と共同した墺太利は全く云ふに足らぬ。中歐は將來如何になるべきか、見當の付かぬ有樣になつた。

獨逸も樣々の歷史があり、宗教改革を起したりしたけれど、必要の前に法律なしと云ふ諺があり、軍隊で最も重きを命令に置いた。政治上でも細かい所まで法律を作り、何でも法律で行ひさうに見えながら、一度び最高命令が下れば、只之れに從ふのみとする傾向があり、之を奬勵し宣傳する勢が盛であつた。不平もありながら、表面に現れる所はそれで濟んで居る。日本でいろいろと獨逸を穿鑿し、軍國主義ばかりでなく、意外に反撥力を備へて居るのを說くのもあつたけれど、軍事當局者は、專ら軍隊に表はれた所を認め、何でも命令通りに押通し、一絲亂れぬのを宜いとした。既に明治二十二年憲法發布あり、之を尊重せねばならぬとしながら、天皇の下し給はつたものとし、人權に重きを置かず、いざと云ふ場合に拘泥すべきでないと考へるやうになつて居る。自由民權とか、國家に何の必要あるかと嗤ふ。上官の命は事の如何を問はず絕對に服從すべしと定まり、其の上官の命をば關係事務の範圍に限らず、其の外にも及ぼし、憲法に背いても構はぬとするに及ぶ。憲法の明文に、日本の臣民は法律に依るに非ずして逮捕、監禁、審問、處罰せらるゝことなしとあるに、全く法律に依らず、逮捕、監禁、審問、處罰するどころか、人を死に處し、剩へ七歲の子供を絞め殺すに至つた。當事の戒嚴司令官福田大將は其邊で如何に心得たか。彼の如き事を善いとするか、惡るいとするか、甘粕は下手な事をしたのであつて、全く分らぬやうにせば、何事もなかつたのであるとするか。陸軍部內にも相應に分つて居るのがある

とし、甘粕が巧みに片附けさへすればよかつたと思ふのが、少くなさうである。危險と認めたならば何故に法律に據らうとしなかつたか。法律に據る程の事なくて死に處するを適當の事と云へるか。

今の陸軍は元と內亂鎭壓を主にし、かなりに內國人を斬つたり、張つたりした。後に內亂なくてもさうして可いやうな考がある。上官の命で人を殺せとあれば、單に殺して妨げないとして居るらしい。何處でも軍隊で上官の命に重きを置き、下官は絕對に服從すべしとしても、英米は軍隊關係の範圍に限るべきを知つて居る。それ丈け場合によつて面倒もあり、米國の如き兵卒が勝手な事をするのがあり、獨逸の精兵に當たり難しいやうでも、軍隊間で相應に規律を守り、漸く馴れるに從ひ、侮るべからざるものとなつた。且つ獨逸の精兵と戰ふの必要ある間、之に劣らぬやうにすべしとし、今後遮二無二戰ふよりも、餘力を剩し最後の勝利を得るのが肝要になつて居る。單に上官の命で右へ廻れと云ふのみでなく、各自國家の爲めとして、進み出でるやうになるに若くはない。敵に對し絕對に上官の命に服し、毫しも違背せぬが、憲法を蹂躙せよと命せられても、妄りに之に從はぬ丈けの判斷力を備ふるを要する。上官も下官も其邊に區別する所なくてはならぬ。森曹長以下上等兵は憲法を解する程の素養ないとし、甘粕大尉は憲法を解する位の教育を受けて居らねばならぬ。上官から何々を殺せと命ぜられたと假定し、憲法の明文に背くを知り、上官の命も憲法に代へられぬとせねばならぬ。將校にそれ程の理解なくて何うするか。絕對服從といはうに、さういふ除外例を設けては、戰場で立派な働き出來ぬと云ふのが、人間をそれ程まで馬車馬的に養成せねばならぬか。牛馬程命令通りにならなくてもよいではないか。其邊を差別し、一方で十分に憲法を遵奉しつゝ、一方で上官の命を受け、敵壘に突貫してこそ軍人として教養あるものと云ふべきでないか。

普通に軍隊の語を使用するが、單に陸軍を指す時と、陸海軍を併せ云ふ時とで違つて居る。後者の意義に於てすれば、やゝ云ひ方を異にするを要する。陸軍と海軍と自づと着眼が違ひ、以前から陸軍は佛式又は獨式にし、思想も之に類似し、海軍は英式にし、英國風に同情する所があつた。日本で海軍と云ふても、初め陸軍から移り來つたのであつて、英國が何うの、米國が何うの、多く知る所なく、矢張、上官の命は事の如何を問はず絕對に服從すべしと云ふを眞向に振り翳した。其處で海軍兵學校で養成された者も、陸軍士官學校で養成されたのと同じく、上官の命を第一にし、憲法を輕んずるやうな跡あつたけれど、

陸軍と違つて、國民を戰敗者と看做さず、外國に對し之を保護すべきものと心得て居る。陸軍出身者が政局に當れば、場合によつてクーデターを敢てすべしとするが、海軍出身者はさうでなく、成るべく立憲的に事を行はうとする。前の加藤首相もさうであり、今の山本首相は鬼瓦と云はれながら、人權に重きを置き、普選を斷行しようとして居る。河童が陸へ上つても仕方がなく、海軍で已むを得ぬ所とするも、河童が陸で勝手な事をせぬのを認めねばならぬ。陸軍も以前こそ内亂鎭壓の必要あれ今は外國相手が主であつて、内地人を敵とするやうな事が殆ど有り得べきでない。最近の戒嚴令でも、軍隊の方が警察官より受けがよかつた。警察官が流言飛語に惑はされたり、或は之を放つたとの疑があるなど、軍隊の秩序立つたのに對して恥づべきである。警察官が鮮人を殺せよと云ひ、將校が鮮人とて陛下の赤子、濫りに殺すべきでないと云ふた所、明かに優劣がある。

併し甘粕事件を惹き起すに至り、軍隊の根柢に改むべきものあるを明かにした。上官の命令が唯一の標準でないことを知らねばならぬ。軍事關係に唯一の標準であつても、臣民として、人間として、他に考ふべき事がある。上官とても憲法を蹂躙せよと命じては、果してさういふ場合であるかを考へ、腑に落ちぬならば、篤と聞き訊されねばならぬ。法律に據らずして死にせねばならぬか、七歳の子供まで殺さねばならぬか、常識を具へる間其邊が直ぐと分りさうであるのに、さう行かなんだのは從來の教養で經過し來り、改むべきを改めなんだ結果に外ならぬ。前に英米と言へば陸軍の禁物であり、少しでも之れに似ては兵が弱くなるとしたが、今は改めて其邊に考ふべき所がある强ち英米に倣ふべきでなく、日本で適當と認めた所を爲すべきであるが、英米の陸軍も參考するに足るものあるを考へよ。英米で出征を志願する者に如何はしいのかあるにせよ、出ねば出ぬで濟むのをば、貴族富豪の身分で兵卒となり、上官の指揮に從ひ、奮戰して死するなど、職分の爲めにする所を認めずには置けぬ。デューティの爲めとする所、如何にも健氣なるを覺える。日本でもさういふのがあれど、更に一層重きを置くべきでないか。

大杉殺害と軍人思想

水野廣德

　僕は前月號に於て、震災當時に於ける軍隊の行動と軍憲の處置とに對して賛辭を呈し、靑年團在鄕軍人會などの人々を中心とせる所謂自警團なるものゝ活動に對して感謝の意を述べた。然るに稿を終へて後幾何もなく甘粕事件なるものが暴露し、一たび回復したる軍隊に對する社會の信頼と、軍人に對する社會の敬意とは、恰かも過般の大地震に潰れた安普請の如く、根本的に動搖し崩潰して仕舞つた。尋で餘震として龜戶署に於ける騎兵の殺傷事件暴露し、軍隊に對する社會の疑惑は益濃厚となつた。其他各地の自警團に依つて行はれたる厭ふべき虐殺事件は續々摘發せられ、檢擧の火は炎々として今盛んに燃へ擴つて居る。僕の萬年筆が軍隊讃美の文子を原稿紙の上に綴れる其の時には、憲兵司令部の樓上に於て不法殘忍なる虐殺行爲が、憲兵大尉の肩書を有せる甘粕某と彼の部下とに依つて行はれつゝあつたのである。今にして思へば神ならぬ人の身とは云へ、あまりの馬鹿らしさに自ら我が愚を笑はざるを得ない。折角回復し掛けたる軍隊と軍人とに對する國民の信望が、短見無思慮なる二三軍人の不法行爲に依つて再び破壞消失されたることは、國軍の爲めに惜しみ、國家の爲めに悲しまざるを得ない。

　甘粕某の不法行爲に關しては尙ほ裁判進行中にありとは云へ事の理否正邪は既に明らかである　帝都の大新聞の殆んと全部が筆鋒を揃へて彼の暴戾を難詰嚴責したるに徵するも、天下の輿論が何であるかを知るに充分である。甘粕某の大杉殺害は、憲法を蹂躙して大權を干犯し、國法を無視して私刑を敢てし、而かも戒嚴令下に於ける治安警察の權能を帶べる憲兵將校の官權を惡用し、豫め謀つて爲したる殺人行爲である。犯罪の性質に於て法律上情狀最も重きものである、官憲を笠に着たる低級一軍人の獨斷に依り、憲法規定の裁判を經ずして無抵抗の人間を殺戮する如きは、文明法治國に於ては殆んと想像し得ざる大罪惡にして、國民は生に安んずることすら出來ない。大杉の無政府主義を國家に害ありと爲し、之を謀殺したる甘粕某は彼自

身國家を無視せる無政府主義の實行者であると云はねばならぬ。如何に陸軍々憲が彼の犯罪の動機を諒とし、愛國の犧牲者として之が擁護に力むるも、又一部の國民が彼を「國士」と祭り上げて減刑運動に狂奔するも、國法を遵ひ、人權を重んじ、正義と公明とを尙ぶ我等より見れば、甘粕某の如きは外に國家の威信を傷けたる國家の賊である。內に國軍の名譽を損したる軍隊の敵である。

吾人の見に依れば甘粕某の殺人行爲は殆んど寬恕すべき餘地を認めない。併しながら罪を惡んで人を惡ますとかで、吾人は事件發表の當初に於ては、陸軍官憲の可なり露骨なる犯罪擁護の言に對して不快を感じながらも、尙ほ幾分彼の心事を諒とし彼の決意を壯とするに吝でなかつた。縱令彼の行爲は惡むべきものありとするも、縱令彼の所信は誤れるものありとするも、若し彼にして至純至誠國家を愛ふるの丹心に出てたりとせば、彼も亦一種の人格者として尊敬に價する點無きにしもあらずとさへ思つた。然るに公判一たび開かれて事件の眞相世間に暴露するや、世人はあまりに其の犯罪の醜惡なるに驚ひた。あまりに其の罪跡の殘忍なるに驚ひた。玉手箱の底深く秘められて世人疑惑の焦點たりし外二人なるものが婦人と幼兒となるを聞きては、流石に甘粕擁護者と雖とも啞然たらざるを得なかつたであらう。死屍に對する凌辱が言語道斷なるは言ふ迄もなく、私かに證留品を燒滅して罪跡を隱掩せんとしたる如きは、先づ第一に彼の心事を疑はしむるものである。天皇の御名に依つて行はるゝ裁判に於て、軍人にあるまじく言を二三にせるのみならず、動もすれば罪の一部を他に轉嫁せんとするが如き疑あるは、彼の爲めに取らざる處である。殊に國士を氣取つて新田義貞までも引き出すに至りては祖先の名を辱かしむる不肖不孝の孫と云はねばならぬ。公判廷に於ける彼の言動は原首相を刺したる白面の靑年中岡にだも及ばぬ未練さがある。憲兵大尉ともある彼としては、人を殺さば己も死する位の覺悟が無くてはならぬ筈である。國家の爲めと云ふ信念の下に人三人迄も殺害したる彼は何故軍人らしく、少くも男子らしく己を處するの途に出でなかつたのであらう。是れ世人が彼を以て、運よくば大杉密殺の功に依り自己榮達を圖らんとせる僞國士であると非難する所以である。今に彼を國士と信じて特赦減刑の請願に署名したる人々も、今は署名取消を望めるものが尠くないであらう。

吾人は今玆に妄りに甘粕某を責めて快とするものではない。吾人の考慮すべき點は何故甘粕の如き淺見短識無思慮無分別なる將校が陸軍部內に發生若くは存在したかと云ふことである。

今一層詳述すれば、甘粕の如き人間が恰かも麥畑の莠種の如く偶發的に或は孤獨的に陸軍に發生したのであるか、或はまた、麥畠ゝ麥の如く、蒔いた種子が自然に發育したのであるかと云ふ點である。惟ふに允文允武の大元帥陛下に統率せらる光輝ある帝國陸軍、如何に[illegible]殺伐なりとは云へ、殺人を是認し稱揚する程に野蠻でないことを確信する。併しながら從來我が陸軍に於ける精神教育、思想指導の方針が、如何なる種類、如何なる程度のものであるかは、陸軍官衙或は其の關係部より秘密に或は公開的に刊行せらるゝ幾多の小冊子や宣傳びらの類を見れば、其の如何に現代離れ、社會離れ、のしたるかを窺ふことが出來る。一二の例を擧ぐれば華府會議最中に於てすら日米戰爭を說ひて徒に國民の對米敵愾心を挑發したり、或は日露交涉の最中に於てすら過激派を讒謗して無益に國民の反露感情を激成する如き非常識なる低能振りを發揮する軍人も尠くない。其が果して高級軍憲の意見であるや否やは知らぬが、少くも地方に於ける一般軍人の心を流るゝ思潮である。斯かる思潮の淵源が何處に發するかゞ研究すべき問題である。

吾人は素より陸軍は陸軍としての職務上、一般社會と趣を異にせる特種の教育指導を必要とすることを是認する。併しながら其の異なる處たるや、國家の綱紀を攪亂せざる程度のものでなければならぬ。社會の平安を脅威せざる程度のものでなければならぬ。國家は陸軍のみに依つて存立せるものではない。社會は軍隊のみの爲めに存在せるものではない。國家あつての陸軍であり、社會あつて軍隊である。然るに由來我が軍人中には國家を以て陸軍の私有物視し、社會を以て軍隊の附屬物視し、國家は陸軍のみに依つて維持せられ、社會は軍隊に依つて指導さるべきものとの誤まれる軍國主義思想に捉はれ居る者が尠くない。其の意氣や或は壯とすべきも、其の已惚や笑ふべく、其の妄想や恐るべしである。之が爲め動もすれば國家の法規よりも軍隊の命令を重しと爲し、社會の安寧よりも軍隊の規律を尊しとする頑愚の軍人を輩出せしむるのである。元來社會の實相に觸れず、思慮單純にして性格愚直なる軍人をして斯くの如き謬想誤信に陷らしむる所以のものは、其責を軍隊教育の缺陷に歸せねばならぬであらう。

嘗て西比利亞に於ける武器密賣事件なるものが暴露したる際事件の責任者たりし原某は陸軍部內に於ける高潔優秀の人物であると評された。今回甘粕事件の暴露するや、陸軍部內に於ける彼の先輩知人等は口を極めて甘粕の人物を稱揚し、彼に關係深き或る軍人の如きは甘粕を以て人格に於ては一點非難すべき點なき模範將校であるとさへ激賞した。其後甘粕が男らしくも

なく、豫審に於ける陳述を飜へし、爲めに少年殺しの下手人として彼の部下たりし二三の兵士が更に檢擧せらるゝや、是等の兵士も亦何れも陸軍部内に於ける模範兵と云ふことであつた勞働者を串刺にしたる龜戸の少尉も忠良勇敢なる士官であると傳へられた。模範軍人なりしが故に殺人行爲を敢てしたるか、殺人行爲を敢てしたるが爲めに模範軍人となりしかは知らない。何れにしても陸軍部内に於ける人格者とか模範兵とかは、一般社會とは大に標準を異にして居る。素より軍隊と一般とは或る程度まで生活の樣式を異にし、教育の形式を異にせるは已むを得ざる處である。併しながら同じ境土内に生活する以上、正邪善惡に對する道德上の標準は、軍隊も一般社會も同一でなければならぬ。若し道德上の標準迄も異にするなれば、軍隊と一般社會とは到底共に兩立することは出來ない。否な軍隊は社會の中に生活することを許されない。陸軍部内に於ける完全無缺なる人格者や、模範兵の中から國法を無視せる殺人犯人を出すが如きを見ては、陸軍々人の道德觀念を疑はざるを得ない。

公判廷に於ける甘粕其他の陳述に依れば、犯罪の當時憲兵隊内には、××××××××××××××××××××××××××云ふことである。左れば實際手を下したるは甘粕某と其の部下二三なるも、××××××××××××××が潜在して居たことが想像せられる。即ち大杉等の殺害は××××××××××であつたのである。或は××××××××××であつたかも知れぬ。偶々模範的人格者甘粕が此の××の波動に醉はされて忠勤を抽んでたに過ぎない。故に大杉を殺したる者は甘粕にあらずして此の××であつたとも言へる。唯天網恢々疎にして洩らさず、死體を古井戸に抛り込み、念入りに馬糞までも掩ひ掛け、遺留品全部を切り刻み、叩き壞はして灰と爲し、犯跡を隱蔽せんと力めたるに拘はらず遂に罪惡が暴露したのである。其の狼狽さ加減察するに餘りがある。某最高級軍人すら何をうろたへたか、甘粕の大杉殺害を以て是れ國家主義者と社會主義者との私鬪にして偶社會主義者が敗けたのである。何等陸軍官憲の關知する處ではないと放言して居る。抑も事は治安警察權を有せる憲兵分隊長が、憲兵の官服を着し、憲兵隊の自働車を用ひ、部下の憲兵を指揮し警察の援助までも受け、憲兵司令部の官衙に於て、自ら手を下して行はれたる殺人行爲である。之をしも私鬪と云はゞ、世に職權亂用なるものがあるであらうか。官權亂用に依つて行はれたる犯罪に對しては官憲は其の責を免かるゝことを得ない。殊に斯かる狂暴なる軍人を憲兵分隊長の要職に補したることは、人事を統轄する陸軍大臣の責任でなければならぬ。

大杉殺害事件に關し最初陸軍省の發表したる處に依れば一犯行の動機は甘粕大尉が平素より社會主義者の行動を國家に有害なりと思惟したる折柄………自ら國家の蠹毒を芟除せんとしたるにあるもの丶如し」とある。全文僅に百三十字に滿たぬ短文なるも、仔細に翫味すれば被告の犯行を全然是認せざるまでも、被告の犯罪の動機を諒として之に同情せるとが言外に覗はれる。檢察官の談としては恐らく破天荒に被告に有利なる發表である。嚴正なるべき官權を亂用したる甘粕犯行の惡性なるは言ふ迄もない。唯一部の國民が彼に同情する所以のものは、大杉の主義が社會に容れられざりしと、陸軍當局者が甘粕の犯罪を以て國家の爲めと臭はしたるが故である。甘粕犯行の動機が果して陸軍側の言ふ如く國家の蠹毒を芟除せんとしたるにありと假定するも、斯かる犯罪の齎らす結果が眞に果して國家の利益となるや否やは大なる疑問である。由來日本人殊に頭腦單純なる軍人並に守舊派は、苟くも國家の爲めとし言へば其の結果の如何を察せず、忽ち愛國者に祭り上げる癖がある。武器密賣の原某君も國家の爲めと稱し、其の實國家の信用を傷つけたるに拘はらず、非常なる賞典に浴し忽ち愛國の志士となり澄ました。此の流儀に從へば中岡某も、朝日某も、扨ては大津で露國皇太子を傷つけたる津田某も、馬關で李鴻章を撃ちたる小山某も、皆是れ愛國者と云はねばならぬ道理である。昔佛蘭西では『自由の爲め』に多くの罪惡が行はれた。今の日本では『國家の爲め』に多くの罪惡が行はれざることを祈らざるを得ない。

甘粕犯行の經路に就きては遺憾ながら幾多の不純味を發見する。假令衷心國家を思ふの念に出てたりとするも、彼の短見淺慮なる妄動に依りて國家社會の被つたる或は蒙むらんとする損害を思ふ時、彼を以て愛國者とか國士とか稱揚することは斷じて出來ない。大杉夫妻及宗一少年の殺害が法律上最も惡性の謀殺たるは云ふ迄もなく、而かも其の影響する處、外に對しては法治國たる日本帝國の信用を失墜したるのみならず、外國に於ける幾多の大杉と同主義をして我が國に對する反感と憎惡とを無益に挑發するものである。內に在りては軍規嚴肅なるべき國軍の威望を毀損したるのみならず、却て大杉に對する同情者を生じ、大杉一派の反抗を激增せしむるものである。陸軍當局者が事件發表に際し殊更に「大杉外二名を某所に同行し」と云ひ婦人小兒が憲兵司令部に於て殺されたることを隱蔽したるは、陸軍の名譽の爲めに輿論の攻擊を恐れたる爲めであらうと思はれる。大杉等二三を殺して社會主義を撲滅し得べしと爲すが如きは、甘粕等二三人を殺して軍人を撲滅し得べしと爲すと同一程度の愚劣さである。憲兵分隊長特別高等課長とかの要職に任

じ、現代思想に對しても相當多量の理解を有したと云はるゝ彼れにして、尚蒙は斯くの如しとせば、一般軍人の思想なるものが思ひやられる。

甘粕事件に依つて吾人の最も憂へ且つ恐るゝ處は被害者側の復讐である。舊惡を思はざる伯夷叔齊の如き君子にあらざる限り、復讐觀念は人間の普遍性である。而して報復の手の及ぶ處恐らく眇たる甘粕や甘粕一族のみでは濟まぬであらう。不祥なる××××××××××××××××、國民として悚然たらざるを得ない。其他甘粕の直接行動が世道人心に及ぼしたる惡影響に至つては頗る大なるものである。坊間には既に「あまかする」と云ふ極めて忌むべき言葉さへ行はれて居ると云ふではないか。

僕は甘粕に就いて餘り多くを評し、餘り多くを責めた。併し彼も亦大杉と共に時代の生みたる憫むべき犠牲兒である。素より僕は彼並に大杉と一面の識も無ければ、私情に於て何の恩怨もない。唯彼が陸軍部内に於ける模範將校であつたと云ふ點よりして彼を以て代表的軍人と認め、一般軍人思想の頑蒙を責めたのに過ぎない。凡そ法治國家の秩序は國民が國法を尊重遵守することに依つてのみ維持せられるのである。信念の如何を問はず苟くも國法を無視して我意を恣にする如きは國家秩序の破壞者で、決して國を愛する者とは云へない。由來國家主義を最も強烈に唱道する軍人中、往々國家の爲めと稱して國法を無視する者がある。國法を無視するは是れ畢竟國家を非認する者である。無政府主義、過激主義と何の撰ぶ處はない。

過般の大災に際し嚴正と謙譲とに依つて博し得たる軍隊の威信と聲望とは、二三軍人の妄動に依つて大なる汚點を印せられ醜き影を懸けられて居る。十年前には隱くし終うせたる罪惡も時代は最早や之を許さない。陸軍秘密の城壁は大地震の爲めに搖り倒され、外より内部が見へ透されて居る。陸軍の名譽を維持する爲めに、國民の思想を順導する爲めに、被害者側の復讐心を緩和する爲めに、法治國の信用を恢復する爲めに、涙を揮つて馬稷を斬れ！　是れ時代錯誤なる軍人思想革新の第一歩である。而して正邪善惡に對する道徳標準を一般社會の水準に引き上げよ。是れ憫むべき犧牲兒甘粕の罪を轉じて功と爲すの途である。國民は未だ全く軍隊を見捨ては居ない。國民を敵とするか、味方とするか、陸軍は今正に岐路に立つて居るのである。

（一二、一〇、一〇）

軍隊内に漲る時代錯誤の思想

安部磯雄

今日の軍人階級に對する多數の人々の感想は、一言にして云へば餘りに同情を持つて居ないと云つて差支ない。多數と云つたゞけでは曖昧であるが、其中で軍人階級に對して幾分同情を持つて居る者はブルジョア階級であらう。之れとても軍人階級に對して特別の同情を持つて居るといふのではなく、ブルジョア階級が平常軍人階級に對して保護の恩惠を感じて居るといふ點に於て同情を持つて居るに過ぎない。一方に於てプロレタリア階級は殆んど全部が軍人階級に對して好感を持つて居ない。啻にプロレタリア階級が同情を有たないといふばかりでなく、今日デモクラチツクな思想を持つて居る一般の人々からも軍人階級は嫌惡の感情を以て見られて居る。それは彼等が平和論者であるがためにさういふ風に見るのではなく、平和論者の理想から云へば結局軍隊の存在は無用なのであるから之れが存在に對して反感を抱くやうになるのは當然であるが、それでなくとも一般にデモクラチツクな思想の立場から見ても軍隊といふものが一種の厭な感じを起させ易い。此事は軍人階級に對して好も同情のないプロレタリアの思想の罪であるかといふにさうではない。何故なれば如何に極端な思想を持つ者と雖も、眞に人民を保護する軍隊であるならば其必要を感じるのであつて、極端な平和論者でない限りは今日の國際間の實狀から云つても軍隊といふ組織其物の存在は認めなければならないからである。それにも拘はらず軍隊に對して一般の人々が反感を持たなければならないのは何故であるか。

軍隊は一種特別な階級を形造つて居て、そこでは一般國民の思想と調和しない考方が行はれて居る。日本の道路に於ては普通の人民は左側を通行することになつて居るが軍人丈けは右側を通る。之れは卑近な例であるが軍隊と一般社會との關係をよく現して居るものであつて、道を行く時に人民と軍人とはいつも反對の側を歩むといふ處に食ひ違ひがある。軍隊を一の階級とすれば今日既に時代遲れの階級であつて、軍隊自身が常に國

民の思想に對して沒交渉なのであるから國民が軍隊に對して同情を持つ筈がない。勿論一口に軍人階級と云つても其中には少數の例外のあることも見逃せない。同じ士官でも青年士官は今日の時代思想を理解して居る者が少くなく、個人としては一般國民の思想と別段にかけはなれて居るといふこともないが、只軍隊に在るが故に軍隊特有の行動を執り行爲を規律されて居るといふに過ぎない。多數の兵隊の中でも全然教育のない者は今日の思想の何たるかを知らないで軍隊に居る間に自然に軍隊的な思想を持つに至るのは止むを得ないが、專門學校や大學を出た志願兵で、最も常識のある物の分つた連中でも軍隊のやることが一も二もなく好いと云ふ風に批判力を失つては居ないのである。併し之れ等は少數の例外であつて、軍人階級の幹部、即ち權力を握つて居る者の思想は傳統的に時代遲れであつて今日國民の思想と全く調和し難いものになつて居る。然らば何故に斯くの如き軍人特有の思想が生れて來たかといふに、其主なる理由は今日の軍人階級は封建時代の武士階級の位置を繼承して居るといふ點である。勿論我々日本人は其國民性の上に於ても、思想に於ても封建時代の習慣から全く脫却して居るわけではないが、軍人階級に於て特にそれが甚しいことは爭はれない。有體に云へば彼等は今日に於ても猶自分達は一般國民に對し一特權階級であると考へて居ること恰度封建時代の武士が百姓、町人に對して自分達丈けが特權階級であると考へて居たのと同樣である。今日の社會に於ては封建時代のやうに權力の關係が露骨ではないが、未だに彼等の頭の隅には特權階級の觀念がこびりついて居て離れない。殊に我國では維新以來西南戰爭に繼ぐに日清、日露の戰役といふ風に戰爭の數が多かつたことが軍人をして益々此特權階級の觀念を强からしめたが、其結果軍人が日本といふ國を建設したのだといふやうな誇大妄想的な考をさへ抱くやうになつた。人間は一の偉大な力を持つと自分達だけが特權階級であると考へるやうになる。軍人には何人も抵抗することの出來ない兵力、即ち腕力があつて、此反抗することの出來ないといふ點に彼等の偉大さがあると思つて居る。それは恰も今日の富豪階級が金力の偉大さの前には何事も不可能なものはないと考へるのと同じであつて、事實は財閥の下に於ては軍閥もそれに依らなければ存在が不可能になり、財閥の壓迫に對しては軍閥も頭が上らないのである。

更に軍人階級の思想の根本的誤謬は何處にあるかと云ふと、特權階級の軍人は自分のみが眞の愛國者だと考へて居る點にある。眞に國家のために働く者は軍人階級だけであつて、愛國の精神を發揮するためには軍人たる以外に途はないと考へ、國民

も亦教育に依つて愛國者とは護國の責任を負ふ者であるといふ風な思想を吹き込まれ居るので、軍人丈けが獨り高慢な考を有つやうになつた。云ふまでもなく斯んな考は昔の夢であつて今日軍人階級にだけしか通用しない考方であるが、斯ういふ思想を軍人階級が現代に於て抱いて居る處に軍人と一般國民との間に疎隔を來すのが當然であつて、最早今日に於ては斯くの如き思想が成立つ筈がないのである。何故ならば封建時代に於て素町人、百姓と卑まれて居た人々も今日國家に必要なる人々であつて、それが役人であり、教育家であり、若くば勞働者であつても、各々國家の一單位であつて、それを育り立て、それを繁榮ならしむるために各自が共同の責任を持つて居るからである。換言すれば護國の責任は一人の責任ではなく國民一般の共同の責任だからである。軍人は稍々もすると生命を捧げて居ると云ふが、生命を捧げるといふ點から云へば寧ろ今日の勞働者の方がより多く生命を捧げて居るのである。大工場や石炭坑に働く勞働者が仕事のために負傷者や死者等の犧牲者を出して居る數は軍人よりも遙かに多いのであつて、國家に生命を捧げることが愛國の所以であるならば、愛國といふことは決して軍人のみの專賣ではない。尤も玆に或意味に於て軍人の中にも一個の犧牲を拂つて居る者がある。それは一般の兵卒であつて、それは生命を捨てることに於てゞはなく、他の兵卒以外の軍人が報酬を受けて働いて居る時に、彼等は志願兵であるならば一年普通兵であるならば二年間を無報酬で自己の勞力を國家に提供して居ることに於て大なる犧牲を拂つて居る。此意味に於て既に報酬を得て働らいて居る專門士官にはそこに何等犧牲といふものゝある筈がない。報酬があり、恩給があり、死ねば扶助料がつく軍人階級は、それらのものを持たない一般工場の勞働者や、一部の教育家や辯護士等と比較して、共稼して居る仕事の上から云つても獨り軍人のみが愛國心の專賣特許を得たやうな顏をして居るのは隨分おかしなことである。

軍人は國家のために存在して居るといふ責任を負はされ、國民はそれがために税を拂つて軍隊を維持して居る。軍人は陛下に直屬するもので、國家の世話にはならないと云ふ者があるかも知れないが、陛下に直屬することは國家にも亦屬する譯であつて國民に對して責任がないといふことは出來ない。軍人は國家を守護するために存在するのであるから、國民の要求に依つて常に動かなければならないものであるが、今日では軍人は自分のために動くのであつて、軍人の事は軍人自ら處決して國民のために處決しない。陸海軍の大臣は必ず軍人階級の中から出して他の階級の者を排斥するといふのはおかしな話であるが、

これは恰度超然内閣といふものが國民の意志に拘はらず成立つて居るのが不思議なのと同じである。此成立ち得べき筈のない超然内閣に對して國民の同情が集まり得やう筈のない如く、事實に於て超然内閣である軍隊に對して國民の同情が有り得る譯がない。これは國民のためにも軍隊のためにも不幸である。此不幸を除くためには軍人は舊來の軍人特有の考方を棄てゝ將來もつと一層國民的になることが必要である。軍人は國民のために動き、國民の要求に依つて戰爭し、決して軍人の意志に依つて勝手に行動するものであつてはならないのである。

次に軍隊は極端な階級制度から成立つて居る。其極端なることに於て如何なる方面を見ても軍隊の如きはない。無論役所や會社内に於ても階級といふものはあるが、軍隊内の階級といふものはそれらのものとは全然意味を異にして居る。即ち軍隊に於ては下の者は上の者に對して絶對に服從しなければならないのが原則となつて居る。これは或意味に於て必要なことであつて、譬へば戰爭の場合の如きは此原則が破れては戰爭が出來ないのであるが、平常の場合に於て彼等は此原則の意味を取違へてゐはしないであらうか。絶對服從なるが故に上の者は下の者に對してどんな無理でも通さうとする。古參兵が新兵に對する態度がそれであつて、靴で蹴つたり、毆つたりすることは何んでもない事に思はれて居る。斯ういふ場合に於ける兵卒は單に機械として存在するだけであつて、そこに人間や人格を考へることは出來ない。併し軍人教育といふものが元來さういふ風に出來て居るのであつて、人格を抹殺すること、即ち機械となることが軍人の理想なのであるが、之れは非常に恐ろしいことでなければならない。今度の甘粕事件の場合に於ても、假りに甘粕が自發的に大杉等を殺したと見ても、あの場合甘粕の部下の者が之れを助けて殺人罪を犯した事は、若し部下の者が甘粕から命ぜられてやつた行爲だとしたならば日本の軍隊内に於てはあゝいふ場合にどういふことになるであらうか。軍隊に於ては下の者は上の者に對して絶對に服從しなければならないとすると、あの場合甘粕の部下の者は眞に氣の毒な者でなければならない。絶對服從といふことは如何なる不法行爲に對しても一言も反抗することが出來ないことだとするとこれは大問題である　恐らく今日の教育を受けた人々にして自由といふことに就いて考へて居る者にとつては軍隊の生活は堪へられない處であらう。高等教育を受けた者が志願兵になつた場合に彼等の待遇は軍隊に於て比較的寛大であると聞くが、それでも猶彼等が軍隊生活を不愉快なものと考へるのは畢竟軍隊内に於ける「階級制度」や「絶對服從」に對して反感を抱くためである。或は軍

人の側から云ふと、軍隊には規律が必要であつて、それが保たれるためには壓迫的に絶對服從を强ひなければならないと云ふかも知れないが、併し絶對服從といふことは强制しなくとも其意味をよく呑み込ませれば無理がなく實行出來ることなのであつて、譬えば救世軍に於ても「絶對服從」が行はれて居るけれども決して上の者が下の者を毆るとか、蹴るとかいふ風な亂暴なことはしない。尤も救世軍に於ても稍々もすると上の者が下の者に對して職務以外の仕事を命げるので下の者が不服であると云ふことを聞く。救世軍の仕事には絶對服從をして働くが、時には心得違の上官があつて個人的の用事まで權力を振り廻してやらせられるので部下の者の反感を買ふこともあるが、救世軍自身としては全然其點を區別して猥りに上官の威嚴を通させないやうにして居る。絶對服從は機械體操をやるとか、操練をやるとか、軍隊に必要な仕事をやる時には好いが、それは靴下の洗濯をやらせるとか、部下を下僕の如く使ふことであつてはならない。それは軍隊の職務以外のことである。私共は運動競技を見ても軍隊のみが規律を敎へるものでないと考へるが、それは換言すれば運動競技に於ても規律は養はれるのであつて、ボートや、フツトボールや、ベースボールの如き團體競技に於ては主將の命令の下に各選手が服從することに依つて規律は最もよく團體的に統制されて居るのである。アメリカ人の如きは最もよく斯くの如き規律的精神に養はれて居るので、平素兵營生活をしない者でも歐洲戰爭の如き場合には戰場に出て働くことが出來るのである。規律、服從は決して惡い事ではないが、今日軍隊に於て行はれて居るそれらのものは全然間違つたものである。それは運動競技に於ける主將と選手に依つて守られる服從や、規律に學ぶべき點が甚だ多い。

また今日の軍人の間には稍々もすると殺伐の氣風が盛んである。軍隊でもまたそれを獎勵して居るかの如き觀がある。軍人は戰爭の場合に人を殺すからと云ふので平素極端でも元氣な敎育をする。併し兵は凶器であるから猥りに自分の劍を拔いたり、鐵砲を打つべきではない。軍人らしい英氣を養ふために、人を殺すことを平氣でやれるやうに敎育して置く方が好いと考へる者もあるが、之れは我々の國民性の中にある理性で行くよりも「やつゝけて了へ」と云ふ考へ方と同じであつて恐ろしいことである。此考方は今日の軍隊にも警察にもあるが「やつゝけろ」の腕力主義が天下に橫行して居るために我國に於ては常に人を殺すことが絶えない。政治上の意見の相違から反對黨の首領を暗殺したり、富豪を襲つて之れを刺殺したりする。軍隊や警察も常に國家人民の保護の任に在りながら事があると稍々

もすると喧嘩腰に出たがる。之れは國民も軍隊や警察も同じで、どちらもどつちであるが、軍隊や警察は取締る側にあるのであるからもう少し愼重な態度で國民に望まなければならない。人を殺ろすにも近頃では封建時代のやうに慘酷さを伴ふ。大杉事件でも思想上の問題から殺人を行つたのは甚だ非文明的な行爲であるが、此場合大杉だけを殺すことは假りに許すとしても、また甚だ慘酷ではあるが女も一味の者として殺害した事は或見方から止むを得ないとしても、其小兒を殺したといふことに至つては全く罪三族に及ぶものであつて冷血（コールド、ブラツデツド）な行爲と云ふより外はない。これは殺伐な氣風を養ふのは非常の際に役立てるためであるといふ軍人流の考方が生んだ結果であつて、此點から云ふと軍人の思想は現代の文化的傾向に逆行するものであると云はれても仕方があるまい。

更に軍隊に於ける敵愾心の養成といふものがある。軍隊を養成するに敵愾心がないと力が入らぬといふので、軍人は常に敵愾心に燃えて居なければならぬと云ふ處から、其目的で軍隊では假想敵といふものを作つて居る。日本の陸海軍が出來た頃には支那、後には露西亞と云ふ風であつたが、今では手近に假想敵がなくなつたので、さうたると軍隊に用がなくなるので無理にそれを製造することに骨折る。六七年前の話であるが、地方で在鄉軍人會が開かれると、中央から軍人が出かけて行つていろ〳〵話をする。其中に日本は×××と近い中に戰爭をする、諸君は平常注意して軍人としての職責を怠つてはならないと云ふやうなことがあつた。これは明に×××を假想敵と見るものであつて、私は最初此話を疑つたが、更に近頃聞く處に依ると新兵が入營すると兵營の中に幾種かのポスターを見出す。其中の一は大きな俎の上に鯉が乘つて居る。人が庖丁を持つて將に之れを斬らんとして居る。其人が××××で鯉が××である。また猿蟹合戰のポスターがあつて、蟹が次第に足をもがれて行く、(軍備縮少)猿が笑つて蟹が足をもがれて行くのを見て喜んで居る。猿が××で、蟹が××である。更に他のポスターには一本の樹が描かれて居る。赤い着物を着た男が斧で樹を伐り倒さうとして居る。横に青い着物を着た男が悄然と立つてそれを見て居る。樹は××××であり、赤い着物を着た男は××××××である。こんなポスターが兵隊の寄宿舍か寝る處かに掲げてある。これは話であるから其眞僞は分らないが、然しありさうな話である。××の問題は暫く之れを措き、××を假想敵として兵の敵愾心を誘ふといふやうなことは實に國際平和を無視するといふ點から云つて許すべからざることであるが今日實際に於て政治家や實業家の中で××戰爭が起り得ると考

べて居る者があるであらうか。中にも實業家などは大反對であるべき筈であつて、××を得意とする日本としては貿易關係からでも戰爭などの出來る筈がない。排日問題などは比較的小問題であつて、×國に於ても利慾や政治目的から排日を唱へる者もあるがそれは大多數の×人ではない。此度の震災に就いて米國が率先して我國に同情を寄せたことを考へても排日は全米人の意志でないことが分る。或人は米國が寄附金を募つて日本に同情を表してくれたことは感謝すべきであるが、しかしそれはやつても損のないことであつて、東京市の復興に要する何十億の材料を米國から買ふことになれば結局米國は儲けることになるではないかと云ふ。さうだとすれば米國の同情も有難味が薄くなる譯で、五億、六億の儲けをするために四百萬、五百萬の寄附金をしたものだとしか考へられぬが、成程米國にもさう云ふ功利的な考を持つて居る人間も居るかも知れないが、併し此度の勞働者まで進んで寄附を申し出でたと云ふ一般米人の同情は別たものである。小數の利益を目的として居る者もあるかも知れないが、大多數の米人は溢れるやうな親切を披瀝して居るのである。軍人がポスターにまで××を假想敵として描いて居るのは此際大に恥づべきである。軍隊に於てこんなことをしてまでも敵愾心を鼓吹する必要は少しもないのであつて、所謂國家を愛するといふことも、眞に正しい道で國家を愛さなければならない所以を教へたならば、誰れしも有事の際に國家に生命を捧げることを惜しまないであらう。

繰り返して云へば軍人のみが護國の責任ではなく、それは國民全體の責任である。此意味から云つても廣い、正しい意味の愛國心を鼓吹すべきであつて、それに依つても軍人教育は立派に出來るのである。人が右と云へば右と云ふ從來の軍隊教育は軍隊それ自身を害ふものである。二三年の兵營生活で軍隊が厭になると云ふやうなことでは大問題でなければならない。此點に於て、軍人はもつと國民に接觸して、兩者の調和された思想の上に軍隊教育を行ふべきであつて、さうなれば今日の人々の軍隊に對する反感は自然消滅するに至るであらう。それには軍隊が一層國民的となり、一層進歩的となり、一層デモクラチックになることを望まなければならない。

軍事官憲の社會的思想への干入

法學博士　吉野作造

一

最も感謝さるべくして最も恨まるゝやうになつたのは最近の軍事官憲だ。初めに喜ばれて後に嫌はれたと云つてもいゝ。國民の感情をかくまで險惡に轉向した出來事の隨一は言ふまでもなく甘粕事件であるが、之に因つて災害の當初軍隊の盡した多大の功績は、大部分帳消しになつたかたちである。併し乍ら彼と此とは全く別だから、感謝すべきは感謝し、責むべきは責むると云ふ冷靜な態度を我々は國民に希望する次第であるが、兎に角甘粕事件の如き大不祥事を發生せしめた事は　軍事官憲の爲めに誠に遺憾に堪えないのである。

我々は實は平素今の軍隊を困つたものだと考へてゐる一人であるが、併し、誤解してならぬ事は我々は斯くいふたからとて我々の中から出た下級の兵卒を決して敵視してはゐない事である。今度の災害に就て云つても軍隊と國民とは之を機として或

る意味に於て非常に接近した。到る處に兵卒は我々の保護の爲めに配置されて居る。子供達はまた物珍しさうに鐵砲や劍を眺めてゐる。段々日を經るに從つて彼等は遂に兵卒に親しみ、銃劍も時に子供の玩具になる。兵卒は正に子供の親友ではないか斯うした有樣を見て我々はどうしても兵卒を國民の敵だと想像することとすら出來ない。然るに軍隊は確に他の一面に於て幾多の失態を暴露して居る。之等の事實を思ひ廻らす時、我々は遂に之等の失態の原因は一體何所に在るのかを省みない譯には行かない。

そこで問題となるのは軍隊に於ける幹部即ち將校の思想如何と云ふ事である。兵卒には是も非もない。之を善導するも又惡導するも、基く所は將校の心得一つにある。斯う考へて見ると我々は軍隊の何所に考察の焦點を向く可きかに就いて大いに得る所あるやうな氣がする。

二

以上のやうな立場から軍隊と國民生活との關係に就いては色々考へさせられる事が多いが、此所には暫く問題を震災と伴つて起つた最近の出來事に關聯しての軍事官憲と社會運動との關係といふことに專ら考察の範圍を限つて置く。昨今軍隊が嚴しい批判の對象となつて居るのも謂はゞ主としてこの點からだ。別の言葉を以て云へば、戒嚴令の布かれたるを機として軍事當局は警察と協力し大いに所謂社會運動者の取締に盡したのであるが、それが一體適當の度を超えなかつたかゞ論難せられて居るのである。この事は現に問題にもなつて居るし、今後も暫くは論議が熄まないであらう。僕も此所に專ら此問題に就き僕の感ずるまゝを飾る所なく述べて見やうと思ふ。

軍事當局と社會運動との交渉に付き最も人目を聳てしめた出來事は甘粕事件であるが、併し僕は大杉と云ふ特定の人物と軍隊との關係に問題を狹く限りたくない。世間には斯う云ふ人かある。軍人が大杉を殺したのは彼の人柄を非常に有力な革命家でゞもあるかに誤解した結果であると。又曰ふ。大杉は非常に兇惡な人物だから甘粕大尉が身を挺して之を除いたと云ふ所に其の男を買つて遣るの値打があると。斯く大杉と云ふ人物を眼中に置いて議論するが多いけれども　僕の得る所では、甘粕大尉始め軍事當局の多くは決して大杉の人物なり主張なりを理解してもゐず、精々大杉の外貌に因つてその危險性を推定した位が關の山だから、彼を完全に理解した上で手を下したものでない事は僕の敢て斷言し得る所である。だから、軍隊内の一人が大杉を始末したと云ふのは、大杉の樣な種類の人物は全部危險なので、偶々その中の重だつた一人なる大杉が手に入つたのだから、之を始末したと云ふに過ぎないのであらう。現に他の方面に於ては大杉以外の社會運動家で軍隊の刑戮を受けて居るものが若干ある。故に甘粕事件の如きは之等數多き事象の一例に過ぎずして、我々の解決すべき問題は廣く軍隊對社會運動家といふ一個抽象的關係の吟味であると云ふを妨げない。約言すれば、軍事官憲は戒嚴令の布かれたるを機とし、斷乎たる一種の挑戰的態度を以て社會運動家に臨んだのである。是れ實に一つの大なる社會的大問題にして、特に我々の愼重なる研究を促す所のものである。

序でに附け加へて置くが、初め甘粕事件の發表された時、而してその發表の中に甘粕大尉の心事を賞揚する如き文字の散見するを見た時、甘粕程の人物ですら尙この兇暴を敢てす、他は推して知る可きだと僕は考へた。果せる哉、その後の報道は社會

運動家又はその友人等が可成多く軍隊の異常の取締を受けて居ると傳へて來る。今一々その事實を列擧するの煩を避くるが、僕をして無遠慮に云はしむれば、一嫌疑者が東に走つたから、東に續いて走つた奴は皆捕へて仕舞へと云つた風な所もある。俺は今百萬の金を懐にしてゐる。取られては大變だ。と云つて近所に變な顔付をして居る者を皆縛り上げて置くといふ法はあるまい。併し場合は非常災厄のこの際だ。所謂社會運動家、或はその疑ある者は悉く檢束して置かないと萬一のときに申譯が立たないと云ふのであらう。とにかく檢束されたものは非常に多い。中には隨分侮辱を受けたと云ふ者もある。之等の事實を半分本當だとしても僕が敢て戒嚴令を機として軍事官憲は社會運動に對し一種の挑戰的態度に出でたと主張するに大した異議はあるまいと思ふ。大杉事件の如きは實は此挑戰のほんの一つの現れに過ぎないのである。

モ一つ序でに述べて置きたいのは、僕は大杉絞殺をどうしても甘粕大尉一個人の行爲と見ることは出來ぬと云ふ點である。大尉自身は自分一個の行爲だと云ふ。或は然うかも知れない。法廷審案の結果も斯んな所におちるのだらう。而かも僕が之を社會上並に政治上の問題として見るとき、斷じて一個人の私犯を許す譯には行かない。斯く主張する所以は、(一)大尉が大杉を殺すまでには淀橋署の巡査を使つたり、部下を連日引ツ張り廻したり、公用自動車を二臺も引廻したり、剩へ役所を犯罪の場所に使つたり、考へて見れば隨分大膽に職權を亂用してゐるし、(二)犯罪が行はれてから三日間も分らずに居つたと云ふ事は、場所柄だけにどうしても信ずる事が出來ないのみならず僕等の常識は少くとも上司の人々が事實を默認して暫く放任して居つたのだと疑はしむる、加之(三)この事實が公の問題になつたのも實は外部から促された結果で、内部では寧ろその隱蔽を希望したのではないかとさへ疑はるゝ節があるからである。その外甘粕事件以外のあれこれに目を轉ずれば、僕のこの論を裏書すべき尚多くの證據がある樣に思ふが、細かいことは今は略する。兎に角僕は最近の之等の出來事の中に、軍事官憲の社會運動に對する明白なる挑戰的態度を認めずには居れない。尤も之は今に始つた事ではなく、又軍事官憲のみに限つた事柄でもない。が、軍事官憲が此種の事柄に就いては、一番頑固であつたことは周知の事實である。夫れ丈け今度の問題に關しても軍事官憲につき主として之を論ずるのも已むを得ない譯である。

三

軍事官憲の挑戰的態度を論ずるに當り、第一に俎上に上るのは彼等の思想上の立場である。彼等の思想を分析解說するが如きは今更必要もあるまい。只一つ讀者と共によく呑み込んで置きたい點は、彼等は常に何故に自己の立場が正しいのか、又眞に正しからしむる爲めには自己の態度をどう決めればいゝのかと云ふ方面のことは殆んど閑却して、寧ろ、如何にすれば一般世人をして自分達の立場を正しいと信ぜしむる事が出來るかと云ふ樣なことを顧慮するに急なことである。その結果、彼等は偶々自分達の仲間に惡い者があると極力これをかくさうとする。此事は甘粕事件にも明白に現はれてゐるではないか。今年の春頃と覺ゆ、新聞に斯う云ふ記事が出て居つた。某軍隊の倉庫係とかゞ官品を盜み出して密かに市中に賣つた。警察がその證據を捕へ軍隊に之を通報した、すると一旦その好意を謝したが、間もなく之を取消し、軍隊の中から罪人を出しては軍隊の威信に關するとでも考へたのであらう、我が隊では一品も盜まれた覺えはないと云ひ張つて來たさうだ。此通りあなたのものだと云ふ刻印が捺してあると敎へても、兎に角俺の方には一品も失くなつたものがないと頑張り通したと云ふことである。斯くの如く自家の惡をかくしてまでも自らの立場を世人に正しいと盲信せしむるに急しいのだから、惡をかくすどころか、遂には自分を兎や角批評するものを盲滅法に排斥罵倒すると云ふ事になる。斯うなるとまるでヒステリックだ。斯くして彼等は自ら自分の立場を改善向上するの機會を失ふのであるが之と同時に相手方の立場を適當に理解すると云ふ雅量を麻痺せしめる。さればこそ彼等の社會運動者などの立場に對する理解の程度の如き、驚くべき程淺薄を極めてゐるではないか。新聞などには甘粕大尉をほめて平素思想上の讀書を嗜み社會問題に就いても造詣が深かつたなどゝ傳へるのがある。同じ樣な讚辭はなく他の人などの批評の中に見ることがあるが、我々から云ふと寧ろ可役笑しくして堪らない。思想問題のことは、殊に昨今の樣に色々のことが微妙な點にまで深く考へ詰められて居る時代にあつては、我々のやうな學問を本職として居る者にとつても、適當な理解を得ることが中々容易でない。況して忙しい本職を持つて居る者の片手間などに行られる仕事では斷じてないのだ。思想問題の理解を雜將棋や謠曲などと混同してはいけない。尤も道樂に讀む分には思想問題の研究は誠に結構ではあるが、職務上の處理に思想問題の判斷が必要だと云ふのなら、彼等はその門外漢たる地位を謙遜に自認して、須く敎を專門家の門に請ふべきだ。而して僕の寡聞たる、未だ一回も局に當る者の之等の點に關し敎を專門家に請ふた例を聞かない。寧ろ專門家を忌避し

その一知半解の見を以て極めて安價に重大な思想問題の判斷を決めるではないか。而して一二冊の無責任な安本を讀んだ者を直ちに推して云ふ、彼は思想問題に精通するの士だと。滑稽を通り越して寧ろ危險千萬な話である。之等の點に關し尤も危險な輕斷を敢てするのは軍事官憲だ、その輕斷の基礎となる思想の尤も淺薄なのも同じく軍事官憲だ。我々は切に彼等に望む。思想問題の判斷に就いては全然その識別能力なき事を自認せられんことを。少くともそれが專門外の仕事だと云ふことを自認するだけの謙遜を失はさらんことを。

四

軍人が思想問題の判斷を誤ると云ふことは、それが一個人の見識と云ふ範圍內に限らるる間は、過誤と雖も亦大した妨げもない。けれどもその判斷が彼等の職權の行使の上に這入つて來る時に、此所に非常な弊害と危險とが現はれる。我國の軍隊には、權限外の問題に關して勝手な判斷を下し、この判斷を輕々に自己の職務執行に聯關せしむる弊があると云ふ非難は豫ね豫ね高い。所謂二重外交の非難の如きはその最も著しきものであらう。外交上右すべきか左すべきかは外務當局者が判斷する。軍隊にその判斷に基いて或は右し或は左すればよい。然るを外務當局が右すべしとする決定を不服なりとし、自ら左するの方針を立てゝ之によつて勝手な行動をすると云ふのでは、國權の統一ある行動はどうして保てるか、惡い奴は捕へろと國家は命令する。何が惡い奴かを決定するものは外であるのに、豫て懷く所の頑くなな思想に基き、或る種類の集團を悉く惡者扱ひにすると云ふのは、是れ權力の濫用でなくて何であらう。併し之は實は軍隊に限つたことではない。特殊の偏見を先入主とするは殘念乍ら我國官界の一般に行き亘つてゐる通弊だ。何れにしても、官憲が斯うした態度に出て我國の思想界の論難が著しく撹亂され、從てまた我國の文化的發達が著しく妨げらるゝことは、誠に殘念なことである。

殊に官憲の斯の態度が社會運動に對する挑戰として現はれる時に、我々は最も大きな危險を其間に看取する。所謂思想戰の何者たるかに關する講釋は此所に省くが、國家が、泥棒とか詐欺とか殺人とか、百人が百人まで惡いとするに決つた事に對しては、社會防衛の任務を有する一方の當事者として其等の罪惡の除斥者懲罰者として現はるべきであるが、善惡各々立場を異にする思想戰に對しては、絕對に超然的態度を持することが必要なのである。これ思想は思想を以て戰ふべしとなし、又國權の關渉を非とするの論ある所以である。然るに我國の官界こと

に軍事官憲は動もすると社會的思想戰に我れから進んで干入を敢てする。挑戰的態度を以て社會運動に臨むは、これ取りもなほさず國家をして思想戰の一方の當事者たらしむるものではないか。行司は東西の孰れにも加擔してはいけない。國家は須らく思想戰に對しては嚴格なる行司でなくてはならぬ。行司をして角力者の地位に立たしむるが如きは最も愼しむべきことである。

大正志士論

法學博士　渡邊鐵藏

大杉榮の虐殺事件はそれが憲兵將校の手によつて行はれたこと丶、婦人小兒を合せて殺戮したこと丶によつて甚しく世間の耳目を驚かしたようである。大杉氏の思想行動の是非は別問題として何等かの機會に所謂危險思想家に對して此種の黑手の下るべきことは屢々想像されぬでもなかつた。數年前國粹會の組織された當時私は九州の一角に在つてたま／＼其地の支部發會式の行はれんとするに當り或者より國粹會は屢々此地に出入する社會主義者を暗殺することを一の目的とするものであるといふことを得意げに告げられ驚愕したことがある、其の當時私は本誌上に於いて社會主義者より更に危險なるものはむしろ國粹會であることを論じた。國粹會は成立後屢々勞働爭議に干涉し普通選擧運動を阻止せんとし、其他間々心ある者をして國粹會の行動が遂に却つて内亂革命を激發するの誘因を作りはせぬかと危ぶましめたが幸にしてさる事も無く却つて今回の大地震に當り非常に感謝すべき有意義の活動をした、然るに思ひきや今回の大地震、騷動に際して陸軍憲兵中より暗殺の暴擧をなす者の出でんとは。如何に一、二の急進思想家を葬るとも、之によつて彼等の續出することを防ぎ得べきか。もし所謂危險思想家が社會の是認せざる實際的行動を計畫するに至れば充分に警察力を以つて防禦すべく必要に應じて或ひは法を改めて追放罪を

設け或ひは嚴刑に處するも可である。法に依らず、しかも暗々裡に國民を虐殺する如きは自ら國の秩序の破壞を企つるものであつて、しかもそれが秩序維持の責任者によつて行はるゝとは殆んど啞然として評するの辭が無い。溫厚、後進の敬重する六十一翁志賀重昂博士をして將來我國に社會主義の隆昌を來すことあればそれは甘粕某の然らしむる所であると叫ばしむるに至つたことは誠に悔むとも取返しの付かぬことである。或者は甘粕某を乃木將軍と比較して崇拜せんとしてゐる、之は乃木將軍を辱しむること甚しきものである。乃木將軍の殉死に對しても幾分理論的の批評はなし得ようが、純潔なる信仰に充ちて生を國に獻じた嚴肅な態度に對しては何人と雖も自ら崇敬の念を禁じ得ぬであらう。之に反して甘粕氏は私見の相違を以つて一急進主義者を殺し、加之婦人、小兒に至るまで之を虐殺して其の犯跡を掩はんとしたことは、其行爲の不法、社會の秩序に對する脅威であることは勿論、其の行爲の結果の社會に及ぼす惡影響を覺らず、又其の行爲の殘忍なりしこと、又自ら免れんとし犧牲的精神より出たるもので無かつた點等に於いて何として之を尊い犧牲として見ることが出來ようぞ。

甘粕氏の部下數名が虐殺の補助をなしたること。犯罪が憲兵隊內にて行はれたることを見ては此の事件が甘粕氏單獨の意思によつて行はれたるものなるや否や疑無きを得ないが、事既に法廷の裁判を俟つ以上は他日之を知るの期があらう。然 ながら若 之が甘粕氏單獨の意思より出たるものとしても陸軍部內少くとも憲兵隊內に於いて此種の行爲を是認するの思潮充滿するにあらずんば何んぞ敢ゑて部下の兵士が大尉の命に甘んじて殘虐を忍むで一身上危險なる行爲をなそうぞ。甘粕氏の行爲は勿論、淺慮殘忍の譏りを免れぬが、譬へ甚しく誤れりと雖も國を思ふの情より出たること明かなれば幾分其の罪を惡むで其の人を惡まずとの斟酌もなし得ようが氏の如き思想否行爲に出でんとする者が陸軍部內否全國に多々ありとすればそは由々敷大事である。

甘粕氏の行爲は日淸、日露の兩戰役に國家の難を救ひて耀々たる名譽を擔ふたる日本陸軍に對して拭ふべからさる泥を塗りたるのみならず、日本國民に甚しき不面目を與へたものである。然るに陸軍部內及び多くの國民の內に氏の行爲に謳歌する者あるに至つては驚かざるを得無い。軍隊が政治、思想問題に積極的に干涉せんとするは其の分を忘れたるものであるのみならず頗る危險な事である。況んや今回の如き暗殺行爲を庇護せんとするに於てをや。先般我々十數名が甘粕事件の事實の眞相の公表を當局に建議するや、數日前北海道膽振國からわざ／＼

手紙を以つて、何々志士組合の名の下に三宅雪嶺、堀江歸一、三宅驥一の三博士及小生を目して不逞の徒とし決死隊を組織し之てを撲滅せんとの强迫狀を寄せ來つたが、是等の所謂志士は匿名であるから志士組合といつても其の實は無教育の小人輩の下劣な惡戯に相違無いから我等は此種の恫喝に恐れる者では無いが、かゝる無知の輩の多いことが遂には世を誤り國を亂す基となりはせぬかと悲まざるを得ぬ。維新の志士は堂々の議論を張り天下に横行して日本國の統一と充實を圖り完く之を先進世界の舞臺に伍せしむることに成功した。大正の志士は名乘りを擧げることさえ出來ぬ卑怯者で御殿女中の如くたゞブツ／＼といふ。國を思ふは宜し、能力無く思慮無きものがあまり國ばかりを思ひ過ぎると遂には自ら無爲にして終りたゞ國を害ふのみの結果となる。大正の志士よ日本をして露國の二の舞を踏ましむること勿れ。

國を思ひ君を思ひ民を思ふ、私は今こゝに其の輕重を論ぜむとする者では無い。然しながら私は徒らに國を思ひ、君に盡すことを標語として高調しながら事實自らは國のため君のため何事も出來ぬ人間が、何等空宣傳をせず、忠義振りを見せず日々營々として國家社會のために有用な仕事をしてをる人達をかれこれ批評するのは生意氣千萬だと思ふ。思慮淺き若い者が、前後を辨へず急進思想に膠着するのも危險であらうが、徒に志士氣取りで脅かされるのも甚だ危險である。突然の災害のため或小學校長が陛下の御眞影を取出すか、一千の兒童を救出すか二者何れか一つより出來なかつた場合に校長が御眞影を捨てゝ兒童を救つたならば盡忠主義者は其の校長を不忠者と罵るかも知れぬが、陛下は必ず其の小學校長を御賞めになるに相違無い。今回の震災の際東京市長が直ちに御機嫌伺ひに參内する爲めに「フロックコート」を自宅へ取りに使はしたが自働車が通行不能で歸つたゝめ市長は參内を止めたといふ市長の自談を或る新聞紙で讀むだが、形式的盡忠論者は如何なる手段を盡しても直ちに參内せざりし市長を不忠と責めるかも知れぬが、萬一市長があの當時に參内してをつたならば此赤子危急の際に何事かと陛下の逆鱗に觸れて直ちに市長を罷められたに相違無い。あり來りの盡忠論者な陛下の諸君等よりは遙に聰明であらせらるゝ事を忘るゝ勿れ。

社告

東京振替貯金課は震火災の爲めに焼失しまして當分利用が出來ませんから、今回新に

長野三二〇五番

に振替口座を開きました、當口座は長野の振替貯金課に屬するので、受拂事務が東京とは餘程閑なやうですから、多少迂廻はしますとも本社に受入れる迄の時間は從來とは餘り相違はないと思はれます。

中央公論社

社告

近來弊社々員と稱し、大阪市附近を徘徊いたし居るもの有之やに聞及び候、弊社は社員を派して直接に、弊社發行の二雜誌の購讀、又は廣告揭載其他金錢に關する勸誘を試むる等は絶對に無之候に付萬一かゝる輩の立廻はり候場合は、其筋へ御引渡し相成度右謹告仕候也

十月十五日

中央公論社

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同じだと云ふ
煙草も一度「カロット」を口にすれば
斷じて再び煙草は吸えぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!
實業之日本代理部と榮川堂主人

謹震災御見舞
工場無事
別記の處で營業開始致し
候間倍舊御用命願上候

昨年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御注文がありました店員が此事を主事に報告しますと主事は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御説明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて與れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロット」發賣に到る迄の苦心と確心を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好な方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫して其方は「カロット」を口より放して今度は俗煙草をお吸ひになりましたが、社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草節吸へないですね－、驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ、」「僕もやつて見よう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が総立ちになつて「カロット」を取り上げてお試しになりました。「やあこれでは煙草は吸へませんね－」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞賛下さいました、此處で更に店主は口を開いて一度「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懐を述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此の品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

弊堂は日比谷交叉點から銀座に向つて行けば右側八軒目です、何うか一度誰方も御來店の上御試しの上ニコチンの中毒の害からのがれて下さいまし、最後に弊堂は確信を以て次の事を斷言します、其れは「萬一御來店御試吸の上煙草が直ぐに廢められない方は其儘「カロット」を壁に投げつけてお歸り下さいまし……」

特徴

外見少しも俗煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適度朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に溫雅なる香氣と忘れ難き清凉なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他散歩等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし。

一 日、英、米專賣特許出願中

カロット味（百日分）金貳圓
カロット具（永久使用 銀槙様入）金五拾錢
同 象牙サック入 金壹圓五拾錢

一組

送料 内地十八錢 海外四十八錢
書留送料 内地卅五錢 海外五十五錢

東京府大森不入斗四五壹

榮川堂

電話丸の内一九一七　振替東京五二九壹壹

御注文は振替利用を便とすれども御都合によりては郵便にて御申越次第引換小包にて送品可仕候



灰燼に歸して了つた江戸名所

矢田挿雲

○

今を去る三百三十三年前の天正十八年八月ついたちに徳川家康が、駿府（靜岡）から急に轉任して來た時の江戸は十數個の寺院と百戸ばかりの民家とが、茫々たる草原の中に散點せるのみであつた。品川、澁谷、富塚（戸塚）、瀧野川、西ケ原の宿々は、もちろん江戸以外の土地であつた。是等の宿々と江戸の町とを連結するものは、草の中に隱見する野道があるのみで、その野道をあゆむことは云ふまでも無く一種の旅行であつた。所謂たびびとは、偶々路傍に一二軒の百姓家を發見すれば、助け船に逢つた心持で煙草の火を乞ふたり、水を無心したりした。

家康の入城の日はそくばくの衞兵を從へ、馬上ゆたかに見果てぬ草原をながめつゝ、澁谷道玄坂の方からやつて來た。路傍の百姓家から胸をはだけた嬶さんなどが飛び出して、新來の領主を仰ぎ見た。家康はねんごろに目禮を返しつゝ、心のうちでは早くも都市經營の方針をめぐらして居た。貝塚（半藏門外）へ突きあたつて、あれから城へ入つた。そうして太田道灌の築きしといふ名だゝる江戸城が、思つたよりも粗末なのに驚いた。本丸、二の丸、三の丸など名丈けは立派であつたけれど、そして又それ〴〵の配置や容儀などの要害はさすがに堅固であつたけれども、なにさま板屋根や藁ぶきの建て物がとび〴〵にあるのが、城といはんよりは寧ろ風流人の住む隱宅のやうに思はれた。

八月から九月へかけて駿、遠、參、甲、信五ケ國の數萬の家臣が家族、家財と共に續々移つて來た。今の言葉で云へば食料品問題、住宅問題、その混雜は一と通りでなかつた。その頃の江戸城は北が山地で東が海であつたから、住宅は自然、西から南にかけて營まれた、草を刈りそげ地行もせずに、思ひ〳〵の場所へ簡素な假家を建てゝ、それを陣屋と名づけて僅かに膝を容れ辛うじて雨露を凌いだ。陣屋と云へば大層に聞えても、其の實際は現在の燒跡を充塡しつゝあるバラツク建てなどよりも遙かに貧弱なものだつたに相違ない。それ以前平川村即ち今の大手町、局澤（つぼねざは）即ち今の吹上御苑、本丸邊にありし寺院の數約二十、神社の數四、民屋百ばかりに過ぎなかつた江戸が、家康の入國と共に急激に膨脹して人家櫛比し、數年後には車馬絡繹の都會となつたのである。

家康の入國當時局澤は寺町で江戸の寺院の殆んど全部がそこに在つた。普通の民家は平川村の方に在つた。家康は旗下の士を成るべく城のすぐ近くに住まはせる必要上、先づ法恩寺、日輪寺、吉祥寺、神田明神、築土八幡、平河天神、山王權現などを立退かせて、そのあとへ武家屋敷を按排し、猶ほ大番衆の爲めに番町を拓いた。總じて云へば大身は城に近く小身は遠く住まはせた。それが濟むと神田山（駿河臺）の陵巒を削り、其の土を以て今の常磐橋、呉服橋から外の汐入り地三十餘町四方を埋立てゝ市街地とした。全國から集まる商人等我も〳〵と土地の拂下げを願ひ出でたが、もとより代價を要しなかつた。日本橋から新橋までの商業區はかくの如くにして海面に出來あがつた。商人等は區々に積み上げられてある埋立用の土を勝手に持つて來て、地ならしをして葭簀張りの腰掛茶屋などを建てた。

今回の燒跡に建つた葭簀張りの一品洋食店などを見て、私はそゞろに三百年前初めて江戸が作られんとせし頃の銀座界隈を想望するのである。

震災當時、私はまだ暖かい灰を踏んで鈴川燦橋の跡を見て廻つた。私が最近四年の間、ペンを鍬に代えて耕し來りし「江戸から東京へ」の跡と、それに對する私の限りなき愛著とを併せて祝融氏は見事に燒き拂つた。私のこの江戸遺蹟は麹町を發し、京橋、日本橋、神田、本郷、下谷、淺草、深川、本所の九區を遍歴し今將に小石川から山の手へかゝろうとする際であつたが、昨日まで私が異常の親しみを以て研究の對象とせし町々は、江戸時代からの懷き遺痕もろともに大部分灰となつた。不思議なことに私が震災當時書きかけて居た水戸屋敷跡なる砲兵工廠が半燒に終つて、あれから奧の小石川を保全したのと、私が之から書くことになつて居る牛込、四谷、赤坂、麻布、芝の各

區が芝の一部を除く外は殆んどすべて火災をのがれて、江戸から連續せる町の姿も、尊き史跡も保全し得たことである。

○

遺れる史跡の全きを慶し、すでに卒業せし史跡巡禮記が下町方面の舊東京を語る最後のものとなりしを弔しつゝ、私は燒跡から燒跡へさまようた。私は思ふところあつて本所被服廠內の屍體の山を見物するに忍びなかつたゞけで、その外至るところの燒跡を弔ふた。湯島臺や上野の山に立つて下谷、淺草一帶の焦土が大川の彼方遙かに本所、深川へ視線を越えて展開せるを遠望せし時、私の眼から知らず〳〵淚が落ちた。夕方は東京市の地平線から直ぐに月が昇り、反對の方面には靖國神社の鳥居と愛宕の岡と富士山とが東京の何處からでも見られた。

夜になれば燒跡のバラック小屋に提灯やランプがともり、銀座や日比谷には消劍が出た。東京から大森の自宅へあるいて歸る途中、私は自警團にとつかまつて竹槍を擬せられたり、懷中物を調べられたりした、津浪のおそれ、來襲者のおそれ、食料品の心配、餘震と放火の心配、親しき者の安否の氣づかいなど誰にも共通せし境遇に生ずる感情の外に、江戸から續いた東京の大部分が、今に至つて全く連鎖の糸を中斷されし絕望と悲哀とを痛感せずに居られなかつた。

約六十年前江戸が東京になる際に失はれたものは、上野東叡山の寬永寺のみであつた。江戸を兵火に委せざりし功は全く西鄕隆盛と勝安房のおかげである。寬永寺の跡なる上野公園は今回の火災をのがれて十數萬の避難者を救ふた。併し山の腰をめぐる一帶の民家と上野停車場と寸足らずの門で名高い廣德寺と二長町の市村座などを含む區域が燒けて其の火が三輪の方まで延びた。

上野停車場は我國私立鐵道會社の始祖たる日本鐵道株式會社の列車發着驛として明治十四年寬永寺下寺の跡に建設せられ、同三十九年鐵道國有と共に政府のものになつたので、赤毛布の門戸と蔑視されては居たが、乘降客の數は日本第一であつた。今は上野公園の正面の廣場を廣小路又は山下と呼ぶけれど、維新前は今の上野停車場の前あたりの火除地を山下と呼び、廣小路と共に見世物小屋や露店が人足を引き、年中祭りのようであつた。現在の山下の牛屋と天麩羅屋の間を入つたところにあつた五條天神も燒けた。此の天神は太田道灌以前から上野の天神山(即ち現今の擂鉢山)に鎮座せしを、寬永寺創立の際立退かされたので江戸有數の古い神樣であつた。玆には大石良雄の槍短册や大高源吾の木刀などが寶物となつて居たが、うまく持出されたかどうか。

廣德寺の門はすづまりの締に恰好が整つて居るので名高かつた。廣德寺は天正十九年箱根の湯本から江戸神田一口橋（昌平橋前身）に移り、寛永十二年現在の所へ再轉して以來、本堂は明暦、明和の大火を初め數度の火災に類燒したが、門丈けはその都度燒け殘つた。寸足らずでいゝのだといふ說と、やはり怪我の功名だといふ說と二說あつて八釜しい門である。元祿年間の寛永寺法親王は

『江戸の地勢は南に海を控へ北は山に遠く東西明け放しなれば風行き高からず、かの門が普通の門より一尺ばかり低きは能く風の害を避くるゝみならず、年々に人家の稠密となる都に在りて火難をも防ぐにたよりよからん』

と解釋された。事實は此解釋の通りであつた。境内には加州侯を初め十八大名や旗本の立派な墓があつて、今度それがすべて往來から見えるようになつた。

佐倉宗吾が直訴狀を突き出したと云傳さるゝ廣小路の三橋は、昔のように木造でないから花崗石の欄干が焦げた丈けである。市村座も由緒の古い劇場であつた。寛永十一年村山又三郎が葺屋町に興行したのが始りで三代目市村宇左衛門の時から市村座と稱し、天保十三年猿若町に移り、明治二十七年に現在の所へ移つたので、六代目菊五郎に贔屓する者の歡樂鄕であつた。河内山宗俊の邸址に營まれし練塀町の鳥居『河内山』も焼けて、宗俊の居間だつた一室を再び見ることができなくなつた。

東京市の貧民窟と稱せらるゝ萬年町も、東京中で一番物價の安い所と稱せらるゝ竹町も長者町と共に同じ灰になつた。

電車道を挾んで湯島天神と岩崎邸は火をのがれたけれど、あれから池之端仲町は丸焼けになつて、錦帶園の金看牌も多分燃えたらう。それは水戸黄門光圀卿が萬病錦袋圓と揮毫し、それを取卷く上り龍を左甚五郎が彫つた御立看板で、而かも二面とも保存されてあつた。錦帶園の娘お蝶が明治四五年頃、不忍池の白蛇に見込まれて池の中へ吸ひ寄せられたといふ怪談が傳つて居て、その有樣を描いた油繪まで御丁寧に店頭に揭げてあつたが、あんなものは焼けても惜しくない。

河内山宗俊の義弟の直侍が新吉原大口屋のおいらん三千歳の許へ通つた入谷の寮は、下谷區新坂町子爵前田利同氏の別邸がそれだといふが、前田子爵邸は勿論のこと恐れ入谷の鬼子母神で響いた眞源寺も、樋口一葉女史の作で名高い龍泉寺町も、お酉樣で賑はふ鷲神社もすべて焼けた。

天明五年の秋に旗本藤枝外記と新吉原大菱屋の遊女綾衣とが心中せし箕輪の隱れ家の蹟も、それと指さすことはできなくな

つた。『君と寝ようか五千石とろか、なんの五千石君と寝よう』といふ箕輪心中の直ぐ後ちにはやつた唄も次第に忘られるであらう。

○

全部火の海となつた淺草區の中で、淺草寺と傳法院と門前の料理屋大坍だけが殘つた。信心家の間に『火の神のお不動さんでさへ燒けなすつたに、觀音樣が助かつたのは、なんとも早やあらたかなものだ』といふ信仰が非常な勢力を得つゝある。昔は本尊が火事の度に本堂を出て榎の樹へ避難したと傳へられたものだが、今度は銀杏の樹から水を噴き出して本尊を守つたと傳へられる。新東京の街路樹をすべて銀杏にしようと云ふのは多分其のためであらう。兎も角我々には燒けなかつたといふそのことが何より有難い。『日は暮れて野には臥すとも宿借るな淺草寺の一つ家のうち』といふ歌で淋しがられた石枕（いしまくら）の古跡は、一基の塚石によりて僅かに保存されて居たが、今度こそ湮滅するかも知れない。私はあの話が頗るきらひだから古跡なども湮滅した方が好いと思ふ。

仲見世が歌仙茶屋即ち二十軒茶屋と、珠數屋、玩具屋などの變形であることは知つて居ても、紅梅燒の萬年娘の後半生と夜嵐お絹の出した半襟店の跡を知るものは尠い。お絹が不行跡のために大久保家を出され、二十軒茶屋寄りの右側へ店を開いたところは大した人氣であつた。職人も坊主も半襟を買ひに來たといふのはヨタだろうが、お絹の切髮姿のあでやかさは、昔の廿軒茶屋の美人を代表せし吉野屋おゑんや島屋のお金などにも劣るまいと噂された。それは丁度維新の代り目であつた。お絹は仲見世時代に小林金平に見染められて金平の妾になり、且[illegible]僞に溺れて金平を毒殺したのである。お絹が金平を殺した猿若町の妾宅も、それから一度轉宅して其處に捕はれた駒形堂わきの家も、樣子が變り代りになつて殘つて居たが、今度はそれも灰となつた。

駒形堂は廣重や北齋の繪にも度々描かれて、隅田川名所の一であつた。駒形は駒掛けの轉訛で、昔は淺草寺境内の繪馬堂であつたと傳へられて居た。或はそうかも知れない。二代高尾が仙臺侯伊達綱宗に送（おく）りし手紙に『けさのお別れ、浪の上のおんかへり路、おん館の御首尾はいかにと、忘れねばこそ思出さず候かしこ』とあつて

君は今駒形あたりほとゝぎす

といふ名句を添えたので、駒形の印象は首尾の松と切放つてもいつまでも艶であつた。

首尾の松は初代のも二代のも枯死し、今のは文政年

つぎし三代目であつた。首尾の松はヒヾの松即ち海苔粗朶をうゑつける目標の松であつたといふが、海苔粗朶が品川から大森方面へ移つて以來、首尾の松には藝者を乘せた屋根船がもやつて、爪彈きの音が靑簾から洩れるようになつた。高等工業、厩橋稅務署、東京電燈淺草の發電所、藏前專賣局などを包含せる四萬坪ほどの區域は、舊幕時代に武士の祿米を貯藏せる米藏であり、それと道を隔てし向う側には札差業者百九軒が裕富な家作をつらねて居た。その家作の俤を殘せる仕舞家風の店屋が、まだいくらか殘つて居た。五萬兩の遊蕩費を使ひ果した十八大通の隨一大口屋曉雨の隱居した家も北元町五番地にあつた。藏前の札差と云へば松前屋五郎兵衛とか夏目成美とかいふ名物男の名前と共に、歌吹海裡では一歩もゆづらず武士に楯突いた藏前かたぎや、常に流行の魁を成せる藏前風俗などが想ひ出される。近年藏前と謂へば高等工業を意味したのと面白い對照である。今回淺草の火は三十分間に十四ヶ所から發したが、折しも高工化學研究室には間々田助教授が油の試驗中であつた。その油に火が入つて茲ゝ亦火元の一となつたので助教授は責任を感じ、看視者の隙を見て隅田川へ投身自殺した。山内相生署長の殉死說と相俟つて悲壯の感を與へる。

○

三味線堀の甚内橋は日本三甚内の一ち、一番タチのわるい幸坂甚内にちなんだ橋で、橋畔の幸坂樣即ち永護靈神は瘧の神樣として東京人の信仰を集めて居た。幸坂甚内かれ何者ぞといふに初めは一介の不良浪人、遊蕩費に窮して辻斬を働き師の宮本武藏に破門され、後ち專門の强盜となり捕はれて鳥越明神傍の刑場で磔にされた。息を引とる際に『われ持病の瘧さへなくばオメ〱捕はれんや。今後我を祈る者は瘧を癒しめん』と云つたとかで、信心の徒は紙片に願文を認め表に幸坂樣とか甚内樣とか書いて納めるのである。强盜を神と祀るさへあるに、之に向つて御利益を期待するなど甚だしく馬鹿げて居る。其等は須らく新東京の社寺から排斥すべきものであろう。

幡隨院長兵衛や助六を追想させる花川戸から奥、山の宿今戸、山谷堀を越えて橋場、貧民窟の玉姫町、田中町、吉野町、新吉原、千束町を包む火は下谷の東のへりを舐める焰と連續した。

『夕ぐれに眺め見あかぬ隅田川、月に風情を待乳山、帆かけた船が見ゆるぞい、アレ鳥が啼く鳥の名の、都に名所があるわいな』

といふ端唄で知らるゝ待乳山金龍山こそ今を去る五百七十年前、足利尊氏が新田義宗に追ひまくられて逃げ込んだ石濱城だ

といふ說があつて、淺草寺界隈が汐入地であつた頃から丘陵であつた。吉原が日本橋から現在の所へ移轉後山谷堀は猪牙船の衝路に當り、眞土山または待乳山といふ名も急に艶つぽく聞え出した。淺草寺に屬する辨天宮は花柳社會の信仰厚く、供物の大根が常に山を成した。拜殿の天井に狩野南清が描いた雲龍の繪や本殿極彩色の格天井など惜しいことをした。裏へ廻ると水に臨める大銀杏の下に戸田茂睡の

『あはれとは夕越てゆく人も見よ
　　待乳の山にのこす言の葉』

とした碑や、十七世杵屋が斷絃を供養せる糸塚などはそのまゝ無事である。

橋場の總泉寺は千葉介守胤、齋藤別當實盛、平賀鳩溪、寺門靜軒、根本通明などの墓で有名だが、謠曲『隅田川』に傳へられし淺茅ケ原のほとりは、すべて小民家が建ちならんで家庭工業の巣窟となつて居た。梅若が人買藤太に捨てられ『尋ね來て問はゞ答へよ都鳥、すみだ川原の露と消えぬと』と詠んで息絶えたのを知らずに、母親班女の前は遙々京都から尋ねて來た。こゝまで來て漁師の群から梅若の最期を聞くと班女の前は『人々此の土を穿して今一度此世の姿を母に見せさせ給へや——殘りても甲斐あるべきは空しくて〳〵、有るに甲斐なき母木々の……』と歎いて遂に發狂した。それから頭を剃りこぼつて梅若の死骸を埋めし土饅頭のほとり、淺茅ケ池に面して庵を結び、朝々の水鏡に己が俤を我が子と幻覺し『只一言母上と云ひてたべ』と泣き沈む。純なる母愛は千年前も今日も同じである。今度の火事に多くの母親が、どれほど純潔高貴な愛で其の子を守つたらう。そうしてこの純愛の氣高さによりてのみ、女が男に頭を下げさせることの出來るのを悟らせたらう。

總泉寺の前——今は道路になつてゐる邊から、道路を越えて人家になつてゐる邊が淺茅ケ原であつた。淺茅ケ池もとくに埋まり、梅若を葬つた塚山だけが人家の間に殘つて居た。班女の前を祀りし妙亀尼辨財天も、十年前まで塚山の傍らにあつたが、其の後向島木母寺へ移された。總泉寺が燒けた以上、木母寺の方が愈々梅若の本家といふことになつて傳はるであらう。

○

淺草公園九萬六千坪の地域は、明治十九年頃までは入谷田圃に續ける水田であつた。中央の池は水田の一部を殘して更に開鑿したものである。今や池の半圓は強烈な活動の繪看板と安價な音樂とでとりまかれ、淺草人種と稱する田舍くさい現代的人種のかもす雰圍氣の中に、たゞれた哀樂やダレた罪惡がはぐゝまれた。その哀樂と罪惡との音調、色彩、感情を象徴する活動

凌雲閣は、千人を容るゝに足るもののみ数へても二十何軒かあつた。

九階目から折れて千束町へ落下した凌雲閣も舊東京の一名物であつた。地盤の建坪三十七坪五合、高さ二百二十尺、五萬五千圓の工費で明治二十二年十月落成し十一月十三日から登覽を許し大人六錢、軍人小兒半額づゝの登覽料を徴したとある。長岡の生糸商福原庄七が巴里のエッフエル塔か何かを見て來て其の眞似がしたくなつたものだといふが、東京人は初めあぶながつて居た。然るに明治二十七年六月二十日の大地震に何階目かの煉瓦に小龜裂を生じたのみで、ビクともしなかつたから、それ以來大に信用を博し登覽者の數を増すに至つた。十階までは八角形の總煉瓦で十一階、十二階は木造であつた。廿七年の地震後内外から帶鐵を卷き鐵條を以て緊縛したので、どんな地震にも大丈夫と思はれて居たのに、今度は挫折して十二階劇場の登場俳優全部と見物の多くを殺した。折れた十二階は繪ハガキにして昨今坊間で賣つて居るが、その殘骸は震災數日後工兵隊の手で爆破された。山の無い東京に登覽用の高塔があることは色々の意味で必要であるから、今度はモツと丈夫でモツと高いものを建てることを望む。是も東京名物の一なる吾妻橋は橋上數千の群集と共に焼落ちて、鐵骨は飴の如く曲つた。此の橋が明治二十年十二月を以て落成せし頃、あの人道車道を隔てる鐵橋の形式がどんなに珍らしがられたかは、吾妻橋と一緒に畫を描いた錦繪が飛ぶように賣れたのでわかる。隅田川に永久的の橋が架かつたのは、約二百六十年前の萬治三年に兩國橋が落成せるを嚆矢とし、次が元祿六年十二月の新大橋、次が元祿九年の永代橋、次が安永三年十月の吾妻橋といふ順で、廐橋は明治になつて出來たのである。兩國橋は明暦大火に多くの溺死者を出せし經驗で、軍事上の反對論を斥けて架設された。德川時代には戰爭の爲めに船橋を架けたり撤したりしたが、江戸時代になつて隅田川に橋が固定せしは平時の交通よりは寧ろ非常立退の爲めであつた。

然るに今回の震災は狹い空地や細い通路は却つて危險なることを教へた。廣い空地へ無限に人を送り得るだけの通路が無ければ不安である。新東京の設計に從へば白髭橋と吾妻橋との間、廐橋と兩國橋との間、新大橋と永代橋との間、及び月島から築地方面に渡る所に新橋を架するそうである。殊に兩國橋が明暦大火の供養にできた回向院と關連せる如く、今回三萬三千の焼死者を出せし被服廠跡から對岸の藏前へ架橋することは、痛ましき記念ではあるが又必要事に相違ない。若し一部の説の如く被服廠跡へ新回向院の大伽藍が建ち、すぐ前から右の新橋

が架せられるならば鬼哭の啾々もやゝ慰むに足るであろう。

吾妻橋は維新前は大川橋と稱した。橋身八十間一尺五寸、橋幅七間四尺、經費七萬九千〇三十八圓九十五錢二厘と二厘のハシタがついて居る。今度は一つハシタなど切りすてゝ幅の廣い橋を架けて貰ひ度い。私がかつて戯談に揚言せし隅田川暗渠説も此際再考の價値がないと謂へまい。

○

火事毎に多くの慘話を殘し、火事毎に燒け太ること吉原の如きも稀である。江戸の賣女は初め大橋（常磐橋）以内の道三河岸俗に柳町と、鎌倉河岸とにかたまつて居る外に方々の草原の中に散點して居たのを、開府後二十餘年後のこと、三甚内の一人たる庄司甚内が出願して、日本橋葺屋町の埋地へ一區劃の遊里を建てることにした。そこで四十年ほど營業し、堺町、葺屋町の芝居と呼應して江戸隨一の繁華境を現出したが、明暦三年の火災後、一萬五千兩の移轉料を給せられて現在の所へ移轉した。葭原時代の葭原は二丁四方であつたのを、新吉原は二町と三町にひろげ、それまでは日中に限られし營業を今後は夜も女郎屋をして差支へなきことゝなつて益々發展した。蜀山人が作つて川口お直が節附けした清元の北州を一ぺん聽けば、吉原名所と年中行事はザツト腹にはいる。『霞の衣ゑもん坂』とか『松の位を見返りの、柳さくらの仲の町』とかいふのは吉原名所で、『亡き玉菊の燈籠に』とか『早や八朔の白無垢の』とかは吉原の年中行事である。

古來吉原の火事は悲慘なばかりでなく其の度數が頻繁であつた。恐らく神田のそれに匹敵するであろう。二百八十年間に二十餘回即ち十年强に一回づゝ燒けた割である。今度は明治四十四年以後十三年目に當る。徳川時代吉原が燒けると其の都度郭外に假宅營業を許された。假宅は大抵百姓家などへ同居したもので、氣分の變るためか假宅の繁昌することは論外であつた。彼等は其筋から本建築を迫られても、言を左右に托して容易に假宅を引拂はうとしなかつた。

吉原に發生せし特殊の色の繪卷物の中に高尾がある、薄雲がある、八ツ橋がある。勝山がある、玉菊がある、香具山がある。奥州がある、采女がある、雲井がある、佐香穗がある、立花がある、三千歳がある。又浮かれくるわの浮かれ男には、仙臺侯がある、榊原侯がある、紀文がある、奈良茂がある　佐野次郎左衛門がある、石井常右衛門がある、名古屋と不破の鞘當がある。それ等の客と遊女の間にもつれてとけて、とけてもつれた數々のロマンスは、吉原が幾度燒けても亡びずに傳はるのである。

二千五百の現在數のうちで死んだ娼妓と行衛不明の娼妓とを併せて千人を越えた。例の婦人矯風會の人々が早速燒跡へ乘込んで燒死娼妓の爲めに追善供養をしたら、營業者側では燒死娼妓千人に非ずタッタ八十人也と抗議を申込んで、追善會に參列しなかつた。昔は女郎が死んで引取人が無いと土手の道哲寺へ犬猫の如く葬つた。道哲寺一名投げ込み寺と稱するは女郎の死骸を穴へ投げ込んだ意である。その道哲寺も綺麗に燒けて、月魂花影花六づねん由も無い。

道哲和尙はもと彥根藩士で失戀の結果佛門に入り、日本堤の道傍にすわつて道ゆく人から一文二文の合力を受けた。明曆の大火に新吉原ができて以來は三浦屋その他の樓主がいたく道哲に歸依した。三浦屋の高尾は嶋田重三郎故に仙臺侯をふつたことになつて居るが、本當は道哲和尙に氣があつたといふヤ、コしい說もある。私はかつて道哲寺に傳はりし過去帳を見せて貰つた中に、萬治三年庚子歲十二月二十五日に道哲が遷化し、同月二十九日に高尾が死んで轉寢妙身信女となつてゐることを發見した。高尾の墓については高尾學者に異說があれど、『寒風にもろくも朽ちる紅葉かな』といふ辭世を刻した墓と、道哲が勤行姿の石像と薄雲太夫の猫塚とは、すべて安政の震火災をまぬかれて今日に傳はり道哲寺の名物であつた。道哲は初め無緣の女郎をあはれんで屍骸を引取つてやつたところが、後世にれが道哲寺の一手專賣になり、大店は二朱、小店は一朱の埋葬料で安直に葬つたから、別段婦人矯風會が出裟婆る必要もなかつた。

安政二年の大地震の死骸も女郎同樣に投げ込み寺にはこばれ、腐肉の臭を消す爲めに晝夜の別なく線香がともされた、それ以來投げ込み寺一名線香寺とよばはれた。吉原遊廓は寺が混むので其時死人を擂鉢形の大穴に埋めて、一擧に燒いたから早くも吉原の擂鉢穴といふ名をつけて恐れた。昔も今も女郎の運命にかはりは無い。相對死即ち客と心中した女郎も投込み寺へ投込まれた。但し此の方の死骸は見せしめの爲めに裸に剝いて、荒菰に包んだまゝ數日間廓內の地上に曝してから、引ずるようにして道哲寺まではこばれた。

○

淺草區は東本願寺以下大小無數の寺々を含み、それ〴〵になつかしい由緒をもつて居た。芝崎町の日輪寺などは由緒の古い事と江戸つ子に緣の深いことで取り別け惜しい寺であつた。日輪寺は初め平將門の靈を鎮むる神田明神の別當所に建てられしもので、神田郷芝崎村（今の大藏省の所）に在つた。二代將軍の時あの邊を土井利勝の屋邸として賜はるために、神田明神は

田橋外へ、日輪寺は神田白銀町へ移された。日輪寺は再び、神田谷原町に移され、元祿十五年三度び現在の地に移され明治五年寺の所在地に芝崎町の名を附した。神田明神も日輪寺も共に遊行上人が創立せし緣故上、今でも藤澤遊行寺の住職が上京の際は第一番に神田明神に參詣し、明神祭の前夜には日輪寺住職が勤行する習はしになつて居た。それが今度の火災では神田明神も、日輪寺も夫れから、兩社寺の舊地なる大藏省もまる燒けになり、大藏省内の將門首塚は往來へむき出しに見えて居る。

能く上野の森から信玄袋を脊負つた東京見物者に觀音樣とまちがえられた東本願寺別院の大屋根も見えられなくなつた。

この寺は天正十九年德川氏が親鸞上人十二世の敎如上人を保護して筋違橋外（萬世橋の邊）へ建立させたのが起原で、明曆の火災に炎上して現在の松淸町に移り、明和九年目黑行人坂の火事で又類燒し、安永五年大規模に再建して今度また燒けたのである。三十餘の下寺のうち新井白石の墓のある圓照寺と田沼殺しの佐野善左衞門、畫家宋紫石などの墓のある德本寺は最も名高かつた。

慶安三年四月十一日、旗本水野十郎左衞門に湯殿で突殺された俠客幡隨院長兵衞の居宅あとも、そのすぐ前の幡隨院も、また長兵衞夫妻の墓のある五嶽山源空寺も燒けた。源空寺本堂前に大槻如電翁が『幡隨院長兵衞塚』と大書せし自然石は辭世の塚と共に行儀わるく倒れた。辭世の塚には併しなほ

『極樂へ今日は晴れ着で麻がみしも、供をも連れず死出の旅路へ　長兵衞』

『あと追ふて死出の旅路へゆきつきて、彌陀の淨土に長きたのしみ　長兵衞妻きん』

と讀むことができる。之で見ると長兵衞の妻も助六の妻の如く自害をしたものと思はれる。

長兵衞以後の俠客とよばれし花川戸助六夫妻の比翼塚は山谷易行院にあつて、易行院が數度の炎上に塚は一時埋沒した、それを七代目團十郎と立川焉馬の談州樓の二人が探し出して再建立の法養をした。易行院も今度燒けたけれど、助六の比翼塚はいづれ又黑焦になつて出て來るだろう。西入淨信々士とある方が助六で、緣樂祐三信女あげ卷五七日自害とことはつてあるのが三浦屋のお職總角の後身である。紫鉢卷をしてお職女郎の裲襠の裾にかばはれることが、一時江戸つ子の理想であつたのだからおかしい。

源空寺には右の外に伊能忠敬、高橋作右衞門、谷文晁などの墓があつた。文晁といへば江戸の文化の一面を代表せる浮世繪師と淺草區とは、畫題に於て又墓地に於て緣が深かつたが、

度は廣重の東岳寺、北齋の誓教寺、勝川春英の本願寺、勝川春章の西福寺、歌麿の專光寺、窪田俊満、石川豊信の正覺寺、鍬形蕙齋の蜜藏院、鳥山石燕の新光明寺、豊原國周の本龍寺など一つ殘らず烏有に歸した。歌麿の寺は久しい間不明であつたのを明治四十年頃故大野酒竹氏の藏書から專光寺なることが判明し、大正六年現在の所へ數十名の有志によつて墓が再建された。故森口五葉君がこの再建に熱心された。

豊信の墓側にはその息石川雅望宿屋の飯盛が葬られた。千葉周作、小野蘭山、小唄八兵衛の墓で聞えた誓願寺を初めとし、龜田鵬齋、柴田是眞の稱福寺、細井平洲の天嶽院、市川小團次の清光院、梅田雲濱の海禪寺、芳村伊三郎(長唄)の淨林寺、藤田茂吉、曲垣平九郎(馬の名人)の本願寺、鹽原太助の東陽寺、戸田茂睡、荷田在滿の金龍寺、江川坦庵の本法寺、初代川柳の龍寶寺、市場通笑(小說家)の觀音寺、箱屋峰吉(花井お梅の被害者)の本覺寺、初代常盤津文字太夫、初代仲國の稱念寺、十返舍一九の東陽院、深井志道軒(辻講演の元祖)の金剛院、長谷川雪旦(江戸名所圖繪の畫家)佐野治郎左衛門(吉原百人斬り)の幸龍寺、山田檢校(琴)の源照寺、遊女玉菊の光感寺と永見寺(雨戸で引張り凧)などは、好事家の好いあそびどころであつた。以上の墓碑のうちには無緣のものが段々多かつたから、若し帝都復興を機會に寺院の郊外移轉說が實現されるならば、右の過半は永久に湮滅してしまうであろう。かくなるが世のすがたとは云へ骨まで消え失せるかと思ふと妙な氣がする

○

讀者は田原町停留場即ち東本願寺の通用門のそばの交番所と共同便所とを記憶せらるゝであろう。交番で道を聞いた序に共同便所で用を足した人があるかも知れないが、併しその時共同便所のすぢ向ひ、即ち直角に雷門へ曲る電車路と別れてまつすぐに北へ行くと、角から三軒目かに蛇骨湯といふ變つた名前の風呂屋があることを心づいた人は尠いであろう。蛇骨湯は蛇骨長屋を取拂つたあとに建てられたもので、建つてからまだ何年にもならなかつた。中年以上の人などは蛇骨湯を知らず却つて蛇骨長屋といへば「あゝあれか」と合點するぐらいであつた。

あの邊は昔千束郷廣澤新田と稱し淺草寺に屬する田圃であつた。百姓等は紙漉きを副業として居たから、後にやゝ一本町を形作るに至り紙漉町の稱が起つた。紙は所謂淺草紙で淺草海苔と共に土地の特産であつた。漸々人家が開けるにつれて、田圃は次第に住宅地と變じたが、あの邊を堀起すと大蛇の骨が出た。それから蛇骨長屋の稱がひろまつた。この俗稱は明治以後

まで永續した。田原町一丁目を蹈切長屋といひ、二丁目を簓横丁、三丁目を源水横丁といつたには又た夫れ〳〵のいはれがあつた。源水横丁は居合拔松井源水が代々住んだから、簓横丁は簓職人の巣であつたから、蹈切長屋は長屋を折半して一部を外へ移したことがあるからで、蛇又は蛇の骨を蹈切りにしたといふのは臆説である。蛇骨も人骨も本は同じである。蛇骨長屋變じて蛇骨湯となり、その附近に交番と共同便所が出來たのであつたが、今は一面の燒跡である。

淺草橋のところには江戸三十六見附の一なる淺草門があつた。こゝは奥州街道の要衝で交通上、軍事上重要地點であつた。しかしそんな事はどうでも好い。私は今回の慘狀から類推して、明暦大火當日の淺草見附あたりの大修羅場を、額のたゞれるような思ひで眼前に描き出すのである。

明暦三年一月十八日未の刻（午後二時）本郷丸山本妙寺境内で、妄執の振袖から發した火が、折柄の烈風にあをられて見る〳〵湯島、駿河臺、須田町を燒き拂ひ、二時間後には日本橋區小傳馬町に迫つて來た。小傳馬町の牢奉行石出帶刀は臨機の處置をめぐらし、獄囚百三十人を解放して淺草寺町の善慶寺へ立退くよう命じた。囚人等は囚衣のまゝ先を爭ふて淺草見附へ走せつけた。之を遠望せし見附番人は

『ソレ牢破り！』

とあわてふためいて門扉を鎖し、日本橋方面から淺草への通路を遮斷した。蓬頭垢面の囚人等と下町男女と右往左往に入り亂れて、後ろからおそひ寄る紅焔を避くるに道なく、或は神田川に或は隅田川に躍り込んで所謂十萬八千の死者を出すに至つた。溺死者の死體は淺草區諏訪町から船で川向ふへ運んだ。この渡しを世間ではすぐに三途の渡しと呼んだ。三途の渡しを渡つた死骸の實數は二萬と二人だといふが恐らく燒死體は此の外であらう、幕府は川向ふの取つきに二町四方の空地を給して大墓穴を掘り、その中へ澤庵を漬けるように數萬の死骸を葬り、その上へ大伽藍を建てた。今度燒けた回向院が即ちそれである。

三途の渡しの稍や下手、回向院と向き合つたところへ幕末になつて一の柳暗花明郷が出現した。それは水野越前の天保改革で深川を追はれた辰巳藝者の落武者どもが、つら〳〵地の理を考へて、山谷通ひの猪牙船をこの邊で喰ひとめることを企てたものである。計略圖に當り「浮いたかもめの一イ二ウ三イ四ウいつか吾妻につくばねの！』といつた調子で柳橋藝者の好名は七分の粹と三分の俠を看板に、辰巳の名殘りを明治に傳へ、堀の藝者と仲(吉原)の藝者が衰へし後に、日本橋、新橋と鼎足の勢

を保つて來た。猪牙船も屋根船も昔の夢となつたけれど、紅燈紋歌を水にうつしての情趣は外に類がなかつた。日本橋は勿論新橋も二千の軍兵が千に減つて再起おぼつかなしと傳へらるゝ時、知らず辰巳移しの柳橋軍の意氣如何？

淺草區がかくの如く慘滅せるなかに、かの愛すべき光月町も御多分に洩れず慘滅した。光月町は入谷町と千束町とにかこまれし日本最小の町で町の周圍は約一丁四方に過ぎなかつた。何さま光月町一番地があつて二番地の無い珍しい町であつた。新東京の市區改正で此の稱すべきおもちやのような町が消滅するか、存續するかは興味を引く。松浦伯邸内の蓬萊園は天然の地勢を巧みに利用せる點で、小石川水戸邸の後樂園と双璧であつた。

○

本所も向島須崎、向島請地の一部を除く外は全燒した。徳川氏が下總國葛飾郡本所村の開拓に着手したのは萬治三年に兩國橋を架し、回向院を創立して後であるから、大ざつぱに云へば回向院は本所區の草別けである。然るにそれから十三年目の天和二年に水害があつたゝめ幕府は武家、町家に立退を命じたが、元祿元年之を復興し、主として屋敷町と少許の町人町とを配して明治に及んだ。かくの如く川向ふの歴史は二百三十年に過ぎぬけれど、その間に傳ふべきものが尠くない。

兩國橋は初め大橋といつたが間も無く武藏、下總の二國を記念するため現在の名に改められた。大川‖‖殊に流れの最も急なるあの邊へ常置の橋が架せられるといふので誰しも工事の成功を疑つた。虹の如き九十四間の木橋が所謂兩國を連絡し了らせたのを見て

『之ならば火事にものがれ水にも助かるでしよう』

と額手して相慶賀した。然るに橋自身が數度の洪水で流失し、之が再架には檜ならば三萬四百九十兩、欅ならば一萬六千八百五十一兩ほどの工費を要した。今度燒けた鐵橋は明治三十七年の架設であるが他の四大橋と共に火を被つた。但し五大橋のうちで今度燒け落ちなかつたのは兩國橋と新大橋の二つだけであつた。吾妻橋も永代橋も厩橋も群衆と共に燒落ちた。永代橋上の群衆は三千人も居たそうである。

回向院は普通の寺の發生史を逆に先つ大墓穴が出來てから後ちに本堂が出來たのである。幕府は大墓穴の前に增上寺住職貴屋和尚以下八宗の僧侶數百名を會して、一七日が間千部の經を讀ませた。その當時は單に無緣塚と呼ばれた。寺が建つてのちも暫くは諸宗山無緣寺と呼はれた。それから回向院は度々火事に逢ひ大正六年十一月國技館の出火に類燒したのが五度目であ

つた。二十何萬圓かの豫算で再築計畫中に今度は假本堂を焼かれ、門内の不動堂に同居せる閻魔大王も脱衣婆も運命を共にした。あの脱衣婆は誰が作つたか非常によく出來て居た、三途の川で亡者の着物をぬがせるのは、いかにもこんな婆であろうと私は感心してながめたがもうそれも見ることはできなくなつた。

百萬の博徒からバクチの神と仰がるゝ鼠小僧の墓は、堂の焼けたあとに黒くこげて殘つた。代りに欠き取らせた『欠き墓』も無事であるが、早く本墓を戒嚴せぬと、また昔のように欠き取られて無くなつてしまうだろう。回向院の代表的名物だそうだから、精々大事にするがいゝ。

回向院には此の外に山東京傳、京山兄弟の墓や、加藤千蔭、竹本義太夫、力士大砲（後ちの待乳山）猿若勘三郎、阿妻八郎兵衛の墓があつた、阿妻八郎兵衛實は阿綱八兵衛のことで、墓面には天明三癸卯年三月十三日自殺・屋號遠州屋としてあつた。その頃回向院前に金猫銀猫と稱する二軒のアイマイ屋があつた。既述薄雲太夫の猫は薄雲の裾にまつはりついて厠に上るのを邪魔したため楼主に斬り殺さた。そうすると、首だけ飛んで厠の隅にトグロを卷いて居る蛇のノドに喰ひついて蛇を殺した。薄雲が發主となつて憐みし投げ込み寺の猫の葬式は、物の木にも背かされたほどの窮境であつた。それ以來薄雲が猫のなさけを思ひ出しては沈んで居るので、親切な客が招き猫の木像を彫らせて薄雲に贈つた。それで薄雲の心も晴れ客足も繁くなつた。その縁起をかついで水商賣の家では招き猫の像を神棚にのせることがはやり出した。金猫の方は金泥、銀猫は銀泥を塗りつぶした大きな招き猫の像を店頭に置いて、ぞめき連を招き寄せたのであるが、猫の背後に白いものを塗りつぶした女たちがお出で〳〵をして居ることは云ふまでも無かつた。銀猫の女將お綱も初めは商賣づくで古着屋八兵衛を歡待するうち眞情で行動するようになり、金につまつて生きて居られなくなつた八兵衛と相對死をした。心中の本場の大阪で『重褄恨鮫鞘』といふ淨瑠璃に作り、舞臺を鰻谷にとつてお妻八郎兵衛と語りはやしたものがそれである。

回向院には水子塚といふ珍らしい無縁塚があつた。寛政五年に十二代の住職嚴龍和尚が墮胎兒死胎兒一萬人の爲めに大供養を營んだものである。天下の糸平に愛され明治押妓の元祖天下の黒市と呼ばれし奧村市藏の大きな石碑も回向院名物の一であつた。

○

回向院の大相撲を移して、時雨に拘はらず興行のできるよう

になつた國技館は、大鐵傘を殘してすべて燒けた。しかしあの大鐵傘が役に立つて、災後數萬の罹災民を收容した。江戸の相撲は寛永元年明石志賀之助が四谷鹽町笹寺境内に寄相撲を催ふしたのが濫觴で、貞享元年深川八幡で勸進相撲を許され、寛政三年四月回向院の興行を以て初めて本場所と稱した。國技館の出來る前までは門内右側即ち南畔に昔ながらの莚垂れの假小屋が建ち、靜軒の所謂『一鳴身を起し、鐵臂石拳、兩々相搏つ、雲を破り雷を掣する』底の活劇が演ぜられたのである。

國技館の少し東方、電車道と相生二丁目に挾まれた五百坪ほどの地域が即ち赤穗浪士の討入つた吉良屋敷であつた。あの事件以後吉良屋敷の跡は不淨地と呼ばれて、久しく買ひ手も貰ひ手もつかなかつた。後年そこへ人が住むようになつても吉良屋敷の跡であることを互に秘め合ふほどであつた。上野稻荷といつた當年の屋敷稻荷などもいつしか河濯稻荷といふ文字に改められ、屋敷の輪廓も以前の如く規則的な矩形では無く、わざと境界線を出入錯綜せしめて原形を不明にし、地域内には、それを幾つにも分割する爲めの路次を迂餘曲折して設け、その兩側に長屋を建てるなど苦心至らざるなき有樣であつた。赤穗義士の好評なると共に、此種の群衆心理は永續すると見えて私が踏査した時なども、その界隈の居住者は吉良の屋敷跡などゝいはれる事、そしてそれを何の意趣があつて今頃あばき立てるのであるかといふ事に對し、甚だ不快の樣子に見受けられた。私は昔の切り繪圖と、吉良屋敷の圖面と現在の地圖と、實地とを比較對照し、足で測り頭に訴へて、辛うじて吉良屋敷でありしと思はるゝ一區劃を決定することができた。幸ひに回向院の裏門今の國技館の一邊が接して居る道路に向つて吉良邸の表門が開いて居たので、此の道路と回向院の境域の一邊とに異狀のないところから起算して家相の今昔を比べ考へることができた。義士が讐討の目的を果して吉良邸の表門から出で、すぐ向への回向院裏門から入ろうとして坊主に拒まれ、苦笑して永代橋の方へ（兩國橋は虚說）引あげて行く樣を私は眼前に浮べた。回向院が今度その株を被服廠跡の新回向院に奪はるゝにしても、國技館の接する松坂町二丁目の路狀にさへ變化が無くば、呪はれし吉良屋敷跡を考察するに難くない。

元祿元年に復興せし本所は、同十五年の赤穗討入り頃兩國橋附近に蕎麥屋あり、酒屋あり、八百屋あり、踊の師匠まで渡世ができるほどに發展して居たが、しかしお竹藏の邊は甚も淋しかつた。本所七不思議の筆頭の置いてけ堀は錦糸町方面だとも云はれるが、その頃の本所はあんな境まで行かなくとも狸の囃を聞かれたし、現にお竹藏をとり卷く溝には狸が棲息して、僞

に釣を垂れるものが折角の獲物を狸に卷きあげられることは再々であつた。房總線の咽喉なる兩國驛から被服廠跡、卽ち龜澤町から石原町停車場までがお竹藏の跡でそれを取り卷く堀が置いてけ堀であつた。兩國停車場は明治三十六年に開設され、錦糸町の本所停車場はその十年ほど前に開設された。その外にも淺草驛、京成電車の發着所なる押上驛など區内の交通機關は今度全滅した。

○

今度の天災で個々の慘話は數限りもない。涙なしに聞き得る話は殆んどない。私は今に毎日午後になると頭が割れるほど痛み出す。そういふ話を聞くまいとしても又聞かずに居られなくなる。聞いて悲しむだけがせめては生殘つた者の心ゆかせだど、しまひには理屈をつけて頭痛を覺悟で聞いたり見たりする。併し被服廠跡の死骸を目擊したら、私は是以上どんな打擊を被つたかも知れない。三萬三千の大數、それは到底私には想像もできない。一寸した緣日の人出を新聞ではすぐに一萬人とか二萬人とか書くが、一萬人といふ數は實際なまやさしいものではない。一坪へ十人づゝ鮨詰めにしても、三萬六千人の爲めにはそれ丈けで三千五六百坪の面積を要する。本所被服廠跡の空地は約三萬坪あつたが、事によると人間よりも荷物、荷車などの方が大きな面積を占めたであろうし、それに三方からの猛火を避ける大群衆は、我れがちに他の一方へかたまつたであらう。前に川を控え後ろに火を負ひ、折り重なつて死んだ三萬三千の人山、そして其個々には死んでも死にきれないような哀れな話が多かつたろう。

被服廠に隣接せる安田家の別邸を初めあの邊の大邸宅はすべて舊大名の屋敷跡であつた。詳しく云へばお竹藏前の大川ばたには　御藏橋の入り堀を挾んで左が松前伊豆守、右が松平の晉守、松浦肥後守、松平右京亮などの上屋敷、下屋敷であつた。安田別邸は松平伯耆守の下屋敷跡であつた。あの邊横網町一帶は百本杭で響いた大川端に臨み、淺草方面の河岸とちがひ店家が無く大邸宅つゞきで閑靜なところであつた。建築こそは西洋館が多くなつたけれども、なんとなく江戸時代の大名町を偲ばせる所であつた。今回安田善雄氏は茲で家族と共に燒死し、屋敷の燒跡には故善次郎翁の銅像が呆れ顏に殘つた。

淺草、日本橋の避難者と、本所の避難者は兩方から吾妻橋、厩橋、兩國橋に落ち合つて大混雜を呈した。逸早く本所の危險區域を走せぬけて龜戸、小松川方面へ避難した者は九死に一生を得たけれど、吾妻橋から向島の土手へ志したものはバタリバタリと斃れた。札幌ビールも燒けて江戸三名園の一なる浩養園

跡は黒焦になつた。浴養園は十一代將軍家齊公が三河島の庭師伊藤門三郎に命じて作らせ、權臣水野出羽守忠成に賜ひしもので、維新當時は秋田の城主佐竹右京太夫の有に歸して居た。あれから向島の入口の枕橋附近は唄にも「嬉しの森や枕橋」とある通り、參天の老樹が一叢の森を成して居た。枕橋も八百松も水にうつつて仕掛花火のように燒け落ちた。八百松は江戸時代吾妻屋と稱し木母寺の側にあつたが、明治三年枕橋へ移つて八百松と改名し蜆と燒鳥を賣物にして成功した。それまであそこは水戸藩のお船藏であつた。その藏奉行や手代水主や船匠はすべて橋畔の水戸侯お下屋敷に住んで居た。弘化元年水戸烈公が譴責されて駒込の中屋敷へ幽閉されし時、藤田東湖はその下屋敷へ幽閉された。家は當時と建て代つたけれど、現在家令家扶の舍宅になつて居た邊が東湖幽室の跡であつた。東湖は小梅幽居の三年間に有名な回天詩史、正氣の歌、常陸帶等を完成した。

向島も寺島の渡しからこつち――東京市本所區に屬するぶんは殆んど全滅したが、牛の御前と三圍神社の社務所と名物言問團子だけが燒け殘つた。小梅の小倉庵跡を推定するについては私はかつて相當面倒な思ひをした。廣重が寫生した當時の俤はどこにも殘つて居なかつたが、淺草驛を右に見て曳舟川を渡り左折した裏町の中央にある日之出湯が小倉庵の跡であることを突とめた時は、コロンブスが亞米利加を發見したほどに得意であつた。旗本青木彌太郎が小倉庵長次郎から持込まれし借金の相談を引うけて、元治二年三月二十二日の晩に中之郷上月小藤次の別莊へ忍び入つた顛末は、小說にも芝居にも作られた。それにも拘はらず彌太郎は存ぜぬ知らぬで押通し、無罪放免後王子に海老屋を經營した。白い髯を胸に垂れた彌太郎の顔が見たさに、海老屋へあがる彌次馬が接踵した、廣重の小倉庵は江戸名所繪の中の傑作である。

○

柳島行電車の終點たる柳島妙見も、白蛇の金網と共に燒け失せた。妙見樣といつて毎月十五日、二十八日の緣日には電車にも乘れぬほど人が出た。下總國眞間弘法寺の末寺ではあるが、その盛ることは弘法寺の比ではなかつた。影向松一名片下り松は周圍一丈三尺の巨幹を有した。但しそれは立枯れて現在のものは二代目の松であつた。使はしめの白蛇はこの古松の洞を舍宅として住んで居た。文化十年入江町で生捕られし長さ八尺の白蛇も、妙見樣に獻じて右の洞に同居させることにした。すると固有の白蛇が同居を拒んだので新來の白蛇はスル／＼と松の幹を傳つて梢にのぼり、そこを自分の住家とした。白蛇見物の參詣者が一としきり絶えなかつた。

本所の寺を代表する法恩寺は、前記の如く家康入國前から平河村にありしを移されたもので、本所へ來てからも平河山の山號を捨てなかつた。寺内に太田道灌の墓と稱する豎せ墓があつた。道灌の子孫は代々法恩寺で祖先の法養を營んだ。道灌の孫資高は北條氏に謀反を企て、法恩寺の一室を借りて密議を凝らしたゝめ住職から密告された。謀破れて資高は北條氏の江戸城代遠山直景に柄目木川（今の市川）まで追ひまくられて戰死した。密告せる住職は資高の骸を乞ひ受けて寺内に葬つた。それは平河村時代の話であるが、江戸城の恩人たる太田氏と緣故の深い寺であつた。

俗に一つ目と云つた千歳町二番地の江之島神社も灰になつた。杉山檢校が將軍に望みのものを問はれ『何卒眼を一つ』と答へて『然らば本所一つ目を取らするぞ』とあつてあの邊を拜領したといふ落語がある。それは怪しいけれど杉山檢校が鍼術の爲めに綱吉將軍から信任されたのは事實である。彼は昔修業時代に江之島辨財天の靈感を被りし事があつた。謝恩の心持で邸内に建てたのが即ち江之島神社であつた。

在五中將の業平朝臣が『いざ言問はむ都鳥』と舷から上半身をのり出したハヅミに、川へ落ちて溺死したといふ珍說が殘つて居て、その死骸を葬つた所が即ち中之郷八軒町二十五番地の

業平山南藏院だと一部の人に信ぜられて居た。業平の死亡時戸籍が無いのだから、果して本所の業平山に葬つたか、大戸岡在原寺に葬つたかを戸籍上から立證することはできない。南藏院には其の外に有名なる『縛られ地藏』があつた。彼は白木綿八十反を盜んだ嫌疑で、大岡越前守配下の與力に繩をかけられ奉行所に引立てられた。のち犯人がわかつて彼は無罪放免となつたが、里人等は夫れ以來盜難よけの御利益を彼に擔當せしめ、その表象として二六時中彼を緊縛することゝなつた。彼は享保以來の信仰者によりて、首といはず手といはず七重八重に、藁繩で縛られたまゝ猛火の中に立つた。彼のいましめは燒き切れその代り彼は全身まつくろにくすぶつた。

多田藥師のあつた番場町方面も一面の燒原となつた。往昔あの邊は徳川將軍が鷹狩をする官地であつたが、寶永頃から町屋が建ちならび、維新當時まで武家屋敷の多い本所區では唯一の商業區となつた。石原町は川端の小石原を意味し、原庭町は原ツパ町の轉訛で草原を意味した。然るに近年は電車も通ひ市店櫛比し、ずつと奥の柳島邊まで行かなければ場末らしい感はしなくなつたが、今度の變災ですべて二百六十年前のような無人境となり、罷り間違へば鷗も飛んで來かねぬ姿となつた。

○

三遊亭圓朝が支那の怪談から換骨せし牡丹燈籠の傑作はお露も新三郎も純粋の日本人になつて居て、洵に哀れの深いものである。殊にお露が新三郎と初めて會つた飯島の寮は、場所を横川堀に取つてあつて、新三郎が二度目にそこを尋ねし時、軒傾き障子は破れて一見相馬の古御所のようになつて居た様が、蕭條たる時雨や枯芦の折れ亂るゝ光景と相俟つて、如何にも凄惨の感を與へる。私は圓朝が洞庭湖畔の一場面を日本へ翻譯するに、よくも横川堀を撰んだものと感服した。然るにあの物語を新聞に書いて居る際、故圓朝と親交があり圓朝の寄席藝人嬌風事業にも参加したといふ同業の先輩某氏から態々書を寄せて、牡丹燈籠の眞の出所について垂教されたことがある。それを讀んで私は、成る程これ丈けの出所が無くてはならぬ筈だと初めて謎が解けたような心地がした。その話は拙著『江戸から東京へ』の第五篇に述べておいたから、特志の方は参照して貰ひ度い。要するに例の飯島の寮に相當する横川の寮なるものが實際にあつたのである。それは淺草の商人飯島某の別莊であつて、某の娘お常が茲へ出養生をして居る間に、川向ふに居る錦絵木版彫刻師の金三郎なるものと人目を忍ぶ仲になつた。お常が牡丹燈籠のお露で、金三郎が新三郎であることは云ふを俟たない。そしてお常のところには牡丹燈籠のお米に匹敵する下女のお鍋があり、志丈に匹敵するお出入醫者の某があつた。

お常と金三郎の事が知れてお常は本宅へ呼び戻されることゝなつた。あすは愈々横川の寮を引上げるといふ前の晩に二人は思ひつめて横川堀に投身心中をした。二人の死骸は別れ〳〵に流れて夫々蘇生した。しかしお常も金三郎も、自分一人が生殘つたことゝ思つて、相手の爲めに百ヶ日の法會を營んだ。すると不思議にも双方の菩提寺が同じ淺草の某寺であつたところから、法會の席上でお常と金三郎が再會し、法會の席は假祝言の席と一變した。其の奇談が世上に誤り傳へられて、一人生殘つた金三郎が、お常の亡靈と祝の盃を交したように信ぜられたのは事實であつたそうだ。それは肺を病んで居たお常が結婚後間もなく死んだためにそんな噂が廣まつたので、今でもそのように信じて居る老人は尠くあるまいとの事であつた。

鎮明嶺の麓に住む喬生といふ不良少年じみた男やもめと、奉化府知事の愛嬢淑芳との仲に生れし「牡丹燈」の怪談も多少は『牡丹燈籠』の資材になつたろうけれど、話の中心になつて居る情調や場面の撰擇については、全然お常金三郎の實錄に據つたのである。それにしてもあの話は本當によく出來て居る。牡丹燈籠は淑芳のを拜借したものであらうが、それを下げて下駄の音をカランコロンと夜陰の町に響かせてやつて來るあたりは

全く日本式である。お常が出発生せし横川の寮は、その後間もなく他の屋敷や民家と共にとりつぶされて日本製帽株式會社工場の一部分となつた。果敢なき蹟も、和製の帽子もすべて今度は焼けてしまつた。

○

柳島は法恩寺から龜戸神社へ突きあたる方面が早く開けた。あの道筋の片側は大名屋敷であつたが、片側には普通民家が續いた。押上村と柳島村とは飛び〳〵に入り組んで居て多くは田圃であつた。その田圃の中に商人や旗本の別莊がポツ〳〵出來るようになつたのは元祿の復興後五十年も六十年もしてからで有つた。實際明治になつてのちもあの邊には田畑が見られた。我々ですら押上へ電車が延びた時は大磯邊まで行く心持、柳島まで延びた時は興津邊まで行く心持がした。

復興後八十年の寶暦年間に、上州館林秋元侯の家來の眞島伊惣次が弓矢をすてゝ、すきな浮世繪で飯を喰ふことゝなつた。柳島の寮を某商人から買つて戀女房のせきと共に隱栖した。浮世繪師の菱川重信が卽ちそれである。ところがせきの美貌が累をなして重信は門人磯貝浪江に斬り殺され、せきは浪江の暴力に虐げられた。それから爾後いゝような運命が散々せきを飜弄したが、結局惡漢浪江は重信のわすれがたみに復讐された。惡夢のような男女關係の繰り返されし跡は、やはり法恩寺の前面ふの邊に當るであろうと覺しく、それもこれも凄き火焰で淨化された。

廣小路の名は維新後上野山下に獨占されたが、舊幕時代は淺草にも兩國にも廣小路があつた。今度のような時間の永い、範圍の廣い、そして量の多い大火に逢つては三萬坪の被服廠跡も火除けの功を奏せぬことが分明したけれど、舊幕時代は市中到るところに火除け地とか植木溜とか稱する空地を按排して萬一に備へた。而かも江戸の面積の大部分を占めし大名屋敷や旗本屋敷には廣大な空地を含み、下町方面の市店と雖も今日のように密接せず、中庭をとつたり裏庭をとつたり、物干の空地を設けたり、そして町内の處々には特に火除け地と設定しなくとも私有の原ツぱや、家の引けあとなどが散在した。今や兩國橋を本所へ渡つた邊はあの馬鹿大きな弔魂碑を外にしては、寸地もあまさざるほどに人家稠密し、二百年前の月明に狂亂暴戾の合葬をした佛は更に無い。東京市では二十億圓の豫算で十五年計畫の復興を策するそうであるが、その計畫に從へば、既設上野日比谷、芝三大公園以外の小公園は全廢して、鐵橋方面、萬世橋方面、戸山ヶ原方面、護國寺方面、代々木方面、向島木母寺面などへ各五萬坪以上の大公園を作るそうである。併しそ

の立退地が本所、深川方面の人々に向つて能率を擧ぐる爲めには、どうしても橋の設備と非常渡船の用意とを完全にする外はない。私は橋の數を增す事の外に、橋の幅を馬鹿に廣くし、猶ほそれに折疊み式の大橋欄をとりつけて、萬一の際はサツと双方へ其の欄干を開いて、平時の五倍位の橋幅を現出し得るようにしてはどうかと空想して居る。

土一升が金一升でもかまはない。いかなる土も人間にはかえられない。『こんなに空地をあそばして勿體ない』といふようなアタジケないことは云ひつこなし。空地などはどんな風にも利用し得るものである。舊幕時代兩國廣小路には葭簀張りの水茶屋なり床店なり、小屋がけの諸興行物なり、すべて本建築を許さず、洪水の時は夫等の營業者は防水人夫として出役する義務を負はせて、單に假建築を許可したのである。あの邊の空地が盛り場となつたのは、享保十四年和蘭人から獻上せし大象を吉宗將軍から毛利新田（今の猿江方面）の鷹場の番人の藤左衞門に賜はり、藤左衞門がそれを兩國橋畔で見世物にしたのが濫觴である，藤左衞門は吉宗公の大氣に入りで、或る年鷹狩の歸りに藤左衞門方へ休息し、親から筆を執つて痢藥の調合法を書き與へた程である。象の見世物の催ふしを聞くと、吉宗公は佐渡の金山に産せし金の延べ板を貸し下げて見世物の興を添へた。象も金の延べ板も享保年間の江戸ツ子を驚かすに充分であつたから、藤左衞門は莫大な木戸錢を利得した。

○

東兩國一名向ふ兩國の垢離場にはオデヽコ芝居を初めとしてヤレツケ、島娘、阿蘭陀眼鏡、蛇遣ひ、籠拔け、講釋場、一錢床と稱する理髮店などが軒を並べて居た。垢離場といふのは大山詣りの講中が、茲で水垢離をとつて勢揃ひして押出したからであつた。今の藤代町一番地乃至五番地と番地のみあつて人家のない橋畔の道路附近が、垢離場の盛り場の一部を占むるものである。

籠拔けの早業は何遍見ても人をハラ〳〵させた。切支丹お蝶が出演するに及んで、旗本の次男などハラ〳〵しながら目交ボーツとしながら見惚れて居た。お蝶はしかし脇目もふらず籠の中を端から端へ栗鼠のように飛びぬけた。籠の中央を横に貫いた白刄が、お蝶の鼻を削いだかと思はれることは度々あつたけれど、地上に降り立つお蝶は髮一筋亂さず笑をふくんで見物人に挨拶した。身輕な彼女は盛り場の歸りに、道行く女の頭から銀釵を拔きとつて夫れを谷中一本杉の藁人形に打ちつけた。藁人形は彼女との深き契りを反古にして行衞をくらましせし寛永寺の若衆進之丞にかたどつたものであつた。お蝶は毎晩町に出

ては銀釵を拔き、それを戀しい怨めしい進之丞の藁人形に刺した。其筋の捜索がきびしくなつたので、慶應三年十月お蝶は向ふ兩國百間長屋に毒を仰いで死んだ。

オデヽコには先代譯美藏、助高屋金五郎、尾上いろはなどが出演し、寄席には桂文治、天一坊伯山、石川一因などがかゝり、見世物には『ヤレツケソレツケ上見て下見て八文』といふいかゞはしいものがあつた。それから牛肉店豐田屋、淺屋の前身なるもゝんじい（獸肉）の店も空地の一隅にあつた。猪を意味する山くぢらの行燈や、牡丹と紅葉を圖案した障子を立てゝ、賣る者も買ふ者も氣兼ねそうに見えた、大名の駕籠がその前を通る時、陸尺は駕籠を高く釣り上げ驅け足で過ぎた。牡丹が意味する猪（獅子の轉）紅葉が意味する鹿、それ等の肉の香がしみても末代までの汚れと考へたからである。十五代將軍慶喜公が豚公方の仇名を意とせず肉食の範を示されし以來、牛鍋は書生と稱する人種に最も歡迎され、江知勝、中川、米久、ちんやなどの名が幅を利かすようになつたが、兩國橋畔の豐田屋こそは我國牛鍋史上に重きを成すものでなければならなかつた。其の他螺蠑の壺燒、燒鳥、鰯の天麩羅、スイトン、西瓜の切賣、心天の曲突き、鯡の蒲燒、卯の花鮨、鮪の血合ひなどの喰物店があつた。

兩國橋を渡つて垢離場とは反對に北へ折れて、藤堂和泉守の下屋敷へ出ようとする所に駒留場といふ小さな石橋があつた。その邊の堀に是も本所七思議の一なる片葉の葦が生えたと云ひつたえられた。駒留橋は義家が茲から馬を旋したとかいふのであるが、今は跡方も無くなり、吉川町邊から出勤する夜鷹といふ下級の賣女が、たそがれ時に茲へ集合し一道ゆく人の袖を引いた話のみ殘つた。人間でさへ其の通りだからお竹藏界隈の狸が跳梁したのは當然である。

江東橋を東へ渡らずに交番に向つて右折すると無煙炭販賣所があつて、その二階が勞働者諸君に歡迎されし江東橋食堂であつた。舊幕時代入江町の時の鐘があつたのは、江東橋食堂の邊であつて、その鐘の響き渡る範圍を西は兩國橋の川筋、北は牛島源兵衛橋の川筋、東は天神裏川筋六ツ目通りまで、南は深川猿番所から深川南向ふ六ツ通りまでとして、寺社町方は毎年一度間口小間一間につき三錢、武家は祿高制に維持費を醵出せしめられた。それまでは兎角

『あんな鐘を撞いて呉れと頼んだ覺えはない。うるさくつていけない』

などゝ迹ね苛を喰はす者があつたからである。一體此の鐘は伊達陸奧守が日光廟の助修を仰付かりし際、大工を監督する必

要上北中の橋の畔へ時の鐘を設けて、日中だけ時を報じさせたのを、後ち入江町の住民中村源兵衛が頂戴して人助けの爲に撞くことにしたのである。床次前内相は時の鐘が大すきのように聞いたが、上野の鐘の維持費すら今は容易に集まらないといふから、床次氏の理想は永久に實現しないかも知れない。私も時の鐘などは大贊成である。若し復興するようならば鐘撞き料は惜しまない。

入江町四十九番地中井平八なる特志家が、世帶崩しの寡婦とか、老病者とかの寄る邊なき慘狀を見兼ねて横川町七十一番地へ建てた長屋が、近代的長屋の元祖だといふことである。それから中井氏は引つゞき入江町の隣りの花町へ萬年屋長屋、伊勢屋長屋を建て、松倉川町、菊川町の長屋を建てた。今日では富澤町の長屋、下谷萬年町、淺草玉姫町などの長屋の方が威を振つて居たが、すべて一律に燒けた。もう〳〵二度と再びあの式の國辱的長屋は見たくない。アパート式でもなんでもいゝから日光と排水だけは充分にしたところへ住ませて、人間らしい自重心と希望が自然にわいて出るようにしなければならない。

○

排水といへば徳川氏が大橋（兩國橋）開通と共に徳山五兵衛重政を以て、本所取立奉行に任命せし時、重政の最も鋭意せしは云ふまでもなく埋立と排水であつた。竪川及び横川を幹線として之へ縱横に交叉する大小無數の堀川は、本所開拓の苦心を物語つて餘りある。竪川の全長一里十五町、之に架するに例の一つ目から五つ目までの橋を以てして深川方面との交通を計つた。被服廠跡に近き龜澤町界隈は開拓當時大きな沼澤であつた。天氣の日は沼の主なる大龜が水面に浮き出て、疊一疊ほどの甲羅を干すのが見られた。龜澤の名はそれに基づくのである。竪川、横川を開鑿の際、其の揚土で龜澤の大部分を埋めはしたが猶ほ六七十坪の水面が殘つて居た。それが一坪殘らず埋めつくされたのは漸く文久年間の事であつたといふ。

本所の割下水氣分と深川の木場氣分を形作れる血管の如き堀川が、今や一面の焦土の中に秋の日光を射返して居る。その堀川の數も堀の幅も二百六十年前に徳山五兵衛が設計せしものと大差は無い。煙突林立し、郊外を柳島まで並び立てた現在の本所には餘りに不相應である。聞くが如くんば東京市は、更に隅田川から本所深川を貫通する大運河を鑿き、在來の堀川をも三四十間以上の幅に堀りひろげるとの事である。甚だ愉快である。我々の子孫の物質上、精神上に寄與すること大である。それにつけても橋梁の問題は益々意義が深くなる。

隅田川の橋はかり十八間乃至二十四間の幅にしても、川向ふの水郷の橋の幅をケチにしたならば、不吉な事をいふようであるが被服廠跡に第二第三の白骨の山を築く事無しとは謂へぬ。

私はかつて述べた。東京は草の都では無い。立派な水の都である。水の都にとつて最も恐るべきは火である。それは江戸以來の歴史が何遍となく、我々に教えて來たものである。水の都のうちの水の町なる本所の同胞を、あんなに澤山一とかたまりに殺した責任を、生殘つた我々は永久に負はなければならない。私は重ねていふ、我々も我々の子孫も更に愼重に水と橋とを研究せよ、耐震建築、耐火建築のことは、そのあとでもいゝぐらいに思ふのである。

○

本所も深川も今度地震と同時に發火した。本所網戸方面は、人爲的に發火したとの噂もあつたが、發火の時刻を調べて見ると地震の後二分と間がなかつた。そして十二ケ所の發火が殆んど同時であつた。深川もその通りで地震と同時に八ケ所から發火した。新大橋を渡つてすぐの安宅町からも、ずつと奥の猿江裏町からも、洲崎遊廓からも火の手があがつた。そして本所同樣全區を燒拂つたのみならず東の端は千田町を越えて、郡部の方まで延燒した。本所にはそれでもおしるしほど燒け殘つた人家があつたけれど、深川に至つては人家のある限りは丹念に燒きつくした。月島の南端と、越中島から洲崎外面の埋立地だけが燒け殘つた。それは一面の砂原で何も燒くものがなかつたからである。

永代橋墜落の慘話は、江戸時代の數ある慘話のうちでも雜の内格である。それですら橋と共に水に落ちた者は千人で、このうち三百四十人ほど助かつたといふから、死んだ者は多く見積つても六百六十人位に過ぎなかつた。今度永代橋が燒落ちた時は二千人以上の人間を載せ、その悉くが水火に死んだ。否な幾橋が落ちる前に、橋上の人はすべて燒死んで居たであらう。

文化四年八月十九日、深川八幡は社殿修築の落成祝を兼ね、久しぶりの祭禮を行つた。深川、本所、日本橋、京橋の氏子連は山車、引屋臺を出し見物は潮の如く押寄せた。その日は日本晴で午前十時頃將軍家の御座船が、橋の中央二間幅の御成間を通りすぎて、橋畔の綱が撤せられた。今まで堰かれて居た群衆が我がちに東へ橋を渡りかけた。其一刹那東の袂から長さ十二間ほどの間が墜落して、橋上の人間は倒まに水の中へこぼれ落ちた。それを知らぬ後方の群衆は委細かまはず前へ押して、先頭の人々を順次に水の中へ突き落した。

南町奉行に屬する同心渡邊小右衛門が御座の屋根から刀をぬ

いて高く振り上げ、キラ〳〵とふり廻した。」

『それ喧嘩だ』

『それ抜いたぞ』

と群衆は口々に警め合つて一歩々々あとしざりした。それで殘る群衆はわづかに助かつた。これは落橋慘話の挿話として有名であるが、實をいふと小右衛門は大の臆病もので、其時も狼狽のあまり刀をぬいて、怪我の功名をしたのだといふ。機轉でも狼狽でもいゝ。それは小說家の問題である。多くの人命が助かつたといふ結果に對して、幕府が賞與したのは當然の處置である。

水死者の中には駕籠に乘つたものがあつた。鞘走つた刀に貫かれて死んだ町人もあつた。他の屍骸にしがみつく屍骸、母子相擁する屍骸――橋の下を通りかゝつた屋形船は、橋からこぼれ落ちる人の重みでブク〳〵と沈んで行つた。幕府では取敢えず深川の河岸に救護所を設け、官醫町醫渾一つになつて罹災者の手當をした。變を聞いて市中から家族をさがしに來るもの、我も〳〵と江東へ渡つた。佐賀町の米會所に急設せし町奉行根岸肥前守の假詰所では、一々應待のひまがないので、直接屍骸收容所へ通して、見別けさせた。屍骸は着衣により絹の屍骸と木綿の屍骸とに分類された。

『手前の親爺は損料ではございますが絹の方で……』

と頭をかいて叱りとばされた息子もあつた。夜になると混雑は更に增した。家號入りの高張を竿の先に掲げ「どことかの何んとかさーん」と人ごみの中を狂氣の如く呼びまわる者が右往左往に入り亂れた。又木の板にたづね人の所と名を書いてかついで廻るものも多かつた。斯のような所へ貼り出すことも今日同樣であつた。十九日一ぱいに引取られし屍骸百三十餘體、廿日は百三十體あつた。

橋はなぜ落ちたか。それは假普請に餘る人間が乘つたからである。落ちた邊の橋桁六本は一丈三尺ばかり河底に沈下して、修築の際どうしても拔くことができなかつたそうである。兩國新大橋、永代、吾妻の四橋のうちで、兩國橋を除く外はすべて假普請であつた。假普請は橋幅も狹く、欄干の丸太を繩で結んでおくにすぎなかつた。落ちないまでも人出の多い時は、危險であることはわかりきつた話である。或る老巧者はその日の椿事を預言してあやぶんだといふことである。

翌五年六月二十九日新大橋が洪水の爲め流失した。幕府は之等に懲りてすべての橋を本普請とし、二文づつの橋錢をも廢止した。泥棒を見てから繩を綯ふことが日本人の十八番である。江戸から東京へかけて、此都府が發達したのは可なり犧牲のおか

げである。

○

今度の火事で深川公園へ逃げ込んだ人は、きはどい所で助かつた。周圍の火事が今少し永びけば茲に第二の被服廠を現出したかも知れなかつた、あの平板な落着いた二萬坪の公園を私は大すきであつた。數ある中にはあゝいふ茫とした公園もあつてほしいと思ふ。人間は助すかつたが由緒の深い八幡樣も、それに隣接せるお不動樣も炎上した。『火防(ひぶせ)の神樣が燒けるようでは』といつて、お不動樣の權威を疑ふ者もあるようだが、お不動樣がお燒けになつて、多くの人間をお助け下すつたのだ―と斯う思つて今まで通り難有がるがいゝ。私は觀音樣にもお不動樣にも恩怨の無い事は、大阪にも東京にも恩怨のないのと同じであるが、忽ちどうもお不動樣を觀音樣に乘換へるようなことは、燒けた東京を見限り、尻に帆かけて大阪へ飛ぶようなもので感心しない。

深川の區名は鱶が昔あの邊の海面に泳いだからだとの異說もあるが、矢張り慶長年間、伊勢の人深川八郎衛門が埋立工事を創めた爲めといふのが穩かであろう。それ以前八幡宮の界限は永代島と呼ばれた。其の次に寛永六年葛飾村の人助左衛門以下八名が今の黑江町、相川町、熊井町、富吉町、諸町、清住町、佐賀町邊を埋立てた。その次に元祿十年秋田利右衛門等四名が十五萬坪の芥捨場を出願し、氣永に埋立てゝしまつた。それが今の木場町であつた。千田新田の十萬坪も石小田新田の六萬坪も芥捨場の進化せるものであつた。明和二年にできた平井新田だけは江戸城のお濠を浚つた時の泥だから、やゝ格が好いといふのである。洲崎は明治になつて埋立てた。

深川八幡宮はいつ頃砂村の元八幡のところへ創建されたものか詳しいことはわからない。兎も角八幡宮中興の祖なる長盛上人が八幡宮の大破を歎き、寛永元年自費を投じて建築せし六萬五百八坪の大地域を敷地寄進にして、神輿の許を得た。そのうち一萬九千三百三十坪は現在の深川公園となり、殘る四萬坪ほどは現在の富ヶ岡門前町四ヶ町に該當する。永代寺はその時以來八幡宮の別當所となつた。

社殿は折角出來たが、なにさま江戸から――深川は勿論江戸以外であつた。江戸を追放されたものが、隅田川を一またぎして川向ふへ落付けば、それでよかつた――餘り遠いので參詣人は稀だつた。延寶年間の八幡宮別當はうまい事を考えついて其筋の諒解を得た。それは神社から二三町の間に腰掛茶屋と小料理屋を開かせる、或は開いてもろう事であつた。その頃八幡宮の一の鳥居は門前仲町の停留場の所にあつた。鳥居内の水茶屋に

は山東屋のおしゆん同おりん、澤瀉屋のお花、舛屋のおてふ、住吉屋のお勘などいふ美しい少女が

『お掛けなさいまし』

『寄つてゐらつしやいまし』

と聲を揃へて囀つた。八幡様の水茶屋娘は淺草寺境内の銀杏娘や吉野屋お花などの如くに、本尊様よりも魅力があつた。參詣人はそこ〳〵に神様を拜んで茶屋に立寄り、ゆつくり腰をおちつけた。少女等は酌の間に三味線や鼓を鳴らし、

『當世流行伊勢おどり、松坂越えて、やつさの〳〵はツあゝよいやさ、こゝに一つのくどきがござる』

と伊勢音頭を唄つた。

水茶屋が進化して江戸名物辰巳の色里が生れた。辰巳が亡びて東京名物柳橋が興つたのは前述の通りである。柳橋と八幡様と持つ持たれつの因緣は一朝一夕ではない。お互ひ粗末に思つては罰があたるだろう。

深川不動が最初に草鞋をぬいだのは日本橋區坂本町であつた。天保十二年冬淺草御藏前八幡社内に移つて王政復古を御覧になり、明治二年九月三十日初めて深川永代寺境内吉祥院内に同居し、明治十四年六月一日獨立の不動堂が現在の所に竣工し、型の如く盛んな劍を振り上げ、力士、藝妓、お茶屋のお媛などの信仰を集めるに至つたのである。一日、十五日、二十八日の緣日には境内身動きもならぬほどであつたが、その緣日に地震があつたのまで責を負はされて、當分旗色がわるそうである。

天井の高い、間口の廣い、土間にピカ〳〵の茶釜を据えて、それに柄の長ひヒシヤクを立てかけ、軒に講中の名を染め出せし手拭幡をひらめかした、あの一種變つた不動茶屋の建築と情へとは、やはりいつまでも殘しておきたかつた。蓋し新東京には鐵筋コンクリートの不動茶屋が建つかも知れないのである。

公園内には深川圖書館を初め、八幡境内にもいろ〳〵の末社があり、八幡社の裏には先帝遙拜場所たる櫻菊會が、名高い人造富士の淺間神社と相對して居た。蜀山兀として阿房出づといふ文句はあるが、これはその反對に、附近の燒跡の中に、人造富士と、その向ふ側の横綱碑が一しほそびえて殘つたのが見える。

昔は深川八幡の富士詣りといつて、五月卅日六月一日の兩日に此のお山開きが大變盛つたそうだ。それを當て込んで百姓等が麥稈でおもちやの蛇をこしらえて小遣取りに賣つたら、客の方から疫病除けの御利益を押つけて呉れて非常に賣れた。麥稈の蛇は張子の虎や柳の鶯と共に、今でも江戸つ子に歡迎されて居るが、人造富士の方はあまり珍重されなくなつた。横綱碑は八幡宮の境内が、回向院以前の相撲場だつた緣故で、明治二十

八年三月に建てられ、背面の罫の中には、寛永元年明石志賀之助以來歴代の横綱の名前を刻してある。この境内で相撲が興行されたのは、元祿十一年淺草の三十三間堂が燒けて、深川八幡の隣地に再建さるゝに際し、地堅め勸進相撲の名目で出願したのが初まりである。

（）

大盡舞の唄の文句に

『……さて其の頃の大盡は、奈良茂の君にとゞめたり。新町に隠れなき、加賀屋の名とり浦里の君様を、初めてこれを見受けする。深川に隠れなき、黒江町に殿を建て、日暮御殿となぞらへて、附添ふ幇間は誰々ぞ……』

とある日暮御殿は、奈良茂大盡が材木買込みの御馳走政略を施すために新築せし輪奐華麗な伏魔殿であるともいへば、また一説奈良茂が木挽町の芝居で老女江島を見染め、江島を誘惑するため金に飽かして建てたものだともいふ。いづれにしても何等かの目算があつて建てたものに相違ないことは其の假名によつて明瞭である。『附添ふ幇間は誰々ぞ』とあるのは、英一蝶佛師民部、俳諧師角蝶などのことである。其の外八百屋お七に初めて扮せし人氣役者の嵐喜代三、役者にして幇間なる二朱判吉兵衛、當時第一流の三味線ひきの長唄小四郎なども常に奈良茂をとりまいて、紀文大盡の豪遊と伊達を競つた。英一蝶はのち民部と結托して當世百人一首や朝妻船を描いて當路を諷るものと認められ、三宅島へ流された。深川萬年橋から一蝶が流人船に乘つて出ようとする離愁の情を、池田輝方君が描いて文展の人氣をさらつたのは諸君の記憶に新たであらう。

事茲に至れば少しく厭な話をしなければならない。舊幕時代遠島處刑を云渡された囚人は、御濱、萬年橋、永代橋、靈岸、新堀、御船手向井將監屋敷前（鐵砲の横）の六箇所から艀船に乘せて、芝浦沖の親船へ運ばれた。その朝流人共は傳馬町の牢屋から引出され、南北兩奉行から附添の與力各二人、同心各二人合計八名に護送されて、萬年橋なら萬年橋まで來ると、そこに待つて居る御船手の役人が人數を調べて受取る。橋の下には送りの船と稱する艀船がもやつて居る。乘船までの僅かの時間で囚人は見送りの親兄弟と對面を許される。軈て發船の合圖の竹法螺がブウ〳〵鳴りひゞくと、どんな大悪人でもし悄れて船に乘る。送りの船が永代橋の下を過ぎて沖へ出てゆくのを橋上の見物人は念佛申しながら見送る。沖の親船では、紙旗を振つて歡迎の意を表する。三宅島なり八丈島なりまで三四日間の船中は、御船手組の役人が護衛し、先方へついてからは島司の責任になる。島へ着かぬうちに役人を斬り殺して舵を流してメリ

ケンへ……などゝ考へる惡黨もある。

黒江町は今では電車の分岐點になり、銀行や倉庫會社や商店が櫛比し、目算御殿の跡など算出すべくもない。あの邊はやはり昔は潮入り地であつた。潮がひいて跡に一條のドス黒い水路が殘つたから黒江町の名が起つたといふ事だ。入船町も蛤町も海邊町も大島町もすべて海洲の名殘を意味する名である。それが陸地になつて後は、或時代の四將軍の御鷹場になつて居た。黒江町の邊で蛤がとれなくなつたと思つたら今度は鶴がとれ出したから、成程蛤の前生は雀だつたかも知れない。そんな風であるから深川全區で海拔十一尺の高さを越ゆるところは無く、最低地は海拔四尺であつた。それが今度の地床沈下で五寸乃至一尺も低くなつた。こういふ意味での水の都は難有くない。本所深川は工場地たるに適せずとの説が高まりつゝあるのも一理ある。水の爲めに工場地たるに適せぬならば、その理由は商業地にも住宅地にも共通である。果して然らば本所深川を一體どうすればいゝか。寧ろ再び堀り起して一大養魚場でも作るつもりか。魚類ならば水に閉口せぬこと請合である。

○

永代橋は五代將軍綱吉公五十の賀として元祿九年起工、翌十年八月一日家康入國の記念日を以て開橋された。綱吉は初め四十二の厄拂ひを思立つたが、寵僧隆光が『三十三は産重産の語呂、四十二は始終荷、即ち荷厄介が絶えぬと申す語呂に過ぎませぬ。一天下を撫育し給ふ君としては諸人の助け道を講じ玉ふこそ何よりの厄拂ひと存じます』と進言した結果、永代島の語呂から永代の人助けの意味で架橋した。弧狀のまゝ測りて百二十間幅三間一尺五寸、假橋ではあるが、最下流の橋として帆檣の林立と房總の山々を眺め他の三橋に見られぬ風情があつた。

新大橋はその數年前の元祿六年十二月之また將軍のお聲がゝりで架せられた。伊賀の國から流れ込んだ風羅坊松尾桃青は、工事半ばに『初雪やかけかゝりたる橋の上』と詠じ落成後『ありがたや頂いて踏む橋の霜』と感謝した。新大橋ができてその下流日本橋區寄りの三股は、紅燈いよ／＼あざやかに、絃歌いよ／＼艷めいた。三股の月は江戸名所の一であつた。今度の震災で無事だつたものは太陽と月だけであるが、人を馬鹿にしたような顔をして燒け跡を照らす月も、眞面目臭つた顔をして芭蕉の頭陀袋を照らした月も、同じであるかと思へば、獨り人世の有爲轉變を感ぜずに居られない。

貞享四年八月十五日、芭蕉は深川の庵の縁に座して庭内の生簀にうつる月をながめて居ると、そこへ門人の其角と仙北が『三股の月を賞しませう』と誘ひに來た。月に目のない芭蕉は二

つ返事で、庵の前から船を浮べて萬年橋の下を隅田川へ漕ぎ出し、波上の清光をくだきつゝ漕ぎ上り漕ぎ下らせた。三股の芦の中へ船を流して其角は何よりも先づ酒を暖めた。芭蕉は深くはいけぬが酒の味はすきであつた。月は好し友は好し、遠く兩國廣小路の賑ひ、近く三股の絃歌を聞きながら思ひ出したように『えゝと、名月や』とつぶやいて居た、其角は遽りに盃を重ねて、盃がねばると舷から手をのべて銀鱗のような水に盃を洗ひ〳〵した、三人とも一句もできなかつた。仙北の從者が『生れて初めての發句でございます』と前書き附で『名月は汐を流るゝ小舟かな』と詠んで芭蕉にほめられた。

仙臺堀に臨んでセメントの煙突が林立せし淺野セメント工場が芭蕉庵の跡だと傳へられるのは間違ひで、あそこは仙臺侯の下屋敷の跡である。萬年橋の少しく上手、即ち小名木川へ六間堀が直角に會流する角屋敷が鯉屋杉風の別莊の一たる芭蕉庵の跡で、『古池や蛙とび込む水の音』と芭蕉翁の詠みし生簀はその邸内にあつた。芭蕉はまた『名月や池をめぐりて夜もすがら』ともその生簀のことを詠んだ。芭蕉庵のあとは其後松平遠江守の下屋敷となり、現在は數區劃に分割されて原形を推定するに困難であるが私はいろ〳〵の理由から古石場製備所が芭蕉の庵室のありし跡であると考えた。但しその昔正風の蛙を産み出せし古池の跡は今や跡形もない。天和三年の火事に芭蕉はその古池にとび込み、頭から藻をかぶつて一命を助かつた結果『蛙とび込む水の音』の吟を成したのだといふ説は些と怪しい。

或る雪の降る晩に定連の嵐雪、依水、苔翠、泥芹、夕菊、友五、曾良などうちつれて芭蕉庵を訪づれた。杉風素堂等の有志家の仕送りで喰べて居る芭蕉庵には生憎米も酒もなかつた。門人等は夫々手別けして食料品を買ひに出た。芭蕉も『米買ひに麻の袋や投げ頭巾』と吟じて笑ひながら出て行つた。友五は手の上へ豆腐を載せて『手に据えし豆腐を照らせ雪の月』と詠みながら歸つて來た。八人の貧俳人は銘々の買出して來た品物に因んで句をものした。有名な『深川八貧の句』がそれである。

芭蕉は或る夜孤燈の下に端坐しつゝ、窓外を過ぐる櫓聲に耳を澄ませ

深川冬夜の感

櫓聲波を打つて腸氷る夜は淚　　芭蕉

といふ句を作つた。枯木のような彼の身内に、火の如き熱情が出口を求めて悶えて居ることが、その句にあり〳〵と見はれた。

○

新大橋から本所區との境の一つ目橋までが御舟藏であつた。

安宅（アタケ）町といふ名は、御舟藏に繫留せし安宅丸によりて明治二年につけたものである。古くからあの邊の片側町を御舟藏前町と呼んで居た。御舟藏のあとに出來た安宅町は、今では普通民家が密積して何の風致もなく、『安宅丸怪談』を茶飲咄にするような暇人も跡を絶つた。

初め安宅丸が竣工せし時家光公は大得意であつたが、どういふわけか寛永十二年に御舟藏へ納められてから、約五十年間安宅丸は空しく繫留されしまゝであつた。すると或年の冬安宅丸は纜綱を切つて沖へ出で『伊豆へ行こう〱』とわめきながら相模灘へさしかゝつた。辛うじて三浦三崎の番所で、それを取押へて御舟藏へ戻した。今度は前よりも嚴重につないで置くと夫れからは夜な〱水の底で『伊豆へ行こう〱』と泣くように訴へた。

幕府では大老堀田正俊の建言を容れて安宅丸を解體した。その時金銀の金具約四十萬兩に相當するものを正俊が私したといふ噂から、船の泣き聲も正俊が忍びの者を使つて叫ばしたものだといふ噂が高かつた。正俊が近年の增長を憤りし若年寄の稻田正休は城中に於て正俊が退出する所を呼びかけて殺した。貞享元年八月二十八日の事で、世に所謂貞享騷動がそれである。正休が正俊を田樂刺しにした柱から、いつまでも血を噴くといふ氣疎い話が安宅丸怪談から派生した。幕府では青くなつて御舟藏へ安宅丸塚を建てた。安宅丸塚の跡が安宅丸稻荷となり安宅稻荷の跡が人家となつて、今度その跡が焦土となつた。

共に燒けたから恨みはないが、忠臣藏の話では兩國橋が幸運で、永代橋が不運であつた。一行が引揚の時に渡つたのも永代橋、一行に護られて吉良の級首が渡つたのも永代橋である。そして細井廣澤が一行に追ひついて、堀部安兵衛や大石良雄に喜びを述べたのも永代橋である。細井と堀部との別れの話が、兩國橋上に於ける其角と子葉（大高源五）の出逢ひの話にむぢられたのである。討入前日の大高源五の行動は明瞭にわかつて居る。彼は午前中寓居に於て片づけ物をして居た。午後は今一度山田宗徧宗匠を訪ひて、明晩の吉良邸の茶會をたしかめ、夜は堀部宅へ大石や細井廣澤と會して別盃を擧げた。何を苦しんでか又何の違ありてか、煤竹賣となつて兩國邊を徘徊しよう。

森下町の長慶寺は大正四年墓地を整理して、五人男の隨一日本左衞門の骨も納骨堂へ納めた。芝居の方では「問はれて名乘るもおこがましいが、生れは遠州濱松在、十四の時から親に別れ、身のなりわえも白浪の、沖を越へたる夜ばたらき』と自白して居るが、松浦侯などは其の隨筆『甲子夜話』の一節に『この人盜みせし物念は、不義にして富める者の財物は盜み

とるとも咎なき理なれば、苦しからずと心おきてして、其人其家を量りて盗み入りしとぞ。（中略）それより慾心ふかくなり、後は義不義の見分けをする暇もなく、都合さへよければいづれの所と定めず盗みに入りけるが、一人も人をあやめたる事なかりしとなり』

と肩を持ちたげである。『さて其次は江の島の岩本院の稚兒あがり』とか『續いて後ろにひけえしは月の武藏の江戸育ち』とか『その又うしろに連るは、以前は武家の中小姓』とか『さてどんじりにひけえしは、色風荒き小波の、磯馴れ松の曲りなり、人になつたる濱育ち』とか負けず劣らず碌でもない生立ちを自慢せる五人男といふものは、長慶寺の過去帳にも見えなかつた。五人男は架空の人物であらうが、彼の一類十七人ほど同時に處刑されたことを、私はその過去帳から知ることができた。

　奈良茂を葬つたと傳へらるゝ靈巖寺寺中雄松院に、夫れらしい墓は見當らなかつた。寺でもよくそれについて知らぬ樣子であつた。『以前はたしかに有りましたそうですが、もう餘程前に郷里の江州から人が來て、骨を持つて行つたとか申します』——それとても具體的の話ではなかつた。之に反し紀文大盡の墓は同じ寺中の成等院にチョコナンとあつた。その墓の餘りに小さいのに私はおどろきと親しみとを感じた。猶ほその外に私は靈巖寺及びその大寺の墓域内で松平樂翁公、首切淺右衛門、並木五瓶、小山田與清などの墓が無事であるのを見た。

　淨心寺までは阿武松緑之助、岩井半四郎、清元延壽太夫、矢部駿河守、間宮林藏、橋本雅邦の墓を見た。先代左團次の墓は先年池上本門寺へうつされたといふことであつた。以上の外因速寺の四ツ車大八、増林寺の三井親和（書家）、雲光院の庄司甚右衛門（通稱甚内、吉原の開祖）竹本越路太夫、本誓寺の村田春海、杵屋勘五郎、慈眼寺の司馬江漢、小林平八郎、重願寺の新場の小安などの墓は、掃苔家の低徊顧望せしものであつた。

　避難者が飢えて牛の丸燒きを我がちにムシリ喰つた越中島の中央糧秣廠の邊は、もと海中の寄洲であつたが、明暦頃榊原高尾で名高い榊原越中守が別莊を作つたので、里俗に越中島と呼び、爾來幾變遷して、明治以後陸軍調練所となり糧秣廠となつた。あんな大仕掛けのビフテキを饑民に供し得たのは、糧秣廠の本領を發揮したものと謂ふべしである。

□

　日本橋區は日本橋、江戸橋、一石橋、三越、三井銀行、日本銀行、村井銀行、大安樂寺、魚河岸、中洲、蠣殼町、お店と稱する各種の問屋、新聞社、書肆、銀行など現在としても史蹟として、惜しむべき多くを含んで寸土も餘さず燒けつくした。

キリンビールのレッテルのような飾りをもつた日本橋は、あの花崗石の欄干が強い火に焦げて悪い塗り物のように剝落した家光公が子供の時、日本橋の下で游泳したといふ話があるほどで、京橋も日本橋も潮水が差引して、川筋には芦荻叢生し和田倉門から一石橋まで見通しの大江であつた。慶長八年初めて日本橋が出來た時は、兩方から石垣を築き出して猶ほ橋の長さ三十七間四尺五寸あつた。現在の橋は明治四十四年五十萬圓の工費で竣成し長さ二十八間につまり、其代り四間三尺五寸だつた幅が十間八分となつた。初めての架橋から現在まで十二回架け換へられた。

日本橋が出來た翌年徳川氏は三十六町一里と定め、日本橋を元標とし全國の街道に一里塚を作らせた。廣重の描いた日本橋の繪は魚河岸から魚を買出した魚屋が、武士を突きのけて走るような、實に好いポイントをつかんである。それと今一つの特色は之も矢張りあの繪にある如く橋畔に林立せる高札であつた。その高札には駄馬賃、人足賃から道德上の心得までも町奉行の名に於て書出された。日本橋の名稱は數說あれど、元標設置の爲め日本の中央とか、旅の振り出しとかになつた心もちから生れた名であろう。

橋の南畔に殘骸のそゝり立つ村井銀行の邊は、日本橋の曝し場であつた。間口、奥行各七間の笹小屋に、女犯の僧侶や情死未遂者を三日間づゝ曝したところで、色ッぽい罪人だから見物人はうれしがつた。その曝し場の跡をふんで村井銀行の地下室へ通ると、うまい佛蘭西料理が喰へる寸法になつてた譯である。白木屋は全部灰になつて殘骸も止めず、たゞ名水の石標が殘つて居る。名水は一階中央に欄干をめぐらして保存してあつた。舊幕時代はお茶の水御用として折々將軍家から使者が立つた。江州の材木屋をやめて江戸へ來た祖先大村彥太郎と、その從兄で後年の鴻儒となりし三輪執齋の競爭立志譚は白木屋の誇りであつた。『カスル』といふ言葉を忌んで、店員に絣の着物を禁じた頑固な家憲も奥床しがられた。

家康入國當時、室町三越前の畔りは二抱え三抱えの大木が空を蔽ひ、茨の繁る小高き丘には居民の家が散點した。家康は日本橋を新江戸市の中樞とするについて、其の部落を本町四丁目の地點に在りし梟首場と共に淺草鳥越へ移した。明暦年間越後屋の祖三井八郎右衛門は、今の三越の所へ間口六間奥行十間の呉服店を開き、掛直無し現金安賣及び衣裝各部の分類販賣法によりて忽ち同業先輩を壓倒した。急ぎの客は待たせて置いて仕立てることもした。それが傳はつて三越精神を成した。裸で來た客に歸りには婚禮の仕度も、洋行の仕度も間に合はせることが

三越の誇りであつた。その三越も新館の尖塔が依然として天に冲するのと、玄關のライオンが依然として寢そべつて居る外は七珍萬寶悉く燒け失せた。私は向つて左のライオンの眞下に一人の婦人の屍骸を初めて見た。黑裸々のかばねは細い咽喉をそらし、手足を縮めて神にでも祈るような鹽梅で殪れて居た。滿都の子女の呪ひとあこがれとを集めし殿堂の跡に、戍兵の眼をかすめて金銀珠玉をあさる者が夜な／＼絶えないといふ。

越後屋では其の後幕府御用の爲替を取扱つて富を増した。大阪城代、京都所司代から江戸へ送るべき千萬兩の大金を、大阪の支店が預り、六十日後に江戸の本店からそれを幕府に納める仕組であつた。爲めに幕府は現金發送の危險をのがれ、越後屋は潤澤な融通資金を運轉し、無利子の上に爲替料を得た。幕府も越後屋も共に利して、東海道のゴマの蠅だけが損をした。この御用爲替の仕事が越後屋から分離して我國銀行業の祖を成した。明治九年創立の三井銀行が卽ちそれである。三越の殘骸と相對峙して、廣い石だゝみの奥に、日本銀行の殘骸と呼應せる見事な建物は、三井家の致富の跡を物語つてゐる。

日本銀行が一時危く見えたが幸ひに金庫だけ免かれた——といふ風に報ぜられた。あそこは後藤庄三郎光次が金貨を鑄造せし金座の跡である。金座の土には金粉がかたまつて土一升金一升の諺のとほりであつた。明治二十三年日本銀行の基礎工事の際、夥しい溶金が土にまぢつて堀出された。地底二十尺まで堀下げた時、廣さの測り知れぬ一枚石に逢着したから、その上へコンクリートで一丈餘り土臺を築いて四階の大石造館を建てた。地下室中央の大金庫は、平生鐵門に守られてあるが、今度のような場合には金庫を深い水底に沈下する仕組になつて居る。免がれたも免がれぬも無い。これでは如何な天災地變も叉泥棒も、一寸手がつけられないであろう。

○

天正年間攝津西成郡佃村の名主森孫右衞門が、村内の漁民三四十人を率ゐて江戸海岸の一小嶋へ移住して、携帶せる白魚の子を海へ放つた。その島が今の佃島である。慶長年間孫右衞門の子の九右衞門が歸化人アダムス事安針の智慧を借りて日本橋の北畔へ魚市場を開いた。これが後年の江戸つ子の元締のようになりし魚河岸の發生史である。魚河岸の一部にある安針町はウヰリヤム、アダムスの官宅のあつた所である。

アダムス夫人の實家なる大傳馬町一の二馬込勘解由方へ同居せし、佐久間某の女中お竹こそは名高いお竹如來であつた。馬込の屋敷跡は小津清右衞門といふ木綿問屋となり、その見世を入つて右側の土藏の下に、お竹如來が朝夕汲んだ井戸の跡を

標示する一つの圓石が殘つて居た。

本石町三丁目の博文館小賣部と今川町との中間に、明治初年まで時の鐘の櫓があつた。その鐘は初め太田道灌が城内に吊るして撞かせたものであるが、家康は八釜しくていかんといつて本石町の新道へ移し、明治四年城内から午砲をうち出すまで撞き鳴らされた。本釣鐘はゴーンと濁らないが規則だそうだが、之はひゞが入つて居たのでゴーンと濁つたそうである。

最近に落成せし一石橋や吳服橋は、あまり震火の影響を蒙らなかつたが、一石橋北畔の何銀行(？)であつたか、煉瓦造りの洋館が、一間四方位の大きなマッスに割れて磊塊と積み重なつてある下に、私は澤山の壓死者を想像せずに居らなかつた。一石橋の名は北畔の日本銀行が後藤光次、南畔の福家旅館の所が吳服所後藤縫殿之助の屋敷であつたから、五斗が二つで一石といふ洒落であつた。吳服橋の名は吳服所に基きしこと勿論である。

堺町、葺屋町は芳町藝妓の勢力範圍でその發生史は前述の如く、庄司甚内の遊廓創造を以て第一頁とする。おやぢ橋は實に甚内の德を記念すべく同業者が命名せしものであつた。江戸橋の東京郵便局は活鋼屋敷即ち幕府御用の魚藏の跡であつた。

海運橋舊名海賊橋に面せし天保錢翁玉塚榮次郎氏の土藏式角店は紀文大盡の屋敷跡と傳へられた。榮次郎翁が物故する一二年前にその一部分を白煉瓦洋館の事務所にしたが、一部は昔のまゝの土藏店にしておいた。紀文は成功後本材木町一圓の地面を所有し、海賊橋際に材木藏を建て、『紀伊國屋文左衛門』と大きな標札をうつておいた。カツボレ〱甘茶でカツボレとなんいふ踊は感心しないが、『沖の暗いに白帆が見ゆる、あれは紀ノ國蜜柑船』といふ唄が、江戸文明の爛熟期以後、江戸つ子の膽つ玉が豆粒のように萎縮せんとするのをどれほど支えたらう。

日本橋中橋は先年埋築されて了つたが、昔は汐留から江戸橋へ通ずる水路に架けた橋の一つであつた。今度三階樓上から六萬何千圓とかの紙幣が、秋の木の葉と赤い風に舞落ちた丸善の洋館の邊が、即ち猿若勘三郎の初めて櫓をあげたところで、その猿若芝居が即ち中村座の起源である。中村座は其の後堺町へ移つて葺屋町芝居即ち市村座と對峙した。市村座の祖山村又三郎は禰宜で名高い名護屋山三郎の一弟子である。山三郎が男て『通ひ廓の大門を、へえれば忽ち極樂淨土、歌舞の菩薩の君達が、妙なる御聲音樂や、花ふりかゝる仲之町、色に色あるその中を、よしや男の丹前姿、よけて通すが戀の道……』要するに『どけツ』と一言ですむことを、斯う長たらしく掛け合つたか否かはわからないが、狂言そのものは江戸ッ子の人氣に投じ、

今でもこの白は芝居道樂に暗誦されて居る。

十軒店の雛人形や五月人形が燒けたことは、セルロイドのキユピーとビロウドの熊のみに滿足せぬ子供等を悲しませた。江戸時代から傳統せし夢の世界が、子供にも必要だからである。

○

傳馬上町二十二番地全體は所謂牢屋敷の跡で、總地坪二千六百何十坪かあり、典獄石出帶刀の官舍がその一部を領して居た。それが今は大安樂寺、圓光寺、十四學校、村雲末院などに別れた。大安樂寺の地藏像の前の邊が囚人の首斬り場として代々の首斬淺右衛門が敏腕を振つた跡である。その度毎に刀の血を洗つた井戸は夙に埋めつぶされた。維新後あの邊の地價が一百圓を稱えし際、牢屋敷跡の不淨地に限り三圓五十錢に下落した。明治十五六年頃囚人供養の寺を建てることになり、あの邊を思惑買せし大倉、安田兩家から寺の敷地を寄進したので、兩家の頭字を結び合はせて寺號とした。明暦年間の石出當軒が囚人を解放せし英斷が先例となつて、出火の際の牢拂ひといふ處置が定まつたのである。牢屋は明治八年五月、市谷監獄の落成と共に廢滅に歸した

○

『玄冶店』の俗稱は松助の蝙蝠安か、蝙蝠安の松助かと思はせる『切られ與三郎』の芝居でます／＼普及した。もと／＼小さな新道であつたから、新東京にはそんなもの傳はらぬであろう。芳町藝妓の巢も燒けた。昔は芝居見物の客に侍坐して、飲食の用を助けるに過ぎなかつた芳町藝妓は、それ以上立入つた方面をカゲマと稱する女形の賣色行爲に一任して居た。夫れ故芝居小屋が猿若町へ引けてのち芳町藝妓は職を失つた形であつたが、金銀座の役人が彼等の後援者となつて、立入つた方面の職を與へた。明治以後彼等は蠣殼町の相場師を金穴として、賣方と買方との間を巧みに泳ぎ、夢幻的のロマンスよりも、黄金の力を崇拜した。

荒布橋とおやぢ橋との間に、昔は雪踏と下駄と雨傘をひさぐ家が軒を列ねた。照降り町の名はそのためである。思案橋とわさくれ橋とは、昔は今と反對であつたといふが、由ありげな橋名の起因を詳らかにしない。思案橋事件といふのは會津藩士永岡敬次郎等十餘名が、廢藩置縣と薩長の專權を憤つて起し小な謀反であつた。明治九年十月二十九日の夕方、思案橋の下から發する下總行の船が今にも解纜せんとする所へ、兩國警察屯所の寺本警部が巡回して來て、士族の一團と見ゆる乘客の荷物を調べた。菰卷にした荷物の中には刀槍、鐵砲などがかくしてあるので士族はそれを見せる事を拒んだが、寺本警部は強要した。

士族の一人が寺本の油斷に乘じ拔打に川の中へ斬り下げた。それから大騷ぎになつて非常線が張られ、あの附近に血の雨を降らせた。士族等は或は逃亡し、或は重傷を負ひて捕はれ、或は自首をした。最も腕の利いた老人は濱町河岸で十數名の巡査と戰ひつゝ立腹を切つて死んだ。

士族の一團は永岡等で立腹の老人は中根半六であつた。彼等は遠く神風連や前原一誠の謀反に應じ、千葉縣廳、佐倉分營、宇都宮分營を襲ひ、一擧にして薩長政府を覆すもくろみであつた。日本橋のまん中だけに騷ぎは大きかつた。その思案橋事件は翌十年二月七日に殘黨も處分された。三人が死刑で以下數名は輕重があつた。首魁永岡は傷のために鍛冶橋の監獄で牢死した。

茅場町と蠣殼町をつなぐ鎧橋も燒け落ちた。明治五年の架設でそれまで鎧ケ淵は渡し船で渡して居た。あの大鐵橋ができて橋畔に第一銀行が建つた時、銀行とは何をする役所だといつて江戸つ子は眉に唾した。或る老婆は玄關からお賽錢を投げて忝しく拜んで行つた。

茅場町藥師は境内に寶井其角が寓居したので名高く、其角に『梅咲くや隣は荻生惣右衛門』と詠まれし荻生徂徠は必定坂本公園の邊にトグロを卷いたものらしく、『文七に踏まるな庭のかたつぶり』と矢張り其角の句に出てる文七元結は、あの邊の大きな空地で元結を乾かしたものと見える。其角から半世紀後ですら加茂眞淵翁は『濱まちといふ所』へ隱居して縣居の翁と稱し、こふろぎが鳴くの、茅生の露原に月がさすのと悠長なことをいつて居た。縣居は卽ち郊外生活の意で、邸内の山伏の井戸は夙にうづまり、其の上を兩國行の電車が通つて居た。多分日本橋倶樂部のあつた邊が、眞淵翁の屋敷跡であらう。

川開きの花火は昔も今も兩國の花である。それが福井樓を初めとし多くの酒樓は花火よりも脆く燒けた。矢の倉の稱は大阪町、立花町、村松町、兩國へかけて幕府の矢を藏めし大きな倉があつたからである。初めて江戸で瓦屋根を葺いた商人は日本橋本町邊の彌治兵衛であつた。それは昨今のまがい洋館のように、正面半分だけ瓦にし、後半はコケラ葺であつたから、早速半瓦の彌治衛さんといふ仇名を得た。

○

江戸以來の盛り神の一つであつた有馬邸内の水天宮も今度の災厄は免かれ得なかつた。龍宮樣も陸上の天災には閉口せられたろう。併し水天宮の祭神は表面龍宮であるが、實は安德幼帝と、建禮門院と二位局の三體を祀つたものである。『浪の下にも都ありとは』といふ安德帝の御辭世が、火宅を恐るゝ人の心に

今度は別の意味で強く印象したであろう。

私は或る日は警視廳の配給自働車に乘せて貰ひ、罹災地の各署へ西瓜の俵を配りながら一巡りした。兜町の投機國から水天宮の燒跡、濱町の色町の跡を見て大川端へ出た。黒く濁れる上げ汐のまに〳〵無數の屍骸が岸近く漾ふて居た。力士の樣にふくれた裸體の間を、隙間なく人形のような小兒の屍骸が塞けて居た。

數日間屍骸を見馴れた警官等も、顏をしかめて「是はひどい」と云ひ合せた。警官の白服は赤土で染めたようによごれ、脊中のまん中が刄物ででも切つたように破れてゐるもあつた。私は

『こんどの仕事で何が一番つらいですか』

と尋ねると

『睡眠不足が一番つらくあります』

と答へた。

箱崎町の歷史は判然しない。享保年間江戸城の堀を竣つた土で町家を築いた事と、其の後寶曆年間同じ手段で築出したことがわかつてゐる。永久橋は永井家と久世家とを結びつけたからの名で、ハイカラな意味は無い。久松町の明治座も晴がましい歷史をもたぬ。舊幕時代兩國廣小路の鷹張り芝居の一であつたのを、廣小路が明治五年取拂ひとなつたので、翌六年四月二十八日今の所へ喜昇座として開場したのが明治座の前身である。それから久松座、千歲座、日本橋座などゝ改稱し、明治二十六年十一月今の名にしたのである。市川左團次、伊井蓉峰、河合武雄などのヒイキ客によつて多年維持されて來た。

中洲は三股即ち富永町の跡で、寛政元年三股を毀棄せし以後一帶の水面であつたが、又ぞろデルタを形成したので、明治一十一年埋築して市街地を復興した。昔の三股は明和八年起工、安永元年埋築成り、同四年には賑やかな市街地となつた。約一萬坪の面積に酒井、白須、菅沼の各屋敷と九十三軒の茶屋と三軒の錢湯屋と、普通商店をふくみ、折角の市街が水害で毀棄せらるゝまで十四五年間の繁昌は、兩國廣小路が全然打擊を蒙りしほどであつた。毎年五月二十八日には出茶屋と稱する掛出しの納涼茶屋が假設されて、納涼船の吉野丸、兵庫丸、川一丸、高尾丸などが漕ぎ寄せられた。『吹けよ川風、あがれよすだれ』――紅燈星と輝き、絃歌雨と湧いて龍宮城の長夜の宴かと思はれた。

高尾の吊し斬りが、全く三股を背景とせし劇的俗說であることは、萬治二三年頃の伊達綱宗侯の行狀を調べれば明らかである。しかしながら俗說にせよ、綱宗が、愛妓の目方だけの小判を積んで受出すこと、それが自分になびかぬとて髮をにぎつ

て舷から吊し斬りにすること、及びそれにからまる餘談が當時の吉原通ひの大名をよく現はして居る。新大橋の際に高尾稲荷といふ稲荷までできたのは、嘘から出た誠である。

船まんぢうと稱する浪の上の果敢なき稼業は、天保改革のころまで盛んであつた。彼等は夜陰が辻ゆく人を誘ふように、船の中から客をよんで三股のあたりへ漕き出させた。寶暦、天明の頃お千代といふシタ、カ者が居て、中洲一とめぐり三十二文といふ定めを、百文にも二百文にも釣り上げた。しまひには船まんぢうの乘つてゐる船のことを、みなお千代船と呼ぶほどであつた。今は中洲わたりの船まんぢうは跡を絶つて、歐洲航路を跡にかける船まんぢうが榮えて來た。

木屋、古梅園、金花堂、須原屋、山本山などの舊家には一つ一つに面白い由緒があり、木原店、植木屋、茅場河岸、かむろ池、兜塚、楓川、槇町、箔屋町、クレマサ町、檜物町、元大工町、青物町、呉服町、四日市、式部小路など日本橋區らしい町名や地名には、主として德川時代の世相や事件を背景とする由緒がある。お店(タナ)といふのは出入りのカシラ(鳶)などの立場からいつた者であろうが、お店と云ふ下町獨特の氣分は日本橋に限られたと謂つて好い。お店氣分は下町情趣の最も洗練されたものでその風化は大學出の青年にすら及んで居た。あの特殊のカルチユアと、あの土藏作り結界式の前だれ氣分と建築とが、今度の火災を界として亡びるかと思ふと、淋しい氣持がする。

○

京橋區の目ぬきであつた銀座の廢殘の跡のいたましさ、夫れは常によくあちこち喰べものゝ事などを作品の中へ書込みたがる銀ブラ黨ばかりの悲しみではない。銀座の稱は前記後藤光次の管掌する銀貨鑄造所があつたからで、その銀座は今の銀座二丁目三丁目にまたがつて在つた。あの邊はもと新兩替町と呼ばれたが、慶長十七年銀座の設置と共に現在の名に改稱され、享保年間銀座が蠣殼町へ引けてのちも銀座の地名だけは殘つた。日露戰爭ごろ「銀座街巡查劍把り走せ行きぬ新橋あたり喧嘩なるらん」といふヘナブリが作られ、それと前後して銀ブラといふ下品な言葉が生れた。

正德元年、新橋から出雲町竹川町のゑり治本店、向ふ側の資生堂のありし邊あの界隈の町家を立のかせて、馬鹿に大きな櫓門を押立てたことがある。それは朝鮮來聘使歡迎の爲めで、新橋を芝口橋と改稱し、その門を芝口門と稱した。享保九年の火災後門を再建せず以前の町家を許した。それが明治五年五月また燒けたので政府は模範的防火建築を起すつもりで、銀座一帶の民有地を買收し、工費百萬圓かを投じて千五百戸ほどの洋風店舖

を七年かゝつて完成して貸下げた。煉瓦の舗道から煉瓦地の名稱が起り、その煉瓦の上を品川、上野間の馬車鐵道が通ひ、痩せこけた馬が糞をしなからパカ〳〵と馳せた。昨年木造の道にした爲め、今度はそれがよく燃えて避難民の足を焼いた。

最近移轉せし讀賣新聞社は久しく銀座一丁目一番地即ち京橋の袂に在りて東京名物の一であつた。三十間堀には報知新聞、富士新聞、日出國新聞、萬朝報などがあつたが追々移轉したり廢刊したりした。金春(こんぱる)の地名を殘せる能役者金春太夫の屋敷は、今の南金六町に在つた。金六町は豪族芝田金六が開いたゝめである。新橋藝妓の舊名を金春藝妓といつたのは、南金六町からあの附近に巣喰つてゐたからで、板新道、しがらき新道などの路次の名も今では古風にひゞく。金春藝妓昔は至つて振はずタツタ十四五名に過ぎなかつたが、安政頃五十名、慶應頃二百名と繁殖した。

國民新聞のあつた日吉町は、山王様が半藏門外に鎭座せし頃の門前町であつたのを、後ち山王様が移轉の節別れて現在の所へ移住したので初めは山王町といつた。八官町山城町はアドヴアタイザーや中央新聞などの洋館が外濠に面して並んで居たがずつと昔はオランダ人ハチクワンに屋敷を賜ひし跡だつた。東京朝日新聞社の瀧山町は瀧山藤吉が開いたゝめであるが竹林が、多かつたので竹山町と訛つたこともあるといふ。汐入り地の岸に竹林があつたものだらう。竹川町の名も舊名竹屋町といつて竹を商ふ者が多かつたからであつた。省線の有樂町驛は新橋驛、萬世橋驛に劣らずひどい燒け方をしたが、燒けあとを假修繕して、雲霧の如く押寄する三菱村の通勤者を通すことにした。昔は數寄屋橋外山下町までを有樂原と稱えたので、それは慶長年間織田有樂齋が、大邸宅を構へた跡だからである。三四丁の區域が明地になつてからのちも久しく築山や池の形を存し春は摘み草、夏は螢狩と都人行樂の郊外地であつた。寛永年間まで將軍は折々あの邊へ遊獵して小鳥などを捕つた。數寄屋町は有樂齋の屋敷が目立つて念入りに造られたことから起つた名であつた。天金の邊で昔は小鳥狩をしたのかと思ふと一寸妙であつた。

星亨のめざまし新聞から脈を引ける人民新聞といふのが、明治三十四五年頃山下町から發行されて居た。福澤先生の手で初め慶應義塾内に生れし時事新報も、今度南鍋町で類燒した。鍋町の名は、鑄物師長谷川豐後に因んだものであらう。日報社も毎日新聞社も移轉前は尾張町に在つた。天賞堂の燒跡は火事泥の焦點となつたが、災後一ヶ月半の今日、新聞に早くも天賞堂の賣出し廣告が現はれて居る。能く夫れ丈の品物が出た事である。

そして能くそれを買ふ人があることである。

○

木挽町は家康が江戸城改築の際に、多くの木挽職を居らせた跡である。尾張大納言、紀伊大納言、京極主膳、加藤喜介、松平周防、松平越後などの藏屋敷が海に向つて並んで居たが、萬治年間築地が埋立てられて以來木挽町は海から遠くなつた。

萬治三年森田太郎兵衛が木挽町五丁目の汐入り地に、木挽町狂言座即ち森田座を建て、引續き六丁目に山村長太夫の山村座が出來た。正德四年大奥の老女江島が山村座の人氣役者生島新五郎と不義をせしことが發覺して、當事者二人は流罪に處せられ連累者で死刑、閉門、追放、改易などに處せらるゝもの三百數十名に及んだ。『江島騒動』がこれである。呉服所の後藤縫殿之助は、呉服を納める長櫃の底に生島新五郎を潜ませて、大奥へ出入させたかどでお咎めを受け、女中三百人は江島の供をして芝居見物に行つたかどで追放された。木挽町芝居の縮には、汐入り川の河岸に幟を建てつらね、森田、山村二座の外に淨瑠璃、手品、蛇使ひ、コマ廻しなどの見世物小屋も軒を連ね、見物人は朝暗いうちから船を漕ぎ寄せる樣が賑々しく描かれてある。タイム式無砂米の佐藤商會其他の民屋になつて居たあたりは、すべてその盛り場の跡であつた。

木挽町三丁目の歌舞伎座は帝劇や有樂座と同樣、舊幕時代の劇場とは何の系統もなかつた。明治二十二年四月起工、十一月二十二日開場、福地櫻痴居士が九代目團十郎に書卸せし『黄門記』と六歌仙で二十八日間大入り滿員であつた。昨年燒けて普請中に今度又燒けたのである。

汐留川は土橋までで堀が行留りになつて、汐の滿干が外濠通はなかつたから此名がある。汐留の仙臺屋敷は義士引揚の路で知れて居る。汐留橋に接する木挽町七丁目の、遞信省の廊下丈けで三里十丁もある大建築は豊前中津奥平侯の屋敷跡で、伊達伊織その他諸大名の屋敷が連つて居た。福澤諭吉が初めて出府して草鞋をぬいだのが即ち奥平邸であつた。

築地精養軒の邊は舊幕時代の釆女ケ原であつた。享保年間松平釆女正定基の屋敷であつたが、火災後馬場にして旗本、家人等の馬術を練習させた。七丁目の河岸には數十軒の船宿が、それ〲持船を控えて今でいふ待合のような水商賣をして居た。

築地西本願寺即ちお西樣は、明治三十四年に竣工したものであつた。一番最初は元和七年親鸞上人十二世の准如上人が、淺草の海邊（今の濱町二丁目邊）に一字を建て江戸海邊坊舍と稱し後ち濱町御坊と改稱した。明暦の大火で燒けてから八丁堀の海邊（即ち現在の所）に新築し、文政年間に再び燒けて再築し

た。安政の地震に本堂は潰倒して火災を免れたが、明治以後二回ほど燒けて今度又燒けた。赤穗義士の間重兵衛の墓が泉岳寺以外に今一つ本願寺に在つた。それから河東節の十寸見河東、鯉屋杉風、爲永春水、小林永濯、樋口一葉女史などの墓もあつた。

築地四丁目の浪よけ稻荷は埋立工事の時に、浪が荒んで屢々堤防を崩し人々悲觀して居ると、或夜波間に稻荷明神の神體が光りを放つて漂ひ來たから、早速それを拾ひ上げて祭つたところ不思議に風浪靜まり、工事が捗どつたといふいはれを持つて居た。

新富座もまた燒けた。あの邊は大名屋敷の土地であつたが明治元年上地の後は遊廓を設け新島原と稱へた。同四年新島原が取拂になつて根津へ移されたあとを新富町と命名した。劇界の俊士先代森田勘彌は猿若町へ見切りをつけて同年二月玆に新富座を起工し、十月竣工、河原崎權之助即ち後の九代目團十郎、左團次、仲藏、[illegible]、岩井半四郎、河原崎國太郎等の一番目『太閤記』中幕『國姓爺』二番目『斬られお富』で開場した。

佃煮と白魚とりで昔から賑いて居た佃島の石川島附近は、今度の變災で被服廠跡に亞ぐの慘狀を呈した。深川からの避難者は永代橋と相生橋とへ志したが、永代は先燒け落ちて次に木造の相生橋が燃え初めた。行手の月島も一面の火となり、後ろからも火の流れが汎濫して來た。一萬餘人の避難民は三百餘坪の中島へ鮨詰になり、夜ぢう火の粉を振り拂ひ〳〵命を護つた。警官は拔劍して木の枝を伐りなびけ、傍ら避難者の荷物を强制して海の中へ投げた。そのおかげて一萬の人が狐色に焦げたくらゐで兎も角も助かつた。

佃島の發生由來は前に述べた。石川島には舊幕時代石川八左衛門といふ旗本の屋敷があつた。土地の漁師は八左衛門殿島と丁寧に呼んだものである。島の森の容子から鎧島とも呼ばれた。幕吏長谷川平藏の創案で寬政以後、引取人なき出獄者を玆に收容して產業を與へた。石川島人足寄せ場が即ちそれである。明治三年二月二日石川島監獄署と改め二十八年巢鴨監獄の新築が成るに及んで『島千鳥』などの斬切り芝居に唄はれした石川島監獄は消滅した。

○

舊幕時代の警察官たる與力、同心は本八丁堀、岡崎町の邊に官舍を與へられて居住した。八丁堀御役人衆といつてこわ持てに持てること、明治以後の惡德記者同樣であつた。しかし舊幕『おんみつ』常廻り（じようまはり）臨時と三種に別れた警察事務に對し、本能的に敏活な、そして犬の如く鼻の利く役人も少くはなかつた。他國より入込みし御尋ね者を三日以內に搜

なければ、職掌柄の恥辱としてあつた位である。大抵は二日ぐらいで上げた。

霊岸島は初め江戸中島といふ浮洲であつたのを、霊巌和尚が埋立てゝ霊岸寺を建て寺の名が島の名となつた。併しその埋立工事が不充分で、蹈めばぶよ〳〵したのでコンニヤク島の仇名がついた。奈良茂は此のコンニヤク島に本宅及び材木置場を構へた。

新井白石を聟にしようとして刎ねつけられた豪商河村瑞軒は新堀一丁目即ち塩町へ入る南の角から霊岸島中町一圓に壮大な居宅を新築した。河岸に土蔵四棟、表門は濱町に裏門は南新川に開き、明暦火災後一般に瓦葺を禁じたにも拘はらず、彼の住居に限り瓦屋根が空にそびえて居た。今度の火事で新川邊の酒問屋は青い焔を立てゝ次々と燃え移つた。西の宮、深江、青木、魚崎等の灘七郷と半田、亀崎邊い尾張からの下りものが何十萬石焔にたつたものか返す〴〵もなんとかの至りと上戸は今にくやんで居る。

月島の住民で三號地の空地へ逃げ込んだものは助かつたが、早まつて深川の方へ出たものは却つて焼け死んだ。月島といふ煙突だらけの島は昔は無かつた。月島は東京市技師理學博士故倉田吉嗣の設計で、明治十八年から埋立工事にかゝり二十五年に形成した。月島は築島に非ず、灣内月の岬と稱する觀月の名所に因んで、當時の市參事會の決議で命名したのだとは、やかましい。

江戸名所を寫生して、長谷川雪旦と共に江戸研究の恩人たる立齋廣重は今の高島屋の横丁に住んで居たといふ説と、喜谷實母散の横丁だといふ説と二つある。いづれにもせよ、彼は出あるき癖と、借金取りを逃げるためとでその家に居る事は殆んど稀であつた。彼は年中江戸市中を旅行し、又は東海道を旅行した。髪結ひ床へ寄つたり、水菓子屋へ腰かけたりして、空とぼけては自分の繪の評判を聞くのが大すきであつた。ほめられゝば子供のように嬉しがり、くさゝれば反省した。寫生に誤りがあると云はれることが一番つらかつた。彼は東海道のどこやらの繪が事實にちがつてると云はれ、老脚を叩して態々見直しに出かけたこともあつた。その旅から歸つた翌々年安政五年のコロリで九月六日六十二歳を一期として死んだ。

本所、深川を東京の暗い水郷とすれば、築地は明るい水郷であつた。築地には遞信省、農商務省　水交社、精養軒、海軍大學、本願寺などの大建築と、ひさご屋其他の日本料理屋と、居留地跡の洋館と聖ルカ病院と、紳士富豪の邸宅があつて、堀割の趣も亦それにふさはしかつた。私は殊に新富座附近の水と建

て物と聖ルカ病院から大川尻までの街容がたまらなく好きだつた。その昔廣重が愛してさまよふた如く、私も亦あの邊の土地を家を空の色を水の趣を愛しつゝさまよつた。然るにそれが今は水だけ殘してもう何もないのである

幕末の頃佐久間象山が勝海舟の令嬢と華燭の典をあげたのはなんでも木挽町五丁目裏のいぶせき住居であつたといふ事だ。それに比べれば大隈參議が二十七歳で築地三丁目に張つた門戸は、相變らず堂々たるものであつた。その家は戸川殘花翁の生れた屋敷跡でのちに新喜樂といふ料理屋になつた。伊藤博文、井上馨、澁澤榮一、前島密、五代友厚、山口尚芳、大江卓などの急進少壯者が集つては、空想を戰はしたので、世間で築地の梁山泊と呼びなした。

今回の地震で山本內閣を擂り出した水交社は、白河樂翁公の築きし浴恩園の跡である。浴恩園は明治初年廢棄されて現在の如き芝生の洋式庭園に改まつた。地震と知るや財部海相が飛んで來て、舅の山本大將を庭へつまみ出した。山本大將はそれを自分が駕を助け出したように今でも考えて居る。

『なあにあの場合、遠慮には及ばんサ』

と財部海相をおんぶして助け出したつもりで居るのは困つたものだ。その水交社も月島からの飛火で燒拂はれた。

幸ひに濱離宮は燒け殘つた。そして無數の屍體が石垣の下へ漂着した。淺野內匠頭の上屋敷があつた鐵砲洲は、今の明石町本湊町、船松町、新港町町の範圍の總稱で播州明石の浦に似てるための名だといふが、それほどでないにしても、東京中で水光明媚なところであつた。閑靜の町のはづれに不意と三角帆が現はれたり、路ばたにゴム人形のような西洋人の子が遊んで居たりした。遠く母國を離れて來て、朝夕の生活の目標を歸鄕の二字にかゞげ居た外人の變死を、一としほ悼まずに居られない。八千人の外人が百五十五人しか殘らないとは何たる慘ましさだ。

外人居留地は慶應三年七月二十一日の條約に基づき、明治元年十一月十九日開かれた。廢刀令が發布さるゝ迄、居留外人にとつて最も恐るべきものは武士であつた。そこで外人は居留地に嚴重な關門を設け、武士に限り鑑札を携ふるに非れば入れなかつた。二十九年の條約改正で外人の內地雜居が自由になつたので、居留地は自滅したけれど、歷史的に傳はつたエキゾチックの氣分が、鐵砲洲一帶に特別の情趣を附與して居た。復興後の東京があの邊をどう變へるかゞ氣になる。

新喜樂の外に香雪軒、萬安、松本樓、花月、カフエー、ライオン、竹葉など江戸時代東京時代に榮えた料理店もすべて灰となつた。築地二丁目の市川宗家も、團十郎未亡人が年々損料同

題を惹起せし、十八番物の衣裝、小道具も皆な煙となつて、損料問題は文字通り立消えの外なくなつた。

○

九月一日正午前一人の樽拾ひが紅梅町の方から駿河臺へぬけようゝ思つて、ニコライ堂の下を通りつゝあつた。突如大地が震動してニコライの大屋根が落ちて來た。小僧は手にせる樽を以て見事に受止めたといふ武者修行みたいな話がある。それは保證できないが、屋根を失つたニコライは途方に暮れた様で胴から下が殘つて居る。

『燒け出された〳〵』

と吹聽してあるいた男が、

『何を燒かれたんだい――君は』

と聞かれて少しくたぢろいで

『まる燒けさ、時に駿河臺の燒跡を美土代町邊から眺めると實になんとも云へず面白いネ』

と話頭を轉じたといふ笑話がある。

駿河臺の高臺が、高い石垣を殘して露出せる間から、敗殘のニコライが月の光に隱見する景色は、利害と人情とを加味せぬ頭で見れば、成るほど本當に面白い。英國あたりの古城が廢頽した様は、こんなでもあろうかと想像される。ポンペイの廢墟に喩へるほどまだ枯れて居ない。その燒あとには人間の血のぬくみがまだ殘つて居る。

駿河臺は前記の如く神田山と稱する高い山であつた。濱町、霞町、八丁堀、銀座、日比谷邊三十四町の海洲は實に神田山の土で埋立てられたものである、今は海拔六十六尺、ニコライの尖端まで百八十五尺あつた。ニコライは明治十七年三月、東京の最初の西洋建築として起工され、同二十三年落成し、日曜の正午には壯嚴な鐘を鳴らして罪の子を考へさせた。

袋町、鈴木町、甲賀町邊は一と口に病院町といつて好いほど各種の權威ある病院が並んで居た。駿河から家康に隨行せし家中衆が神田山の草分けであつた。武家屋敷の外は皆な城下から移された神社佛閣だつた、室鳩巢は玆で『駿臺雜話』を書いた。

あの高臺へ昇る胸突坂、サイカチ坂、ガンギ坂、池田坂、富士見坂、などの舊稱も何時となく亡びた。明治十四年に開院せしニコライ横の井上病院は、我國西洋眼科の鼻祖であつた。

明治大學前の坂を甲賀坂といひ、南北甲賀町の名があるのは甲賀組の士が住んで居たからである。明治大學と商科大學の圖書館が燒け殘つたのはせめてもであるが、お馴染の神田の古本屋が無くなつたのは、三越よりもあきらめられない。幾度も足を運んで涎を流し、懐と相談して引返すあの苦い經驗は私ばか

りではあるまい。燒けるものならナゼ番頭のやつもつと負けなかつたかと恨めしい。私は商科大學前の珍本屋をのぞいては溜息をついて空しく引返した次第であつた。

一心太助とグルになつて松前屋五郎兵衛を助け、大いに江戸つ子の衆望を博せし大久保彦左衛門のことを、太助は失禮にも『駿河臺の親分』といつたと講釋師が證言して居る。北甲賀町佐々木東洋氏の邸宅になつて居たところが、所謂駿河臺の親分の屋敷であつたそうである。南甲賀町戸田子爵の邸は茶道で有名な小堀遠州の屋敷跡であつた。

三崎町三丁目の半分程が幕末の調練所たる講武所であつた。青草離々、夜は犬が共鳴きをしたり、人殺しや首つりがあつた。講武所の維持費は筋違御門（萬世橋）外の加賀原に諸興行を許し其地代を以て之に當てた。その界隈に發生せし藝妓を講武所藝妓と稱するは、藝妓が武を練るわけでも無ければ、講武所に巣を喰つたといふわけでもない。講武所維持費の大株主だといふ意味であつた。

小川町はもと田圃の中に一條の小川がチョロ〳〵流れて居た。田を埋めて旗本屋敷にする時從來の畦道を其まゝ存して道路とした。明治以後やゝ改正されたけれども、大體は畦道式であつた。恰度小川町一番地の數十戸が稻葉美濃守の上屋敷で、二番地から七十五番地までが幕末の步兵屯所の跡であつた。步兵隊は紺木綿の筒袖に同じ袴をつけ、眞鍮の胸差をさし、草鞋ばきで『サイコドン〳〵サイコドン〳〵サ、イコドン〳〵』といふ太鼓の音と、笛の音に合せて調練した。江戸つ子はたまげて之を茶袋と仇名した。服裝が茶袋のようだからである。

小川の清水は後ち內藤大和守の屋敷內に取りこまれた。道灌ある時はあの邊を遠望して『むさしのゝ小川の淸水たえずして岸の根草を洗ひこそすれ』とやつた。今では小川の淸水あと絕えて、洗ひたくとも岸の根草など一本も有りはしない、神田川は神田の傍を流れたゝめの名で、神田は卽ち大藏省構內の所に在りし神田明神の御供田であつた。

○

田といへば淡路町の邊に明治十三四年頃まで田のあるのを實見した老人がある。鈴木淡路守の屋敷から此の町名が生れた。雉子町の中川牛肉店も古いものだが、あれと相對して日本新聞社の煉瓦造りがあつた。小說なしの假名なしの、國粹保存の硬論硬議を特色とする風變りの新聞であつた。雉子町北の通り堀丹後守の屋敷前を俗に丹後殿前町といひ、そこに出來た風呂屋を丹前風呂と稱へた。丹前風呂には美しい湯女を抱えて、客の垢をすつたり酌をしたり猶はいろ〳〵の事をさせた。一杯で二

十人も湯女を抱えておく所もあつた。初めは風呂屋遊女として默認されて居たけれど慶安元年禁止された。

後ちに吉原の名妓となりし勝山なども丹前風呂のスターであつた。勝山は時代の好尚に投ぜる殺伐で色氣のある風裝をして、所謂丹前すがたを流行らせた。丹前すがたから六法すがたが編み出され遂に芝居の六法となつた。着物の裾に鉛を縫いこんで、あるくたびにピンと蹴出したり、月代を剃らずに立髪丹前と氣取つたりするのが丹前黨の身上であつた。果ては勝山自身刀を帶し、編笠をかぶり、六法を踏んで町中を濶歩して範を垂れた。

三代かゝつて江戸名所圖繪を完成せし齋藤月岑は丹前風呂のあつた近くに住んで居た。或日「神田川」へあがり、鰻の焼ける間懐紙を出して連りに見取圖を書いてゐると、女中が怪しんで同心を連れて來た。月岑は百方辯解して疑が霽れ、やつと鰻に有りつけた。私も方々を踏査してさまぐな目に合つたが、まだ巡査に叱られたことは無い。

「神田川」の財産は文化年間とかゝら貯えた鰻のタレだそうで、火事といふや否や主人がタレの壺を捧げて立退いたのは事實である。土用の丑の日に夏枯れする鰻屋の爲めに、平賀鳩溪が授けた計略で、丑の日は云ふまでもなく鰻屋の書入れ時であるのを、神田川が逆に休むんだからえらいッと江戸つ子は嬉しがつた。

萬世橋驛の殘骸と廣瀬中佐の銅像が無くば、九段から兩國へ本郷及び上野から品川への道が交叉する須田町附近の地理を思ひ出す事も困難である。あの邊を八ツ小路又は八辻ケ原と稱したのは八條の道路が一點に會湊したゝめである。筋違橋は八辻ケ原と神田見附とを結びつけた。八辻ケ原は見附の眞ん前の面積二千八百坪の火除地で、周圍には火除け柳が植えてあつた。明治六年見附を毀ち、その石垣の石を以て筋違橋と一口橋との間に一つの洋風石橋を作つた。眼鏡の形に船の通路をくりあけた新式の橋を、世人は萬世橋と呼ばずに直に眼鏡橋と呼んだ。筋違橋も一口橋も夫を機會に撤廢された。現在の萬世橋は最初の萬世橋よりもやゝ下流に、昌平橋は一口橋よりもやゝ下流に位置して居る。一口橋は山城國一口里（いもあらひのさと）から遷した太田姫稲荷社が淡路坂の上にありし故の名であり、昌平橋は對岸の昌平黌に因んだものである。

多くの學校と商店と下宿屋を焼拂つた火は、水道橋のガードを挾み砲兵工廠の火と相對した。神田上水の樋が富士見坂の中途から駿河臺を貫いてあそこへ顏を出したために水道橋と名づけられた。災後三日目に私は水道橋を渡ると、橋の裏から一匹の子猿が、欄干へとびついて何かほしそうにした。私は生憎携

帶せるムスビを平らげたあとで、水筒の底に僅かの水が殘つて居るばかりであつた。それから四五日して其處を通ると意外にも例の子猿がまだ其處に居て、番兵の銃劍に戯れて居た。それから又四五日して私は三度目にそこを通る時ジヤムパンを用意して行つた。併し子猿はどうなつたか姿を見せなかつた。「猿はどうなりました！」と番兵に聞いて見ようと思つが、少しく變なので私はやめた。

三崎會館を前景として、駿河臺方面の遠望は成る程「自分に繪が描けたら」と思ふほどであつた。佛英和學校の玄關前と覺しき所に、ジヤンダークの石膏が、少しも傷まずに立つて居た。

江戸名所の一なる神田多町（たてふ）の青物市場も灰になつた。慶長年間名主河津五郎太夫が初めて野菜市を開いたら、小田の雁が下りて野菜を啄むので弱つたとある。紀國屋文左衞門の蜜柑を法外な値段で引取り、文左衞門を男にしてやつたのも多町の衆の侠氣である。

○

天下祭の一なる神田明神の高臺は、本郷妻戀坂の高臺と相對して、露骨な姿を見合つて居る。天下祭は山王が六月十五日、神田明神が九月十五日で隔年輪番に執り行つた。山王の山車が六十、神田明神のは三十六、木遣音頭と馬鹿ばやし、藝妓の手古舞姿、横町の師匠の踊屋臺、女房も娘も叩き賣つて祭りの費用を算段し、一つの山車人形に千兩二千兩を投じ、連日仕事を休んで浮かれたのは些と感心しないけれど、それは確かに江戸を美化するあざやかな色彩であつた。

商科大學は維新頃迄護持院原と呼ばれた。五代將軍綱吉の生母桂昌院が龍僧隆光和尚の爲に護持院といふ御懐胎祈願所を建てた跡である。享保年間護持院は小石川護國寺へ移しその跡を空地にして吉宗將軍折々小鷹狩を催ふした。護持院の仇討といふのもあの邊の出來事であつた。今度は商科大學の塀をたよりに、トタン屋根をかけ出して、罹災者が一つの町を作つてゐる。そのトタン屋根の下の土へ煙草齒磨などを並べて賣つて居るのが、雨の降る日など正視するに忍びないほど慘めであつた。

四年前の或る晩、私はお玉ケ池の跡を探し廻つて、松枝町二十二番地の路次の奥に兎も角も盆大の水たまりを突きとめたことがあつた。二三軒先きの高津氏邸内に梁川星巖の玉池吟社の跡があることから判斷して、附近一帶の人家がすべてお玉ケ他の跡であることを推定し得た。お玉ケ池は事によつたら不忍池よりも大きかつたからである。大窪天民も玆に江湖吟社といふ詩社を開いたことがある。宮本武藏も池畔に道場を開いたことがある。據の甚内はその道場へ入門して惡所通ひを初めたので

ある。其他劍客や詩人文士などで寄留地の判然しないのは神田お玉ケ池に押つけ、不良旗本は大抵本所割り下水へもつて行くのが講釋師の常套手段であつた。盆池の傍にある蜜柑箱ほどのお玉稲荷へ賽錢を上げて、頭を一つ下げて私は退出した。

八幡太郎義家が阿部の貞任、宗任を征伐した頃と云ふから約一千年前である。その頃奥州街道の幹線は澁谷、戸塚、瀧野川西ケ原、箕輪と大廻りしたものだが、其の外に幾筋かの捷徑が草の中に出沒した。松枝町、和泉町を經て淺草へ通ふ道が池の畔について居て、その道ばたに腰掛茶屋があつた。お玉は朝夕そこで茶を汲んで旅人にお世辭をいつて居ると、二人の男から同時に云ひ寄られ、返答に困り池に身をなげて死んだ。里人これを哀れみ死骸を埋めて標の柳を植え、お玉稲荷といふ祠を建てた。それからその池をお玉ケ池と呼ばれるようになつた。

星巖は英軍がホンコンを攻めた事を風の便りに聞くや、必ずや日本に來り江戸灣を塞ぐであろう。江戸住民の食糧一ケ月七十萬石を要するに、食料欠乏せば自分の如き老人は第一に餓死を免がれまいと。そこで玉池吟社を閉ぢ愛妻を連れて京都へ避難した。これほど用心ふかければ先づ大丈夫である。

お茶の水は神田上水の引けなかつた以前、將軍御用のお茶の水を酌取つたところで、今から二十年前まではまだ〳〵幽邃な所だつた。今は迚もあの水は飲めない。昌平黌の漢學者連、若溪に船を浮べて小赤壁でござると喜びながら、時鳥を聞き月を賞した。時鳥は高等師範ができてのちも毎年鳴いた。

萬世橋から和泉橋に至る左側に、最初の街路樹としての柳並樹が植えられたのは享保年間であつた。毎年春から夏へかけて柳森神社を包むように繁つた二三株の老柳はその名殘であつた。銀座の柳も伐られたが、あの柳は殘して置き度いと私はいつも念じた。南側の古着店も江戸時代から續いたものであつた。寺門靜軒もその世話になつた形跡がある。柳原の別名を雁が淵といふのは、多町と同じく雁が下りたからである。明治六年柳を伐つて例の煉瓦長屋を建てたが、丁度第二號長屋となつた邊に清水山といふ草山があつた。堤上の草は武家屋敷で刈つて秣としたけれども、清水山だけは祟があるといつて草さへ刈らなかつた。明治政府は祟も糞もあるものかと清水山を根こそぎ剷り去つて煉瓦長屋にした。

神田橋も一つ橋も燒け落ちた。私は二町ほど續く一列の群衆にまぢり、神田橋と並行した水上を渡せる水道管を踏みつゝ大手前から神田へ入つた。あそこは大炊橋御門と稱する三十六見附の一で、橋の名も大炊殿橋と稱したのを、明治になつて神田橋と改名した。橋の外の美土代町は御田代即ち神田と同意であ

る。私はあれから濠に添ふて一つ橋の方へ出た。濠の中には滿ち潮の爲めに澤山の屍骸が徐々と遡るのが見られた。半燒けの龍紋氷室は開放されて、通りすがりの者は鋸屑の底から勝手に氷塊を持去るのであつた。中には荷車へつけて持去るものもあつた。大川の大鐵橋すら捻ぢ曲げる强い火力の中で、氷が溶け殘つたことが私には一の驚異であつた。

私は私の關係せる事業が受けた三萬五千圓ほどの損害を平生の樣な標準で考へることは非常に困難であつた。無數の屍骸を見、果て知らず連續する燒跡を蹈んで來た私の頭には、自分等の打擊はごくかすかにしか意識されなかつた。私は自分等の小さな營みの跡を弔はうともしなかつた。そしてやはりその附近に、あの三日ほど前に夏服以外の洋服や外套を、クリーニングに出した家も燒けたことを考へて、おかしいような心持がした。此場合そんことを想ひ出すことの呑氣さと、それ位の事ですんで命が助かつたのを無意識に喜ぶ心持との混合であつた。

神保町の夜店町(よみせまち)――東京堂や富山房のある東京中で最も夜の明るい、最も書生のぞろ〳〵する、最も本屋の多い町は、最近に徹底的の道路工事を終へて、最も道路の良き町となつて居た。併しその夜店町も神保町の通りも猿樂町も一面に平板な焦土となつて居た。電車線路の上には、幾臺もの電車の骨格だけが赤く錆びて立往生を遂げ、その或ものは鐵板でサンマを燒いたように車臺の鐵材に人間の黑焦げ屍體を乘せて居た。

お茶の水橋には人間の落ち込むような燒穴が、數ヶ所に空いて居た。お茶の水と水道橋の中間の省線へ駿河臺の崖が崩落して小山を築いて居た。お茶水に初めて橋の出來たのは明治二十四年十月五日であつた。東京の初期の鐵橋に能く署名してあつた理學士原龍太氏の設計であつた。あの崖は架橋の際駿河臺寄りが水面六十二尺、湯島寄りが五十三尺、卽ち九尺の差があつたから、駿河臺の方を削り、湯島の方へ土持ちをして平均させた、その結果あの橋の橋面は駿河臺よりは餘程低く、湯島よりは餘程高く思はれる。事實またそうである。

お茶の水を一名仙臺堀といふのは、伊達政宗があの開鑿工事を擔當したからであるが、湯島と駿河臺と連續してゐたとの臆測は思ふに虛誕である。二代將軍と政宗とは碁の好敵手であつた。或時の戰に政宗が一子を下す毎に

『本鄕から參ろう』

とつぶやいた。戰終るのち秀忠將軍は例のおだやかな調子で

『本鄕はそれほど危きか』

と問はれたから政宗は初めてあの高臺を折半すべきを進言し自から其の工事を管掌したといふのである。併し地質其他の點

から考えて、お茶の水の谷は昔から双方の高臺の間に在つたものに違ひないから、政宗は只だそれを掘りひろげたのである。藤堂和泉守の屋敷跡で後ちの種痘所や醫科大學の前身たる醫學校があつた和泉町と、その隣町の佐久間町と平河町と約三町四方だけが燒け殘つて神田は全滅した。

○

本郷は三丁目の交叉點から南が燒けて、昔田金扱ひを受けし『かねやす』以北は大學以外無事であつた。

大學圖書館の五十四萬冊を灰にしたのは償ひ難き損失である。大學構内は加賀屋敷で一高の水戸侯下屋敷と接して居た。九段下の蕃書調所、開成所、大學南校を經て東京帝國大學となり明治九年法律學科二十五人、醫學科三十一人の新學士を初めて出して以來、今日まで學士を作ること二萬を越えた。加賀侯時代には邸内に大きな窖を堀つて雪を貯え、眞夏にそれを開いて將軍家へ獻上した。加賀様のお雪獻上といつて、窖の開かれた日はお餘りの雪を近所の者にも頒ち與へた。

堀部安兵衛が『かねやすゆうげん』と店看板を書き與へた本郷のかねやすは殘り、春日局の墓のある麟祥院もその前の猿飴も際どいところで助かつたが、猿飴のうしろの新花町から三組町、お茶水へかけてすべて燒けた。新花町の靈雲寺は貴重な寺寶が東京第一と云はれた寺で、元祿四年綱吉將軍に地所を給せられし以後、原形のまゝ原地に傳はりし古刹であつた。湯島天神と魚十は辛うじて殘つたが、直ぐ其の前から妻戀坂方面へかけて昔の蔭間茶屋、今の天神藝妓の巢窟を燒き拂つた。

魚十は蔭間茶屋の加賀屋の跡で、門前の老柳は抱えの子供の松次が、細井戸で買つて來た繭玉の柳を挿したのが着いたのだといふ。魚十の向にあつた菓子屋の藤村も、蔭間茶屋の藤村の跡で、業體が只變つた丈けであつた。天神の藝妓屋で何藤村といふ名が幅を利かすのは、此の歷史に因るものであつた。その外津の國屋、三谷屋、津賀屋、横藤、千代本などの蔭間茶屋があつて、總體で三四十人の子供を抱えて居た。子供等はみな大阪から仕入れたもので、その物軟かいところが京都風を尊ぶ寛永寺の坊主共の氣に入つた。湯島で年を拾つた蔭間は、芳町、芝八丁堀などへ鞍替した。湯島以外では江戸つ子をまねる方が賣れた。併しそれ等の蔭間も天保改革を名殘として亡びた。

妻戀稻荷は關東諸國に『吾妻』の總稱を殘されし日本武尊と弟橘姫を祀つたものであるが、何時しか稻荷が主神となり、尊夫妻の神靈は第二殿と第三殿とへ遷された。弟橘姫が尊の東夷征伐に從ひ、風浪を靜むるため東京灣沖で投身せられたので、尊は暫しいとう松坂屋邊の礒曲に船がゝりして姫の冥福を祈ら

れた。東征の歸路碓氷峠から『吾妻はや』と痛はしき一句を投げられしことなど心なき鄙人を動かして、茲に尊夫妻の靈を祀り、その高察を妻戀森と呼んだ。尊と將門は永久に東京の守護神であらねばならぬ。

振袖火事を起せし本妙寺の舊地や、八百屋お七の家の跡と稱せらるゝ一高前も、今度の火事とは沒交渉であつた。お茶の水の聖堂は店子の教育博物館と共に燒けた。寛永七年官儒林羅山が忍が岡に學舍を建てし際、德川義直が孔子廟を建て、これに藤堂高虎が朝鮮征伐の折持歸りし孔子像を安置した。元祿四年綱吉將軍は右の孔子廟をお茶の水に移して聖堂と稱し、今の女子高等師範の所へ官學の總本山たる昌平黌を建て、旗本子弟を教育した。聖堂の碧い屋根瓦が木立の間から見えて、漢學そのもののゝような威嚴と古色を現はして居たが、今はそれも見られなくなつた。

明治六年順天堂病院は下谷から舊櫻の馬場の跡へ移轉した。我國最初の私立病院たると、院長佐藤尚中博士の外科手術の巧妙なるとで、順天堂の名聲は僻遠の地まで傳播した。養子佐藤進男爵は出藍の譽高く、軍醫として大學教授として、伏見宮大妃殿下、大隈侯、李鴻章の手術執刀者として、益々順天堂を重からしめた。順天堂が今度周到に立退いて、多數患者を一人も損じなかつたのは、中原病院、吾妻病院のそれと共に稱揚に値する。

櫻の馬場は、由井正雪の陰謀を訴人せし弓師等四人の者へ賜はりし土地で、弓町といつたが後ち弓町を現在の土地へ移し、舊弓町を馬場とし萬延年間茲で鐵砲を鑄造した。正雪の參謀長の丸橋忠彌は弓町二丁目の二階屋に住んでゐた。忠彌が煙管で城の石垣を測量して松平伊豆守に見つかつたのは、芝居の作り事であらうが、忠彌方へ向つた捕手が、忠彌の無腰を押へる爲めに『火事だ〳〵』と連呼して、忠彌を二階の火の見へ追ひ上げたのは上川來であつた。忠彌は盛んにあばれて昌平橋の邊で捕はれた。舊宅の在りし邊には尼港で慘殺されし石田領事の孤兒が住んで居た。今度の變災だけはその孤兒に無情でなかつた。

○

金助町も春木町も居住者の姓名から出た名である。金助町から新花町へ通ふ路地を紙谷といふのは、舊幕時代紙職人が軒を連ねた爲めであつた。高田實の記臆を呼び起す本郷座は、明治六年の創立で初めは奧田座、次に春木座と呼ばれた。看護婦と女學生と大學生が、ハンカチを二三枚用意して泣きに行くところであつた。

ごく古い地圖に從へば江戸固有の陵楷は、上野、湯島、駿河

臺、霞ケ關などで、永祿年間湯島天神の直下は海岸であつた。湯島天神は里人の信仰から祀りし小堂であつたのを、其の後太田道灌が修築し、德川氏代々も尊崇して明治に及んだ。あれから新花町方面を大根畑とかお花畑とか稱するは、大根畑があり花畑であつた事を語ること勿論であるが、寶曆七年新花町と命名されて、小格子女郎がぞめき連を引込むほど開けてからもやはり大根畑の名はすたらなかつた。今度の火事は本郷の歷史的及び現在の色町を燒き拂つたようなものである。三丁目の辻は辛うじて舊態を存した。『本郷もかねやすまでは江戸のうち』そのかねやすから以內の舊江戸のうちは助かつた。

私が子供の頃なんでも三丁目邊の勸工場から火が出て、先に飛び出した賣子が鐵扉をしめたゝめ、二十何人とかの賣り子が煙死したといふ話があつた。多分その勸工場は勸業軒のところに在つたと思ふ。子供心にその話が、比ぶものなき此世の慘事と思はれて、何年も〳〵頭から離れなかつた。勸業軒は無事であつたが今度の印象は何年經つても薄ぼけることはあるまい。

小石區は砲兵工廠の大半が燒けて、水戸侯時代の瓦塀の崩れた中から、廠內建物の殘骸と、赤く焦げた後樂園の森が見えて居る。舊水戸邸七萬六千六百八十九坪が、明治二年二月以來陸軍省の管掌に移りて、兵器彈藥を作る砲兵工廠及び砲兵工科學校が設けられた。

あそこはもと蒲生忠鄉の屋敷であつたが、忠鄉卒去の後二代將軍秀忠公は寛永六年二月、水戸藩の始祖たる德川賴房卿に賜ひ、賴房卿は天然の巨樹と水を利用して後樂園なる一大庭園を築造した。安政の地震に藤田東湖が母親を救ひて壓死せし邸內の長屋は、壹岐坂方面の塀に近く寄つて居た。今度はその方面の瓦塀も崩潰して、玆ぞと覺しき邊があらはに覗はれる。

砲兵工廠の東南角と電車路を隔てゝ相對せし松平邸は、宏大なる大名門もろとも燒け失せて、そのあとに日本赤十字社臨時授乳院といふ大標木が立ち、構內には八棟ほどのバラツク小屋が逸早く設けられた。私はあの標木の文字を見る度に、神經を軟らかく撫でられるような氣がする。況して我子に乳を貰ふ人は、あの設備を何の設備よりも賴母しく思ふだらう。

砲兵工廠の外に小石川區では飯田町までの江戸川べりを諏訪町全部と新諏訪町及び江戸川町の半分が燒けた。新諏訪町には幕末の外交家川路左衛門尉聖謨が住んで居た。江戸川町は江戸川に沿へる地震帶上に在る町で、東京の地盤の弱線だそうであるが今度の地震はかなり物凄かつた。

江戸川の趣も幾變遷し、近年護岸工事ができて昔よりも綺麗になつた。いふまでもなく江戸川は源を井之頭辨天の池に發

し、目白滾の下の關口に至り、一派は別れて元の神田上水となり、一派は大曲から南流し東流して神田川となるものである。江戸川町から奥は小石川區も牛込區も安泰であつたのに、音羽九丁目からの出火が櫻木町へ延燒した、音羽一丁目乃至九丁目は江戸時代、城の方角を主位に置いて丁順番を附けた習慣に反し、護國寺の方から城の方へ向いて一丁目二丁目と附けたのは珍しい。護國寺は綱吉將軍の嗣子祈禱として護持院と同時に創建され、音羽街道は上野寛永寺、芝增上寺への御成街道と共に舊時代の模範道路であつた。徳川氏があの邊の地所を奥女中音羽に與へし爲め町名となつた。

今度燒けた九丁目の邊は音羽女郎と稱する岡場所(私娼)の巣であつた。石見屋おしげといふ音羽女郎が七丁目蓮光寺の縁日に参詣した時、相撲あがりの音羽山峰右衛門が、指の先でいたづらをしたので、おしげは素知らぬ顔で峰右衛門の猿臂を自分の膝の下に敷き、萬条陀羅尼の終るまで押えつけて動かさなかつたといふ大力ばなしがある。

○

麴町區は三菱村の大部分と永田町、霞ケ關と紀尾井、下六番町と三番町、四番町、靖國神社と東郷大將邸とを殘し、皇城の周圍をまばらに燒拂つた。大手町は江戸時代大手門があつて、諸侯の登城、下城せしところ、今日の坂下門に匹敵する出入口で下馬札がいかめしく建つて居た。四代將軍の頃土井大炊の屋敷を酒井雅樂頭に賜はつた。酒井の權勢將軍を凌がんとする爲め下馬札の將軍といふ意味で、世人は彼を下馬將軍と呼んだ。今度燒けた大藏省及び内務省がその邸趾であつた。伊達騷動の大詰なる原田甲斐と伊達安藝の對決は、内務省寄りの官宅大廣間に於て開かれ、甲斐が亂刄下に殪れし名殘りの刀痕が久しく鴨居に消えなかつた。大藏省寄りに御守殿即ち將軍から降嫁せし夫人の館が建ち、將門首塚はその御守殿庭の一隅に在つた。

將門が逆臣でないことは今日定論がある。彼は官僚主義の六孫王經基に陷擠されて私鬪の犧牲となつたので、秀郷の箭に中り首は京都に、胴は下總國猿島郡に遺された。郎黨が胴體をかついで來て武州芝崎村日輪寺境内に葬り、程經て京都から首を取寄せて併せ葬つた。夫が現に大藏省の燒跡に突忽とそびゆる古い〳〵將門塚である。將門塚と神田明神の關係は既に述べし如くである。

道三町は舊名道三河岸と稱し、和田倉門の東に在りし龍の口から流れ出て呉服橋まで至る餘水の河岸に、沿へる屋敷あとであつた。幕府の典醫今大路道三は茲に屋敷を賜はつて居た。或る日登城の遲刻せるをとがめられ、お濠を廻つて參りましたの

で……とと苦しい辨疏をした。將軍は笑ひながら

『然らば橋をかけて通はす故、向後遲參しては相成らぬぞ』

とたしなめた。その道三橋も先年撤去せられ、道三屋敷の跡には今度燒失せし瓦斯電氣會社と內務省の官舍と建つて居た。

道三町と吳服橋の間、即ち梁瀨自動車や高田商會の殘骸が、西洋の化け物屋敷の如く立つて居るあたりに、錢瓶橋といふのがあつた。道三橋と吳服橋の中間の橋であつた。その橋を架する時に地中から永樂錢を滿たせし瓶が堀出されたから、橋名となり町名となつた。永樂町の名も永樂橋の名と同じ因由である。

明治何年頃であつたか、永樂町附近の基礎工事の際に、深い土中から化石したような丸太が澤山現はれた。丸太は松材であつた。今から四百七十年前に江戶城が落成して太田道灌が『我庵は松原續き海近く富士の高嶺を軒端にぞ見る』と詠んだ通り大手前から日比谷へかけて磯松が繁茂し入江の浪が松の根を洗つて居た。その汐入り地を固める爲めに、松林を伐り倒して埋め立てたのである。霞ケ關から參謀本部の高臺は海中へ出入せる岬で、その下の入江には海苔とる舟がヒヾ竹を植えて、今の日比谷公園邊りから淺草海苔がとれた。ヒヾに谷の字がついたわけは岬の或尖端が今の山下町邊まで延びて居て、岬　岬の間へ海水が深く彎入する樣は丁度峽谷の如き觀を呈したからであつた。

道三屋敷などができたのはずつと其後の事である。鐵道省と東京驛構內とは吉良上野の屋敷であつた、海軍省、司法省、日比谷公園へかけては上杉、鍋島、毛利、板倉の諸侯の屋敷があつた。伊達政宗は今度燒けた松本樓から音樂堂方面の汐入り地を貰つて、內心大に不平であつた。參謀本部の高臺は井伊掃部頭の屋敷跡で、井伊が名譽の赤備へを表象する赤門が口を開いて居た。萬延元年三月三日、井伊掃部頭は、その門から出て櫻田御門へさしかゝつた處を、水戶の浪士に刺された。

殘骸の爆破に連日工兵隊の手を燒かせた警視廳も、屋上の翁の像から火を呼んで全燒せし帝國劇場も、會計檢查院も、特許局も、專賣局も、印刷局も、有樂町驛もすべて大名小路と稱する區域の屋敷跡であつた。

有樂座は南奉行所の跡、鐵道省は吉良屋敷取除け後に北町奉行所が置かれし跡であつた。日本橋、京橋から逃ればせに吳服橋へさしかゝつた避難者は、前方鐵道省と高田商會の火に遮られ進退谷まり一家相擁して橋上に絕息した。川へ飛び込んで溺れた者も多かつた。私は恰度茲で宮內省の配給車に出逢ひ、鐵道省燒跡の避難者へドーナッツを頒ける仕事を手傳つた。

『あーずるい〳〵』

と係りの役人が自動車の上から叫ぶと、餓えと不足とに瘦せ

こけた子供等が元氣な聲を揃えて『わーツ』と笑つた。私の暗い心は其の音樂で蘇つた。

○

九段下を電車道に添ふて飯田橋まで延びた火の爲めに、左右の飯田町は大略灰になつた。

古い記錄に家康が開府當時、田安邊を逍遙して、あの邊の里民を招き、土地の狀況を尋ねしに、飯田喜兵衛なる者進み出で、巨細に申上げたので、喜兵衛に名主役を仰せられたとある。巨細にと云つても其頃十七八軒の農家が田中に散在したに過ぎなかつた。飯田町は勿論喜兵衛の名から出たものである。俎橋の因由はわからないが、牛ケ淵は山王祭の折田安門を入ろうとした一臺の山車が、牛ぐるみ陷落した因由がある。

牛ケ淵の佛蘭西公使館は大隈侯の新築に係り、侯の外相時代に先帝陛下が幸臨されし事がある。早稻田へ移る迄侯は玆に住んだ。半藏門に近く千鳥ケ淵に臨める五番町の英國大使館は、南部丹波守、永井信濃守などの大名屋敷を併せたもので、堀に添える小公園の櫻はサトウ公使が東京市へ寄贈して、東京市の春を飾らせし好意の紀念である。

靖國社頭品川彌二郎の首におちたけれど、幕末の一名工の手に成りし自然石の燈明臺はビクともしない。九段坂は東京第一等の高臺で海拔五百六十尺ある。番町皿屋敷の跡なる某醫學博士邸も、上六番町二番地なる塙保己一の塾の跡に建ちし青木五兵衛氏の洋館も燒けた。

山王下に迫つた火は山王森を半ば燒いて引き返した。山王權現は太田道灌が川越の無量寺から遷し、城内紅葉山に祀り、江戸城のうぶすな神とあがめた。其の後山王社は平河天神と一緒に貝塚へ移され、再び溜池の築山へ移され、平河天神は今の所へ移されて平河町なる町名を産んだ。溜池の築山は卽ち現今の星ケ岡公園の謂である。半藏門には物頭役服部半藏正成の配下が住んで居た。八重洲町には家康がオランダ人ヤヨウスに與へし屋敷と南蠻寺（敎會堂）が在つた。

曲亭馬琴の住居跡は馬琴の死後火事の爲めに樣子が變つて居たけれども、私は中坂下を軒別にさがして遂に馬琴の孫に當る人に逢つたことがあつた。油繪を描く人であつたが、今度燒け出されてどうなつたろう。

芝區は愛宕山をとりまいて燒いた火が溜池まで延び、一方は濱松町から金杉橋を越え、猶ほ獨立して高輪御所の藥品から發火した。

愛宕山は海拔百尺四千八百坪ばかりの丘陵で、東京市展望の最も廣い高臺である。社は慶長元和の頃創立せられ近く慶應三

年明治十年に炎上して今度又燒け落ちた。塔も神社も失せた林のみが淋しげに殘つて居るのが遠くから見える。正面の石段は曲垣平九郎が馬で降りたので名高く、その急峻なること外に例が無い。私は曲垣の話は嘘でないかと思つて居たが、曲垣の後に市森彦三郎なる大坪流の達人が馬で上下し、明治十五年かには宮城縣の曲馬師石川淸馬が矢張り馬で上下した。石川は彌心流の名人であつた。あの高臺に初日の出や二十六夜待に人の集まる事は、舊幕以前と變らない。廿六夜待の人出は九段も盛んだが、海の初日の出を拜むには愛宕を以て第一とした。

明治五年九月十二日新橋、横濱間の鐵道が初めて落成し、先帝陛下がその開通式に臨幸あらせられしは、今日の貨物發着所なる汐留驛、即ち蝕んだような石造の建物であつた。その舊新橋驛も高架線の新新橋驛も共に燒けた。烏森藝妓の巣なる烏森の地名は、烏森神社に因んだもので、烏森神社の名は俵藤太秀鄕が下野武藏の守に任じて櫻田に至り、烏が群れ飛ぶ森を發見して、玆に一字の稻荷を建立したゝめである。して見れば將門の氏子の神田つ子と、烏森の氏子の烏森藝者とは、どうやら先祖の許さぬ仲である。柴井町は寛永以前の芝居町であつた。露月町のことを江戸つ子の車掌はローゲツ町と呼ぶ。ずいぶん昔から老月、露月の双方に云ひならはされて來た。今の市制では露月町となつて居る。町名は風流めいて居るが、純然たる商賈町であつて、柳原と同樣な商賈が軒なみ續いて居た。

寛永十三年初めて錢座が設けられた頃、錢座の前は葭芦しげる汐入りの洲であつた。恰度今の宇田川町の北畔に當つた。それを擴張したものが新錢座である。幕末の際江川太郎左衛門が新錢座に洋風調練所を設けしあとが、後ちに近藤眞琴翁の攻玉社となつた。江川の調練所は韮山笠にケーベル銃、所謂茶袋を穿いて今までの一騎打とは全然異なる密集運動を敎へた。佐久間象山、桂小五郎（木戸孝允）大山巖、大鳥圭介、橋本左内等各藩の選拔生が入所して稽古した。攻玉社からは廣瀨中佐其他の海將を出したが、歐洲大戰當時寶石を作る工場と間違へられたので、高架線から見える所へ『攻玉社は中學校』と大きく標榜したのは悲哀を感せしめた。

○

宇田川町は上杉朝興の臣宇田川喜兵衛によつて開かれた。川の名も町の名もそれに因んだことは勿論である。

小田原侯の屋敷だつた濱松町の電車工作所が燒けた跡に、數百臺の電車が枕を並べて骨となつて居た。市内電車千五百八十臺の內、今度八百三十臺燒け失せた。濱松町工作所と車庫は實

に『電車の被服廠跡』と謂つても好い。新網町貧民窟も芝離宮の外廓も高架線を挾んで燒け、紀州侯時代から傳はりし離宮のお庭が、電車の窓から見とほしになつた。濱松町は元祿九年遠江國濱松町出身の權兵衛なる者が名主をつとめて居た。

金杉橋の北岸なる土手跡町も今度燒跡町となつた。寬文七年あの邊に撿問所を作る計畫で、堤防までできたのに沙汰已みとなつた。芝浦製作所は會津侯の邸趾であつたが、その燒跡は濱松町の車庫以上に悲慘である。

芝神明で聞えてゐる芝大神宮は、一條天皇の寬弘二年九月勅命に依りて創立せられ、飯倉神明宮と名づけられた。代々の武人も尊崇措かず、明治五年府社に定まつた。毎年九月十一日から二十日までの祭禮には、戸々に甘酒を醸し諸興行、諸賣店賑はしく、殊に生姜を賣るのが特色であつた。

有名なるめ組の喧嘩は文化二年三月、神明社頭に於て演ぜられた。め組三百八十一人と、雷電爲右衛門、四ツ車大八、水引勢五郎、花筏等六十三人の力士とは互に惡口を振り、丸太を廻し、屋根瓦を飛ばし、入亂れて血戰した。め組の四天王鮨屋の彌助の妻は火の見櫓に上つて警鐘を亂打した。鳶では富士松以下數名が死に、力士では錦木、勢力など頭に鳶口を打込まれて即死した。喧嘩を起せし四ツ車大八はその時打たれた傷がもとで郷里秋田へ引退してから白痴になつて夭折した。

神明藝者は、神明茶屋の茶酌女の流を引いて安直に榮えた。寬政年間菊本のおはんといふ茶酌女は、谷中の笠森お仙にも劣るまいと云はれた。第二流の蔭間茶屋も社頭にあつた。明治以後矢場が出來た。十二階下のが亡びたのちもあそこ丈けは許されて居た。但し矢取り女は梅干し婆に限られた。

寬永の末に『花の露』といふ油ぐすりが神明前せむし喜左衛門の店から發賣された。大名などの頭に塗る伽羅油さへまだ賣出されない前であつた。『花の露は』は南部のふき出ものを除く功能があつた。之が我國に於ける美顏水の先驅であつた。

田村町の『化け銀杏』が燒け跡に燒殘つて以前よりは又淒慘の度を增した。さらでだに幹の高い、梢にのみ葉のしげる、馬鹿高いポプラのような姿であつたのに、附近の人家がなくなつて、根元まで見えるようになつたから、その特色が一層鮮明となつた。今は普通民家の中へとりこまれたが、あの銀杏は開府以前から旅人や漁師の目標であつた。元祿頃田村右京太夫の庭園に屬し、淺野内匠頭が田村邸で切腹を賜ひし時、怨めしげに此の銀杏を仰ぎ見しより、淺野侯の怨みを宿するものと見なされ、『化け銀杏』とか『内匠頭の涙銀杏』とか呼んで氣味わるがられた。

田村侯は庭に疊を敷いて内匠頭を刑死させしかどで、昔も今も義士ビイキの怨を受けて居るとは云へ、銀杏の樹がとばつちりを受ける法は無いと信じて、決して『お化け銀杏』を伐ろうとしなかつた。その爲め品川沖の出船入り船がどれほど助かつたかわからない。

櫻田本郷町は、櫻田門の邊に在りし櫻田村七ケ村を虎の門の所へ移され、寛政六年そこで燒けて現在の所に轉じたものであつた。『廣大な櫻田郷のうちの俺達は本郷だぞ』といふわけで外櫻田本郷と稱するに至つた。『伏見町、和泉町、鍛冶町、久保町備前町、太左衛門町、善右衛門町とこれだけが即ち外櫻田本郷町であつた。兼房町も右の七ケ村と共に虎の門を燒出されて移つて來た。新櫻田町は今度燒け殘つた。あれは舊幕時代厩のあつた跡に明治五年現稱を附したのである。虎の門の角は斜めに燒け殘り、金刀比羅神社は助かつた。そして琴平町から櫻川町加藤子爵邸へ出づる藪小路の跡が燒け失せた。

藪小路の由來は數說ある。將軍家の愛鷹が細川丹後守屋敷内の藪に逃げ込んで落命したので、細川侯上を憚かりその藪を伐らずに置いた。それが加藤侯の屋敷となり、藪加藤の名を生じたとも謂ひ、又は藪金神の祠にちなんで藪小路と云ふともある既に藪あり、そしてその側に小路があつたことは、昔の浮世繪にも寫生してあるのだから、鷹の生死と金神堂の有無は深く問ふを要しない。只だあの邊に藪が茂つて居たことがわかれば充分である。

○

神谷町停留町の裏から靈南坂へ登る地形は一と癖あるも道理熊谷直實、太田道灌などの武人が早く着眼して砦を築いた跡であつた。城山町、葺手町邊はその名殘である。葺手町からは城を造る時の砂を堀つたといふが、葺手町の砂利といつて其の後も、度々江戸城の修築に用ゐられたことが諸書に見ゆる。西ノ久保神谷町の熊谷橋は熊谷直實の熊谷で、久保は窪地の意味であつた。あれから隣接町なる麻布區我善坊町へ谷が續いて、熊谷直實の砦を保證した。

西久保町に明治三十年頃鳥安といふ奇人が居た。彼は十一歳の時或る骨董屋に奉公して、大小二つの茶碗が密着して離れないのを、頓智で取りはなして主人を驚かし、この爲め忌憚されて追出された。そこで安公は正直と眞面目が賦になり、道樂と放埓の有らん限りを盡した。或る年貧苦のどん底に七夕竹を賣つて僅かの金を儲け、それを資本にして鳥屋を初め、のちには大阪の屠獸者で百萬長者なる渡邊某に信認されて、とん〳〵拍子に産を作つた。

奇人鳥安の奇行は、鳥を捕る事飼ふ事から世上萬事に亘りて一言一行世人を驚かした。

愛宕町の青松寺は、古色蒼然たる禪林であつたが之又惜しいことをした。文明年間青松某が俊徳大和尚に歸依して貝塚へ建立したゝめに、今なほ萬年山貝塚青松寺と呼んだ。墓地は近年盛んに整理して、無縁墓を毀棄しつゝあつたが、鎗持勘助の墓や廣澤參議の墓が名高かつた。廣澤の墓は其の後三軒茶屋の吉田神社境内へ移された。松平越後侯の鎗持に勘助と稱する者、主君の鎗がべらぼうに長大なるを忌み、自分は振れても後ちの鎗持は到底振る能はじと、無斷で三尺ばかり切りすて自分はおわびに切腹して果てた。

御成門から神谷町へ通ずる電車道、即ち廣町停車場までの坂を切通しといふのは、寛永の頃開鑿して人道とした爲めである舊幕の頃有馬邸は赤羽に在つて、邸内水天宮の縁日には、切通し坂の邊に露店や見世物が並び、今の淺草式のところであつた坂の中途に芝中學と相對せし青龍寺も今度燒けたが、昔は青龍寺横の空地に鐘樓があつて時鐘を撞いた。切通しの鐘がそれである。そしてその時の鐘樓の邊は勿論、切通しを越えて青松寺の塀に接する表までが増上寺の境内であつた。

増上寺の山門は六代目菊五郎の働きで(と當人は思つて居る)炎上を免がれた。増上寺も青松寺と共に貝塚に在つた。御成門方面に鐵道病院を燒きし猛火は、寺中の一部を燒き、公園内の古松を焦がして已んだ。金杉橋へ延び芝橋のガードをくゞつた紅蛇は、芝浦埋立地を舐め廻つた。

往昔あの邊は金洲崎とよび、一轉して金曾木の字を當て、再轉して金杉となつた。

金杉の漁民は毎月四回徳川將軍家へ鮮魚を獻じたのみならず御濱御殿(濱離宮の前身)へ御成の節は番船を出して、御用を勤めたから、網干場とすべき地所と、或範圍内の漁權とを賜つた。新網町の名は網干場へ發生せし町家なることを現はす。明治以後の三井村として聞えた新濱町も川内町も全部灰となり、金杉町と濱町の半部が殘つた。

獨立して燒けた高輪御所は、細川侯の中屋敷で、大石良雄、吉田忠左衛門、赤埴源蔵等十七人が邸内で切腹した。當時の首洗ひ井戸が御所のお庭に現存して居るとの事であつた。御所に近き伊皿子坂の一部も燒けた。伊皿子坂には唐人インベイスの官宅があつた。インベイス坂では工合がわるいから、伊皿子と和譯した。意味を成さぬけれど、字面と發音が面白く、それに海を見晴らして景色のよい高臺であつた。

○

巴町だつたかの交番の燒跡の中に、一人のきちがひばばあが顏も着物も焦げたまゝ立つてゐるのを私は見出した。婆あは元來の狂人であるかどうか私には判じ兼ねたが、氣のせいか、眼前の焦土に眼を落しては何事かつぶやいてるのが、今度の災難で發狂したもののように思はれた。もう日の暮れ方で早々と舊八月十五夜の滿月が、西洋館の殘骸の横の地上から差しのぼつた。きちがひ婆あは、月の光をおどろの髮に正面から受けてクドくつぶやいて居た。私は町のあとさきを見廻つたが、人一人通らなかつた。誰があの婆を保護するだろうと心を殘しつゝ私は其處を離れて虎之門の方へ急いだ。

芝區は平將門時代から維新までにまたがつて、史跡の豊かな土地であるが、幸ひに大石主税の切腹せし久松邸跡の松方邸も泉岳寺も、西郷と勝の會見せし薩摩邸跡なるサツマツパラの建築物も、水野十郎左衞門の墓を有する功運寺も、其角の墓を有する上行寺も、最初の公開演說場を有する慶應義塾も火災をまぬかれた。

星亨の市會議長時代の記念なる芝浦埋立地は、八百噸の船を横附けにして東京築港の陳呉となつたものであつた。今度の天災が築港問題を如何に鞭韃するか。そうしてまた例の魚河岸移轉問題を如何に促進するか。日本橋の側になければ魚河岸らしくない、などゝ云つて居る時代では無いと私は思ふ。

以上の外牛込は早稻大學と陸軍士官學校、四谷は內藤新宿、麻布は市兵衞町の一部が燒けた外に、赤坂區は溜池から靈南坂へかけて、赤坂藝妓の巣と米國大使館、大倉邸、大倉集古館、大倉商業學校などを燒いた。大倉男の爵位は燒けなかつた。

溜池はもと赤坂見附から虎之門まで末廣がりの池であつた。大昔しの繪圖で見ると不忍池にも劣らぬ大池沼であつたが、次第に縮少して明治以後は幅四五間の溝となり、今では又有るか無きかの小流れとなり、池の跡には山王の麓から人家が續き、昔桐畑と稱せし跡へ出來た人家と共に電車線路を挾んで、附近一帶つやつぽい土地になつた。溜池の溜池たる實質を備へし頃は、水面に蓮の花ざかり、虎之口の樋の口は瀧と流れて、鯉が瀧のぼりをするところなどが見られた。

靈南坂は故伊藤公在世當時、毎日のように新聞へ出た地名であり、現在も大建築が聳えてゐたが、昔は火消屋敷と寺町とで墓原が下の町から仰ぎ見られた。葵町を葵坂々々と呼んだのはマアこないだのような氣がする。舊幕時代には葵の岡とも呼んだ。

麻布市兵衞町も其名の貧弱なるに似ず、今や大邸宅が櫛比してゐる。黑澤市兵衞といふ名主の名が町名として殘つたもので

慶長九年頃は勿論畠地であつた。而かも高いところにある極めて不便な畠地であつた。

昨年四谷區へ編入された內藤新宿は、內藤大和守の繩張であつた。家康入國の初めはまだ宿といふほどのものでは無く、淺草阿部川町の名主喜兵衛が有志と謀り、甲州街道の人馬繼立驛として興したものであるが、それも或時代には寂れて廢驛となつたこともある。今度開放されて餓え疲れた數萬の避難民の出入するに任せた新宿御苑は、卽ち內藤氏の屋敷跡であつた。

今回の天災は自然の暴虐と啓示の外に、人間同士の美點と弱點を、蔽ふところなく露出させた。其の人間の感情を殆んど壓倒せんとするもろ〳〵の異常な事象のうちで、濱離宮の石垣の下に漾ふ屍體と、平生は願つても見られぬ御苑のなかを、ぞろぞろあるきまはる罹災民の姿とが私の心の底で一の對象をなして居る。



死兒の齡を算えて

岡田信一郎

私は未練な凡夫に過ぎない、大地震の後四旬餘も過ぎて、本所被服廠跡の原では氣の毒な犧牲者數萬人の靈を祀る四十九日も近い今日でも、ともすると愛惜の想、追憶の念に驅らるゝ。今は建設の秋で徒に過去を憶ふの愚は知つて居る、さりながら三百年の德川泰平の文化と五十年の明治異常の文化の累積である記錄、文書、美術、此等のものが一夜にして殆ど殘らず灰泥になつた事を思ふと、惜しみてもくあきらめ切れない感がする、市民としては都市の設備が怠つた點で、別して建築家としては、耐震耐火の都を造り得なかつた點で、深く自ら責むると共に、失はれたる文書を、燒かれたる美術を、又特に崩され、燒かれた建築を思ひ浮べぬ譯には行かない。古來幾度かの戰亂や兵燹に、貴重な記錄文書や古美術の失はれたるを見るたびに、どれ程戰禍を惡んだらう。今より後の人達は大正十二年九月一日關東に大震災があつて、東京が大火災を起して、記錄文書美術建築の多くが滅失した事を知つて、如何ばかりの遺憾を感じ如何ばかり失望する事であらう。夫れも我等が本當に文明の市民の責を盡し、今の文化に適ふ都市を作つて置いて、然も此の災禍を招いたのなら、止むなき天災であると言つて責を免れるすべもあらう。天災に歸すべき地震よりも必ず之に附隨する事を承知しながら、都市としての不用意から招いた大火災のために多くを失つたのでは後世に對しても言ひ譯の辭を持たない。東京は果して斯く燒土に化す可き止むなき運命であつたのか。私は建築家として舊東京の人の怠りの大きい事を知れば知る程追恨も愚痴も湧く。看病に手落があつて、病人を死なしたかのやうに、あきらめ切れない追憶と自責に、いつまでも惱ましく思ふ。私は建築家として失はれたる多くの美しき建築を惜しむ。

* * * *

大正十二年十月十日私は其の宗派のさる人の依賴で、駿河臺

のニコライ會堂の建築の復舊の如何を檢分に出掛けた。西の門をはいつて、牧師達の住居であつた建物、夫れも無慘に燒けて今は煉瓦壁だけ殘つて居るが、夫れを通り拔けると會堂の直前に出る。駿河臺の丘陵に地の利を占めて、さしも威容を誇つた會堂も、鐘塔(キャムパニール)は地震に倒れ、大圓蓋(ドーム)は火事に燒け墮ちて、今は廢墟だ。鐘塔は强震に搖られて其尖頭と頂屑が碎け墜ちた。其時いつも美しい響で有名な七つの鐘は最後の號音をあげるかのやうに搖られてけたゝましく響いたとも言ふ。然し塔の崩碎する瓦落の音で夫れも聞き取れはしなかつたのだらう。塔の頂部は文字通りに四散して落ちた、前方に落ちた石の一割は方六尺角長さ一丈餘もある一大塊で深く地を凹めて落ちて居る、其の凄まじさは只棘然たるばかりである。後に落ちた大塊は屋根を貫き、二階床を毀ち、四隣の周壁を碎いて、會堂の玄關口は微塵に崩れ、今は石塊と煉瓦のうず高い小山である。

駿河臺の堅い地盤の上に、亡きコンドル博士が英國風の堅實な工事をした、壁の厚い本堂は、さしも激しい地震にも堪え得る事が出來て、さしたる損傷も認められない、たゞ大アーチを締める太さ三吋の鐵ボルトの引切れたのには、自然の力のどこまで偉きいかに脅かされる。地震に堪え得た會堂も、怪醜のやうな火には堪えかねて、其の大圓蓋が燒け落ちた、八本の鐵骨は聖ジョージの双に追はれた惡龍のやうにのたうつて橫つて居る。圓蓋は燒け落ちてビザンチン風に四つの大アーチで支へた八角の其の根元だけ殘つて、仰げば曇り日の雨雲が低く抑へて陰慘の氣を增すばかりである。堂の內部は在りし日の美しき莊嚴や、裝飾は皆燒けてむき出しの壁ばかりで、大アーチのあるあたり古羅馬の遺墟かとも思はせる。私達は燒けた鐵骨を跨ぎ、崩れた煉瓦の山を登つて仔細に堂を點檢した、其の壁體に異狀なきを確め得て、私は圓蓋を架け直す事と、鐘塔の上部を造り直す事とで比較的容易に復舊する事が出來やうと結論した。

私は會堂を出て南側の石階の上に立つた、脚下には神田から日本橋京橋丸ノ內が續く、右手に見える森は大內山の樹立である。遠くに續いて見えるのは增上寺の森である、左には東京灣の海も見える、隅田の川も見える。然し之に圍まれる脚下の一廓はたゞ焦土のみ擴がつて居る。雨雲の絶え間からの薄日に光るのは假バラツクの亞鉛屋根だ、焦土と亞鉛屋根其他には何にも無い、今迄ニコライ會堂復舊の容易を說いた私は、此焦土に直面して東京復興が果して容易であるかを斷ずる勇氣はない。ふと見ると傍の燒けた木の根株から綠の芽出しが尺餘も伸びて居る、自然の復興の勢好さよ!!! 秋には溫かい餘燼のぬくみを春の暖さとでも思つたのか、若芽は勢よく育つて居る。今更に

人の無力を哀む、しかし夫も市民の復興の氣勢と、國家の暖かき援助とでやがては勢よく萠え出る事であらう。

顧ればニコライ會堂は其圓蓋を失つて、截首せられた巨人の軀のやうに踞まつて居る、夫れは町に燒け殘つたコンクリートの事務所建築のやうに細いものではない。どつしりした其壁體は舊い廢墟であるかのやうに感じさせる。町に遠い此處には復興を急ぐ亞鉛小屋の金槌の音も聞えて來ない。靜かな環境に立つて廢墟の感を味ひながら、私は愛惜の想ひを新にした。廢墟に立つ誰れでもは、必ずや其昔を偲ぶであらう。私もニコライの有りし昔を偲び、又續いて數多くの再び得られざる建築を偲ぶ。

私は稚い時此處の對岸のお茶の水高等師範學校の附屬中學に通學した。其故に此の鐘塔からの七つの鐘の美しい響を絕えず聞いた。其の神秘な、奇妙な諧調は小供の好奇心を誘ふに充分であつた、然し幾分危虞の念も混じるので、此の構の周圍を巡りながらも、會堂內に參詣する勇氣を出さずにしまつた。鴻の臺方面への遠足の歸途紫金に輝ふ夕映い空に、眞黑に現はれた此會堂の雄姿を幼き胸に印したのも此頃の事であつた。而して其印象を今も新に想ひ起して居る。

ニコライ聖堂は故コンドル博士の設計で、明治廿四年二月に出來上つた。始め此の建築の大體の圖案は本國露西亞から來たものを、コンドル博士が其の細部に亘つて設計して施したものであると言はれて居る。其故に其間取りや大體の構成は、ビザンチン風であるが、其の細部の手法には、コンドル博士得意の英國ゴシツク風とロマネスク風が混在して居る。又內部の木造壯嚴の如きは英國初期復興式の風趣を加味したものであつた。コンドル博士は十九世紀後半英國ゴシツク復興式全盛時代に學修した英國建築家だけに、ゴシツク式には特に熟達した手練を示されて數多の名建築を遺したが、其多くは今回の震火で失せた、此會堂も其一つだ。斯く此の會堂の設計には或はビザンチン式或はロマネスク式、ゴシツク式と數多の樣式が混在するが、然も大なる破綻を示さずに纏め上げて、高い方塔（キャンパニール）と大きい圓蓋（ドーム）とで對照の妙を窮め、地勢を利用して嚴然たる威容を現出した博士の手腕には全く敬服する。靑綠に錆びた圓蓋（ドーム）と、美しい鐘の音の方塔（キャムパニール）とは永く市民の記憶を去るまい。

此の聖堂が建てられる時分には、駿河臺の優秀なる地勢から或は皇居を俯瞰するとか、宮城に對して不穩の陰謀が伏藏せられて居るとか、無智の巷間にはかなり物議を釀したと傳へられて居る。其れだけ優秀な此地勢と、コンドル博士苦心の名建築とで、此聖堂は永く舊東京の美觀の中心であつた。歐米の多く

の都市は本寺や會堂を中心として成り立つ。中空に聳え立つ本寺の大塔や圓蓋は、數多く建てらるゝ近代建築を壓して、依然として都市美觀の中心である。日本でも奈良京都の舊都では、佛寺の大きな甍や、三重五重の塔婆が、都城を鎭護するかのやうに泰然と建つて居る。舊東京では、増上寺や、東西本願寺、淺草寺等の佛閣もあつた。然し地の利を占めた此の會堂の威容には遂に及びも付かなかつた。本寺（カセドラル）の偉觀なき舊東京も僅に此の會堂で飾られて居つた。其も今は廢墟である。新東京は如何に復興せらるゝか知らない、併し此の會堂は再び舊形のまゝに復興されたい。而して代え難き歷史的の價値を傳へると共に、其は又新東京の美觀ともならう。

＊　＊　＊　＊

明治廿九年私が恰度中學二年の時だつたと思ふ、私達の通學した高等師範　附屬中學は一つ橋の校舍から、お茶の水の高師構內の校舍に移轉した。而して今迄黑房の下つた三角帽子を被つたのが、普通の制帽に變つた。今迄は一つ橋で廣い平家建の校舍で、白房赤房の附屬小學の幼童の頭を押さえて威張つて來たのが、今度の校舍は二階建の小さい、きたない建物なので、多少は不滿にも感じた。然し傍に高師の本館が煉瓦建で立派に建つて居るのを見ると多少心强くも感じた。上級になると、物理や化學の講義や實驗のときは本館の講義室に行くので、物珍らしくも嬉しくも感じた。冬になると蒸氣暖房のスチーム・ハンマリングの騷音を何かと驚いた事もあつた、此の煉瓦建の本校舍は故山口半六氏の作で大した名建築でも無いが落付いて穩かな好い建築であつた。煉瓦建であつたので大震で修補の出來ない破損を生じたか、爆破されて煉瓦屑になつてしまつた。今は私の手元には中學時分何かの記念日に此の建物の前で寫した大勢の寫眞が殘つて居るばかりである。

高等師範（近頃は女子高等師範だつたが）の本館は私にとつては懷かしい建物ではあるが、實は其れ程惜しい名建築ではない。此の時分の懷かしい思ひ出で然も惋惜の念に堪えない建築は、俗に云ふ聖堂、大成殿である。高師は德川幕府の學黌の中心舊昌平黌の遺跡に建てられたので、其孔子廟たる大成殿の敷地とは地續きであつた。附屬中學の毎春の卒業式はいつも大成殿前の廣い石甃の上で舉行された。大成殿の兩翼には左右に廻廊が延びて杏壇門が中門として建てられて在つた。此等の建物で取り圍まれた石甃の中庭に春の日を浴びてひつそりと靜まつて居る、いたづら盛りの中學生も此時ばかりは靜肅にして校長や文部大臣の訓示を聞いた。校長は伊澤修二さんの事　あつたが、大抵は加納治五郎先生であつた。文部大臣は樺山大將の事もあ

つた、西園寺公爵の事もあつた。當時生意氣な私共も黑漆で塗られた莊嚴な建物と森閑とした空氣とで、自ら敬虔の念の湧くを覺えた。學校と地續きの此の聖堂の一廓は私共には好い遊び場であつた。勿論學校の境界を超える事は禁ぜら　ては居たが、小門からこつそりと聖堂を拔けて、松住町の燒芋屋に行つた事もあつた。急所の試驗勉强の爲に入德門傍に潜んだ事もあつた。

近年文部省は大正博覽會の學藝館の古物を聖堂の傍に移築して教育博物館の本館とした（元からの教育博物館は別館として此の後ろに移された）、此の頃から種々なる展覽會が引續き擧行された、私は當局の興行者はだしの手腕と宣傳ぶりとに驚きながら、此んだ大きな二階建の燃え易い家を建てた事は聖堂に對して大きな脅威だと心配した、關野博士と共に文部省が一方では古社寺の建築を保護する任にありながら、一方では此んな無理解な亂暴を敢てするのを罵つた事もあつた。今度の火事は或は博物館から大成殿に燃え付いたのでは無いかも知れないが、殿堂を取り卷く巨樹の森を伐り倒したりして古人の用意を裏切つた不注意から、かゝる取り返しの付かない大事になつたのは遺憾千萬である。

聖堂は東面した仰高門をはいり、石階の道を進み石段を登ると右折して南面して入德門がある。之は普通の四脚門で、たゞ右に透塀が連つて居る。門を入ると右手に水盤舍がある。之の水屋と透塀と入德門とだけが、不思議に猛火を免れて遺つて居る。入德門の正面二十數段の石階を登ると正面五間の杏壇門があり、其の左右から廻廊が起つて、中庭を圍んで正面の大成殿に連つて居る。大成殿は五間六面の大殿堂であつた、而して此等の各建物は總て黑漆塗りで重々しい壯嚴の觀を持つて居た。此の諸建築は寳永の造營を寛政十一年再補したもので、元來德川光圀卿の命を受けて明の遺臣朱舜水が造つた聖廟の雛型を參酌して此の設計が定められたと言はれて居る。而して普通の日本風と異つて努めて支那風に建造されたと言はれて居る。大成殿の大棟には不思議な形の、水烟を頂いた龍魚の鴟尾が載つて居つた。隅棟や降り棟の端には鬼龍子に擬したのであらう蹲踞した虎がついて居た。支那風を模するとは言ひながら、當時の幕府の棟梁平内大隅の造つたもので、大體はやはり江戸時代の日本建築である。然し日本風の木の床を用ひず磚甃を敷きつめ、異形の礎石を用ひたり、よほど風變りで、中庭の氣持などは特異な感を與へた。かゝる異彩のある建築であるのと又極めて稀れなる儒教建築の遺物の一である點とで、此建築の燒失は何物にも増して殘念に思はれる。

私は今建築家として此の珍奇な建築物の燒失を惜しんだ。私

は儒教の存續を主張する一人でもないが、今迄の日本の文化が儒教に深く培はれた事は認めない譯には行かない。其故に儒教の祠堂の滅失を深く悔み、其恢復を切望する。私は孔夫子の聖廟が或は支那風を加味した建築で此處に再び復舊せらるゝ事を是非必要な事だと思ふ、然し其も急に實現が困難であるとしたら、九州の佐賀から多久の聖廟を移築したら如何かと發議したい。多久の聖廟は湯島の聖廟と屢併稱せらるゝけれども其規模は非常な相違であつて、爺と孫との比較所ではない、多久の聖廟の建築は壯厳な此の聖堂に比して貧弱ではあるけれど、南清風の挿肘木等を使用して面白味のある建築である。幸に燒殘つた入德門を保存して聖廟を復興する事は史蹟を保存する上からも、斯文を傳ふる上からも肝要な事であらう。

* * *

帝國大學の數ある建築物の中でも、赤門や法文學部の建物、工學部の舊本館は最も尊重す可き優秀な建築である、赤門は地震にも倒れず、火災にも遭はず、殆と僅かの損傷で殘つたのは有り難い幸福である。工學部の舊本館は建築界の大先輩故辰野博士の作で明治廿一年に出來上つた、佛國ゴシック末期のシヤトー建築に範を取つたと言はれる此建築は、博士の數多の遺作中でも特に傑出した一つである。全體の布置も、外觀も、細部の手法も批難のない興趣に富んだ名建築である、圓塔を左右にして甍を頂いた正面入口、尖塔を冠して大甍を架けた内庭正面の玄關何れも賞讃に恥ぢぬ出來榮えであるが、此等は地震でひどく傷付いた。アーケードを廻らして中央に高いヒマラヤ杉數株を植えた其内庭は、外界とは異つた異國情緒を持て居た。私は此處の西側の二階で三年間教養を受けた。特に西南隅の製圖室は最も馴染の深い室であるが、其の甍も振り落ちた。工學部の建物の被害は莫大で到底使用に堪えぬと、噂に、地盤の良い本郷臺に、用心深い辰野先生の建てた建築もやつぱり駄目だつたかと半疑の念は持ち乍らも、告別のつもので此の家を見に來たが、比較的損傷が少いので嬉しく思つた、而して其復舊も修繕も左程困難ではないと見た。然し大學では惜し氣もなく此の建築を破壞するとの話を聞いた。私はかゝる優秀な建築は、出來得る限り尊重するのが大學の價値を增す所以であるかと思ふ。亂暴な白堊園のやうな荒い氣持では眞の復興は成就しまい。若し大學が噂のやうに郊外に移轉するなら、此の敷地は公園に成るであらう、其場合には此の建物は復舊されて科學博物館にでも利用出來る。大學の移轉が中止になつたら、やつぱり工學部の一館として充分に役立ち、大學の名建築として其の誇りもならう。

、法學部、文學部共同の本館の建築はコンドル博士の設計で、明治十七年九月に出來上つた。此の建築は英吉利ゴシック中期の様式で、工科大學の建築が行き屆いた作風であるに對して大まかな興趣に富んだ、ふつくりとした溫情の溢れた優良な建築である。實に帝國大學は之あるが爲に其外觀の體裁を保つと言つても好い位で。今から此の建築を失つたら、どれ程寂しいものになるであらう。大學構内の多ゝの建築はの此建築を手本として、同様のスタイルで設計されて居るが（工學部の諸建築は大抵工學部本館に倣つて居る）其の出來榮えは非常な相違で到底比較にもならない、建築設計に藝術的手腕の尊重せらる可き事は言ふまでもないが、此等は明瞭な實例である。始めコンドル博士に大學全體の建築の設計を囑されて、其の全體の立案も出來たのだが、當時制度に變更があつて今迄工部省が諸官廳の建築を擔當して居たのが、同省が廢され、大學建築の事務が文部省に遷り、從てコンドル先生の案が實施を見なかつたのであると言はれる、若し博士の案が實現して居たら大學の建築の壯觀は誇るに足るものがあつたのであらう。此の惜しむ可き建築も今度の地震でやはり甍を碎かれ、又圖書館からの延燒で破壞の他、策なき慘狀を呈して居る

帝國大學圖書館の滅亡は蓋し災禍の最も大なるものであらう。其建築は前述の通りコンドル博士作の法文科本館の様式を眞似て然も似てもつかぬ凡庸な作物であるので格別惜しむにも足りないが、其藏書七十五萬卷と稱され、其内五十萬卷が灰になつたと言はれて居る。其内には不換金の蒐集があつて其損害は到底償はれない。圖書の貴重な價値は今にして始めて知る譯ではない、其故に帝大の書庫でも稀覯の珍書は特別な室に貯藏したが其もやはり燒き盡したと言ふ事だ。言ふ迄もなく書庫は完全な耐火建築でなければならない。然し夙く我國建築界の進歩しなかつた時代に出來た此の書庫は其の屋根が木造瓦葺であつた。地震の際其の甍が崩れ落ちて、其の破れた空虚から火事の炎が、見るまに木の屋根に燒け移つたのであるそうだ。今からは返らぬ繰り言だが、鐵筋コンクリートの工法を習ひ覺えた時に、何故に圖書館屋蓋の改造を注意しなかつたか、私も建築家の一人として其の遺漏を恥ぢ、其の責務を思ひ、身を擲る苦悶を感ずる。

十月十七日私は偶然大學書庫の最後に立會つた。文學部の人達は爆破に先だつて今迄日々馴染んだ此の建物に名殘を惜しむで告別をするとの噂であつたが、一人も見えなかつた。古在總長も、中村書記官も居た。法學部の小野塚、山田、矢作の諸教授も、工學部の塚本、内田の二博士も見えた、醫學部の入澤博

士まで物珍らしげに見物して居た、私も此の一團に立交つて、多年日本文化の源泉であつた此圖書館の、最後の息を引取るのを片唾を飲んで見守つた。裝藥に點火をした兵士は鼠のやうに逃げて來た。刻一刻、轟然たる爆破の音と共に黃黑の烟が迸つた。が壁は倒れない。失敗かと思ふ間もなく、書庫の壁は一ゆり二ゆり搖めくと見るまに、一つ二つ三つ四壁は折り重なつて倒れた。地響と共に煉瓦の赤い烟は最後の醜態を隱すかのやうに立ち罩めた。烟が四散する。もう圖書館もなかつた、煉瓦屑だけである。私は手の汗を拭いて肩をおろした。

＊　＊　＊　＊

九月二日の晩、滿都を燒き拂つた猛火は上野の山に迫つて遂に常盤華壇や美術協會の一部を燒いた。然し巨樹大木の擁護の爲か此處に防ぎ止める事の出來たのは非常な幸福であつた。之が爲に東照宮、五重塔、東京帝室博物館、美術學校、帝國圖書館及寬永寺の建物や德川將軍の靈廟が安全に遺つた。美術品の貴重な事は敢て圖書記錄に讓らない。帝大圖書の燒失を哭んだ私は美術學校や博物館の、美術品が猛火の脅威から免れた事を心から忻ぶ。災後數日美術學校を訪れたら、校長から文庫の建築の被害調査を頼れた。美術學校の文庫は帝國圖書館の舊書庫である。昔圖書館は此の敷地に居たが新館成就と共に引遷つて、其舊書庫は美術學校の美術品を收藏する文庫となり、其閲覽室は今は美術學校の閲覽室として學生及美術家の研究道場である。閲覽室はつまらぬ木造二階建であるが、文庫は稀世の名建築である。煉瓦三階建のあまり大きくもない建築だが私は常に明治時代の洋風建築の最も優れたものゝ一つとして推奨して居る。作者は故小島憲之先生で伊國復興式の典雅な建築である。小島先生は少年に俊才を認められて、故鳩山和夫博士等と共に初回の米國留學生として差遣され、コルネル大學に建築を學んだ。歸來如何なる理由かあまり實地に建築を建てなかつたが、此の文庫は傑作である、殆ど全部煉瓦だけで積まれ裝飾彫刻もなく、簡素な併し釣り合のよい建築で、透き通つた寶玉のやうな明朗な感のある建築である、伊太利レネサスンの巨匠バルダサール・ペルツチーの作物を偲ばせるやうな風趣がある。此の建物の地震からの被害は幸に輕微であつた。然し損害を點検しつゝ文庫の中にはいつた時、私は憮然として驚いた。實に此の文庫の屋根も、床も總て木造であつた。窓には鐵扉がついて多少防火設備はしてあるが、萬一火災が近くに起つたら一たまりもなく燒失する。而して中には美術の名作寶物が收藏されて居るのである。之は絕體不燃の寶庫を作つて、其に秘藏せられなければなるまい。而して此の文庫の建築は床や屋根を鐵筋コンクリート

で現狀のまゝ修繕して別品室に使用せらるゝがよい。諸家の寶庫の燒け落ちたのも尠多からう。稀世の珠寶の滅失したものも尠くない。失はれたものを惜み悼むと共に、殘存せるものの安全を切望する。諸家の寶庫は早速絕體安全に修復せられたい。或は鐵筋コンクリートで改造せられたい。世に名ある珍寶名器は私人の所有ではあるが、其を安全に保存する事は諸家の義務である。

帝室博物館の美術品の安全であつた事も同じく慶賀に堪えない(其貴重なる二三品は傷いたと言ふが)然し其建築が大破して宮內省は復舊の資を持たぬとの噂さを聞く事は甚だ心細い。博物館の本館はやはりコンドル博士の作で、しかも博士が日本へ渡來後最初の設計である。洋風の布置に印度風サラセン風の手法を加味した作品で、後年博士自らが言へる如く「極東美術の寶庫たる博物館に不相應ならざる性質を與へんとした努力」が明らかに認められる。當時渡來の新進建築家の抱負も明かに窺ふ事が出來る。此建築はかゝる歷史的の意味でも貴重なものであり、適當な補修を經て永く其機能を盡さん事を庶幾するのは私だけでもあるまい。

* * * *

虎の門の舊工部大學の諸建築は、非常な優秀な作品でもないが、捨て難いものである。特に虎の門小公園の上に臨んで石垣の上に建つて居る英國ゴシック風の一館は趣のある好い建物である。其の位置の好い事で、古雅な贅の木梁の組立などが道行く人の目を牽いた。之は明治六年英人アンデルソン(?)の建てたゝので工學寮の初等學校を企圖されたが續いて工部大學校舍に使用された。實に學校建築の好模範とも云ふ可き建築であつた。後に工部大學が完成するや、此の建物は其の模型や標本を陳列する博物場となつた。後轉々して今は維新史料編纂事務局で使用して居つた。此の石垣の下は先年迄お堀であつたが之も轉じて今は小公園の植込みである。元は此の建物に時計臺の尖塔がついて居つたそうだが私は憶えない、淸親の版畫に夕陽を浴びてお堀の水に映る此の建物の壯觀がある。此の建物は工部大學の門に面して左になるが右には工學寮の生徒館がある、之は今女學館として使用されて居る、明治七年に工部大學の本館が佛人ボアンヴヰーユ氏の手で設計されて十年三月に出來上つた。之はゴシツク式ではなくてレネサンス式で中部には大講堂があつて其正面は双塔を挾んで威容を張つて居る、之は今は宮內省の保管だが廢墟樣に立腐れになつて居る。此等の工部大學の建物は其當時日本の物質文明を振興する中心として、大に活躍したのであつて、私共の先輩諸建築家も此處から巢出し言は

と日本建築學界は此處に培はれたのである、獨り建築界ばかりでなく他の工學も此處に發祥した。近年此の建物が廢墟同樣になり或は取り毀されるとの噂もあつたので、美術家、建築家聯合して國民美術協會が中心となり、此の遺構を明治博物館に利用するの提議を爲し、一方に於て陳列館を得、一方に於て古建築保存の實を擧げんとした事もあつた、併し其も實現する容子もなかつたが、突如此度の災禍にあつて、舊本館は致命的の破壞を爲し、他の二館は左程の損傷でもなかつたが、火災に犯されて燒け落ちた。何れは取り崩されて明治博物館問題も落着するのであらう。

ボアンヴヰーユ氏の作に印刷局本館がある。之は明治八年に出來て、大した建築では無いが省線の電車で神田橋と東京驛の間で右手印刷局の構内を見ると其後の種々なる建物――中には最近の鐵筋コンクリート造もあるが――の雜然たる中に介在してやはり一頭地を拔いて居た、其れも壞れて燒けて爆破されて、今は正面の甍に附いて居た鳳凰の彫刻が紀念として殘つて居るばかりだ。

＊　＊　＊　＊

東京は大阪と異つて河川が少いためか、水の美を利用した建物が少い。建築と水と言へば誰しも水の都ヴエニスを想起するであらう。其のヴエニスの建築式を採り入れた建築が東京に二つある。一はコンドル博士の作、一は辰野博士の作である。永代橋際の開拓使所屬物產館(現在日本銀行所屬)はコンドル博士の設計で明治十四年に出來た。時の北海道開拓使長官黑田淸隆伯の依囑で、主として北海道產の材料を使用して建設し、充分の工費で、充分に技能を振ふとの約束であつたとか言はれて居る。其位置が河邊であるので特にベネチアン・ゴシック式を撰んだので、此の建築の基礎もベニス風の筏地業で、松材の捨算盤を一面に組み合せたものである。其れが好結果を齎したのか此度の慘禍で火に燒かれた殘骸も存外地震の被害を受けて居らぬやうである、かゝる建築は充分補習して紀念として永く維持したいものである。

他の一つのヴエニス風建築は日本橋區兜橋際の澁澤邸(今澁澤家事務所)である、之は川の三叉の交點に立つて其の地位は開拓使物產館よりも遙かに勝つて居る、故辰野博士の作で明治十八九年頃出來上つた。ヴエネチアン・ゴシック式の典雅な樓閣であつて、江戶橋や荒布橋から東に其優麗な姿を水に映して居た。地震ではひどく傷ついて今は取片付られて跡形もない。二つの一つが失せた今日殘る一つはいよ／＼尊重すべきである。

＊　＊　＊　＊

邸宅建築の大きいものは多く山の手にあるので、地盤の關係から震災の被害も少なかつた。火事の難も被らずに濟んだ。燒失した内で特に惜まれるのは深川の岩崎家別邸である。大池を穿ち、老樹を植ゑ、高い煉瓦塀を周らした三萬餘坪の淸澄園も今度の猛火には一とたまりもなく、洋館も、日本家も、樹木も、庭石も皆燒けてしまつた。其日には猛火に追はれた附近の人達が此の庭に逃げ込んで、池に浸つて熱炎を避け、僅に命を繋ぎ得たとの慘話も聞く、日本赤十字社は救護の爲めに此處に病院を急設する事になつた。其バラック建設の用務で、私は某日淸澄園の別邸に行つた。有りし日の數奇をこらした日本家は、鞍馬石の礎石を殘すだけで餘燼だに殘らない。佐渡の赤玉や鞍馬の庭石が燒けたゞれて、其日の苦熱を談つて居る。病院は此の日本家の燒跡に建てられるのである。三菱の法被を着た二三人がしきりに敷砂利を掻き集めて居たが、其は黑い碁石にもなる那智黑の石であつた。大きな池を湛えた廣い庭の總ての樹木は燒け盡して、銅色の葉を持た老松の下に、築山の上に、池の汀に、燒亞鉛の乞食小屋が立ち列んで不思議な對比を見せて居る。

岩崎邸の日本家は、優良な日本造の少ない東京では特に珍重すべき建築であつた。名匠門田小三郎氏が、富豪岩崎氏の命を受け、工費賃銀に制限なく數奇をこらしたものである。工費の多大は必しも作品の良否の標準ではないが、行き届いた完備のものを作るには夫れだけの工費は要る。門田氏は金ぴかな所謂成金式のものを作りはしなかつた。赤松の間、西皮の部、田舍家、とり〲に風趣を見せて嫌味のない、洗練された出來榮えであつた。桂の御所、醍醐の三寶院、等の名建築の手法も所々に取り入れられて、然も補綴の苦しい缺陷は示さなかつた。門田氏は柏木探古氏に先つて古建築の妙所を新しい設計意匠に採り入れる事を創めた、日はゞ近代の小座敷風の日本造の始祖とも見られる人である。庭園は元久世大和守の庭を中心として四方に擴げて造り足した、岡本春道氏此を奉行したと聞いて居る。

洋館はコンドル博士の設計で、同じ頃出來上つた。英國初期復興式の作風で、上品な、優良な作品で、紳士大邸宅の模範的のものである。池に面して大きく露臺をとり、日本の風土に適合した所に、博士の用意を窺ふ事が出來る。廊下で連ねた平家建の別館溫室、球戲室の一棟も、二階建の本家と對照して釣合を取つたものである。此建物は、爾後の大きい邸宅の手本になつたと言はれて居る。普請も丁寧であつた爲か、地震での龜裂も僅かである、しかし火災は遠慮會釋なく此の立派な建物も燒き盡し一切無差別平等である。

地震で傷いた北白川宮邸はコンドル博士作、火に燒けた鍋島

侯爵邸は故阪本復經氏作、其他良建築として惜しまるゝ邸宅の震害を受けたものは少くない。

＊　＊　＊

社寺に富む京都、奈良の古都とは事かはり東京には社寺の古いもの、建築の優れたものが乏しい。別して市中では數度の大火や、遷り變る時勢で目ぼしいものは少なかつた。其故に今度の災禍で滅失の災禍に遭つたものは、割合に少ない。湯島聖廟の滅失は償はれざる恨事だが、都下十數の特別保護建造物が總て災害を免れたのはせめてもの天福である。

煉瓦造も、鐵筋コンクリート造も、土藏も皆燒き盡す猛烈な劫火の中に、危大な木材建築でありながら、淺草寺の火難を避け得たのは不思議と言はうか、奇蹟と言はうか。死に直面して僅に免れた罹災者が、觀世音の御利益に隨喜の信仰を新にするのも尤と思はれる。淺草寺は東京市内の社寺の中で最も古い縁起を持つて、推古の朝の草創と稱さるゝ。其本堂は慶安二年、五重塔は其の前年に落成し家光の再建にかゝるものである。七間七面單層入母屋造の大伽藍で、規模壯大、手法雄渾、江戸時代初期の作物として、末期粉雜の建築を遙に凌駕する。五重塔も之に協ふ作品である。明暦の大火にも燒けず、元祿安政の大地震にも倒れず、今回の大地震、大火災をも免れ得たのは奇蹟とも言ひ得やう。（堂宇は地震のため僅に北方に傾倒したやうだ）建築史の上でも非常な好都合である。

芝增上寺山内で其の山門や東照宮等の特別保護建造物及び德川家の諸靈廟が猛火の脅威を免れたのや、上野の寛永寺の五重塔、東照宮（特別保護建築物）並に德川家諸靈廟の安全だつたのは同じく慶賀に堪えない、芝上野の德川家諸靈廟は德川家の私有であるので特別保護建造物の選には入らない。德川家でも此の華麗な工藝的の建物を充分に修補する丈の資金は出せない。其故に此等の靈廟は、其内でも特に上野の靈廟は、修理不充分の爲め頽廢しつゝある。折角地震に倒れず、火に燒けず大災害を無事に免れながら、日に日に滅亡に近付きつゝあるのは惜しむ可き限で何うかして保存の道を講ず可きである。

聖堂の他、火事に燒かれた社寺に、すぐ道を隔てた神田明神がある。之は權現造で德川末期の作であつた。深川（富岡）八幡も權現造で江戸風のものであつた。芝太神宮（神明社）は神明造の新建築だが之も燒けた、何れも惜しむ可きではあらうが優作傑作と言ふ事は出來ない。

寺院では優秀な建築ではなかつたが、其壯大な點で四隣を壓した、築地、淺草の西東兩本願寺が烏有に歸した。深川の靈岸寺、芝の青松寺などまで燒けた。社寺の少い東京では、左した

る優秀な建築ではないとしても大伽藍の滅亡は、其再興も困難であるし、やはり惜しきものゝ一つである。

＊　＊　＊　＊

洋風建築では左程優秀な作品でなくとも、明治の初年に出來たものは、歴史的にも惜しい氣がするし、又大まかな自らなる興趣を持つてすてがたいものが多い。フリンデス氏作の今の汐留驛（舊新橋停車場）。オードルス氏作の英國大使館。伊太利人カツペルチー氏の設計になる參謀本部や、靖國神社の遊就館。コンドル博士の華族會館（舊鹿鳴館）とりどりに面白味を持つて居たが、其の多少の差違はあるが何れも被害を受けて、永續はむづかしい。明治九年オードルス氏の計畫に成つた銀座の煉瓦建築が、今度はいよ〳〵跡を絕つのも、建築的の價値はなくとも歴史的に惜しい氣もする。

明治中期以降には洋風建築も主として日本人の手で設計され、其の主要なるものは辰野、曾禰、妻木、片山、新家の諸博士の手になつた、明治廿四年濃尾の大震災は非常に當時の建築家を驚かし、其の設計、施工に非常な注意を拂ふに至つた、其故に此の頃の建築は今度の地震でも比較的安全であつて、火事で燒かれたものでも、復興は左程困難ではない。其後の建築で偷安になれた、油斷のために反つて不成蹟のものも多い。此等の多くのものは其に類する作品も多いし、理屈ばつた生硬な表現ものが多く其滅亡は經濟的の意味を別にしては、非常な大事とも思はれない。何れはよりよき建築を得て其の代償とする事も出來やう。

私の特に惜むのは再び得られざる建築と、歴史的の價値あるものとである。今は建築術が著しく進歩した。此の進歩した建築界では昔のやうな建築は反つて出來ない。其處には無智もあつた、幼稚もあつた。今から見たら馬鹿氣た事や、笑ふべき事が多かつただらう。然し設計者の責任觀と匠藝、工人の熱心と好奇心、とは再び造る事の出來ない建築を造り出した。夫は人の手で造られたもので、機械の作つたものではなかつた。ラスキンやモリスが推賞した中古の建築と同じ心持の建築が出來たのであつた。三越や、帝劇や東京會館、其他は又造る事も出來やう、或はよりよき物も得られやう、惜しむ可き建築は二度と出來ない。

之れから新東京を復興するために新建築が出來る、地震で倒れない建築が出來やう、火事で燃えない建築が出來やう、其内で最もむづかしいのはやはり藝術味のある建築、美術的な建築を得る事である。今と昔とは建築の美に對する解釋が違ふ。夫れ故に私は今惜しんだやうな建築を之れから建てやうと要望するのではない。遠い此の次の時代にでも惜しまれるやうな建築

を作りたいと言ふのだ。
よりよき子供が生れても、死んだ兒はやつぱり思ひ切れない

ものであるとか、之れからは私の幻の中にだけ殘る美しき建築を惜しむ。

（大正十二年十月）

震跡日記

巖谷小波

はしがき

未曾有の震災が、我が帝都を木葉微塵にしたのは、實に大正十二年九月一日の事であつた。然るに私は幸か、不幸か、其當日を東北の旅中に過ごして、變を聞いて飛んで歸つて來たのは、その餘震もはた餘燼も、漸く下火になつた三日の夕方だつた。

こんな風で、折角の稀有の大天災にも、親しく體驗し得なかつた私は、せめては後の世の語艸に、その震跡丈でも目に殘して置かうと、翌四日からは足にまかせて、各方面を見舞に廻つた。

其一 （四日、晴）

何はさておき氣にかゝるのは、麹町で燒け出された母の安否だ。それは昨日旅からの歸途、取りあへず行つてその燒跡を見て來たが、その時はまだ、ある筈の立退先の立札が出て居なかつたので、或は我が家かと思つたが、自家へ歸つても顏は見えない。さては此所より距離の近い、青山の兄の所だなと[illegible]れた。

そこで早速其所へ行くと、果して母は、常に一所に居る弟の家族や、また近所で同じ火に會つた、末の弟の妻子と共に、無事に避難して居たのである。

當時の事を聞いて見ると、地震には案外損所も無かつたが、

全く火事に燒かれたのだと云ふ。而もその火が甚だ遲かつたので、決して燒けるものとは思はず只地震丈の危險を避けて、難が去つたら又歸るつもりで、大切な物には鍵までおろし、落ちた壁土の仕末もし、飼鳥には餌まで與へて去つたのだと云ふ。

尤もかうした嗜みのために、却つて何も彼も燒いてしまつたのは、此他にいくらも例があらう。殊には保險もつけてあるので、わざと手をつけなかつたのもある。イヤ、むしろ大方然うなのだ。所が今度の樣な大火となると、折角の保險もケタを外されて、一向役に立ちさうもなく、常は蟲眼鏡で見なければならぬ位な、但し書の小文字が口を利き出すとは、恐れても尙恐るべき、番狂はせの天災ではある。

此日青山へ行く途中古川橋から自動車に乘らうとしたら、丁度其所へ、鎌倉から逃げて來たと云ふ、若夫婦のひどく疲れたのが來合はせ、一所にのせてくれと云ふ。快く同乘して六本木まで行つたが、彼等はひどく喜んで居た。かう云ふ場合こんな事のあるのは、惡い氣持ではないものだ。

其二　（五日、晴）

本石町の博文館も燒け、館主大橋氏の番町の邸も灰になつた。で、まづその立退先を訪ふべく、此日は車を本鄕へと驅つた。其所の弓町には社長進一氏の邸が殘りて、其所に皆避難して居ると聞いたからだ。

まづ聖坂から赤羽橋を過ぎ、愛宕下へ出るともう燒野である。眞垣平九郎が駈け登つたと云ふ、愛宕山の石段も、黑坊主になつて木立の間に、眞上まで剝き出しになつて居る。

やがて内幸町へ入ると、かう云ふ場合には何うしても免がれさうもない、例の議事堂がふしぎに無事である。

日比谷公園裏を丸の内へ入らうとする時、凱旋道路の地割が目につく。それから二重橋前へ出ると、あの淸らかな小松原の芝生が、只もう一面の避難部落、新しい青海のお座敷へ、紙屑籠を引くりかへした樣だ。

神田橋が渡れないと云ふので、内務省前から新常磐橋へ出たが、その内務省の門番所の、漸く三坪計りの建物が、瓦も落ちず染も焦がさず、何所に地震や火事があつたかと云はぬ計りに、平然として殘つて居る。飛んだ祝融氏の忘れ物だ。

本石町へ出ると、五日前に行つた博文館の三階は、跡形も無く灰になつて、角の電柱に架けた板に、立退先が筆太に讀まれた。

須田町から湯島の明神前へ出ると、表の銅の鳥居が、中程から無慘に折れて居たが、それより氣の毒なのは、此間出來上つ

た斗りの、眺望絶佳の新社務所が、一方は石垣斗りにされて居る。

更に痛恨に耐へないのは、前の聖堂の燒かれて居る事だ。此所は德川期美術の粹として、國寶に乏しい東京には、特に誇りとすべきものであつたのに、今は無慘や礎斗りとなつて、孔子樣も形無しの仕末だ。

私はあまりの痛ましさに、崩れた築垣から內へ入つて、その跡を弔ふ時、不圖目についた小さな金具、それは屋根の物らしいのがあつたから、好い記念と拾ひあげて來た。

弓町の大橋邸では、居合はせた夫人に會つて避難當時の話を聞いた。彼所も初めは燒けない心算だつたさうだが、それでも用心にと土藏をしめ、有合せの味噌で目塗をしておいたのが、今となつては成功であつたと云ふ。

所へ金澤の別莊から使者で、其所の被害の樣子を知らせて來た。これで見ると、つひ一週間ほど前招かれて流燈に野外劇に、一夜を愉快に送つた邸宅は、火こそうけざれ　地震の爲めに、ひどく曲んでしまつたさうだ。

こゝから小石川を越える時、M子の家を尋ねると、こゝは砲兵工廠の後に居ながら、爆發の飛片もうけなかつたさうだ。又牛込のK家を訪ねて、こゝでは一日に横濱へ人を送りて、主人が令孃と共に出かけたきり、三日まで消息が無かつたので、ひどく氣を揉んで居つたが、三日の夜漸く歸つて來たことで、その時の話を聞かされたのによると、櫻木町驛前で、夜明まで火につゝまれながら、九死に一生を拾つて歸つたのださうだが、その時の記念だと云ふ火傷の痕が、孃の肩や二の腕に、小さいながら幾つも見えて居た。

それから飯田町、雉子橋と來て、文部省の燒跡も見た。國定教科書編纂以來、近くは國語調査の委員會なぞで、每度馴染になつて居た廳舍も、今は名殘無く灰になつて居る。

帝劇裏の日本倶樂部を見舞つて、辛く燒け殘つた話を聞き、東京日々新聞社にも、無事を祝して銀座へとまはり、それから芝の公園へ入る時、政友會の燒跡をぬけながら、ふと靴に觸れるものがある。拾つて見たらよく門柱に打ちつけてある、某保險會社の札だつた。金屬だけに燻ぼりながらも、文字があり〳〵と見えてるのも皮肉だ。

其三　（六日、晴、曇、雨）

午後野菜まで持つて見舞に來てくれた、幼年畫報のA氏と共に、家を出て品川驛前へ來た。すると、丁度上野行の乘合自働車があつた。但しそれは貨物自働車が、此場合急に代理をつと

めて居るので、無蓋車同樣の函の中へ、土足のまゝ詰め込まれるのだ。料金は日本橋まで八十錢。南傳馬町で降りて、東京驛前の中央郵便局へ來ると、此所には二列に押ならんだ群衆が約二丁もつゞいて居る。罹災者の通信が扱はれ出したからだ。

東京驛にも負けない位、今度の大震にビクともしなかつたのは、山下町の帝國ホテルである。異樣な建築が問題ではあつたが、かうなるとライト氏の鼻の高さは、正に食堂の天井と反比例する。

此のホテルには、甥が避難して居る。東京朝日も國民も立退して居る。其他立派な會社の二三が、まだ造作も無い新築の部屋に借居候をして居るのである。

居候はそれ許りではない、麴町の英大使、赤坂の米大使も、共に此所に假住をして居るが、米大使の如きは、今度の災害に非常に同情して、其當日から壯んに活動し、現に本國から殖民地からドシ／＼と救濟品を送らせて居る。

當然構內に避難して居る、約千名の罹災者に對して、ホテルも今までは食糧を支給して居るが、さう／＼永くはつゞけ兼ねるので、聊か當惑して居るのを聞くと、後は一切此方で引うけるから心配せずにどし／＼食はせると、さかんに力瘤を入れたさうだ。

其四　（七日、晴）

今日は新宿方面を見舞はうとして、品川から山手線に乘つて見たが、一時間も待つた揚句が、貨車の連結の所より乘られず、いかにも危險に耐へないので、斷念して方面をかへ、あまり遠くない三田綱町に、三越の介畑專務を見舞つた。主人は不在であつたが、取次の者の話によると鎌倉の別莊に居た夫人と令孃とがあの日壓死を遂げられたと云ふ。店は燒ける、家族は亡なる。重ね／＼の不幸同情に耐へない。

その隣が同じ三越の前常務笹原氏なので、其所へも刺を通じると、此所では主人公居合はせて、玄關まで來ていろ／＼話した。氏は此間牛込に居て、近頃此方へ移つた許りだが、土藏が崩れて女中部屋が潰され、その彈みに玄關までこの通りと、まだ新しい柱の歪みを、苦笑しながら指すのであつた。

同氏の話によると、二日の夜の鮮人騒ぎには、青年らしい一群が、近所の慶應の武器庫へ闖入して、銃劍をさかんに取り出して行つたが、まるで戰爭が初まつた樣だつたさうだ。

歸途には二本榎の西町に、久保田米齋氏と綱島佐吉氏の家とを見舞つたが、前者の瓦は大分落ちて居たが、後者はトタン屋

根だつたので何の被害も無かつた上、水もこの通り豊富なので、此近邊のお役に立つて居ますと、庭先の噴井戸を指しながら、家内中涼しい顔をして居た。

其五　（八日、晴曇）

連日の歩行に疲れた腰を、按摩に揉ませて居る所へ、天勝一座の野呂氏と、石川木舟氏がやつて來た。野呂氏は丁度あの當日淺草公園の常盤座で、私の『日の出神樂』を開演中、而も日の神の現はれる所で、グラ／＼とやられたのださうだが、それでも五十人に垂んとする座員、中には少女も少年もあるのに、一人も落伍させず、上野へ逃げ、今は池袋に立退いて居ると云ふ。

木舟君はまた三番町の家を、見事燒かれてしまつたのだが、それでもマメに諸方を見舞つて、此間も本所へ渡らうとする時、厩橋で恐い目にあつたと云ふ。その譯を委しく聞くと、これは燒殘つた鐵管の上を、只一條の鐵條を便りに、一人宛列んで渡つて行つたが、途中に死骸が一つ引かゝつて居て、イヤでもそれを踏み越さねばならない……あんな弱つた事はなかつたと云ふ

午後はまた家を出て、まづ青山の高樹町に、三越呉服店の立退所を訪ひ、それから穏田の久留島氏と、其隣の竹貫氏を見舞つた。同じ樣な石の塀が列んで居るが、それにヒヾも入つて居ない程、此邊は被害も少い。けれども久留島氏は當時熱海へ行つて居たので、一時は何うかと案じたが、兎も角も無事だつたと云ふ事丈は、留守居の話で判つたのである。

見ると前庭にあつた銅の胸像は、臺石と共に倒れてしまひ、その拍子に久留島氏の鼻が、少しく缺けてしまつた樣だ

それから神宮前と千駄谷へ出て、三輪善兵衛氏の立退所を訪ふて、丁度氏も居合はせて、粗末な浴衣のまゝ出て來たが、實はこれも借衣ですよと云ふ。以つて被害の程度も推された。其所へ使から歸つて來たらしい、一人の青年が復命に來たが、その場であてがはれた中食を見ると、焦茶色の玄米粥に、梅干に澤庵の他はなかつた。

氏は聞えた茶人で、この茶器は云ふに及ばす、書畫骨董の尤物も年來少からず所藏して居るが、それも皆灰にしてしまつたと云ふ。

それから代々木と新宿へ出て、角筈に杉浦重剛先生を訪ふた。先生は丁度玄關に出て、其所で客に接して居られたが、座敷は大部分雨漏りで、住める所は二室程より無いと云ふ。其次の洋風の應接室には、臨時に疊が三枚程敷かれて、婦人の寢

が覗かれた。

種々の話の序に、聖堂の燒けた話をすると、先生は切りに、惜がつて居られる。其所で私はポケツトから、此間拾つて來た記念の金具を、改めて先生に呈上すると、先生は淋しく笑ひながら、別にとがめもせず納められた。

此所を辭して程近い代々木に義兄T氏の家を見舞つた。但し姉は、丁度あの日平塚に居て、一時は家の下になつたのだが、何の怪我もせずまだ其所に居り、此方に居た義兄や姪、甥達も何れも無事であつたのである。

此邊は水に不自由が無いので、シヤツまでも脫いで汗を拭いて居ると、その井戸から西瓜をあげて來て、直ぐと切つて振舞つてくれた。飮料に窮して居る此頃、これは無上の御馳走である。

傍を見ると、まだ稚い甥達が、食鹽の空罐や、燒海苔のカラ罐に入れて、しきりに玄米を搗いて居る。

夕方疲れきつて歸つて來たら、新潟から女婿のI氏が來て居た。彼は變を聞いて直ぐ立つ筈だつたが、例の取締で幾日か妨げられ、漸く六日の夜汽車に乘り込み、次の夜は大高で明かして、漸く今着いた所だと云ふ。土産には白米、パン、罐詰類、それに銀行が明かないと聞いて金子まで用意して來てくれたのはどれほど家内中を喜ばせたらう。娘を嫁にやる時は、遠方過ぎると云つた懸念もあつたが、かう云ふ場合には又隔つて居る方が災難を共にうけない丈、却つて便利な事にもなるのだ。

其　六　(九日、晴、夜雨)

午前木曜會の紫草氏と、小舸氏と博文館のH氏とが落ち合つて、當時の話に花を咲かせて居た。紫草氏は、たまじ大きな金庫を預つておいたら、その重量で根太が落ちて、家までゆがんでしまつたと云ひ、小舸氏は、あの時丁度丸ビルの八階に居たが、イヤ、その搖れる事〱と語る。H氏はまた、恰もあの前夜の深更に、細君が產をしたので、そんな事で遲刻して、漸く十一時頃から、電車で出勤する途中、丁度京橋を渡つた所で、あの地震に出會はせ直ぐと病院まで引かへしたが、まづ無事だつたので安心したと云ふ。

こんな話をして歸つた所へ、横濱のS氏がやつて來た。「オ、無事だつたか」と云ふと「おれは無事だが伜はやられたよ。」と云ふ。聞けば二十四になる長男が、翌日旅行する筈だつたので町の床屋へ斬髮に行つて居る時、あの一搖で忽ち梁の下に、次いで間も無く火に包まれ、見す〱白い骨になつて、飛んだ所へ旅立してしまつたのださうだ。

此話にひどく心を動かされて居ると、此所へ箱根から環翠樓の子息が來た。此所も全滅の筈なので、急いで樣子を聞くと、後の山が崩れたので、奥の舊館は見事に潰され、客が二人やられたと云ふ。その舊館の下座敷には半月前には私達の家族がのんきに暑を避けて居た事を思ふと、これも餘所事には聞かれない。

所へ又一人、これは京都から舅のT氏が來た。彼は已に三四日前、彼地を立つて驅けつけてきたのだが、その兒は燒出され、弟は家を潰されたので、此等を救ふべく食糧をはじめ、天幕まで用意して來たのだあつた。然しその爲めに荷物が嵩んで、途中の困難は一通でなかつたとこぼす。その困難を排して持つて來た、特製のパンや、罐詰を、私の所へも置いて行つたのは、むしろ氣の毒に耐へない氣がした。

其七 （十日、雨）

此の二三日市内の交通も少しつゝ開けた。そして眞の乘合自働車も、八ツ山から日比谷まで通ふ事になつた。そこでまづ之に乘つて、日比谷から銀座へ出る途中、有樂橋外の新築實業ビルデングに、實業の日本社の立退所を訪ふたが、まだ上塗も出來て居ない、三階の室に燒殘つた書類が堆くなつて居る側に二人ほど男が居た丈りで、まだ知つた顔は見えなかつた。

それから日本橋通を北へと歩く中、不圖乘合馬車が來合せた。但しこれも運送用の馬力に、一寸屋根をつけた丈りのものだ。速力は徒歩に變らないが、疲れない丈がましと、之に乘り込む事にすると、恰も天野雉彥氏に會つた。此人は青山に住んで、多くは地方を巡講して居るのだが、あの時は丁度在京して、午前は三越で買物した後、白木屋の裏の齒醫者によつて、療治をしてもらつて居た所だつたさうだ。

萬世橋を渡つてから、この馬車を降りて右へとまがり、和泉橋の慈善病院へ行つた。此の一廓はふしぎに燒け殘つて居るが、當時は全く火に包まれたので、院長の木村博士は死物狂で患者を運出し、轉々六ケ所ほど避難しまはつて、漸く無事なるを得たのだが、その爲めに博士は遂に吐血までして、今も此所のベツトの上に横はり、五日目ではじめて顔を合はせると云ふ、細君の看護をうけて居る所だつた。

その代り博士は、年來しにせた神田の診察所も、近年買入れた番町の邸宅も、其所にあつた土藏も、その中に入れてあつた自慢の古美術も、皆殘らず燒いてしまつた。けれどもこの犧牲のために、幾多の不幸な病者達が、どれほど博士に感謝した事であらう。

此所を出て池の端七軒町に、いとう呉服店の立退先を見舞ひ、あとは三橋の所から、又先刻の乘合馬車で、まつしぐらに高輪まで歸つた。その間約二時間、生ぬるい雨の日の午後、睡魔が襲つて來るが、それも尻の痛さには、すぐまた追拂はれてしまふのであつた。

此日品川から乘合自動車に乘ると、乘合はせた外國の若い紳士が、切符を買ふのに十圓紙幣を出した。それが日比谷までなので、三區四十五錢でよいのだが、その小錢が無いのに、車掌は剰錢を持合せない。私は丁度向側に居るので、自分の回數券を切つて渡したら、紳士ひどく感謝して、是非名刺をくれと云ふ。これしきに名刺なんぞは、元より出し度くなかつたが、その中先方から自分のを出した。かうなると此方も取りばなしにはならない。止むを得ず交換してから、さてその名刺を見たら、これはハルピンの法科の大學教授、ゴロバコフと云ふ人で、帝國ホテルに避難して居る、知人を見舞ひに來たらしかつたが、惜しいかな車中が混みあつたので、何所から來たかを問はづした。

其八　(十一日、晴)

午前新潟の婿が持つて來た食糧を屆けるべく、青山に母の立退所をたづねたが、まだ然るべき家が無いと歎じて居た。時節がらそれは止むを得まい。

それから青山の通を行くと、とある菓子屋に萩の餅があつた。それを一包買つて、麻布谷町の某寺に避難して居る、赤坂で焼出されたH氏の所へ持つて行くと、居合せた子供達が、珍らしがつて舌を鳴らした。此邊では白米に乏しく、まだ玄米でなやんで居ると云ふから、丁度家から用意して來た、白い飯に牛肉の煮たのを入れた、アルミニウムの辨當をそのまゝ出すと、肉に渇へて居たH氏は、目を細くして我が皿へ移した。

其九　(十二日、晴)

此日は博文館の編輯局員が、總動員をされたのである。即ち本郷の假營業所へ行くと、重役から挨拶があつて、此際事業は從來通り進行する。但し編輯所は當分の中、小石川の印刷工場の一部、精美堂の三階に設けるから、午後には一同見分に行かうと云ふ事になつた。

その中正午になつたので、食堂で皆午餐をやつたが、それが玉子燒に、新漬と白飯、此間中の食堂と別に變らない。

さて午後は小石川の工場へ行つた。此所は火災こそなけれ、ポイントの工場を全部倒潰させて死傷數百を出したのである。

所が今度編輯所にならうと云ふ、精美堂の建物は、その工場と同じ鐵筋コンクリーで、場所も半丁ほどより隔つて居ないのに、硝子一枚破れて居ない。地震に筋はあるに相違無いが、さりとはあまりに現金過ぎる樣だ。

所で大橋館主も見えて、一同に輕い挨拶があつたが、その時の話によると、日露戰役で二年間に費した金の、更に二倍以上の物を、今度は只の二日で煙にしてしまつた。恢復の事業も容易でないと云ふ。復興審議會の委員としては、一層痛切に感じるのであらう。

其一〇　（十三日、陰晴）

午後品川に江見水蔭氏を訪ふた。これは四日の朝見舞つてくれたから、その返禮の意もあるのだ。所で品川邊は、大した被害を見うけられない。それに食糧が初めから豐富で、疾うに鮨の刺身も食つたし、水に不自由がないから樂に風呂にも入れると云ふ。

それに此間から氣になつて居た、片瀬の別莊の石橋思案氏も、家は壞れたが體は無事で、この通り手紙が來て居ると、その原文まで見せられた。あの地方には音信不通なので、此間から少からず案じて居たが、これで一ト安心出來ると云ふものだ。

夕方から雨になつて、夜に入つたら風も出た、假小屋の人達の事を思ふと、所々に雨洩りこそすれ、屋根の下や疊の上に居るのが、いかにも勿體無い樣である。

其一一　（十四日、時々雨）

昨日留守中に來たT氏が、今朝早く出直して來た。氏は土佐の高知から、わざ〳〵見舞に來てくれたのである。

尤も昨日の午後には、伊勢の親戚S氏からも、二人の特使がやつて來て、米や食糧や其他手厚い見舞品を屆けてくれた。此の三人が一所になつて、午前から罹災地の見物に行つたが、T氏はその足で直ぐ發足したのに、芝浦から清水港への便船をとつたが、S氏の使者はそれにのりはづして、やはり中央線を引返す事になつた。かうして見舞に來てくれる人達も、實に容易な苦心ではないのだ。

此の日は麴町に加藤犀水氏を見舞つた。つひ隣まで燒けたのに、家は幸ひ助かつたが、養父正義は大磯の別莊で、足を傷められたと云ふ。それから四番町に桂月畫伯を訪ふと、氏は支柱だらけの書齋の中に、相變らず江戸式の氣焰を吐いて居た。實にこの家は可なり古物で、到底持ちこたへる筈では無かつたのを、倒れも燒けもしなかつたのは、やはり幸運の人である。

それから中六番町と、東郷坂から右へ曲つて、中橋德五郎氏方へもよつた、折から主人公は、緣側に坐をかまへて居たが、其庭から見える洋館の蔭の、大きな陶燒の狸を指さし「彼奴が初めから倒れもせず、置に一寸も動つて居らん、そのためか、庭の木が燃つた斗りで、この通り家は無事ぢや。先刻も飯野吉三郎が來て、これに早速注連を張れと云つて居たよ。」などゝ頗る機嫌であつた。

其一二　（十五日、坐）

午前姉のTが來た。これは向島で家を潰されたが、幸に家族は無事だつたと云ふ。

午後から出て、四谷の慶應病院に、廣澤博士の避難して居るのを見舞つた。博士は三番町で家を燒かれたが、荷物は四分通り出し得た程、餘裕は十分あつたと云ふ。氏の庭には萬年健坊と云ふ、可愛い銅像もあつたが、それ迄無事に持ち出したさうだ。

これから元町の久保田氏を訪ふた。連雀町で燒出された大信銀行は此私邸で立派に營業して居た。氏は靜坐で鍛えて居るので、當時も十分落着いて居たらしい。

それから鮫が橋の谷を越えて赤坂離宮前へ出た。此所には攝政宮殿下が御居でになるのだ。敬意を表しながら御門前を過ぎて、紀國坂の方へまがると、此邊に落ち散つた築垣の瓦が、まだ少しも取かたづけずにある。而もそれには御紋章にちなんで菊の花がついて居るので、私は我知らず身を屈めて、その中から二つ紀念に拾つた。

食違坂から紀尾井町へ出て、山本入坐氏を訪問すると、氏も當時は輕井澤に居たが、變を聞いて歸つて來るのに、途中で野宿までしたさうだ。見ると應接間の一隅にある、小笠原伯が自作を賜はつたと云ふ美人の大理石像が、前に落ちて床を拔いて居た。

それから近所の平河町の寺島伯を見舞ふと、奥から出て來た伯の手に、小さな繃帶がしてある。由來を聞くと笑いながら、これは全く自業自得、最初の一震は無事に逃げたが、一寸した小止みの時、例の煙草が呑み度さに、それを取りに入つたので、二度目の震り返しに足を取られて、轉んだはづみに指をくぢいて序に足まで擂りむいたのだ。と、膝頭まで見せるのである。それなぞは同じ怪我でも、愛嬌のある方であらう。

此山本氏も寺島伯も、共にその家族の人達をまだ輕井澤に置いてある。同じ別莊でも、それが湘南地方であつたら、此際二重の災難に遭ふ筈だつたにと、こんな話を仕合つて別れた。

吾が回想する大杉榮

佐藤春夫

大杉榮の名は、ともかくも、近代日本の思想史上で、また文明史上で閑却しがたいものであつた。今や、問題的なその最期によつてこの名はもう一層人の注目を要求するものになつた。

私はかの男を知つてゐた。一面識があつたといふ文字面よりは少しばかり近親で、友人と呼ぶにはちよつとばかり疎遠で、つまり私と彼とは事實に於てさうであつたやうに、どこまでも隣人であつたのだ さうして後になつて私の流浪的な寓居が、同時に彼のものも亦轉々として、私たちはお互に相手が現にどこに住んでゐるかを知らないでゐながら、それでも、どこかでひよつくり――たとへば銀座――この場所も亦今はもう無い――の街上などで出會ふと、必ずどちらかから聲をかけ合つて、昔どほり隣人づき合をづつけて來たのであつた。だから、その事實を追々と書き誌すであらう私のこの單純な回想記は、また一名「隣人の見たる大杉榮」である。私は彼のうちの重要なるものを殆んど知らないのである――斷るまでもなく私は彼の評傳をする人ではない。さうして私は考へるが、或る適當な時代にはこのおつかなびつくりの人物を縱横から論ずる人もあるに違ひない。私はさういふ人達のためにも亦この一文を書かうとするのである。それ故、私は史料を取扱ふやうに出來るだけ詳細でありたい。さうして、それはさう難しい事ではなささうである。私のすべての記憶のなかから、大杉榮に關係のある部分だけを、ただ羅列すればいゝのだから。またその關係といふのは極くあつさりしたものだから。但、その頼みに思ふ私の記憶力がどれぐらゐ正確で細密であり得るか。どうやらこれが案じられるのである――仕方がなければとぎれ〳〵のままで書くより外はない事だが……

・　・　・　・　・

先づ十年の歳月を遡る必要がある。

當時、私が怪しげな新家庭を牛込から大久保に移したところのことである。

荒川義英といふ男があつた。死んでしまつた今日も多分はまだ忘れ切つては居られないであらうが、當時の新進作家の一人で、私よりも三つぐらゐ年が若かつたらう。私は無名作家だつたし、荒川は原稿を賣ることが出來たのだ。この荒川がいつどうしたきつかけであつたか、初めは私のところへ文學談を戰はしに來てゐるうちにたうとう私の家へ食客に入り込んで來た。下宿を搜す間ほんの二三日とか何とか言つて半年ばかりもそのまま動かなかつたのだつたと思ふ。私の牛込の家から大久保までもくつついて來たのだ。この男は所謂不良少年で――こんな言葉が出來たのもその當時よりつひ三年も前のことであらう。してみると荒川などは第一期の不良少年だ。――その不良少年は社會主義的な理屈をコネた。彼は堺利彦のことを「おやぢ」と呼んでゐた。大杉榮のことを大杉と呼捨てにしてゐたが、よく喧嘩をして大杉にはよほど心醉してゐるらしかつた。これは後に私が大杉を見てから知つた事であつたが、荒川の少し吃るやうなしかしてきぱきした言葉つきから、話す毎に顏をちよつと横にふりながら言ふ樣子やら、或は一種妙にそれは喉と鼻との丁度境目あたりから短く發する笑ひ聲といひ、荒川のそんな態度はそれはすつかり大杉榮のものの眞似であつた。眞似といふよりは寧ろ無意識的な傳染であつたかも知れない。私は或る時聖フランシス傳を讀んで、そのすべての弟子達が皆フランシスの物腰に似てゐるのに、たつたひとり或る弟子だけが似てゐないのをその當人が悲しく思つたといふやうなことが書かれてゐるのを見た時、大杉の眞似をした荒川のことを思出したこともある。

荒川が堺利彦を「おやぢ」と呼んでゐるのには理由があつた。荒川の父は堺の友人であつたとかで、堺は荒川のためにいろいろなことを心配してゐてやつた。荒川がまだ二十にもならないでその處女作を或る雜誌へよほどの優遇で發表して貰へて、それが荒川の文壇的出發になつたのだが、その時にも堺のちら言がよほど有効なものであつた。今から思ふと、當時は今とは別の意味で文士と社會主義者とがよほど接近してゐた。其時のは社會主義者の方から文士の社會の或る部分へ接近して來たのだ。ちようど世に謂ふ大逆事件なるものの後であつて、生き殘つた社會主義者たちは文士社會へ亡命して來たのであつた。さうして彼等は稍く不本意さうに文士の椅子を占めてゐた。堺はこの方面の文士として荒川の作品不良少年の自叙傳的作品を社會的意義ありとして認めたのである。それ故に荒川が堺を德とするのは當然であつた、しかし大杉をそれほど慕つてゐたのには別に理由があるからではなく、大杉の何ものかに魅惑を感じたか

らに違ひない。事實、荒川は堺のことを讃めては居たがその時でもいつでも何か不滿げであつた。それに對して、大杉のことの場合にはいつも悪口めいたことを言ひながら常に親愛の色を見せてゐた。――餘談ではあるが、序だから荒川のことをもうちよつと書かう――荒川の生活のだらしのないのは、さすがの私も閉口だつた。默つて私の本を持ち出しては新宿へ遊びに行くし、(殆んど地廻りになつてゐたのだ)、五錢ほどくれと言つてはそれで駄菓子の買ひ食ひをしては胃を害ねて、それが當じると持病の喘息を起して今度は注射代を要求する。それで自分で稿料でも手に入れたとなると、きつと四五日は歸らない。荒川に留守を頼んで外出して歸つて見ると、留守番どころか何處かへ出て行つたまゝ家は戸一枚引いてゐない。先づ大たいがそんな調子で、しかもそれが社會主義者として當り前のやうな顔までしてゐる。誰から教はつて來るのだか――多分、大杉からであらう、なかなか本當の理窟も言ふ。だから謹聽しなければならないこともある。それに頽廢的な人間だがもともと下等な性格ではなし、へんに愛嬌まで具へてゐるのだから、私は迷惑をしながら默つて置くより外に方法もなかつた。時々小言を言ふと、

「おやぢ(堺)には叱られるし、大杉にはやつつけられるし、それでうちへくるとこれだ。まつたく世の中は住み憂いね」

といふやうなことを言つて笑つたきり取り合はない。

「君のやうな人間は一ぺん監獄へでも行つてくるといいのだ。」

「大杉と同じやうなことを言つてらあ。大杉は今度なんかあつたら一緒に引きづり込んでやると言つて笑つてゐたよ。」

この調子で荒川は何かにつけて好んで大杉の名を口にした。喧嘩をした。例へば、大杉がどうして尾行をマイタとか、巡査を一喝したら巡査がどうしたとか、道端で突きあたつた人間をステツキで毆つたとか、そんなつまらないことが重な話題で荒川の好んで傳へる喧嘩だけを言葉だけに聞いてゐると大杉といふ人物は頗る野蠻な好戰的な不良少年向きの人間に感じられるのであつたが、荒川とて無論、それが大杉の正體の様に話したのではなかつたし、私としてもそのやうには聞きとりもしなかつた。――ただ、その當時の大杉には事實そんな客氣が澤山にあつたらしいことと、それよりも彼の弟子である荒川がそんなことを何か意味あることのやうに打興じてゐたことは確である。しかし私はそんなことを面白いとは思はなかつたのは斷るまでもない。だが、荒川は大杉に就てこんなことをも言つた――

「大杉は自分で、おれは何よりも人道主義者(ヒューマンタリアル)だ――何しろこのとほり人間が好きなのだからつて、そんなことを言つてゐた」

ちやうど人道主義といふ言葉が文壇で流行し出したころの事であつた。

荒川は後に日本を食ひつめて、文壇的にもさしたる志を得ないで、たうとう滿洲の方へ行つてしまつて、そこで死んだのだが、その後五年ほど經つて彼の作品集が出版されたが、その中に「別れ際（？）」といふ作品がある。彼の作のなかでは一番力作でもあり、傑作でもある。そのなかに書かれてある一人物は正しく大杉をモデルにしたもので、私の見る限りでは大杉の風貌を活寫してゐたやうに覺えてゐる。

* * * * *

私が大杉を知つたのはこの荒川を通してである。私の家が大久保にゐたころに、大杉もやはり大久保にゐたのだ。三四丁は離れてゐただらう。荒川は殆んど毎日のやうに大杉のところへ立寄つたやうであつた。或る日、荒川が私のところへ大杉を引つぱつて來た。その時が初對面であつたが、無論、そんな挨拶などは誰もしなかつた。大杉は荒川と一緒につか〳〵と座敷へ上つて、私が出て行つて見たら、座敷で疊に肘をついたまま横になつてゐた。そのこ　私が飼つてゐた三疋の猫を、大杉はいつまでもからかつて樂しんでゐた。大杉は一時間ばかりゐたと思ふが、私たちは犬の話と猫の話とをしたぐらゐなことより覺えてゐない。話の好きな男であることもそれから動物が非常に好きであることも、兼ねて荒川から聞いてゐたが、その噂のとほりで、溫みのある快活な話しぶりで、よく笑ふ男だつた。私は大杉のなかに思想家を認めるよりも第一に好もしい隣人を見たのである。

その以後、四月ほどの間に私は大杉を三回訪ねたことを思ひ出す。最初の時には荒川と二人であつた。今考へてみると、大杉といふ男は相手に向つて話題を尊重する男であつた。——と言ふ意味は、こちらから水を向けない限りは決して自分の主張などは述べないのだ。文筆の上では熱心な宣傳者でありながら面と向つてはそれを相手かまはず說べたてるといふ流儀ではなかつた。或る人から聞くと、全く違つた立場から彼に反對する意見ゝ述べても大杉は笑つて相手にしなかつたさうである。私は、大杉の主張に就いては別に大杉の說を聞き出さうとしたこともなければ、また反對說を持ち出して見たこともなかつた。尤も、そんな機會もあんまりなかつたせいでもある。ともかくも私は大杉が無政府主義者らしい主張を眞向からするのを聞いたことは一度もない。強いて、さういふ場合を求めて見たら、多分、私が荒川と二人で彼を訪ねたその時であつたと言へないこともないであらう。それは荒川がそんな話を持ちかけたから、同志

としての、また後輩としての荒川に聞かせたのである。私は默つて傍で聞いてゐた。何でも社會主義者や無政府主義者的の小說家のことであつた。大杉は先づ彼の當時の無二の友荒畑寒村の小說を推賞した。それからドレフユウ大尉事件で斜俗と戰かつたエミイル・ゾラのことや、アナトオル・フランスの名も出た。私はウヰリヤム・モリスのことを尋ねたら、彼はその烏有鄉消息（ニユース・フロム・ノーホエア）を大變好きだと言つた。「美しい」と彼は言つた——美しいといふ言葉を確かに使つたのを覺えてゐる「僕はあの本を昔から何べんも讀んだ。書いてあることはつまらないさ——だが、美しい。英語でも讀んだし、佛蘭西譯でも讀んだ。獨逸語を覺えた時にも讀んだ。——新らしい語學をやり出すときつとあの本を見たものだ。あれをよむといい氣持がするので……」

それから大杉はつひこの間讀んだといふ或るフランス作家の長篇小說の筋を述べた——何といふ人の何といふ作であつたか、私はどうしても思ひ出せない。ひよつとするとその時からあまり耳に留めてなかつたかも知れない。しかしそのテーマだけは今もよく覺えてゐる——善良で溫和で強壯な田舍の若者が入營して軍隊の教練をうけて、軍曹か何かになつて村へ歸つてくる。いつの間にか非常に狂暴な奴になつてしまつてゐてさまざまな行爲で平和な村を荒す。——と、いふやうないかにも傾向的なテーマであつた。荒川はそのテーマをひどく痛快がつてゐたやうだ。私はそれほど感じはしなかつたが、そんなら何故それを覺えてゐるかといふのに、意味は全く別だけれど、私もひとり、軍隊から歸つてから困つた人間になつた男をその頃知つてゐた。その男といふのは入營して朝鮮へ派遣されたのだが、田舍育ちとしては良家の子弟で讀み書きも出來るし文章も書ける。それで朝鮮にゐる間、仲間たちに宛てて故鄕から來るさまざまな手紙の返事を代書させられる。なかには妻からのもあるが、大ていは情婦からの艶書の返事なのだ。それを代筆してやりながらそんな相手のない自分をつまらなく思つて、除隊になつたら自分もそんなことをしたいと思つたのが初まりで、たうとう手にをへない放蕩兒になつて、詐僞のやうなことまでしさうになつた男を私は知つて居たのだ。そんな事實に關連して、今は作者も題名も忘れたに係らず、そのテーマだけは頭に殘つてゐるのである。

其フランス小說の話題から自然に轉化したのであつたらう、大杉はたしか自分の幼年學校時代のことは手短く話した。それから學校をやめられて歸國すると、親父は頑固だし田舍は退屈だし、どうかして東京へ遊學したいと考へたが親父は怒つてゐて出してくれない。大杉は一計を案じ出して、そのころ父の家

に預つてゐた親類の娘の部屋へ毎晩夜中に通ふやうなそぶりをした。わざとみしり〳〵足おとをさせて父が眼をさますやうにやるのだ。親父さんがとうとう心配し出して大杉を東京へ出すことにした――そんなことを、大杉から聞いて、一同で笑つたのも確かこの時であつた。私たちはその日二時間ぐらゐは大杉の家で遊んだと思ふ。大杉はやつぱり初めからしまひまで、ごろつと横になつてゐた――物臭さうに肘枕をして。それから、大杉のうちには犬が一疋ゐた。近所の飼犬らしいのだが、たうとう大杉の家へ住み込んでしまつて動かないのださうで、それが泥足のままで座敷のなかへのこのこと上り込んだりしてゐたが、大杉は知らん顔をしておこりもしなかつた。

もう一度は、やはり荒川とそれにもう一人誰かと私とこの三人で、散歩に出た時だ。夏の終りだつたが、夕立が降り出した。ちやうど大杉の家の近所だつたのでかけ込んで行つた。夕方灯がともるころになつても雨はやまなかつた。この日は別に何も頭にのこるやうな話はなかつた。ただ大杉は私たちにかまはずに夕飯を食ひ出したが、彼は飯を食ふ時でもいつものやうに足を投げ出して肘をついて、半分起きてゐるやうに半分横はつてゐるやうな、言はば食卓に於ける羅馬人のやうな形で、我々の目には甚だ無作法な様子で食事をしてゐた。食卓のことはよく覺えないが、何でもあまり御馳走ではなかつたかと思ふ――大杉は當時、金まはりがよくなかつたのだらう。雨が止んだから私たちは直ぐ歸つた。大杉も一緒に出て、どこかへ用があるとかで道ばたで別れた。

三度目に大杉のところへ行つたのは、加藤朝鳥と一緒だつた。當時、加藤朝鳥も亦その家庭を大久保に持つてゐた。さうして大杉の家へはごく近かつた。その時、加藤朝鳥は「日本の小説などももつと社會的意識に覺醒させなけやいけないだらう。大杉君どう思ふ」といふやうな質問を大杉にした。大杉はどうしてだかその質問には頭から相手にならなかつた「そんなことはどつちだつていいさ」とすげなく言ひすてた様子には、今までの大杉に似げなく無愛想なものがあつた。一たいに大杉はその日不機嫌な模様だつた。加藤はさういふ考へを抱き初めて、またそれが大杉によつて賛同されることを豫想してゐたか知れない。實際、加藤の言ふやうな要求はあつてもよかつた。加藤だけではなく外にそんな呼聲があつたからである。私も亦、青二才なりに意見を持つてゐた。寧ろそれは異説であつたが。私は加藤に向つて大たい次のやうな説を述べた――『文學者が社會的意識を持つといふことは今更ながら望ましい事だ。しかしこれからの小説に向つてそれを直ちに求めるといふことは恐ら

くは不可能であらう。私は寧ろ、これからの小說に向つてもつと心理的に深いもの、主觀に情熱的なものを先づ要求しやうと思ふのだ。我々の文壇の現狀を見るのに、そこに新進作家として現はれる人は殆んど悉く二十五歲前後の人であり、活動の盛りとも見るべき人は大てい三十歲、三十五歲である。實に靑年の文壇ではないか。さうして彼等が皆小說家なのだ。この點が先づ外國の文壇とはよほど趣を異にしてゐる。外國では多分四十五十の新進小說家が澤山あるに違ひない。人間も四十五十になつてつぶさに世相を見てこそ社會的の觀察も正確になり、そこに集團的生活者としての人間をもはつきりと見ることも出來るに違ひない。才能の上には年齡はないやうなもののやはり年齡の相違を眼中に置かないではゐられない。それにまた我々の社會では文學をもつて身を立てやうといふのは――どこの社會でも或はさうかも知れないが――大ていはブルジョア社會出身の少年たちである。少年時代から世情慘苦を具に體驗しながら文學的覺醒をした人といふやうなのは、寧ろ異例とすべきである。して見れば普通の境界の靑年作家に出來ることは、先づ詩人的なロマンテイシズムの情熱か、でなければたつた一人の主人公を取扱つた心理的なものであるのが當然である。普通、靑年の心といふものは外面には向かないで內面的で、自己解剖に忙しいのが原則ではないか。靑年が社會意識を持つても要するにただ詩で、小說的に社會批評を能くするといふわけにはいくまい。自己批評ならば靑年も亦之をよくする。要するに私は今のところ寧ろ內面的な自己批評の心理小說を我國の小說に求めるので、ほんとうの社會批評とても銳い自己批評をして靑年時代を經過した人にのみ要求出來ると私は思ふから、社會的意識から生れるいい小說といふものは結局もう少し氣永く待たないでは、反つてつけ刄にすぎないだらう。――今の新進作家が四十五十になるまで。新らしく四十五十の新進作家が生れるまで……』――かういふのが大たい私の意見であつた。さうして餘事ながらこの意見は、二三の但し書きを書き加へさへすれば、今も尙私の意見として通用さしてもいい。それから、もう一つ注意したいことは、これらの意見のうちで、我と加藤とはブルヂョアとかプロレタリアとかいふ後年大流行になつたところの言葉を使つてゐたといふ一事である。これも大杉などを隣人に持つてゐたからであることは無論である。さて、私がそんな意見を述べて仕舞ふと、加藤は素直にも「なるほど、さういふ見方も亦一說だね」といふやうな言ひ方で、贊成してもいいやうな口ぶりであつた。で大杉はと言ふと？　大杉は、例によつて臥そべつたままで外方を向いてゐたが、私が私の說の最後の言

葉を言ふと同時に一言、「うむ」とだけ言つた。それは短い言葉だつたし、それに彼の表情も見えなかつたのであるが、どうもただ鼻であしらつた言葉のやうには、尠くとも私には聞えなかつた。さればと言つて、それがまた賛成したといふ意味のやうでもなかつた。ただ「お前の說は聞いてゐたよ」といふぐらゐの語勢の「うむ」であつたやうに私は聞いた。さうして、私は少しは力拔けがしたのである。この時、もし大杉が私の說に反對をしたとしたら、私は大杉と何か少しは言ひ合つてもいい位のつもりであつた。當時、私は理窟つぽい議論好きな少年だつたのだから。

當時、——或はもう少し後に、嘘か本當か知らないが、大杉はとこか官邊から佛文飜譯といふ名儀で金を貰つて、しかし仕事は別にしないでゐるのだ、といふやうなことを荒川か誰から聞いたことがある。

* * * * *

私はそんな三度か四度の會見で知るとの出來た大杉に就て、口さがなくも荒川に對して大杉を批評して言つた——

「君、大杉は大島紬を筒つぽに仕立てて着てゐるね。大島なら何も筒つぽでなくともよささうだが。一個の道樂だ——大杉の思想も大島紬の筒つぽぢやないかな？」

それは大杉といふ男はどこか貴族的な男だといふことと、多少の奇嬌癖がありさうだといふこととを言つたつもりであつた。私がそんなことを言つたことは、自分ではもう忘れてしまつてゐた。ところが、後になつてそれを思ひ出す或る機會があつた。それで私は今もその言葉を忘れないでゐる——。

大久保で前述のやうに四回ほど會つてから、大杉は間もなくどこかへ引越しをした。多分牛込の江戶川附近ではなかつたかと思ふ。私たちはまだ暫く大久保にゐて、荒川はもう私の家にはゐなかつたが、遊びに來ることは時々來た。大杉と神近市子との噂を荒川が珍らしげに傳へたのはその頃であつた。私たちも間もなくもつと不便な田舍の方へ引込まなければならなくなつてゐた。私たちがそれから一年ほどの後に再び東京へ來た時に、或る友人が私の家へ辻潤を引つぱつて遊びに來た。私は辻の名は兼ねて聞いてゐたが、彼に逢つたことはなかつたのだ。その頃、辻は伊藤野枝と別れてしまつた後であつたと見える。即ち野枝は辻から去つて大杉のところへ行つたその少し後らしかつた。辻を私に紹介した友人が、

「これが有名な辻潤だよ」と紹介すると、

辻は、よつぱらひの陰氣な奴のやうな口調で——

「これが天下の振られ男さ」と自分で洒脫に紹介し直したのを

覺えてゐる。大杉や野枝や辻の名が新聞でやかましかつた當時だつたのである。

　私が久しぶりで大杉に逢つたのは、やはりこのころであつた。野枝が大杉の傍にゐたのだから。その大杉を、私は本郷の菊富士ホテルへ二度たづねた。一度はやはり荒川と一緒だつた。冬の夕方であつた。荒川はこの宿屋の應接間を覗き込みながら呟いた――「尾行の奴が退屈してしやがらあー」。なるほどそこには二人の人がゐた。荒川はそれによつて大杉が在宅なのを知つたやうに、別に案内も乞はずに上つて行つた。たしか三階の階段のとつきの部屋であつた。私たちが部屋へ這入るのを見ると野枝は歡迎の言葉を言ひ乍ら席を譲るやうにちり寄つた。はつきりとは覺えないが野枝は針仕事か何かしてゐたやうな氣がする。その向ふに大杉がひとりで碁盤を前にして坐つてゐたが、私たちを一目見ると、私の方へ碁石を持つた手を差出してそれを盤の上へ打ち下す手つきをしながら、例のやうに吃つて言つた――

「やらう。」

　彼のこの態度は甚だ特色のあるものである。といふのは、考へても見たまへ、私と彼とは少くとも一年或は一年半以上も逢はなかつたのである。しかも大杉の私に對する樣子はまるで昨日も逢つた人間に對するもののやうにわだかまりがなかつた。その自然な調子につり込まれて私も、碁盤の前へ坐つたなり五目並べを三四へんやつた。大杉が上手とも格別下手とも覺えないところを見ると、きつと私同樣に下手だつたのであらう。私と大杉とがそんなことをやつてゐる間に、荒川は野枝と何かと話題に耽つてゐた。碁盤を押しのけると私たちもやがて、そつちの話題の方へ加つて行つたが、その時野枝は言つた――

「ね、大島の筒つぽでせう」

　これは誰に言つたのだつたか解らなかつた。私は自分に言はれたものとは思はなかつた。しかし、その言葉が出ると、おしやべりの荒川が何故か默つてしまふし、大杉も口を利かなかつた。それが何となくへんな具合だつた。その白けたといふほどでもない空虚を野枝は直ぐに察して、快活に笑つてのけてからまた何か別のことを言つた。野枝がさつき言つた時に、それが何を意味してゐたものやら私に一向通じなかつた――その筈だ。私がいつか荒川に向つて「大島紬の筒つぽ」といふ言葉で大杉を評したことを、私自身忘れてしまつてゐたのだから。荒川があの時、急に默つたのは告口がばれたやうな氣がしてまごついたのであらう。それにしても大杉のその時の態度を後に考へて見るのに、大杉は野枝が大して惡氣もなく私に向つて言

い出したことを輕くたしなめたやうな顏付であつたやうな氣がする。尠なくとも大杉はその私の批評を、即ち彼自身のすべての態度がまだ遊戲的衝動から大して遠くなかつたことを自ら省みて、私の批評をも默認したものと私は思ひ度い。ところが事實は大杉の着てゐたものは大島ではなく銘仙の大島柄だつたのださうだ。「着る人の人柄が違ふものだから銘仙でも大島に見られたりする」とそんなことをやはり野枝か誰かが冗談らしく書いてあつたのを見たやうに覺えてゐるが、さうだとすると「大島の筒つぽ」は氣になつたものと見える。

それはともかくも、その晩、大杉はひどく愉快さうに話をした。思想に就てではなく、重に彼自身の生活——身の上咄見たやうなことであつたが。私が今でも忘れないでゐるのはその獄中生活の斷片談であつた。大杉は後に「獄中記」といふものを書いてゐるから、きつと書かれてゐることと思ふが——私はその本は讀んではゐない。その晩、私が聞いたといふのは、次のやうな幾つかの斷片である——

獄中で彼は退屈のあまり、ガラス窓を一枚外すか何かして、それに光線をうまく鹽梅して鏡の作用をするやうな工夫を思ひついて、そこへ自分の顏を映し出す。さうして自分の長い髮を或は上へかき上げてみたり或は下へ撫で下してみたり、入獄の時意味もなく頑張つて斬らせなかつた髮がかうなるとなかなか役に立つた。しまひには口を曲げたり、目をほそくしたり、鼻をつり上げたり百面相をして遊ぶ。それがたいへん退屈をまぎらす。それで毎日そんなことをしてゐるとたうとう看守に見つかつたものと見える。ところが面白いことには看守が、多分女房の鏡臺からでも拾ひ出して來たのであらう、折れ櫛の半分とそれに鏡の破片とを、或る日こつそり入れて行つてくれたといふ話。それからまた、或る日どこかから櫻紅葉が一枚窓から舞ひこんで、それを手にとつて見て、その時、そんなありふれたものが何と珍らしくまた綺麗に思へたか——それ故、一日それを弄んで、次の日にも大事に仕舞つて置いたといふやうな話。それからまた、平日考へると性的禁慾といふことは非常に難しいことのやうに考へるが、あのやうな場所ではそれが一向難しいことではなく、寧ろあまり刺戟が無さすぎるので多少の不安をもつて刺戟的な行爲を試みたことがあるがそれさへも無駄だつた程だ。さういふわけだからそれ以來は色慾を去つた僧院生活者などには以前ほど感心しなくなつた。そこへ行くと色慾よりも強いものは案外食慾であるらしい。娑婆に居たところでろくなものも食ひはしないのだが、獄中で食ひ物のことを思ひ出すのは實に情けない程だ。時々、夢を見るのだ。それがまた

よく場末の路傍などに見かける駄菓子やなので、馬方などが車を休めながら、そこでお萩やらおこわ飯などを食ふやうな店があるだらう、夢に見るのはきつとあの店なので、あの店頭に並んでゐる大福餅だの素甘といふ奴だの鹿の子だの、或は飯つぶのくつついてゐるやうな餅だの、そいつが一面に陳列されてゐるところへ飛び込むのだ。そいつらが皆、自然のままの色彩で現はれるので、そこへ飛び込むが早いか、そこに並んでゐる種類をそれぞれ一つづつ皆食ふ。そんな夢を時々見たが、不思議なことには、その夢の翌日にはきつと下痢をする。……大杉はそんな話をあとへあとへ話し出した。簡潔にいかにも生き生きと描寫した。聞く方でも面白かつたが、語る方でも興に乘つてゐた。話のあひ間にはあの甲高な少し頓狂な短い笑聲がたえずつづいた。新らしく同棲するやうになつた野枝が傍にゐたので、大杉は樂しかつたに違ひない。

「いや、その外にもまだ、小說にでもするつもりならなか〳〵面白いことがあるよ——我々の仲間にはね」大杉は話に一段落をつけるやうに言つた「たとへば官憲の目を晦ますやうな事件など——秘密出版の證據煙滅などの活動でね。よく荒畑などとも話し合つたものだが——それをいざ書くとなると困ることには、相手にこつちの戰略の機密を敎へてやることになるので、それではあとの行動に差支へる。それで結局書きも出來ないが」さう言つた大杉は、その書きも出來ないといふ話は、また我々に語りもしなかつた。

話し込んで夜が更けた「こんなお客は尾行泣かせだな。どうれいよいよ歸らう」荒川が最後にさう言つて立ち上つた。大杉は無意味に大聲で笑つた。氣がついて見ると部屋は烟草のけむりで一ぱいであつた。さう言へば大杉も煙草は吸つたか知ら？どんな煙草だつたか知ら？ マドロスパイプを持つてゐやしなかつたか知ら？ どうもはつきり覺えない。冬の夜の十二時になつてゐた。來る時に玄關の脇の部屋にゐた二人の人はまだそこにゐて、居睡りをしてゐたらしい。その大杉の尾行にむかつて荒川は半ば揶揄するやうに大聲で呼び掛けた——

「やー　御苦勞さん」

「君」と私は下駄をはきながら荒川に囁いた「尾行といふものは一たい何時まで番をしてゐるのだい？」

「必要があればいつまででもさ。奴さんたち僕らが歸るのを待ちくたびれてゐたのだぜ——署へ歸つて、大杉はもう寝ましたとも報告は出來ずさ。この寒いのに——まつたく御苦勞様なことだよ」荒川はそんな事を言つた。

＊　＊　＊　＊　＊

そのうち荒川は滿洲の方へ落ちて行つてしまふし、私は誘はれもしないから大杉を訪ねることもなく、また噂も聞かなかつた。そのころ私は住む家が無くつて困つてゐたが考へた末に、ふと菊富士へでも下宿しようかと思ひついた。一たいそこに借りられる部屋があるか、いくら仕拂はなけゃならないか、ともかくもそれを知りたかつた。まだ大杉があそこにゐるか知らゐるやうなら大杉に聞いて貰はう、さう思つて私は菊富士へ出かけた。大杉はまだ――といつても、荒川と行つたあの晩から半年とは經つてゐなかつたが――やはりその家にゐた。私が自分の用件を述べると、大杉は「それぢやこの部屋へ來ちやどうだ。僕は金をきちんとやらない上に、ここのものは不味いなどと難くせをつけて自炊をしたり、我儘な上にだらしのない客は多いし、その外何かと面倒がられて一日も早く追放を命じられてゐるのだがね」そんなことを言つた。また「ここには西洋間もあるんだ。さうだ、西洋間を見るつもりで一つ、すじ向ふの印度人のところへ行つて見ようよ。女の話ばかりする面白い奴がゐるんだぜ。」そんなことも言つて、その印度人のところへ僕をつれて行つた。印度人といふのは青年で學生か何からしかつた。その印度人とまだよく話もしないうちに、そこへ別に客があつたので、私は再び大杉の部屋へかへつたが、大杉は今度は女中を呼んで僕の知りたい事を訪ねてくれたりした。私のそのころの狀態ぢやとてもそこへも住めさうにもなかつた。それはともかくも、大杉の部屋に少し尻をおちつけてゐるうちに、荒川の噂が出たり、文壇の噂が出たりした。――今から八年ぐらゐ以前のことだ。當時、新進作家と言はれる者が輩出してゐた。それらのうちに誰か氣に入つた人でもあるかどうか、私は大杉に尋ねて見た。大杉は只一口につまらないと言つたが、「武者小路だけはちよつと面白いよ――機會があつたら論じて見てもいいと思つてゐる」と言つた。志を得ないでゐた私は誰のことでも感心したくはなかつた。それで私は大杉に「だつて武者小路の人道主義は要するにセンチメンタリズムぢやないか」と言つた。その時の大杉の答を私は面白いものに思つて忘れないでゐる。大杉は答へた――

「さうさ。センチメンタリストだよ。まさしく。だけどすべての正義といひ人道といふものは皆センチメンタリズムだよ、その根抵は。そこに學理を建てても主張を置いても科學を据てへも決して覆へらない種類のセンチメンタリズムなのだよ。」

「佐藤さん。人の惡口などばかりおつしやらずに、あなたも早く何かなさいよ」野枝がそばから私にそんなことを言つたりした。

＊　＊　＊　＊　＊

その後、私はさまざまの意味で自分の生活が多忙になり、従つて暫く人と遠ざかつた。大杉などよりももつと親密な人の家にもあまり立寄らなくなつた。況んや、大杉の消息はただ事あるごとに新聞か何かで知る外には、全く杳として知らなかつた。

新聞で見た大杉の消息と言へば、大杉が神近市子に刺されたのはいつの時だつたらう。どうもはつきり覺えないが、あの後に私はひよくり道で大杉に出逢つた。たしか本郷の大學前の舗道でだつたと思ふ。

「や！」と私は立ちとまつた。彼も同じやうに立ちとまつた。

「例の傷はもういいのかい？」

「ああ、もうすつかり」彼はさう答へながら頭を少し私の方へ出して見せた。街燈のの光で思つた程でもない傷痕が見られた「何でもないのだ。ただどうも、この具合が悪いのさ」さう言つて彼は太い籐のステッキをさげてゐない方の手をもち上げて見せた。それから説明した「上げ下げが不自由なのだ。ペンを持つても工合が悪いね。慣れれば自然直ほるだらう」――たしかペンを持つてもと言つたと思ふから右の手だつたらうと思ふが、もし左の手だつたとすれば「机によりかかるのに」と言つたのだつたかも知れない。

この時の外にも、私は以前に町で彼に出會つた事があるが、冬だと大てい衣物の上へ洋服のオバアーコートを羽織つてゐたのを知つてゐる。尤もそれは近年のことではない。

＊　＊　＊　＊　＊

或る時、私は短い飜譯を思ひ立つた。その冒頭の一節が大たい次のやゝな意味であつた――

「私はその男の私に對する重ね重ねの仕打をずつとこらへて來た。――何日かは、どうしてもこの仇だけは返す覺悟なのだ。言はずと知れたことだが、私はそんなそぶりなどは見せはしない。だから以前のとほり奴の顔さへ見ればこつちでも笑つてつき合つてゐた。だつて存分に仇を返すには、下手人が世間へ知れたのぢや何にもならない。そのくせ相手には今仇を返してゐるのだぞといふことを存分に見せつけてやれないでは、これも亦何もならない」

どうも大ざつぱな意味はさうらしく讀めたのだが、語學に自信のない私は、ひとりでさう決めてしまふには少し心配だつた。さう考へてゐるところへ、ちやうど遊びに來たのは辻潤であつた。私はその原文を辻に見て貰つた。辻は私の言ふのを聞いて、

それから原文に見入つてから言つた――「さうぢやないか、そのとほりさ。何もわからない事はないよ。」辻はそれから念入りにそれを私のために逐字譯しながら「ね、さうだらう。解るではないか。僕にはよくわかるがね――おれの大杉に對する氣持はこれだ、そつくり。」

突然、辻がさう言つたので、それにその口調がいつもの辻の氣魄のない言葉つきではなかつたので、私は一瞬間、彼を見守つた。辻はすぐにそれを察したらしく、江戸つ子の敏感で苦笑をもつて前言を搔き消してしまつた。それにしても日頃にない辻のこの激語は私には不思議であつた。辻はいつも大杉の話が出ると彼をほめてゐた。野枝がつれて行つた辻の子供を大杉が異常に愛することや、それからその子供や或は辻の方に殘つてゐる兄の方の子供のことなどに就て野枝が辻を訪ねてくるやうな場合、たとひ大杉が一緒に來て一緒に雜談は交へても、重要さうな話になるときつと大杉はわざと座をさけるといふやうな事實をいくらか數へ上げて、大杉に對して寛大な友情を示すのが恒であつたのに、この日の辻はどうしても私には少しわかりにくかつた。ふと氣がついて見ると、大杉はつひ先日發行された雜誌「新小說」に「死灰の中から」といふ小說を發表してゐたのであるが、さうして私はそれをつひ讀まずにしまつたのであるが、其小說のなかには大杉自身のこと野枝のこと辻のことが書かれてあつたに違ひない。それが辻の忘れてゐた氣持を再び呼び醒したのであらう。或はその小說のなかで、辻があまりつまらない役割をふり當てられてゐたのであつたかも知れない。――尠くとも、辻にとつてはさう感じられたに違ひない。さうして偶然に一場の激情を私に洩したのであらう。察するに難くない事である。

（この一節は直接には大杉のことではなかつたけれど思ひ出したから書いて置く。辻はつまらないところへ引合ひに出されたわけだが、友達甲斐に勘辨してもらひたい。それにしても大杉と野枝とは辻のところへ見舞ひに行つたかへりにつかまへられたといふのだから、この際、辻はきつと複雜な友愛で萬感交々であらうと推測する。）

＊　＊　＊　＊

日比谷の、今度燒けてしまつた一角に陶々亭といふ支那料理の旗亭があつた。ともかくも都下第一の酒樓であつた。私は時折その店で夕飯を食ふことがあつたが、そこの廊下で二度か三度、大杉と擦れ違つたことがある。いつも大杉は歸りがけだつたし、私は這入つて行くところだつたので默禮を交しただけだつた。いつでも野枝があとに從つてゐた。

* * * * *

一昨年の冬、十一月末であつたらう。私は長篇小説を書き惱んで鵠沼の東家にゐた。或る日、宿の女中から大杉が來宿したといふことを聞いた。大杉は兼ねてその家とは馴染があつたとみえて女中は、大杉のことを親しさうに噂した。私はちようど話相手もなくて屈托してゐた折からであつたから、急ぎの仕事を持つて來た大杉だとは聞いたが、食後の十分ほどを話さうと思つて、敎へられた部屋へ行つてみた。大杉は雜誌「改造」のために「自叙傳」の續稿を書きに來たといふので三四日のうちに百枚か八十枚書かなきやならないと言つた。「しかしどうせひとりでゐても未だ書かないのだから、」と私を引きとめた。最近大杉がチフスに罹つて瀕死を傳へられて以來逢はなかつたのだから、その病氣のことなどを話し合ひ、大杉は「恢復後は以前よりも健康になつた。醫者に聞くと肺病などは癒つてしまつたさうだ——尤も、この冬を越して、そのうちに風邪の二三べんもひけばもとの通りになるだらうといふのだから世話はないがハ、ハ、ハ」と笑つた。

「時に」と大杉は言つた「君聞いた？　原敬が殺されたつてね」

「へ？　いつ？」

「いや、僕も今のさつき停車場で聞いただけだがね。本當ださうだ。今朝だらう。詳しいことを知らうと思つて、今も尾行に賴んで藤澤まで行つて貰つたのだ。朝のことならもう號外でも藤澤へ來てゐるだらう。」

私は自分の部屋へ歸つて藤椅子に倚りかかつて日向ぼつこしてゐた。大杉が這入つて來た。さつき私が大杉の部屋へ行つてから二時間ばかりの後だ。大杉は手に一枚の號外を持つてゐた。

「これだよ」

彼はさう言ひながらそつと號外を私に差し出した。私がそれを讀み了つた時に、今まで私のわきに立つたままやはりその號外の上に目を曝してゐたらしい大杉はひとり言のやうな口調で言つた——

「やつたのは子供なのだね」

大杉がその時言つたことはそれだけである。ここで注意して置きたいのは、大杉はこの出來事に就て、「痛快だ」とか「面白い」だとかそんな淺薄な不謹愼な言葉はもとより、その外のどんな批評めいた言葉をも言はなかつた事實である。ただ、何と思つたのか三分ほど沈默してゐた。私がもしこの際、事實に就て今これほど潔癖ではなく多少の文學的修辭を出すなら、ただ沈默したとだけではなく、憂色を帶びてと言つてもいいと思

ふくらゐだ。その注意すべき沈默の後で大杉は急に話題を轉ずるもののやうに輕く言つた――

「君は、僕の恩惠に浴してゐるぢやないか」

――それが何の意味かわからない私に、大杉は私の腰を下してゐる籐椅子をたたきながら說明した「これは君、もと別の部屋についてゐたのだぜ。そいつを、僕がこの前この部屋へ來た時こつそり盜み出して來たのさ」

そこで私たちは笑つて椽側から部屋へ這入つた――私は腰をかけてゐたのに、大杉は立つてゐたのだから。部屋へ這入つて二人對座すると私が言つた。

「どうだ。書けた？」

「いや、何にもしやしない。」

「自分のことを書くのはむづかしいだらうね。どんな點がむづかしい？」

「何でもない事だがね、なるべく噓を少くしようと思ふからね。ところで書くだけの事が本當でも、書くべき事を書かないでしまつたのではやはり噓になる。それだけが噓ぢやない――折角書いた本當までそのためにみんな噓になる。ところが、事實といふものは何事でもこんがらがつてゐるから、それを一つ一つ辿つてゐると、どこからどこまでを書く可きかその判斷と撰擇とが厄介なのだ」

「成程」と私は半ば贊成した「だが結局はさう神經質ぢやなく、思つただけのことを平氣に書きなぐるより法はあるまいね。それで他人を傷けたら、同時にそれ以上書いた當人が淺ましさを曝露するのだから。何にしても人間、自分以上のことは出來つこはないのだから」

そんな話題になつて、「セント・オウガスチンもジヤンジツク・ルツソーも結局本當の告白はしなかつたのだ」といふアナトオル・フランスの言葉やら、その代りに問はず語りといふこともあるとか、それから或る長篇小說――それはその中に大杉榮や伊藤野枝や辻潤や、さては荒川義英や江連沙村などをも取材にして、就中、佐藤春夫的人物を主人公にしたのだと作者が吹聽した或る小說の噂なども出た。大杉はその作者のことを一言だけ言つた――「何にしても、あの男（その作者）が、今はどんなにえらいか知らないが、當時のあの男が何も荒川や江連を晒ふ資格のあつた人物とも思へないぢやないか。」荒川の噂が出た。私は前に述べた小說「別れ際」のことを言ひ出して、「あれは傑作だ。僕は彼の生前あの作を讀んでゐたら、もつと荒川に敬意を表したのだがな。遺稿になつて初めて見た。時にあの話は、どれぐらゐ本當なのだい――何か荒川にあんな戀愛の噂もあつ

たやうだつたが」私は昔のことを追想して大杉に尋ねた。大杉は答へた「どれぐらゐ本當も何もないさ。みんな荒川の出鱈目だ。荒川といふのは妙な奴だつたね。あいつは女さへ見れば、其女と何かわけがありさうなことを自分で匂はして歩くのだ。さうしては自分で夢中になるのさ。あいつは全く生れながらの小說家だつたね——その點。」「實際、書いたものも甘かつたよ——今讀みかへして見ると。僕はあんまりあいつを知りすぎてゐて當時は感心出來なかつたのだらう。」そんなふうに我々共通の友人である死んだ荒川のことを語つた。何かの機みで大杉は小說といふものが近頃實に讀んでつまらなく退屈なものになつたと言ひ出した。その代りに自然科學の書物などを見ると、以前小說の好きな頃に小說を見て覺えたのと全く同じ種類でそれ以上の面白さを感ずるといふのである。

「うむ。就中、僕の小說などは君にとつて最も退屈だらうな。第一讀んでくれた事があるかい？」

「讀んだことはあるよ。君のなどはさう退屈ぢやない方だ。」

私は冗談のつもりで言つたのに、大杉は案外眞面目な返答だつたので私は少しテレてしまつた。

「それぢや一たいどんな小說が最も退屈なのだい。」

「それがね。本當の話、所謂左傾した作家といふ連中のが一番退屈だよ。第一、まああの仲間はどうしてああまづいのだらうな——（ここで三四の作家の名を擧げて）まるでまづいのばかりが左傾したやうなものぢやないか。ハ、ハ、ハ」大杉が數へた作家といふのは、新らしい名ではなかつた。既成作家的の左傾じたものであつた。所謂新興藝術なるものに彼は一顧をも拂つてゐなかつたやうである。

忙しいと言ひながら大杉は、そんなふうに僕のところで話し込んだが、次の日の晩にも亦遊びに來た。二時間ばかりもゐて雜談に耽つたが、その時私はふと思ひ出して、世上で取沙汰をしてゐる堺利彥の婿擇びのこと——といふのは、堺は娘が年ごろになつてその婿の適任者に煩惱してゐる。所謂危險人物視される同志で、況んやそれが素寒貧書生では一層困るし、さればと言つて堺ともある者がまさか平生ブルジョオアと侮辱してゐる手合を婿にするわけにも行かず、このところ堺はよほど困つてなるべくは手ごろな學士か何かで學者風の同志などとうまいところへ目をつけてゐる——といふやうな、井戶端會議的な陰口が根も葉もないことかどうかを、私は大杉に聞いて見たものである。「さあ、僕もよくは知らないが」と大杉は答へた「そんなことも無いとは限らないね。だが、若い奴は氣が利いてゐるよ。娘の方でどんどん自覺して今に何んでも好きな事をするだ

らうよ」そこで例のやうに笑つた。話はそんなことに關聯して私が更に質問して見たのは、所謂社會主義的思想家が過激な實行運動を空想する時に、妻子を思ふと志が鈍る事が全くないだらうかどうか、といふやうなことであつた。それに對して大杉の答へたことは面白かつた。彼が言ふには、「妻のことはともかくも、子供のことには隨分心を惱す。早い話が、收監された時にでも、外のことは何でもないが、夕方などに一度自分の家庭のことを思つてみて、今ごろ何をしてゐるだらうと考へてふと子供の樣子などがありありと目に浮んでくるともういけない。涙が出て女々しいと自分をたしなめて見てもなかなか涙がとまるものではない。そこへ行くと妻の方は何でもない。がそれでも、監獄ではやはりよく、家に殘して來た女のことを考へてをかしい事には、その女が出入の青年などとふざけてゐるやうなことなどを殆んど如實に夢に見る。さうして其次の日には一日考へ込ませられる。それが僕一人の經驗ではない。ああいふ不自然な生活が人の心を荒ませる方法は一つだと見えて、仲間が落合つた時に話し合つて見ると誰も彼もそんな同じやうな夢を見てゐるのだ。だから、僕などは後になつて監房でそんな夢を見ると、また例のが初まつたな位に笑つてしまへるやうになつたが、獄中生活の經驗が淺くてそれで神經質な人間などはをかしくもあるし氣の毒でもある。この間も收監中の或る男(一杉はその人の名を言はなかつたが)の細君が飛び込んで來て訴へるのだが聞いて見ると例のだ。今日夫に面會に行くと夫は非常に立腹してゐて、お前のやうな不都合な奴はもうどうでも勝手にするがいい。顏も見たくはない。歸れと叱鳴つたきり、理由を聞いても、自分の胸に聞けと言つたが、一たいどうしたといふのか全くわからない。どうしたらいいだらう。さう言つてその細君ひどく困つて泣きさうにしてゐるので、よく牢屋のなかで起る例の心理を説明して、何でもない事だからすぐ直るといつてなだめて歸した。このとほり程度の差こそあるのだが皆そんなことには苦しめられるのだ――それが平生はそれぞれそんな點に就て全く信じ合つてもゐるし、また自由な考をも持つてゐる人間なのだから、滑稽でも悲慘でもある。僕は」と大杉は言ひつづけた「もう女の方は卒業したが、子供だよ心配なのは。子供といふものは全く可愛いい。だから、さつきの堺の話だても、僕が堺だつても、子供が一人前の娘になるころには、おやぢだつて年も取るだらうし、氣が弱くなつて、娘の婿などで若い奴らに笑はれないとも限らないね」そこで大杉はまた例のやうに笑つた。何しろよく笑ふ男であつた。全くからりとした何の底意味もないいい笑であつた。

たしか去年の今ごろであつたらう。夕方、銀座を歩いてゐると、おもちや屋からひよくりとひとりの男が出て來た。向ふから聲をかけた。見ると大杉で、長女魔の子の手を引いてゐた。大杉は「急に銀座を散歩したくなつて、今出て來たところだ」と一言言つて、私たちは擦れちがつた。あのころは葉山に住んでゐたのであらう。

* * * * *

つひこの間、さう八月の十日から十五日までの間の或る日、私は大森から日夏耿之介堀口大學の兩人と一緒に銀座へ出て來て、そこで一二の用件を足して、ひどく渇いたから何か飲み物をと思つて、尾張町に近い清新軒へ入らうとした。その家からヘルメツトに白い洋服の男が洋裝の女兒の手を引いて出て來た。大杉だつた、新聞で大杉がフランスへ脱出したりフランスから歸つたりしたことは知つてゐたが、また歡迎會といふやうなものの招待狀もあつたが私は、出席しなかつた、そのせいであらう。私には大杉がいつもより珍しかつた。

「や！」と私は呼びかけた。彼は生き生きした血色であつた。私は言つた「ひどく顏色がよくなつた。よく肥つた。若くなつたね」「うん、健康はいい」

「どこにゐるの——やつぱり鎌……いや、西巣鴨とか、新聞で見たが……」

「いや、四五日前越した。柏木だ」

私たちは輕く頭を下げ合つて別々の方向へ歩き出した。

「君が大杉を知つてゐるのは妙だね」と日夏耿之介が清新軒の卓上で言つた。

「うん」と私は答へた「僕は十年ほど前から大杉とは口を利く間柄だよ」

大杉は殺された時、白いリネンの背廣服だつたと新聞に書いてあつた。私が最後に逢つた時に見かけたあの同じ服裝であつたのであらう……。

バラック生活者を觀て

デッサンの東京

徳田秋聲

私のところへ來る懇意な醫家の說に、東京市で建てたバラックなるものは、どの方向から見てもづゐぶん不衞生的なもので、震災當時の季節の感じからほんの一時の間にあはせの罹災者收容所として作つたに過ぎないのは仕方がないが、切めてもう一月も我慢して、永久貧しいもの丶ために使へるやうなものを、或る場所を擇んで作つたら可かつたらうといふことを言つてゐた。それには差當り燒けないお寺や校舍もあり、郊外山の手の住宅は殆んど全部燒けないのだから、事情の許すかぎり、一時そこへ罹災者を割當て丶收容しておいても、一月や二月はどうにか過せるから、さうしておいてから、や丶完全なバラックを長く役に立つやうな特定の場所に建てた方が、經濟から言つても助かつたであらうといふのである。私にもそれは頷ける。これは餘談だけれど、今度のことは東京市（東京だけに就いて言ふ）全體の負擔すべき災難でもあり損害でもあつて、燒殘つたもので、餘裕のあるものが、住宅の幾分を提供することは勿論（大抵は提供してゐるであらうが、まだ餘地は澤山ある）財產といふほどのものをもつてゐる人は競つて金品を提供して、罹災者を救ふと同時に、都市の復興に資すべきだと思ふ。東京市を愛する市民ならば無論さうあるべきで、實際その點では地方民の方が熱心な救濟者でもあり、金品をも多く出してゐる。愛市觀念の强かるべきと同時に、自治精神に富んでゐなければならぬ筈の東京市民の方が反つて冷淡ではないかと思

ふ。助かつたものが助かつたことを悦ぶのは當然だが、それを有難がりもしないうへに、慾ばかり渇かしてゐるのも餘り大市民の名譽ではない。急造バラックを建てる前に、燒けない住宅や寺院や校舍などを提供して、罹災者を收容することも、市民の公徳とすれば、大急ぎでそんな不完全なバラックなど、場所かまはず建てなくともよかつたではないかと思ふ。

さうは言つても出來たものは今更仕方がない。應急手當として差當り我慢するより外ない。一方食糧の配給なぞは可也ルーズでだふ／＼してゐる、慣ひの取れないこともない。餘計な冒頭が少し長くなつたが、この際バラック視察を書いてくれと言はれたので、私は或る夕方上野の方面へぶら／＼出て見た。市のバラックは日比谷のも見たが、不忍の池を押取卷いて、閃形に建連ねたバラックの長屋は、前者から見るとやゝ粗雑かと思はれるが、見たところ床なぞもさう低くはなく、トタンの腰障子なぞもあつて、隙間だらけではあるけれど、近接してゐるので、さう寒くはないかも知れない。しかし何と言つても夏場……むしろ初秋時分の氣分で、決して冬向きではない。

私は向ひ合つて二列に並んだ、バラック長屋の道路へ入つてみた。色々の家庭がある。子供たちと一緒に飯を食つてゐる夫婦がある。酒を飲んでゐる人達もある。タバコだとか、八百屋などの店を出してゐるところもあれば、共同水道口では、米をといでゐるもの、茶碗や何かを洗つてゐるもの、働きから歸つて來て、顏や躰を拭いてゐるもの、中には海暗い穴倉のやうな中に、もう寢てゐるものもある。しかし本所なんかの場末にあつた貧民窟のことを思へば、好い人種もゐるからだらうが、さう汚くもないし、感じがわるくない。そして歩いてゐるうちに、もう少し設備を何うかすれば、かういふ風にしてみんなが暮すのも愉快だと思つた。共產主義の實現される世界は何ういふ形になるのか知らないが、昔しレカルガスが布いた社會制度などは、人間の虚榮と私慾とを根本的に掩り去つてしまつたので、同じ着物に同じ食べものを食べてゐたのだから、隨分安易なものであつたらうと思ふが、その安易が生活の怠屈となり、安逸となり、後に却つてその市民を滅したことは別問題として、私のやうな怠けものには、とにかく惡くはない。こゝにいふ怠けものといふのは、單に働くとか働かないとかの問題ではないので、氣持を樂に暮すことなどである。不幸であつた大杉榮氏はいつか鵠沼の旅館で、私の部屋へ來て、私が相變らずへたくそに勞作してゐるのを憐れむやうに、今に三時間も書けば、樂に暮せる時代が來るよと言つたが、小說を書くのはとにかく、一般に働くといふことは恐らく人間の本能であつて、私

などは時々鍬なぞもつて土を堀りたくなる。もし耕すべき少しばかりの土地があるならば、朝のうち三時間ばかり適宜な勞働をするのは、どんなに愉快だらうと、土地をもつてゐる人を羨ましく思ふのであるが、バラック長屋も、ちよつと私を誘惑するだけのことはあつたのである。たゞ共同のくさいのには縮いたし、雨や寒さには今少し手をかける必要がある。

と言つても、バラックは別にさう珍らしいものではない。市のバラックは少しひどいにしても、一箇人のたてた町のバラックは、やはり我々日本人の住宅そのもので、中以下の我々の陋屋はバラックに毛の生えたやうなものである。たとへば少しばかり手をかけて、數寄をこらしたとか何とかいはれるお茶趣味のものなどは、バラックのやゝレファインされたものと言つても差支へないので、都會式のちよつとした美味いものやだとか、氣のきいた待合だとかいふやうなものは、やはりバラック趣味のうちである。

私は薄暗い池の畔のバラック町をぬけて、觀月橋を渡つた。月影が水分の多い空から差して、高臺に精養軒の明りが見られるほかは、右の方は一體にびしやんこに夷がれた平面の都會で、軒をならべて以前は聳えたつてゐた建物もなければ、廣告塔なぞも見えない。電車のレールを横截つて、上の方へあがると、その邊から哀れな大道飲食店が立並んで、燒鳥とか、牛どんとか、天麩羅とかおでんとか、型とほりの食物で客を呼んでゐる。これは何處も同じだが、ずつとおりて三橋から池の方へ出ると、「揚出し」がバラックで食堂を開いてゐるのが、ちよつと目についた。勿論お粗末はお粗末だけれど、竹などを植ゑて、いくらか風情をそへてゐる。それに揚出しと云ふ感じが尤もよく出てゐるのも不思議で、何のことはない由來の遠い「揚出し」その物の模型―もつと痛切にいへばデッサンである。ずつと以前三橋の他の側の、少し入つたところに「忍川」といふ豆腐料理屋があつた。母屋で足りなくて、よし簀かけに青竹の手摺の張出しなぞがあつて、夏は遊見の客、冬は朝歸りの客を呼んでゐた。それがバラック趣味であつたのは言ふまでもない。そしてそれが安價な江戸趣味であつたことも無論である。東京の下級な飲食店には、その日本趣味であると西洋趣味であるとに論なく、バラック風のものが多かつたので、ずつと上等のものにもあつた代りに、ずゐぶん小汚いのが多かつた。特に日本趣味的文化は、がさつな關東は迚も關西には及ばなかつたやうである。もしも是が京都か大阪だつたら、まさかに上野や日比谷にあるやうな遣つてつけの大道飲食店が簇生しなかつたゞらうと思ふ。勿論關西にも鼻持のならぬ多くの俗惡な趣味があるには違ひないが、

生活樣式に現はれた同じ野趣でも、關東のやうに荒くはない。

廣小路へ出ると、バラック建の假建築が、もうそれからそれへと立ちはじめてゐる。中には本建築らしい、木口のしつかりした、壁なども塗られた二階家なぞがあつて、立前の祝ひお酒を飲んだりしてゐる。舊の形と寸分ちがはぬやうな店も出來かゝつてゐて、記憶力の薄い私などには、震火災以前とさう大して違つてはゐないやうな氣がする。交叉點の一角にある何とか云ふ一品料理などは、原型そのまゝに出來あがつてゐた。そして寂しいには寂しいが、廣小路から切通しまでは、とにかく屋並が續いてゐて、町が平面的なかはりに、廣々してゐる。これで松の並木でもあつたら、そして電車や自働車のかはりに、馬士や駕籠が通つたら、やゝ江戸の面影に近いものだらうと想像された。

私は砂塵に辟易して、眞暗な男坂の方から、湯島天神の境内へ入つた。そしてそこから、哀れに姿のかはつた町を見わたした。村邑のそれとはまた違つた、間のぬけた廣い野原に、ところ〴〵灯がちら〳〵してゐる。それでも何かしら都會らしいどよみがしてゐる。大東京の脈搏が微かに響いて來る。あの睨みの深い東京を失つたことは、寂しいには違ひないが、再建の東京が、何んな風に出現するかゞ待遠しい。バラック趣味は、迚も新東京には望まれないだらうし、又脈味な江戸趣味なぞは一切棄てゝほしいが、しかし事務一點張りなアメリカ趣味も感心しない。それは徒らに西洋の向ふを張ることばかりに力瘤を入れたものでなしに、尤もよく我々の實際生活と吻合した實用的都市であつてほしい。しかし私の想像によれば、それもやはり東京の人心が區々であると同じに、名々思ひ〳〵のものであることは、舊東京程度を出ないもので、大部分はバラックからバラックへの向上でありさうに思へる。東京は今そのデッサンを作りつゝあるに過ぎないやうに想像される。模倣より外に大した能のない日本人のことだから、西洋にお手本のないかぎり、別にさう異つたものゝ出來る氣遣ひもないのである。今は浪花節や講談趣味の時代で、非藝術的な須田町の廣瀨中佐や上野の西鄕さんの銅像なども、ちよつと相應はしいやうに思へるが、新東京にだつて、やはり居すわることになるに違ひない。帝劇があの土臺を使ふことになれば、澁澤大倉兩老の肖像も、取除けられはしないだらう。(十月十九日夜)

バラック居住者への言葉

豐島與志雄

バラックに住む人々よ、諸君は、バラックの生活によつて、云ひ換へれば、僅かに雨露を凌ぐに足るだけの住居と、飢渇を滿すに足るだけの食物と、荒涼たる周圍の灰燼と、殆んど着のみ着のまゝの自分自身と、其他あらゆる悲慘とによつて、初めて人間の生活といふものを、本當に知つたに――感じたに違ひない。

普通の生活に於ては、諸君の大部分は、生活といふものをしみじみと味ふことが、可なり少なかつたことであらう。金錢や名譽は勿論、其他のいろんな事柄が、諸君の面前に、餘りにまざまざと揭げられてゐたために、自分の生活を本當に感じ味ふだけの餘裕が、諸君には可なり缺けてゐたことであらう。所が此度の災禍によつて、諸君の眼を惹きつけてゐたそれら外的の旗幟が、一度に消し飛ばされて、もはや眼を遮るものは何もなくなり、そして諸君の眼はぢかに、己の生活の上に据えられたことであらう

そして諸君は、其處に何を見て取つたか。

その一つは、家庭といふものだつたに違ひない。

家庭――この言葉を吾々は平素餘り無責任に取扱ひすぎてゐた。然しながら、今や諸君の眼には、新らしい光に輝らし出された家庭といふものが、本當に映つてきたことであらう。同じ家に幾人かの人間が一緒に暮してゐる、といふただそれだけのものではない。良人と妻と親と子、心と肉體との通ひ合つた者共が、一つの生活――一つの生活といふことが大切なのだ――の中に結び合はされてゐる、さういふ家庭なのである。それは全體で一つのものをなしてゐる。その中から誰か一人を取去ることは、一人の人間の身體からどの部分かを取去ることゝ、殆んど同じであらねばならぬ。家庭全體として、その部分に傷と痛みとを感じ、その部分から血を流すのである。

さういふ家庭が、バラックの生活に於て、諸君の眼に本當に映つたことであらう。平常の生活に於ては、良人は家庭外の仕

事のために、妻は家政の煩はしさのために、子は自由勝手な嬉戯のために、別々の方へ心を向けがちだつたであらうが、バラックの狭苦しい板圍ひの中で、ランプの薄暗い光の下で、乏しい食膳のまはりに集つて、皆で顔を見合せる時、云ひ知れぬ家庭的感激が、諸君の眼を濕ませなかつたであらうか。

古の各家庭には、また現代でも粗朴な各家庭には、大抵一の神棚があつて、そこに家庭の神が祭られてるのを常とする。神といふものは、人間の理想の具體化であると共に、人間の氣高い感情の象徴である。家庭の神――それが本當の家庭の心である。バラックに住む諸君は、家庭の神に跪拜するの心地を、味ひ得たことであらう。

家庭を愛するの心は、他の博い愛の基をなすものである。神に奉仕せんがために己の家庭を捨てる、さういふ生活様式も世にあることを、私は否定するものではない。然しながら、吾々及び諸君の生活様式では、家庭を捨てることは、他のあらゆる愛を捨てることになる。自分の家族よりもより多く隣人を愛するといふ者を、私は信ずることが出來ない。より多く自分の家庭を愛する者こそ、より多く隣人を愛するものである。愛といふ言葉の誤解を防がんがために、これを云ひ換へれば、自分の家庭のことを本當によく考へる者こそ、隣人のことを本當によく考へる者である。

バラックの諸君よ、家庭といふものを本當によく感じ味ひ考へ給へ。

それから、諸君の眼に映じた第二のものは、仕事といふものだつたに違ひない。

住宅や家財や業務の便宜などを失つて、バラック内に茫然としてゐる諸君の心に、先づ猛然と起つてきたものは、何かを爲したいといふ心、何かを爲さずにはゐられないといふ心、即ち、働く意志だつたであらう。この働くといふことは、必ずしも食を得るといふ功利的のものではなくて、もつと深い直接の要求だつたに違ひない。

人は命を繋ぐためには、食を攝らなければならないことは勿論である。然しながら、食を攝つて命を繋ぐといふことは、何の問題にもならない。地震當時に食物を手に入れることが、罹災者の第一の要求だつたには相違なからうけれど、それはあゝいふ場合の一時の現象で、生きてゆく上の――生活の主要な問題ではない。吾々が空氣と食物とで命を繋いでるといふことは、吾々が地球上に住んでるといふことゝ同様に、單なる事實である。大地が吾々に必要だといふことが、吾々の生活に於て問題でない如く、空氣と食物とが吾々に必要だといふことは、

吾々の生活に於て問題ではない。それは根本の原則ではあるけれど、それを考へたとて何にもならない。たゞ知つてさへをればよいのである。

生命を繋ぐといふことゝ、生きてゆくといふことゝは、理論的に押しつむれば同じでも、實際の相は異つてゐる。生きるといふことのうちには、必然に或る働きが含まれてゐ、或る動きが籠つてゐる。この働き——動きこそ、吾々が足を止めて眺めなければならない事柄である。そしてこの動きは、吾々の生活に於ては、何かを爲すといふことになつて現はれる。

バラックの諸君は、もし永久に衣食の配給を受くるとしたならば、稼ぐ必要がないからよいと云つてそれに甘んじ得られるであらうか。諸君は必ず否と答へるに違ひない。そしてその答へは、他人の——國民の——國家の——世話になるのを潔しとしない、高邁な念からばかりでなしに、もつと深い而も直接の本能から出て來るに違ひない。生きることは、何かを爲すことだ、何等かの仕事をすることだ、といふ生活本能から、それは出て來るに違ひない。

刑務所に幽閉されてる囚人の告白を、私は間接に聞いたことがある。囚人等にとつては、日々與へられる仕事が、如何に有難いものとなつてるかは、常人の想像も及ばないほどである。瞑想や夢想——それも人間の一の仕事である——の能力を持つてゐない囚人は、もし毎日何等の仕事も與へられずに、一人放置せられる時には、殊に獨房に入れられてる場合には、到底生きてゆくに堪へられないさうである。それは吾々にもほゞ想像はつく。

バラックの諸君よ、たとひ預金があり而も食物の配給を受くるにしても、諸君は何かの仕事をせずにはゐられないだらう。燒跡の灰掻きでも何でもよい、また儲けは皆無でも構はない、たゞ何かを爲さずにはゐられないだらう。終日手を拱いてぼんやりしてゐることは、諸君にとつて最も苦しいに違ひない。吾々は生きたいのだ、生活したいのだ。

そして生きることと——生活することとは、何かを爲す働きに外ならないのだ。

このことを、諸君は平素の生活に於て、本當によく感じたであらうか。平素の生活に於ては、生活そのものを吾々の眼から遮るものが、餘りに多くありすぎる。いろんな慾望の對稱となるものが多々あつて、吾々の眼はその方へばかり惹かれがちで、生活そのものを顧みる餘裕が餘りに少い。然るに今バラックの中に住んで、自分の生活をつくづく見つめる機會を得た諸君は、何かを爲すといふことが如何なるものであるかを、本當

によく知つたであらう。

食物を得なければ命が保てない、といふのは根本の原則である。そしてこの原則によりよく合つた仕事は、人に力強さと輝きとをよりよく與へる。この意味で、自覺した農業は比較的よい仕事かも知れない。然しながら、人は必ずしも、食を得んがためにのみ働くものではない。生きること、生活することゝ、それ自身が一の働きの上に立つものである。そこに人間の生活の力と光とがある。

バラックの諸君よ、仕事といふものを本當によく感じ味ひ考へ給へ。

さて改めて、バラックに住む人々よ、諸君がバラックの困難な生活に於て、自分の家庭と仕事といふ二つを、しみじみと眼に止めたならば、諸君の生活は必ずや新らしい光に輝らされるに違ひない。そして諸君の生活は、強固な基礎の上に力強く築かれるに違ひない。それは尊い經驗である。日常生活では容易に得難い體驗である。この體驗を諸君がいつまでも忘れないやうにと、私は切に祈りたい。諸君がそれをしかと胸に懷いてる間は、諸君の生活は常に――たとひ困苦の中にあつても――輝かしいものであるだらう。

とは云へ、バラックの生活が如何に悲慘であるかは、私にもほゞ想像はつく。殊には向寒の砌り、薄つぺらな屋根と四壁と低い床との中の寒氣、晝の日當りと夜の點燈との不完全、假りの住居といふ意識から來る不安、調度の不備と衞生法の困難、慰安や休息の缺乏、其他萬事局限せられた不如意、それらのことから、諸君の生活に如何に陰鬱な影がさしてくるかは、想像にも餘りあるほどであらう、とりわけ、自分一個のバラックでなしに、市設の長屋式バラックの或るものに於ては、隣家との仕切の板壁もなく、張られた繩一筋を境界とするさうである。さういふ中に暮すことは、非常な困難に相違ない。貧しさに堪へ得る者も、慘めさにはなかなか堪へ難い。

けれど、それも一時のことである。胎を据えて生活の根を下してる者にとつては、一時の悲慘は却つて、未來に對する希望をより強く燃え立たしむるものであり、未來の光景をより輝かしくなすものである。未來が塞がれてゐない限りは、どんなことにも壓倒されないのが人間の本性である。そして諸君の未來は、決して塞がれてはゐない。家庭と仕事といふ二つを本當に嚙みしめた諸君の未來は、常にも增して廣々としてる筈である。そして諸君が健に生きてゆく以上は、未來の復興は案外早く來るであらう

たゞ私が恐るゝのは、諸君の肉體的健康である。前述の私の

言に大過がないとするならば、私は諸君の精神的健康を信ずることが出來る。けれども、肉體は精神の力ばかりでは自由にならない場合がある。如何に朗かな精神の者も、不自由な生活のために、肉體の衰微を來すことがよくある。それを私は諸君に就て最も恐れる。バラックの生活は、肉體的に極めて不健康な生活である。

　バラックに住む人々よ、私は諸君の自重と自愛とを切に切に願ひたい。そして諸君の肉體的健康を心から祈りたい。

何も悲觀するには及ばない

田山花袋

少くとも今度の地震は、生活についてのある樣式を變へたに相違なかつた。最早今までのやうな贅澤を言つてゐる時ではない、寢ころんでのんきなことを言つてゐる時ではない、かういふ風に誰も彼も思ひ出した。それはロシヤのやうに革命的だとは言ふことは出來なかつたけれども、また全部でなくて一部的ではあつたけれども、兎に角人心を轉換させ、生活を更新させ、更に新しい芽を培はせる素地をつくつたことは、爭はれない事實であつた。

　さう思へば、バラック生活も、さう大して悲觀するには當らない。今までは九分通り完成して、否、あるものは十分に完成して、それ以上何うすることも出來なくなつてゐたのに、譬へて見れば、贅澤や奢侈や妥協や惰眠や、さういふ不徹底な壁に打突つて、何う轉回することも出來なくなつてゐたのに、今では、何でも新規蒔直しにやらなければならないやうになつた。家屋もバラックから始めなければならなくなり、着物も木綿物の實用から始めなければならなくなり、食物も簡易な牛めし牛どんから始めなければならなくなつた。朝夕の食膳にも最早贅澤は言はれなくなつたのである。

　時の經つのは早い。あの時は、まだ浴衣一枚でも、歩くとだくだくと汗が流れる位であつたのに、今では袷に袷羽織を重ね

ねても寒いくらゐになつて、夜など染々とバラツク生活をしてゐる人達のことが思はれるやうになつた『バラツクにゐる人は寒いだらうな……』私は誰に言ふともなくこんなことを言つた。

さうかと思ふと、中には夏が再び來たかと思はれるやうな暑い日があつて、さういふ時には、女達は雨にたまつたよごれ物を井戸端に持ち出して、せつせと洗濯を始めた。『今日は好いバラツク日和ですね』こんなことをさういふ人達は言つた。

バラツク日和、避難民日和、秋の靜かな日も、さう言はれるのは悲しい。野には依然として薄がなびき、桔梗が咲き、樹々が紅葉しやうとしてゐるであらう。小川は銀のやうに日に光つて低く囁きつゝ流れて行つてゐるだらう。林の中には鈴を鳴したやうな小鳥の聲が響きわたつてきこえてゐるだらう。しかし、さうした秋の野の景物も、今年は都會の人を引寄せることも出來ずに、そのまゝ冬になつて了ふであらう。川のほとりの草も朝霜に白くなるだらう。昔の武藏野の周圍をめぐつた山々の雪は、今更にその原始時代の白さと寒さと鋭さとを東京の燒跡に齎らして來るだらう。

何でも人の話だから、よくわからないけれども、東京の消費者の大部分さうなつたので、あたりの遊覧地などはすべて火の消えたやうであるといふことである。日光の紅葉、鹽原の紅葉、いつもならば、今頃は臨時列車なども出て、人も大勢出かけて行くのに、今では、さうしたものは全く跡を絶つて了つたといふことである。ある時、私は、長い間願にかけてゐて、今年こそ鹽原に行くと言つてゐた老婦に、『何もそんなことを言つてゐないで出かけたら好いぢやありませんか？　かへつて靜かで好いでせうぜ！』と言ふと、その老婦は頭を振つて、『いや、もう今年はよします。バラツクにゐる人達のことを考へると、そんなのんきなことは出來ませんし、よしんば出來たにしても、面白くはありませんから』と、言つた。あの地震はさうした影響をさういふところまで持つて行つたのであつた。

バラツクにも好いのとわるいのとがあつた。九段あたりのは中でも好い方だが、あれならば、それほど悲觀せずにもゐられるけれども、神宮外苑から千駄ケ谷あたりのバラツクになると、隣りとのしきりも筵一枚といふ光景で、かういふ中に人間が住んでゐなければならないとは何といふなさけないことだらうと思はれるくらゐであつた。

しかしいつまでもさうしてゐるわけではあるまい。やがては新しい都會が出來、新しい公園が出來るであらう。新しい立派な家屋も庇を並べるやうになるだらう。そしてそれは今までのものとは、全く形を異にし、観を異にし、感じを異にし、内容を異

にしたものとなるだらう。私達のやつてゐる文學だつても矢張さうだ。その時分になつたら、このバラックの寒さとつらさとの中に培かはれた新しい芽が、新しい戀が、新しい心が立派なものになつてあらはれて行くだらう。何も悲觀するには及ばない。

焦土の上に寶庫を築かんとす

小川未明

下町の燒跡をたどつて、山の手にはいつた人は、そこにちがつた社會が存在することを感ずるであらう。たとへ、等しく地震のために、家屋は傾き、屋根瓦は剝がれ、壁は崩れてゐても、火を免れたところは、すでに見違へる程、着々修繕を加へて、物資を店頭に飾つてゐる。これに反して、一歩焦土の巷に足を入れると、悲慘の極まるものを見聞するのであつた。

これを見る時は、私達は、自然の不公平を感ずるのであるが、一たび眼を轉じて、かの公設バラックに住居する人々を見た時は、そこに別種の感慨深いものがあるのであつた。

震災前までは、堂々と大きな店を構へてゐた人も、また澤山の品物を所有してゐた人も、また他に貸家を有してゐた人も、全く無一物になつて、今は何うすることもできなくてこゝに身を置くやうな人も多いからである。

その人達が、曾つてあつた生活を想像して見たら何うであるか。絹の着物を身に纏つて、顎頭で多くの雇人を使つてゐたであらう。そして、人に對する物言ひ付は、鷹揚であつたといふよりは傲慢で、しかも食膳に上す食物の如きは相當に驕つてゐたにちがひない。

それが、いまでは、彼等が、平常その姿を見るだに眉を顰めたやうな、穢苦しい樣子をした貧民に、彼自身がなつてしまつたのだ。

昔から言ふ如く、人間は、生れながらにして、貧富の別があ

つたのでない。すべてがその環境によつてであり、また、その境遇によつて、性質、風貌、一切が變つて來たのである、

から考へる時に、彼等が、すでに、一介の貧民となつては、甲、乙、丙に變りがないのだ。昨日まで、食物について好惡を言つた者、絹物でなければ、手が通せぬと言つた者にとつて、今日の生活は、何といふ皮肉であらう。私は、かういふ人達が、あのバラックの中にも生活してゐるのだと思つた時に、人間は、境遇次第でどういふやうにも變るものだといふことを、一層はつきりと頭に考へさせられたのであつた。

要するに、人間は、みな同じなのだ。誰だつて同じなのだ。たゞ境遇によつて、變つてゐるやうに見えるけれど、たとへば、このたびの天災の如く、境遇は、何ういふやうにも變るものだ。そして、刹那に、またその人達の生活が變つてしまふのだと思つた。

「みんな、はじめのうちは、誰もかれもいつしよになつて、飯を焚いたり、食べたりしてゐましたが、この頃は、いつの間にか、別々に、あの中で生活をするやうになつてゐます」と、ある人が、私に、バラック生活の有樣について言つたのであつた。

某所のバラックは、河の淵の低地に建てられてゐた。そのあたりには、在來からの細民の家屋があつた。しかし大通りに面した方には、可なり立派な呉服屋や、下駄屋や、いろ／＼なものがあつたが、地震の時は、それ等がいつしよに潰れてしまつた。そして、今では、その時分には、貧富の懸隔があつた者が、すでに階級がなくなつてしまつて、いつしよにバラックに入つてゐると聞いたが、緣が低くて、少し水が出れば、みんな浸される氣遣ひのあるところであつた。

私は、この大都會の電車が止まつて、レールの上が錆びるやうなことがあれば、それはいつだらう？と曾て、日夜動いて止まない都會を見て思つたことがあつたが、いま東京の大部分の電車が止まつてゐる。そして、千年の後に或は、どうなるであらうかと空想したやうに、すべての大きな立派な建物は崩壊して、廢墟さながらの有樣になつてゐる。その當時、私は、日比谷の公園が、その道の兩側に露店が出るといふやうなことを思ひもやらなかつた。また、あの綺麗な花壇が踏み荒らされて、そこに襁褓が乾され、その池に棲む魚や、鳥は、悉く捕へられて食ひ盡され、女達が、この水で米を磨いだり、洗濯をするなどといふことは考へ至らなかつた。

この公園が、いつの日になつたら、昔の如く、清らかに、美しくなるのか？

それよりも、私は、この公園に、日比谷村と名づけられた、幾棟となく出來たバラック長屋を覗いて、やはり緣が低く、戸障子も極めて不完全なのを見た。どの建物も粗造であつて、酷寒の時分になつたら、住んでゐる人達はどんなであらうと氣遣はれた。子供や、老人の健康などについて考へると悄然とした氣に襲はれるのであつた。

私が、ちやうど行つて見て歩いてゐる時に、洋服を着た男が、三四人ばかり各戸に、何か衞生についての心得書のやうな刷たものを配つてゐた。私は、それを見た時にも、何となく、かうしたことにも、矛盾の潛むのを感ぜられたのであつた。至る處、埃溜や、溝のやうなところに、白い石灰が撒いてあつた。しかし、チブスや、赤痢や、其他の傳染病から救はれるのだと思ふと、公園に石灰が撒いてあるのを見ても厭な氣持にはならなかつた。

人間の氣持は、境遇と場合次第で、いかやうにも變化するものだ。

衣、食、住の三つが、人間にとつて、最も缺くべからざることは、平日誰も知つてゐることであるが、今日程、それが實感としてみんなの頭に深く刻まれたことはないだらう。

公園に於ける露店のすべてが、着る物と、食べる物とに限られてゐるといつてい丶。それは、なんでも、食べられるものであれば、並べられてあつた。また、どんな襤褸でも、身に着けられるものであれば、晒されてあつた。

彼等は、かうして、食物や、必要品を、要求者に充たすといふよりは、金に換へられるものは、少しでも多くそれを金に換へたいとしてゐるのだ。彼等の望んでゐるものが、何よりも金であるといふことは考へないでも分るであらう。

私は、ぐる／＼と其の中を歩るいてゐる時に、僅かに一「お仕立物致します」と、小さな札を下げて、小舍の內に、若い女と、白髮の老婆とが坐つて、何か縫つてゐるのを見て、暗然とさせられたのであつた。

「それがいつたい幾何にならう？」家を借りることができるだらうか。そして、この先何ういふやうにして暮らして行くといふのだらうか」

私には、ひとごとながら考へても、分らなかつた。そのことについて、考へる、考へないは、何人も自由なのである。しかし、この社會に、さうした生活が存在することは、何人も、これを否定することができないのだ。

また、歩るくと、七つか、八つばかりの色の白い男の子が、何か箱のやうなものを臺にして、その上に板を敷いて、魚を

べてゐた。魚には、一つ、一つ紙に値を書いたのが立てあつた。私は、これを見て、その家庭の有様を想像せずにはゐられない。

いまゝで、親達は、こんなことを子供にさせなくてよかつたのではないか。子供も、生活の苦しみなどは知らず、他の子供達といつしよに遊んでゐたのではないか。子供は、ぼんやりとして、秋日和の青い空を眺めてゐた。

私は、幾たびも來た跡を振向いて、まだ木の色の白い、バラツク長屋を見廻はした。

「施米や、見舞品を貰つてゐるから、怠惰になるもない。寒い冬になつたら、彼等は、どうするであらう。そして、いつ、これ等の人達が、生活の希望を得てこの村から立去ることができるだらう」

私は、永久に、この公園から、これ等の人々が立去ることがないやうな氣がした。

公園の花壇の傍のベンチに、勞働者が仰向いて晝寢をしてゐた。日の光りは、體を温めるに、熱くもなければ、また弱くもなく、ちやうどいゝ程であつた。しかも、あちらに、一人、こちらに一人といふ風に、ベンチを占領してゐた。けれど、いまは勞働者の世の中であるから、氣兼をしてゐるものか誰も咎める者がなかつた。

「なあ、かう飲食店が多くちや、これでみんな儲かる譯では、なからうな。門並みだもんな」

一人の手拭で頬被りをした男が、並んで腰をかけてゐる若い男に言つた。

「はじめのうちは、みんなが食べれやいゝといふんで、なんでも賣れればはやつたが、この頃ではこざつぱりとした構へで、ちよつと奇麗なのでも置かないと駄目だといふことだぜ」と、相手は答へた。

私は、この二人の男の言つたことに、考へさせられた。當座は、女は白粉を塗つてもいけないとまで言はれたのが、もうあちら、こちらに、白く顔を塗つて、胸にエプロンを掛けて、その前を通る男達に、黒眼勝のぱつちりした眼をもつて、迎へてゐるのであつた。

生きるために、かうして、みんなが互に利益を爭つてゐるのはいゝが、それが、自分が立つために、他の者を倒すのだといふことを、彼等は、果して、眞に考へて見たことがあつたであらうか。少なくも、彼等は、それを氣にかけてゐないやうにも見えた。

私は、九段で、バラックの内に、患者收容所があつて、そこ

には、石炭酸の臭ひがし、白い服を着た看護婦が行つたり、來たりしてゐるのを見た。そして、寢臺に臥てゐる患者の頭を見た時に、其時は、何となく一種の氣强さを感じた。この都會が救はれるのも、さう遠いことではないとさへ思つた。たゞ科學と人間愛との精神だけが、獨り死の手から私達を救つて、生命あらしめるのだ

日比谷で、バラックの中に、假設圖書館を見出した時、私は、流石に、震災前の立派な建築を思はざるを得なかつた。これと關連して、大學圖書館や、其他幾つかの圖書館が、悉く燒失したことを考へると、これを償ふの容易でないばかりか、文化が、それがために幾十年も後れたやうな氣がして悲しかつた。

新聞の上では、復興氣分が充溢してゐる筈の銀座街から、神田の方へと、私は、徒らに自動車に脅かされ、埃の裡を步るいて來た。

數日前であつた。私は、罹災者の一人であつた、運送業をしてゐた男と話したことを途すがら思ひ出した。

「工面をして、燒跡にバラックだけは、造りましたが、自動車は燒いてしまふし、僅か手車一挺だけあつたのでは、何うすることもできません。バラックはできたが、さあ、これから、何をしていゝものか途方に暮れてゐるのです」と、男は、言つた。

「町の樣子も變つてしまへば、得意も變つてしまつたらうからね」

「人間といふものは、いまゝで住んでゐたところは忘れられないと見えます。それに、こんどのやうに、急激にやつて來られたのでは、誰しも、昨日までは、あゝやつて生活をしてゐたのにと、そればかり思ひ出されるのです。それで、もとのところに、小舍でも建てたらどうにかなるだらうといふ考へを、みんなが持つてゐます。

「毎日、毎日、燒跡に行つて、ぼんやり立つてゐる者もあれば、また、燒け殘つたトタンを頭から被つて、夜は臥てゐる者もあるのですから、やはり、いまゝでの家に執着をしますのです。しかし、もう、夢でない、全く、みんな燒けてしまつたのですから、到底今迄のやうになる見込みはありません。バラックだけ建つたつて、食はずにゐることはできませんし、それに金はなし、私など、何をしていゝのか、まだ決心がつかずにゐます」と、男は、語つた。

私は今、步るきながら、その言葉を思ひ出したのだ。

不意に、私の袖を引いたものがある。見ると、十ばかりの男

の子であつた。

「どうか、新聞を買つて下さい」と、言つて、私の顔を見上げた。

私は、その小供を、震災前は、街頭に立つてかうして新聞を商つてゐた賣子ではないやうに思つた。ふと、先刻日比谷で見た、魚を賣つてゐた子供の姿を併せて思ひ出した。

そのまゝ行き過ぎやうとしたのを戻つて、私は、新聞を二枚買つたのであつた。

神田神保町附近に至ると、殊に、ピカ、ピカ光る、バラック建の家根が、廣々とした大空の下に散在するのが目について、植民地の感じを惹き起した。

しかし、そこには、未だ開墾されざる豐饒の大地が、悠々として彼等の前に横はつてゐるのでなかつた。もし、さうであつたら、たとへテント生活であらうと、野宿であらうと、また、粗末なバラック生活であらうと、それに溢れるばかりの詩情がなくてはならぬ。そして、勞働は直に資本なりといふ考へが、持たれることが至當だ。健康でさへあれば、それだけで澤山だといふ安らかな休息と安心が彼等になければならないのだ。そして、幾年の後は、正確に、未墾の地が、作物で覆り、澤山な收穫の光景を夢想するだけでも、彼等の眼は輝き、胸は希望に充つる筈なのだ。

しかし、こゝはさうではない。堀つても、堀つても、出て來るものは、破壞された瓦礫である。舊文化が、やうやく行き詰つて、困惑を感じた日に、偶然にも天災で、すべてが壓倒されてしまつた。それ等の殘存する破片に過ぎなかつた。

バラックは、かうしてできたが、彼等にはどんな希望があるのだあらう？ どこでも、食物を商つたり、着る物を並べてゐる。この際それ等のものは、必需品には相違ないが、また、もとでのかゝらない回收の見込がつくために、その多くが一膳めしやになり、安値な酒場を營んでゐるのではなからうか。

かうして、彼等は、少しでも爭つて、金を溜めようとするのだ。もう一度、資本主義をその第一歩からやり直さうといふのだ。そして、金が溜つたら、その曉は、こゝに昔を偲ぶやうな立派な家屋を造らうと考へるのだ。

私は、それを思つた時に、何となく、物悲かつた。そして、言ふことのできない悲痛な感じがした。

なぜなら、彼等は、お互への懐を當てにしてゐるのだ。そして、一人成功するためには、幾十人、幾百人かの失敗者を見なければならない。しかも彼等が當にしてゐる、みんなの懐が、すでに乏しく、且つ寒いのではなからうか。

生產以外に、私達を眞に富ますものはない。また、創造の喜び以外に、私達を希望に燃えさせるものはない。

東京と、橫濱は、幾何かの生產地であつたといふよりは、寧ろ生產品の集散地であつた。また、政治の中心地であり、商業の中心地であつた。そのことは、直ちに、自からが富を產む力たることを意味しないのだ。

これを要するに、今後、たゞ生產、創造の一事あるばかりである。いかにして、私達が創造する希望の前に働き得ることができるか、問題は、そこに存するのでる。

徒らなる生存競爭のみをもつては、焦土の上に寶庫は建設されないであらう。ほんとうに、私達は、根本から考へなければならぬ時が來たのだ。

――一九二三、十――

そつとして生かして置いてくれ

宮地嘉六

これまでは、東京の街を歩くのに、小ざつぱりとした風をしてゐないと氣がひけてならなかつたが、今日ではあのやうに銀座通りや日本橋通りが、見る影もない有樣に變つてしまつたので、少々見すぼらしい服裝をして歩いてもそれほど耻づるにはあたらなくなつた。これは我々にとつて何よりも氣樂なことである。色のさめた古洋服を着て尻きれ下駄をはいて銀座通りを歩いても、それが異樣に目立つ氣づかひもない。ドテラを着て日本橋通りをうろついても人からうしろ指をさされる心配もない。羊羹色の羽織を着て、不精な髯面をして烏森へんを歩いたつて笑はれるやうなこともないのだ。いや、それどころか、今は勞働服一枚着て、足袋はだしで意張つて歩けるのだ。その方がよつぽど周圍に適合する。バラック建ての家々の疎らに列んでゐる街を歩くのには、小ざつぱりしたなりをしたり、氣どつたなりをしたりして歩いてゐると、却つて見苦しいくらゐだ。却つて異樣に目立つて氣がひける。おめかしが不必要になつた――さすがの氣どりやもバラック街を氣どつて歩く張合もある

まい。

私がこれまでよく感じてゐたことだが、きれいな街に住む人は、その顏色までおのづからきれいであつた。銀座や日本橋通りを歩いてゐる人々と、本所深川へんを歩いてゐる人々とは顏の色つや、着物の好み、姿態、目の輝き、頭髮の工合まで異つてゐることを私は常に、感じてゐたのである。私などは東京の場末につながる郊外にばかり住み續けてゐたせいか、土臭いところが多分にあることを自分でも氣づいてゐたが、一歩、銀座通りや日本橋通りの、あの壯麗——まあ壯麗と云へるところのあそこいらに足を踏み入れる時、一層その感を覺えたものである。銀座や日本橋へんを歩いてゐるものは、犬までが小ざつぱりときれいに見えたものだ。臺灣から歸つて來た人が或る時私に云つたことがある『臺灣にゐるとこんなに顏色が靑黑くなりますよ。妙なものです、あちらはどこを見ても自然は靑々としてゐますから、だん／＼住民の顏色までがさうなるんです』それを聞いてなるほどゝ私はうなづいた。それはたしかにさうしたものだ。これまで銀座や日本橋通りに住んでゐる人々と巣鴨や新宿の場末や、または本所深川へんに住んでゐる人々との顏色、姿態、衣服の好み、目の輝き等の異つて見えるのもそれと同じ作用なのであつたのだ。周圍が壯麗で、色彩が華やかである街に住んでゐる人は、いつとはなく、その周圍に適合するやうに自分自身をつくらふものである。意識的に、または無意識的に人は自分の周圍の色彩に、習慣に、情調に同化して行く。だから、場末の町にゐると、いつとはなしに、不精になり、その町のくすんだ色彩、なげやりな習慣、低級な情調に同化されてだん／＼人は小ぎたなくなる。だから私共はこれまで銀座あたりに出かける時には出來るだけ場末情調とその色彩とを振り落すのに多少の苦心を要したものである。下駄だつてちやんと、銀座へ出る時には別の方をはくとか、ハンケチもなるたけきれいなのを持つとか、髯もひとあたり剃るとか、下帶までもとりかへるくらゐにしたものである。即ち今日までの銀座はそのやうに服裝に注意深い人々を呼び集める一等の街であつたのだ。殆どおめかしと、氣どり屋の競爭場のやうなものだつた。ところが震火災によつて變り果てゝしまつて昨日の一等街は今や郊外の新開町にも劣るバラツク街と化した。銀座ばかりでなく、日本橋、淺草、神田と一渡り見ると、郊外の新開町よりもごみ／＼してゐるのである。そして街を歩いてゐる澤山の人々も恰度そのバラツク街にふさはしい色彩と風態の人ばかりである。どんな風をして歩いてもバラツク街はそれを咎めるだけの昔日の誇を失つて、今は唯多くの人が通るその雜沓的繁昌を感

謝してゐる姿である。街がバラック街に變り果てたと同時に街を歩く人々の顏色、衣服、目の輝きまでが、それにふさはしいトタン色になつてしまひつゝある。おうトタン色の目、トタン色の顏、トタン色の服……。

震災後二ケ月にも滿たない間に灰燼の東京がこれだけのバラック街に復活の色を見せたといふことは人間の生きむとする強い意志の現はれには違ひない。東京人はなるほど氣早で意勢が好く、昂奮好きな人間であるといふことも分る。それに元來東京の大工は安普請に馴れてゐるだけあつてバラックはお手のものだ。かういふ時には名人よりも叩き大工の方が間に合ふのである。彼等はこれまでだつて、バラックに似た家を作つてゐたのだから事は早い。叩く。叩く。なか／＼叩くことにかけてはひけはとらない。しつかり叩いてくれ。君等が叩いて見せるのは此の時だ。場末の鍛冶屋は夜通しで鎹を作つてゐる。

バラック生活者にもいろ／＼のがある。人通の多い道路につらなつてゐるバラックは景氣が好い。皆それ／＼の商賣に力んでゐる。お互に帝都復興に努力致し度候……」などゝ牛めし屋迄が入口に大文字を見せてゐる。然しさびしい通りの裏手のバラックを見ると、ドンヨリとしたものうげな目つきをして膝を抱きながら思案にくれてゐる顏ばかりだ『何にも云つて貰ひますまい、そつとして生かして置いてくれ。そつとして……』と云ひたげな目をしてゐる。

バラックの遠灯を見て

近松秋江

バラックの村が、大東京市の燒跡一面に建つて來た。一日、その村々を巡行して、わたしはそゞろに涙の溢れるを禁じ得なかつたのである。武藏野の原といふよりもまだ哀れなる現狀である。

大東京よ、大東京の住民よ。汝等は何といふ因果な、隅田河口の地域に生ひ育つて來たか。こと人間と自然との生活關係

は、かくまで離れ難ないものとなつて來ては最早何ともすることは出來ないものであらうか。街路の地域とか、生産の鹽梅とか、物資の集散の狀態とかいふ複雜な關係が織り成されて出來てゐる都市の狀情からいへば、幾ら大震火に全滅されても、再び舊態を回復しない以上は、住民の生業は成り立たないことも解つてゐる。私は、荒涼たる赭土の燒野原に立つて、以前の東京を追懷し、低徊顧望去る能はざるの感に堪えなかつた。そして、萬感交々胸に迫つた。浮華虛榮に醉つてゐた舊東京人のさまぐ\を思へば、今回の慘禍は寧ろ天の誡めであるかとも考へられ、又時としてはその天に向つて無情を喞ち怨むの情も湧いて起る。

そして斯う思ふ。天と地とがかくまでも人間に對してつれないならば、可矣、こんな不安な地上には最う決して住まぬぞと。

實をいへば、私の本心の希望は、武藏國隅田河口の地域を潔く放棄することである。しかし、最早大詔煥發せられ、總理大臣の訓示も發表せられて遷都のことは問題でなくなつた。新に復興する大東京市はやつぱり此の赭土の燒野原の上に建設せられることに疑ひを容れないのである。であるから、吾々世務と關係の乏しい文筆者流の云ふことが、新東京の復興に對して大なる妨げとはなるまいと思つて、試みに自分の空想を自由にいつてみたい。自分をして徳川家康とか織田信長とか豊臣秀吉の如き封建時代の大諸侯であらしめたならば、今回の慘禍を測り、これつきり隅田河口の地域に居城を築くことを斷念してしまつたであらう。徳川時代にも江戸は度々地震に襲はれたが、その時分は最早大都會の形勢が成つてしまつてゐた。又治世の安泰を重ずる上からも幕府を移動する譯にはゆかなかつた。が、もつと初期であつたならば、それが出來たであらう。けれどもその時代には江戸城がまださまで榮へてゐなかつたから、人口稀薄な土地には假に大地震があつても、人畜の損害を蒙ることが少い。一代の大政治家たる家康もまさか安政の地震を見通すことは出來なかつた。況んや大正時代の地震を。

家康が關八州の大諸侯であり、つゞいて秀吉の沒後征夷大將軍を拜し、愈々幕府を何處に置かうかといふ段になつても、やつぱり江戸に築くのを凡ての點から得策とした。しかし家康が最初關八州の諸侯に封ぜられたといふことは當時の政治上、戰略上の關係からであつて、必ずしも特に武藏國隅田河口の地域が居城するに優勝の土地であるから關八州に封ぜられた譯でなかつたことは明かである。いはゞ後天的の關係で隅田河口の地に築城したまでゝある。

信長は近江の安土に築いて將に天下統一の計を完成せんとして不慮の死を遂げた。豐臣秀吉は大阪に城を築いて天下に君臨した。大阪は江戸と違つて、秀吉が其處に城を築く前より夙に殷賑なる商業都市を成してゐたのだから、そこを政治上、戰略上から優勝の地として特に撰定したには相當な理由がある。

明年維新の鴻業を、徳川氏の江戸城の跡なる東京の地に於て成就されたのは、恰も秀吉が大阪の地を撰んだのと稍々同巧である。併し前述の如く隅田河口の地は決して先天的には一國の首都を置くべき優れたる土地ではないのだ

自分は今、夢を見てゐるつもりでいふ。自分が當時の大諸侯で、且つ信長、家康、秀吉の如き最も有力なる者であつたならば必ずや播磨國を居城の地として撰定したであらう。今回の如き地震からいつても、(當時の武人は或は、そんなことに餘り氣が付かなかつたかも知れぬが）地盤の堅い花崗石の地質である。天然の地味も豐饒である。全國の位置からいつても所謂中國である。

徳川氏の江戸城は、當時の狀勢から彼處に中央集權の地をトするを好都合としたらう、つゞいて明治政府もさうであつたが、明治初年と今日の內國狀勢は、すつかり變つてゐる。それは變つてゐるが、最早中央集權地として各般の設備が整へられて、これを無事泰平の日に移動することは到底不可能の事となつてしまつてゐた。

豐臣家の二世秀賴は、關東から、片桐且元を經て淀殿を江戸に人質に越すか、秀賴が大阪を退いて播州の姬路に居城するか、それとも難攻不落の大阪の城濠を埋めるかと三大條件を提出せられて、前二者を拒み、遂に城濠を埋めたまゝで依然として大阪に居つた。當時の豐臣家の面目としては萬止むを得なかつたことでもあつたらうが、大阪の豐臣家の播州姬路に對する關係は恰も江戸の徳川家の駿河の駿府に對すると同じき緣由の土地である。羽柴筑前守、信長の裨將として中國平定に從事してゐた頃は姬路二十萬石に封ぜられてゐた、秀吉が運命の神の加護に依り大いに擡頭して來たのはその時からであつた。あの時豐臣家は何故、家の面目——名を棄てゝ、實を取り姬路八拾萬石に滿足しなかつたか。稀代の名器秀吉が死んだのだから、決して不面目ではない。秀賴は潔く時勢に推讓しておとなしく姬路に退くべきであつたが、淀君をはじめ周圍の事情が許さなかつたのは殘念である。

閑話休題、徳川氏の江戸も明治政府の東京も前述の如き關係から單に武藏國隅田河口の地域を中央集權の土地として撰んだに過ぎないのである。今日では最早內國の、戰略上の關係は例

論のこと、治安上の關係から言つても、隅田河口の地を中央集權の地とすることは寧ろ甚だしき不便である。今日尙ほ東京市を以つて首都としなければならぬといふ理由は殆どない。本誌前號の堀江歸一博士、佐野利器博士等の、不遷都論を讀んで見るに、その理由とするところは國家百年の大計からいへば甚だ論旨が薄弱であると思つた。今、此の限られたるページに於て自分の所見を詳述することは不可能であるが、今日尙ほ東京市を以つて中央集權の地としなければならぬといふ唯一最大の理由は、商工業の都市としての東京市民の利福を何處までも保護し回復してやらなければならぬ、そして、さうするのが又、日本國家の今回の慘禍によつて蒙つた物質的損害を回復する所以でもあるのだ。けれども、國家永遠の利害からいつて性懲りもなく、この地質上不安の地に首都を置くといふは如何なものか。地震學の博士は多分今後五百年くらゐは再び大地震は此の地にないといふが、それは多分といふに過ぎないのだ。

東京を中央政府の所在地にしないからといつて、東京市又は府を此處に設置することを禁ずるといふのではないのだ。假ひ中央政府の他へ移轉した後とても東京市は復活するであらう。やつぱり東海、關東及び東北地方の物資の集散地として大阪市に劣らない都市として存在するであらう。少くとも京都や名古屋以上のものとして存在するであらう。

それで、私の空想の夢であるが、播磨國は新日本全版圖の中央に位する地位からいつても恰好であるのみならず地形整然として北方一帶に山脈を以つて劃り、眞正面に南陽を受けて寒暖中和近世の流行語たる所謂文化的都市を設置するには、到底武藏野の國など比較にならぬのである。中央集權の地は須らくその國の全版圖を相して最も優良なる土地を撰ばなければならぬ。しかも今回の如き大變地異が突發しなければ、從來のまゝで置くより他に爲方がないが、今度のやうなことがあつて見ればこれを好機に、白紙に墨を引く如く、都市としての處女地に持つていつて、縱横自在に首都新設の計劃を立てるが、よい。隅田河口の、火山質の洲沙から堆積した土地を近世的文化都市にしようといふのは、國家萬世の爲に大變な考へちがひといはなければならぬ。

いふことが段々外へそれてゐたが、私は此の間又、神田から上野、淺草から吉原。それから廐橋を本所の方に渡つて被服廠路から兩國の方に廻はつて須田町の方に戻つて來ると、出る時が少し遲かつたので、吉原の廢墟のあたりから、もうそろ〳〵日が暮れたため、本所へ渡つてゆく頃には、まだ電燈の取り付けてない、そこらのバラックの小屋に、幽かな蠟燭の火や石油

ラムプや、もう何十年の昔に廢れたか知れない行燈の灯影が、さも〳〵乏しなさうに、薄暗い小舍の中に積み重ねた夜具や膳椀などを照してゐるのを見て、そゞろ涙の滲むのを覺えた。そして下界のそんな慘めを知らぬ顏に永劫に瞬いてゐる星屑を眺め、天に向つて「怨嗟の聲の咽に詰まるやうな氣持に迫られた。自然がさうならば人間にも反撥心がある。「もう此樣な厭な土地に住むものか。」と、すねた氣持ちが起る。私は此の、すねた氣持ちを實現したいのが腹一ぱいである。兩國橋を此方に渡り萬世橋に來ると、以前から古着屋の多い柳原の通りは商賣柄とて、精一ぱい電燈を明るくして廢墟の中から夜目にも復活の色を照してゐたが、萬世驛のプラットフォームに立つて、暗の中の東京を眺めると、淺草の仲見世と思はれるあたりが最も灯の色が明るく、上野廣小路の方もなか〳〵氣勢を張つてゐるげに見え、諸方の灯の色が、丁度眞暗な海の上の漁火の如くに見えた。

私は人間の生存の努力のいぢらしさ、慘めさを又も犇々と感じた。そして、噴火山上に坐し、沙上に樓閣を築くこととの不安をまざ〳〵と思つた。私が昔の專制政治家であつたならば、斷然隅田河口の地を放棄するであらうと思つた。

バラック生活

長田秀雄

「ねえ、旦那、私もどうやらかうやらバラックを一軒おつたてましたよ。」と、かう云つてバットの烟を鼻からスウッと出したのは、もう廿年來近しくしてゐる西洋家具商の若い主人であつた。震災なんか何時あつたといふやうな晴やかな、朝日が、彼の乘りすてた泥まみれの自轉車を照らしてゐる。幸に倒れもせず燒けのこつた私の家の玄關は、仄暗らく蔭つて、壁上縦横に龜裂の跡が走つてゐる。若い主人は、

「何しろ、燒跡の灰ならしをする時にや、ガツカリして半分自

業でしたが、近所の方が一軒二軒とバラックを建てゝ、商賣を始めるのを見ると、こりやぐずぐずしちやゐられないと云ふ氣がしてきましたよ。私の處は舊の商賣の關係から、材木を集めるのは譯はありませんでした。」と、つゞけた。

「どうだね、住心地は。」

「そりや不自由でさあ、——然し、私の處ぢや、防寒用に板壁を二重にして、その間にすつかり炭俵をつめましたから、冬になつても、いくらか、しのぎいいだらうと思ひます。」

汗で褐色になつたカラーの間から、剃刀を當てない腭がぎゆつと出てゐた。私はそれを眺めながら、默然として煙草をふかしてゐた。彼は洋服の兩腕をひろげてみせて、

「何しろ、これ一着、きた切り雀ですからね。」

と笑つた——汗の臭氣が甘酸つぱくあたりにたゞよつた。

人間と云ふ者は、環境に順應して、どうでもなるものだ。平生、かやうな汚れた男をみたならば、恐らく私たちは、顏をしかめて、不快な表情を覆ひかくしはしなかつたらう。然るに、いま、龜裂した壁の前で、この男をみると、ちつとも不愉快ではない。それから二三日經つてから、私の玄關を訪づれた震前同様の極彩色の若い奥さんの方が、却つて私の家の壁の前では、少くとも不似合に感ぜられるのであつた。

さて、その若い西洋家具商の主人は、平生なら見向きもしたいやうな古袷を二三枚私から貰つて、にこにこしながら、

「ぢや失禮します。もし、あちらの方を御通りになつたら店へ御寄り下さい。バラックの味を一度、味つつて御覽なさい。」と、かう云つて、自轉車で歸つて行つた。

とも角も住む處が出來て、始めて彼には生活が始まつたのだ。勇氣も希望もその他すべて人間らしい心持は、そこから始めて湧いてきたのだ。

地震から火事——かうした恐ろしい時は三日程つゞいたが、今になつて、回想すると、わづかに一瞬間の出來事のやうな氣もする。

パツと、眼を瞬いた間に、舊東京は灰燼となつてしまつたやうな氣がするのである。もし、私が神秘を信ずるならば、何者か意あつて爲したるに違ひないと思ふであらう——いかに風が強くても、かう奇麗に燒けてしまふ筈はないと。震災後三日目に始めて見物に出かけたとき、私は考へた位であつた。

滿目荒涼として、餘燼のなほ燻る燒野原を見たとき、私はこの焦土の上に、果して人類の新らしい生活が始まるかを疑つた。

首府をうつせと云ふやうな説が私の耳に入つたのもこの頃の

事であつた。――東京はたうとう過去の物語にのみ生きた都となつてしまつたと云ふ人さへあつた。

一ケ月の月日は夢のやうに經つた。見玉へ、焦土の上には、一旦、田舍へ避難した罹災者たちが續々歸つてきたではないか。親は燒かれ、子を見失つたこの焦土の上へ。

何と云ふいぢらしい執着であらう。

歸つてきた罹災民たちは、みな、前に述べた西洋家具商の若い主人のやうに、燒跡の灰を掻いて、その上に、バラックを建てた。とも角も、自分の汗の土に染みた地を忘れ得ないで、かうして歸つてくる心持は、私の淚を誘ふに充分である。

一夜、私は電車を神保町で乘りすてゝ、あれから、九段下を通つた事があつた。

古き都に來てみれば
淺茅ケ原とぞなりにける。
月の光はくまなくて
秋風のみぞ身にはしむ。

と云ふ今樣を偶然私は思出した。その時點々として、地に伏したやうな低いバラックの戶の隙間もる電燈の光が、世にもなつかしげに輝いてゐた――丁度、夜汽車で、山の中を通るときに、思ひもかけぬ處に人家があつて、そこから燈火の光が見えるときのやうな心持がした。

燈火と人の笑聲とが結びついて、濃い人間的な空氣をかもし出す……そこに始めて生活が現はれるのだと、私は、その時しみじしと考へた。

「近所の方が一軒二軒とバラックを建てゝ、商賣を始めるのをみるとこりやぐづぐづしちやゐられないと云ふ氣がしてきましたよ。」と云つた西洋家具商の若い主人の言は、全たく深い實感から出てゐた。

人間の生活は集團的であるが故に、かやうに永續し繁盛してゐるのである。

我々は一人では決して生きてゐられない。いかなる悲歎も、いかなる恐怖も、大勢の人が一緒である場合には、次第に薄らいでゆく――鐵と火の瞬く戰場で勇敢にも突貫する兵士を見玉へ。たつた一人ではいかなる勇者も敢て進む事の出來ないやうな凄愴な境地を彼等は銃劍を振るつて、馳けてゆくではないか。

一日、私は上野を通つた。廣小路には、わが友小糸源太郎君の家がある。「揚出し」と云ふ長い歷史を持つた民衆的な喰物屋

である。

私は同君を訪問しやうとして、廣小路に立つたとき、そして、あたりに散在する新らしいバラックを見たとき、思はず、その上に二つの幻影を見た。

丁度、あの大地震のとき、私は美術院の展覽會場にゐた。初震がすむと一緒に、私は西郷銅像の傍へ行つた――十二階の上部が、パッと爆發するやうに飛散したのを見た瞬間であつた。

私はそこで不安と恐れとに顫えながら、全都が熱を病んだやうに戰慄するのを凝つとみつめてゐた。

まあ、何と云ふ變りかたであらう。今までは　すべての建物が、深い根を持つたやうに、路面から、直角に空に向つて、整然と立つてゐた。

然るに、一瞬の後、烟塵の間からみえる市街は、忽然として歪曲してしまつてゐる。

私は急いで歸途についた。兩側から覆ひかぶさるやうに私を覗きこんでゐる不氣味な家々の間を通りながら、眼ばかり大きく飛出した人や、四角に口を開けて何か叫いてゐる人たちの平生にない異樣な表情をみるともなくみてきた。

「カリガリ博士だ。」と、私は何時ぞやみた獨逸の表現派の凄愴な活動寫眞を思浮べながら、心でつぶやいた。

その時はまだこの邊には、火事は迫つてきてゐなかつた。

私は人生の表と裏をまざまざとみたやうな氣がした。

この震前震後の印象が、「揚出し」のバラックの前に立つたとき、私の心の眼の前に現然とあらはれたのであつた。數百年の間に起るべき人生の推移を、期せずして私は旬日の間にみた――おぼえず心が老ひて行くやうな氣がした。

小糸君は丁度、留守であつた。私は眞黑になつて働いてゐられる母堂や弟勝次郎君に會つて見舞を述べた。

不忍池にのぞんだ方形のバラックには、人がみちてゐた。彼等は人間の最初の欲求であるところの飲食の中から、生活を味感しやうとしてゐる人たちであつた。

「大へんな人ですね。」

「えゝ、お蔭さまで。」と、母堂はめつきり白髮のふえた頭を上げて私に云はれた。さう云ふ間にも、食券を求めて入つてくる人は絶えなかつた。

私は日比谷で「ゆであづき」と「牛めし」のテント張りの店だけをみたのは、わづか二十日も前であつたであらう、

然るに此處では、もう、まぐろの「中あぶら」のさしみもあり、天ぷらもある。酒もある。生活はこのバラックの中で急速に發達しつゝあるのである。

震前、我々は、我々の生活がもう行きづまつてゐると云ふ事をハツキリ感じてゐた。感じてはゐたが、これはどうする事も出來ない事であつた。――このまゝ進んで行つたならば、近い内にきつと何か恐ろしい事が起るに違いないと友だちと話合つた事も二三度ではなかつた。

人生ではある年代を歴るごとに必らず一度宛やつてくる行詰りであつた。彼等の仕事がつもり積りて、彼等の心を鬱屈させるのである――今や、まさにその時代であると、我々は思つてゐる。

我々は來るべき破裂を人の心の中に見出さうとしてゐた。私は新聞記事の中である無料宿泊所の失業者の云つた言を讀んだ。それはかうである。

「かう仕事がなくては全くやり切れませんよ。一つ何か大きな事件が起つて天下が引くり返つてくれゝばいいと思ひますよ。我々は大地震とか大戰爭とかさう云ふ物をこの頃始終夢想してゐますよ。」

私はこの言を讀んで慄然とした。

然るに彼等の夢想してゐた物は、偶然にもそのまゝの形で、我々を襲つてきたのであつた。

幾多の悲慘事を生みながらも、人の心の鬱屈は、やゝ解けて行つたやうにも思へる。

粗末な狭いバラックの生活には、これまでの文化は役に立たない。繁文縟禮の世態から逃れて、人間はやうやく簡明直截の生活に入つた。

私はこれが社會の立て直しになつてくれゝばよいと、祈るものである。

傳へきく安政の大震は、世直しの地震と云はれて、漸やく行きつまつた太平の時代の鬱屈を解いたさうである。

この大震が世直しの地震と云はれて、新たに興る文化の基礎となつて欲しい物である。成程、バラック生活には、風紀衛生などの點からみれば、いろんな憂ふべき點があるであらう。然し、復興の心持に滿ちた人々の間では、さう云ふ事は大して心配しなくてもよい――多少の犧牲は何事にも已むを得ない。人間の生きむとする意志は、すべて、前途に横たはる邪魔物を拂ひのけて、やがては、この焦土の上に、壯麗な大東京を建設するであらう。

私はよく友人に向つて、かう云つた。

友人たちの中には

「君は空想家だ。」と一言の下に冷笑してしまつた人があつた。

人生の文化の基礎は空想である、人間に空想が惠まれてゐなかつたら、五千年の文化は、果してどうなつてゐたであらうか。

飛行機も、無線電信も、みんな、我々の少年時代までは、空想に過ぎなかつた。人類の始祖以來の熱烈な空想がやうやく實現したのである。

私はさう云ふ友人の肩をたゝいて

「君は九段の上から燒跡をみた事があるかい。」ときくのである。

「いや、みた事はみたが……」と友人は不思議さうに私をみつめる。私は

「まあ、行つてみ玉へ。そして、あの焦土の上に點々として出來つゝあるバラックを見玉へ。將來の東京が、春にあつた木の枝のやうに、美しい芽をふいてゐると云ふ感がするからな。」

と、かう云ふのである。

實際バラックの生活はやがて建設さるべき東京の芽である。

古い因襲の燒土を突破つて、白く點々と地上に燃え出した東京の芽を、いま、私は涙ぐましい心持で見守つてゐるのである。

かうしてバラックの内から、戀愛も生れやう。詩も現はれやう。音樂も芝居も、あらゆる現代人の欲するものが、生れ出てくるであらう。

德川末期の大火の後に現はれた假宅の遊女屋が、當時の文學に精彩をそへてゐるやうに、やがてはバラック建のカフエーから、美しい戀の光景が描き出される事であらう。

雨のしよぼふる午後、日比谷のバラック街を歩いてゐた私は、ふと、しめやかな三味の音が、節の多いバラックの板壁を洩れて響いてくるのをきいた事があつた。

澤田正二郎の野外劇を見た人たちは、やがて、バラック建の大劇場で

「音羽屋」と、呼ぶ時が來るであらう。

日比谷村の半日

生方敏郎

大震災の時麴町の店を燒け出された書肆日本書院の主人がこないだの晩來訪、大に復興氣分のメートルを擧げて曰く

「私は丸燒けに燒け出されましたが、娘の方は自動車屋だものですから、この際しこたま儲けましたので、幸ひ私を援助してくれ、既に一二種出版し旗上げを致しました。それに店の方も最早バラックが出來ますから、早速その方へ移らうと思ひます」

と語る。いかにも早いことだと思つた。

そのバラック生活といふものは何んなものか？　と思ひ、出懸けた序でに、今日一寸のぞいて見た。

番町も思つたより廣々と燒けてゐる。坂を下りても上つても何地を向いても燒け跡だ。震災後はや五十日にも成るが、バラックはまだ幾らも立つてゐない。跡片づけもせずまだあの時のままで殆んど手の付けてないかの様に見える屋敷が續いてゐる。

麴町三丁目の大通りは流石に商家が軒を並べてゐたところとて、バラックはずつと出來たが、處々齒の缺けた様な空地もある。裏は勿論吹き通し燒野が原だ。方々に大工が入つてゐるのでのみの音や金槌の音も聞こえるが、春の日の平和の御代の建前とちがひ、却つて一種淋しい心をそそる、

大きい建物も飾り立てた家もこと〳〵く燒け落ちた後で、その後へ出來たバラックと來たら何れも之れも同じ様に粗い引きつ放しの板を合せた板がこひだし、道も道とて何處に何うついてゐるやら見通せないので、三丁目の角の見當さへ付かない。

之は交番で聞かうか？　と思つてその交番で思ひ出し、さう〳〵交番の隣りだつた筈と氣が付いたが、交番までが跡方もなく燒けてしまつた。だが、その跡らしいところに巡公が二人立ち話をしてゐた。

隣のバラックには表に硝子障子など出來、中に新聞で十冊位づつ包んだ本の包みらしいのが山ほど積んであるのも、その前で一人の男が鉋を使つてゐるのも、外から丸見えだ。

主人は丁度今がた日本橋の方へ用達しに出たとやらで、家の者は誰一人來てゐなかつた。

「ほう、こないだの話だともう夙に移つてゐると思つたのに、」と云ひつつバラックの中を見まはすと、六疊一間くらゐなところに、まだ疊も三枚しか敷いてなかつた。

「まだ天井も張つてありませんし、板の間から風が來ますから紙を何枚も貼つて防ぐか何か方法を取らなければならないのですが、大屋の方でやつて下さるといふものですから、こつちで何うとも出來ませんし」

などと語る。その樣子が大工らしくないのでよく訊くと、彼は店員で、店番かた〴〵書棚を作つてゐるのだつた。それにしては手つきがいい、黒人跣足だぜ、などと私は笑つた。

成程天井がまだ張られてないので、トタン板の屋根裏が見える。

「之にかん〳〵日が照り付けたら暑いだらうね」

「へえ、ですから晝間は暑うござんすし、夜は冷えます。壁といふものが少しも無いのですから」

「お勝手や便所は奥の方にあるのかね」

「ええ、便所は後から別に造る相です。又何うせ之では狹うございますから後の方にもう一つバラックを作つて、そこで炊事なんかする事にします」

「感心に電氣がもう來てるね」

「ええ、ずつと前から來てます。一燈二圓五十錢で申し込み順に取り付けてくれます。水道も早くから出ます。しかし交番が隣りですから本だけ置いてありますが、もう少し設備が出來ないと住み込めまきん」

「しかし、こんな家だと地震には安全だね。つぶれて下敷に成つても之なら輕いや」

そんな無駄話をいつ迄してゐても主人は一寸歸り相もないので、私は日比谷を經て銀座へ行かうと思ひ、そこを出た。

日比谷界隈はお祭りか何か有るのではないかと思ふほど賑はつてゐた。

公園の入口では大勢子供の夕刊賣りがゐて、「夕刊を買つて下さい。三枚二錢です」とひつつこく云ふ。昨日の夕刊かと思ふと今日の夕刊だ。三枚二錢も安いが夕刊の早いのにも驚く。まだ十二時前なんだ。後で聞けば夕刊の締切は一しきり九時だつたが二三日前から十時に成つたとやら、誰も歸宅を急ぐ爲めだらう。

公園の周圍には繪葉書やら文房具やら露店がずつと並び、公園へ入ると道の兩側は何處までも食物屋の懸け茶屋が續いてゐ

る。市内にさへ稀にしか見られぬ鰻屋が、この中には一寸歩く間に二軒も眼につく。バタ／＼と澁團扇を叩いてうまひ匂ひをさせてゐる。うな丼一杯三十錢の安價だ。天ぷら屋が有る壽司屋がある。汁粉屋そば屋パン屋居酒屋一品料理屋など、切りも果てもない。

客も主も燒け出されと見えて、中から聞こえる話は火事のことばかりだ。

「猿江裏かい。そりや大變だつたねえ」

などと客が同情していふのが聞こえる

咽も乾いたし腹も空つた。飲食店は此通りある。飲食したいは山々だが、流行病が怕いからうつかり外の物は食べられぬ。殊にバラックで賣つてる物なぞ極めて危險に見えて私には手が出せぬ。懸け小屋で燒く蒲燒の香が鼻をつく、屋臺店のまぐろの壽司もうま相だ。しかし、私は命が惜しい。折角地震からも火事からも自警團からも見逃がされた幸運な體を。ここまで來てバラックの安食物で殺し度くない。

さうは思ふが　今朝家を出てから飲まず食はずなので、咽が乾いて堪えられない。その中に「カルピス」と書き出したビラが目に付いた。カルピスなら中る事は有るまい。と思つたのでバラックへ入つた。そこの内儀さんは年頃四十二三、品のいい人で、とても前々から水商賣した人とは見えぬ。官吏の細君でも有らうか？　カルピスの外に紅茶もあればコーヒーもありビールをも[illegible]いでゐた。私がカルピス(暖いの)を注文すると、金釦の制服を着た書生さんが持つて來た。多分ここの息子であらう。震災の日迄學校通ひをしてゐたといふ樣子だ。こんな不遇な學生が、如何に多く有る事だらう。と思つて私は默つて心中につく／″＼同情した。私も丁度學生時代に日露戰爭が初まり、もう少し永びけば兄は第一補充兵として出征せねばならず、從つて私も半途退學して歸國せねばならなかつたのを、幸ひ平和に成つたので助かつたのだ。私はカルピスを飲み乍らそんなことを考へた

そこを出ると直ぐ、中學時代からの仲よしの友人K君にひよつくり出合つた。と云つても地震以來もう三度も合つてはゐるのだが、二人とも今日こんなバラック村で會はうとは思ひがけなかつたのだ。

「なあにね、山の手にゐて明けても暮れても地震の話ばかりしてゐるので、つく／″＼嫌に成るし、東京が急に狹く成つちやつて行くところはなし、併し今日は散歩ぢやない、國民新聞まで用達しだ。時に君は？」

「會社が燒け出されて、つひこの近所へ假事務所が出來たつ

さ。何しろあの大人數が狹い假事務所へ越して來たから机を置くところも無い位で、毎日十人位づつは邪魔だから休んでくれと云はれてるんだ。然うして外を遊んで歩いてゐる方が會社へ忠義なわけさ

とK君は聲高く笑ふ。

「バラックかね」

「いいや、バラックでもないが、何しろあの大人數が移つて來たんだから、居所も無い」

新聞に出てゐた美人の汁粉屋といふのがあるから食べようかとの議も出たが、持ち合はせの藥がないし萬一チブスでも背負ひ込むと困るからとて、私は應じなかつた。

「見るだけでも見て置き玉へ、見て中毒する事はないから」

そこで、葭簀張りの汁粉屋を覗いて見た。二脚のベンチに客が三人もゐて美人と話しながら食べてゐる。姉は愛嬌たつぷりで妹は上品、何地も美人だ。

「一粒丸を持つて來ればよかつたなあ」

と私は毒消劑を持ち合はせぬのを後悔する。

「いつも、その調子だと、怪我はないのだがね。」

とK君は笑ふ。

臨時圖書館といふのがあつて、本と雜誌とで二百冊位は置いてある。誰でも自分勝手に棚からとつて讀んでもいい事に成つてゐる。テーブルの周圍に讀書してゐる人が三人あつた。私はこの混雜の中で本を讀むやうな落着いた氣持には成れないと思つた。併し燒け出されて五十日間も本といふものの顏も見ない人々にとつては、何はおいても、又讀んでも讀まないでも、本は懷かしいものにちがいない。たとへば本を手に取るだけでも、燒けぬ我々の想像の出來ないほどの慰籍が得られるのではないかとも考へた。

バラックの棟割長屋の裏にはたらひやらバケツやら下駄やらごみ箱やらがあちこちに見える。又子供の着物や女の腰卷など乾してある。共同便所も處々にあつた。便所にもいろ／＼時節柄貼紙がしてある。

日用品を賣るバラックの店もつゞいてゐた。シャツだの靴下ゲートルなど並べてあつた。

不思議なことには、公園の中のこのバラック街を行く人々は、山の手の街を歩く人々よりも遊戲氣分に暢氣さうなのが、著しく目に付いた。山の手の、牛込小石川邊の街を行く人は皆眞剣な顏付をして自動車や馬力や自轉車の走る中を縫ひつつ急ぎ足でゐるのに、このバラック街の人たちはぶら／＼とお祭り氣分お緣日情調だ。つつじ山の近くには配給を受ける人々の行列が

二丁も長くつづいてゐた。風呂敷やら笊やらお鉢やらを手に〳〵持つてゐた。女も子供も男もゐた。流石にこれらの人々は青黒い貧弱な顔をして、着物も薄ら寒さうにしてゐた。もう直き配給も止みバラックも追はれ寒さが逼るのかと思ふと氣の毒でならない。

今日はこの公園の西南の一角で、澤正一座の野外劇があるといふので、その方面にも大勢人が集り、入り切れないで係りの者と小ぜり合ひをしてゐた。

細い道には繩が張られてある。「もういけません。此地から入つては困ります」と若い人が云つてゐた。

「我々こそ罹災民だ。何の爲めの慰安劇だ」

と數人が言ひ返してゐた。

力づくで數人入り込んだ。巡査が中から出て來て制した。そして

「何で、諸君はそんな分らん事を云ふのです」

「何つちが分らねえんだ」

と賣り言葉に買ひ言葉で爭つたが、たうとう民衆は押し返へされてしまつた。

灌木の森の中を人々が出たり入たり様子をうかがつたりする様子は、まるで活動寫眞の様だ。

「野外劇外の野外劇だね」

私たちはそんな事を云ひつつ公園を一周した。

道で新聞社の人に二人まで逢つた。

「バラックの店には、ずいぶん振つてる名前がありますよ。捲土重來軒だの下駄病院々長だの」

「それは何ですかね」

「院長ですか。なあに、下駄の齒入れ屋でさ」

新聞社の人たちとは暫く立ち話をして別れ、交叉點の幸樂へ行つて牛飯を食べた。あの三階建の立派な牛屋だつた幸樂も、今は見るかげもないバラックに變つてゐた。入口の土間で飯の切符を賣つてゐる。牛どんカレーどん各一杯二十五錢だ。友人が切符を買つたので、下駄ばきのまま上へ通つたが、大繁昌で腰かける場所もない。漸くの事少し座席を讓つてもらひ私だけビール空箱の端に腰を下ろした。客はおもに此邊の大會社に勤めるサラリーマンだが、何れもお粗末な裝をしてゐる。

「やうやく此頃カラーを付けるやうに成つたよ」

と友は語る。それ迄はカラの代りに手拭ひなんか卷いてゐたのだ。

此店には茶さへ無く、紫エナメルの安藥罐がよく村役場の小使部屋にあるやうな箱火鉢の中にある。人々はここまで來て、

自分で飯茶碗に湯をさし飲んで、魚を食べ終つた泥棒猫のやうにロなめづりしながら出て行く。

友人とここで分れて、私は一人焼跡の山かん横町を抜けて有樂町ガアドの前のカフエ、ユニオンへ寄つて見た。

之も今はトタン屋根の小屋がけと變り、木製の食卓と椅子とが二三脚でこぼこした土間に置かれてあつた。去年のクリスマスの夜の此店のきらびやかな賑ひを思ふと、全く夢といふ外はない。あの晩には明るい電燈が白晝を欺いて照り燦き、天井やクリスマスツリーから懸け廻した飾物や、そこらを行き來する若い女給らは花の樣だつた。それらは今はた何處にかあるだ。

ただ内儀さんだけ相も變らず無事でゐて、震災の日を細々と語る。もう一つの食卓にはロシヤ婦人が就いてゐた。此婦人も焼け出されの一人で家財道具すつかり失つたが、幸ひに自動車だけが助かつたので、良人は今やその運轉手をやり毎日の糧食を得てゐるとやら、異境へ來ての此困難は又一しほと思ひやられる。

銀座はまだ殆んど焼けた日のままで、バラックは一つも見えぬ。その中に國民新聞の大バラックだけがポツツリ立つてゐる受付けの長い白髯のお爺さんもマメ息災でゐる。天井もなく床もない。全く工場のやうだ。一時死を傳へられた徳富蘇峯翁は大變な元氣で、近頃は毎日出勤し、この土間の机で執筆して居るといふ。

應接間も無いので、私は友人を外へ呼び出し、しばらく立話した。風が吹く度に烈しい砂ほこりが襲つて來る。

バラックからバラックへ

安成二郎

今日もまた、
バラックを出てバラックの、
街へ稼ぎに急ぐ身の上
ブルジョアならば差詰め『書齋から街頭へ』などと洒落れて

燒跡のバラック見物をこぢつけもするであらうし、若しそれが上野櫻木町の住民宇野浩二であるならば、『高い山から燒跡見れば』と言つても大變ふさはしい表現だと人は思ふであらうし、或は又た生方敏郎なら『バラック展望』と題しても喝采を博すること疑ひないのであるが、私などはバラックを見に行くなどと言ふべく、あまりに氣の引ける身の上なので、思へば私のバラック生活も長いものである。

バラックで生れ、
バラックで死ぬならん、
そのバラックも借りたバラック

今度の地震で私の住んでゐるバラック建の家は、近所の同じ作りの家で四五軒恐しく傾いてつつかい棒をしたのもあるが、輕くトン／＼と上下動を持ちこたへたのは家具の少なかつたせいであらうか、傾きこそしないと言ふものの、瓦は少からず振り落されて、勤めに出てゐても、天氣予報、颱風近づくなどといふ原稿を見ると、また俺のバラックに雨が漏るんだ、氣象臺め、地震に食はれろと言ひたくもなる。と、私は新聞記者だから又た翌日出かけて、昨夜の雨、バラックに浸水すなどと原稿へミダシをつけて、それで月給を貰つて雨の漏るバラックへ歸つて來て、バラック代を支拂へば幾らも殘らないといふ何とも皮肉な世渡りなので、つひ無産階級文學の肩を持つやうなはめにもなるのである。

バラックを見て羨まし、
『堂々たる、
流石に銀座』の鐵骨バラック

この七月まで私のゐた銀座一丁目一番地の讀賣新聞社の舊い建物はきれいに燒け落ちて、その跡へ第百銀行の鐵骨バラックが建てられてゐるので、珍しいのと、舊居の懐しさもあり、私達の新聞では此の括弧の中にあるやうなミダシで、そのバラックを紹介したのであるが、どうも銀座の復興氣運は、都市計劃がつかへてゐるので、それと大きな煉瓦造りのルインがそこに聳立してゐたりして、折角の鐵骨バラックも書き立てた程には目立たず、今も銀座に追ひ剝ぎが出るといふ位ゐで、之も實際を見ない人は、銀座がそんなことなら、況んや其の他の燒跡に於てをやと考へるかも知れないが、今では銀座が一番荒れ果てゝゐるので、尾張町の十字街に夜は提灯賣りが出るのである。

何事ぞ、
提灯さげてバラックの、
ライオンに行けば、今晩賣切れ

どうだい、バラック氣分は、と言へば、世が世ならばシャナり／＼とチップを蓄めて拵らへた着物で泳ぐやうに歩いてゐる笘のウエートレス達、場末の女ボーイかと思ふやうな蓮葉に笑ふところ、之れ即ちバラック氣分なるものなるべしと誰しも合點することであらうが、事實あそこの女ボーイさんは、その昔の地震以前など、知つた顔に會ふとその顔がまた變な馴れ／＼しい目付きなどをしてゐるせいもあらうが、一つは自分達の身元を隱さうとするいぢらしい女心でライオンへお茶を飲みに行く身の上であるかのやうにカモフラージして、そつと何氣なく目を外らしたものであるが、現にこの間の晩、彼女等の一群が、私の連れの、之は又た素敵にかういふ場合の挨拶に妙を得た青年紳士に、おうい、まだ生きてゐたかと電車を待つ人々の環視の中で呼びかけられて、すましたお辭儀などは此の際無用といふ格好で、何とか合ひ槌を打ちながらカラコロ驅け出したものだが、バラック氣分が街頭に溢れてゐた。と、ヒョイとそこへ乘合自動車から飛び下りた黒い外套の紳士を見ると、我が宇野浩二で、私は地震以來すでに二三度街頭で彼に逢つたのであるが、近頃の彼の健筆は恐らく斯ういふ文藝閑語的燒跡觀察を必要とするのであらう。そこで、かうもあらうか。

宇野浩二、
夢はバラックを驅けめぐり、
震災成金となりにけるかも

さて銀座である。バラックの出來たのはライオン、カフエーロシア、ここへ私は、大杉榮が鎌倉にゐる時分、その鎌倉も大杉も今は無くなつたが、久しぶりで銀座で出會つて一緒に晩飯を食ひに行つたことを思ひ出す。カフエー・ロシアは燒けてもバラックが出來た。

大杉榮は、人間の悲しさ
バラックに、なつて
復興することもなし

銀座サロン、西側にはウーロン喫茶店、銀座食堂など、そんな飲み食ひの店ばかりで、銀座は夜になれば、尾張町の交番、これが銀座でたつた一つ燒け殘つた建物であるが、まだ電燈がつかなくて、入口に提灯をぶら下げて、巡査が寂しさうに立つてゐると、後ろの方で二三人立ち小便をしながら、オヤ、ここに交番があるぞ、などと話してゐる。

巡査も多分、
そこらに尿するならん、
銀座、秋の風

ところが銀座の西側の裏になると、そこには新聞社があつて

夜はカン〳〵と明りがつき、輪轉機が勢ひよく廻轉するのである。南から數へて來ると、日吉町の國民新聞社は丸燒けになつて之がバラック、瀧山町の東京朝日新聞社は鐵筋コンクリートの建物が殘つて中はすつかり燒け、初めの頃は浦和あたりで齒ぎしりをしながら新聞を拵らへてゐたが、今は耿々と明りがつき、屋上の旗は強い電燈の反射に飜つてゐる。南鍋町の時事新報社は今やバラックの組み立て最中だが、二階建ての相當な建物になるらしく、西紺屋町の讀賣新聞社は、之も鐵筋コンクリートの本館が燒け殘つてクツキリと白い建物が、夜は明るい窓々の灯を照り返して、有樂町驛のプラットフオームから見たら誰れでもここの社員はタント月給を取つて愉快に働いてゐることを疑はないだらうが、さて弓町の萬朝報社のバラックの赤い屋根も見事なもので、新しいバラックで働く氣分は又た格別、とても燒け崩れの朝日や讀賣の連中には分るまいと、誰かゞ確かに言つたといふ事であるが、それはさうもあらうか。

新聞社、
われ後れじと復興し、
銀座に投げる、明るき光を

×

バラックの、新聞社より、
復興の、氣運を送る、
焦土の都へ

その銀座から、私はある夜、懷中電燈でアスフアルトが溶けて凸凹になつた道を照らしながら、實はひとりで歩くのが氣味が惡かつたので、夜の廢墟を見るのも一個の風流ではないかと揚言して、二人の老友を、だが私などよりはずつと脚節の强い人達を誘つて、須田町まで歩いたのであるが、どこが燒ける前のどの邊やら、一向に分らずに歩いてゐるうちに、やあ、もう日本橋だといふやうなわけであつたが、同行の物理學者は路傍に杖を立てゝ、大廈高樓の立ち並ぶ街區を行く時は、吾々の眼はその高閣を越えて行く、そして吾々は脚ばかりで歩くのでは無いから、こんな何にも無い燒跡を行くのと比べると、同じ京橋から日本橋まででも確かに距離が延びてゐるに違ひないと說を立てるのである

大正十二年秋、
東京の火事の後、
書き換へられる物理學かな

須田町に近づくとパツとそこらが明るく、バラック氣分橫溢してをつて、最早や懷中電燈を要しないのである、すると又た彼の物理學者は、彼は神田ッ子とも言ふべき神田に過去の緣故

ある人であるが、神田は東京の中心だといふ說を述べて、そこで三人は別れてめい／＼の家路についたのである。

神田多町の、
バラック市場で賣り出す、
復興茄子、復興大根

×

神田に來て、心明るし、
バラックの、中に、
高々と笑ふ聲する

×

家は燒けるもの、
燒けたら家は建てるもの、
神田ッ子の意氣、かくあるものか

さて又たある秋晴れの午後のことである。私はひとりひそかに下谷の燒跡をさまよひ歩いて、到頭ある家の燒跡を探しあてゝ、そのバラック建の前にぢつと佇んで心の顫へるやうな、言ひ難い感じにしばらく漂蕩されなければならなかつた。と言ふのは、それは私の黑い瞳の少女の家なのである。

わが胸を刺しつらぬきし黑き瞳よ悲しき戀にまた落ちにけむ

春の雪いたくな降りそ下町の道行きなやむわが少女ゆゑ

さういふ歌が私の最初の歌集にあることを彼女が知つてゐるかどうかさへ私は知らないのであるが、そして又た確かに、私が彼女の家を知つてゐることを彼女は知らない筈であるが、若い時には誰れでもするやうに、私も彼女の家を人知れず探したので、然しもうその人は風の便り、さうだ、こんなのをこそほんとに風の便りと言ふものであらう、誰れが私に知らせて與れる人があらうか、それだのに私は、その人はずつと前に外國に行つたことが心に燒付けられてゐるのである。が、それも、もう長い前のことだ、事によれば東京に歸つて來てゐるかも知れないと、私はバラックを見て考へてゐたが、その周圍も屋根もトタンで作られた家にはゐる筈は無く、どこか靜かな土地に避難してゐるであらう。その兄らしい人が新しい家を建てる大工を監督をしながら、その燒跡を歩いてゐたのである。

今ここに、彼女がゐたら、
そのバラックが、
金殿玉樓に見えもすべきか

×

燒跡に、夕日が赤し、
もう一度

このバラックを見に來るとしよう

それから私はふだんの心をとり直して、一直線に上野公園に向ひ、石段を上つて西郷の銅像の傍の柵に倚つて遠く下谷、淺草を俯瞰して非常に愉快になつたのである。

これは〱とばかり、
バラックのトタン屋根、
どこが下谷か、淺草か

宗因と芭蕉をつき交ぜたやうな歌であるが、數限りも無いトタン屋根の海を眺めてゐると、實際復興院などは要のないものに思はれて來て、之が日本人の家だと思ふ心に間違ひは無いのであるが、不思議なことに、そのバラックの波の間に龍宮のやうに高く聳えてゐる鐵筋コンクリートの高樓が、黑い隨の母校の府立第一高女だと分ると、忽ちバラック屋根がみすぼらしく見えて、之が人間の住む家とは思はれなくなつて來たのである。

一日も早く、
皆なバラツクの境涯を、
脫せんとして働くなりけり

さうだ、私はそれから竹の臺の東京府のバラック長屋の前を通つたのであるが、そこのバラックの板壁に達筆で大きく『正しき希望は實現す』と書いた紙が貼つてあつたが、燒け出されて無一物になり、思ひもよらないこんな境遇に落ちた人々の『希望』を考へると、私は胸が疼くやうな痛みを覺えて、そのバラックの境涯を一日も早く誰もが脫出して、皆んな鐵筋コンクリートの家に住むやうになれば好いと思はざるを得ないのであつた。

正しき希望を、
抱くに至る精神を、
このバラックに在りては持ち難し

一と通り人並みの生活をしてゐても、人はなか〱正しい希望を操守するに難いものなのに、ましてこんなバラックにゐて又た少し離れたところに『勞働に如く悅びは無し』と書いた紙が貼つてはあつたが、馴れない勞働をして其の日の暮しを立て、た上に、一と揃ひの着物を持ち、一と通りの家具を備へ、人並みの家に住むには、火に追はれて上野の山の石階を登つた苦勞を十度び百度び繰返さなければならないので、そこでやつと『正しい希望』を持てば持ち得られる境遇になるといふもので、そこになるのは正しいも正しくないもない、今の世の中ではどうしても達しなければならない希望なのである。

岡本一平の、

筆にも描き難からん、

上野の山バラのツクの夢

日比谷や、上野や、芝や、さういふところに建てられたバラツクの人々が仲よく自治制などを布いてゐるといふのは、私には極く表面のことのやうにしか思へないのである。斯ういふ世の中では、それは生存競爭の、私有財產制度のことを言ふのであるが、バラツクの板一重の隣りが、一ツ廉の商人であつたとすれば、元からの勞働者である者は、氣の毒だと思ふであらうか、好い氣味だと思ふであらうか。若し又た同じ程の以前は資產を持つてゐた同士であつたとすれば、初めは慰め合ひもしやう、吾れこそ先きに一と旗揚げやうと互ひに嫉妬の探り合ひをしないであらうか。恰もと言つてよいか、生憎と言つてよいか、私は今日新聞社で、上野の山のバラツクの人達が十三人賭博をして検擧されたといふ通信と、日比谷のバラツクでは市や慈善團體のいろ〳〵の施設は整つたが一般に人氣が惡く、晝でも夜でも干物でも家具でも、家の外へ出して置くと一寸の間に盜まれて仕舞ふといふ原稿を見て來たのであるが、少しも早くバラツクから脫出しよう、板一重隣の人に立ち優らうといふ切ない慾望の現れが、斯ういふ淺ましいバラツク世相の一面を形造つて行くのである。善人も居やう、相互扶助もあらう。が、世の中は一口に言へば淺ましく醜い爭ひの集團で、最初の感激が過ぎ去れば、バラツク長屋こそは、爭ひ難い世の中の縮圖であらう。ことに日本人とはどんな人間か、地震以後いろ〳〵の事件が私にそれを見せて吳れたが、このバラツクも多くの教訓を與へて吳れるであらう。

かの古き、
わが住み馴れしバラツクに、
早や歸らなん、妻子の家に
歸らなん、

×

手足を伸べて、安らかに、
あらばあるべし、雨は漏るとも

政治論と蟋蟀

上司小劍

○

バラックもおつなものだ。なぞとうつかり言はうものなら、同情のない冷酷殘忍な人間として叱られるほど、氣の立つた東京の燒跡だが、しかし、バラックになつてから、却つて綺麗になつた家も、あるにはある、何分蝿の多いのが閉口だけれど。

バラックと言つても、いろ／＼ある。大火災前の東京にもバラックはあつた。衆議院、貴族院の建物なぞもバラックの上等なものだ。中央郵便局に至つては、ほんたうの大バラックで、バラックの王ともいふべきものであつた。三越の如き鐵骨煉瓦の家が燒けて、中央郵便局の焚き付けのやうな家が羽目板一枚焦がさなかつたのも面白い。

九月三日に上野公園を通つた時、燒跡からまだむうツと火氣のある風が流れて來る土手の上に、バラックを造つて住んでゐた人があつた。それはバラックとも言へない、寧ろ蒲鉾小屋であつたが、土手の草を刈つて青く屋根を葺いたのに風情が見えた。そんなのが二つ並んで、双方の主人と思はるゝ髭のある人が、赤く燒け爛れたトタンの間から首を出し、頰杖を突き合つて、頻りに話し込んでゐた。私も其の土手の眞下に、いやな臭氣のする草の上へ用心して腰をおろしながら、聞くともなしに聞いてゐると、二人の口から出るのは、地震や火事の話でなくて、『山本内閣が……』といふやうな議論であつた。意見が合はないと見えて、だん／＼大聲に青筋を立てつゝ辯じ合つてゐたが折柄『東京市救護係』の旗を立てた貨物自動車がやつて來て、玄米の握飯の配給を始めたので、山本内閣論は物別れになつて揃ひも揃つて腕時計まで嵌めた二人の髭男は、いち早く草の家を飛び出したが、やがて二人揃つて三角形に紙へ包んだ餘り大きくない握飯を貰つて來て、暫らくは無言でむしや／＼やつてゐるらしかつた。

『お隣りの先生。』

暫らくすると、さういふ聲が、私の頭の上に聞えた。『はい。』

と答ふる聲が三尺ほど隔つた此方の草の家に聞えた。先刻の二人の髭男はまた腕時計の嵌つた腕で頰杖をつき、前と同じ恰好で、燒けトタンの間から身體を半分づゝ出しあつて、再び談敵になり出した。しかし、山本內閣論のつゞきかと思つたら、今度は東京市再興の話で、『都市計畫もこの際思ふ存分やるでせう。』といふやうな話であつた。『實際東京は行き詰まつてましたからなア。』とか、『自分が燒けないでこんなことを言ふとわるいが、無一物で燒け出されたから、遠慮のないところを言ふんですがね、實際燒けでもしなけれや、市區改正なんて、根本的にはとても駄目ですよ。今度は大にやるでせう、これを機會に。……何んと言つても內務大臣が後藤さんですからね。』とか、『大いに外債を起して、立派な東京市を造るんですな。外債の多いといふことは、そんなに憂慮すべきものぢやありませんよ。』とか、政治上の話では衝突した二人の髭男も、都市計畫では、大に意氣が投合してゐた。それがあの大慘事のあつた翌々日のことだ。私は矢張り世には樂天家もあるものだ。泣き蟲ばかりでないと思つた。

○

私の知つた人が京橋に建つたバラックは、四疊半の茶室がゝりで、眞ん中に爐を切つて、小さな床の間さへある。嚴重ではあつたが古かつた元の燒けた家よりも、はるかに粹な、坐りごゝちのよいものとなつた。しかし、丸燒けに燒いてしまつたので、掛ける軸物もないし、よしあつたとて、この場合書畫なぞをかけて見る氣にはなれませんと、主人は寂しく微笑んだ。唯一人の娘さんがどこからか竹花いけを工面して來て、それを床の間の壁の眞ん中にかけ、赤い花を一輪挿したので、恐ろしいほど室の趣きはよく整つた。惜しいことには、それが椿（今はないが）か何かの純粹な日本花でなくて、西洋種の草花であることだ。せめて黃菊でも一枝、この次ぎに來る時持つて來て娘さんに上げたいと、私は思つた。いつも柔かいものばつかり着てゐた娘さんも、今は假仕立ての紡績飛白の袷せを纏ふて、いやにぶく／＼してゐる。

『大變に洒落たバラックを建てましたね。』と、私が主人に言ふと、主人は何んだか申しわけなさゝうに、頭を掻いて、

『實は賴んで來た大工が、芝居の道具方をしてゐたものでしてね。面白い男なんです。同じ建てるんなら、何か穢つたものになさいよ、材料も手間もさう高くしないで、御殿でも茶室でも大道具式で、お好み次第のものを建てますから、といふわけなんです。そしてわたしが首をかしげてゐますと、一つ南禪寺の山門か、金閣寺のやうなものを拵へて、あツと言はしてやらう

ぢやありませんかと、馬鹿に力を入れ出して來たんです。其の結果がこの茶室です。』と、青い紙を貼つた室内を、きまりわる氣に見廻した。

『今に、天井を貼りまぜにしてあげるといふんです。』と、横の方から娘さんが言ひ添へた。茶室のことだから、天井はごく低くて、背の高い主人が立つて、頭を打ちさうであつた。

『夜になると、蟋蟀が鳴きますの！。床の下で。』と、娘さんは美しい眉を顰めつゝ、私に膝を向けた。さうして『あの火事でも死なゝかつたんでせうか。』と問ふた。

『材木にでも附いて來たんぢやありませんか。しかしあゝいふものは、人間のやうな不自然な生活をしてゐませんから、地震にはむろん平氣ですし、火事にだつて土の中にもぐり込んで生きてゐたかも知れませんよ。火事といふものは、大抵人間の自ら招いだ災ですから。』と、私は教へるやうに言つた。娘さんは素直に頷いてゐた。

『バラックも日比谷あたりのを見ると、粗末は粗末だが、なか〳〵整つてる。むしろ災前の東京市には、あれだけ整つた、自然な、人間の生活集團を見ることが出來なかつたと言ひたいくらゐです。』と、主人は長い膝でキチンと行儀よく坐つて言つた。

『多くの人間が偶然に集合したのですから、今の世の都市は皆活きてゐません。一つに貫いた都市の生命といふものがありません。バラック部落には、或はそれがあるかも知れませんね。活きた町をバラックに見ることが出來るかも知れませんね。』と私は答へた。

もう日が暮れかゝつた。五十燭の電燈が頭の上に光つた。こればかりは、どうも茶室らしくなかつた。

千代秋の政岡のやうに、茶の湯の釜（むろん灰の中から掘り出した）で、娘さんが炊いた暖かい夕飯を喰べて、私はこのバラックに快く一夜を語り更かした。

店頭の蠅

田中貢太郎

冷たい淋しい雨であつたが何所かしら光澤のある雨が降つてゐた。私は商科大學の前を通つてゐて、その一方に擴がつた錦町方面の燒跡の、燒けて赤茶けたトタンを葺いた掘立小屋や、殘骸のまゝで立つてゐる煉瓦やコンクリートなどの建物にやつてゐた眼を、ふと路ぶちの街路樹におとした。其所には火のために燒かれて半枯れになつた七八本の鈴懸の木があつて、その内の二三の裸木の幹の所から、淺緑の若葉をふいてゐるのを見つけた。私はその痛痛しさうにふいてゐる若葉を見て、東京市の三分の一を燒きつくした猛火の凄かつたことをしみじみと感じた。

私はその日の三時頃、麹町の方へと出かけて行つた。それは麹町三丁目の電車停留場に近い所にゐた出版書肆のことを思ひだして、避難先から歸つて來て假普請でもしてゐるなら見舞を云はふと思つたからであつた。そして往く路で靖國神社の馬場に出來てゐるバラック長屋のことを思ひだして、入つて行つた。雨は止んでゐたが暗い空がおつかぶさるやうで、それで空氣がばかに冷たく、地べたは地べたでどろどろに捏ねかへしてあるので、歩いてゐても氣持ちがわるい。厭になつて立ちどまつたが、折角來たものだから通りぬけるだけでもしようと思つて、右側へ寄つて歩いた。長屋長屋はひつそりして、入口に葭を張り、藁莚をつるし、内にはガラス戸を締めてあるなど、あまり人の出入してゐる所はなかつた。一人二人人の頭のくすんで見えてゐる所は、牛飯か野菜かを賣つてゐる所らしかつた。私はそのうちに、すぐ右側の或る一軒の入口に小さな臺を置いて古雜誌を並べてゐるのを見つけた。私は珍らしい物を見つけたやうな氣持ちで、その前へと行つた。狹い家の内の薄暗い所には、三十ぐらゐに見える小柄な女が子供の頭髪を結うてゐた。雜誌は二三種の婦人雜誌であつた。私は荷物と共に持ちだして來た物を賣つてゐるのではないかと思ひながら覗いた。桔梗のやうな紫の花をちらしてある表紙の、ちやうど一つの花の

蓮になつた所に一疋の蠅が凍えたやうになつてぢつとしてゐた。氣を注けて見ると、蠅は木炭の粉を落したやうにそのあたりの雜誌の上に點點としてとまつてゐた。私は二三日前丸の内の東洋軒の食堂で、新聞記者の友人とその時は僅にそれしかできなかつたライスカレーを喫つた時に、蠅の多かつたことを思ひだした。

私はそれから遊就館の煉瓦の外壁の崩れたのを見て、池の傍を廻り、横門の方へと行つたところで、其所の立木に寄せかけてこしらへた避難者のゐる小屋が三四軒あつて、その傍に一所藁莚を四隅につるした所があつた。ちやうど私がその傍へ行つた時、一軒の小屋の口から出て來た若い女が私を氣にするやうにしてその内へ入つて行つた。

私は其所から上六番町の方へ行く坂の在る廣い路を行つて、麹町三丁目の電車の停留場の傍へと出た。路の右角になつたその出版書肆の跡には、板屋根の假普請が出來かけてもう外圍ひもしてあつたが、家の者もゐなければ大工もゐなかつた。

○

東京驛の前にある丸の内ビルデングの七階の事務所へ遊びに行つて、二時頃友人と二人で、大塚行の電車に乘つて歸らうと云つて呉服橋まで行つた。行つてみると殘存建物の爆破をやつてゐるために、四時まで神保町までの電車がないと云ふので須田町まで行つて乘ることにし、日本橋の通りに出て、裝飾の燒けた日本橋を渡つた。

『好い所を見つけて、鮓をたべませう。』

友人はゆつくり歩きながら云つた。その友人とは數日前、吹き捲くる風に泥灰を浴びて、銀座の燒跡の青いペンキで塗つたエスキモー人種の住んでゐさうなカフエーライオンの假小屋を見、まだ灰ならしをしたばかりの天金の跡を見、服部時計店の跡の池のやうに溜つた水溜りを見、路の兩側に出來た煉瓦の塀を見、その塀の間間にある假圍ひの飲食店を見、讀賣新聞社の外壁ばかり僅に殘つてゐるのを見た後で、やはり魚河岸跡の鮓を喫ふことになり、丸善の建物の鐵骨が飴細工を潰したやうにぐじやぐじやに潰れてゐる傍まで來たところで、夕立が來さうになつたので、鮓はそのままにして呉服橋から電車に乘つて歸つてゐた。で、私は、

『今日は、やりませう。』

と返辭をして友人に隨いて行つた。魚河岸の入口、いつも鮓屋やテンプラ屋のゐた所に、その店をやつてゐた人達であらう。もう假圍ひをこしらへて三四ヶ所で鮓やテンプラを賣つてゐた。私達はその右側のテンプラ屋の傍の男二人でやつてゐる

鮓屋へと行つた。其所には一人先客があつて白い股引の汚れた腰のあたりを見せてゐたが、私達と入り違ひに歸つて行つた。

鮓屋は私達の前へ一皿づつの鮓を置いた。私は鮓屋の握るのを待つてゐて、その生生したのを片つ端から喫はないと、旨い所がひからびてしまふやうな氣がして物足りなかつた。それにむきだしに鮓臺の上に並べた鮓の上にも飯櫃の上にも、胡麻をふつたやうに蠅がとまつてゐて、それが二人の皿の上にも飛んで來るので氣持ちがわるかつた。私達は左の手を團扇のやうにせはしく揮つて蠅を追ひながら、右の手で鮓を撮んで喫つた。醤油をつける時にでも左の手をちよとでも止めやうものなら、もう蠅が來て動かない。

友人は悠然と二皿の鮓を喫ひ、腹のふくれてゐる私は一皿を喫つて、其所を出て歩いた。そのままにした燒跡、かき寄せた灰の山、燒けた石や破れた瓦で出來た丘などの並んだ右側の燒跡に、一軒こさつぱりした假普請が出來て、五六人の客を店頭に呼んでゐた。それは海苔の山本であつた。私達は其所へ入つた。店頭にはぐるりと臺をこしらへて、それに罐に入れた味著けの海苔などを置いてあつた。私達はその臺に添うて立つた。臺の後では店の男が二三人彼方此方して客に品物を賣つてをり、家の内にも二人ばかりの者がゐて海苔を弄つてゐた。災變の變死者と共に、魚の感觸も海の感觸も厭になつてゐた私も、その海苔から波の淸らかな海を聯想することができて、ちよと好い氣持ちになつた。友人は其所で幾等かの海苔を買つて、それを新聞に包んでもらつた。

『あまり好い海苔ぢやないでせう。地震前でもずつと高かつたから、』

友人は店を出てからこんなことを云つた。

○

新聞記者の友人と東洋軒の食堂へ入つた日は、十月の五日頃であつた。その時私達は食事中に恐ろしい物の音を二三回續けざまに聞いた。それは警視廳の建物を爆破してゐる音であつた。私は食事の後でその爆破の光景を見たいと思つて、警視廳の建物を眞正面に見る地位にあるその友人の勤めてゐる新聞社へ伴れて行つてもらつて、裏手の四階の窓際に立つてゐた。と、何所かでラッパが鳴つた。こゝ堀端を往來して居た電車がぱつたり通らなくなつた。あのラッパがその合圖だらうと思つて見てゐると、帝國劇場の建物と警視廳の建物との間へ七八人の兵士の姿が見えた。そしてその兵士がそのまま警視廳の建物の影に隠れて見えなくなつた。

『火を點けに來た、火を點けに來た、』

傍にゐた職工の一人が云つた。そして五分間ぐらゐもすると、はじめの兵士が出て來て、それが走つて帝劇の建物の方へ隱れて行つた。

『もうやるぞ、』

地に徹るやうな爆裂の音が起つて、赤煉瓦の建物の一角に赤濁りのした煙がすうと立つたが、それが擴つて建物を包みかけると共に、建物の一部が浮きあがるやうになつて、それからのしりと崩れた。爆裂の音は三回續いて起つた。その音が起るたびに赤濁りのした煙が立つて建物の一部が崩れた。赤濁りの煙は暫くそのあたりにたなびいて消えない。そしてその煙が消えかけると兵士の姿が見える。そしてその兵士が引返して行くと又爆破の音が起つて、建物の一角に赤濁りのした煙が絡まる。

二回ばかり帝劇の方から露はれて來た兵士は、もう日比谷公園の門の方へ往來するやうになつた。兵士は往復共に機械人形のやうになつて走つた。公園の門には薄赤い小さな旗が立つてゐて、他にも數人の兵士の姿が見えてゐた。私はその爆破を四五回見て、友人と別れて新聞社を出たが、その新聞社の向側にある新聞社に用事があつたので、其所へ行つて用を濟まし、數寄屋橋の方へと歩いてゐた。と、其所の鐵道線路の橋の下で、さつきの友人に出くはした。

『ユニオンのお神さんが、バラックを建てて店をはじめてをりますよ、寄つて行きませんか、』

ユニオンは私達仲間の小集をやる所であつた。私はかねてその友人から、ユニオンのお神さんが日比谷公園へ避難して、燒けたトタンで圍ふた小屋の中に穴熊のやうにしてゐたと云ふことを聞いてゐたので、その見舞も云はふと思つてそのまま一緒に行つた。

鹽瀬の本店の建物の一部を使用してゐたカフエーユニオンの跡は、すぐ線路下にあつた。其所にはもうトタンを屋根にも外圍ひにもした小さな假普請が出來てゐて、狹い土間には白い切れをかけた急ごしらへのテーブルを三つばかり置き、それだけは見覺のある椅子を添へてあつた。私はお神さんにちよと見舞を云つてから、友人と向きあつて腰をかけた。

『椅子は出しましたね、』

と云ふと、お神さんは、

『椅子も、何も、すつかりガードの下へ出して、其所で燒いたり、盜まれたりしましたのよ、この椅子は、警察へ置いてあつたもんですから助かりましたわ。それでも十脚のが八脚になつてました、お巡りさんの服さへ無くなる場合ですからね、』

と云つて笑つた。私達は正宗をもらつて飲んだ。其所にも罹

がゐて、うるさく料理の皿へ集まつて來た。
『えらい蝿だ、死んだ人の魂が一つ一つ蝿になつたでせうね、』
私はつまらないことを云つてはしやいだ。もう夕方であつた。友人の仲間の若い記者が來て、友人に今晩はじまる寄席の記事をとりに行くから一緒に行かないかと云つた。大地震以來はじめて好い氣持ちになつた私は、『僕もつきあはふ、』と云つてその黄昏時、二人の記者に随いて自動車に乗り、荒涼とした燒跡を見ながら四谷見附の方へと行つた。

バラック生活を見て

新井紀一

現代の人々が皆んな無一物の無産者になつて、竹の柱に萱の屋根――式の生活を營むやうになつたら、それこそどんなに詩的で、どんなに單純で、どんなに吾々の情操を至純にするか。さうなつた曉の人間の生活は、そして心は、どんなに簡素で、純朴で、高貴で、氣持のいゝものだか、それこそ現代の各方面に行き詰まつた虚僞、虚飾、虚禮、奢侈……の生活を根柢から覆して、導向如何に依つては、吾々の常に夢想して止まなかつた理想の生活を生み、社會を建設するだらうと思はれたことであるが、そして事實に於て、その夢想が實現されて帝都に棲む人々の大半が無一物の無産者になつた今日、果してその人々が原始時代の純朴さに復つただらうかと思ふ時、私達はそこに遺憾ながら絶望を發見するばかりなのが怨めしい。

青いものと云つては僅かに街路樹ぐらゐしかなかつた吾々都會生活者が、上野とか芝とか日比谷とかの公園に一歩足を踏み入れた時、どんなにそこの樹木が吾々を慰め力づけてくれたか知れない。かういふところに家でも建てゝ棲んだら、それこそ山間に別莊を持つたり、旅行したりする暇もない、金もない、そして自分自身を慰めることの出來ない吾々をどんなに幸福にするだらうと夢想したことであるが、そして或る人々は今日その夢想を實現して、その公園の中に建てゝ貰つた家の中に棲ん

ゐるのであるが、その人達は果してどんな感慨を持つてゐることだらう。そこに棲んでゐる人達は今や公平な無産者であり同じ食物を供給され、同じ建築の家に棲んでゐる。形式に於て社會主義の世の中が來たやうにさへ思はれる。併し、それが本當の欲求からでなく、止むを得ない事情から殆と止むを得ずにさうした生活をしなければならない狀態にあるのだから悲慘だ。そこに棲んでゐる人々が果して一人でもその自然を享樂し、その生活を讃美してゐるだらうか、と云ふと決してさうではない。彼等は一人としてその生活に滿足を感じてはゐない。幸福を感じてはゐない。彼等には過去の夢が殘つてゐる。その夢が現在の生活に呪咀の眼を向けしめる。その夢こそ彼等が傳統的に過去から繼承して來たところのブルジョア意識である。彼等は今再びその夢を取り戻さうと腐心してゐる。彼等の所有慾、權勢慾は煩惱の犬の如く拂へども去らない。否、拂はうともしない。戀々としてゐる。彼等の不幸なる所以である。從つて彼等の努力は過去の再現であり、復活である。再び昔の財産權勢に向つての憧憬である。彼等に依つて復活される帝都は、何年かの後、都市を形成する外觀は或は今までのものより立派になるやも知れない。併しその質は同じである。内容精神は同じである。

九月三日の明け方、私は夜警の足をそのまま家へ歸らずに上野へ行つてその丘の上に立つて見た。震災後東京へ出た初めだつた。上野の山は避難者の群で一杯で、身動きも出來ない程だつたが、僅かに二尺巾位の通路を殘して兩側にはぎつしり罹災者が陣取つてゐる。野天のまゝ蓆を敷いて疲れ切つた、失神したやうな蒼ざめた顏を仰向けに、ぽつかり口を開けて埃のひどい中を寢てゐる。中には燒トタン板を拾つて來て、兎も角身を容れる程の小屋を作つてゐる者もあつた。が、兎に角混沌時代で、異常な恐怖と疲勞と絶望とに襲はれた彼等の顏には、そのどこにも生色と云ふものはなかつた。彼等は一體どうなることだらう。――それが先づ第一に私の氣懸りだつた。併し彼等はやがて建設される帝都の市民である。若し帝都が復興されるものならば、打ちのめされたやうな彼等のどこかにその氣魄が見られなければならない。

丘から見渡し得る範圍の東京は全部が灰になつてゐる。ところどころまだ餘燼が焔を吹き上げてゐる。市民はこの焦土を如何に開拓するか、如何なる世界を築き上げるか、如何なる帝都を復興するか――それこそ最初の人類に與へられた出來上つた許りの地球と云ふやうな感じである。

×

九月六日の月、私はその前日になつてやつと避難先の知れた叔父の一家を二重橋前の廣場に訪ねた。日本橋を燒け出された弟の一人が偶然、そこで落ち合つたと云つて知らして來たのだつた。叔父の消息が知れたので、六日の午後私はその避難先を訪ねたが、そこは案の定、燒トタンを拾ひ集めて來て、その附近の誰もがやつてゐるやうに蒲鉾小屋を造つてゐた。燒ける前懇意だつたと云ふ向ひ合ひの一家族と同居してゐた。兎に角その日はもう震災後六日も經つてゐて、叔父の一家も附近の人達も、兎に角生色を恢復して今後を如何にやつて行かうかに腐心してゐる最中だつた。文字通り膝を容れる余地もない小屋だつたので、叔父は私の爲めに小屋の外まで出て來て、聲をひそめて云ふのである。

「人間つて實際ひどいもんだ。薄情なもんだ。今度のやうな出來事にぶつかつてみて初めてその人の本當が知れる。この小屋なんかだつて……」叔父は自分の小屋を指し乍ら云ひつづける。「俺が實際一人で燒跡へ行つてトタン板を拾ふやら、知り合ひの處へ行つて天幕を借りて來るやらして拵らへたんだ。それをSさん（小屋に同居してゐる人）と來たら初めから同居するつもりでゐながら手傳はうともしないのだ。そして出來上るとさつさと自分達だけの荷物を持ち込んで了つてから、その云ひ草がいゝや。――「多勢で居る方が氣がまぎれて氣强くていゝですな」だとさ。それもさうだ、と俺は云つたが、それも俺はふだんから勞働なんかして腕つ節が强いし、Sさんと來たら今まで旦那樣で納まつてゐた人だから、俺ももう仕方がない、と思つてたんだ。それから飯を炊く段になつて、俺のところぢや着物や夜具や、道具類は全部燒いちまつたんだが、米だとか味噌だけはどういふものか擔げるだけ擔いで來たんだ。そしてそれを炊くといふと、Sさんの家の者なんか無論、その近所の小屋の者までが、どうか小供だけにも少し喰べさせて下さい――つて云つて皆んな持つてつちまつて、間誤〳〵すりや自分達の口にさへ這入らないやうな始末なんだ。それもいゝさ、こつちちやかういふ際だから出來るだけ都合してお互ひに助け合はうと思つてたんだが、扨て、俺のとこの米がなくなつてから、今度はSさんがどこかへ行つて米を少し都合して來たんだ。で、こつちでも當然――つて云ふとおかしいが、兎に角、小供達にだけも米の飯を喰はせてやらうと思つて貰ひに行くと、癪に觸るぢやねえか。ふだんなら兎に角、かういふ際だからお互ひに喰べ物のやり取りは止めませう、物事はきちんきちんとして置かないと萬事が極まりがつかなくて亂雜になつて困りますからな――つて拔かすんだ。今まで俺のとこのものを喰つた口でさ」

叔父のそんな憤慨を聞いて別れてから、叔父は間もなく二重橋前を引き拂つて私の家へ避難して來た。弟二人もやつて來た。叔父は今でもその時の話をしては口惜しがつてゐる。あんまり自分勝手だ、圖々〳〵し過ぎる、と云つた。

×

九月三日の朝、上野の山から見た東京市はまるで地球創生時代――人類が初めて地球を與へられた時の感じだと云つたが、今ではもう紛然雜然といろ〳〵なバラックが一杯に建ち列なつてゐる。いろ〳〵な生活が始まつてゐる。人類は新らしい焦土の上に生活を始めたのだ。もと、豆腐屋のあつたところへは豆腐屋が店を開き、瀬戸物屋のあつたところへは瀬戸物屋が、酒屋の跡へは酒屋が……夫々に商賣をしてゐる、たゞ、牛めし屋、ライスカレー屋、今川燒屋、しるこ屋、等等等所謂飲食店の夥しく殖へてゐるのが驚くばかり眼を惹く。露店は勿論のこと、一軒の店を構へてるところまでがどうしてから飲食物ばかりを商ふやうになつたのか、と思はれる程である。が、それは要するに震災當時の遺物である。食物の全然なかつた震災當日から十日近ぐらゐの時は、口へ入れるものでさへあればどんなものでも賣れた。その風を望んで、物資の供給豐かになつた今日、尚當時の繁昌を眼に描いて商賣を始めた者の失敗は寧ろ當然過ぎる。今からして軒並にある飲食店はやがて陶汰される日が來やう。資本のつゞくもの、腕に覺えがあつて旨いものを喰はせる店――それらが殘つてやがて昔の東京に復つてゆく。燒け出されて來た私の弟二人は九月の末頃、吾妻橋の畔へ天幕張りのライスカレー屋を開業した。もつと早く始めたがつてやきもきしてゐたのだが、米だとか肉だとか其他の材料が手に入らないで却々初まらなかつたのだ。が、弟達の手へそれらの材料が入るやうになつてからは、その時はもう誰れの手にもまた入る時だつたので、その商賣は美事失敗し立つて了つた。が、兎に角さうして自分の手に依つて、力に依つて建つてゆく燒跡のバラックは、見た所田舍の新開町のそれと變りはないが、その生活資料を得る根本の手段動機と云つたやうなものは、今までの堂々たる店舖でやつてゐた商賣と少しも異なるところはない。只、低い床、トタン葺きの屋根、壁――で、寒さ暑さに感じ易く、風が洩り易く、兎角生活が今までのやうに愉快でなく、苦しく病氣に罹りやすく、見た眼にも、あれぢや實際たまらないだらうと思はれるやうな生活ではあるが、それは要するに、尨大な今までの生活を縮少したものに過ぎない。簡單にしたものに過ぎない、帝都復興――が、單にそれら縮少されたものの、簡單化されたものの、復舊を意味するならば、我等はまた何をか云は

んやである。資本主義の根は今や、燒跡の灰燼の中へどん〳〵根を張りつゝあるのだ。要するに東京は、何年かのバラツク時代を過ぎた後は、外觀上堂々たる都會を出現するだらう。耐震耐火の大建築物は東京を隅から隅まで埋めて了ふだらう。道路の幅員は廣くなり、公園は增設され、擴張され、河川は修築され、學校は今まで通り建つだらう。が、その時になつて新東京を眺めたら、只、家屋が立派になつて公園が廣くなつて……と云ふに過ぎなくて、あの悲慘を極めた震災も、これら市民に對して何んら敎へるところのなかつたことを發見するだらう。なぜなら、所謂復興の途上にある無數の罹災者達――玄米の一線上に立たされた無產階級の人々がこの震災から一向敎示を受けるところなく、飽くまでエゴイズムに立脚し、弱肉强食を肯定する資本主義を肯定し、己れ一人をより善くしようとして地震前期の生活に戀々として逆戾りをしつゝあるからである。可なり大きなショツクを與へたには違ひなかつたがその地震は一向人々に精神的の覺醒を與へず、より新しき社會への建設に眼を開かせなかつたからである。

×

私の近所の小學校には今でもその雨天體操場に罹災者達が起居してゐる。何家族か知らないが、彼等は各々に小さな釜、小さな竈を買つて來て、僅かばかり貰つて來る配給米を夫々の釜で炊いてゐる。若し彼等が共同して、少し大きな釜を買ひ、竈を買つて炊事したならばどれだけその勞力の上に、薪炭の上に、費用の節約が出來るか分らないだらうと思はれるのに、彼等は飽くまで排他的、獨善的、利己主義的家族主義の生活を營んでゐる。震災は可なり人間を解放し、共同精神を鍛へたと思つてゐるのに、かうして幾分か落ちついて來た後の罹災者の群を見ると、彼等を支配してゐるものは矢張り地震前期の生活信條である、と云ふことである。地震は一向彼等の頭をまで打開してはゐなかつたのだ。原始の曠野に蒔かれる社會生活の種子が既にそれである。帝都復興は遂に、地震前の東京への復舊に過ぎないやうに思はれてならない。

×

上野とか芝、日比谷其他の公園や何かには今バラツクの街が整然と出來上つてゐる。向ひ合つた家根から家根に張り渡された竿には襁褓やら何やらの洗濯物がづらつと干されてある。何んの事はない、貧民窟のどこにも見られる長屋だ。彼等は至るところ行列を作つて笊やら風呂敷やら、いろ〳〵なものを持つて、米味噌から醬油薪炭の類に至るまでの配給を受けてゐる。小さな小供や、女、年寄りなどが行列を作つてゐるのはまだい

ゝ。が、その中に壯年の男が無駄な時間を費してその女小供の中に交つてゐるに至つては、仕方ないとは云ふものゝ、何んとなく厭やな感じを受ける。彼等はどうして働きに出ないのだらう？　働きたくも仕事がないと云ふのか。今まで髭を生やして洋服を着て、俥で勤めに出た手前、幾らこの際だつて人夫なぞ出來るもんかと云ふのか。それで呉れるがまゝに働かずに、無償で配給を受けてのらくらとバラツクの中に寢てゐると云ふのか。成る程彼等は今までの職業を無くした。が、若し彼等が仕事を無くしてするべき仕事がないのならば、彼等が當然らしい顏をして居住權を與へられたバラツクに細まる代りに、なぜ、市の爲めに灰掻きをでもやらないのか。市はまたなぜさうした處置を取らないのか。氣の毒な罹災者にそんな強制は出來ないと云ふのか。併し良心のある罹災者の多くは、その灰掻きをでも――と思つて朝早くから勞働に出かけてゆくではないか。若し彼等の中に、勞働嫌惡の心理が幾分かでもあるならば、それこそ地震前期ののらくら民族であつて復興さるべき帝都に要求さるゝ市民ではない。よろしく帝都復興の犧牲としてこの帝都から放逐すべきだ。彼等は勞働の代りに常に、如何にうまく立ち廻つて他人の小股を掬ふべきか――をばかり腐心してゐる連中である。そして適々思ひ通りに行つた時、眞正直に額に汗して勞働の報償を得てゐる者を目して、氣の利かない馬鹿者だ――ぐらゐの事を云つて嘲笑する連中である。

　バラツク生活はさうした人間を見分ける篩である。新帝都復興に役立たない。その篩からふるい落されるやうな横着物は、よろしく都市を放逐するか、強制の下に勞働に從事さすべきである。衞生設備、風紀の取り締りも必要であらう。だが、それよりも必要なのは、眞に無産者の精神を體得した健全なる市民を作り出すことであらねばならぬ。

　秋は深くなつてゆく。寒さは增してゆく。トタン板の隙間から吹き込む風の冷たさから、配給される米味噌の味から、過去に於て如何に自分の使用人や眼下の者に對して情れなく虐遇したかを思ひ當る者があるならば、そして更に、さうしたブルジヨア意識に依る生活が如何に間違つたものであるかを思ひ當るならば、今日のバラツク生活は彼等に取つて如何に尊い魂の入れ換へ場であるか知れない。

蓄音機と德利搗とトタン板の音

宇野浩二

十月の初の或晩、私は家に歸る途で、上野公園の中のバラツク町を歩いてゐると、蓄音機の安來節が聞えるので、その音のする方へ引かれて行つた。それは、そこにどんな光景が展開されて居るのだらうと思ふ好奇心の外に、私自身隨分長い間音樂といふ音樂を聞かなかつたので、その蓄音機の音樂を聞かうと思つてゞもあつた。それは普通の公設バラツクに見る普通の長屋建のものではあるが、それの五軒分位を區劃なしに打ち拔いたやうな體裁の一棟で、從つて出入口は往來に面した方にでなくその横の方にあつた。往來に面した方には粗末な障子の嵌まつた五箇の窓が附いてゐた。

私はなるべく足音を忍ばしてそれ等の窓の一つに近づいて行つたのであるが、不思議に思へたのは、そんながさつなバラツクの中でのことだのに、安來節をうたつてゐる蓄音機だけが變に靜肅に鳴つてゐて、當然それを傍聽してゐる筈の、して見れば決して二人や三人である筈でない人々が、餘り音無し過ぎるやうな氣がしたのである。實際、その小屋から一二間以内の距離に來るまでは、誰もゐない忘れられた小屋の中で、どうかした拍子に蓄音機の機械がひとりでに廻り出して、ひとりでにそんな音樂を奏してゐるんぢやないかといふやうな、さういふ童話的な光景をさへ一瞬間私は想像した程である。

が、近づくに隨つて、無論そこに蓄音機の外に、私は人々の氣配を聞くやうになつた。が、それは人々の話したり、喝采したりしてゐる聲ではなくて、トン〳〵トン〳〵と何かを叩いてゐる音であつた。トン〳〵トン〳〵、と無數に、頻りに叩いてゐる音なのである。多分、人々は音樂に心を浮かされて、思ひ思ひに拍子をとつてゐるのであらうか。

そして私は窓に近づいて行つて、中に一ところ、障子が二寸ばかり開いてゐる窓の傍に立ち止まつて、そつと中を覗いて見た。と、それは更に私の想像に反した異樣な光景であつた。部屋のまん中に粗末な卓子があつて、蓄音機はその上に載せられ

てあつた。それは地震前よく山の手町の小賣商店などの店頭で往來の人の足を止めてゐるのを見かけた、大きなラッパの附いた粗末な品物らしかつた。傍に一人の詰襟の洋服を着た、役場の小使風の男が、それの係と見えて、彼自身も明らかにその音樂を樂んで居るらしく、にこ〳〵しながら、然し默つて、回轉してゐるレコードを見詰めて居る。傍に腰掛があるやうだつたが兎に角その時彼は立つて居た。そして聽き手は？

聽き手は悉く男で、思ひ思ひに胡坐を組んだり、坐つたり、立膝をしたりして、その卓子の周圍を二三重になつて圍んでゐるのだ。それはもう六十近く見える男や、中年の男や、兵隊檢査時分の年頃の者や、そして商人らしい者、勞働者らしい者、或ひは學生らしい者、その他あらゆる種類の男が網羅されて居るやうに見えた。そして、どの男もどの男も、悉く自分の坐つて居る前にサイダーのらしい壜、稀に酒の德利らしいものを置いて、手に手にそれ等の壜或ひは德利の口に、金物か木かの棒を突つ込み又突つ込みして居るのである。トン〳〵トン〳〵といふ音はそれ等の棒の運動に外ならぬのである。それは私に直に分つたが、つまり玄米の德利搗きといふやつに外ならない。私も今度生れて初めて、德利ではないが、擂鉢を臼にして、野球用のバットを杵にして、玄米を搗いた經驗を持つてゐるし、それ迄にも兩三度人がこの德利搗きをして居るのを見たことがあるので、その事をそんなに珍しく感じはしなかつたが、そんなに大勢の男が、蓄音機を取卷いて、兵隊のやうに規則正しく無言で、德利を突いて居る光景に目を見張つた。その恰好が又種々樣々で、或者は居眠るやうな形をして居るかと思ふと、或者は何かを考へてゞも居るやうに天井を見上げて居る、又別の者は口の中で蓄音機の唄を眞似てでもゐるのか、頻りに口を動かしてゐるやうに見えるし、又他の者は暗い明りに苦みながら一所懸命に何かを讀んで居る。

さて、まん中の蓄音機係は、一つの音樂が終ると、「今度は浪丸の浪花節　鹽原多助をやります。」とか、「今度は義太夫、呂昇の酒屋です。」などと報告する。その時に限つてそれ等の德利搗きの連中の中に、彼方此方から「待つてました。」とか、拍手をしたりする聲が起るのである。そして、係の男はそのまゝ口を噤んで、然し相變らずにこ〳〵しながら、蓄音機を見詰め、傍聽人たちは依然として彼等の仕事を始めるのである。その一瞬間の靜まつた中を、蓄音機の唄と、トン〳〵といふ德利搗の音とだけが響き渡る光景は、何とも言へぬ感動的なもので あつた。

それは、確かには言へないが、所謂獨身者バラックと言ふの

ではなかつたらうか。でなくても、未だその設備が出來てないので、假りにそこへ獨身者ばかりを收容してあつたのであらうか。それとも、その晩だけ、さういふ催しをして、獨身者を集めて慰めて居たのであつたらうか。然し又、私の見たところでは、部屋の隅々や、彼方此方に、風呂敷包のやうなものとか、着物とか、襯衣とか、手拭とかゞ置いてあつたり、引掛けてあつたりしたのを思ふと、矢張りそこは獨身者だけを一とまとめにして收容してある場所ではなかつただらうか。

何故私がこんなことを言ふかといふと、これは私だけにしか興味のない話かも知れないが、私はあの九月の初めから、毎日ほど散歩の度に上野公園の中を往來するにつけて、彼方此方の路の傍に散在してゐるバラツクを、興味をもつて、と言つてはそれ等の人々に甚だ濟まない譯であるが、見て通つたものである。中に一軒、殊に私の目を引いたのは、公園の中のどの小屋よりも小さくて、それは實際大きな犬小屋程しかなかつた、全部燒け錆びた亞鉛板で圍つたものであつた。どこのバラツクにしても、人間が二人以上住んでゐる限り、私の今言つたやうな小さなのは有り得なかつた、そしてそれは又一人のものとしても餘りに狹過ぎるやうに思はれた。が、その中に、いつ通る時でも、間違ひなく一人の人間が住んでゐた。而もその男は大柄とは言へない迄も、決して小柄ではなく、年は四十をずつと越してゐたらうか、髯むくじやらな顏で、特長は髮の毛を美術家のやうに延ばしてゐることであつた。だが、その周圍の有樣といひ、その男の裝といひ、髯だらけの顏といひ、總てが彼の長髮を美術家に見せるよりは乞食に見せてゐたといふ方が適當であつた。

更にその男の特長は、いつ通る時に見ても、仰向けになつて寢てゐることであつた。彼はその小屋の中で斜めの角から角に横たはつてゐた、が、それでも小屋は彼に足を延ばさせるだけの廣さを持つてゐなかつた。だから彼は仰向けの時は膝を立てゝゐたし、稀に横向きになつてゐる時は、膝を蝦魚のやうに屈めてゐた。彼が如何に寢てゐたかといふことは、私が日に往復二度以上通る時に一度も起きてゐたことがなかつたばかりではなく、散歩好きの私の母がそこを通る度に、矢張りその小屋と、その小屋の主人公の、彼がいつも寢てゐることが彼女の注意を引いたと見えて、二三度もその話を夕飯の食卓の折に話してゐたことがあるし、又私の近所の人たちの間でも、彼等の目からも逃れないと見えて、その小屋と、いつも寢てゐるその髮の長い男のことが「變つてますね。」といふ程の話題になつてゐた。

「あれは然し、坐つてるにも坐つてられないのかも知れませんよ。」と彼等の一人が言つた。「あれは狭さも狭いが、高さだつて坐つてゐても頭がつかへますよ、屹度」

實際、その話も決して誇張ではなかつた。多分その小屋の高さは、彼が足を投げて坐るとしても、少し身體を屈み加減にしないと頭がつかへる程であつた。然し、私、その者が始終寢てゐる癖があるので、私には矢張りその男は屋根が低い爲ではなくて、寢てゐることが好きな男に違ひないと思へるのである。實際又不自由さから言つたら、先にも言つたやうにその小屋は寢てゐるなら寢てゐるで、筋違ひになつても足が延ばせないのであるから、坐つてゐると同じだけの不自由さがある譯だつた。そして、彼の小屋だけが、外の彼方此方の小屋が一日一日減つて行く中に、一番遲くまで存在してゐたことも、私たちの興味を引いた。

さて、先の蓄音機のバラックの話に戻るのであるが、その蓄音機を取卷いて、總利搗きをやつてゐる大勢の男の中に、私はこの大正の物臭太郎を發見したのである。悲しい哉、こゝでは彼も寢てゐる譯には行かないと見えて、矢張り皆と同じやうに坐つて、そして皆と同じやうにサイダーの罎に棒を突つ込み突つ込みする仕事に從事してゐた。

ところで、この男を私はいつの間にか獨身者の代表者のやうに思ひ込んでしまつてゐたものだから、この男の交つてゐるその小屋の人たちを悉く矢張り獨身者のやうに思ひ、その小屋を獨身者バラックであらうと書いた譯で、外に何の理由もないのである。

私も氣樂な男に違ひないので、その晩そのバラックの窓の前に、かれこれ二三十分間も立つてゐたのではなかつたらうかと思はれる。それには、初めのうちは、無論その珍しい光景が面白くてゞあつたらうが、後には私自身　の蓄音機の安來節や、浪花節や、義太夫やが面白くて、立ち去り兼ねたものであるらしい。その間には蓄音機の機械を卷く間とか、係の男が小用に立つた間とか、或ひは蓄音機のうたつてゐる最中にでも、私の耳が少しづゝ落着いて來ると、窓の近くの傍聽者たちが時々隣同志でか、後と前とでか、話し合つてゐるのが聞えた。——その二三。

「あんたは一體どの位搗きます？」

「みんな二萬遍位といひますが、私は一萬位しかやりません。それでも結構食べられますよ。」

又。

「僕はつい一昨日まで××のバラックにゐましたがね。……」

「あそこのはこゝよりしつかりしてるといふぢやありませんか。」
「さあ、しつかりはしてるかも知れませんが、何から何までがすつかり亞鉛で張つてあるのでね。」
「そいつは困るね。」
「しきりから何から亞鉛でせう。だから、うつかり後へ、壁にでも寄りかゝるつもりで、もたれるとガタンと吃驚するやうな音がするんです。ところが、面白いんですよ。此方でそのガタンといふ音をさして、吃驚して、隣の人の手前恐縮してゐると五分と經たないうちに隣の人が又、うつかりしてもたれるんですね、ガタンといふ音がして、「あツ！」といふ聲がして、急に恐縮したやうに靜かになるんです。氣を附けてゐると、始終彼方でも此方でも、近くの方でも、遠くの方でも、そのガタン、ガタン、「あツ！」とか、中には「御免なさい。」とか言ふ聲が聞えるんです、夜のことですからね。」
「はゝゝゝ。」
「はゝゝゝ。」
そして、それ等の話の間に、蓄音機の唄とトン〳〵といふ德利搗きの音と。（十、二〇）

有爲轉變

藤村千代

實のところ、私は殆んどバラツクと言ふものを見て居ない。いや、見た事は一寸見たのだけれども、あんなのは文字通りにバラツクを見たと言ふのであつて、その中でどんな生活が營まれて居るかを見たのではない。

從つて私は、私の想像裡で勝手に拵へ上げたバラツク生活と言ふものを考へる以外に能がないのである。

私の想像の中のバラツク生活は動いて居ない。薄い板つぺらと燒けてへな〳〵になつたトタン板とで出來上つては居るが、

隙洩る風も知らなければ、トタン板の釘穴から豪雨が流れ込むと言ふ事もない。何日も麗らかな秋日が照つて居る。緣もない粗末な七島の疊であるかも知れないが、その上に坐つて居る男や女や子供は、皆こざつぱりとした袷を着て、何かしら希望に繋がつた微笑を交し合つて居る。

勿論、罹災者に違ひない彼等の事であるから、人々の美しい同情を受けて、ささやか乍らその日の烟を立てて居る。而も彼等はその同情に感謝を強いられると言ふ事もなければ、それだからと言つて、彼等自身が横着な蟲の好さなぞは夢にも持つて居ないと言ふのである。

全く、私の想像の中の彼等は博多人形のやうに美しくこそなけれ、泥人形のやうに靜かで大人しいのである。

ところで或日、私は日比谷から新橋に掛けた一體のバラック街の狹い露路を、二三の人と一緒に歩いたのであつたが、私は其處で、私が彼等よりもつと優しな風儀をして居て、彼等に同情するより前に好奇心を起して居ると言ふので、とあるかど先に立つて居た男達から思ひ切り怒鳴り飛ばされた。

「やい、馬鹿つ！返辭をしろ。！馬鹿！此方へ向けつ。！何だい、洒あ洒あして歩きやあがるない！」

私は、これは大變だと思つた。石の二つ三つ飛んで來るのを覺悟し乍ら、それでも洋傘で自分の體を隱すやうにして、あたふたと道を曲つて行つた。私は私の想像の中の泥人形が、あんな恐しい聲で怒鳴り出さうとは夢にも思つて居なかつたのである。

然し、私はあの怒鳴り聲の中に含まれたさま／＼な怨嗟を聞いたやうな氣がした。

全く、彼等は人形ではない。體が動くと共に心も動いて居る。そこで彼等は見た――汽車や電車の窓から呑氣さうな首が幾つも幾つも覗いて居て、彼等のちつぽけな豚小屋でしかないバラックが、あの芝居の愁嘆場を見る時のやうなとつておきの「氣の毒がり」で哀れまれて居るのを。又、薄化粧を施した通りすがりの女達や、日曜を散歩で暮す遊民などに、同じやうな眼で覗き込まれて居るのを。如何かすると極く偶には、コダックの革袋をぶら下げた令孃風の女にまで、俥の上から見舞はれて居るのを。――

そしてもつと不可ない事には、彼等が薄々乍ら次のやうな事まで感附いて居ると言ふ事である。――あの當時から二ケ月にもならうと言ふ今では、も早や誰もバラックを珍らしがつては居ない。日比谷の中には、ずつと前からあんな風な緣日の露店のやうなバラックの店が列んででも居たかのやうに、日本橋や

神田なぞ、ずつと前からあんなバラックが建ち列んで居て、その中に住んで居る彼等は、あの裏長屋に住むやうに運命づけられた貧乏人でゞもあるかのやうに思はれ乍ら、人々から次第に忘れ去られて行くと言ふ事を、——

そこで、彼等は同情を乞ふ代りに強要する。俺達は罹災者なのじやないか。俺達はお前達からもつと大切にさるべき筈なのだ。

そして誰も振向かない時、彼等は氣狂ひじみた怨恨を抱き乍ら、怒鳴り立てる。

「馬鹿っ！洒あ洒あして歩きやあがるない！」

然し、人々はさつさと行き過ぎて了ふ。命があありや又働けるじやあないか、と言ふやうな流し眼を吳れ乍ら。

斯うした對峙は何と言ふ慘めなものであらう。その慘めさは大災害以上である。

——

然し、私は何とはなしに私がもう六七年も前に通つて來た私自身の生活を思ふ。私は誰からも、二合の玄米は愚か糠さへ貰つた事がなかつた。私の災害は天變でなくて、私のせいであつたのか。とは言へ、何と長く續いた災害であつた事か。

が、私は私が斯うであつたから斯うでなければならぬと言はうとするのではない、私の頭に、「有爲轉變は世の習ひ」と言ふ古風な言葉がふつと浮んだだけである。

以上

バラック・カッフェエ

久米正雄

十月初めの或日、今東光君が來て、四方山の藝術談の後で、突然話し出した。彼は實はその話を持つて來て、云ひ出す機會を求めてゐたらしかつた。

「……久米さん。僕今度日比谷で、バラック・カツフエエを初めましたよ。實は僕ん所へ、燒け出されたり、行き所が無くなつたりした、罹災青年どもが四五名他寄つて來ましてね。どう

にもならないでせう。仕方がないから、彼らと僕たちの自活めいた方法を講ずる爲めに、僕が早速思ひついて、バラック・カッフエを初める事になつたんですよ。で、早速日比谷公園の中央の、バラックの一隅を手を廻して借りる事にしましてね。お袋に事情を話して、五十圓だけせびり取り、それを資本にもう一週間ほど前からやつてゐるんです。尤も僕は計畫部長で、さう云ふ内幕の膳立だけを、やつてやつた譯なんですがね。何しろ是でも文壇では出世前の身體ですから、さう表立つてする譯にも行きませんからね。いづれどうせ知れる事でせうが、さうなつたらさうなつたで關やしません。尻の穴の小さい文壇雀なんぞに、今の奴とうとうカッフエなんぞ初めやがつたつて、惡名を負はされる位は覺悟の前です。僕はそれよりも今の文學青年どもが、かう云ふ時に際しても少しも實行力がなく、意氣地がないのが齒痒ゆいんですよ。さう思つたから僕は敢然としてやり初めました。妙に藝術家ぶつて、はにかんでゐても仕方がないと思ひましてね。だが、やり出した事が餘りに適切なんで、鳥渡氣恥しくて、誰にも云へないやうな氣持はありますがね。貴方ならきつと贊成して、好意を持つて聞いて吳れるだらうし、いろいろな相談にも乘つて吳れるだらうと思つたから、一番先に話しに來た譯なんです。」

「へゝえ、さうかい。」と、私は内心少し躊躇しながら、最近や

ゝ紅頬の色は褪せたけれども、まだ往年の俠勇美少年、――不良美少年と云ひたい所だが、不良と云ふ字を冠せられると、たとひそれが僕たちの仲間で、尊敬の意味を多分に含んでゐても、彼の母親が大變心配すると云ふから、假りに俠勇とか勇俠とかにして置く、――の俤をとゞめてゐる彼の顏を、心からの微笑を以て見守つた。「そんな事をほんとに初めたかい。そいつは偉いね。古書を漁つて、石敢當の考證を作つたりする一方、さう云ふ勇氣があると云ふのは、一種近世的な英雄兒と云ふ感じで面白い。君もなかなか味をやるね。大いにやり給へ。僕に出來る事なら、何でもして應援するよ。」

私はこう云つて手もなく、彼の言葉に乘つて了つた。

「いえ、なに助力をお願するつたつて、時々來て下されればそれでいゝんですがね。貴方がたが來て、一種の人氣をつけて下されば、それだけで充分なんだけれど。……皆、來て吳れまいなア、いづれ菊池さんや芥川さんにもはなしますがね。芥川氏なんぞは案外贊成して吳れさうだけれど、又一方笑はれさうな氣がするもんですからね。菊池さんには、あの人の彈丸にばかりぶら下つてゐないで、僕には是だけの實行力がつてことを、知らしたいきつと喜んで吳れるでせうけれど、何しろカッフエエおやア、わざわざ來て吳れさうもありませんからね。實は昨日も帝國ホテルの時事新報社へ、佐々木茂索氏を訪ねて行つて、何とか宣傳の法を講じて下さいつて頼んだら、貴方がたを

あのバラツクへ引張り出すのが、一番だ。さうすればどうにかゴシツプの記事にはなる。と云ふんですよ。」

「ゴシツプはちよつと困るけれど、此際だから、どんな役にでも立ちますよ。――だが、そのカツフエは一體何處に在るんだい。」

「日比谷公園の中央の入口を入つて、眞ん中の大きな道路の右側で、『學生軒』つて云ふんですよ。四五日前の『日々』を御覽になりませんでしたか。」

「あゝ見た〳〵。あれかい。さうかい。ふうむ。」

私は直ぐ、そのバラツクの前に椅子を出して、學生姿の青年たちが並んで立つてゐる寫眞を思ひ出した。

「あれは何も此方から賴んで、宣傳して貰つた譯ぢやないけれど、向うの社で見付けて變つてゐるカツフエだもんだから、三面の種にして吳れたんです。けれどもあれが出てから、店の前を通る人が、『あゝ此處か』つて風に、大分窺いて過ぎたり、寄つたりするものが多くなりましたよ。それに附近の食物屋やカツフエの中では、兎も角も小ざつぱりした裝飾がしてあるもんですからね。西洋人なぞが時々やつて來ますよ。それに看板に、"Café Wandering Students." と書かせましたんでね。」

「つまり、直譯すれば浮浪學生軒だね。どうして、いつそ思ひ切つて、"Café Black-List-Students" とでもしなかつたんだい。」

「冗談いつちやいけません。手傳つてゐる連中は、ほんとに眞面目な學生ばかりですから。それに酒類は置きませんしね。尤も、これは資本の關係で、いづれは洋酒とビール位備へたいんだけれど、何しろ五十圓の資本ですからね、汁粉と紅茶と珈琲とパンだけでやつてゐるんですが、何しろ皆若くて元氣で面白がつて手傳つてゐるんで、どうやらうまく行きさうですよ。何しろ制服のまゝ四谷まで小豆を買ひ出しに行くんですからね。」

「儲るかい。」私は突込んで聞いた。

「兎も角も資金の五十圓だけは、どうやら二日で取戾しました。が、迚もそんな事では、儲ると云ふ譯には行きません。何しろ近所の美人おでん、美人汁粉を初め、なか〳〵景氣がいゝんですからね。さう云ふ人ちとも、同業者で大變仲がよくなつて、いろ〳〵話を聞きますがね、矢つ張り此方は學生商賣ですからね。――まア一度來て見て下さい。」

「是非行つて見ませう。」

そこで私は、此の新時代の、年少の友の志を嘉して一杯飲み飯を食つて別れた。

越えて十月半ば、澤田正二郎が日比谷の新音樂堂で、野外劇を開催するのに、背景衣裝等の點から野外の上演に適する爲、私の「地藏教由來」が選ばれたので、前日、私も初めて其新音樂堂なるものをひそかに檢分に行つた。そして其歸りに K君の學生軒へ寄つてみた。

見ると間口二間ほどの表がゝりに、ロ被めいたレースの布を垂れ、其處に園遊會まがひの椅子と、それでも白い卓布をかけた卓子を置き、一段高いバラック内には、中央に少し大きた北向卓と、其兩側に汽船發着所風なベンチをしつらへた。それでもバラックの壁には、怪しげな西洋壁紙が貼られ、誰の靜物か知らないが、さううまくもまづくもない洋畫が懸けられ、そして又一方の壁には美しい映畫女優の額。卓上の花瓶。其傍に、積み重ねられた聲樂の講本。雜誌「寫眞藝術」西洋のキネマ雜誌それに驚くべき事には、獨乙のルンド・シヤウ。……雜然として、震前の文化の妙な所ばかりを、變な縮圖にして現はしたそれらの「蒐集」は私をして例の微苦笑を禁じ得さらしめた。

K君は居なかつたが、私は見知り越しの其處の人たちに歡迎せられて、卓の中央に腰をかけた。學生諸君は此の客の爲に、更に蠟燭を點じた。見ると、可なり大きな電燈が、隣りのバラックとの間仕切りをした、板壁の上に於合(あひ)で一つ下つてゐる。

「どうも少し暗いやうですね。バラックでゐせめて燈火ぐらゐは、うんと明るくして呉れなくちや氣分に影響するね。」私はかう云つた。

「是でも此處のは、特別に五十燭の明るい奴をつけて貰つたんですが、それでも暗いんです。何でもヴオルト數とかゞ違ふんださうです。」

「何しろ電燈會社も手が廻らないんだらうが、早く、かう言ふ室内燈でも、街燈でも何でも、滅茶々々に澤山つけて呉れるといゝんだがなア。燈火の暗い事が、一番人心に害があるんだから。」

「何しろ二タ室に一つゞぢやア困りますね。」

「昔の十二階の下を思ひ出して不可ないだらう。」

「まさか。――でも、電燈が於合である事は、善隣の誼(よしみ)を感じていゝです。それに、ほんとに此處では、少し大きな聲でもすると向うの端まで筒抜けですし、お隣り位だとどんな小さな話聲でも聞えますから、バラックに秘密と云ふものはありません。」

「だが、それだから却つて、だん〳〵他人目(はため)を憚らずに、いろんな事をする事にもなるだらうね。此處に於てか獨身バラックの必要があつたんだらうね。僕たちでさへ、うすら寒いバラック内の、人間同志の溫みを考へると、嘸や(さぞ)隙洩る風も寒からんと思ひやるよりは、チエツ畜生!ツて氣になるからね。まさかバラックに居る當人たちに、そんな余裕はなからうが、それでもさつと此のバラック生活は、もつと清い方面でも、人間同志の結合を涙ぐましい程溫くはさせるに違ひないね。僕たちは一面に於て、此の大正の竹の柱に茅の屋根が美しい。」

「でも、道樂にやるのなら面白いでせうが、隨分寒いことは寒いですよ。」

そこで僕は叱られたやうに口を噤んで、殆んど薄濁りのした程度の、バラック紅茶を喫すると、薄暗く、明るく、そして薄賑な宵の、バラック街へ出た。十月に似合はず、塵を含んだ風は寒かつた。ほんとに、嘸や、隙洩る風も寒からう。……

時論

法學博士 吉野作造

山本内閣と普選斷行

山本内閣は今度の議會に普選案を提出すると云ふ。のみならず來年の總選擧は普選で行く堅い決心だと云ふ。首相代理としての後藤内務大臣の法制審議會に於ける答辯は、キビキビして痛快を極めて居る。多年國民の要望して居つた普通選擧も、愈々今度實現を見るらしい。併しこれ山本内閣の功と云はんよりは寧ろ時勢の賜と見るべきは論を俟たない。

世間ではよく普通選擧が政黨内閣によつて産れずして超然内閣によつて始めて行はるゝに至れるを、不思議だと云ふ。形の上では成程不思議であるが、我國の政界の實狀から云へば不思議でも何でもない。買收請托等によつて辛じて多數を集めてゐる政黨が、選擧權の擴張を喜ばざるは明々白々の道理で、普選の實行を我國の政黨内閣に期待するの、木に縁つて魚を求むるの類たる事は、僕の本誌に於て何遍となく說いた所であつた。若し政黨にして普選を說くものありとすれば、それは皆現狀打破によつて新運命を開かねばならぬ境遇にある少數黨に限る。多數黨が普通選擧を云ふのは時勢に推され民衆に阿るので、眞の腹ではない。故に我國に於て普選の實行は、實際問題としては、現狀打破を利益とする政府に望むの外はなかつた。而して憲政會や革新俱樂部は單獨で天下をとるの力はない。偶々舊式の山本超然内閣が現はれ、之が來るべき政戰に政友會と相對峙せんとするに當り、武器を普選に擇んだのは、極めて利巧な戰畧たるが、又極めて自然な陣立でもある。

僕は普選提案を以て、先づ山本内閣の一戰略と見る。併し元來普通選擧は憲政の根軸をなす貴重な原則で、政爭の掛け引きに利用せらるべき筈のものではない。山本内閣が之によつて政爭上の如何なる便宜を得やうが得まいが、普通選擧は之に拘らず獨立の存在理由を有する。どうせ行はれるものなら、斯う云ふそれ自身の目的に適ふやうに施行せられん事を冀ふのであるが、戰略として之を採用せる疑ある山本内閣は、果して如何な

る待遇をその揭ぐる所の普選に與ふるであらうか。この點に我々は最も細密なる監視を必要とする。普通選擧を制度として實現せしめたからとて、それだけで彼を謳歌するのは早過ぎる。

○

一説に曰く、山本內閣は成立の當初非常時に於ける奮起を理由として各政黨の好意的援助を求めた。否寧ろ強要した。他の黨派の事は暫く置く。流石に政友會は體よく之をはねつけた。併し何と云つても議會に絕體多數を制する政友會を敵に廻しては仕事がやり難い。そこで政府部內の策士は桂公の古智に學んで一種の因緣をつけやうと試みたが、原敬なき政友會は石にも噛り付くの辛棒がなく、オメ〳〵政府の誘ひに應じないのが大政黨の面目だなどと威張る。斯うした態度に對抗すべく發見された武器が普選の斷行だ、と。

蓋し前にも述べた如く、普選の斷行は政友會にとつて一番の苦手だ。政府としては、その斷行の上に政友會の地盤を崩すの可能性を認めて居るが、併し之を恐れて政友會が折れて來るなら之又面倒がなくて誠に結構だ。政友會が折れてよし、折れなくてよし、兎に角政府が政友會を向ふに廻して思ふ存分その經綸を續け行ひ得るが爲めには、どうしても普選を旗印にせねばならないのである。斯う見れば政府の戰術は誠に巧妙を極めて居り、從つて又政友會が昨今周章狼狽を極めて居る樣も理解出來るが、併し乍ら我々のこゝに大いに憂ふる所は、斯くして普選が、政界の情僞の爲めに縱橫無盡に弄ばれると云ふ點である。政府の都合がどうあらうが、我々國民は憲政の完美を冀ふ立場からして、一旦鐵を切られた普選が、何物からも妨げられずに、その當然の目的地に達する樣希望せねばならぬ。

○

山本內閣が一切の情誼を排し、又あらゆる障害と戰つて、遂に普選を斷行したとする。それで我々は安心し得るかと云ふに必ずしもさうではない。更に我々は斷然實施した普選を、[illegible]が來るべき總選擧に如何に利用するかを監視するの必要がある。僕は先きに政友會の地盤を崩すに普選は屈强の武器だと云つた。若し政府が政友會の地盤を崩すに急なるの余り新選擧法を不當に利用するが如きあらばこれ政友會の犯せる從來の過りを、更に大規模に繰返すものに外ならずして、無辜の新有權者は道德的訓練の機會を奪はれ、政界の混濁は益々甚しきを加ふるに至るだらう。斯くては普選を實行しても何にもならない。普選は何の爲めに實行するか。單に當然の權利を廣く一般民衆に及ぼすと云ふだけではない。從來の選擧權者は餘りに深く政黨と惡因緣を結んで居るとし、その穢風に染まさる新鮮分子を

奮起せしむる事によつて、政界を廓清し、又腐敗手段以外の方法に依ての政治家と民衆との接觸交渉を頻繁にし、以て國民の向上發達を促す所にある。この趣意を徹底するでなければ、否この趣意を蹂躪するが如き事あらば、假令普選の實現に盡力したとしても、彼は遂に普選の敵たるを免れない。

○

斯くして我々は、普選斷行と云ふ歴史的名譽を荷ふべき山本内閣に向つて、更にその有終の美を濟すべく、來る總選擧に之を最も忠實に利用せられん事を希望せざるを得ない。新聞の報道する所によれば、政府では納税資格の撤廢に伴つて、選擧區制や罰則等に就いても周到なる改革を加へんとするものの如くである。此所に若干普選に對する誠意の認められぬではないが、併し愈々實際に之を適用する段になれば、どうなるか分らない。手心によつて左右さるゝ餘地は大いにある。一つには政府に警告し、又一つには國民と共に監視を怠らざらんとする所以である。

朝鮮人虐殺事件に就いて

鮮人暴動の流言の出所に就き、親交ある一朝鮮紳士よりこんな話を聞いた。横濱に居る鮮人勞働者の一團が、震火災に追はれて逃げ惑ふや、東京へ行つたらどうかなるだらうと、段々やつて來た。更でも貧乏な彼等は、途中飢に迫られて心ならずも民家に行つて食物を掠奪し、自らまた多少の暴行も働いた。これが朝鮮人掠奪の噂さを生み、果ては横濱に火をつけて來たのだらう、などと尾鰭をつけて先きから先きへと廣まる。かくして彼等の前途には警戒の網が布かれ、彼等は敢無くも興奮せる民衆の殺す所となつた。飢餓に迫れる少數勞働者の過失が瞬く間に諸方に廣がつて、かくも多數の犧牲者を出だすに至つたのを見て、我々は茫然自失するの外はない。

この説は流言の出所が横濱方面にありとする當局の説明に符合する。暫く之を一面の眞相を得たものとしても、併しこれ丈けの出來事が、あれ程の結果を生むだ唯一の原因とはどうも思へない。この外に又勢を助成する幾多の原因があつたものと見なければならない。然らばその原因は何かと云ふ事になるが、我

々はまだこれを斷定する充分の材料を持たない。併し責任ある××が、この流言を傳播し且つ之を信ぜしむるに與つて力あつたことは疑ないやうだ。之等の點は追つて事實の明白になつた上で更に論評を試みたいと思ふ。兎に角民衆は、自警團などと稱して鮮人虐殺を敢行したものと否とを問はず、×××の云ふ事だから嘘ではあるまいと、少くとも一時鮮人の組織的暴行を信じた事は明白の事實だ。尤も昂奮の程度には處によつて多少異なるものはある。田舍では事情が分らぬだけ、東京の火は大部分鮮人の手に出たなどとの流言を信じ、復讐的に虐殺を行つたのもあるらしい。東京市內では流石にそれ程ではなかつたが。教養なき階級が自警團なぞと飛び出してる方面では、可成り亂暴が働かれた樣だ。何れにしてもかくして無辜の鮮人の災厄を被つたものの數は非常に多い。罪なくして無意義に殺さるゝ程不幸な事はない。今度の震火災で多くの財と多くの親しき者とを失つた氣の毒な人は數限りもないが、併し氣の毒な程度に於ては、民衆激情の犧牲になつた無辜鮮人の亡靈に及ぶものはあるまい。今度の災厄に於ける罹災民の筆頭に來る者は之等の鮮人でなければならない。

○

殺された鮮人の大部分が無辜の良民であつたと云ふ事は當局でも斷言して居るが、流言の如き事實が全然鮮人の間になかつたかと云ふ事に就いては、久しく疑問とされて居つた。民衆の昂奮餘りに軌を逸するを見るや、當局は頻りに慰撫の警告を發して、鮮人の多數は無害の良民なり、妄りに之に危害を加ふる事なからんことを諭した。併し乍ら一度び誤り信じた民衆の感情は、容易に納まるべくもない。當局の戒告に拘らず鮮人の暴行を說くものは今日尚頗る多いではないか。斯くして鮮人の我々の間に於ける雜居は、今日尚充分安全ではない。當局にして之を矯めやうとするならば、實はもつと〳〵民衆に向つて啓蒙的戒告に努むべきであつた。この點に於て我々は當局の態度の頗る冷淡であつた事を遺憾とする。單にそればかりではない。時々、鮮人と社會主義者とが通謀して恐るべき不敵の企てをなせるものあり、などの記事を新聞に發表せしめて、却て民衆の感情をそゝる樣な事もあつた。兎に角事實は久しく曖昧模糊の中に隱されてゐた。從つて我々も當局の態度に對して種々の疑を持つたのであるが、此頃に至つて段々事實の發表を見て少なからず疑を解く事が出來たのである。

日本人と鮮人との××に關する報道は今尚公表を禁じられて居るから、今は說かない。併し之を以て大袈裟な組織的陰謀と見るべからざる事だけは疑ないらしい。若しそれ震災に乘ぜる

鮮人の突發的暴動に至つては、先月下旬の公表に數十名の夫れを算ふると雖も、大部分皆殺されて居るのだから、冷靜な判斷としてはどれ丈けの暴行をしたのか分らぬと云ふの外はない。よしあつたとした所が、あの位の火事泥は內地人にも多い。普通あゝ云ふ場合にあり勝ちの出來事で、特に朝鮮人が朝鮮人たるの故を以て日本人に加へた暴行と云ふ譯には行かない。況んや二三の鮮人が暴行したからとて凡ての朝鮮人が同じ樣な暴行をすると斷ずる譯には行かぬではないか。此際に於ける內地人の昂奮は餘りに常軌を逸して居つた。泥棒が東に走つたから東へ行く奴は皆泥棒だと云ふやうな態度だつた。殊に鮮人の暴行に對する國民的復讐として、手當り次第、老若男女の區別なく、鮮人を鏖殺するに至つては、世界の舞臺に顏向けの出來ぬ程の大恥辱ではないか。

○

これも親交ある朝鮮の紳士から聞いた話だ。彼は突如旅寓を襲はれて二名の×官、十四名の青年團員に衞られて、某××署の演武場に抛り込まれた。捕つたのは三人、後手に縛り上げられる時一人は憤慨の餘りに反抗しさうに見えたが、此際何事も命のまゝにするが得策と宥めて、おとなしく引かれて行つた。××に行つたら×長と對談して事の仔細を明かにし得るだらうと期待したのに、演武場へ抛り込まれたまゝ廿日の間一言の辯明の機會は與へられず、又××側の説明にも接しない。一日、何故の檢束かを尋ねやうと試みたが、これに酬えられたのは手嚴しい××の雨であつた。それから先き色々の目に遭つたが、結局同行の二人は所謂行衛不明のリストに入つて最早此世の人ではないらしい。自分の斯うして生き殘つたのが不思議な位だ。そして出て見ると、亂暴だと思つたのは、下級の××官ばかりでなく、平素その親切を賴みとして居つた純朴な一般內地人が、故なく我々同胞を滅多切りに切り捲つたといふ。あの親切な純朴な日本人が一朝昂奮すると斯の慘虐を敢てすると知つては、どうして我々は一刻も安心してこの地に留まることが出來やう。內地の諸君は濟まなかつたと云つて呉れる。民情も鎭つた、これからは心配はないと慰めても呉れる。けれども我々のかくして日本內地に留まるのは、恰も噴火山上に一刻の苟安を愉むやうな思ひがする。戰々兢々夜の目も合はぬとは此事だ。

右は決して誇張の言ではない。下層鮮人の內地に流入し來るは、元より餘り好ましい事ではなかつたが、併し內地在留に極度の不安を感じて、學生などがぞく／＼支那に轉學するといふ如き現象は、我々の深き反省に值する事ではないか。かう云ふ不安に襲はるゝ朝鮮人も氣の毒だが、彼等をしてかくまで恐怖

を感ぜしむる我々日本人が、實に大いに反省する所なくてはならない。

○

鮮人虐殺事件に就き差當り善後策として、何よりも先きに講ぜねばならぬのは、犧牲者に對する救恤乃至賠償であらう。若し之が外國人であつたら喧しい外交問題が惹き起されて居る筈だ。朝鮮は日本の版圖だからと云つて不問に附することを得べき問題ではない。尤も殺された者の多數は勞働者などであるから、氏名も判らず、遺族の明かならぬも多からう。かういふものに對しては、救恤賠償に代へるに、將來一般朝鮮人の利益幸福に資すべき設備の提供を以てするがいゝかとも思ふ。要するに、僕は此際鮮人虐殺に對する內地人の、謂はゞ國民的悔恨若しくは謝意を表するが爲めに、何等かの具體的方策を講ずるの必要を認むるものである。而して特に之を主張するは、只に日鮮融和の政略上よりするのではなく、寧ろ之を以て大國民としての我々の當然なる道德的義務と信ずるからである。

○

更に進んで、我々は我々自らの態度を深く反省して見るの必要を感ずる。我々は平素朝鮮人を弟分だといふ。お互に相助けて東洋の文化開發の爲めに盡さうではないかといふ。然るに一朝の流言に惑ふて、無辜の弟分に浴せるに暴虐なる民族的憎惡を以てするは、言語道斷の一大恥辱ではないか。併し乍ら顧れば之れ皆在來の教育の罪だ。此所にも考察を要する問題が澤山あるが、これらは他日の論究にゆづり、只一言これを機會に、今後啓蒙的教育運動が民間に盛行せられん事を希望しておく。

○

最後にもう一つ考へて置きたい事は、假令下級官憲の裏書があつたとは云へ、何故にかく國民が流言を盲信し且つ昂奮したかと云ふ點である。多數の奉公人を使ふ一家の主人が、或る一人を非常に虐待したとする、虐待されても格別反抗もしないので、平素は意に止めなかつたが、その中圖らず放火するものがあつて、家が全る燒けになつたとする。此時誰云ふとなく火を放けたのはその男だと云ふものがあると、人々が悉く成程と信ずるに相違ない。そは平素は意に留めなかつたが、彼は平素虐待されて居る所から、必ずや主人を恨んで居つた筈だと、各々の心が領くからである。これと同じ様に、鮮人暴行の流言が傳つて、國民が直にこれを信じたに就いては、朝鮮統治の失敗、之に作ふ鮮人の不滿と云ふやうなことが一種の潜在的確信となつて、國民心裡の何所かに地步を占めて居つたのではなから

か。果して然らば、今度の事件に刺戟されて、我々はまた朝鮮統治といふ根本問題に就いても考へさせられる事になる。

朝鮮から來て居る僕の友人は、鮮人同士の今回の災厄によつて被れる窮迫を救はんとして、檄を本國の父兄に發して義捐金を募つた。やがて集つた若干額を東京に送らうといふ時になつて、銀行は送金を拒んだ。官憲の干渉があつた爲めだと云ふ。官憲は何の爲めに救恤資金の輸送を阻止したか。揣摩するもの曰く、この金の或は不逞の擧に利用せらるゝなからんかを恐れたからだと。何所まで事實かは知らないが、食ふや食はずの罹災者の救助資金にまで文句を云はねばならぬ程煩はしき警戒を必要とするなら、何所に我々は朝鮮統治の成績を語る面目があるか。爆彈を懷いて噴火口上を渡るやうなのが、屬領統治の本分では斷じてない。

小題小言

○

治安警察法第九條第二項には『集合ニ於テハ……犯罪人若ハ刑事被告人ヲ賞恤若ハ救護シ……コトヲ得ス』とあり、又第二十四條には『第九條ニ違背シ……タル者ハ三月以下ノ輕禁錮又ハ十圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス』とある。勞働爭議の犧牲者として入監せる某々氏に感謝狀を呈するの動議を出したとの理由で、鈴木文治松岡駒吉の諸君は曾て右の個條の適用として罰金五十圓に處せられたことがある。

甘粕大尉を忠誠の國士と賞恤し、大道に公衆を要して減刑歎願書に調印を求むる者がある。是れ正に同じく治安警察法第九條に該當する法禁の不法行爲。當局の之を不問に附するは甚だをかしい。

但し僕は減刑運動者を鈴木松岡の諸君並みに處刑せよと云ふのではない。僕は元來治安警察法の右の個條を不必要とするものである。寧ろ濫用され易い有害の規定だと思つてゐる。されば鈴木松岡兩君の處刑の場合にだつても僕は熱心此事を論じたのであつた。今や甘粕大尉の減刑運動を見る。而して周章この法條を援用するが如き偏頗の態度は、固より僕の本意とする所ではない。

僕の玆に特に讀者の注意を乞はんと欲するは、當局が法の適用に際して其の手心を二三にするの事實あることである。鈴木松岡兩君を追窮するにあゝまで峻嚴であつた當局は、何故に大道の減刑演說を斯くも看過するのであるか。固より如何なる

場合に法を適用するかの裁量は或る點までは當局の判斷に任されてある。故に彼が一方を擧げて他方を默過するは必しも違法の處置といふことは出來ぬ。けれども其の取扱の結果より推して、所謂左傾的運動に嚴にして右傾的行動に寛なることだけは爭ないと謂つていゝ。果して然らば是れ當局が自ら社會的思想戰の渦中に投して陰然其一方の當事者ならんとするものではないか。階級鬪爭の憂患を激烈ならしむる之より甚しきはない。

○

僕が右の樣な趣旨を或る所で話したところ、それが新聞に誤り報ぜられて、減刑運動そのものが法禁であり、調印したことも亦犯罪になると云ふ風に傳つた。法律上の問題として法禁に觸るゝは、公衆を會して刑事被告人を賞恤すること丈けである。併しもと〳〵當該法案を不要とする僕の立場からすれば、そんな法律問題はどうでもいゝ。僕の主として論じたいと思ふのは、甘粕大尉を庇保する事それ自身の道德的意義如何の點である。法律問題を離れての考察として、僕は減刑調印の趣旨にも到底賛意を表することが出來ない。

只甘粕といふ人が氣の毒だといふ丈の話なら僕も大に同情は寄せる。此意味の同情なら、泥棒にも寄せれば山賊のやうな人にも寄せ得る。併し世間の甘粕に寄する同情は斯うした單純の同情ではなくして、暗に彼の行爲を是認し、否寧ろ感謝に價する壯擧として之を賞恤する所に特色を有するやうだ。けれども能く考へて見るに彼の行爲にはかゝる道德的賞揚に價する何等かの要素をも含んで居るだらうか。

僕が斯う云ふ議論をすると、世人はすぐにお前は大杉の味方かと云ふ。甘粕を貶すは則ち大杉を揚ぐる事と速斷するお粗末な頭腦が、即ち大杉が惡者なるが故に之を除ける甘粕は善人だと速斷するのだ。第三者を勝手に惡人ときめ、國家の爲と云ふに藉口して恣に之を殺していゝと云ふのでは、如何にして社會の秩序が立つて行けるか。況して秩序の維持を職とし奉ずる者がこの私刑の張本人だとあつては、生民はいづこに其堵を安ずることが出來るだらうか。よく冷靜に考へて見るがいゝ。

○

壓迫干涉を呪ふものは常に云ふ、民衆の創意に自發的伸展の機會を與へよと。げに自由は何者にも與へらるべきだ。其の當に赴くべき所に赴き着かしむる爲に自由は是非とも潤澤に與へられねばならぬ。而して今度の震災は幸にも一部の民衆に行動の自由を許したのだが、民衆は果して其期待に背かず之を正しく利用したであらうか。

この期待は震災當時の混亂裡に生れた一部の自警團の行

依て見事に裏切られた。旨くやるだらうからやらして見やうと云ふ譯には行かない、獨り放してやつたら何をやつて來るか分らないと危惧せねばならぬことになつた。

是れ果して何の罪か。

孰れにしても一部の自警團の行動は正に自由の冒瀆である。民衆的向上の反逆である。我々は訓練を欠く民衆の前途に、殘念ながら容易に創意伸展の希望を繋くることは出來ない。と云つて、すべての自警團を一概にあしざまに罵るのは間違つて居る。自警團のうちには隨分變に處して機宜の措置に出で、社會奉仕の見事な成績を擧げたものも澤山ある。民衆が自發的に公事に協力すると云ふ風潮は、寧ろ之を機として大に助長すべきではないか。要は先覺識者の同情ある指導と青年有志の誠實なる反省に待つ。一部の自警團の暴行に激して譯もなく之を呪ふは實に懲りて膾を吹くの類に外ならない。



朝子

室生犀星

一

いろいろ考へた末にやはり瓔子といふ名前にしやうかと思つたが、瓔は砕けると云ふからこれも止した方があとあとの悔が殘らなくてよいと思つた。友人の薄田が役所へ届けに出掛ける日まで命名ができなくて、やつと代書人の机の前へ座つてから名前を考へあてたことも能くありさうなことだと思つた。名前なんぞは符帳のやうなものだからどうでもよいではないかとも思つたが、やはり呼び易くてあつさりしてその名前から人がらが感じられるのも好ましいものだ。——だが瓔子といふ感じはあまり考へすぎて重い、妙に氣取つてゐるやうなところも窺はれてよくないと考へた。こんどはなるべく動物から意味を取らない名前がよい、さう言つてくれた人もあるから、なるべく女の子らしい優しい名前をあれかこれかと考へ浮べたが、どれもこれも平凡なやうで凝性が手傳つてすぐには決められさうもなかつた。——結局その日やつと思ひついて病院にゐる女のところへ知らせると、女中が歸つて來て「奥さまのおつしやいますにはあんまり能く有りふれた名前だから他に何か思ひ付きがないか？　それに谷

崎さんの小說のなかにもそんな名前があるからこれは別につけ換えた方がよい。」と云ふ意味を言傳つて來たが、なるほど谷崎君の小說にでてくる女のひとに朝子といふのがあつたが、大して氣にかからなかつた。

「朝子といふのはいい名前ぢやないか？　名前なんて他にいくらでも同じのがあるものだ。せつかく考へ出したのに不服をとなへる奴があるものか。」

さう電話をかけると女の方でも、ただぼんやり有りふれた名だから左う言つただけで、深い意味の不平もなかつたらしかつた。

「あのときはああ思つたんですけれど、あとで考へると大へんいい名前だと思つたんです、――いいえ、不服なんてございません。」

「それなら分る！　いまあの名前がいけないなんて言はれると實際どうつけていいか解らないんだ。結局平凡で分りやすければいいんだから、――だが出産るにはまだ間があるかい。」

「すこしづつおなかは痛んでゐるんですけれど、まだ今晩ぢやないやうでございます。早くて明日の朝か遲れたら明晚になるかも知れないつて院長さんがお仰有つてゐらつしやいましたが、何しろ天氣豫報みたいなもんですて左う何時もおしやるんですもの。」

「又た天氣豫報かい？　とにかくこんどはそちらへ僕が行つてゐなくともいいんだね。行つたつて準備がちやんと出來てゐるんだから、まごまごしてゐるところを他人に見られるのも厭だから、その點はいいんだな。」

「ええ、大丈夫よこんどは！　晩なら朝おめざめのころお知らせしますからこちらは心配しないでください。」

「ぢや朝子でいいね。」

「ええ、もう大へん結構！」

「そこに看護婦がゐるかい。」

女はすこし聲をひそめながら、くすくす微笑ひごゑで言つた。

「え、肥つた方の女がゐらつしやいます。」

こちらも聲を低くした。「とにかく卅日に僕が持つて行かなければ、甥を遣るから勘定書を取つて置いて貰はう。」

「ええ分りました。」

「ぢや切るぜ。」

自動電話を出るとドアのところに二三枚の櫻の落葉があつた。ことしは早いと思つた。こんどの子供は産婆も醫者も女だといふので、すつかりその氣になつて、男の名前は故意と命けなかつた。若し男だつたら瑛吉にしやうと言つたのだが、朝吉でも關はなかつた。若いものの癖かそれとも自分の子供にまで矢張り女の子がほしかつた。さきの子が男で亡くなつたせいか、こんどは女がほしい。自分の種族のなかに女を見たら人間は存外愼しくなれるかも知れない。優しい日常がその子供を間に置いて送れるかも知れないと思つたからである。

「先生、朝子といふのはどうでせう？」

醫者より友人に近い霜島さんが晩見えられたので、私はいつも厄介になつてゐるので左う訊ねた。

「あさ子、あさといふと？」

「朝の朝です。」

「はあ、なるほど朝子ですな。」

霜島先生はいつもの癖のやうに小首を傾けると、その半白の額をもとどほりに眞すぐな位置になほして、

「結構な名前でごはす。」

さう言つてそんな名前はあなたらしくてよいと言はれた。そしてこんどのお子さんはわたしが引受けて上げるから安心してゐらつしやい、と霜島さんらしく固い自信で言はれた。ありがたう宜しく頼みますと私は言つた。二三年前一人しかない子供を亡くした私のむしろ女々しい忌々しげな未練を知つてゐる先生は、ちよつと年長者と言つても老人らしい口調であとでから附け加へた。

「そのかはりおもちやにしてはいけませんよ。」

「え、そりやしませんとも。」

「親といふ奴は子供をおもちやにするからいけない。」

さう言へば全くおもちやにしないではなかつたが、何も彼も仕盡した私のやうなとぼけた人間のひとりも、どうやら人生の仲間入りが出來て、そして小さい自分の分身をおもちやにする。おもちやだとしたらこれ以上大切な悲しいおもちやはなからう、このおもちやは人間がお互ひに死ぬまで離さないでゐるものだ。自分の三十幾年かの生涯がすつかり賭けてしまつたおもちやだ。このおもちやを二年前には取り上げられて了つて、べそを掻いてゐた大きな子供だつた私が、又たやつとの思ひでおもちやにありつかうとしてゐるのではないか？　霜島先生のおもちやにするなと言はれた氣持ちは、こんな意味のものではなつたらうが、私は別な方面のことを考へおもちやとしたら全く途方もない悲しいおもちやのやうな氣がした。

暗い庭さきを眺めてゐた先生はきふに隣向ひの屋根の上にすべり出た圓まるい月を見ると、

「ほう、えらい固い月だ。」

さう言つて暫らくその明りが庭さきへまでほのあかるく射すのを見てゐたが、私も何氣なくその月あかりを見た。光が動かない、固い、その上澄めるだけ澄んでゐるので柔らかくない。――

「ほう、こんな月は初めてですね。」

先生は死んでゐるやうな月だとも言つた。私は秋の月といふものは固くて嫌ひだが、さういへば今夜はふしぎな動かない光を先生と同じい氣もちで眺めた。凄愴の感じではない、どこか不愉快な氣もちだつた。

翌晩十時すぎにもこの月を見てゐたが、ふと私は病院ではいまごろお産が初まつてゐるかも知れないと思つた。どつちにしても立ち合はないことにしてあつた。一つは私が行つても何の役立たないことや、準備が科學的に整頓してゐること、醫者も信じていい人であることなどが、ああいふ感情的になりやすい場面で妻と顔を合はすことの面倒さを避ける原因にもなつてゐたので、晩生れたら翌朝知らせることになつてゐた。――が、私は庭さきで涼みながら考へあぐんだ末に、甥の由種に言つた。

「病院に電話をかけてくれんか、もう出來たかどうか?」

「もし生れてゐたらどう言つたらいいんです。」

「默つて切ればいいんだ。」

由種が行つたあとで一體夫といふものは女の産をするときにそばに居るのが本統か、それとも居なくともよければ居なくともいいのか、これはどつちにも理窟があるとぼんやり考へた。漱石さんの日記を讀むと奥さんが何かの手術をするときに、ぜひ漱石さんにも立合つて呉れと頼んださうだが、漱石さんはそんなら隣室でおれが咳拂ひを一つして遣る。

それで澤山だらうと言つた。この話に心底からの人情があると考へた。が私のあたまはふしぎに女がもう産の初まりかけたことを考へさせてならない、ちよつとくらゐ顔出しするのもいいではないか、女の方から來なくともいいと言つたのだから行つてもいいではないか？　來なければならないと駄々を捏ねたのならなほ行くのはいやだが、こんどは行くのは當り前な氣がする。……

「ぢんつうが初まつてゐるんで既う間もあるまいと言ふんです。看護婦ではどなたかお家の方がゐらつしやれば産婦も氣強いだらうと言つてゐました。」

「ぢや來て呉れとは言つてゐないんだね。」

「ただ看護婦がさう言つてゐただけなんです。」

間もなく私は坂を下りて街のある方に出掛けたが、どうも矢張りかうして何時の間にか出掛けるところを見ると、誰でも口では言つてもしまひには出掛けるものかも知れないと思つた。私のエゴイズムも結局は純日本風な人情にひたされてゐることに氣がついた。

病院に着いてから分娩室のまはりを一時間ばかりうろついてから、やつと看護婦が小さい赤子を抱いて見せて呉れた。がそのさきに私は看護婦の姿を見るなりすぐ何の用意もなく尋ねた。

「どつちです。」

「大きなお孃さまでございます。」

さう看護婦が小さい奴を私の目の前にさしつけ、よくごらんなさいましと言つた。からだは？　いいえすこしもご異常はございませんと彼女は答へた。私は有難いと思つた。分娩室から平常聞き馴れた女のふだんの聲が聞えたので、家

内はと尋ねやうとした口を噤んで、みんないい鹽梅だと思つた。——看護婦が行つてから二十分ほどして、分娩室も見てお置きなさいと言つてくれたので、ちよいと覗いて見た。そこに女と子供との外に、七人くらゐの白衣の看護婦や産婆がゐて、どの人もみんな背中が曇硝子のやうに汗で濡れてゐた。あんなにみんなが汗を流してゐるのが仕事の一生懸命なことを思はせた。私が田端の家でぬくぬくと今夜ねむらなかつたことが、却つて今になるといい事に考へられた。

——

更けた駿河臺をわざと車をお茶の水橋に待たせて歩くと、れいの厭な固い月が女子師範學校の上にあつた。車の上から久しぶりで東京の深更の街を眺めながら、何といふ澤山の番犬が放されてゐることだらうと思つた。あちこちにその陰氣な姿がうろついてしつこく眼をはなれなかつた。時計をひねるともう二時を過ぎてゐた。

三日目に私自身でみそかだから金を持つて病院にでかけた。そのとき正面玄關の梯子段を上るよりも、もつと近い梯子段のあることが分つた。洗面所のわきにある——此處から玄關まで走つて出たら三十秒くらゐだらう、女の部屋からは四十秒くらゐかかるかも知れない、——部屋へ這入ると、女に若し地震が來たら洗面所の方から降りるとよい、あそこなら四十秒くらゐで前庭へ出られる……玄關からだとしたなら十秒は損をすることになる、——と言つた。が女は何とも思はずに聞きながした。

「まだ三日しか經たないのにもう微笑つてゐるんですよ、最も何も知らずにゐるんでせうけれど、それにえくぼが泣くたびに出るんです。ほら小ちやいのが……」

看護婦がよこから、「女のお子さんは何んでも早うございますわ、男のお子さんより一ケ月くらゐちがひます。」と言つた。

男が育てにくいのも當り前な氣がしたが、女の育てよいのは何よりだと思つた。「こいつだけは一つうまく育てたいものだ。」と私は口へまで出して言つた。この前は女まかせだつたがこんどは一つ一つ自分でよく氣を付けて見やうと思つた。世の嘆き悲しみを自分の子供にしばらくは托しやうといふあんなに弱い心もちさへ、いまの私にすこしづつ影をさしてゐるではないか？――、それを嗤ふ奴は嗤ふがよい、貰ひ果しの人生を今わたしはどんな風に貰つて見るかが樂しまれてならないのだ。こんな小ちやい奴を世に出すためにも私は詰らない仕事をしたつていいのだ。この小さい娘が半白になつた私に連れられて散歩するやうになつたら、私はいまのやうな欲念なども少しづつは減つて恬淡な人柄になることだらう、すくなくとも他の女などに心を動かすやうなことが少なくなつて、大概のことは快よく微笑つて過ごすやうになれるだらう――。

「とにかくこれがうまく育たなかつたら、實際生活力がなくなるかも知れない。」

「こんどは大丈夫よ、自分のお乳も飲ませるんですから。」

病室を出るとき最う一度小さい赤子を覗いて見て、うまく育つて與れるやうにと何かに手頼りたいやうな氣がした。

二

朝食に赤のご飯がついてゐるのは、私の國の方のならひをそのまま守つてゐるのだつたが、女がゐないのによく女中が氣が附いたものだと思つた。

「なるほどお朔日だ。」

そのお朔日に赤のご飯を食べるわけは今だによく分らない、しかし癖になつてゐるのでそれがないと物足りない氣が

する……日かげが鼻を引いたころに友人の千田の別れたおしほさんが見えられた。妻と往來してゐるおしほさんはもう病院へ這入つてゐらつしやるころでせうから、ところを聞きかたはら來たのだと言つた。

「ひるから女中が用事で行くことになつてゐるんですから、ご一緒に伺はせませうか。」

「え、なほいい鹽梅です、ぢあ御一緒にまゐりませう」

千田と八年も添ふてゐたおしほさんは、やはり千田のことを氣にかけて、千田の話が出ると氣の強いやうな弱いやうな涙ぐんだ眼をして、

「千田も逢ふのはいやだと言ふんですし、わたしもちよいちよい顔を合せるのが氣づまりなんですけれど、逢ふ用事がつい出來てしまふもんですから。」

何時かおしほさんはわたし可愛がつて貰ふんなら、たまによこぴんの一つくらゐ張られた方がいいんですけれど、千田はあのとほり何時でも可愛がるのか可愛がらないのかむづかしい顔をしてゐるので、張り合ひがなくつい自分が年上だからあんな陰氣に考へ込んでゐるのだと思つてしまひますの。だから何日かあの人とわかれてあの人をらくにしてあげたいと考へるやうになつたりするほど、あの人のことばかり考へてゐたんです。そんな考へはまる八年間打つとほしに頭にうかんでゐたんです。千田はあのとほり若いんですからよい娘さんとでも一しよになつてもらつて、わたしは横合ひから袖口でも嚙みしめて靜かに眺めたいと考へることがしよつちゆうございましたの。これも空想かも知れませんけれど……鏡花さんの小說の好きなおしほさんの顔をみながら、この人は年をとるほど子供らしい考へを持つほど、幼稚な能く男にもある性分を持つてゐる女（ひと）だと思つた。

「千田君が何か書きましたね、讀みましたか？」

「えゝ、けれどわたし千田があれを書いてゐるのが眼に見えるやうで、間違つてゐても糺す氣になれませんの。——洗濯ものも既うたまつてゐるでせうし……。」

おしほさんはかう言ふと、とにかく晝飯の用意ができたので座をひらいて、女中が搬ぶ食卓をまんなかに置いた。その用意ができるまで私は書齋でインキ壺から萬年筆にインキを吸ひ込ませやうと立つて行つた。

インキ壺を疊の上に置いて萬年筆をさし込んだときに、ぐいと何か襟首が摑つたく動いたやうな氣がしたが、すぐ天井が鳴り出した。庭にひよいと眼をうつすと池の水が坐つてゐるこちらへ揺れて、そして一切に何かが動いた。私は無意識に地震が來たのだと思つてインキ壺に蓋をした。そして前庭へ一歩踏み出したときに石燈籠が三つに折れて臺石を殘して倒れた。その臺石のところへ池水が波のやうにあふれて出た。すぐ表へ飛び出すと隣近所の人がみんな出てゐた。私は立つてゐられなくて地面に平手をついた。がその平手がふしぎにしつかり地面に食つついたまま地面と一しよに二三寸左右にうごいた。そのとき私は全く初めて吃驚りした。これは大地震だと思つた。とうたう遣つて來たといふ氣がした。がおしほさんの姿は往來に出てゐる人むれの中に見られなかつた。女中がすぐわきにゐた。

「おしほさんは？」

「お湯に入らしたのです。お湯屋へついたころでせう。」

さう言へばお湯へはいつて來ると言つてゐたやうだつたが、しかし途中なら大丈夫だと思つた。そして先刻とは揺れ方がだんだん靜まつた。近隣の奥さんだちの顔が眞蒼に震えてゐるのを見ると、私は思はずしまつたと思つた。この奥さんだちの顔の中に一人足りないと思つた。そのとき私は家へ飛び込むと財布をふところへ捻ぢ込んで、甥の由種を呼んだ。

「病院へ行かう。行く氣はあるか？」

「ある！」

甥はただ左うこたへると私に尾いた。まだ揺れをつたへたからだはよろよろしたが、もう夢中だつた。濱田病院の古い建物が目の前にうかんで女と赤子とが二階のはじの部屋にねてゐる姿が、私には完全に描くことができた。あそこなら四十秒で前庭へ出られるのだ。四十秒は男の私の逃げ出す勘定かも知れない、あるひは赤ん坊を抱いたりしてゐては一分間かかるかも知れない、一分間！　これは危ない、病院などへ入れなければよかつた、と左う思ひながら神明町へ出ると材木屋の倒れた材木で道がふさがつて、電線がさかんに動いた、それを電車道一杯に出た避難人が蒼白い顔で仰向いては見てゐる。――屋根瓦がみんなずり落ちて潰れた家からまだ埃が立ちかけてゐた。

「逃げ出す間がなかつたら遣られてゐるかも知れない。」

私はそのとき一臺の自動車が走つてくるのを見た。私はその行手をふさいだ。病人がゐるんだから乗せろと言つた。このとほり一杯だと言つて運轉手はとまらうとしなかつた。こんなときはお互ひだ。もし止めなかつたら眼の前で打ち殺ろして了ふがどうだと私のうしろにゐる人がぶるぶる震へながら叫んだ。その昏迷した正氣でない本氣な顔は一見して分つた。運轉手も直覺的にこれは危ないと思つたらしく沸々言ひながらドアをひらいた。わたしだちは乗り込んだ。自動車は掘抜井戸の清水の上を行くやうに地面から押し上げられるやうに動いた。

砂埃の半潰の家から消防手が一人の子供を抱き上げて出てくるのを見たとき、その子の額に蝶のやうな赤い傷のあるのを見た。自動車は人込みのなかを除行してゐる、――そして往來に出てゐる人人がさかんに罵り出した。引摺り下せといふのや停めろと言ふものなどゐたが、私は平氣だつた。あの人だちは事情を知らない、私の事情を知つたらあの人

だちだつて默つて了ふだらうと思つた。

團子坂下へ行くと大學に火の手があがつて、非常線が張られてしまつてゐた。住民はもう家財をしまひかけてゐる、――仕方なしに自動車を下りると最う通さなかつた。なるほど本郷臺のそらに烟が上つて見えた。私はがつかりした。同時に駿河臺は火の眞中だと言ふものがゐた。今から行つたつてもう遲い、あそこまで走りぬいたら私は打倒れてしまふに違ひない、よし女が生きてゐても何處かへ避難してゐるだらうから會へるわけがない、――何も彼も駄目にしてしまつた。やつと出來た女の子ももうだめらしい、私は電車道の石たたみの人群れをぬひながら最う何も彼も厭になつた。そして銀座や淺草にも火が出たことが分つた。地震は絕えずやつて來てそれが先刻まですこしも怖くなかつたのが、こんどはぴしぴし恐くなつた。うしろ頭が輕くなつて心臟だけが生活してゐるやうに敏感になつた。何も彼もおしまひになつて了つたやうな氣がした。これは私だけの考へではなからう、しかし私は實際步く元氣さへなくなつて知らない家で水を飮むと、田端へ歸つたが家のなかへ這入る氣はなかつた。

ポプラ倶樂部のテニスコートへ近間の人がみんな集まつた。私もしかたなしに女中や甥と一しよにその塀ぎわに上敷を舖いて坐つてゐたが、そのときはもう東京ぢゆう火の手があがつてゐるらしく、どの小路から街の方を見ても煙のあがらないところはなかつた。太陽のまはりへ白い透明な烟がとり捲いて、その上にやや疲れた烟がかかり、そして最う一度眞黑な渦卷いた煙がそらを覆ふてゐた。それに何といふ烈しい風だらう、コートのポプラが揉まれて鳴つてゐた。――車やが駿河臺へ馳けつけたが病院は地震で潰れなかつたが、何處へ避難してゐるか分らない、それに間もなく病院も燒けるだらうと言つた。それぢやお茶の水の校內にちがひないと思つたが、車やが本郷臺へ出ると女子師範に火が移つたと言つた。この報告を私はむしろぼんやり聞いて赤ん坊の髮のことを考へてゐた。が、ふしぎにあの子は生きてゐ

るにちがひない、そんなに世の中に不幸ばかりあるものではない、妻だつて何處へか落ち延びてゐて呉れるだらう、ゐの女は私とちがつた暢氣なところがある。私とちがつた暢氣な分がどういふふうにか幸せられることが此麼非常時によくあるものだ。——私はこんなはかない考へを纏めてすこしづつ氣を鎭めやうとしたが、それすら手頼りない氣がしてしまつた。昨日病院へ行つたときに逃げることを敎へて置いたがあの通りならいいかも知れないと、私は考へたことを又た考へ直して疲れてしまつた。

日が暮れると私どもは野宿の用意をした。だんだん暗くなるに從つて東京の空は新しい卵の黃味のやうに燒けただれて、東京ぢゆうが爐のやうに熱い氣がした。——おしほさんがやつて來てお湯屋へ這入らうとしたとき地震が來たのですぐ下田端の千田の宿へ行つたのだと言つた。千田も一緒につれ立つて來た。いつか千田に私が大地震が來るといふ豫感があつたら友人に手紙を出してみんな避難したらどうだらう、そんな空想めいたことを言つたら人に嗤はれるだらうかと言つたら、君らしいがやはり嗤はれてしまふだらうと云つた。

「こんな工合になることが何か知ら誰にも豫感があつたらしい氣がするね。」

「今から考へると左うもいへるな。」

夜露に濡れて夜中に高臺から町を見ると、何のことはない燃え放題になつてゐて、警鐘一つ鳴らない、もう何だか世界までが亡びてしまふやうな氣がした。おしほさんが私の家へかへらなくて千田の家へ行つたのもやはり八年も一緒に居たからだと思つた。こんどは二人とも或ひは一緒にもとどほりになるかも知れない——。

夜明けまで絕えず搖れてゐたが、明るくなるといくらか心が靜まつた。お茶の水から或ひは萬世橋へ出てまつすぐ上野の山へ行つてはゐはしないか、二人ついてゐた看護婦が一しよだとしたら上野へ行つてゐるに違ひない、が出産四日

目だから第一歩けるかどうかも分らない、若し歩けなかつたら擔架にでも乗つて行つたらうか？

「どうも上野の山へ行つてゐるやうな氣がするんだ。若し助かるとしたら？」

私は千田の顏をみながらこの友だちはきつと一緒に行つてくれると思つた。車やもどうも上野らしいと言つた。

「上野より外に逃げるところはないな。」

千田も左う言つたので「ぢや、僕は出掛けやう！」私は立ち上ると、千田も帶を締めなほして

「僕も行かう。」と言つた。

私だちが出かけやうとすると、となりの秋山さんも一緒に行つてあげやうと言つた。それに甥と車やとの五人づれで田端、鐵道線路へ出かけた。線路は一杯の人群れだつた。じりつける日ざしはまつすぐに頭をくらくらさせ、人いきれと煙つぽい匂ひが蒸しあがつて胸を壓しあげた。助かつてゐて呉れたらいいが、若し左うだつたら些つと顏を合すことによつて感情的になると困ると思つた。どう初めに言つたらよいか、默つて顏を見合したらそれで濟むことぢやないか？　私は左う思つたが何か平常氣のつかなかつた夫婦といふものの關係を初めて眼前に感じたやうな氣がした。へいぜいとはまるで異つた他人行儀めいた言はば禮節ともいふやうなものが、今きふに感じられてくるのもお可笑しいやうな氣がした。へいぜい吾々はおたがひの仲に愛なんてものが少しもないまでに馴れてしまつてゐるのが、こんな非常時に湧然として來るのが不思議ではないか、愛？　何といふ厭な言葉だらう、だがやはりそれの外に表はす文字がないではないか？

鶯谷停留場あたりから身動きがならないまでに公園の坂へ人が犇めいてゐる。そして何といふ恐ろしい火の手だらう。車坂あたりが、眞赤に燒けてゐる。――わけても陸橋の上を押し寄せてゐる群衆のために、何だか橋が二つに折れ

やしないかと思はれた。レールの上の人込みも少しも動かない。――

「崖から攀らうぢやないか、とても坂からは行けはしない。」

千田は崖のところにある電線を指して言つた。私は石垣をがちがち登ると電線にしがみついた。次から次へと飛び乘つて來る、一人の婆さんが崖の中腹からずるずると辷つて砂埃のなかに消えた。人事ではないから私は公園の柵につかまつて上へあがつた。千田も秋山さんも由種もあがつた。そこから公園は身動きもならない避難人で一杯だつた。埃と煙とメガホンで知人を呼ぶこゑなどが全山を罩めてゐた。それに人いきれで私は呼吸が止まりさうな氣がした。どの人の顔にも血色といふものがなく眼ばかりぎらぎらしてゐるのだ。

「歩いてゐても些つとも進まないぢやないか、まるでこれでは止つてゐるのも同じだ。」

誰かが左う言つたが實際人込みで歩けなかつた。濱田病院の避難先きはと尋ねるとそんなものは知らないと腹立だしげに答へるものがあつた。濱田病院なら見たことがあると言つて吳れた人もあつたが、何處だか見當がつきさうもなかつた。人の氣はひと混雜とに蒸された私はむしろぼんやりして、でたらめに會ふ人ごとに尋ねた。ただ人間がごちやごちやに叫んだり呼んだりしてゐるだけで何が何だか分らない、――そのうちに誰かが濱田病院は美術協會の小屋掛けにゐると云つて吳れたものがゐた。押し寄せる人込みを掻き分けて協會の前へ出ると濱田病院といふ張紙がしてあるのが眼にはいつた。が一とわたり患者を見わたしたが、そこに女らしい姿がなかつた。やつぱり駄目だつたかと胸をとんと突かれた思ひがした。そのとき附添の看護婦の肥つた顔が人と人との間に見えた。しめた、あの看護婦がゐるなら大丈夫助かつてゐるに違ひないと思つた。私は別の看護婦にたづねた。

「ゐらつしやいますとも、今此處ら歩いてゐらしつたんですが……」

「へえ、歩いてですか。」

「散歩してゐらしつたんですが、捜して見ます。」

散歩などと何て暢氣なんだらうと思つて、つれの千田に、一どきに會つてくれると向ふでもかつとして了ふから僕がいい時分に呼ぶから來てくれたまへと言つて置いた。よく穴埋めの人に目隱しをしてやつて外へ連れ出すことがツイ思ひ出されたからだ。「なかに居らつしやるかも知れませんよ。」左う看護婦が言つた。そして協會のがらんとした内部に目をやると、すぐドアのきわに赤ん坊に乳をやつてゐる女がゐた。お迎えですよ、と看護婦が言つたが外のさわがしさに消されて聞えなかつたらしかつた。

「おい……」

女は顏をあげたが、「まあ、よく……」と言つて、呼吸もつかずに

「昨夜からどんなに待つてゐたか知れません、あんまりおとうさんが遲いから、こりやひよつとすると家が潰れてしまつたのぢやないかと思つてゐたんです、ね、――看護婦さん、今もさう話してゐたんです。」

女はふだんからの血色とはどれだけも違つてゐない。それに怨みを言ふかと氣づかつてゐたがそれも言はなかつた。

「多分上野だらうと思つたが昨夜は迎えに來たつて一しよに連れてかへれなかつたらうから、とにかく夜の明けるのを待つて出かけて來たのだ。」

それなら何故昨夜のうちに此處まででも辿つて來て夜を一しよに明さなかつたのだと、私はふと今になつて、全く今やつとその事に氣づいた。さう言はれたら私は一言もなかつたのだが、女はまつたく私もどうにかなつたものだと思つてゐたらしかつた。

「でも看護婦に聞いたら歩けるといふぢやないか。」

「歩けますとも、駿河臺から上野まで五時間かかつて逃げて來たんです。赤ちやんは看護婦さんにおんぶしてもらつて、――。」

「ちよつと見せないか？」

赤ん坊はべつにかはりはない、生れて四日目におんぶした……が熱一つ出ない、全くありがたいと思つた。私は指さきでその柔らかい頬をちよいとふれてお前は死なないぞと腹で呟いた。

「千田も秋山さんも來て下すつたのだ、山種も一しよなんだ。」

「おや歸れますね、まあ嬉しい！」

みんなを呼ぶとみんなが這入つて來たが、女はほんのすこし泪ぐんだくらゐで、私はこれも助かつたと思つた。すぐわきの方にこれも妻を迎えに來たのであらう、男があまり妻の方ですすり泣くので極り悪がつて、しきりに帶を解いたり結んだりしながら自分もあつちイ向きになつて泣いてゐるのがゐた。いや無理もないことだ、さう思ふとあちこちに迎えに來た人が泣いてゐるのが見えた。

「山種に赤ん坊を負つて貰つて――大丈夫かな。」

「昨日から馴れてゐるんですから關はないんです。」

さういふ女を車やが片手を肩にかけ、おしめを千田が持つてくれた。私は山種とならんで人込みの押し寄せるのや、荷物が小さい頭に打つからないやうにするために、わざと赤ん坊のわきに添ふた。看護婦に再會を約して又た姝と叫び聲と荷物と人間の海のなかを泳いだ。何も彼もよかつた、これなら私どもは幸せだと云へる……。

谷中まで來るとかさ守神社の境内でひと憩みしてゐるひまに、車やがくるまを取りに行つた。石段の櫻のしたに腰かけてゐたが、あちこちに今にも地震が來ると言つて慴えた話し聲がした。午後一時に來るとか、もう一度三時に搖れるとか言つて氣にかけないやうにしてゐても、私は何度も時計を帶の間にひねつて見た。ちやうど一時十分前だつた。赤ん坊はあんなに酷い砂ほこりの空氣を浴びながらすやすやと眠つてゐた。一時になると私は櫻の蝕ばんだ梢を見てゐたが、それが釣竿のやうにぴりぴりと震えた。

「來たね、ちいさいぢやないか。」

「うむ。」

千田は蒼くなつてそれきり默つて了つた。昨夜美術協會にゐるときに搖れ出すとすぐ飛び出したことや、淺草一帶が燒けてゐるので蠟燭などの明りがいらなかつたことを女は話して、

「あなたが入らしつたとき上野停車場が燒けてゐたんです。」

「さうか、すこしも知らなかつた。」

全く私は濛々とあがる黑煙は見たが、すぐ女のゐる崖下が燒けてゐることは少しも知らなかつた。――地震が止むと車やが迎えに來たので、女だけ乘つてさきに還ることにした。途中で又一度搖れはじめた。こんどは地面がうごいた。

「來たな。」

「うむ。」

千田と私はこれだけいふと默つて空をさいぎる樹のうごくのを見た。風などにうごくのと違つて、ゆつたりして見えるが何處か悲しげだつた。だるげな、疲れた動きがあつた。それを見てゐると陰氣な嗅ぐやうな氣分になつた。抵抗の

できない宿命的なあきらめた心になつた。

三

上野あたりから避難してゐる人で私の家と庭は一杯になつてゐるので、ともかく女と赤ん坊とを座敷に寢かした。が少しするとめしめし地震が來るので危なくて仕方がなかつた。疲れてゐるが山種と二人でポプラ倶樂部へ行つて洗濯竿で四本柱を樹てて、雨戸を夜つゆのしつとりした芝生に置きその上を疊表で覆ふて布團を敷いた。上は白木綿で天幕のかはりにした。そして白い蚊帳を釣つて女と赤ん坊をねかすことにした。女はつかれたのと田端へかへつた安心とでぐつたりしてゐた。私と山種と此のクラブに間借りしてゐる私の世話をしてゐる六平林とが蚊帳のそとに眠た。地震は絶えず來た。

ときどき蚊帳をめくつて私は赤ん坊をながめた。えぐい煙のやうなものが街から吹かれるので、そこらにゐる人人がみんな咳をするたびに、赤ん坊はぴくつとして目をさましかけやうとした。それを平手でそつと撫でてやると又たすやすや眠つた。街の空は晝のやうに明るい火の手があがつてそれを背景にポプラが陰欝にうごいてゐる。――夜露で天幕はぺつとり蚊帳にくつついてしまつた。私の足のさきは芝生に露き出しになつて冷たかつた。ときどき女は起きてお乳を飲ませたが、それが蚊帳のそとから見えた。そこらに蝟集した人人は夜つゆに打れて疲れて寢てゐる。――これは何といふ世の姿だか？ 何時の間にこんな世の中になつたのだらう、そのうちに放火をする不逞の徒がこのテニスコートへ這入つたと言つて、青年團の人人が這入つて來た。みんな用心をしろと言つた。そのため皆起きてしまつた。得物を持つた人や竹槍を持つた人人が殖えた。誰でも護身用の何ものかを持たなければならなかつた。あちこちの暗やみに人

の叫びごゑや怒號がきこえた。そして避難してゐる人人はひそひそごゑで話をしながら灯を消してしまつた。若し提灯をめあてに何者かが來はしないかといふ恐れがあつたからである。次の瞬間にはみんなひつそりしてしまつた。誰一人しやべる者がゐない、――小路から小路を馳け廻る靴音がする、そのたびに叫びごゑがした。……

「赤ん坊はねてゐるかい。」

「おつかれでぐつすり寢てゐます。」

夜が明けかかると吻とした。曇天のやうなけはひを見せたそらは落着き拂つて少しづつ明るくなつた。みんな家へ引きあげたが、月末に女が入院してゐたので食物の用意がなかつた。米も明日にとらうと言つてゐたのでそれきりしかない、漬物も干物もなかつた。やつと玄米が一斗手に這入つたきりだつた。鰹節を削つては食つた。が私はそのときこれは女と赤ん坊とを郷里へかへしたらどうだらうと思つた。流言蜚語だけでもこんな不安は一と月や二た月でもと通りになるものではない、いつそ國の方へ行つた方がよくないかと思はれた。さうすれば赤ん坊もよく育つに決つてゐる。もしものことがあつて今あれを失つてはならない、――。

「一日も早くかへりませう、わたしもう恐くてならないんです。ひよつとしてお乳でも止つたりしたら牛乳なんか少しも賣つてないでせうし……」

「それも考へてゐるのだ、しかし汽車はとても川端から乘れない、男でも命がけなんだから、――大宮からなら大丈夫ださうだが。」

「ぢや大宮から乘つたらどう？　自動車がないかしら？」

「そんなものがあるものか？　とにかく停車場へ行つて見てからにしやう、混んでなかつたらすぐ發たう。」

田端の停車場へ行つたが列車の屋根といはず窓といはず汽罐車までに一杯の人が群れ乘つてゐた。とても女などが乘れるものでない。軍隊が崖の上から叫んで制してゐても駄目らしい、――どの人も自分の生れ故郷を目ざしてゐる。へいぜいあんなに田舍をくさした人人にけふは何といふ田舍の穩やかな住みごこちと平和とが慕はれてゐることだらう、人間が弱つてこんなにまで田舍を美しく激しい心持ちで考へたことはすくないだらう、私は私で喉の乾くやうな氣もちでまだ秋色に間のある田舍を考へた。お歸へりなさい何も彼も打つちやつてお歸へりなさいと左う私はあたまのなかで呼聲を聞いた。あんなに永い間かかつて築きあげた私の東京の暮し向きさへ今の私に何にを値するだらう、私を悲しく不安にならせるばかりではないか？　十三年もかかつた私のその暮しさへ最う私にはいまのところ未練なぞはない、また歸つてきたつていいのだから一と先づ都落ちをしやう、そしてあの再度と出來さうもない女の子をそだてやう、いまになれば人生の目標さへ私にはできてゐるのだ。若し私が田舍へ埋れてそれきり文人生活ができなくとも、もともと無名だつた私だからどうでもよいではないか、――かげらふのやうな虛名に甘えてゐる淺はかな心よりも進んでそのかげらふを追つ拂はふではないか、私が田舍へ行つて人人に用ゐられなかつたら元々私は用ゐられなかつた人物だつたのだらう、それが何かのまぎれに世の中へ紛れ出たものに過ぎない、――全く私は私のあたひを決めるためにも田舍へ落ちて行つた方がいい、恐いときに恐がつたりするのが人間らしくてよい、何の飾りもなく死にもの狂ひになつて一心になつて列車に飛び込むあの人達を嗤つても、あの心持ちは嗤へない、田舍を目ざしてゐる心は正直で臆病で悔ひてさへゐるではないか？　老人は東京人の暮しがぜいたくだつたからだといふが、そんな詰らないことではない、東京人は決してぜいたくはしてゐない、――あれはああしなければならなかつたからだ。こんどのことも目安に置いて暮らしながら不安な日を送つてゐたのだ。それがいま田舍へかへるのだ。それで何も彼も解りすぎるほど分るではないか？　――。むしろだらういふ明

け放した正直なこころは勇ましいやうな氣がする。もともと文を賣つて衣食することが永い間やつて來たにかかはらず今日は何となく果敢ない氣がした。嘘はないが併し本統過ぎるためにそんな精神の上の本統などは今のところは世にも人にも役立たうとは思へなかつた。が併し結局はそれも役立つて行くにちがひなからう――。大宮で一度乘り換えがあるから大宮から川口町まで行つたらいいだらうと驛夫が言つたので、私は軍隊と自警團とが蜘蛛の巣のやうに網を張つてゐるなかを自家にかへつた。

「とにかく出掛けやう、しかし車に乘れるかな、まだよろよろしてゐるやうぢやないか。」

「大丈夫です。もうかうなれば一生懸命です。どうでもかうでも汽車に乘つてしまへばいいんですから、わたしどんなことでも我慢しますわ。」

「しかし赤ん坊はどうだらう。人いきれで蒸しころされはしないだらうか。」

「上野であんなに煙をかむつたんですもの。だめならあのときだめになつてゐる筈です、――そんなことで死にませんわね赤ちやん！」

女は左ういふと赤ん坊にちゆと唇をつけた。この子はさきの子より強いからといふ自信が私にもあつた。艱難をしろ、今によくしてやると私はこころで思つた。いまに知つたら驚くだらう、――毛布、おむつ、鑵詰、玄米と鍋とを車の蹴込みに入れ、水は一升瓶二本を用意した。女と赤ん坊と、そして女中が車に乘つた。私と山種と一升瓶をかついだ植木屋とで朝のうちに赤羽さして出かけた。家はそのままに釘付にして置くやうに托んだ。どうでもよいといふ物質にたいする自棄な心になつてゐた。

田端の通りを王子へかかると、避難人が砂ほこりの中を荷車をひいて通つてゐる、どれもこれも日に焼けた眼ばかり

ぎらぎらした男女のむれだつた。なかに鳥籠をもつてゆく少女や、狆を抱いた女などもあつた。背負ひきれない荷物でへどへどになつてゐる老人などもゐた。兵隊がたえず糧食車を曳いて王子街道から來た。そのたびに夥しい砂埃が烟立つた。そのあとから荷馬車が次から次へと通つて行つた。眩暈をかんじてゐる私は車の輻ばかり見てあるいた。王子に着くと珍らしく八百屋の店さきに新らしげな鶏卵が目にはいつた。「鶏卵(たまご)がある！」と言つて私はそれを買ひ込んでみんなでちゆちゆ吸つた。うまかつた。梨も用意した。王子の町はづれへ出るとみんなでその梨を晝飯のかはりにじやりじやり舐(しゃぶ)つた。そして水を飲んだ。用意したおにぎりは汽車のなかで食べるために節約して手をつけなかつたのである。

武裝した兵隊が王子から赤羽へかけて殆ど三間置きくらゐに立つてゐた。汽車はどの列車の屋根までも餘地がなかつた。それを見ただけでも一體川口町から乘れるかどうかさへ疑はしかつた。乘つてゐる人は苦しげにあえいでゐたから……見てゐるだけでも危なくて屋根の上から摺り落ちさうだつた。

赤羽の町は古い家並ばかりだつたせいか、殆軒並みに往來の方へせり出して、へシ潰れたのや歪んだのや剝げた屋根などが曇天の悲しげな陰氣なかげを曳いて往來の方へのしかかつてゐて、今にも崩れ墜ちさうだつた。兵隊荷車避難民などが一寸の隙間もなくぎつしり詰つて、すこしづつ川口の渡しの方へ進んでゐるのだが、どんよりした汚水のやうによどんで、どれだけもはけ口がつかなかつた。背後も前も動けない、もとより女の車はやつと荷馬車の埃のなかに裹まれてほんの少しづつ動いてゐるだけだ。赤ん坊のことが氣にかかるがとても車にさへ近づけさうもなかつた。——一時間ばかり經つてやつと荒川の土手へまで出たが、土手はこちらも向側も一杯の人で前夜野宿した人がやつと川口町から汽車に乘れるくらゐで、今から渡しをわたつても今夜は乘れさうもないと言ふことだつた。こちら側の人だけでも一萬

に近い人數が聲を擧げてゐるだけだ。川口町は三萬人くらゐ居るだらう、——

「これぢやとても汽車どころではない、明日一杯かかつたつて渡しにさへ乘れないかも知れない。」

「鐵橋はどうでせう。」

「お前には渡れさうもないぢやないか、それに壞れかかつてゐるのださうだ。」

「わたし這つたつていいんです。」

「いや危ないよ、しかし宿屋はなし野宿かな。」

車やはぜひ今日のうちに東京へ歸りたいと言つたが、今かへしてしまつては田端へかへるにも歸れない、と言つて打つちやつて置くわけにはゆかない、——全く途方に暮れるといふことはこんな事を言つたものだらう、土手の上の人だかりや重さうにしなつた一杯の客を乘せた渡し舟を見ただけでも私は頭がへんになりさうだつた。先刻からおとなしくしてゐた赤ん坊が車の上でさかんに泣き出した。

「雨ぢやないか？」

私は頬に手をあてたときに二粒三粒雨がふつてゐるのに氣がついた。女も幌の上にその音を聞いたらしく

「雨ですよ、まあどうしやう。」

「いやなときに降つてくれたものだ。とにかく最つと靜かな小路へ引き入れて相談しやうぢやないか。」

その酒屋の角から小路になつてゐるので皆はそこへ車を引き入れて顏を見合したが、いい考へはなかつた。宿屋は何處も一杯だつた。と言つて今から田端へかへつたつて仕方がない。明日の夜明けの人通りのないころを見澄して出掛けるより外に方法がなかつた。

「此處まで來て引き返すも殘念だ。」

私はどうしても明日は發たうと思つた。みんなもその心算らしなかつたが、しかし腹は減るし野宿と言つてもまだ將へつかないので、溜息をつくより外に仕方がなかつた。私はぼんやり女の顏を眺めたが女の顏は心から草臥れたやうなところがあつた。一日から生死の間を彷徨した女は氣ばかり立つて、反對にあんなに肥つてゐたのがげつそり瘦せ込んで、蒼白かつた。

「全く困つた――。」

私はさう言つて何氣なく酒屋の角にゐた十五六の扮裝の小さつぱりした娘さんの白い顏を見た。そのとき娘さんが何か言つたやうに思へたからである。しかしそんな筈はない、――それだのに女も車の上からぼんやりその娘さんの顏を見てゐた。おかしなことがあるものだ。さうすると矢張り娘さんが私だちに何か言つたものだらうか、――山稚や女中まで娘さんの方を向いてゐる。みんながみんなで物を言ふことが厭さうに見えた。川端から赤羽まで步いただけでも私だちはぐつたり疲れてゐた。

「あたくしの家に空いた間がございますから、よかつたら入らつしやいませんか。」

さう色の白い娘さんが言つたのを私はこんどははつきり聞いた。その證據には娘さんの脣がうごいてゐる。みんなは娘さんの方を向いた。こんなところで此麼ことを言はれやうとは思はなかつた。まるで夢をみてゐるやうに疲れた頭へその言葉がひびいた。

「こんなに雨がふるものでございますからちよいとの間休ましていただけたら結構なんですけれど……。」

「きたないところなんですけれど遠慮なく入らつしやいまし。」

こんどは私が頭を垂げそして又た色の白い眼のくりつとした娘さんに言つた。

「どうぞ、——。」

娘さんはさきに立つてずんずん歩いて行つたが、そのとき雨は一どきに降つて來た。用意の傘をひろげながら、あまり不思議な氣がしたので、「行つてもいいのかい?」と左う私は女に言つた。これもけげんな、あまりに唐突な人の好意にぽかんとして、「とにかく行くといいわ、あんなに親切に言つてくださるんですもの!」——私だちは別荘風な、新建の家の前へつくと娘さんは中へ這入つたが直ぐこちらへゐらつしやいましと庭づたひの座敷へ通した。そこの奥さんらしい人が出て來て、

「まあ、赤ちやんを抱いてゐらしつてどんなにおこまりでございましたでせう、帶をといてゆつくりおやすみなさいまし。」

さう言つて奥へはいつて行つたが、私だちは依然ぽかんとしてゐた。車やがかへして呉れと言つてきかない。歸せばここで泊らなければならない、そんなに人の好意に甘えていいだらうか、——私は迷つてゐたがどうしても車やはかへらなければ承知しなかつた。植木屋はかへしておしまひなさい、あとはどうにかなるからと言つたので、歸へすことにした。——暫らくしてから奥さんが白い飯のお握りを盆の上に載せそして紫色の茄子の新漬をつけたのを搬んだ。

「こんな時でございますから何もございませんが、お腹だけおつくりなさいまし、ほんたうにどんなにおこまりでしたらう。娘が見るに見兼ねたつて左う言つておつれ申したんでございますから、どうぞ今晩はゆつくりお寢みになつてらしやいまし。」

「はあ、何ともおれいの申しやうもありません。」

人のよささうな奥さんの顏を私は私の女とかはるがはる見た。女は奥さんの顏を拜むやうな目付をして見た。まだこの女のこんな目をみたことがなかつた。なるほど左う言へば女中や由種までが敬虔な眼付をしてゐる、或ひは私も拜むやうな眼色をしてゐたかも知れない、——

「どうか拙味いものですけれど御遠慮なくおあがり下さいまし。」

「どうも恐れ入ります。」

茶を淹れて持つて來て奥さんは氣を利かして奥へはいつて行つた。さつきの娘さんが向側からこちらを見て微笑しておやすみなさいといふやうな顏をしてゐる。私だちはみんなこの娘さんにそつと内秘で挨拶をした。この人が連れて來てくれたからだといふ感謝の腹があつた。

「さあ遣れ白い飯ぢやないか、何か久し振りな氣がするぢやないか。」

「ええ、これはおいしい。」

溫かいのを指さきでつまむと、こころよい重みがあつた。飯の重みを感じたことが初めてだつた。みんなは贅澤な晩飯を一粒も殘さずに食べた。茄子の新漬もみんなを喜ばせた。食べ終るとすつかり疲れてしまつて庭さきで虫が啼きはじめた。みんなは暗い部屋に坐つて滿ち足りた食慾をいとしむやうな心になつた。蚊帳と夜具とが搬ばれ、蠟燭も點けられた。同時に先刻から聞いた往來の騷ぎが靜まつてあちこちの店さきの雨戸がすつかり閉められたらしかつた。

女と赤ん坊を蚊帳にねかし、私と植木屋と由種が二時間交代に起きることにした夜中にどんな事が起るかも知れないばかりか、ひよとすると地震が正十二時に來るかも分らないとのことだつた。此處の家では裏の空地にトタン張りの屋根に疊を敷いた避難所がちやんと拵へてあつて、いざとなると直ぐに馳け出されるやうになつてゐた。主人らしいのが

そこを案内してから、

「みんなこんな非常時はおたがひですから落着いて避難していらつしやい。」

と左う言つて二階と奥にも一組づつ避難してゐる人がゐると言つた。さう言へば先刻井戸端でおむつを洗濯してゐた蒼い顔の女が必然左うにちがひないと思つた。

夜中に絶えず警鐘が鳴るたびに銃聲がした。ひつそりした四邊に懷中電燈を持つた黑装束の人人が垣のそとを歩いて行くと、小路の奥からも同じい異装の人物が出た。それらは電燈の光を消したり點したりすることに依つて何かの合圖をした。私は町の人と夜番に出ながら通りへ出ると、晝間あんなに押し合ふた群衆が夜と同時に通行が止められて一人も通らないのを見た。ただ避難民らしいのが荷物をかついで通るくらゐだつた。——荒川の土手の上は野宿の人で一杯だつた。灯一つないところに動いてゐる人人が土手下にぎつしり詰つてゐた。

四

朝起きるとすぐ土手へ出たが何時の間に集つたのか、もう渡しの着く溜りは三重にも四重にも人が群れて近づくことさへ出來さうもない、鐵橋の上にまで一杯の人だかりだ。どの人もみな野宿したものらしい、——川口町も大宮もとても命がけだ、わけて女子供などは乘れたものでないから止した方がいいだらうと、大宮から來た人が私に言つた。私は廣い川のおもてに弓なりにしなつた渡し船を怨めしげに眺めた。故鄕へかへるにしたつて既う命がけではないか、それでも人人は犇めいてゐる。——いやな鐵橋の赤茶けた色が青い雜草の川の洲の上にどつしりとかかつて、それが何ともいへない苦しげな景色になつて見えた。溜息をつくたびに鐵橋の上を通る人の足音が陰鬱にひびいた。

「何も彼も絶望だ、とても國へはかへれない、それを無理にしたらこのうちの人數が缺けてしまふに定つてゐる。」

私は渡しと鐵橋との混雜を話し、大宮にしても川口町にしてもとうてい乘れないことをも話した。われわれの健脚はあんな混雜の中では一とたまりもなく打ちこはされて了ふだらう、ことに赤ん坊をつれた産婦などは思ひもよらないことだ。

「死ぬつもりで行つたつてだめでせうか？」

「それは空想だよ、せつかくいままで生きて來たんだから、いま死ぬつもりでゐてたまるものか。」

が先刻から氣のついてゐることは、もし午後まで此處の家にゐるとしたら植木屋を歸してしまはなければならないことだ。人の庭でありながら一晩厄介になつてゐるので、彼は庭を掃いたり雜草をぬいたりしながら家の方が氣になるらしく、いりいりしてゐる心持ちが私には見えた。池のあるこの庭の敷石にかがみ込みながら何か考へ込んでゐる彼れに、十歳の男の子がある、——それを一口も小言をいはないで或ひは國の方までおとどけしてから歸るのだといふ彼れの心になつてみると、これは是非歸さなければならないと思つた。出入りの車やの車を一日から取り上げてしまつてあるから、車には差支へはない、曳くのは山種だつて引ける、——それに女は昨夜あたりから足が重いと言つてゐるから、あるひは脚氣が出たのかもしれない。

「とにかく君はひと先づかへつてくれたまへ、家の方も氣がかりだらうし、もうかうなつては直ぐと言つて汽車に乘れさうもないんだから、——あるひはひよつとすると田端へ歸るかも知れない。そして汽車の空くのを待つて出掛けてもいいと思つてゐるんだ。」

「その方がよござんすね、あんなに込んでゐちや手もつけられはしないんだから、——實は家の方も心配なものです

から今日あたり一度かへらしていただかうと思つてゐたんです。まことに濟みませんが。」
「そりやお互ひだからかまはない。とにかく田端へかへつたら車はこちらにあるから誰か車の曳けさうな人を一人よこしてくれませんか？」
「え、承知しました。」
植木屋が歸つてから晝になつたが、うどんのうでたのがひるめしのかはりに出た。とにかく車やがくるまで待つことにして、奥さんに左う言つてをいた。が、このうどんはみんなの顏を見合せさせた。
「ここの家にもそろそろ食べものが無くなつたのぢやないか、その證據には奥さんも娘さんもなるべく顏を見せないやうにしてゐるぢやないか。」
「でも今赤ちやんのお湯をつかはしてあげますつて言つて、うしろの空地でお湯を沸かしてゐらつしやるやうですよ、けれどお米がないことは實際らしいのね、でもわたしたちばかりで昨夜から植木屋を入れると五人分ですもの。」
「なるほど五人分！」
はじめて私は冷めたい汗をかんじた。はじめあんなに好意をもつてくれたのに、その好意のあるうちに此處を引き上げたい、さうするのが人情ではないか、それだのにぐずぐずしてゐては向ふで好意の持ちやうすらたくなるわけだ。
「だがうどんはどうだ。」
私は悲しくなつて贅澤な誰にするでもなくいらいらした氣もちになつて言つた。
「そのうどんのことですがね。」
女はすこし考へるやうにして、「多分あとにどれだけもお米がないのに初めて氣がついたらしいんぢやないでせうか、

あんなに澤山のお子供衆ですもの、どれだけいるか知れません。」

と言つてまだ言ひ足りないやうな顏をした。あるひは米が想應にあつても幾日泊るかも知れない吾々に大事を取つたのかも分らない、あるひは偶然にうどんをゆでたので、それを出しただけで深い意味のあるものでないかも知れなかつた。とにかく此のうどんを食べてしまふと皆の顏にはこころから悲しくなつた色がうかんだ。何か知ら感情がある、とだう私は考へ込んだ。ともかく車やが早く來てくれるとよい、さうすれば向ふの好意を好意としてそつと優しく殘してゆけるし、私どももそれを靜かに抱いて行ける……

「とにかくこのうどんは甘美い。」

私はかういふと緣側の日を著がつた。由種が水を撒いた。赤ん坊はなにも知らずに安らかに眠つてゐる――。あるひはこのうどんはひよつとすると又た別の意味があるのかも知れない――。

女中がそのときおむつを洗濯しに行つたが、吃驚りしたやうな顏をして、すこし呼吸を切らして來た。

「金澤が海嘯なんですて。いま井戸端で聞いたんです。」

私だちはみんな顏を見合せた。それはみんなが歸らうとする國の市街だからである。實際みんなは一どきに呼吸を切らしてしまつた。

「金澤に海嘯があつた?」

私は言下に、「そんなことがあるものか、むかしから海嘯なんてないところだ。」と叱りつけるやうに言つた。

「でもこんな時だからどうだか分るものぢやありません。」

「いやばかもいい加減にしろ、あそこに海嘯などあるものか?」

「海から二里もある市街に來るもんですか？」

由種は冷笑つて見せた。私も同じいやうに冷笑つたが急に冷たくなつた。どんな時にどんな事が起るかも知れない、どつちにしても實否を糺す必要がある、——

「誰がそんなことを言つた。」

私がかういふと女中は井戸端のわきに住んでゐる婆さんが言つたと答へた。「由種、ひよつとすると神奈川の金澤かも知れないから行つてしらべて來ないか、どうも厭な氣もちだ。」——由種はしばらくしてから歸つてくると、

「いや神奈川の金澤ださうです。」とこたへた。

「さうだらうと思つた、あんな靜かな海べりにそんなものが起つてたまるものか？」

ほつと呼吸をついたが、たつたこれだけの事でいますぐ國へゆくのが早計だといふ氣がした。もつと汽車が空いてからゆつくり出掛けやう、それでも遲くないやうに思はれた。——暫らくしてから女は赤ん坊にお湯をつかはして、

「まあこんなに綺麗になりましたよ、頭から鼻までまるで垢だらけなんですもの可哀さうに、——」

赤ん坊はつやつやした肌をして蒼い眼をくりくりさせてゐる、——よく感冒一つひかなかつたものだ、全くこの子はうまく育つぞと思つた。

「どうだ、こいつを一つ震子といふのにしやうぢやないか、かんなんのかたみにして——。」

「え、震子？」

女はやつと笑つて、「それもよごさんすね、だけれど何か可哀さうな氣がするぢやありませんか？」

「うむ、可哀さうな氣はする。」

上野で半日ばかりといふものは、どんなにしても泣いてばかりゐて乳を飲まなかつたさうだ。あんな小さいものに此の地變はわからないだらうが、しかし心にではなく何處かに解つてゐるやうなところがあるとすれば、お乳を飲まないところが何となく首肯かれるではないか、たつた生後五日くらゐの赤ん坊でもあんなときにはどうかすると一年分くらゐの智識でなくともそれに近いものが、殆ぼんやりと感じられてゐるものではなからうか、そして成人してから忘れてしまつても關はないが、やはり何かがうろ覺えに感じられてゐるものではなからうか？　そんなことは醫者は嗤つてしまふに違ひない、しかし私には笑へない氣がする、産湯をつかつたことを覺えてゐるのはトルストイばかりではない、左ういへば吾々も何か記憶の錯覺かも知れないが、どうやら産湯をつかつたことを覺えてゐるやうな氣がするではないか？——。

この赤ん坊が大きくなつてから、こんどの地震の話をしてやつたら或ひは考へ込んだあげくに、何か知ら覺えてゐるやうな氣がすると言つたらどうだらう、嘘だとは言へない氣がする。あるひはお前はそのとき乳を飲まなかつたと言つても覺えてゐなからうが、他のふしぎな何ものかをふり返つて、わたし何だか覺えてゐるやうな氣がしますと言ふかも知れない、——さう思ふとこの小さい生きものの青い貝のやうな眼をみただけでも、私は心樂しい人間の父親らしい氣になつた。嵩高（かさだか）な偉さうな人間の父親、誰でもなれさうなこの父親の感じが私には大層愉しい氣がした。

「昨日からみるともつと澤山の人です。磧も土手も向側もぎつしり一杯です。まるで人で埋まつて喚めき立ててゐるだけでも逆上せるやうです。」

山種がかへつて來るとかう言つて、こちらから歸るものと向ふから還つてくるものとで戰爭のやうだと言つた。私は默つて瘠せたこの甥の顏を見た。女も絶望的な、そしてどうにもならない顏ばかりを眺めた。車やはなかなか來なかつ

た。午後過ぎになつて皆は車やを待つてばかりゐた。それに奥さんや例の娘さんの顏を見るのが苦しくなつて、なるべく顏を合さないやうにした。私どもと同じい思をしてゐるらしい二階に避難してゐる女の人がひつそり降りて來ては、おむつを洗ひに行つた。その背後姿を見てゐると人事でないやうな氣がした。

日が暮れかかつたが車やは來ない、あちこちに虫がひいひい……と啼いてゐる。――外は同時に人通りがなくなつて又た懷中電燈の光が垣根の隅や暗い軒下に起つた。しかたなしに蠟燭の灯をともし初めたが、どういふものか何時ものおにぎりのご飯が出ない。皆は顏を見合した。腹は減つてゐるが誰も言ひ出すものがゐない、庭樹を透す容明りも掠れて行つてもう蠟燭のあかりだけが茶つぽく瞬いてゐるだけだつた。みんなは耳を立ててゐたが奥の方から人の來るけはひもなければ、陶器類の音すらしなかつた。私はこれはひよつとすると飯が出ないかも知れない、ひるまのうどんのことを考へると、これはぐずぐずしてゐられないと思つた。

「飯は出ないらしいぜ、こんなに暗くなつてゐるし、いつもなら持つて來てくれるんだが……」

女もやつと氣づいてゐたらしい寂しげな微笑ひをふくんだ聲で言つた。

「うどんのことを考へますと出ないらしいんですね。」

「うむ、何か腹の足しになるものがあるかね。」

「玄米のおにぎりはみんなになつてゐますし、あ、さう、梨が王子で買つたのが少しあります。」

「いくつあるんだ。」

鞄のなかに水氣ぐんだ新しい梨があつた。それに鷄卵も五つ六つある! それを女中と由種と私だちとが眞中に置いて坐つた。

「一つづつ食はうぢやないか、そして明日の朝の分は又た町ぢゆうを捜すとあるかも知れない。」

みんなは蠟燭の明りで梨をかじり切めた。女が腹が空いては乳が出ないだらうといふので一つだけ數をふやした。わたしお湯さへいただいたらお乳の方はだいぢやうぶなんですから……左う言つたが無理に食べさせた。食べ終るとみんなは悲しさうな顔色をして梨の芯や皮のうづ高い新聞包を眺めた。これでしかし腹はできたから私は安心をした。若し世が平和になつたら梨をそまつにしないぞといふ可憐な氣もちになつた。——喉が乾いてお湯をもらひに行くのさへ氣の毒になつて了つた。それで水を汲んで來て冷たいのを飲んだ。虫がひいひい啼いてゐるが虫のこゑを聞くのさへ厭な氣がした。赤ん坊をねかしつける女のうたが低く蚊帳のなかから起つてゐる。——しばらくして警鐘が鳴つて火の手が眞赤に燒けた東京の空から東方の村落に起つた。また燒けてゐるなといふ氣がした。さういふ事がみんなを憺えさせ、重い陰鬱な氣もちにならせた。

「わたしだちは一たいどうなるんでせう。」

女は寢しなに左う言つた。いつの間にか由種も女中も寢てしまつてゐる。——どうなると言つて田端へかへつてから更らに國へかへるより仕方がない、落着くまで吾々はやはり不安な暮しをするより外に途はない。

「まだ僕らは仕合せだ。もつと酷い目に遭つてゐる人がゐるんだから、——まあ我まんできるだけするんだな。」

それは何萬人死んだ人があつても結局ひとりの人間が生きてゐた事實はどのくらゐ尊いことかも知れない、ひとりが生きるために火の中を遁れたことは何と言つてもあとあとに殘る……。が今の私には平和といふものが少しもない。——。由種や女中は睡れても私はいつも眠れなくて、女と赤ん坊とを眺めて起きてゐるばかりだつた。私には睡眠といふものがまるでやつて來なくて、こぢれ固まつて何かからだの中に腫れものになつたやうな氣がした。それゆゑ厭な虫

のこゑが優しければ優しいほどひだるく悲しく氣を滅入らせた。へいぜい美しいと思つたものが今はいやがうへに氣を沈ませるばかりだつた。私はなぜか生涯のうちにこんな虫のこゑを聞きたくないと思つた。これから秋になると又たこの虫の厭な啼聲をこんとの出來事と一しよに考へさせられるだらう――。

「若し世の中がもと通りに靜かになつたら今までのやうに暮らしてゆけたら或ひはもつと別な考へをもたなければならない、べつに贅澤はしなかつたが餘りぼんやりし過ぎたではないか。」

私はかう腹の中で考へると、女にふと又た言葉をかえて言つた。

「せめて煩さいけれどもお前やおれの母親のそばであの人たちの餘生を見送らうぢやないか、こちらが却つて早いかも知れないが……。」

とにかく左ういふ考へを持つのも人間には悪い考へではなからう、身に沁みて左う思ふだけでもよいことではないか？　だが結局は飽きてしまつて國の方で身動きのとれない氣もちになるかも知れないが、いまはそんな果敢ない心さへ何か意味ありげに思はれる……。

「けれども煩さくてあとで困ることがないでせうか、田舍の人は遠慮がないんだし、何や彼と鬪つてこちらがしまひに氣が滅入るやうなことがないでせうか。」

「そりやきつとあるさ、だがそんな事くらゐは我慢するんだ。お前の父親だつてもう眼が見えなくなつたと言ふぢやないか。」

「ええ、あの人はお酒を飲みすぎたんでせうね。」

澤山の家族をもつてゐる女や私にも、どうかすると國の方のどす黒い人情がいまにも心に沁みさうな氣がした。しか

し國の方より外に行くところがない、――行つてあまり口數を利かずに默つて暮さう、誰にもところを知らさずに人にも會はないでゐたら寂しくはあるが、せめてこんなに亂れ尖つた心持ちだけでも癒つてゆくだらう、さう思ふと田舍の兒どものなかに交つて遊んでゐる朝子のことまで、明るい梅もどきの實のある垣根のあたりに目に見えるやうな氣がした。田舍の兒どもの風俗に沁みつかれたら哀しい氣もするが、しかしゆつたりした兒どもになるかも知れない。朝子さへうまく育つたら腹立たしげな日を暮らさなくともよからう、己れの心が悲しみちぢんで雪あかりに蹲んでゐるのも久しぶりでさまざまと己れの生ひ立ちを感じるやうでよいではないか？

「けふは一體幾日だらう。」

夜と晝とのけじめのつかない此の二三日は、まるで日が忘れられて了つてゐた。さういふ私は話しすることがなくなつてこんな寂しいことを言つたのだ。

「四日でせう、それとも三日ですかしら、いいえ四日です。」

女のあたまにも日數がよく分らぬらしかつた。そして間もなく睡てしまつた。私はときどき銃聲のする暗い町の方へ出て行つた。なぜか家にゐられなくて宿の人と一しよに夜警に出た。長野縣と書いた弓張提灯を持つた白服の巡査の一隊が、今川口町へ着いたのであらう、點々として通つて行つた。話し聲一つ立てないのが氣味惡いあたりの暗い建物にくらべて、何か異常事がありさうな氣を起させた。

五

田端へ歸ると手廻りのものを片づけ初め、何時でも發てるやうにしたが、毎日陰氣な飛行機のうなる聲がした。なぜ

か平常あんなに快活なこの空中船が地震があつてから私には陰氣なものに見えた。それを軒端にながめると氣が沈んだ。

「はじめ地震がくると看護婦さんと一しよに三人で蒲布團を赤ちやんの上にささげて、もし天井でも落ちて來たら支へるつもりでゐたんです。今から考へるとおかしいかも知れません。すこし揺れが止むと三人で表へ飛び出すと駿河臺によく石の塀があるでせう、あれがあちこちで一時にばたばた崩れ落ちたんです。それですつかり吃驚してしまつてお茶の水の學校へ行つたのです。」

ところがその時には最う水道橋の方から燃えてくる火の手が、校庭を覆ひかぶさつて此處にも落ちつけなくて、上野へ逃げることに決めたのでございます。赤ん坊は一人の看護婦さんに負ぶしてもらつて、もう一人の方がおむつと毛布を持つて私の手をひいてくれたんです。いゝえ、一生懸命だつたものですから夢中で歩いたんです。いくら産後四日だつてあんな時には歩けるものなんですね、――松住町へかかると駿河臺へ何時の間にか火が廻つて、最うこちらの順天堂が燃えてゐたんです。さうかと思ふと須田町邊からも黒煙がうづ巻いて、それがわたしだちの頭の方へ尾をひいてゐるんですもの、これは必然焼きころされるのだと思ひました。看護婦に負ぶしてゐる赤ん坊はそんな最中でもねむつてゐたのです。埃と烈風とに煙が人家をかすめて全く生きた心持ちがなかつたのです。

「とにかく本郷へ出てまつすぐに家へかへらうと思つたんですが、本郷の方にも火の手があがつて大學が焼けてゐるのだと皆が言つてゐました。そんな最中にも地震がやつて來ては屋根瓦が本のペエヂを繰るやうに剝げ落ちるんです。けれども地震も火事も恐くなくて唯逃げる一心だつたのです。ところが何處をどう出たのか上野の黒門町の通りへぽつかりと出ました。がそのとき上野の山の右の方の――淺草あたりからまるで恐ろしい勢ひで黒煙が濛々とのぼつてゐるのを見たときに、からだはくたくたに疲れてゐるし、もう歩く元氣もなくなつてしまひました。あの火がだ

んだん上野へついて來たら挾み打ちになつてしまふに決つてゐる！　さう思ふともう自棄になつてしまつて看護婦さんと一しよに死んだつていいといふ氣もちになつたのです。それに例の肥つた方の看護婦がもう泣き出してしまつて歩く元氣さへないのですもの、うんと叱つてやつと歩き出したのです。そのとき氣がつくともう火は萬世橋の方へついてゐました。」

あんなに廣い上野の通りが自働車や荷車や人力や何萬といふ人間の數で埋まつてまるで戰爭のやうだつたのです。あんなに澤山の人出をこれまで東京で見たことがございません、それが誰でもみんな氣狂ひのやうに叫んだり人を呼んだりしてゐるのです。それがみんな上野の山をさして走つてゆくのです。

「上野へ行つてもあんなに澤山の人では坐るところがあるでせうか。」

看護婦がさう言つてがつかりした顏付で群集を眺めてゐましたが、

「大丈夫あるでせう、なければないときだ。」

さう言つてわたしだちは足を引き摺りながら行きました。走つてゐないものはわたしだち三人だけでした。もう走るにはちからがなくなつて二十間も行くと一ト休みしたのですもの。さうしなかつたら迚も歩けはしなかつたのです。

「そんな間にも町の人がわたしだちに水を飲ませてくれたり、俥を呼んでやるとか自動車を世話してやるとか親切に言つてくれましたが、どんなにさがしても車も自動車もなかつたのでございます、こちらが氣の毒になるほど皆がわいわい言つて與れるのですが、どの使も車のないことを言ひました。しまひにそんなことをしてゐる時間が怖くなつて一分間も早く歩き出さうといふ氣になつたのです。それはその筈です何萬といふ人なだれが上野へくずれて行くのをひと目見ただけでも自分だけが遲れてゐるやうな氣がして急がれてならないんです、――わたしだちが廣小路へか

かゐと最う松住町一帶が火の海になつてしまつたのでございます。」

上野のれいの呉服屋で砂糖水を一杯飲まして貰つたときに、あそこの主人はこちらは大丈夫だと言つてゐたくらゐですのに、その晩上野であそこも燒けたことを知りました。何だか非常に哀しい氣がしました。

「上野で一ト晩ぢゆう家から今にも迎えがくるかと思つてゐたのが來ないものですから、てつきり家がつぶれて皆死んだものだと思つたのです。さう思はずにはゐられなかつたのです。田端は？と聞くと全滅だとみんな答へるのですもの、もし生きてゐたらあなたが來なければ誰かが來ると思つてゐたんです。それが來ないものですから……これはみんな死んだのだと左うかんたんに考へてしまつたくらゐです。」

女はかういふとさらに何が何やら夢中だとも言つた。先刻から默つて聞いてゐた霜島先生はオリザニンの注射器をアルコールで消毒をしながら、

「いや大變な目にあひましたな。びつくりなさつたでせう。」

さう言つて女の肌に注射をされた。「もうすつかり地震も固まつたから安心なさい。」とも言つた。地震のことも醫者が知つてゐるもののやうに尋ねた女は、自分の病氣と一しよに安心して、「さうでせうか。――」と言つた。

「餘震はあるがたかが餘震ですから大したことはありません。」

霜島先生は坐敷へもどると、庭の方をながめて、いや此間の晩わたしは全く凄愴な氣がしたくらゐですと言つた。

「地震の來る前の月のきれいな事つたら凄い程でしたね、あのときも左う言つたやうにあの月の光ときたらまるで死んでゐるやうに動きませんでしたからね、こんなことになる前知らせのやうな氣がした。」

なるほど左ういへばあの月の光はなぜか頭に殘つた。やはり老人には何かが感じられるのか知らと思つた。――或る

病人は今年のやうに雨の多いときは一日に氣流が十遍くらゐ變化つていやな年はない、一時間が溫かつたりする、こんな年には變なことがあるものだと重病人が言つたさうだ。

「ちやうどあの屋根の上へ月が出たときわたしはひやりとしたくらゐ變な月だと思つたのです。」

先生はとなりの屋根を指さして左うい ふと、きふに肩をしがめて、

「ありや何の聲です。」

一層くらい庭のすみの方へ目をやられた。そこに一間くらゐの池があつて、土賊の簇生した繁みにつながつた姬熊の笹があつた。そこから、かいかい……と濁つた聲で啼くものがゐた。

「あれは蛙ですよ、どこから來たのか、あの池を離れないのです。ふしぎに雨の前の卅分くらゐに啼くのです。女中などはあいつが啼くと洗濯物を取り入れるくらゐに信じてゐるんです。」

「はあ、蛙ですか? ちやまた雨でごはせうな。」

「ええ、さうらしいんですね。」

熊笹をさぐると池の水へ潜り込んで見えなくなつてしまふ。そして厭なこゑで啼くのだ。私はこの小さな生きものすら不安な地震とかかはりがあるやうに思はれて、啼くたびに氣だるいあくびの出るやうな輕い恐怖をかんじた。

「蛙はあるひは知つてゐるかも知れませんね。なんだかあの形からして地震と關係があるやうだ。」

私はこのときこのごろ不思議に私自身が發明した體質といふことについて、先生の意見を聞いた。

「何時でも私は自分のからだが動いてゐるやうな氣がするんです。さう氣のついたときにたいがい坐つてゐる足の甲が臀部の方へ向つて何かから動いてゐるやうな氣がするんです。全く動いてゐるときすらあつてそれが非常に怖いの

です。これは一種の恐怖病の一種で慴震と名づけてゐるんです、——或ひはどうかすると電燈がぢつとしてゐても矢張り動いてゐるやうに見えてなりません。もしそんなときに動かなかつたら自分でそつと動かしてまで見ないと氣がすまないんです。そして初めて安心をするのです。そのために膝から下が非常に鋭敏な感覺が働くやうになりました。」

「それはやはり神經衰弱でせうね、だがやはり天變時に起きる過敏な發作でせうな。」

「だから夜中などに突然びつくりして起き上ることがあるんです。實際は何んでもないのに地震が來たやうな氣がしてびつくりするのです。」

私はもう一つ不思議に厠へはいると、定つて地震が、くることを偶然だが恐いと言つて微笑つた。多分來るだらうと思つて這入るとき決つて遣つてくる……神經のはたらきと天變のことが妙に合致するのも偶然だと言へばそれまでだが、人間の中にも何かこんな人間の知ることのできない微妙な感覺があるのかも知れないと思つた。東京人は近く大きな地震がくるかも知れないと平常思つてゐたことも實際だつた。

「わたしがあの日やはり厠で三疋の蜘蛛がちやうど平均した間を置いて、まる一日ぢつと釣り下つてゐるのを見ました。何んでもないことだらうが、やはり頭に殘つたのです。」

霜島先生が歸らうとせられたので、こんど私はしばらく國へかへらうと思つてゐることを話した。

「それもようごはせう、だがあの庭はほしいものですね。」

「いや庭どころではないのです。もつと靜かなところへ行かないと私のやうな臆病な人間はしまひに病氣にとつつかれてしまふのです。」

霜島先生はきふに微笑つて、「いや私の家内も國へかへりたいと言つてゐますが、私は東京の復興するところを見屆けるのだと言つて叱つて置きました。いま田舍へかへつて村長にでも擔ぎ上げられたらそれこそ災難ですよ。まだまだ東京に踏み停まつてゐるつもりです。あなたはまあ暫らく休んでゐらつしやい、あなたは却つて田舍がいいかも知れませんよ。いや失禮しました。」

先生は元氣さうに左ういふと玄關から出て行つた。霜島さんのどうかすると子供らしいところの見える奥さんが、四十を越してなほ田舍へ行きたいと言はれたことも無理もないと思はれた。あとで女が椽へ出て來て言つた。

「庭はどうなさるつもりですか。」

「此のままにして置くつもりだ。又何處かへ行つて小さい庭を作らう、そして又越して行くのもよからう、子供つて奴は朝建てて夕方壞すぢやないか、惜しげもなくおもちやの家をな、あの氣もちとやはり僕のものも似てゐる」

唯氣に入つてゐるのは、篠竹をとりかこんだ叡山苔の蒼綠と、一基の石手洗だけだつた。この二坪ばかりはさすがに私の氣を引き立てて惜しい氣がした。朝、仕事をするときも夕方の涼みもまた夜半のねざめも此の篠竹の荒い背のなかに聞いた。秋になるとその影は書齋の疊の上に來て、ひるすぎは踏石の上に珊々と亂れうごいてゐた。しの竹のゆらぐを眺め暮らすかなと書いたころは、こんなに急に薄情なほど庭を見棄てて去る私ではなかつた。もつと永くゐるつもりだつたが、いまは心がおちついてゐない、――暇にまかして濕りを絶やさなかつたこの蒼い苔の下へもぐつたこほろぎだけでも、かなりな數だつた。私はしやがんで竹を見た。竹は置くがやうに剪らなければならない、――さう今きふに思ひ出すと些つと悲しい氣がした。

「彼のとくさを電燈の下で選つたことは忘れないな、トランクに二抔もあつたのだから。」

女中の實家の山里にあつたのを由種と二人が採りに行つたか、夜になつてから二人がかへつて來た。そして鍬を持つて枯れたのを棄て出つたのを剪つた。電燈をずつと下におろして茶の間を泥だらけにした。土蜘蛛が根から這ひ出したりした。あんなことも世の平和なころの戯れのやうな氣がした。いまの私にさういふ心はすこしも起きてこないばかりか、却つて往事を悲しむやうな氣にさへなるのだ。若し再び私があんな下草を集めたりしたら人人の心もずつと鎮まつてくるに違ひなからう、――

午後おしほさんが千田と連れ立つて來たが、千田は汚ない服を着て辨當のやうなものを背負つてゐる。おしほさんも裾を折つて同じい行厨を腰に巻いてゐる。――大阪ものの二人はいよいよ落ちてゆくのだなと思つた。それにしてもこんどの震災は二人のよりをもどしたのか？かれらは夫婦ものでなければ止むがたい駈落者のやうにしほらしげに見えた。すくなくとも左ういふ姿をつくることの上手なおしほさんは、手拭さへ帯の間から新しいのを一本さげてゐた。

「君はかへるのか？」

「うむ、いまから大阪へ行かうと思ふんだ。こちらではどうも落ちつかない――。」

「二人で？」

千田は顔を擡げその顔をふつて見せた。もちろん一人だよといふ色をした。

「いや、この人を青山まで送つてゆくだけだ。送つたらその足で信越線から歸へらうと思ふんだ。君だちが出掛けてからきつと汽車はあのとほり込んでゐるから引き返すだらうと思つた。最も僕ひとりだからどうにかして行けるだらう。――……。」

「一人なら大丈夫さ、だが何かい、こんどはあんな騒ぎだから又た一緒になりはしないかと思つてゐたんだ。どつち

にしてもいいことなんだが。」

すこし言ひすぎたがかういふと千田は微笑つて、この男らしいはつきりした冷たい言葉で言つた。

「そんなことはないよ、べつべつだよ、あれは東京に殘るだらうから。」

「さうか。」

あんな騷ぎでも別れた二人は一しようになれなかつたのか、さう思ふと八年も添ふてゐて別れるとめつたによりがもどるものでないと思つた。ああいふ騷ぎのなかにも別々な人情が別々に育つて行つたことが悶苦しくもあつたが頼もしくもあつた。兩方の心がちやんと性根を踏んでゐることが珍らしくも意外な氣がした。

「そんなに一度別れたらだめなものかな、人間つてやつは存外しつかりしてゐるものだ。」

私は心でさう思つたが不圖千田の顏を見ながら、これはどつちにも未練がなかつたのではなからうか、もう二人の間には比較的ちやんとした友情のやうなものだけが殘つてゐたのに違ひない——、それ故二人とも別に何も思はない、そのくせ言葉づかひは夫婦のやうだ。

「こんど一しよになれなかつたとしたら一生べつべつだね。」

「まあ左うも言へるが僕はなりゆき次第だよ、しかしそんなたはいないことは此度ですつかり揉み消されたやうなものだよ。」却つてはつきりしたやうな氣にもなるんだ。」

いままで少しくらゐあつた未練もすつかり無くなつたとでも言つたらいいのか? 私はさういふ事實もあり得ると思つた。が、男女といふものの間は全く極端なくらゐに反對を意味することがあるものだと思つた。

おしほさんが女と一しよに座敷へ這入つて來て、女が無事で駿河臺から逃げて來たことを祝つた。あの日お見舞ひに

行からとお訪ねしたところへ地震が來たのだと言つた。わたし長唄でもならつて暮らさうと思つたがそれすらもう出來ないやうだし、この後どうしていいか分らないとも言つた。千田も默つてゐたが女も物言はなかつた。日が傾いたので、千田はおしほさんを急き立てた。

「それぢやお發ちまでお目にかかれないかも知れません。わたしのことは東京にゐるつもりですけれど、しかしひよつとしたら大阪へ歸へるかも知れませんがどうぞお達者で――。」

「そんなことを言はずに又入らしつて下さい、わたしどもは月末までこちらに居るつもりですから。」

女は左う言つて親しくしてゐた不幸なやうな、また身輕なやうなおしほさんを玄關に見送つた。ぢや又逢へるかどうか分らないが、とにかく便りをくれたまへと千田が靴を穿きながら言つた。おしほさんは褄を取つてどこか心悄げなしやれ者のやうな容子をしてうしろを向いて、

「では御機嫌よう。」

と言つて二人とも騷がしい表へ出て行つた。いつも夫婦づれで來た人があゝして去つてしまつたことが、根が別れ別れになつてゐることが解つてゐても妙に寂しい氣もちを誘つて、あんなにしてゐても實際は一緒になつてゐるのではないかと思はれたが、しかし彼等にまで明瞭した二人の態度をみては疑ふにも疑はれなかつた。

「なんだか大變いつもより寂しい氣がしましたね。しかしどうして一緒になれないものでせうか。」

「あゝなると兩方で硬くなる氣もちがあるものだ。一方で柔らかくなる氣もちがあつても硬い方に揉まれてしまふのだ。」

私はさう言つてみたものの心では二人が麁落もののやうに山の手の電車道を歩いてゆく姿が思ひ浮ばれて、何だか的

の外れた意地な容子だと思つた。

「さあ、みんな庭を掃除をしやうぢやないか、池の水もさつぱりと入れかへて置かう。そして置けば幾つたあとでも氣が暢々していいから。」

山極と平林、それから女中が手傳つて池の水を汲みかへた。枯れ枝もすぐつて竹の時萠の仇枝をも切りとくさもすつかり手入れした。霜島先生へ利休燈籠、我鬼山人に石の手洗ひを持たせてやり、さきの死んだ子供に似てゐると言つて可愛がつたひろちやんには小さい石燈籠、雨どたりへ植木を一鉢づつ預け。それですつかり片づいた。あとに來る王國山人には蘭二鉢と植木とを上げ、地震のさいちうに三月も歸らなかつた猫がかへつて來たのを飼つてくれるやうに頼んだ。それも田端の線路づたひに來たのだつた。その白い顏が勝手口に見え一聲啼いたときみんなは眞蒼になつてしまつた。女どもは全くの不意を食つて泣いた。

「とにかく家が潰れたのか、又は何處へか越して行つたものかも知れない、しかしあんなに澤山の人通りのなかを能く歸つて來たものだ。」

猫は女の素足に顏をすりよせ、戀しげに啼いた。そしてふしぎさうに女の抱いてゐる赤ん坊を見上げた。さきにゐた女中が家を持つたのでそこへ預けて置いたがもう半年になつてゐるのだ。が私はよく猫が赤ん坊にたたると言ふことを聞いてゐたので、女にこの猫を赤ん坊の部屋へ入れない方がいい、あとで後悔してはつまらないからと言つた。

「さうお仰言ればこちらを見てゐますのね、ふしぎさうな顏をしてあんなにまぢまぢ見つめてゐますよ。」

女は立つて赤ん坊をあやしながら、いくらか氣にかけて言つた。

「うむ、とにかく注意するといいな、嫉み深いものださうだから。」

「とにかくこれもきつとおわかれに來たのかも知れませんね、こんな時に突然やつてくるなんて、まるで敎へてでも置いたやうですわ。」

私は仰向いて女の顏と赤ん坊とを眺めてゐる猫をしばらく見てゐるうち、何か厭な、またたびの實の匂ひをかぐやうな氣もちになつた。そしてこれが此方にゐるとしたら、此處では飼つてをけないと思つた。それにしてもあきやは一たいどうしたのだらうと思つたが、尋ねてやるにも人がなかつた。あるひは此の騷ぎに何處へか行つたのかも知れない、――平常から困窮つてゐたからとも思つた。

午後に日かげがうすれてから、私は何をするにも元氣がなくなつて疲れて坐敷へ坐つて庭をみてゐると、どうやら草臥れてゐるせいか眠くなつた。睡て起きて又庭をみてゐると悲しくなつた。

「さてと……おれはこれから何處で庭を作るのか？　もう庭なぞ作るまい――。」

六

松の多い町の姿が一番さきに目にはいると、みんなほつと一と呼吸をついて、やれやれといふ氣がした。四五年歸らなかつたが變化つてゐても大概の見當はついた。女の實家へ着くと老ひさらぼふた女の父親は、聲をあげて泣いた。私の母や親類のものが九月の三日ころから毎日停車場へ詰めかけて、子息の逃げて歸へるのを待つた。あるひは夜中の二時ころに女の實家の者などと誘ひ合つて、髮の毛の燒けた素足の乘客を物色した。そして皆は消息のない子息や子息の嫁のために佛花を供げたりした。

「よう生きて戻つた――。」

さう私の母は言つて、「一日には金澤にも地震が來たが唯何となく嘔氣のするやうな氣持ちで、少しめまひがしたくらゐだ」と言つた。その翌日東京ぢゆうが燒けたと聞いたが、まるで東京にゐる人がみんな燒け死んだやうに噂されたと言つた。頭髮のない女や足のふくれた半病人の燒け出されが都落ちして來たのが、三日からだつた。その人らに停車場で待ちかまへた大群衆が押し寄せて、在京者の安否を尋ねるために、もう一度その人々を半死にあはせるほど人と人との間に狹んだ。とにかく達者でよかつたとまるで戰爭にでも行つた人を迎へるやうな鹽梅だつた。私はうしろめいた氣もちになつて默つて微笑つてゐた。

母のゐる寺の艶のある松の枝葉をみたときは全く平安を感じた。ここに何の紊れた秩序があらう、町の人人らは安心しきつて歩いてゐるのが私にはふしぎに思はれた。この町に多い梅擬の美しい紅玉の樹に朝日が匂ふて、靜かすぎるくらゐの朝夕が私や女をおとづれてゐる——。何を食つてもうまいが、何を食つても贅澤な氣がした。そして東京から來たものはみな胃を惡くしたことも笑へないやうな氣がした。

「東京などへ行かないですつとこちらに居たらどうぢや、こちらに恐ろしい事なんぞはなし……」

母はさう言つたが私は默つてゐた。が、不圖彼女は立つて私のうしろへ廻つたが、

「さつきから變だと思つたら、お前もうしらがが生えてゐるぢやないか。」

「さうかも知れん。」

私は微笑つて鏡を覗き込んだが、鬢に一本きらりと光つたのがあつた。ほう、これは驚いた、もうこんな奴が一本でも雜つて來たのかと嘘のやうなお可笑しさを感じた。實際地震が過んでから一週間すると私の家へよく來る伊織のおばさんの頭髮がまるで急に眞白になつたりした。ボーの渦卷のなかで一晩で難船して白髮になつた男のことを書いたのが

あつたが、全くこんどの騒ぎで白くなつた人があるかも知れない、——現に私などもどうやら白い奴の數が殖えたやうな氣がした。母のおどろくのも無理がなかつた。

「だがこのしらがはすぐ拔け落ちそうな氣もする。」

さう私はごま化したが心では何か佗びしい氣がした。——あんなに恐ろしい混雜した列車のなかから拔け出した赤ん坊は、風邪一つひかないで日增しに大きく、そしてれいのえくぼがだんだん深くなつた。鄕里の土にそだてるのも何かの宿緣だらう、十幾年も東京にゐてかうして子供をつれて歸つたのはやはり何かの約束ごとのやうな氣がした。

女の父親は女がかへつてからすつかり安心してしまつて、もう床についたきりだつた。あるひはこの冬は越せまいとも皆は言つた。こんなからだをして每日停車場へ出かけたのかと皆はいとしがつた。

私は家をさがしながら柿や棗の木のある裏町を步き、寺の多い寺町通りをあちこち家をさがした。そしてどの家にも土塀があつた。どの家の屋根の上にもおさへの石が乘せてあつた。もし地震が來たら土塀は一とたまりもなく崩れてしまふし、屋根石は落ちるに決つてゐる、——江戶大震一年前の安政元年に金澤に大地震があつたとき外へ逃げ出したものは大概頭腦を打たれた。屋根石の落ちるのを避ける間がない、——しかもその屋根石はたいがい私どもの頭くらゐあつた。これが落ちてきたらそれきりだらう。これにたいがいの家は建てたときから二十年くらゐ經つてゐて、傾ばんでゐるが材木の節だけで持つてゐる家が多かつた。私はこれらの町をながめると、そら恐ろしい氣がした。しかしどの人も何といふ安心しきつた顏つきで、この屋根石の下を步いてゐることだらう、夢にもあぶないと考へてゐる人がなかつた。

「こつちの神經がへんになつてゐるせいか、町を步いてゐると危なくて仕方がないな、それも此方に一年もゐると、

あんなに暢氣になるかも知れないが……。」

町と町との間が狹くていざとなると逃げ出す暇がない、ひと思ひに電車道へ出るより外にない、だがそれまでには屋根石に打れてしまふだらう、——。

「ええ、わたしも何だかまだ恐くて仕方がないんです、第一家がひろくて庭へ出るだけでも大へんですからね。」

女も過敏になつてまだ不安さうに言つた。この心持はどんな靜かなところへ行つても拔け切らないかも知れない、——母なぞは笑つて、

「飛んでもない、そんな地震なぞあるものかね。」

と言つて悠然としてゐる——私はそんな落ちつかない心がどうかすると夢にまで現はれて、絶えず地震になやまされた。子供のときから見なれた北國の曇天の奥の方にさへ、私は田端の家で仰いだ不安な空工合を想像して、ここまで遣つて來てこの氣もちから拔けないのはよくよく臆病な私か、それともあまりに神經が亂れすぎてゐるせいだらうかとも思つた。とにかく私には不意に起る物音が怖かつた。何んでもないときにすら私は吃驚りしてしまつた。近くの川邊に飼つてある家鴨の群がどうかすると一さいにぎあぎあ啼き立てると、身邊に異常事が起りさうな氣がして胸騷ぎがしてならなかつた。靜かなればなるほど氣が沈んでその靜かさの奥から、いまにも恐ろしい物音が起きて來さうでならなかつた。とにかく私をめぐる不思議な慴えた氣もちは少しも私を落ちつけずに絶えずどきどき悸つかせた。天地に靜かに身を置いてゐてこれは何といふ變な氣もちだらう、こんなふうに臆病な私はとうたう私の知らない間に氣が違つてしまふのではなからうか？　そのあげく此の廢れた鄕里の築土に蹈んでいつでも空を眺め込んでゐるやうな男になりはしないか？　さう思ふと私は立つてゐられずに、庭へ出たりして眉にしはをよせて空を見たりした。べつに變化つたことが

ありさうもなく靜かに青く晴れてゐる。

「氣味が惡い。――」

誰にいふこともなく私はつひ左う呟やいて見た、全く氣味が惡い――地震が來ると左う思つて絶えず脅やかされて、一たい怎のくらゐの人間が發狂しただらう、あれを嗤つてなるものか、あるひは私だつてその發狂のすぐ一歩前くらゐにまで心が攪れてゐるのではないか、馳れるだけ馳りぬいたあとのやうな喘ぐやうなこんなに倦い氣もちが、どうかすると澱んだ池水のやうにどんよりと搖れて、そして私は急におどおどし出して、自分で自分のこころもちを靜めることを知らないではないか？――こんな時は女のそばへ行つて、目をさましてゐたら私は決つてたはいなく、まるで嘘のやうに、

「おい些つとその朝子を見せないか、そいつの顏を見ると落着けるから妙だ。」

蜆貝のやうに青い眼をしてゐるのが、ふいに私に向けられた。そして私はわざとらしい父親といふ勿體なげな心持ちになつて、ほう、とか、おい、とか言つてその頰を突ついて見るのだが、さういふ姿の自分といふ人間がたはいなくて好ましい氣がした。澤山の子供を持つた人は笑つてしまふだらう、だがこんな世の騷がしいなかにさんざ酷い目に會つて來た子供といふものは、別ないとしさを感じるものだ。よくも育つて來たものだといふことが一さう悲しげに我子をながめられるのだ。

「どれだけの子供が死んだか分らない、――運のわるい赤ん坊がまつたくどのくらゐ死んだことだらう。」

「上野でも澤山お產がございましたけれど、ろくろくお湯もつかはせなかつたらしいんです。――水で洗ふくらゐなんです。それにみんな母親がびつくりしてしまつてゐるんでお乳が止つてゐたらしいんです。」

「おれが行つたときに陣痛の最中の人がゐたね、あたりかまはずに泣いてゐた人がゐたね、あの人はあれからどうしたらう、出産たか知ら？」

「二日の晩あたりらしうございましたね。あの人の旦那さまが迎えにゐらしつたときに、あの女の人が一さう聲をあげて泣くんで全くみんな貰ひ泣きしましたよ、旦那さまはしまひに帽子で顔をかくしてしまつて御自身でも泣いてゐらつしやるんですもの。却つて人の事が見てゐると哀しくなるものですね、あなたが入らしつたときにわたしはぼかんとしてゐたんですもの。」

「さうぼかんとしてゐたな、だがこんな事も百年經つたらむかしの話の種になつてしまふことだらう。」

朝子が乳をのんでゐる、――そして靜かな郷土の雨が松の枝と葉をぬらし、母親が長火鉢のわきに坐つて、老ひ込んだ物忘れしたやうな顔をして、すこし窓をあけて雨脚をながめてゐた。私は私で子供のそばに蹲んでゐる。――こんな薄とぼけた人生の刷りそこないの一頁、何の物語りも世を益しも害しもしない下らないありふれた場面が、だんだん私の考への内へ沈み込んだ。どこにもこんな場面はあるし退屈げた顔がさらにあるだらう、だがこれに自分が加つてゐるのが理由なくしみじみしてくれではないか――。若しこれきり四人とも呼吸が止つて木伊乃にでもなつて百年くらゐ後の人が發掘でもしたら、その人達ちは足でちよつと蹴つて見て、意地の悪い微笑をうかべて、

「こりや女ぢやないか、なーるほど、――だがこれはこの女の母親か知ら、そしてその男はなんだい。」

かれらはだう言つて私のからだに足を乗せて、からだをしらべる、この女の亭主らしいぜ、しかしその小さい奴はこれらの子供にちがひなからう。さう言つて小さい木伊乃をこんどは足で又ひつくり返す。小さい足と手があらはれる、――。

「可哀さうにまだ生れたばかりぢやないか?」

さう言つて彼らは朝子をながめる……他の誰をも振りかへらないで彼れらも父親らしく愁然とする。そんな百年の後が私にはくだらなく思ひ出されて笑ふにも笑へないやうな氣がした。おれはまた詰らないことを考へ出したものだ、私はさう思つて椽側の方へ出て行つた。

「さきの子供の骨を持つて來たかの、お寺へ預けねばならん。あれを東京に置くちゆ法はない――。」

母はかねがね東京にその墓を建てることに不贊成をした。先祖代々に祭るのが本統だと言つてゐたのである。

「え、持つて來ましたよ、あいつを一人殘すものですか。」

「そりやよかつた。ぢあ、明日にでもみんな揃つて納めに出掛けようわい、みんなも待つてぢやらう。」

母はよちよち佛壇の方へ行つた。私と女とは顏を見合してあんな佛さんばかり對手にして暮してゐたら世の中に怖いものも心勞もなからうと言ひ、あれもあんな年寄りのたいくつざましのおもちやぢやないか、しようことなしの、頼りになるものがゐても時々反抗してさびしいから物言はない佛がせめての友だちなのだらうとも言つた。

「この間も裏町でよく似た年寄りだと思つて、近づくのを見てゐると、何のこつた母親ぢやないか、それで何處へ行つたんですと尋ねると小さい風呂敷包みをすこし持ちあげ、あぶらを買ひに行つたのぢやと言つた。」

今どきそんな菜種あぶらを何にするんですと言ふと、佛にあげるのだと惱つたやうな顏をして言つた。

「あとで振りかへつて見ると、よちよちと歩いてゆくぢやないか、何かわけなく佗びしい氣がした。」

一つはあれが母親の姿かと思ふと、そんな小さいことがしほらしくてならない氣がした。そしてひよいと氣がつくと今うら町は十月櫻といふ奴が白つぽく蝶々の羽根をむしつて食つつけたやうなのが、あちこちの土塀の上に咲いてゐ

た。

「あれは十月櫻だといふけれど、ほんたうは返り花の一種のやうな氣がする。實際十月櫻といふものがあるのか知ら、花が小さくてちぢれてゐるんだ。」

「そんな櫻があるやうですよ、ことにこちらには三度櫻といふのさへあるんですと。春早くと夏の初めと秋のいまごろに咲くらしいんです。やはり凍えてゐるやうないぢけた花なんです。」

「はじめて聞く話だ、とにかくその十月さくらといふ奴はちよつと見ても空の白い日にはよく分らないくらゐ白つぽいんだよ、氣をつけるとはつきりとその白さが溫かさうに見えるんだが……。」

私は幹の茜色をしたすべつこい枝に着いてゐるその返り花を仰ぎ見るのが、故鄕へ歸つた感じを一さう强めさせるためにも好ましく思ふた。冷たくて溫かくほんのりした優しい十月櫻を思ひうかべると、私は又きふに眉をしがめた。――燒跡をあちこち歩いて淺草へ出ると何處をふり向いても黑ずんだ燒樹ばかりなのに、觀音堂のまはりだけが、青々とした（あたりが荒廢焦土になつてゐるせいで、）まるで初夏のやうな綠の木につつまれてゐるのを珍らしく眺めた。わけても藤棚のある池には、幾房となく紫に冴えた花房を垂れて影を落してゐるのが、あまりにまざまざとした印象を受けた。藤や山吹はよく秋に咲くものだが、何か非常に不思議に物すごい氣がした。――わけても今年は私の國の白山の方にも何時も湧く淸水が涸れてゐたと言ふ人もあつたりして、不時萠えの返り花にも秘やかな天變のささやきが籠つてゐるやうで、本來靜かであるそんな返り花さへ神經の端々に觸れて痛むやうな氣がした。

「そんな考へは人間が勝手にくつつけた傳說に過ぎないだらう、何をあんなにあどけない草木が知つてゐるものか。」

さう思ふとやや心安んじたが、きふには晴々しい氣もちにはなれなかつた。」一つ一つの不時の出來事が何か深い意味

をもつておびえたこころを覗つてゐるやうで、ぼんやりと油斷してゐられない氣がした。

「これからあぶらは此方で買つてあげませうね。あんな遠いところまで使ひにいらつしやるとお疲れでせうから。」

女は自分で行つてもいいと言つたが、私はあたまを振つて見せた。

「いやお母さんはそんな用達しをしに出掛けるのさへ、かなりな暇つぶしになつてゐるのぢやないか、それをこちらでして上げては、それだけの時間があの人には餘つて了ふのだ。まるでおもちやを取り上げるやうなものだから、それは止した方がいいやうだ。」

「それもさうですね、あれが樂しみに出かけるのなら?」

「さうさ、それより外に考へやうはない、年寄りといふものは一人で置いた方がいいんだ。何も彼も一人で思ふとほりにしてをいたら、何も彼もめんどうになつたところにころりと參つてしまふものだ、實際枯木とはよく言つたものだよ。」

母親は佛壇を離れると椽側の方へ來て、この夫婦が先刻から一體何を言つてゐたのだらうと、素知らぬげな狡猾らしい眼付をして見てゐたが、それもすぐ年寄りらしく忘れてしまつて朝子のそばへ行つた。ときどき無情的になつてもそれを持ち切れないらしく、すぐ打拋つてしまふのが私には興味があつた。朝子の頰にふれて、

「こちらへ歸つてから餘程ふとつたやうだぞの。」

母親はさう言つて子息の嫁を見た。女も朝子の肥り方の烈しいのには自分が毎日見てゐながら驚いてゐた。

「ええ、よくね。」

「時間どほりにお乳はやらんでもよい、かまはず遣んなさい。」

さういふ母親を女はええと答へながら、だまつて微笑つてゐた。これが俗にいふ平和かい、そしてこんなふうに私は一日づつ田舎の垢に染みてゆくのかい、それもよからう、私はしまひに垢じみた田舎に町をとぼついてゆく馬の胖綿着のやうに、かすれた刺繍の紋章に蝿をたからせて行くのだらう、だが退屈ざましに又書いて汚名を加へて、檐端の深い暗い部屋に坐つて暮してゆくのだらか、――それもよい、大して野心もなく空想さへ濫費してしまつた私のやくざな心が、これから何を書いたつて考へたつて最うたかが分つてゐるではないか？　――どつちにしても何といふいまは根のない行き到いた氣もちだらう、人に話したつて解らない――。

「お母さんはまたあぶら買ひに行くのかい、一ぺんにどつさり買つてをけばいいのに。」

「買ひためてをくとをりが出るわい。をりのあるあぶらを佛にあげられるかい。」

「なるほど。」

すると私にも最うをりが溜つてゐるかも知れない、さういへば頭も重いやうな氣がする。「あぶらさへ買ひに行けば何處へ行くとたづねるが、ほんとに信心のない男ぢや。」母親はさういふと壺をさげて土間へ出た。もう時雨に間もないころだらう、松の葉なみに一杯の雨がふくんで滌を叩いてゐた。

「傘は一どさしたら乾してをかねばいかん。」

母はかたんと傘をひろげた。女は送りに出て、時雨にはよく傘が腐ることがあるものだといふ國の古い言葉を思ひ出した。あれで七十三だといふがいやはや何て達者なものだらう、あの足音をきいたつて分るぢやないか、まるで若いものの歩き振りだ。

「むかしの人は達者なんですね。」

「うむ、むかしの人はな。」

女と私とはすこし寒さをかんじて、玄關さきの障子を閉めた。が、雨は本降りになつて來たらしくしたしたと佗しい音が一と頻りより強くなつて來た。



秋の曲（三幕物）

武者小路實篤

時。元祿時代か、その少し後

人物。父。娘。多之介。市之丞。（武士の子二十二三の美男）

第一幕

（田舎の小さい家。父が畫をかかうとしてゐる、娘がすみをすつてゐる）

娘。お父さん。

父。なんだ。

娘。あの御武家さんのおたのみの畫はいつおかきになるの。

父。あれか。あれはまだ乘氣にならないからやめてゐるのだ

娘。こないだ途中でお逢ひしましたら、さいそくしていらつしやいましたわ。

父。さうかい。その内に氣が向いてくれるだらう。

娘。お父さんの氣が向くのはいつの話しかわかりませんわね。もう一年も二年も氣が向かずにほつたらかしてあるのがありますわね。

父。かかう、かかうと思つてゐる内に、つい氣のりがしなくなつて、つい向ふでも忘れてしまつたらうと思ふのでね。

娘。かいてもらう方では中々わすれませんわ。

父。俺の畫なんか、そんなにまつてゐる人なんかないよ。出來ない方が、向ふでもよろこんでゐるだらう。

娘。そんなことはありませんわ。

父。だつて、俺が隨分たんせいしてかいてやつたとするね。今度その人の處へ遊びにゆく、久しぶりで自分の畫が見られると思つて行くとするね。勿論、かゝつてはゐない。そして耻かしい思ひをして、一寸見せて戴きたいと云つたとするね。すると向ふの人の顏色がさつとかはる。そして一寸親類があんまりほしがつたもので、つい惜しかつたのですが、やつてしまいましたと云はれるとするね。一寸、いやな氣がして、今度かいてくれと云はれても、一寸かく氣になれないものだよ。

娘。しかしそれは向ふの方のおつしやつたのが本當かも知れませんわ。

父。それは私がお目出たければ、さう思つてすむだらう。又私がうぬぼれが強ければさう思つてすむかも知れない。だがあてになるものか。俺でさへ、俺の畫が好きぢやないのだからね。

娘。だけど、本當に感心してゐらつしやる方がありますわ。

父。何處にだい。

娘。……

父。はつきり答へることは出來まい。名前を云ふことは出來まい。

娘。山邊の市之丞様は本當に

父。あんな役者のやうな男に何がわかる。

娘。あの方、御自分で鼓もおかきになるのですよ。

父。お前はどうしてそんなことを知つてゐるのだ。

娘。私は多之介に聞きました。

父。多之介は俺の鼓について何か云つてゐたか。

娘。あれば、この頃、お父さんの鼓よりは、道玄の鼓の方が好きだなぞと云つておりました。

父。それは多之介の云ふことの方が正直ぢや。道玄は實際、俺より上手だから仕方がない。

娘。それでも私、その話しを聞いた時、本當に腹を立てましたわ。

父。それは腹を立てるのも無理はないが、多之介はお世辭なぞのつかへない男らしい男だ。

娘。ですけれど、私、あの人、お父さんのあとをつぐ氣がなくなつたのではないかと思ひますわ。

父。そんなことはない。あれは俺の名を後世までもつたへる決心でゐる。あいつは道玄よりは遙かに名人になる。俺の弟子としては勿體ない男だ。

娘。私はさうは思ひませんわ。あれは少し生意氣になつてゐますよ。お父さんがあまりおほめになるので。

父。あいつはそんな男ぢやない。

娘。それはお父さんの前では、猫をかぶつてゐますが。

父。お前は、多之介と俺との間をさかうとは思つてはゐないだらうね。

娘。そんなことは思つてゐませんわ。

父。あてにはならないな。お前はまさか市之丞にだまされてはゐまいな。あいつは女たらしだから用心しろ。

娘。私は市之丞さんのことは何とも思つてゐませんよ。

父。思つてゐなければいゝ。あいつは信用のおけない奴だと云ふことだけはつきり知つてゐればいゝ。あいつのために、身をあやまつた女は俺の知つてゐるのでも、一人や二人ではない。

娘。そんなこと私だつて知つてゐますわ。ですが、多之介さんをお父さんが信用してゐらつしやるのはおかしいわ。あの方こそ、私をへんな目つきでよく御らんになるわ。あの目つきで見られると

父。そんなことを云ふものではない。多之介はお前を愛してゐるのだから。

娘。いやなことですわ。あんな人。あんな恩知らずな。生意氣な人。

父。いや、あの男は、お前が思つてゐるやうな男ぢやない。

娘。さうを。しかしお父さんの思つてゐるやうな立派な方でせうか。

父。俺は今にあいつが日本一の畫かきになることを見ぬいてゐる。

娘。お父さんは、この前、多之介さんがくるまでは、何とか云ふ方をほめてゐらしつたわね。

父。あれは、俺のあやまりだつたが、今度はまちがひない。

娘。もしまちがつてゐたらどうして。

父。それだつて、あの男のかいた、その畫を見たつて、もう堂に入つてゐる。俺の方が教をうけてゐるやうなものだ。俺の所にあいつが弟子入りして來たのは、ごみために鶴がおりて來たやうなものだ。

娘。私、お父さんのおつしやることに反對はしません。ですけど、私はお父さんを尊敬しない人は嫌いです。

父。お世辭云ふものより、正直もの丶方を尊敬しなければいけない。

娘。だつて正直さうなふりをして、ひとを瞞す人もありますからね。

父。お前は、どうして今日はさう口答へするのだ。

娘。お父さんが、だまされてゐらつしやるのが御氣の毒ですから。

（多之介登場）

多之介。先生、お孃さん今日は。

父。うん、よく來た。

娘。私、一寸買物に行つて來てよ。

父　あ丶、行つておいで。

多之介　。買ひものなら、私がして來ませう。

娘。い丶え、よくつてよ。（退場）

（多之介ぼんやりあと見つ送てゐる）

父。多之介、どうだ、何かかけたか。

多之介。はい。一つかいて來ました。

父。見せてもらはうかな。
多之介。はい。(出して見せる)
父。(見乍ら)美事、美事。筆力と云ひ、色彩と云ひ、構圖と云ひ、近頃こんなに感心したものは見たことはない。之をあすこにかけて見てくれ。本當にお前の進步の早いのには實におどろく。
多之介。ありがたう御座います。何かおかげになりましたか。
父。いや、もう、俺なんかは何にもかゝないでも、いゝ時が來たのぢや。本當に感心な奴だな。
多之介。ありがたう御座います。おかげでやつとものゝつかまへかたが、少しづゝわかつて來たやうな氣がします。それから、こんなことを申していゝかわるいか知りませんが、一生のおねがいが御座いますので、こないだから申したい、申したいと思つておりましたが。
父。なんだ。遠慮なく云ふがいゝ。
多之介。こんなことを申すのもあまり失禮すぎると思ひますが、もう默つてはゐられなくなつたのです。どうせお斷りになるのはわかつてはゐるのですが。實は、お孃さんを戴くわけにはゆきませんでせうか。
父。それは私にとつてはこの上ないよろこびだが、このことばかりは當人に聞いて見なければわからないことだから。
多之介。えゝ、それはよくわかつております。しかしお孃さんは私をお嫌ひになつてゐらつしやるやうに見えて仕方がないのですが。(間)望みがあるでせうか。(間)矢張りないのですか。
父。私にはわからない。まだお前の畫の値打がわかつてゐないやうだ。しかしこの畫を見たり、又その內お前にあつてゐる內に、お前のいゝ所も段々わかると思ふのだ。まだ本當に子供なので、なにもわかつてゐないのだから。

多之介。それはお待ちするのはいくらでもお待ちいたしますが。
父。安心して待つてゐてもらはう。あの子を他にやらうとは思はないから。
多之介。それでもあの方が、他にゆきたい方が出來たら。
父。私が承知しない處に、あの娘はゆきはしない。
多之介。それではあなたにおすがりしてこのことは安心してゐゝのですね。
父。八分通りか、九分通りは安心してもらつていゝが、あと一分はお前の働きだ。
多之介。お孃さんはどちらにいらしつたのですか。
父。友達の處へでも行つたのだらう。もうすぐ歸つてくるだらう。
多之介。私はお孃さんが私をお嫌ひになつて、さけてゐらつしやるのではないかと思ひます。
父。そんなことはない。
多之介。それでも私がくると、いつもよそに御出かけになります。もとはあんなことは御座いませんでした。私にいつも優しくして下さいました。
父。それは、お前が、道玄さんの畫をほめたと云つて怒つてゐたから、それでかも知れない。
多之介。いゝえ、私は道玄さんの畫をほめた覺えはありません。感心したことはないのですから。
父。それでも、娘はさう云つてゐた。お前は私の畫よりも道玄さんの畫をほめたことがあるのだらう。私はそれを聞いても、少しも氣にしてゐない。私は道玄さんの畫にもいゝ處があると思つてゐる。
多之介。私は覺えのいゝ方ではありませんから、お孃さんがさうおつしやるなら、さうお孃さんがお取りになるやうな

ことを申したかも知れません。しかし正直に申しまして、私は道玄さんの畫の潮氣は嫌ひなのです。先生の畫の方をどの位い愛してゐるか。

父。そんなお世辭はよしてもらはう。俺も齡をとつた。自分の畫のよしあしはわかつてゐる。

多之介。いゝえ、嘘は申しません。先生はあまり、自分を見くびつてゐらつしやいます。先生のおかきになる畫のすくなほと云ふか、無心と云ふか、それには私はほと〳〵感心しております。道玄さんの畫にも一つか二つ、いゝのがありますが、あゝ思ひ出しました。今から一ト月程前でした。私がお孃さんと二人で久しぶりにしんみりお話ししてゐました所に市之丞さんが見えて、し切りと先生の畫をほめて、道玄さんの畫の惡口をおつしやるのです。それがあまり見當ちがひで、事實をそつちのけにして、嘘だらけのことをおつしやつてゐるので、私もついかつとしてしまつて、私はつい道玄さんの畫をほめることになつてしまつたのです。さう云つては失禮ですが、市之丞さんがお世辭をおつしやつて、お孃さんをよろこばしてゐるので、私の虫のゐどころもわるくなつて、つい、市之丞さんが、議論していらしつたので、ついかつとして、自分でも何を云つたか、わからないやうなことを云つてしまつたのです。きつとそれでお孃さんは怒つてゐらつしやるのです。

父。それにちがひない。しかし私は市之丞には娘はやらないから、そのことだけは安心しておいで。俺は市之丞は嫌ひなのだからあいつの處へ娘がゆけば不幸になることはわかりすぎてゐる。

多之介。それを聞いて私も安心しました。あの人はわるい人とは思ひませんが。

父。いや、わるい奴だ。俺はそれを見ぬいてゐる。

多之介。それでは私は失禮いたします。

父。それでは又、明日でも來ておくれ。

多之介。はい。ありがたう御座います。さよなら。

父。さよなら。

（多之介退場）

（父。多之介の畫に見とれてゐる。娘登場）

娘。唯今。

父。歸つて來たか。何處へ行つてゐた。

娘。お隣りの小母さんと話しておりました。

父。さうか。この畫を見ろ。しつかりしてゐるだらう。

娘。私もう畫にはあき〳〵しましたわ。

父。お前は畫かきの子ぢやないか。この畫のいゝ處位いわかつてもいゝはづだよ。

娘。それはわかりますわ。

父。お前はこの頃、本當にどうかしてゐるね。

娘。なぜ。

父。お前は以前はそんなぢやなかつた。俺の云ふことをもつとしんみり聞いてゐてくれた。この頃は、俺の云ふことに一々とげのある答へをするね。そして俺を輕蔑するやうな樣子を示すね。一たいどうしたのだ。お前と俺とはいつのまにか、讐になつたのかい。何をそんなに默つてゐるのだ。

娘。お父さんの方がおかしいのよ。なぜさう私を目のかたきになさるのでせう。(しのび泣く)
父。泣くことはないぢやないか。お前は俺にかくしてゐることはないだらうな。之から市之丞なんかと往來で逢つても話しをしてはいけないぞ。
娘。なぜいけないの。
父。あんな奴は、人間ぢやないからね。
娘。なぜ人間でないの。
父。あいつは、女たらしだ。どんな女だつて自分の自由にすることが出來るゝ思つてゐるのだ。あいつのなまつ白い顔を見たつてお父さんは蟲づが走るのだ。
娘。お父さんは私が市之丞さんにだまされてゐると思つてゐらつしやるの。
父。さうは思つてゐないよ。用心しろと云ふのだ。
娘。だまされなければいゝのでしよ。
父。あゝ云ふ奴はどんな手段でもとるから、つきあはないのにこしたことはないのだ。
娘。私は何にも疚しいことはないのですからお父さんがなんとおつしやつたつて、おつきあいすることはおつきあいします。
父。俺の云ふことを聞かないのかい。
娘。御無理なことをおつしやつても聞くわけにはゆきません。
父。もう一度、云つて見ろ。

（娘泣く）

父。何が無理なのだ。俺がどの位いお前のことを思つてゐるのかわからないのか。お前を仕合せにしてやりたい、お前をよろこばしてやりたいと思へばこそ、俺はかきたくない時でも書をかいて來た。之でお前のほしがつてゐるものを買つてやつたら、どんなによろこぶだらう。それが俺のたつた一つの樂しみで、俺は仕事もし、又生ても來たのだ。處がこの頃は、俺の顏を見るたびにいやな顏をする。俺に顏を見られるのをさけるやうにする。俺がお前もいつしよに笑つてくれると思つて馬鹿笑ひすると、俺の笑ひばかりが、暗に消えていつて、お前は何が可笑しいのですと云ふやうな顏をする。少し前まではそんなことはなかつた。お前は俺と一緒によろこんでくれた。俺と一緒に笑つてくれた。俺が目に涙をためてうれしがつてゐると、お前も目に涙をためて、うれしがつてくれた。お前は俺が一寸でも歸りがおそいと、心配して、俺が歸つてくると、子供のやうによろこんでくれた。もうそんな時はすぎてしまつたのか。それもすぎてしまつたことなら仕方がない。そしてお前がそれで幸福になり、末ながく安心して生てゆけるなら、俺もよろこんで見てゐることが出來る。處がこの頃のお前の樣子は何と云つていゝか、俺にはちつとも合點がゆかない。お前はあのおとなしい、優しいお母さんの子ぢやないか。そして俺の子ぢやないか。俺はお前がまちがつたことをしないとは思つてゐる。しかしこの俺を心配させないでくれ。さあ、俺も齡をとつて氣が短かくなつた。泣かないだつていゝぢやないか。俺の云つたことは氣にしないでくれ。そして俺に安心さしておくれね。お前はいゝ子だからね。

娘。えゝ、もう泣きませんわ。ですけどお父さん、本當に私を信用して頂戴よ。私はお父さんが信用して下さらないとどんなことをするかわかりませんよ。私もお父さんに似て、思ひ切つたことがやれない女ではないのですからね。しかし信用して下されば、私はお父さんの信用に背きはしませんわ。ですけど、私が誰とつきあつても、それはお怒り

になつてはいやよ。私は決して。

父。あゝ、いゝよ。だが俺も年とつたせいかいろ〳〵のことが氣になるのでね。早く安心がしたいのだよ。だがお前を本當に信用してゐるから、氣の短いことをしてはいけないよ。

娘。大丈夫よ。お父さん。私、本當は多之介さんの畫に感心してはゐるのよ。そしてあの方のいゝ方だと云ふこともよく知つてはゐますの。ですけど、あの方をすきにはどうしてもなれないの。なりたいとは思ふのですが。

父。お前はさつきの話しを聞いてゐたのかい。

娘。いゝえ。隣りの小母さんに聞いたの。

父。お前、隣りの小母さんとずつと話してゐたのではなかつたのかい。

娘。私は、一寸あの川のそばまで散歩して、そして歸つて來てから小母さんと話してゐましたの。私は一生、獨身で、お父さんの御世話しますわ。そして私もお裁縫でもしてたべてゆきますわ。

父。（涙ぐみ乍ら）秋らしくなつてきた。少し寒くなつた。あの障子をしめておくれ。

娘。はい。（立つて外をながめ乍ら障子をしめる。幕。）

第二幕

（月夜、川岸、娘川上を見てゐる、虫の聲。市之丞川上からやつてくる）

市之丞。お待ちになりましたか。

娘。いゝえ。一寸前に來たのです。

市之丞。もつと早く來たかつたのですが、父の歸りがおそくつて、一緒に御飯をたべましたので、中々出にくゝつて困りました。

娘。私はね。こゝであなたを待つてゐたのではないのよ。

市之丞。私を待つて下さつたのではないのですか。

娘。私は、お月見してゐましたの。其處へあなたが偶然いらしつたことにしてゐますの。

市之丞。同じことではありませんか。

娘。ですけど、私は、父に内證で、あなたとあいびきしてゐるやうなが氣して、さつきからもう心細くて仕方がなかつたの。それで一人で、いえ私はあんまりお月さんがいゝので、こゝでお月見してゐるのです。とかう考へることにしてゐるの。あなたもさう思つて頂戴ね。

市之丞。どうしてそんなに氣がよはくなつたのです。

娘。父や、多之介さんが御氣の毒になつたのです。父や、多之介さんはあなたとちがつて私許りを愛してゐてくれますの。

市之丞。私はあなたゞけを愛してゐないと云ふのですか。

娘。父はさう申してゐました。あなたは女たらしで、恐ろしい方だつて。

市之丞。お父さんが、そんなことをおつしやいましたかそれ。は私はあなたに逢ふ迄はそれは隨分、道樂もしたかも知れません。しかしあなたのことを思つてゐることだけは眞實です。

娘。今はね。だけど、その内又、私をおすてになるのでしよ。
市之丞。私には、そんなことは考へられません。
娘。私にはなぜ、そんなあなたがこんなに好きで、そしてあの多之介さんが、どうして好きになれないのか、わかりません。私はあなたとお話ししてゐる時だけが、うれしくつて、生きてゐるやうな氣がして、あなたとはなれるとまるで、生きてゐる氣はしないのです。そして、あなたのことばかり考へてゐるのです。私はこんな人間ではなかつたのですのに。
市之丞。私だつてさうです。私は一かどの道樂者になつたつもりで、一人の女に夢中になる男を笑つてゐたものです。私の今迄の經驗では、それが又本當だつたのです。今度は私には生れて始めての經驗です。私の心の底から、あなたが戀しいのです。あなたにあはない時も、心ではあなたの名をよんでゐるのです。私はもうあなたとはなれては、とても生きてはゆけないのです。
娘。市之丞さん。それは本當なの。
市之丞。本當ですとも。私はあなたにすてられてはとても生きてはゆけません。
娘。私も。私はお父さんのことを考へやうと思ふのですけど、考へないとわるいとは思ふのですけど。私にはどうすることも出來ませんの。私はかうやつてゐると、もう何にもかも他のことは消えてしまいますの。あなたにお逢ひしないと、いろ〳〵のことが考へられて、本當に私は生きてゐるのがいやになるの。なんだかすまないやうな氣もしますし、あなたが何處かいゝ方の處に行つてはいらつしやらないかと思ふと、ぢつとしてゐられなくなりますの。
市之丞。そのことだけは安心して下さい。私は道樂者だつただけに、他の女のくだらないことは十分知つてゐます。

娘。今は何時頃でせう。もう父が歸つてくるかも知れませんわ。

市之丞。お父さんが、そんなにお怖いのですか。

娘。それでも父は、本當に氣の毒なのですもの。

市之丞。私の惡口を云ふ、お父さんをあなたは愛してゐらつしやるのですか。

娘。あなたの惡口を云ふ父には隨分腹が立ちますが、淋しさうに默つてゐる姿を見ると、自分なんかどうなつてもいゝから、父をよろこばしたいと思ふのです。ですけど、私にはもうどうする力もありませんの。

市之丞。あなたのお父さんは、多之介さんとあなたとを一緒にさしたがつてゐらつしやるのでしよ。

娘。父は、さうしたがつてゐますの。ですけど、さうすれば私は生きてはゐないと云ふことも知つてゐますの。本當に思ふやうにゆかないものですわね。あなたには、いゝなづけの方がおありだし、さもなくつても、家がらもちがひますし、さもなくつても、私の父が承知するわけはありませんし、それなのに、二人はどうしてもはなれることが出來ないのですものね。本當に私、どうしたらいゝのか、ちつともわかりませんの。一そ死んでしまつたら、こんな樂なことはないと思ひますわ。ですけど、あなたに時々お逢ひ出來るので、私は本當に、生きてゐられるのですわ。

市之丞。私だつて、父の云ふ通りになつてやれば、父は隨分よろこびますし、母も安心しますし、私も一人前の立派な武士の仕事も出來るのですが、あなたを知つた許りで私にはもうそんなものは、少しも問題ではなくなりました。

娘。お互ひに知らなかつたら、こんなよろこびもなかつたかはり、二人とも呑氣にしてゐられましたのね。ですが私、あなたを知つたので、どんなに嬉しいか知れませんわ。もう本當に遲くなりましたわ。かうしても切りありませんがから、之でおわかれしますわ。又明日ね。

市之丞。それでは歸ることにしませう。又明日。
娘。明日はおくれないでね。私の夢を見て頂戴。
市之丞。あなたもいゝ夢をね。
娘。それではさよなら。
市之丞。さよなら。
（娘、市之丞にわかれて歸らうとし、迎へに來た父に逢ふ）
父。おゝ、お前か。
娘。あゝ、びつくり、お父さんでしたか。
父。一人でなにしてゐたのだ。
娘。あまり月いがゝので。
父。俺が歸つて來たら、多之介一人でゐるので、お前のことを聞いたら、來た時からお留守だと云ふので、びつくりして二人で搜しに來たのだ。多之介は又俺と一緒かと思つたのださうだ。
娘。それで多之介さんは。
父。川上のあの橋の方へさがしに行つた。そして俺とこの川岸で逢ふことに約束しておいたのだ。それでも生きてゐてくれてよかつた。俺はお前が死んだかと思つたのだよ。氣が早すぎるので、自分でも可笑しな位いだ。どんな事があつても死なゝいでおくれね。私はもう齡をとつて氣がよはくなつた。生きてゐてくれさへすれば、どんなことしてくれても滿足だとさう思ふやうになつたのだからね。俺はこんな意氣地なしではないと思つてゐたのだが、もうすつか

り意氣地がなくなつた。おゝ多之介ぢやないか。娘は居たよ。

多之介。(急いで來)お嬢さんはゐらつしやいましたか。

父。これで俺も安心した。娘は一人であんまり月がいゝので、お月見してゐたのださうだ。さあ、早く歸つてお酒でも一杯やらう。急に安心したら、寒くなつて來た。多之介本當にいゝ月だ。月と云ふものはあんまり晝になりすぎてゐるせいか、本當に月の晝でいゝ晝を見たことはないね。どんな晝を見ても、皆、月夜はもつと美しいものだと云ふことを知つてゐるせいだと思ふね。

多之介。(泣き聲で)さうで御座いますね。

父。多之介、何をないてゐるのだ。

多之介。先生、それでは私は之で失禮いたします。

父。いけない。うちまでおいで。

多之介。それでも、今日は。

娘。いゝぢやありませんか、多之介さん。あんまり月のいゝ夜、一人川岸をあるくのはよくありませんよ。私、お願ひだから、多之介さんに晝を一つかいて戴きたいわ。月夜のねそ。して、死神が勇しい若者に負けて歸つてゆく處の晝をね。

父。死神がまける晝、それは面白い、是非かくといゝね。

娘。ね。多之介さん、お願ひですわ。

多之介。ありがたう、お嬢さん。ありがたう。

娘。きつとね。

多之介。かきます、かきます。
娘。多之介さん。ありがたうよ。
多之介。それでは先生、之で失禮します。さよなら。
父。さうか。それではさよなら。又明日來るといゝ。
多之介。明日又上ります。
娘。さよなら。畫をおたのみしてよ。
多之介。えゝきつとかきます。
（父、娘、退場。多之介、川を見なきながら、川上の方へもどる）幕。

第三幕

（橋のそば。夕方。多之介と市之丞橋の上で行きちがひ、互に默禮する。行きちがつてから、多之介聲をかける。）
多之介。市之丞様。
市之丞。何んですか。
多之介。一寸御話ししたいことが御座いますが。
市之丞。それではこゝで御話しを伺がひませう。
多之介。失禮なことを申すかも知れませんが、之も、師匠や、御嬢さんのためですから、御許し下さい。

市之丞。何んでも御遠慮なく。

多之介。あなたは御嬢さんを本當に愛してゐらつしやるのですか。

市之丞。勿論、愛してゐます。

多之介。あなたはお嬢さんと結婚なさる御つもりなのですか。

市之丞。それは大概出來ないことゝ思ひます。私には私の父の恩人の忘れがたみの許嫁がありますから。

多之介。それではいつかお嬢さんのことは思ひお切りにならなければならないわけですね。

市之丞。そのことは私にはわからないのです。あの方は、私にすてられては生てはゐないと云つてゐます。私もあの人とはなれて生てゆけるとは思つてゐないのです。

多之介。本當にあなたはさう思つてゐらつしやるのですか。

市之丞。之は嘘ではないのです。私は今迄、道樂者だつたかも知れません。しかしあの人に逢つてから私の考へはちがつたのです。私には浮いた考へはないのです。

多之介。それなら今後、どうなさらうとおつしやるのです。

市之丞。私にもさきのことはわからないのです。

多之介。私は、ひつつこく云ふやうですが、あなたは心がはりをなさるやうなことはないでせうね

市之丞。私はないと思ひます。

多之介。どうか御嬢さんを幸福にして上げて下さい。

市之丞。多之介さん。私はあなたにすまなく思つてゐます。

多之介。やむを得ないことです。私は隨分くるしみました。あなたをうらみました。又悄みました。あなたは御孃さんの心をもてあそんでゐらつしやると思つてゐました。そしてお孃さんが心からあなたを愛してゐらつしやるのを、情なく、いぢらしく思つてゐました。しかし私はあなたが、私の思つてゐたやうな方ではないことを知りました。あなたに昨夜お目にかゝつた時、私はあなたの心の美しさを見ぬいたやうな氣がしました。それは私には隨分ひどい打撃でした。あなたは御存じかも知れませんが、私は、身の程もわきまへず、御孃さんを愛してゐましたから。あなたの手から御孃さんを奪ふのは、お孃さんのためにもいゝことだと思つてゐたのです。

市之丞。多之介さん。私もさう思つてゐるのです。あの人もさう思つてゐるのです。私はなんの取柄のない人間です。それに道樂者で、それに許嫁のあるものです。あなたは私とちがつて、實に立派な方です。畫にかけては、恐らく日本一になれる方です。あなたのやうな方とあの人が夫婦になれたらあの人にとつてどんなに幸福だらうと、私も思はないことはないのです。

多之介。いゝえ、私はそんな立派な人間ではありません。私は醜い男で、性質もよくない處を澤山もつてゐるのです。ですが、正直に云つて、私は御孃さんを思ひ切ることは出來ないのです。しかし私は事實の前には從順になるより仕方がないことを知つてゐます。虫のいゝことは考へません。どうかお孃さんを幸福にしてあげて下さい。

市之丞。私は自分に出來るだけのことはします。決してお孃さんを弄んだり、無責任なことはしません。

多之介。それを伺がつて安心しました。あなたも幸福でゐらつしやい。

市之丞。あなたの仕事がよくゆくことをのぞんでゐます。そして日本一の畫工になつて下さい。

多之介。ありがたう。しかし私には、その力はありません。私は生てゐるのが、やつとなのです。

市之丞。……

多之介。そんな意氣地のないことを男が思ふのは耻にしませう。戀だけが人生とは私は思つてはゐないのです。ですが、私はあなたを殺せば、自分の望みが叶ふと知つたらあなたを殺しかねないでせう。

市之丞。その時は、私だつて、あなたを生かしてはおかないでせう。

多之介。あなたは日本一の仕合せ者です。さよなら。

市之丞。さよなら。

（多之介行きすぎ退場しやうとして娘に逢ふ）

多之介。お孃さん。先生はおうちですか。

娘。えゝ。父はうちにゐます。

多之介。なにしてゐらつしやいます。

娘。今にあなたがくると待つてゐました。

多之介。さうですか。それでは之からお家に上りませう。さよなら。

娘。さよなら。あの畫はいつ頃出來ますか知らん。

多之介。まだ〳〵時がかゝりさうです。死神が勝つ豈なら明日にてもかけるでせうが。

娘。多之介さん。あなたは男ではありませんか。そんなことをおつしやると笑はれますよ。

多之介。お孃さん、私は誰に笑はれても少しも困りません。

娘。私も笑ひますよ。

多之介。どうか笑つて下さい。
娘。あなたはまさか死にはなさらないでせうね。
多之介。お孃さん。私はあなたに死ぬなぞとは云ふ男ではありませんよ。
娘。あなたには本當に御仕事があるのですから。
多之介。仕事のことは云はないで下さい。そんな氣やすめなことをおつしやると、私はわるくとりますよ。私の堪忍の緒が切れますよ。
娘。堪忍の緒が切れたらどうなさるの。
多之介。あはゝゝ。なんでもないのですよ。お孃さん。さよなら。
娘。多之介さん。あなたの顏色がよくありませんよ。
多之介。そんなことが、あなたたちに何のかんけいがあります。それより市之丞さんがあなたを待つてゐらつしやいます。
娘。えつ。何處で。
多之介。お孃さん、それこそあなたの本音なのですね。あの人はそれ、あすこの橋の處にゐてこつちを見てゐます。
娘。あゝ本當に。多之介さん、それでは又、あとでね。さよなら。（急いで市之丞の方へゆく）
（多之介一人とぼ〱行かうとして、二人の方を見、又とぼ〱行かうとし、又ふりかへり退場）
娘。あなたはこゝにゐらしつたの。
市之丞。えゝ。

娘。多之介さんに逢つたの。

市之丞。逢ひました。

娘。何か云つてゐましたか。

市之丞。え。いろ〳〵。

娘。何かいやなことを云はなかつて。

市之丞。いゝえ。少しも。あなたには何を云つてゐました。

娘。なんだか、生きてゐるのが、いやさうなことを云つてゐました。心配なことはありませんわね。

市之丞。大丈夫でせう。私には元氣さうに話してゐました。私を殺して、あなたが多之介さんのものになるなら、私を殺しかねないやうなことも云つてゐましたよ。

娘。まあ、そんなことを、氣味のわるい人ね。

市之丞。あすこでまだこつちを見てゐますよ。

娘。本當に氣味のわるい人ね。見えない所にゆきませう。おや、あの橋を渡つてくるのは父ではないでせうか。

市之丞。さうらしいやうですね。逃げなければなりませんね。

娘。いゝえ、いゝのよ。父はもう何にもかも承知してくれましたの。私は父に何にもかも云ひましたの。あなたをはなれては生てはゆけないことが、父にははつ切り合點がゆきましたの。父は齢をとつたので、それはよはくなつて、私が生てさへゐてくれゝば、何してもいゝと云つてゐますの。それだけ私、父が氣の毒で、父を本當によろこばして上げたいと思つてゐるの。父はあなたの惡口をあんまり云はなくなつて、あゝ云ふ人がかへつて、實意のある人かも知

れないつて、昨晩云つてゐましたわ。

市之丞。二人で何か話してゐらつしやるやうですね。

娘。本當ね。おや、多之介さんが泣いてゐらつしやるやうね。

市之丞。えゝ、それは泣くでせう。私だつてあんな目に逢へば泣かないではゐられません、泣く所ではなく、生てはゐないでせう。

娘。父はもてあましてゐるやうですわ。

市之丞。本當に、もてあましてゐらつしやるやうですね。

娘。多之介さんは死にはしないでせうね。

市之丞。大丈夫でせう。しかしもし死んだらどうします。

娘。死んだら、困りますわ。

市之丞。それなら多之介さんの妻になつたらいゝでせう。

娘。そんなわかり切つた、いや味はおつしやるものではなくつてよ。死んだつて仕方がないとは思ひますが、死なない方が心のこりがなくつていゝわ。あなたは多之介さんが死ぬ方がいゝの。

市之丞。死ぬ方がいゝとは思ひません。しかし死ぬと云つておどかされたつて、私はあなたを思ひ切るわけにはゆきません。

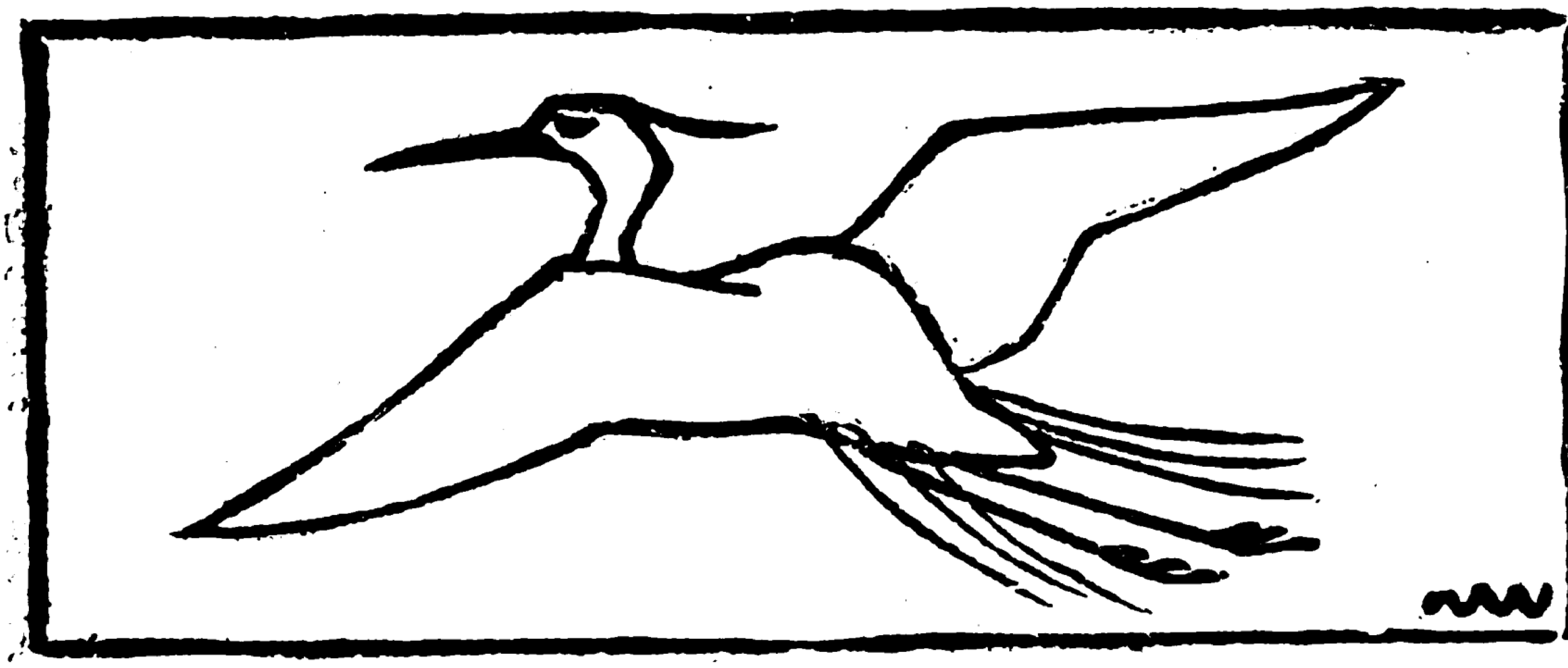
娘。あたりまへですわ。思ひ切られたら、私が第一困るわ。多之介さんなんか死んだつて。

市之丞。多之介さんも泣きやんだやうです。

娘。さうね。二人とも歸つてゆきますわ。あの橋ではよく人が死ぬのですつてね。
市之丞。そんな話ですね。あの下には死神がゐるのだなぞと云ふ人もありますね。こないだもあすこで子供が死んださうですね。
娘。死神なんか居ないものですわね。ですが私あの橋を渡る時、いつもいやな氣がしますわ。父は目が少しわるいのですから、心配ですわ。父の方がさきに渡りますわ。多之介さんの方がさきに渡ればいゝのに。
二人。あつ。大變、多之介さんがおつこつた。
(二人あはてゝ走けてゆく。まもなく二人川についてかけてくる。川から多之介の「助けて」の聲聞える。市之丞。あはてて橋の眞中からとびこむ)
娘。あぶない。
(娘と父橋の上にゆく。娘夢中になる)
娘。あゝ、市之丞さんが多之介さんをつかまへた。あゝ、あの方の泳ぎのうまいこと。多之介さんはたすかつたわ。
(岸の方へあはてゝ二人ゆく。市之丞、多之介つゞいてはい上る。多之介すつかりつかれてゐる)
娘。多之介さん、大丈夫?
多之介。えゝ、ありがたう。もう大丈夫です。
娘。本當にびつくりしたわ。
父。どうして落こつたのだ。
多之介。ふと水の流れを見たら、急に目まいがしたのです。

父。もう助からないかと思つた。市之丞さんがゐなかつたら、死ぬ處だつた。本當に助かつてよかつた。
多之介。ありがたう御座いました。私ももう死ぬと思ひました。
娘。(少し笑ひながら愛をこめて)　死にたかつたのではないの。
多之介。お孃さん。死にたかつたのです。だが水をのんだら、急に生たくなつたのです。お孃さん、私は、もう死神にはまけません。負け勝つたのです。市之丞さんの御かげで。お孃さん、私はこの御禮に、きつとあの畫をかき上げますよ。お孃さん。
娘。ありがたう。
父。本當に俺はどうしやうかと思つた。本當によかつた。よかつた。市之丞さん、本當にありがたう。あなたは之から自分で立派な畫をおかきになるやうなものですね。多之介の之からかく畫はあなたの御かげでかけるやうなものですから。
多之介。市之丞さん。あなたは私を殺して生かしたやうなものですね。之で私は、もう仕事より他のことは考へなくなりました。生てゐられると云ふことはそれだけで本當にうれしいことです。
父。さあ、皆で私の家へ行つて、そして賑やかに、多之介の生れかへつたお祝ひでもしませう。よかつた。よかつた。本當によかつた。私はこんなに心配したことはなかつた。だがこんなにうれしいこともない。皆生れ返つて、元氣になるとしませうね。さあ、早くうちに行かう。
娘。え、さうしませう。　幕。

(一九二三、一〇、九)



淡墨色の憂愁

藤村千代

その頃は大變困つて居たものだから、私は無精に金が欲しかつた。もう少しで自分を失くするところだつた。

私は今でもその頃の事を顧みて、「まあ、よく淫賣にもならずに通つて來たものだ。」と自分乍ら不思議な氣がする位である。

淫賣にはならなかつたけれども、今でもその頃の生活が私を追つかけて來る。色々な場合に色々なかたちで追つかけて來る。

それも、今のところ少うし樂な氣持になつて居るが、もう半年も前には、私もこれで、世間並みな奥樣になりたいと思つて居たところであつたから、その私が五六年前にはレストランの女なんかになつて居たと言ふ事を、誰にも知られまい悟られまい嗅ぎ出されまいとして、それはそれは苦勞をしたものであつた。

そんな苦勞は全く馬鹿々々しい事なのであらうが、私は馬鹿々々しいと思ひ乍ら、如何してもその苦勞から脫ける事が出來なかつた。

私は、自分の書いたものの中にも、私自身らしく思はれさうな女がさもそんな事をしたらしく書けて居るのではあるまいかと言ふ考へに脅されたものだ。ここは斯う書いた方が、と思ひ乍らも、一捻りしないでは置けない氣持があつて、如何も素直なものが書けなかつた。私は二重に苦しんで居た。

人が聽いたら、阿呆だと言つて笑ふ事だらうが、今でも少しはその氣持が殘つて居る。それと言ふのも、私もこれでちやんとした家に生れてちやんとして育てられたお嬢さんだつた事もあるのだと、人から思はれて居たいと言ふ風な他愛のない見榮もなかつたとは言へないが、それよりも、私を女房にして居る人の心持を考へて居たからであつた。あの人の奥さんはそんな女だつたのかと、人に言はせるのが氣の毒で仕方がなかつたからであつた。

何は兎もあれ、今では大變樂な氣持になつて居る。まだ薄いきもの位は着て居るかも知れないが、あの悶い切ない鎧だけは脫いで了つて居る。

私は、この樂な氣持の中に這入つて居乍ら、次のやうな思ひ出話しが書けるやうになれたのを、しんから嬉しいことに思つて居る。

前にも言つたやうに私は非常に困つて居た。喰べて行かれるだけの金があつたらあんな眞似はしなかつたのかも知れなかつたが、と思ふと同時に、もつと困つて居たのだつたら乾度淫賣をしただらうと思へるやうな困り方であつた。兎に角、堅氣な金儲けではまじやくに合はない位困つて居た。

だから、その店へ來た色々な人達を好きだの嫌ひだの思ふやうな餘裕がなくされて居た。少しでも金を置いて呉れさうな人達だけが、私にとつて用事のある人達であつた。

さう言ふ私であつたのだから、何方かと言ふと西洋人を、そんな店へも氣紛れらしくひよつこりと遣つて來る西洋人を有難く思つて居た。言葉がよく通じないせいもあらうが、惡くからかふと言ふではなし、あつさりと喰べて了つたら、西洋流の几帳面さでさつさと歸つて行つて了ふ、おまけに割の好い心附けをして呉れるなどと言ふ事が、大變氣易かつたのだらうと思はれる。

これから書かうと言ふロシアの留學生もその一人であつた。名をオレングと言つた。そんなところへ出這入りする客の誰でもがするやうに、未だ知り合になつたと言ふのには早過ぎるほんの二度目か三度目かに會つた時、彼は私に小型の名刺を呉れたのだつたが、それにさう書いてあつた。裏には、蚤のやうに細かい日本字でちやんと處番地まで書いてあつた。

ロシアも未だザアの生きて居た頃で、本國からの仕送りも多分にあるらしく、一體が派手好きな質の、何かにつけて綺麗な金遣ひであつたから、彼の給仕をして居るのなら何れたんまり貰へるのだらうと言ふ風な、(とあけすけに言て了つては、我乍ら余り味氣ないけれども、實際その頃の私は、さう思へる時ででもなければ笑へもしなかつたのだし、輕口一つ利けなかつたのだから情けない話であつた。)極りの惡い安堵があつて、それはのび〱としたのであつた。彼の來た時だけは如何にもそんな處の給仕女だと言はれるのに適しい、駄洒落や冗談も言へたのであつた。

それに、ペトログラードの大學で日本語科を出たと言ふだけあつて、オレングも上手な話し手であつたから、私達の話しはつい破目を外す事があつた。私は自分が給仕女だと言ふ事も忘れて、丁度、少し許り小説なぞをもぢり初めて居た頃だつたので、さぞ利いた風な口も叩いた事であらうと思ふと、今でもいささか冷汗ものに思ふのだが、そこは相手が外國人だけに、何の拘りもなく聽き流して呉れたやうであつた。

彼の研究科目と言ふのは、案外にも日本の文學史だつたので、興到れば源氏物語や徒然草の一節もくちずさむと言ふ風で、私は、少し品下つた譬へだけれども、人間の口を持たない鸚鵡が人間の遣ふ言葉を繰つて居るやうな興味を覺えて、彼の話しを聴いたものであつた。

一度、店がはねてからの歸り途で、如何かした拍子に丁度同じ方向へ歩いて居た彼と一緒になるやうな事があつた。その時彼は、小脇に抱へて居た寫眞帖を折から通りかかつた呉服屋のショウウインドウの光りの前に立留つて擴げ乍ら、日本の淫祠の研究を初めたのだが、と、それは珍らしい話しをして呉れた。

勿論、その寫眞と言ふのは自然石や古木で象つた男や女の異様な生殖器のやうなもの許りなので、若い娘に見せべきものではないのに、見せて居る當人も見せられて居る私も、一向構はないで、

「私達は、日本の風土研究を遣つて居るところなのだ。」

としか思はないで居た。――斯う言へば態ざと取り澄ました口を利いて居るやうにしか思はれないだらうけれども、全く、彼の學問好きな眞面目な態度は、ほんの僅かな如何はしい想像さへも忍び込ませなかつたものと思へる。――

私達は大抵小説の話し許りするやうになつて居た。長塚節と言ふ人の「土」と言ふ小説を讀んで御らんなさいと勸めて呉れた事もあつた。そして別れる時には何時でも、進化した猿とでも形容したいやうな餘り美しくない顔に微笑を湛へては、

「おきよさんも今に立派な小説家になります。」

と、如何にも單語を綴り合はせましたと言ふ風に、一語一語節を附けるやうに言ふその言葉を、私は子守唄のやうに樂

しく聴いて居たつけが、それを思ひ出す毎に、今は何處に居るか解らない彼が、斯うして自分の事が書かれて居ると知つたなら、何と思ふ事だらうとそゞろにもの淋しい氣持ちになるのである。

お饒舌な私は餘計な事許り書いた。話しはこれからである。――

それから暫くして私は店を止めて了つた。

もと〳〵當座凌ぎ位の積りで出て居たのであつたから、少しでも手許が樂になると、一日でも出て行くのが可厭になつた。何しろ、淫賣にもなれないし、さうかと言つて人の金も盗めないところから、案じ出したと言ふのに過ぎないので、全くあのなりはひは私の性に合はなかつた。

もつと無心になれたら或は樂に馴つて行けたのかも知れなかつたが、愁ひいろんな理窟を捏ちつて居た許りに、如何にも動きがとれない程氣持が苦しかつた。

そんな事に掛けては人一倍神經過敏な私は、客の前へ出るために、餘り香ばしくもないみめ容を出來るだけ見場よくこなす事に浮身をやつして居る自分を見るのが、泣きたくなる程情けなかつた。私はあの時位ひけ目を感じた事は曾つてない。私はだん〳〵憂鬱になつて行つた。

で、ほんの當座の凌ぎだけ――夏物だけでも質受けするとか、長く溜つて居た味噌醬油の拂ひを濟ませるとか、滯り勝ちだつた間代をやつと約束通りの前拂ひにするとか、――附けて了つて、あと、手許になにがしかの小遣錢が殘ると、(これだけの分別でも私はやつとしたのであつた。)あとは野となれ山となれで、通知も出さずに止めて了つた。

こんなにして止めて了つたあとまでも、無精に腹が立つて仕方がなかつた。私は自分が頼んで使つて貰つたのだと言

ふ事も忘れてもあの店の頭の禿げかかつた支配人や意地汚い年増女給なぞが、寄つてたかつて可厭がつて居る私を引つ張り出したのでもあつたかのやうに、腹が立つたのであつた。(ほんたうに私のやうな素氣ない女を使つて吳れた彼等こそ、定めし迷惑な事であつたらうと思ふ。)

然しその店を止める時に、私は一つの病氣を貰つて居た。その病氣は隨分のちまで私に祟つた。それは、金を儲けるのに汗水流して骨を折るのは馬鹿々々しい、その氣にさへなれば、存外樂に手に入るのだから、と言ふ考へであつた、この考へが、病氣のやうになつて、もう少しで私の骨の髓まで腐らせるところであつた。

こんな考へは何と言ふものであらう。賭博心理と言ふ風なものもこの一種であらうと思はれるが、兎に角、まともな人間の持つべきものではなかつた。——斯う言ふ事を考へるにつけ、私は谷崎潤一郎氏の戯曲「十五夜物語」のお波の心持が興味深く思ひ合はされる。——

そんな私であつたから、店を止めた當座にも餘り呼吸抜きをし過ぎた。止めた翌くる日からでも正業にありついてみつちり働いて居たなら、何も彼も順當に行つたであらうに、そんな殊勝な心掛けに乏しかつた私は、いくばくもなくもとの默阿彌になつて、前と同じやうに二進も三進も行かなくなつた。

今更悔やんでも追つつかないと思ふと同時に、私はほんとうのところ一夜に十圓も十二三圓も收入のあるレストランの味を忘れ兼ねて居た。よつぽど、あの店へもう一遍賴んで見やうかと、それは每日のやうに考へたものであつたが、あの何とも言へない心苦しさが附き纏ふ事にも懲り懲りして居たので、つい決心をし兼ねて居た。

私は、もつと違つた事で工面が出來ないものかなあと、全く乞食のやうな物欲しさに囚はれたのであつた。

突然、私はオレングの事を思ひ出した。さうだ、彼の處へ出掛けて行つて金を借りて來よう。彼の處からなら、それ

でもいくらか氣易く借りて來られるだらう。そんな氣がしたのであつた。

然し、口では借りて來ると言ふけれども、私はその金を返さうとは考へて居なかつた。まあ體よく貰つて來るやうな氣で居たのであつた。

そこで私は、机の抽出しから古い彼の名刺を探し出して、つい眼と鼻の千駄木町に彼が住んで居る事を喜び乍ら、或夜、附木の札に五錢と書いて出してあつた松葉牡丹の鉢植を夜店で買ふと、それを提げて彼のところへ出掛けて行つた。

暗い路の突き當りに交番の赤い灯が見えて、そこから又二つも三つも同じやうな生垣添ひの暗い露路を曲つて行くと、一寸植木屋ででもあらうかと思はれる樹立の深い邸があつて、その離れであらうか母屋であらうか奥深い三間か四間許りのところであつた。

私は洒落れた冠木門を潜つて飛び石を渡り乍ら、風變りな四つ目格子の玄關に立つた。その時まで考へもしなかつた。オレングは一人であらうか、それとも同じやうに碧い瞳の女と二人なのであらうかと言ふ考へが、ふいと湧いて來た。言ふまでもなく一人で居て呉れた方が勝手なのだが、二人なら二人で又面白いだらう位の好奇心もあつて、私は少し體を前へのり出すやうにして、中から出て來る人を待つて居た。

と、思ひがけなくつい左手の襖戸が開いて、向ふ向きになつた儘のそれでも首だけは此方へ捻ぢ向けて、夜眼にも赤い帶を結んだ若い女がひよいと顔を見せた。

私は突嗟に、あゝ下女だな、と思つた。その、何か自分の仕事をして居るのに客が來て面倒だな、と言ふ色を隠さうともしないもの臭さうな格好に、少し氣を惡くし乍らそれでも又思ひ直してオレングさんはうちか如何か訊いた。

そこでやつと此方へ體を向けた女は、それは素氣ない調子で、

「居ますよ。あんたは？」

と半分立ちかかりになつて言ふのであつた。洗ひ晒しの鳴海絞りか何かでしよんぼり立つて居る私が、こんな女の眼には孤兒院のもの位にしか思はれないのだらうと、急に悲しくなり乍ら、私は自分の名前を告げて、ほんの二十分もお邪魔をすれば好いのだと言ふ事を附け加へた。

オレンヂは直ぐに出て來た。

「やあ、おきよさん、珍しいではありませんか。」

と、それ位のお愛想なら何の苦もなく言へる彼は、ほんたうに暫く振りで私に合つた事を喜んだのでもあらうが、手を取るやうにして上げて呉れた。

六尺を一二寸も出ようかと言ふ身の丈に、その頭の私には品の見立ても出來ないやうな、澁い横縞のキモノを着流して居る彼を見ると、ひとりでに笑ひが頬に上つて來るのであつた。一間通り拔ける毎に、赫い捲毛のねつとりした、割合に小さい彼の頭が、鴨居に閊へさうなので、私は到頭聲を立てて笑つた。

「あら、あら、頭を曲げてお歩きなさいな。」

私は自分の笑ひ聲が余り高かつたので、吃驚して一寸後を振り向いた。私はさう思つたのだ。あの女が未だ其處に立つて居て、それは惡意のある眼差しで私の後姿を見て居るであらうと。然し、其處には誰も居なかつた。私が一寸しか見ないあの女をほんのちよつぴりでも憎んで居るのは不可ない事じやあないんだらうか。それにしても、あの丸まつちい可愛いい顔立ちの女が、如何してこんなに可厭な感じを與へるもんだらう、と私は私自身にも氣付かない、變に暗いけれども微かな訝りで、一寸頭を振つた。

が、この考へは直ぐに消えた。

私の通されたのは、何處から何處まで日本好みの、何方かと言ふと少し許り西洋人の獨り合點がほの見えるやうな飾り付けの、居心地の好い十疊であつた。

壁に添うた二間ぶつ通しの本棚に、日本文學叢書や何々全書と書かれた夥しい背皮が列べてあるのや、さては和綴ぢの草紙まで重ねてあるのを、私は側へ寄つてもの珍らしさうに見た。若しくは見て居る振りをした。

然し、その間にでも私は忘れなかつた。如何言ふ理由を附けて如何言ふ切り出し方をして、私の目的を達したものかと言ふ事を。さうして私は、幾度も機會を捕へたと思ひ乍らその機會の逃げて行くのを、ああ、今逃げて行くところなのだなと、それは少しも焦燥の伴はないのんびりした心持で見送つて居た。

さうして居る間に、私はオレングが幾度となく勝手の方へ聲を掛けて居るのを聽いた。

「お光つちやん、お茶を持つて來て下さいな。あのお煎茶の方をね。」

「お光つちやん、ちよつとお話しにいらつしやい。何にも氣のおけるお客様ではないんだから。」

「お光つちやん、もう今日の羊羹はないの？　一寸で好いからいらつしやいな。」

私はそれを聽くたびに變な氣がした。何だか私の坐つて居るところが坐つては惡いやうな、居辛いやうな氣がして來た。けれども、あれは下女なのか知ら、オレングの男にしては少し甘つたるい、それだから極めて優しく響く言葉遣ひを日本流に解釋すれば、まあ、他處から預つて居る大切なお孃さんか、それでなくても、ほんの好意づくで勝手まはりの用を足して貰つて居る娘さんか、それとももう一つ底を割つて考へて、ひよつとしたら、――ほんたうに私は、ひよつとしたら、としか思つては居なかつた。――このひとり者の異人のおくさんのやうな役目までして居る女なのではあ

るまいか。

そう考へ乍ら、私はあの若い女の、オレングに對して持つて居る地位を朧氣乍ら想像する事が出來た。

と、そんなに度々返辭だけはするけれども一向立つて來さうにもなかつたあの女――お光が、包裝紙にくるんだ細長い、洋傘であらう銀の握りがはつきり見える紙包みを持つて、私達のところへ遣つて來た。――私はふと、幾度となく男から呼ばれた末にやつと、全でお伽噺の女王樣のやうに遣つて來たお光を羨しいと思ふともなく、何時の間にか氣弱いおべつか笑ひを浮べ乍ら、つい先刻まで下女であらうと思つて居たその女の、意を迎へようとつとめて居るのであつた。

然し、お光は私の居る事なぞ全で默殺して了つたやうに、オレングの方許りへ向いて言ふのであつた。

「ねえ、今やつと持つて來たのよ。今朝買つた洋傘を、」

その日は日曜日であつた。私の眼に、この女とオレングとがたかびくの肩を列べて、未だ朝の打水の消えない靜かな街のショウウインドウを覗いてゐるところが、ぱつと映つて消えた。私の心は、觸角をつつかれた蝸牛のやうに、少し宛つ尻ごみをし初めた。

その私の耳のところで、地の好い琥珀と銀の骨との軋み合ふキ、キ、と言ふ音がして、それは大きな蓮の花でも開いたやうに薄ピンク色の洋傘がぱつと開かれた。

私は思はず眼を上げて、洋傘の布一杯に覆ひかかつて居る大輪の百合の刺繡を、じつと見詰めて居ると、嬉しいのか悲しいのか譯の解らぬ涙が眼頭ににじんで來た。

「ね、この百合の花が共糸で縫つてあるのが好いわね。」

お光はオレンジに遣つた眼をぐるりと私の方へ廻して私を見た。その笑顔はどんなに美しい優しい笑顔であつたらう。

私の中にはもう金の事を頼む勇氣など跡かたもなく消えて了つた。私は、幸福な二人を後にしてしほ〳〵と歸つて行つた。

勿論、あの五錢の松葉牡丹をつい出しそびれて居た事は、私にとつて、せめてもの嬉しさであつた。私はいとしいものを抱くやうに、下駄箱の蔭に置いて置いた小さい鉢をそつと袂の中へ隱して持つて歸つたのであつた。

然し、その時分の私の行き詰りやうと言ふものは、この日の哀しさを直ぐに忘れさせた。私は、中二日程おいて又同じ家の玄關に立つた。そして今度は、それは上手に遣つて退けたのであつた。

私は一生懸命であつた。路々もその事許り考へて歩いた。――オレンジが出るかお光が出るか、何方が出て來るにしても顏を見次第口を切らねばならぬ。唯つた一分でも言ひそびれると私はもう永久に言ふ事が出來ないだらう。さうだ。玄關に立つた儘直ぐに斷り切り出すのだ。

「金を貸して下さいませんか。七圓五十錢許り欲しいのです。(ほんたうの事を言ふと私の欲しい金額にちやんとした決りのあらう筈がなかつた。私の直ぐ後には大きな口を開いた、何と言ふものであらう、何と言ふものか知らないが私が金を持つて來るのを身構へをして大きな口を開いて居るものが待つて居るのであつたから、それ、許りの金はぺろりと舐めて了ふ事であらう。然し、何でも彼でもちやんとした目ろみのありさうな口を利かなければ、と思つて居た私は突嗟の間にさう考へたのだ。)實は、もう直ぐ秋だのに質に入れてあつた袷がすつかり流れて了ふのです。今夜にでも金を

持つて行かなければ直ぐに流して了ふと言ふのです。その中で私は誰つた一枚だけ、是非とも欲しい着物があるのです。せめてそれだけでも出したいのですから、何卒借して下さいませんか。」

實際私はその通りに言つたのだ。私の仕組んで置いた通りでなかつたものは、お光の返辭であつた。

「だけど、利子だけ遣つとけば當分待つて呉れるんでせう。その一枚の着物の分だつて、」

私は防備の手薄なところを衝かれたやうに變にしどろもどろになり乍ら、それでも一生懸命で、さうかも知れないが質屋ではさう言つて聽かないのだから、是非とも七圓五十錢貸して欲しいのだと言ひ張つた。

そこでお光は一旦奥へ這入つて行つてから、オレングは來客中だから今夜は失禮するけれども、兎に角これだけお立替しようと言つた。と言つて、ぴち〳〵した十圓札を私の手に渡した。

然し、私は何と言ふいぢ汚い女であつたらう。私は顏を擧げてさう言つたのだ。

「あの、お釣錢を持つてないんですが、」

⑬そんなに困つて居るんなら十圓も遣らう、と思つて居るオレングの心をちやんと見透かして居乍ら、さう言つたのだ。

お光はちらと私を見た。何でお前からお釣錢を貰はうなぞと思つて居るものか、と言ふやうに。

それが私には正面から輕蔑せられたよりも手痛かつたのだ。出來る事なら今言つた事をひつ込めて了ひたいとどんなに思つたか知れなかつた。

私は、金の貸れなかつたさきおとゝひの晩よりももつとしよげて、暗い路をひとりで歩き乍ら、それでもそんなにしよげて居る自分が可哀さうになつたのであつた。

私はお光の事を考へて居た。利子だけ遣つとけば當分待つて具れるんでせう、と言つたつけが、あの女も質屋へ行つた事があるのか知ら、それにしてもあの女は、一體オレンヂの何なのか知ら。

然しそんな事は如何でも宜かつた。私は私の用事を濟ませて了つたのだ。そうして、その金を返す氣のない私にとつては、オレンヂもお光も會つては氣不味い人間の中へ繰り入れなければならなくなつたのだ。

私はもうこの二人に二度と再び出會す事もないだらうと思ふと、一寸淋しくなり乍らそれでも出會す事のないやうに祈らずには居られなかつた。私の心の底を淡墨色の憂愁が通り過ぎた。私はそれを鼎さうとするやうにひとりで唇を動かした。

「あんな洋傘なぞちつとも欲しかあない。うまく借りて遣つたこと、うまく借りて遣つたこと。」

そして、私はとぼ〳〵と歩いて歸つたのであつた。

斯うして借りて來た金も燒け石に水程の役には立つた。水を遣らないよりも優しであつたけれども、燒け石ではない私の胃の腑は見る間に乾上つて了つたのであつた。それから――それからの私の生活がどんなであつたらうなどと聽きたがらないで貰ひたい。それはこの話しの外なのだから、――兎も角も同じやうなうらぶれた二年三年が經つて行つた。私は前にも言つたやうな病氣のお蔭で、それでも如何か斯うか生きて居た。その病氣はさう募ると言ふ程の事はなかつたけれども、私の生活層の上に醜い、然しそれほどに目立ちはしない瘡蓋をぷつぷつと殘して行つた。その瘡蓋の一つでしかないオレンヂからの借金なぞ、私は何時の間にやら忘れるともなく忘れて居た。

それから一二年經つうちには、私も幾らか工面がよくなつて居た。

と言ふのは、そんな私も人並みに結婚したので、その日暮しをするにしても生活と私との間に一人の男が立つて居て呉れる、何方かと言ふと氣の樂な體になれたからであつた。然しそれと同時にその時から私の前身——私は前身と言ふ言葉ほど可厭な言葉を未だ知らない。そして私は、自分の事を正直に話さうとする時、必ずこの言葉を遣はなければならないのであつた。——は少くとも私を當惑させた。私は私の良人と呼ばれる人の前に私の瘡蓋をすつかり隱さうとは思つて居なかつたが、せめて薄絹のカーテン位は掛けて置きたいと思つたからであつた。

けれども或日、外から歸つて來ると私の留守の間に女の客があつたと言ふのであつた。苗字の變つて居る私を態さ態さ昔の名で呼んで、その頃居た玉川くんだりのそんな邊鄙な在所まで、方々尋ねあぐんだ末にやつと探し當てて來たのだと言ふのを聽いて、私は碌な事ではないと思つた。

果してそれはお光であつた。階下のお內儀さんの話しに依ると、何だか酷い身 をして居て話しをし乍ら、始つ終袂の中から細卷の煙草を出しては吸つて居たと言ふ事であつた。あの頃でさへも如何かすると一寸傳法なところのあつた彼女の事であつたから、お內儀の話しの樣子から、定めし何の彼のと饒舌り立てた事であらうと察して、私はひとりでに面伏せするやうになるのであつた。

餘り人の事を惡く言はないお內儀さんであつたが、

「ラシヤメンになつてるやうな女なんですもの、何を言つたつて誰も相手にしやあしませんよ。」

とさう言ふのであつた。その、さも私を慰め顔に言ふ調子が私は氣になつて仕方がなかつた。何を言つてたつてと言ふのは何の事なのであらう。ああ言つたらうか斯う言つたらうかと餘つ程聽きたいのを、私は我慢したのであつた。

お內儀さんは雜作なくラシヤメンにして了つたが、そのラシヤメンから金を借りて居てもう三年にも四年にもなら

うと言ふのに未だ返して居ない私の事は、何と思つて居るだらうと言ふ考へは、私を酷く極り悪るがせたのであつた。それにしても良人が側で聽いて居なかつたと言ふのは、未だしも幸な事であつた。

だが、あの頃の彼等にすればほんの鼻紙代にも相當しない位の十圓を、それも時効にかかつて居ると言へば言はれる此頃になつて、こんな遠いところまで催促に來たのだとすると、彼等の困り方は想像の外であるらしかつた。

けれども、その想像の外まで私の考へは伸びる事が出來なかつた。あのオレングがそんなにまで困つて居ると考へるのは、私には難かしい事であつた。寧ろオレングとお光とはとうに別れて了つて居るのであつて、オレングと別れたのちのお光が自分のひとり考へで、昔の事を種にさも自分自身の貸金ででもあるらしく取り立てに來たのではあるまいか、と疑ふ方が私には穩當であつた。又さうする方が私の勝手であつた。少くともさうする事に依つて私の氣持ちはより安易になれるからであつた。私はお光の手から金を受取つたのではあつたけれども、彼女から借りたのではなかつたから。

然し、それから二三日して封緘葉書に認めたオレングの手紙が――流石日本通の彼ではあつたけれども、書く事にかけては餘り得意ではないらしかつた。文句もたどたどしく金釘流の片假名も心細いものであつた。その文句と文字とが、彼の貧窮を語る事に大變役立つては居たけれども――私のところへ屆いた。矢つ張りお光と一緒に居るのであつた。

――本國の政情が變つたために、留學生への送金なぞ勿論ある筈がないので、言語に絕したしがない暮しをして居る、

あの金も返して貰はうなぞとは夢にも思つて居なかつたのだが、今では如何かすると乞食でもしたい位に思ふ時もあ

るので、あの金の事は思ひ出さないやうにしようとしても、如何も忘れる事が出來ない。如何かしてあれが貰へたらと、今ではそれ許り思ひ出す。そんなにまで困つて居る。

若し、今の日本ではおきよさん達（達と書いてあつた。）の方が私達よりも生活に適して居るだらう、森すて、だて、が澤山あるだらうと思ふ私の憶測が當つて居るやうであつたら、何卒、私達の窮狀を救ふ積りであれを返して貰ひたい。――

そんな意味の手紙であつた。

私はその手紙に酷く心を打たれた。と言ふよりも二倍にも三倍にもして返さうと突嗟の間に決心した。

それで、餘つ程良人に言つて了はうと思つたのだが、それを打明けて了ふまへに、良人に知らさないでこの金の工面が出來まいものかと思つたのであつた。

私は、これも昔の癖で何かと言ふと思ふ事なのだけれども、その時も自分の着物を入質しようと思つた。然しそれは出來ない事でなつた。夏着、多物、肌着類と小分けにして唯つた三つしかない行李の中から、良人に知らせないで一枚でも引き出す事は難しさうであつた。私は良人から宛がはれた小遣錢を貯めて置いて返さうかと思つた。然し、それは恐らく三ケ月かかつても未だ足りない事であらう。私は又、月末の送金の中から內證で差し繰りをして見ようかとも思つた。然し、一人の學生の學資としてはゆつくりした金額であつても、私と二人の生活費としては足りない勝ちであつた送金の中から、いくらでも拔くと言ふ事は出來さうにもなかつた。最後に私は、良人に打明けようと思つてゐた決心がすつかり鈍つて居るのを氣附いたのであつた。

斯うして私は、到頭沈默つて濟ませた。心の中では氣休めらしく、今にきつと返せるやうになつたら、何を措いても

返すのだから、と呟き乍ら。

が、その二三日と言ふものは、私も酷く苦々しい日を送つた。オレングに金を借りた事に繋がつて、そのあとさきの私のふしだらが、丁度芋の蔓ででもあるやうにづる〱と私の頭の中で引き出されるのであつた。私は、それらの蔓に捲きつかれたやうで苦しかつた。

それでも、その間を矢張り月日が流れて行つた。私は又、忘れるともなく忘れて行つた。

私は、先生とも友達とも言へるやうな若いK氏と二人で街を歩いて居た。何でも上野の展覽會か何かの歸り途で、少し調子の宜かつた私とこれも同じように御機嫌だつたK氏とは、お互に輕口を叩き合ひ乍ら歩いて居た。

私は、自分の心が風船玉のやうに膨んで居る時であつたから、往來のものなぞちつとも眼には這入らなかつた。少し仰向き加減にしなければ見えないK氏の額を——直ぐ私の横に列んで歩いて居るK氏ではあつたけれども、始終額を見詰めて居乍ら話すと言ふのは骨の折れる事であつた。それでも私はさうしなければ話が見えなかつたから——見上げては何か饒舌つて居た。

と、そのK氏の顏が急にきつとなつて、細身のステッキを持つた儘の手をぴたんと脇にくつつけて不動の姿勢をとつたと思ふと、突然棒立ちになつたのであつた。私はそれでも、

「おや、」

と半分は未だふざけた積りで、態ざと眞似をするやうに足を留めたのであつたが、——そこで私はやつと氣が附いたの

であつた。一人の女、それは三四年も會はなかつたけれども確かにあのお光に違ひない女が、私の前へ立ちはだかるやうに、只、兩手を擴げて居ないだけの事でその顏色と態度とで充分に「通せん坊」のけはひを示し乍ら、突つ立つて居るのであつた。

――ああ、今あれを言ふのだな、あの薄い色の惡い唇を動かして、それこそ口を極めて憎さげに言ふだらうな、――私は文字通り蒼くなつた。――このK氏が知つて了ふ事であらう。そして私を輕蔑するだらう。K氏許りでなく、この話しはこれから私が立つて行かうと思つて居る小說家達の間に、たやすく傳へられるであらう。私は彼等の中から笑ひ去られて了ふだらう。ちよん切られて了ふだらう。――

一瞬間、私の頭の中をこれらの考へが通り過ぎた。私は馬鹿のやうになつて、今にも何か言ひ出しさうにびく／＼痙攣して居るお光の唇許りを見詰めて居た。

突然、白い齒とその中でベラ／＼と動く赤い舌とが私の眼に映つた。

「おきよ、さん！」

その唯つた一言は百の罵詈にも相當して居た。私は曾つて、こんな恐しい聲で自分の名が呼ばれたのを聽いた事がない。それは私の名を呼んだのではなかつた。金を返さないで憶へて居ろ、と言つたのでもなかつた。泥棒！と言つたのと同じやうに聽へた。姪賣！と言つたのと同じやうに聽へた。

私は、この苦しい刹那が永久にお仕舞ひにならないだらうと思つた。頭ががあんとなつて何も解らなくなつた。

然し、そんな時にでも矢つ張り時は經つて行く。お光は唯つたそれだけ言つたきりで私の側を離れて行つた。私はその後姿を振返つて見る事が出來なかつた。

やつとお光が行つて呉れても私の側にはもう一つの困難が待つて居た。私はK氏に憐れまれるのが情けなかつた。
「一體、あれは何者です？　何だつてあんなに怒鳴るんです？」と聴く程、K氏は心なしではなかつたけれども、K氏の心なしでない事が私には二重に辛かつた。私は俯いてとぼとぼと歩き乍ら、私の斜め上にじつと注がれて居るであらうK氏の（何だつて一言も言はないであの女を遣つて了ふんです？）と言ふ眼の色を感じなければならなかつた。

丁度それから二三日目に私は良人の任地、札幌へ移つて行つたのであつた。
新らしい土地のもの珍しさが、私を暫くあの事から逃れさせて呉れた。然し、それはほんの暫くであつた。
私の行つたところは、東京よりもロシアに近いのだと言ふ感じを始終持たせるのであつた。ロシアに近いと言ふのは地理上の關係許りではなかつた。私は街上に流れ込んで來るロシアを感じたのであつた。
その地方の小さい田舍新聞の紙面には殆んど毎日のやうに、本國を追はれたロシア商人の群が、××に保護されて居るとか、何日何日はロシアからの避難民が團體をなして入港するとか、といふ風な記事が掲げてあつた。街を歩いて居ると、ついさきおとゝひ浦鹽あたりから逃れて來たのかと思はれるやうな、あの茗荷竹のやうに背許りひよろひよろ高いロシア人が、派手な格子縞であるだけに汚れの目立つ破れ服を着て、「あてどもなく」と言ふ形容詞の適はしい歩き方をして居るのに出合さない事はなかつた。
私はその度びにオレングの事を思ひ出した。――ひよつとしたら、つい近くに來て居まいものでもない。あの街々を彷徨してゐる人達の中に交つて、さも亡國の民らしく、二卷きか三卷きのラシヤやセル地を肩にして、行商のやうなたいはひにその日を過ごして居ないものでもない。――私はさう思ふのであつた。――今ならおいそれが返せる。斯うして道を

歩いて居る時、お光を連れないでオレングひとりがひよつこりと出合して呉れたなら、私は彼を私の家へ連れて歸らう。そして、良人にも引き合さう。それから――それから、彼さへ可厭でなかつたら、私のうちの離れにでも居て貰はう。

――

私はそんな、何方かと言ふと好い氣になり過ぎた、心の中だけの穴埋めを呟き乍ら、それでいくらか氣休めの積りで居たのであつた。が――

それは或會合の席上であつた。表立つた仕事と言ふのは濟んだあとで、ほんの三四人が居殘つて雜談に耽つて居た時の話しであつた。私はかけて久しいオレングの噂を聽いた。

彼は、つい十里とは離れて居ない小樽市でロシア語の教鞭を取つて居ると云ふ事であつた。その學校でも日本文學通だと言ふのが呼びものになつて、學生間の愛嬌者になつて居ると言ふ事であつた。

私はその話しを聽き乍ら、私も彼を知つて居るのだと言ふ事を、その話しをして居る男に言はないで居るのが苦しかつた。私はさう言ひたかつた。そして言はうとした。

と、その男が私の方へ向いた。△△きよ子さんと言ふのはオレングの知つて居るきよ子さんではないのか知ら、と彼が言つたと言ふ事を告げた。

私は、何故もつと早く言つて了はなかつたらうと思ふと情けなかつた。私ははつきりした聲で私も先刻から、私の知つて居るオレングの事ではあるまいかと思つて居たと言ふ事を言つた。

皆、私の顏を見た。然しそれらの顏は、私が珍しいロシア人と知り合ひである事を面白がつて居るだけのやうであつた。それでも私は、私ひとりには重いその空氣の中で、ひそかにといきを吐いた。

あのオレングがラシヤの行商人ではなくて、ロシア語の教授になつたと言ふのは、而もそんな近くに居ると言ふのは、何と言ふ不仕合はせな事であらう。

もう、私の彼から負つた負債は只の十圓だけではなくなつた。私の不幸は、あのぴち〱した十圓札のぐるりにだん〱と薄ぼやけた縁どりが出來て、それが波紋を畫いて擴がつて行くやうに見えたのであつた。

それから一年位、私はこの波紋の中に捲き込まれて脫ける事が出來なかつた。が、或時私は、オレングが大阪へ增設された大學へ榮轉して行つたと言ふ事を聽いた。

私は一寸ほつとした。

然し私は、彼の生きて居る間中、大阪に釘付けになつて居るものではないと言ふ事を知つて居る。何時何處で出會さないものでもないと言ふ事を知つて居る。

私はもう一度彼に會ふ前に、彼への負債を、――あの十圓の元金はもとより、その利子としては餘りに高過ぎる不幸の波紋をも附けて――すつかり返して了ひたいと思つて居る。私は今、彼の住所を知らない。然し榮轉して間もない事なのだから、大した煩勞なしに知る事が出來るであらうと思ひ乍ら、未だそれをしないで居る。金は五倍にして返せても、あの利子だけは返せないからである。

無線電信と言ふものがあるやうに、無線爲替と言ふものでもあつて、あの利子も一緒に返せるものだつたら、私はどんなに嬉しいか解らない。

――だが、この薄墨色の憂愁は永久に私のところに殘るであらう。恐らく、大學教授としての榮職をかち得たオレングは、再び私に返金を迫まるやうな事はないであらうから。――(完)

一九二三・八・二六



「ファイヤガン」

徳田秋聲

何某署の幾つかの刑事部屋では、その時殆んど總ての刑事たちが、みんな善良さうな顔をそろへてゐた。不斷ならばちよつと好い氣持のしない表情の持主でも、全市が大混亂のなかにあつて、大自然の暴威の前に一様に慄へあがつてゐた時なので、人間の本能がもつてゐるどんな勝手な眞似でもが、共存的な好いところと一つになつて極度に擴大されてゐた時なので――勿論人間の惡い智慧や好い智慧や、深刻な心理がみんな閉塞してしまつて、尤も手近な感情ばかりが働いてゐたから、普通の犯罪が犯罪らしくも見えなかつたゞらうし、たとひそれが犯罪であつたにしも、群衆心理に支配された種類のものであつたから、それがちよつと普通一般のことのやうに思はれた。犯罪を捜す目に映る總てのものが、また顯微鏡か何かで見るやうに異常に擴大されてゐたので、人道上許しておけない殘虐が、この際仕方のないとの様に思へたり、貴重な人命が自分さへ其の災厄にかゝらなければ、何の値打もないものゝやうに感ぜられたりした。感覺にふれる總てのものが、何一つ不斷の狀態におかれてはゐなかつた。地

上の有らゆるものが、殘らず歪んでゐるやうに見えた。倒壞したもの、燒かれたものが、總て空に向つてけし飛ばされ若しくは墜落しないで、地面にくつついてゐるのが、まだしも多少の安定を與へてゐるくらゐのものであつた。

刑事たちは、その時ひどく一般から恐怖されてゐる鮮人の行動や、錯誤から來た殘虐などについて各自の見聽きしたことを話し合つてゐた。頻繁に警察へ舞ひこんで來る報告も報告も、その元を搜索してみると、何の根據も事實もないことが確められるばかりであつた。彼等は各自にそんな事實を話しあつて賑やかに興じ合つてゐた。

すると其の時、ボーイが一人やつて來て、署長室へみんなに來てくれと云ふ命令を傳へた。部屋に集つてゐた八九人の刑事たちは、何事か起つたのかと思つて、何か手帳に書きつけてゐたものや、丼を食べてゐたものや、地震や火事の當時の騷ぎの話に夢中になつてゐたものゝなかから、重立つた四五人のものが急いで出て行つた。彼等の或るものは、粗末な紺絣の單衣に股引をはいてゐたが、或るものは汚い詰襟の夏服に卷ゲートルなぞを捲きつけ、或るものはまたちやんとしたアルパカの上衣に白のズボンといつた、會社の勤人らしい風をしてゐた。

署長は四十ばかりの、肉づきの好いハイカラ風の上品な男であつたが、この二三日の不規則な仕事と過度の勤勞とで、疲勞の色が見えた。型にはまつた不斷の仕事とちがつて、色々な亂雜な事件や困難な問題が突發的に來るので、體の閑な割りに、あわたゞしい氣分の浪費が多かつた。

ぞろ〳〵と部屋へ入つて看ると、署長と差向ひに卓子に就いてゐる一人の老紳士があつた。五十を少し出たかと思はれる、色澤のいゝ人の好ささうな人物で、質素な鼠色の古ぼけた無地の背廣に、ソフトカラを着けてゐたが、胡麻鹽の頭の髪が、禿げない質とみえて、長く伸びてゐた。刑事達は何か重大事件の捜索だらうなどゝ、緊張した氣分で署長の顏色を伺つたのであつたが、その用件で署長と密談でもしてゐるらしいこの老紳士の誰であるかゞ、一層好奇心を唆つた。

「他のものは何うしたかね。みんな出てゐるかね。」署長は入つて來た刑事たちの顏を、興奮した目色でづらりと見わたしながら言つた。

「いや、大概ゐる筈です。」刑事の一人が答へた。

「それぢや御苦勞だが、成るべく多くの人に實物を見てもらつたうへで、出動してもらひたいことがあるのでね。」署長は言つた。

後ろの方にゐた一人が、急いで刑事溜の別の部屋にゐた仲間を呼びに行つたが、やがて又五六人の人達があわたゞしい表情で入つて來た。

「處で、こゝにゐられるのは理學博士の××さんだがね、今私があつちで晝飯をやつてゐるところへわざ〳〵面會に來て下すつたのは――實物について說明せんとわからんが、何しろこんな恐ろしいものが、○○大學の草原におちてゐたさうで……。」署長はさう言つて、卓子の眞中におかれた一つの不思議な物體に目を移した。

「ほう」と刑事たちの或るものは、不思議さうに近よつてその物體に見入つた。

不思議といつても、別にさう不思議な形をしてゐるものではなかつたが、たゞそれが包んであつたぼろ綿のうへに、そつとおかれてあるうへに、何か巧妙な仕掛がしてあるらしいので、きつと危險な代物だらうといふ漠然とした概念を與へるので、皆は氣味わるさうに、それを覗くのであつた。

物體はビール瓶よりも一ト廻り太いくらゐの長さ一尺二三寸ほどの筒形のものであつた。ちよつと見ると、硝子か何かで造つたものゝやうに、つや〳〵した光澤をもつてゐて、黝黑色をもつてゐたが、それが鐵の種類であることは明らかであつた。どちらが頭かわからないが、一方に洗面場の水口の螺旋の把手のやうな、そして其よりも大きなものがつ

いてゐて、その下部の脇の方に、眞鍮製の小さい口がついてゐた。その螺旋と反對の、底よりか少し上の方に赤いレッテルが貼られてあつた。

「ほう、何だか不思議なものですな。」

「一體これは何に使用するものだらうな」

刑事たちは口々に呟いた。

すると署長は少し反りかへつて、

「誰かこんなものを、何處かで見たことはないかね。」と訊いた。

「さあ。」前の方にゐたアルパカの背廣をつけた一人が、首を傾げながら考へてゐたが、一同を振返つて、

「誰か知つてゐるかね」と訊いてみた。

「何だか、何處かで一度くらゐ見たやうな氣もするがな。」誰かゞ言つた。

「いや、貴方がたがこれを知つてゐる氣遣ひはない筈ですがね、」××博士は近眼鏡をちよつと直しながら、「これこそ大變だ」といつた風で、微笑を浮べてゐた。

「こんな物が、不斷にそこいらに轉がつてゐた日には、それこそ大事件だからね。」署長も笑ひながら、

「××さんが、今〇〇大學のなかを通つて來られる際に、誰かゞこれを見つけて、騒いでゐたんださうだがね、これが有名な獨逸のテッペレンから盛んに投げた爆彈ださうだよ。ちよつと見ると、何でもないやうなものだが、實に恐るべきもんぢやないか。」

「ほう、これがね。」

「獨逸の飛行船から投げたと云ふ爆彈は、これですか。」刑事の一人はいくらか詰らなさうに博士に尋ねた。

「さうですとも、これがテツペレンから投下されると、忽ち爆發する仕掛になつてゐるので、このためにロンドンやパリイの市民は何のくらゐ脅かされたか知れない。何しろ百八十回も襲撃したのですからな。迚も今度の地震の比ぢやありませんよ。仕合せなことにはロンドン市民は地下鐵道と云ふ安全な逃場をもつてゐましたから、まあ其の割には被害は少なかつたのですが、我々はさう云ふ時のことをも今から十分考慮に入れておかなければならんのですよ。今度の地震にしたところでさうですよ。今少し科學者の言ふことに耳を傾けて、市民が地震の性質を十分理解してゐたら、あんなにまで周章てなくとも、もつと落着いて防火に努めることもできたらうし、また不斷から用意して、適當な設備もできた筈ですからね。」博士は興奮した口調で言ふのであつた。

「いや、我々も常にいつか一度は大きな地震が來はしないかと、そんな氣もしてゐたのですがな、こればかりは何うも完全な防備もできないので、みんなが平氣でゐれば、自分たちも其の氣になつて、うか／＼と暮してゐたやうな譯でしてね。」人の好い署長は辯解でもするやうに言つた。

「誰でもさうなんですよ。」東北辯の若い刑事が笑顔で答へて、「實際いつ來るか判りもしないものに、始終びく／＼ものでゐたのでは、人間は一日も生きて行かれませんからね。今日の進歩した科學の力で、何とかこれを豫知することができたら、大變に助かると思ひますね。あれがせめて朝のうちにでも知れたら、被害の程度も餘程少なくて濟んだでせうがね。」

博士も苦笑をたゝへてゐた。

「僕は地震學の方は判りませんがね、從來の經驗で、ペリオヂカリーに……例へば六十年に一度とか、三十年目に一度

とか來るものだと云ふ大凡のことだけは判つてゐるのだ。しかし其れ以上は今の科學の力では明確なことは判らんらしい。今度なぞも確かに地球の變動期に際してゐるのだらうが、それが經過すれば、また幾十年のあいだ先づ大きな地震はないものとみて可い譯だね。」博士は親しみのある口調で言ふのであつた。

「それで何うです、この爆彈の御說明をどうかもう一度。」署長はまた本題を取りあげて、「何しろこんなものが、そこいらにごろ〳〵してゐるなどは、物騷千萬だ。」

「よろしい。僕がこの代物の大凡の智識だけお授けしませう。」博士はさう言つて、そつと兩手でそのつる〳〵した重い筒を兩手に取りあげながら、

「僕はこの爆彈については、相當研究したこともあるので……勿論元來が獨逸で作られたものですが、これはこゝにも書いてあるとほりアメリカ製でね、ウエルドン會社の製造に係るものです。こいつはファイヤガンと云ふんで……さあ何と譯したらいゝかね、火銃とでもいふかね、つまり火の鐵砲だ」博士は輕い皮肉なやうな調子で、

「今もちよつと署長さんにお話したのですがね、この危險物の使ひ方がこゝに英語で簡短に示されておりますが、それは Keep this end up. Open valve fully. Aim at base of fire といふので、つまり此のレッテルの方を上へ向けろ、瓣を十分開け、火の底を覗へといふことになるんですから、これをかういふ風に上へ向けて、こゝのところを十分に捻つて、火の基といふのは、ちよつと可笑しいが、目的物を覘つて投下せよといふ事と解してよからう。」

そして博士はその螺旋をひねりかけた手を、遽かに引込めて、

「とにかく危險物ですからね。間違つてこいつを捨つたら大變なことになりますよ。だぶ〳〵してゐるのは猛烈な爆發性をもつた藥品ですからね。」

「ちよつと伺つておきたいのですが、そこを捻つたら何ういふことになりますか。」背廣服が訊いた。

「いや、それこそ大變なことになりますよ。何しろテッペレンの飛行船……御存じか知りませんが、獨逸のテッペレン氏の發明にかゝるものですが、その飛行船からこれを投下するのですけれど、この爆彈ではこいつをひねつて投下することになつてゐるので、すると三千度の熱度でもつて、猛火を噴出さうといふ、世にも恐るべき代物ですからね。三千度といふ熱度に逢つちや敵ひません。ごらんにもなつたでせうが、今度の猛火で、到るところ硝子が飴のやうに熔解してゐるでせう。あれは二千度といふ高熱であゝいふ風にだら〳〵熔けてしまふので、三千度と言つたら、全く非常な高熱です。それが三百メートル擴がるといふんですからな。いや實際擴がるんです。だから、これを少しでも強く捻れば、この邊は忽ち一面の火の海となつてしまふ譯で。」博士は緊張した口調で熱心に言ふのであつた。

「ほう、三百メートル。そいつは大變だ。この際そんな危險物をもつて歩く奴がゐては、それこそ東京は文字通りの全滅だ。」署長は少し蒼くなりながら、不安さうにその危險物を眺めてゐた。

博士は尙も說明してゐる自分自身が、てつきり腑におちてこないところのあるのに氣づいたといふ風で、繰返しその使用方法を讀んでゐたが、

「ところがですよ、こいつは眞物の獨逸製の爆彈とは、いくらか違ふ點もあるんで、こゝにある Aim at fire といふのは、火のある處を目ざして投下せよといふことに解釋した方が適當かも知れませんな。するとテッペレンで使つたものと、いくらか性質がちがふものと見ていゝ譯ですが、それにしても大變ですよ。」

「するとそれ自身は發火しませんのですかね。」背廣服の刑事がまた尋ねた。

「いや、何しろファイヤガンと銘打つてあるんですから、それ自身爆發することは確實ですよ。」博士は眼鏡の底から

目縁の痙攣たやうな目を光らせながら、その若い刑事の顔を見たが、またそのレッテルに目を移しながら、首をひねつてゐた。

「成程。」博士は暫らくすると、會心の笑を口髯の下に浮べながら、

「いや解りましたよ。何しろ文章がひどく簡單ですからな。解釋の仕様によつて、色々に考へられるが、發火させて悦へといふのが、間違ひのないところだ。さうだ。その方が一層適切だ。」

さうして博士はその下の數行の文句を、口早に讀み下した。

For gasoline, oil, electric and other incipient fires will not deteriorate freeze or harm any material.

「かういふ事も、書いてあるが、これはまあさして重要ではなささうだ。何しろ爆彈には違ひないのだ。」

「アメリカあたりで、さういふものを一體何うして賣るですかな。麗々しく會社の名まで記してからに。」署長は髯をひねりながら、不安の色を目に浮べてゐた。

「さあ、そこが我々日本人の頭腦では、ちよつと想像のつかない點ですがね。いづれ共は民間の會社で、秘密に賣つてゐるものと見んければならんが……勿論學術上研究の自由は、迚も我々の想像に及ばないところがあるので、使用法さへ知つてゐれば、危險のないこともわかつてゐる譯だが、多分不逞の鮮人が、秘密に買ひ取つたものでせうよ。いづれにしても今はそんな詮索をしてゐる場合ぢやない、一つ皆さんで嚴しく捜索していたゞいて……まさか是を使用してはゐまいが、事によると火の手がかう大きくなつたのも、これの效果からも知れませんから、何をおいてもこれだけは嚴重に取調べていたゞかんと困りますよ。とにかく是は危險物ですよ。取調べる價値は十分ありますよ。でなくて是が何でせう。」

「いや、早速捜索させますが、そんな猛烈な爆發性をもつてゐるものだとすると、それを何う處置していゝか、それもちよつと伺つておいた方がよささうです。」

「これを捻りさへしなければ、何のこともありませんがね、まあそこいらに置いておくのも危險ですから、このまゝ不忍池の眞中へでももつて行つて深く沈めて口を開けておくですよ。」

「そんな事でよければ……。」

「大丈夫ですよ。一週間もすれば氣がぬけてしまひますからな。間違つて爆發したところが、水のなかです。」

「はゝあ。」署長はやつと安心したやうに笑つた。

「まあ、テツペレンの眞物ぢやなさゝうだから、あれほどに危險はないかも知れないけれど、とにかく危險は危險ですから、一刻も早く出來るだけ手をまはして、取除いた方が安心といふものです。」

「全くですよ。」

「たとひ彼等がそれを使用しないにしても、落して歩かれては大變ですからな。」

刑事たちは餘り好い氣持がしなかつた。たとひそれがテツペレンの爆彈でないにしても、この無氣味な代物がそれに類似した危險物であることは、この場合博士の説明を煩はすまでもなかつた。

彼等は緊張した、しかし何處か雲をつかむやうな、淡い空虚を感じながら、とにかく持場々々へ出動しなければならなかつた。或るものは捲ゲートルを締め直し、或るものは水筒に薬罐の湯をつぎはじめた。窓ぶかい窓硝子に、午後の一時頃の熱い日が照つて、その外のひばや何かの植込に、避難民の汚い洗濯ものが、哀れぶかくかゝつてゐた。町はごたすた返してゐた。みんな元氣がなさゝうな、ぼんやりした顏をしてゐた。

「何だかをかしいね。」背廣服の刑事が、カンカンの埃を拂ひながら言ひだした。
「爆彈にしては、少し堅すぎるやうに思ふが、爆發さすべき性質のものなら、あの眞鍮の口から三千度の火熱なぞ吹く筈はないんだがな。」
するとゴム足袋をはきかけてゐた一人がそれに應じた。
「さうさ、己も何だかをかしいと思ふんだがね、學者の言ふことだから、間違はなからう。」
「それにしても怪しいな。いくらアメリカだつて、そんな危險物に會社の名をかいたレッテルを貼つて賣出すのは變だな。單に博士の想像に止まるんぢやないかな。何しろこの際のことだからね。常はいくら頭腦の冷靜な人間でも、かうなつてみると、たゞの人間だからね。」
「ほんとうだね。」
「博士だつて、そこらの八百屋の親爺だつて、何しろ避難民は一體に玄米の握飯を食つてゐるんだからね。博士の權威も何にもあつたもんぢやない。僕たちにしたところで、皆な一つの人間だといふことを、今度くらゐ痛切に感じたことはないからね。」
「待てよ、さう言へば己はどこかであれを見たやうな氣がする。先刻から思つて見てゐたんだがやつと今思ひ出したぞ。」火鉢の側で皮包のなかから食べさしておいた握飯を取出して食べてゐた、白い詰襟の若い刑事が茶を呑みながら言ひだした。
一同はその方へ視線を送つた。
「どこで。」

「たしか石崎さんとこで見たぞ。あすこの請願巡査のとこに備へつけてあるのは、たしかにあれだ。何でも最新式の消火器だとかいふ話だつたがね、どうも似てゐるよ。」

「いよ〳〵怪しくなつて來たぞ。誰か行つてそつとそれを借りて來る譯に行かんかね。」

「よし行つてこよう。」白の詰襟はさう言つて立ちあがつた。そして出口にあつた自轉車を一つ曳出して、走りだした。

「どうもね、僕は英語は知らんけれど、何だか博士の說明ぶりが可笑しいと思ふよ。」

「さうさ、己も變だとは思つたが、見たことがないからな。」

「三千度の熱もあやしいぞ。」

「三百メートル四方火の海だなんて、眞物のテツペレンだつてまさかそんな爆彈は投げやしまい。」

「とにかく石崎のものを見れば分るさ。」

そんな話をしてゐるところへ、白の詰襟によつてその正のものが持來された。

「これだ〳〵。」彼はさう言つて、新聞紙にくるんで來たのを出して見せた。

みんなは其の周圍を取りまいた。

「何だ、ひどく脅かしたもんだね。いくら博士でもこれは知らなかつたんだね。」

「何しろ餘程あわてゝゐるね、語學の力だつてまるで成つてやしないぢやないか、火の基をねらへと言つたろ、基をねらふ筈だ、消火器だもの。」

或るものは苦笑した。或るものは笑ひだした。又或るものはそれを捻くりながら、頻りに感心してゐた。

とにかく署長の前へ持つてゆくことに、皆なは一致した。

博士はちよつと帽子をもつて、椅子を立ちかけてゐるところであつたが、入つて來た二三人の胡散くさい顏を見ると、ちよつとたぢろぐやうな風で、不安さうに彼等を見たが、詰襟が兩手にもつてゐるフアイヤガンを見ると、遽かに驚異の目を光らした。署長も目を見張つた。

「これと同じものが、外にもあるんですがね。」

「ほう、どこに……。」署長が言つた。

「石崎さんのところにこれを備へつけておくですよ。多分何かの間違ですが、これなれば格別危險な品物ぢやありませんよ。」詰襟は笑ひながら、それを卓子のうへで並べて見せた。

「勿論もうお分りになつたでせうが……實際我々もさうかと思ひましたよ。何しろこの際のことですから。」背廣は二人の顏を見比べた。

博士は直ちに頷いた。

「成程、それで判りましたよ。こんな消火器が來てゐるといふことは、大分前に耳にしましたよ。」

「消火器か。それぢやまるで……。」署長も笑ひもせず、少し慍つたやうな表情をした。

「たしかに消火器に違ひありません。何しろこの周りに集つて、鮮人が今こゝへこれを落して逃げたと言ふものがあつたものですから、そいつは大變だといふので、急いで御報告に及んだやうなことで……いやそれでこの文句がよく判る。說明者の僕自身が、どうも色眼鏡をかけてみてゐたから。」

「こんな時は、誰でも惡い方へ〳〵と解釋したがるもんですからね。」背廣は氣の毒さうに言つた。

「何しろお互ひに助かつたといふもんですよ。でないと、私の威信にも係ることになりますからな。」署長は少し苦い

微笑をたゞへてゐた。

「いや何うも飛んだ粗忽で……。」

博士はさう言つて、腰を屈めるやうにして、そこ〳〵に出て行つた。

後で三人は感心したやうに笑つてゐた。

「それにしても博士は博士だ、牽強にしても説明ぶりが振つてゐるぢやありませんか。」

「そう〳〵、我々ですら釣込まれてしまつたからね。」署長は苦笑した。

◎定價 金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾八錢）
但支那を除く

冊數／國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六十錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあるべし。

一誌代郵稅 は一切前金とす 前金切れの場合は發送を止むべし

一振替貯金 口座番號は東京三四番 野長三二〇五番なり

一郵劵代用 は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず

一代金引替 小包の取扱は一切謝絶す

一集金郵便 御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず

一金二圓以上五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄　金八錢

一中央公論及婦人公論 代金取り纏め御拂込みの場合には各誌別にて金額御指定を乞ふ

一受領證請求 は必ず返信料を要す

大正十二年十月三十日印刷納本
大正十二年十一月一日發行（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木島三

發行所　東京市丸ノ内ビルヂング七階七百七十六區　中央公論社
電話 長丸ノ内三〇二
電信略號 コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社 秀英舍

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter